紫の瞳

yohna

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
紫の瞳

【Ｎコード】
Ｎ８７１３Ｇ

【作者名】
ｙｏｈｎａ

【あらすじ】
有希は十歳の時から成長が止まって早八年。大学生になる直前のうららかな春の日に、有希の両親はありえない計画を立てていた。有希の父は自称「異世界人」成長が止まっている有希に「あっちの水の方が合ってるから成長が止まってるんだ」「あっちの世界で成長して、いい恋しなよ」と、有希をマンションの１４階から放り投げる。気づいたら見知らぬ城の泉に落ちた有希。助けてくれたのはニヒルに笑う金髪碧眼の美青年だった――サイトからの転載です。

1

それは、よく晴れた春のうららかな日曜日の午後の出来事だった。

大学の入学式まであと三日を残す有希は、この宙ぶらりんの春休みをダイニングのソファに横たわり、怠惰に過ごしていた。ぼんやりと外を眺めている。

高層マンションの十四階から見える青空は、さわやかに晴れ晴れとしている。ダイニングでは母裕子が、冬物でもしまうのだろうか。なにやら荷物をまとめている。その向いで父快斗が、コーヒーを飲みながら新聞を読んでいる。やわらかな日差しが、快斗のグレーの髪を銀髪にも見せる。

平和な一日だと思う。これから待っている大学生活を思うと、期待と不安が入り混じって、妙な興奮状態になる。だから、入学するまではせめて、このココロの平穏を保っていたいと、そうじんわり思っていた。

だって、確実に不安の方が多い。

有希の風貌は、とても大学生のそれとは見えない。どうみても、十歳前後の少女にしか見えない。それも当然だ。十歳から成長していないのだから。

十歳になってから数ヶ月。有希は髪の毛が伸びないことに気づいた。そして、それからというもの、身長も体重も増えず、有希は十八の年を迎えた。

幸い、そういうものに頓着しない両親の元、有希も自分が成長しないことを特に気に病まずにここまでこられた。幼稚舎から高校までエスカレーターの学校に通っていたので、周りの人々にも好機の目で見られることもあまりなかった。

だが、大学からは知らない人も増える。

それが、さわやかな春に翳りを入れる理由でもあった。

「いい天気だねぇ」
誰に言うでもなく、快斗がつぶやく。それにあわせるように裕子が「ホントに」と微笑む。この夫婦はいつまで経っても仲が良い。それが、有希のひそやかな自慢でもある。
「絶好の日和だね。やっぱり今日にしてよかった」
「ホントに」
「え、今日って何かあったの？」
尋ねると二人は顔を見合わせる。裕子が怪訝な顔をして快斗をにらむ。
「カー君、有希ちゃんに言ってないの？」
「いや、あの、ホラ、こういうのって、どういう風に言い出したら良いかわかんないじゃん？」
もう、と裕子が膨れる。有希は二人が何の会話をしているのかわからず呆ける。
「いいわ。どうせそんなことだろうと思ってたもの。――有希ちゃん、ちょっと大事な話があるからいらっしゃい」
ダイニングのテーブルにつくように言われ、「はぁい」と答えてダイニングテーブルにつく。食事の時間でもないのに、家族全員が食卓につくと、変な気分だ。
「有希ちゃん、今までカー君を見て、不思議だと思ったこと、あるでしょう？」
荷物をまとめ終えたのか、神妙な顔をしてまっすぐに有希の目を見て言う。有希は向かい側で真面目な顔をしている快斗の顔を見る。綺麗な紫色の瞳が有希を見つめている。
「パパ？　――うん、あるわ。その瞳の色と、髪」
「そうね、今までカー君の瞳と髪の毛は、遺伝子疾患だって教えてきたわよね。だから、何も変なことは無いんだって」
「え、違うの？」
「ええ。カー君はね、実は、異世界人なの」
有希はたっぷり固まってから、大仰にため息をついた。

「なんだ、また何かの冗談？　あたし大学生になるんだよ？　もうそういうジョークは通じません」
「ごめんね、冗談だったらよかったんだけど、冗談じゃないから冗談にできないんだよ」
「え？　何、結局冗談なの？　違うの？」
「有希ちゃんが最近アンニュイなのって、やっぱり身体の事なんでしょう？」
「――っ」
　ホラ、やっぱりね、と裕子が快斗に言う。
「ごめんな、有希。俺、裕子に言われるまで気づけなくて」
「それでね、有希ちゃん。わたし、カー君に相談したのよ。そしたら『もしかしたら、あっちの世界の方が水にあってるから、こっちで成長しなくなっちゃったのかなぁ』って言うのよ。ハーフでも、日系と米系ってあるじゃない？　そういうことじゃないかなぁってわたし達思ったの」
「……え？」
　頭が真っ白になる。自分が成長しないのは、実はこの世界に合ってなかったから。そんなことを急に言われても、はいそうですかと言えるはずが無い。しかし、熱弁を振るう裕子はあっけに取られている有希に気づきもしない。
「だから、すごく、すっごく切なくて悲しいんだけど、あっちの世界に有希ちゃんを送ろうと思ったの。それが、今日なの」
「は」
「きっとあっちの世界に行ったら、有希ちゃん成長して綺麗な女性になると思うの。わたしとカー君の娘だもの。当然よ。そのカー君譲りの瞳は、絶対男を虜にするんだから」
　ばちっと裕子がウインクする。その横で快斗はうんうん頷いている。
「はいコレ、荷物。まとめておいたの。有希ちゃんそういう荷造りとか苦手でしょ？　一応どこに出ても大丈夫なように、食料とか衣

類とか、纏めておいたから」
　差し出された、有希が気に入っている白地に赤の水玉のリュックサックが、ぱんぱんに膨れている。
「ああそうだ。あとコレ、一応護身用っていうか、お守り代わりに」
　快斗がどこからか筒状のケースを取り出す。
「アーチェリーケース。新調しておいたんだ。大切に使ってね」
　裕子にリュックサックを胸側に掛けさせられた。突然渡されたから何が入ってるかわからないが、重い。
「いい？　くれぐれも怪しい人について行っちゃ駄目よ？　あと、水も心配だから合わなかったらちゃんと蒸留するのよ」
　げんなりしながら裕子の小言を聞いていた有希に、快斗が目線を合わせるように屈んだ。そして有希の瞳を見つめて、ようやく口を開いた。
「もしかしたら、まだあっちは物騒かもしれない。いいかい？有希。もし有紀に力が発現したら、人前でみだりに使ったりしないことを約束して」
「チカラ？　何のことかわかんないんだけど。もう、今回のドッキリ大掛かり過ぎない？」
「真面目に聞いてよ。多分言葉はちゃんと伝わると思うし、食生活もそんなに悪くないと思う。こっちみたいに近代的じゃないから苦労することも多々あると思う。あと、銃刀法なんて普通に違反してるから用心してね」
「なにそれ、危険じゃん……って、どこのファンタジー小説？」
　快斗は苦笑して、有希の首に手を回す。
「もう、有希が信じられないのわかるけど、ちゃんと聞いてよ。これ、オレが唯一あっちから持ってきた物なんだけど、何か困ったことがあったら使って。肌身離さないでね」
　有希の首にチェーンが掛けられる。チェーンには指輪が掛かっていた。
「あぁもう、どんだけこのドッキリに力込めてるの」

「有希はどうしてそうせっかちかなぁ。裕子に似たのかなぁ。――あ、あとね、一応オレの向こうでの名前教えておくね。ロイコ・カーン……」
「いいよ、そんな偽名なんて考えなくても」
「……偽名じゃないんだけどなぁ」
あれよあれよという間に旅立ちの準備の整った有希に、快斗は言った。
「よし、飛ぼう」
「はぁ？」
「だから、ベランダから、飛ぶの」
幼子に聞かせるように言う。有希はベランダと快斗を交互に見る。
「だってココ、十四階だよ？　飛ぶって何？　殺す気？」
「いや、だって俺、断崖絶壁の崖から海に落ちたんだもん。だから、高いところから落ちるのが移動手段なんだってば」
もう二度とごめんだけどね。と悪戯っぽく笑ってみせた。そしてぎゅっと有希を抱きしめる。
「そんな思いを有希にもさせちゃってゴメンだけど、有希には女の子としての幸せをまっとうして欲しいんだ」
気が付いたら、裕子も快斗ごと有希を抱きしめている。
「本当は家族がいつまでもいっしょに居られるといいんだけど、そんな甘えたこと言ってられないわよね」
裕子が離れる。快斗が有希を抱き上げる。
「え、ちょ、パパ、ちょっと待って！」
「駄目、待たない。決心が鈍っちゃうから」
室内から遠ざかってゆく。裕子が窓を開けたのか、カラカラとベランダの窓が開く音がする。春の風が心地よく流れ込んでくる。
「やだ、怖い。むり。死んじゃう」
「大丈夫。俺らの子供だもん。有希は死なない」
よっこいしょ。と、ベランダの縁に座らされる。こんなとき、もっと大きな身体だったら、重くて持てないのだろうに。と、憎らし

い気持ちになってくる。後ろに倒れてしまわないように、必死に快斗の肩口を掴んでいる。
「それじゃぁ、有希」
「いや……」
いってらっしゃい。と二人で同時に言って、有希の手は外され、肩をやんわりと押された。
体が傾いでいく。空を仰ぐ。雲ひとつない晴天。そして、風を切る轟音が耳に入ってきた。
（あたし、まさかこんな風に死んじゃうだなんてな）
冗談だと思っていたのに。実は両親は、自分が成長しないから見限ったのだろうか。そして自分というものをなかったものにしようとしたのか。
色々な考えが浮かんでは消える。
そしていつしか、視界は真っ暗になった。

2

息苦しくて目を開くと、ぼやけた水色の世界が広がっていた。
（生きて……る？）
目を見開いていると沁みて痛い。水の中だろうかとぼんやりと思う。
水の中にいるのかと思うと、途端に息が苦しくなる。慌てて水面にあがろうとして、息を全部吐き出してしまった。更にパニックを起こした有希は、水面に向けてもがく。
あと少しで水面に顔を出せると思ったところで、体がゆっくりと沈む。足と手で必死に水を掻いても、少しずつ水面が遠のいていく。
何が身体を重くさせているのだろうかと逡巡して、抱えたリュックサックが重たいのだと思って必死に外す。もう息が続かない。呼吸をしたくてしたくて、それ以外なにも考えられなくなる。
リュックサックを外すと途端に体が軽くなった。そのまま水面を目指す。体が反射で酸素を取り込もうと肺が膨らむ。水が喉から入り込んでなけなしの空気が口から出てゆく。
ようやく右手が水面に出る頃には、有希は意識を失っていた。

頬をぺちんぺちんと叩かれる。ああもう朝なのかと首を振る。
母親の裕子はいつもそうやって遊びながら有希を起こそうとするのだ。その度にどれだけ有希が不機嫌になっただろうか。
寝返りを打って手から逃げようとする。
「んー」
「寝るな」
低い声が聞こえる。聞き覚えのない声に違和感を覚える。声は更に喋りつづける。
「意識を失ってるのかと思えば、ただ寝ているだけだとはな」
鼻で笑った声が聞こえて目を開くと、青年が身体を濡らして有希

の隣に座っていた。
「！？」
声も出ずに、慌てて身を起こして後ずさると、ぶっきらぼうに「起きたか」と青年は言った。
「この荷物はお前のものか」
青年が有希のアーチェリーケースを持ちあげる。慌てて首を縦に振る。
「ほぉ……弓が使えるのか」
中身を見たのだろうか。まぶしそうに目を細めるその端正な顔立ちに、有希はただただ驚いた。
年の頃は二十代前半だろうか。高い鼻筋に切れ長の目。金髪碧眼の美青年が、そこにはいた。そしてハリウッド映画で見かけるような甲冑が傍にごろごろと置かれている。
へたりこんだままぽかんと金髪の美青年を見つめていると、怪訝な顔をした美青年が言う。
「しかし何でまた、こんなところで溺れていた。ここは一般人は立ち入り禁止で――」
はたと目があう。金髪碧眼の青年は食い入るように有希を見つめている。
何が起こっているのか理解できない頭は、からからと空回りをはじめる。
（ここはどこなんだろう。そもそも、なんでこんなところに居るんだろう。あれ、あたしマンションから落ちたんじゃなかったっけ。あれ、水に溺れてたの？　それでこの人に助けられたの？　あれ、でも助けるってどうやって？　人工呼吸？　このガイジンみたいな人に？――んなまさか。あれ、でもあたし、なんでこんなところに居るんだろう。まさか、実はあの二人の壮大なドッキリで、下にクッションとかマットとかあったんだ。それで、気絶してるあたしをきっとここまで連れてきた訳か）
妙に納得して、目を見開いている美青年に問い掛ける。

「あ、あの、ここはどこですか。一応日本ですよね？」
「ニホン？」
美青年が眉をひそめる。美青年は何をやっても美青年なのか、と有希は感心する。
「そのような土地は知らん。リビドムにもマルキーにもそのような国はなかったと思うが？」
「……へ？」
（ニホンが、ない？）
両親のドッキリではないのだろうか。有希の頭がぐらぐらと混乱する。辺りを見回すと、確かにセットとは言えないほどに精密で広大な景色が広がっている。
ぽかんと放心していると、美青年が甲冑を手早く纏って、マントを有希にふわりと被せた。
「さあ、お嬢さん。そのままで居ると風邪を召しましょう。着替えを用意させるのでこちらへ」
「へっ？　あ、あぁ、ありがとう、ございます」
差し伸べられた手を取り、少し早い足取りで美青年の後に着いていった。

有希が落ちたところは、どうやらお城の近くの泉だったらしい。ヨーロッパにありそうなお城があり、美青年はその中にするりと入っていった。頭からすっぽりとマントを被った有希は詳しく見ることができなかったが、幾人かが有希の事を問い掛けると、美青年は「客人だ」と言って歩きつづけた。
（もしかしてこの人、偉い人なのかな）
この美青年に話し掛ける人は皆、一様に敬語を使っている。
（王子だったりして）
それはそれは小説のような出来事だ。と鼻で笑う。

どのくらい引っ張られていただろう。気が付くと、有希はとても

広い部屋で数人のメイドに囲まれて、あれよあれよという間にスウェットを脱がされ、ひらひらとした水色のワンピースを着せられた。
「とってもお似合いですわ」
メイドが満足げに頷き合っていると、扉をノックする音がして、そちらを振り返ると先ほどの美青年が居た。
「まぁ、ルカ様。ごらんになってくださいまし。このお嬢様、とってもかわいらしゅうございましょ？」
一番の年配のメイドが言う。
（ルカ……様？）
やっぱりこの人は偉いのだろうか。と、戸惑い気味に見上げる。
何も居えずにもじもじしていると、メイド達は去り、年配メイドもルカに何か耳打ちすると出て行ってしまった。
「すまないが、君の着ていた服は処分させてもらった。濡れていたし、なによりも奇妙で悪目立ちする。代わりと言ってはなんだが、服はいくらでも用意しよう」
「え、あ、ありがとう」
恥ずかしくなって目を伏せていると、顎をつかまれて持ち上げられる。有希が見上げても、身長差がかなりあるせいか、ルカは腰をかがめている。
（くいって、くいってやったよ！！！！）
王子様のような人が王子様のようなしぐさをする。それに慌てながら目を泳がせる。
「……君は」
「失礼致します！」
盛大に扉が開かれる。音と共に有希の顎に添えられていた手がさっと離れる。
有希も驚いて扉が開いたほうを見やると、藍色の髪と黒い瞳をした、細身の青年が立っていた。どこか顔がこわばっている。
「オルガ様がお呼びです――一体何をやらかしたんです？」
目の前のルカがため息をついた。

「ずいぶん耳が早いのだな、兄様は」
青年は驚いている有希を見つけ、睨みつける。
「なんですかその子供は。いつからそんな道楽趣味をお持ちになったんですか？」
ルカが気だるげに答える。
「たった今だよ。――どうやら兄様も彼女の事が気になるようだが？」
何が起きているのかわからずに慌てふためいていると、藍色の髪の青年がため息をついた。
ルカは極上の笑みを浮かべて有希に問い掛ける。
「そうだ。まだ君の名前を聞いていなかった」
（うわぁ）
初対面の無愛想さからは微塵も想像できない笑顔に、有希は戸惑う。
「僕の名前はルカ。君は？」
「ゆ、有希」
「ユーキか、変わった名前だね。家は、どこにあるんだい？」
目線を同じ高さにするようにルカが屈む。まるで子ども扱いだ。と思いながらも、甘やかされている感じが、とても安心できる。
「家は、わからないわ。気が付いたらあそこにいたの」
浅い海のような、綺麗な青い瞳が、有希を見ている。
（あ……嘘がないか、疑っている目だ）
少し不快に思いながらも、こんな狂言じみたこと言う人間が信じられないのもしょうがないか。と、心のうちでため息をついた。
「ルカ様」
「今行く」
立ち上がったルカが、有希に手を差し伸べる。
「さて、恐い人に会いに行こうか」
何がなんだかわからず、とりあえず有希は頷いた。もしかしたら、この人はとんだ二重人格なんじゃないかと思いながら。

3

広い城を十数分歩いて、荘厳な部屋の前にたどり着いた。
戸惑いつつ左右を見渡すと、つながれた手に力が込められる。繋いだ手の相手を見上げると、微笑んだ彼が身体をかがめ、有希の耳元でささやく。
「いいか？命が惜しければ、何も言わずに居るんだ」
冷徹な声で言われ、有希の眉がぴくりと動く。
（微笑みながら言う言葉じゃないでしょ）
とりあえず、何をされるかわかったものじゃない。と、真剣な面持ちで頷いてみせる。すると、ルカは満足したように正面に向き直る。
時間を見計らったかのように「お入り」という声が聞こえた。
見たこともないような大きな扉が、ゆっくりと開く。

教会のように神聖な雰囲気のするその広い部屋の奥には、黒い髪に黒い瞳の、これまた美青年がゆったりと座っていた。年のころは２０代後半あたりだろう。
（謁見室みたい）
ルカが膝をついて頭を垂れる。有希もならって頭を垂れる。
謁見室のように高い上座に座っている黒髪の青年が、有希を見る。
「――その子が？」
自分のことだろうか。と、顔を上げる。そこには冷笑をたたえた人がいた。
顔は微笑んでいるのに、視線が射るように冷たい。その視線がとても不愉快で、挑戦的に見つめ返す。
「ええ、ふらりと出た戦場で、返り血を浴びて呆然としている彼女を見つけましてね。保護して参りました」
（え？戦場？返り血？）

身に覚えのないことに戸惑いながらも、先ほど言われたことを自分に言い聞かせ、黙りこくって黒い瞳を見つめる。
「へぇ。僕が聞いた話とは少し違うみたいだけど。僕はその少女が泉から出てきたと聞いているよ？　だから濡れ鼠になっていたと」
「それは、返り血が酷く、血に汚れていたため、泉で禊をさせました。服も血まみれだったので、処分しました」
「そうだったの……それは、大変だったねぇ」
有希に言われているはずだろう慈しむその言葉は、どこか宙をさまよっているような気がした
黒髪の青年――オルガの瞳がぼんやりと空を掴む。
「――あぁ、そうそう。忘れていた。ルカ、次の君の配属先なのだけれども」
隣にいるルカの空気がぴくりと動いたような気がした。
「今、とてもまごついているフォルに行ってもらおうと思って。あそこを制することが出来るのはルカくらいだろうとおもってね。――やってくれるよね？」
「……仰せのままに」
「明日にでも出立できるように、兵達は僕が整えておこう」
「ご好意、痛み入ります」
ああそうだ。と、更に冷たいまなざしの青年は続ける。
「そこの可憐な小さな客人は、僕が十二分にもてなさせてもらうよ。リビドムの喪い子だもの。粗相のないようにするよ」
「っ兄様、それは」
「ルカ。君のやるべきことは、幼児に執心することかい？」
「……いえ」
俯いているルカが、酷く恐い顔をしていた。
「さて、僕の用事は終わったよ。次の謁見が待っている。下がりなさい」
「……失礼、致します」
マントを翻したルカが、颯爽と出てゆく。有希は置いていかれな

いように、小走りで追いかける。
一瞬だけ、振り返った先に、憎しみをたたえた瞳が有希を見つめていた――。

「あのサディストめ……」
扉が閉まるや否や、ルカの顔が一瞬ゆがむ。しかし、不安げに見上げる有希を一瞥して、一転。意地悪くにやりと笑う。
「リビドムの、喪い子……か」
「ルカ様！」
どこからか藍色の髪の青年が現れた。
「あぁ、アイン。心配を掛けたな」
「本当です。幕の奥で肝が冷えっぱなしでしたよ」
あの程度でか。と、ルカが笑う。そしていつのまにか、二人の視線は有希に集まる。
「さて……と。この小さなお嬢様から、色々と話を聞こうじゃないか。――彼女の客間は」
「用意してございます」
そうか。とルカが頷くと、仏頂面で有希に言う。
「悪いようにはしない。それは約束しよう」
その表情が、どの笑顔よりも一番信頼できると思った。

メイドに着替えさせられた部屋にもう一度通される。
そこには、数人のメイドが居て、紅茶の匂いが漂っていた。
ゆったりとしたソファに腰掛けていると、目の前に紅茶のカップが差し出され、メイドはそそくさと立ち去った。
向側にはルカが座り、その後ろで藍色の青年――アインが立っていた。
「さて、先ほども言ったが、俺はお前をどうこうする気はない。何か問題がない以外、極力悪いようにはしない」
有希は頷く。

「で、一体どうしてあそこで溺れていた？　俺はずっとあそこに居たんだが」
　その言葉を聞いて、アインが責めるような声で小さく「ルカ様」と呟いた。ルカはそれに苦笑して返す。
「あの泉は、地下水脈が通ってて他の所とつながっているということもない。ということはだ、入らなければ溺れる事はない。だが、俺はお前が入るのを見ていない――これはどうやって説明してくれる？」
「わからないわ」
　二人の表情が曇る。
「ごめんなさい。でも、本当にわからないの。気が付いたらあの泉の中にいて、溺れてた」
「……お前の国は、なんと言ったか？」
「日本。あたしが暮らしていたのは東京っていう町」
　絶望的な気分で答える。だって、そこは有希が知っているどの街よりも遠くに行ってしまったことを、わかっているからだ。
（ここはきっと、パパの居た世界なんだ）
「先ほども言ったが、俺はそのような国は知らん。町の名前も聞き覚えがない」
　それに一つ頷く。
「そして聞きたいのだが……そのニホンという国の民は、皆一様にそのような瞳をしているのか？」
「え？　――瞳？」
「そうだ。そのような紫なのか？」
　自分の瞳。紫で、好奇や畏怖の目で見られた、この紫苑の瞳。
「いえ、違うわ。皆あの底意地の悪そうな兄様と同じような、黒髪に黒い瞳よ。――まぁ、あんなに意地悪じゃないけどね」
　ルカの顔がふ、と緩む。オルガの人を試すような態度を思い出すと、ふつふつと怒りが込み上げる。
「だいたい、言い方がやらしいのよ。なによあの『……やってくれ

るね？』って。あの人偉いんでしょ？やれって一言言えば反論する余地もないのに。それわかってて言ってるところがやらしい」
ふん、と鼻で息をすると、少しだけ怒りがやわれぐ。
「……この紫色の目は、パパ……父親と、あたしだけだわ」
黒い瞳がポピュラーな日本だから違和感も多いが、世界的に紫色の瞳の人がそうそう居ないことも、有希は知っていた。
「なるほど……リビドム人が作った密国でもないのだな」
「ねえ、リビドムって何？」
ため息が一つ聞こえた。ルカのものではなく、その後ろに控えていたアインだ。
「この娘、リビドムもわからないのですか――呆れたものです」
「っしょうがないじゃない！　知らないものは知らないんだから」
「リビドムというのは、この世界の国の一つだ。」
少し長い話をしようか。ルカが紅茶を一口すする。
「この世界は、三つの国で成り立っている。リビドム、マルキー、そしてこの国、アドルンドだ」
地図を。そうルカが言うと、アインが手際よくテーブルに地図を広げる。オーストラリアに似たような形の大陸がある。
「この西側がアドルンド。この山脈を越えた北がリビドム。さらにこの山脈を東に行くとマルキーだ」
三つの国が綺麗に山脈でより分けられている。リビドムという国が、山脈に隔てられていて少し小さい。
「この三つの国が均衡を保ち、世界が平定していた」
「……していた？」
聡いな。とルカが笑う。
「リビドムは滅んだ。五年間に及ぶ戦争によってな」
二人はどこか、苦い顔をしているような気がした。
「リビドムは今、マルキーの領国になっている」
「そうなんだ……」
戦争。その言葉で快斗の言った言葉がよみがえる。彼は「物騒か

もしれない」と言っていた。
（このことなのかな）
「そして今、マルキーはこのアドルンドに戦争を仕掛けてきている」
八年前、戦争を起こし、戦争は三年間続いた。そして、両国疲弊しているところに、停戦協定が組まれた。五年の停戦だ。
「協定は解かれ、今また、この世界は戦火に巻き込まれている」
「そう、なの」
頭がぼんやりとかすみがかる。
「あたしは、家に帰りたい」
呟いて、はっと息を呑む。
両親は、有希をマンションから突き落とした。
その事実が、有希を戸惑わせる。
（やっぱり、嫌だったのかな）
十の頃から成長を止めた娘の姿を、少なからず憎らしく思っていたのだろうか。朗らかで明るく見えたのは実は虚像で、有希の知らないところで苦しんでいたのだろうか。そして、マンションから落とすほどに、追い詰められていたのだろうか。
はは、と乾いた声がこぼれる。
「……帰る家なんて、ないか」
「ユーキ」
はっとして有希は向かいに座るルカを見る。
「帰る家がないなら、ここに居たらいい。兄様も言っていただろう」
「……いいの？」
素性もわからないだろう、有希をそんな簡単に泊めてもいいのだろうか。この国は、戦争中だというのに。戦争中というと、とても大変なのではないだろうか。
（でも、あの性格悪い兄ちゃんに世話になるのもな……）
「ねぇ、あなた、これからどこか行くんでしょ？あたしもついてっちゃ駄目？」
ルカとアインの表情が、あっけにとられる。

「フォルか？　――フォルは今戦場だぞ。そんなところにガキ連れて行くだなんて。殺しに行くようなものだろう」
「戦場！？そんなところに行けだなんていわれたの？」
「俺は軍人だからな。当然のことだろう――あの兄様が不安なのはわかるが、殺すことはしないだろう。それでも不満なら、誰か信頼の置ける者も残しておこう」

「あのお兄ちゃんのこと、ずいぶんわかってるのね。仲良しなの？」
この問いに、アインの顔がこわばり、ルカも豆鉄砲でも食らったような顔をしていた。
そして、直後にルカが挑戦的に笑った。
「ああ、随分詳しいさ。兄様は俺を――そう。殺したいほどに憎んでいるだろうからな。こちらも防衛しなければ易々と殺されてしまう」
「ころ……」
「お前はそんな俺に拾われたんだ。まぁ、覚悟しておくんだな」
棲むところも与えられて、多分食事も出してくれる。そして――命を狙われているかもしれない。
もしかしたら、自分はとんでもないところに来てしまったのではないだろうか。と、有希は呆然とした。

4

翌日、与えられた食事を食べて、与えられたベッドでゆったりと休んでいると、メイドに起こされて、昨日とは違う、もう少し華美なワンピースを着せられた。
「ルカ様からの贈り物にございます」
メイドはそれだけ言うと、出て行ってしまった。
「ワンピースっていうより、むしろドレスみたい」
淡いピンクのそれは、裾のふんわりしたデザインで、上から同色のショールが掛けられている。
本来ハイヒールなどを履いたほうが似合うのであろうが、幼い容貌と同年代だと勘違いされているだろう有希は、ぺたんこの赤い靴を履いている。
普段こんな着れないよ。と、鏡の前でくるくる回っていると、扉がノックと同時に開いた。
「失礼。ユーキはいるか？」
アインが扉を乱暴に開いていた。慌てている風のアインに少し驚く。
「アインさん」
鏡の前に突っ立っている有希を見つけると、早口でまくしたてる。
「ああ、ユーキ。君の荷物はどこにあるんだい？」
「え？」
「君が持ってきた荷物だよ」
荷物。と反芻して思い出す。
「そういえば、泉の中に捨ててきたわ。あたしが今持ってるのは、あそこのアーチェリーケースだけ」
「これだけ？」
つかつかと部屋の中を歩き、黒い筒状のケースを掴む。そうだと頷くと、アインは有希の元にやってきて有希の腕を掴む。

「出立の儀があるから、行くよ。君も一緒に行くんだ」
「え、え？　なんで？」
「僕も知りません。ただ、ルカ様が君を連れてくるようにって言うんですよ。まったくもう、人使い荒いんですから」
有希は何がなんだかわからなくて、聞きたいこともたくさんあるはずなのに、ぶつぶつと一人で小言を言っているアインに何もいえなかった。

広間のバルコニーに出ると、一階の広間は甲冑を身につけた人々であふれ返っていた。
圧巻されて呆然と見ていると、その先頭に居る金髪の青年を見つけた。一人だけ青いマントを纏っている。
（あ、あの人）
ルカだ。
腕を引かれるままに歩いていると、踊り場まできていた。階段を降りれば、あの甲冑を纏った軍人達と同じところに出る。
「やあ、来たね」
聞き覚えのある声に振り向くと、踊り場の中心に設置された椅子に、オルガがゆったりと座っていた。
「あ、あの」
アインにどういうことか聞きたくて見上げれば、いつのまにかアインの手は有希から離れて、アインは有希の後ろに立っている。
『しゃんと立っていてください』
口をぱくぱくさせながら言う。
（ええい！　なんなのよ）
言われた通りしゃんと立って、まっすぐ前を見詰める。
目の前には、甲冑を纏った軍人達。そしてその人たちを纏め上げるように、並んだ人々の前に立っている、ルカ。
「――それで？　この子に何用なんだい、ルカ」
ルカは一瞬ちらりと有希を見ると、オルガに向き直った。そして

広間に通るような声で。
「彼女を、――ユーキをフォルまで連れて行こうと思いまして」
「……彼女は、僕が粗相のないようにもてなすと言ったはずだが？
そんなに僕が信用ならないかい」
「いえ、兄様の事は信頼しております。ですが――」
そこまで言うと、ルカは有希に向き直る。そして目線で、踊り場の真中まで来るように促す。
（なんなのよ）
ルカの後方から、少しだけざわめきの声が聞こえる。
オルガの前方、踊り場の端に立つと、ルカが階段を上ってくる。そして、有希の立つ所の数段下で、立ち止まり、腰に差してある剣を抜いて有希の前に跪く。
どよめきが大きくなった。だがそれは有希の耳には届かず、有希を見つめる青い瞳に戸惑うばかりだった。
「これを」
懐に手を入れたルカは、有希のこぶし大ほどの大きさの金貨のようなものを渡す。小さく「左手で持て」と言われ、その通りに左手で持つ。
そしてルカは頭を垂れ、そして呟いた。
「私チェンドル・ルカート・アドルンドは、この命の続く限り、貴方を慕い、守り抜きます。この忠誠の言を糧に、証を頂戴致します」
「え？」
再び頭を上げたルカは「剣を」と言って、ルカの剣の柄を差し出した。
「この剣を抜いて、剣の平で俺の肩を叩け」
「は、え？」
「早くしろ」
言われたとおりに剣を抜き、平でルカの左肩を軽く叩く。すると、左手に持っていた金貨が光る。紫色の光が辺りに広がる。
「な、なに」

まぶしくて目を開いていられない。目を金貨から離すと、ルカも光に包まれている。
そして一瞬の後、光もなにも無かったかのように、あたりはまたしんと静まり返った。
「なんだったの……」
呆然と呟くと、ルカは何事もなかったかのように立ち上がって有希から剣と金貨を取り上げる。そして身なりを整えると、階段を上り、有希の隣に立つ。
「兄様」
目の前にいるオルガは、無表情で何を考えているのかわからない。ただ、雰囲気だけが剣呑だ。
「兄様は信頼しておりますが、自分の主人は自分で守るのが騎士の勤めにございます」
「そう……だね。だけどそれが、どういうことかはわかってるよね」
「えぇ、もとよりその覚悟でございます」
そう言って、有希の肩に手を置いた。
視界の端で、アインが真っ青な顔になっているのが見えた。
（主人って……どういうこと？）
あたりはどよめき、オルガは憮然とし、ルカは意地悪く微笑み、アインは愕然としている。
その場に置いてけぼり状態の有希は、ただぼーっと立っていることしかできなかった。
ふと、自分の右手を見ると、中指に見覚えのない紫色の指輪が嵌っていた。

5

馬車は大きな音を立てて揺れている。
城が遠くなってどのくらいたったのだろうか。
昇りかけていた太陽は大きな弧を描き、ゆるやかに下降してゆく。
有希は馬車に乗りながら、アインに色々と話を聞いていた。
そして聞けば聞くほど、この世界が有希の知らないところだということ、そして、自分がたいそうな地位にいることを聞かされた。
あの城は、アドルンド城だった。もちろん王宮であり、有希が「底意地の悪そうな兄」とのたまったあのオルガは、第一王子な上に王位第一継承者だそうで、王宮を牛耳っているらしい。
そしてその弟のルカもまた、第四王子だという。
有希は、その第四王子の主になったんだとアインは言った。
（っていうか、騎士制度っていうのがおかしいのよ）
この世界には、万国共通で騎士制度というものがあるという。聞いたところによると、資格のようなもので、騎士にも階級があるらしい。
国家でその試験を行い、合格者には騎士称というものを与える。そして、騎士は一人の主に仕えることができるらしい。
また、主のない騎士は軍人として働くことが多く、恩恵も与えられないらしい。
（なによ、恩恵って。ファンタジーの世界じゃあるまいし）
主を決めた騎士には、恩恵が与えられるらしい。その恩恵というのも、治癒能力の発達、力が強固になる。というもので、その話を聞いたときに思わず「魔法か！」といったほどだった。
そして契約の証に、騎士と主人の両人に、契約の指輪がはめられる。
（……実感、わかないよ）
突如知らない場所に出て、保護されたかと思うと訳のわからない

契約をされて、実はその人は王子で、偉い人で、泊めてもらったのが実は王宮です。なんていわれても、ありがたみも何も感じない。
そして、今はもう外に出てしまったアインの去り際の言葉が、頭をぐるぐると回っている。
――まぁ、あんまり気にしなくて良いと思いますよ。多分あの人のことだから、契約もオルガ様へのあてつけでしょう。オルガ様がユーキの事を『リビドムの喪い子』って言ってたじゃないですか。新しい玩具です。それをみすみす渡すようなことはしたくないって事ですよ。
「玩具……ってなによ」
皆騎馬で移動している中、乗馬できない有希は、荷物と一緒に馬車に乗り込んでいる。そこに居るのは有希一人で、アインは馬引きの隣に行ってしまった。
肩に斜め掛けしていたアーチェリーケースを外してぎゅっと抱き込み、ため息を一つ吐いた。
「わけわかんない」
あの仲の悪い不思議な兄弟も、この世界も、これから行くであろう戦場というものも。何も想像がつかない。
「あたし、これからどうなるんだろう」
ぽすんと荷物の上に倒れこみ、目を閉じる。
考えすぎて疲れたのか、すぅっと意識を失った。

アドルンド城からフォルまで、普通に行って一週間弱という道のりだ。
アインは頭を抱えていた。
「あぁもうどうして、偉い人は道楽が好きなんだ！　僕には理解ができない」
馬引きは困ったように笑う。
「これから激戦地に行くって言うのに物資は必要最低限のみ。現地調達ないしは供給を待て。って……オルガ様が供給する気分になら

なきゃ僕達犬死にじゃないか」
あぁ、どれだけ計算しても足りない。と、メモを見ながら頭を抱える。
ルカ付きの文官であるアインは、もう一人の武官のお付きと三人で、幼い頃から一緒に過ごしている。
一緒に過ごした時間は、とてもとても長いものだ。けれど。
「未だに何考えているのかわからない……」
そもそも、あの紫の瞳の少女――有希をどこで見つけて、どうしてここまで連れてきたのだろう。
「世話は全部僕に任せっきりだしさぁ」
幸い、聞き分けの良い聡い子だったから良いものの、それにしても有希は無知すぎる。何も知らないのを装っていたとしても、アインにとっては当然のことすらわからないという有希を、確信をもって疑うことができない。
だが、彼女がもし魔女だとしたら、話は変わってくる。
「ああもう、僕自身のこともわからなくなってくるじゃないか」
ぐらぐらと煮える頭に、そしてその悩みを作った原因の王子を、非難して罵倒したい気持ちになる。
まぁまぁとなだめる馬引きの元に、伝令が入る。
「ルカ様が、しばし休憩を取るとの事なので、各々休んでくれ」
伝令がアインに向かって「それと」と付け加える。
「アインさん、ルカ様がお呼びです」
これ以上、面倒くさいことを言ってくれるなよ。と、アインは神に主に祈った。

アインがルカの元につく頃、ルカはぼんやりと中指の指輪を眺めていた。
「ルカ様、何用でしょうか？」
呼びかけると、仏頂面が面倒くさそうに答えた。
「フォルなんだがな……マルキー軍がすでに制圧して、大将が篭城

してるという情報が入った」
その言葉を聞いて驚く。それは、先ほどアインが手に入れた情報だったからだ。
（また、この人はどこからそういうことを仕入れて来るんだか……）
「えぇ、僕もそのように伺っています」
平静を装って、厳かに頷く。
「きっと兄様の耳にも入っているだろう。兄様はきっとマルキーに落ちるのがわかっていただろう。そこへ俺を向かわせるとは、考えたことだ」
どう頑張っても手柄になることはない。むしろ失態だ。そして、一つ間違えれば死にもつながる。
「どうするかな――」
ぼんやりと宙を見据えているルカに、アインはあの、と口を開く。
「彼女、どうするつもりなんですか？　やはりオルガ様へのあてつけですか？」
返事は、ない。
「だからといって、いくらなんでも契約までしちゃうのは、どうかと思いましたよ。彼女の素性だってわからないし、もしかしたら……」
言って、噤む。言っていいのだろうか。自分の主に。もしかしたらあなたの行いが愚行だったかもしれないと。
「魔女かもしれない。か？」
意地悪く微笑みかけるルカに、アインは押し黙る。
（だからどうしてこの人は、先にわかってしまうんだ）
「お前が顔に出やすいからだ。そんな調子じゃ、軍師になれんぞ」
「！？」
驚いて顔を上げると、ルカがくつくつと笑う。
「魔女ではない。――アニーが言っていた。刺青はなかったと」
アニー。ルカ達三人が、幼い頃から世話になっているメイド長の事だ。

「そう、なんですか」
ならよかった。と、安堵の息がこぼれる。
魔女には、その能力の度合いによって、身体に刺青が現れる。それは生まれ持ってのものなので、それがないということは、普通の人間だと思って良いだろう。
「――――魔女、か」
それもそれで、いいかもしれないな。と、ルカが言う。何が良いというのだろうか。アインにはまったく理解できない。
「もう、考えてる事があるんだったら、それとなく僕に言ってくださいね。ルカ様はもっと自身を重く考えるべきです」
「あぁ、悪いな――ユーキは？」
「疲れてしまったようで、寝てます」
緊張感もなく、荷物と一緒に寝こけている姿を見て、あきれ果ててしまった。
ルカは声を出して笑い、そして言った。
「寝た子は起こさぬ方が良いというな。――町に着いたら俺の所に」
かしこまりました。そう言うと、出立するぞ。と、付け加えた。

6

フォルという町を目の前にして、有希は目の前の男の言ったファンタジー極まりない言葉に愕然とした。
「……魔女ってなによ？」
有希にファンタジー発言をした金髪の美青年――ルカは、悠々と椅子にすわり、仏頂面で何を考えているのかわからない顔で有希を見つめている。
今までずっと淡色のワンピースばかり着ていた有希にあつらえられた服は、極彩色のワンピースと、原色をつぎはいだみすぼらしいマントである。
「ねぇ、何とか言いなさいよ。こんなキテレツな服まで着せてさぁ。どういうこと？」
「魔女は、好んでそういう類の服を着る。何になるにも形からというだろう」
「そもそも魔女って何？　そこから教えるべきじゃないの？」
ルカが面倒くさそうにため息を吐く。有希の隣に立っていたアインが慌てて説明する。
「ユーキは魔女も知らないんですね。――いいですか？　魔女は、主にマルキーに棲んでいる種族です。魔女は寿命が長く、色を好み、女性しかいないといわれています」
「はぁ」
「そして魔女は――まじないとすると言われています」
またファンタジー発言か。と、有希は呆れ顔で返す。
「まじない……って、何？　また魔法みたいなの？」
「まぁ、そう思って頂いて間違いはないでしょう。魔女によって出来るまじないも違うみたいですけど」
「飛んだり、ヘンな薬作ったりするの？」
「そういう魔女が多いらしいですよ」

史実によると。と、アインは付け加える。
どうにもアインのくちぶりが、魔女の実物を見たことのあるようなものとは思えない。
「アインさんは見たことないの？」
「僕ですか？　まぁ、詳しくは知りませんね。昔、大規模な魔女狩りがあって魔女人口が減ったのと、元々魔女は自分をひけらかさないですからね。会っても魔女だと気づかないことが多いんですよ」
へぇ、と感心して、ふと思う。
「魔女が女性しかいないって、それって繁栄していかないんじゃないの？」
ルカが「聡いな」と言って、有希のつぎはぎマントをいじっている。
「魔女は、一般男性との間に、子を成します。その子が男なら普通の人間。女なら――魔女となります」
そして魔女は、いつしかその娘魔女と共に姿を消すんです。アインは当然。というばかりに言う。
有希は感心して、そんな人種もいるのね。と呟いた。そして逡巡して、ふと思う。
「それでどうして、あたしがその、『魔女』の格好をしなきゃいけないの？」
一番聞きたいところはそこなの。と、ルカがつまんでいたマントをルカの手から引っ張る。
アインも真相を詳しくは知らないらしく、「えぇと」と言ってルカを見やる。
「今フォルに篭城している武将殿がな」
ルカがにやりと笑う。
「実は幼女趣味があるという噂があってな。――昔、とある幼女に手をだした」
少女趣味。ということは、そういうことなのだろうか。うぇ、と有希は眉間にシワを寄せる。

「そしてその幼女が実は魔女だったらしくてな……酷い返り討ちにあったらしい」
「そう……気持ち悪い武将さんなのね。でもそれが何？　一体この格好と何の接点があるの？」
ルカの前のテーブルを叩く。目の前の男はぴくりとも動かずに、有希を一瞥する。
「お前は知らぬかもしれんが、この世界にはな、『伝説の魔女』と呼ばれる存在があってな。彼女の風貌が、十歳前後の容貌で、そして紫の瞳をしているということで有名なんだ」
嫌な予感がした。もしかして、この男は自分をダシに使おうというのだろうか。
「……もしかして、あたしにその魔女になれっていうの？」
「イシス将軍がその伝説の魔女に手を出したとしても、出していまいが、トラウマの刺激にはなるだろう」
ルカが有希を正面から見据える。仏頂面は相変わらずだが、真摯な瞳をしていると思った。
「俺と共に、行ってくれるか？」
そんな綺麗な顔で、真面目に言われたら、断るに断れないじゃない。と、内心毒づいた。

とりあえず強気で居ればいい。ルカはそう言って、有希の手を引いた。
頭から灰色のマントをすっぽりと被った有希は、手に引かれるまま歩いた。
――武将――イシス武将が篭城しているフォル城には、アドルンドの捕虜もいると聞いた。イシスは戦場だったフォルに入るや否や、圧倒的な戦力で制圧し、そしてフォル城でルカ様を待ってるんですよ
アインの言った言葉が頭で反響する。武将というのだから、恐い人なのだろうか。
城を兵で囲んでいると、ルカの計画どおり、ルカとその主人のみ

が城に招待された。何故主人を連れて行かねばならないのかと問うと、アインが「いざとなれば人質にしたり、まぁ使えるからでしょう。卑しい人なんですよ、イシス将軍は」と答えてくれた。
（あの人はそこまで考えて、あぁ言ったのかな……）
もしその招待を断ればそのまま争いが始まっただろう。ルカは、招待を受けた。
――いいか？開城できれば御の字だが、まず捕虜の奪還をしたい。
そのために招待を受けたんだとルカは言った。
（そうは言ったけど）
そもそも、自分に何が出来るのかもわからないのに、この場にきてしまった。いざとなれば魔女のフリをして逃げるくらいのことは出来るだろうが、それ以上に何も役に立てるとは思えない。
肩に掛けたアーチェリーケースがカタカタと音を立てている。
（この人、理解ができないんだもん）
隣で自分の手を引く美青年。考えてみれば、年齢も知らない。今有希にわかるのは、有希よりも体温が低いということだ。繋いだ手が、冷たい。
マントの隙間からちらりと顔を見上げれば、前を向けと怒られた。
（悪い人じゃないんだっていうのは、なんとなくわかるけど）
ある程度、一定の距離をおいてくれる。戸惑う有希にフォローの言葉もある。
（だけど、酷い二重人格よね）
しばらく一緒にいてわかったのは、彼はひどく愛想がいいということだ。
立ち寄る町々の人々の前では、明るく朗らかに笑っているが、有希やアインの前になると、途端に仏頂面になって笑顔というものは意地悪いニヒルな笑顔以外なくなる。
（まぁ、あの愛想の悪いほうが素なんだろうけど）
よくまぁあんなにもコロコロと変われるものだ。と、感心すらしてしまう。

「ぼんやりするな」
手をぎゅっと握られて、はっとする。
驚いて見上げれば、ルカは少しも緊張していないような面持ちで、まっすぐ前を見据えている。
（本当は、もっと緊張してていいはずなんだけどな……）
どれだけ鉄面皮なんだろうと思ったが、もしかしたら相好を崩すようなことは許されなかったのだろうか。
（なんてったって、王子様だもんなぁ）
金髪碧眼に眉目秀麗、おまけに剣術も達者となると、女の子に困ったことはないだろうなぁと、感心してしまう。これほどまでに完璧な人間がいていいのだろうかと疑いたくもなる。
（ああ、二重人格っていうところでもう、完璧じゃないか）
ふふっと笑っていると、更ににらまれてしまった。
そのままルカは苦渋を顔に浮かべている。
「本来ならば連れるべきではないのだが――」
マントが邪魔で顔が見えないが、とてもすまなさそうな声が聞こえる。
そんなルカの声を聞くのは初めてで、どきんと胸が慌てる。
「どういうわけか、お前と契約したことがイシスにも伝わっていてな――代わりを立てる事が難しかった」
おかげでこちらが不利だ。と続ける。
「えぇと、あたし、邪魔にならないように頑張る。捕虜の人たちが助かるように協力するよ！」
繋いだ手をぎゅっと握って見上げる。マントの隙間から見えた顔は、ひどく驚いていた。
そして目が合うと、いつものように意地悪く笑って「すまんな」と告げた。
（そっか）
妙に納得してしまった。
魔女の格好をさせられたことも、こうやってずっと手を握ってい

てくれていることも。
（あたしが危険に、不安にならないようにしてくれているんだ）
遠まわしな配慮に気が付いてしまった。完璧人間のように見えるルカの不器用なやさしさにくすぐったい気持ちになる。
「一応、お前を主人にしてしまったのは俺の短慮だ。出来るだけ守ってやる」
お互いにぎゅっと手を握り合うと、目の前の大きな扉がゆっくりと開いた。

7

カラーコンタクトレンズの存在のおかげで、有希は今まで人から目をそらすということをあまりしなかった。
どれだけ奇異の目で見られても、父親譲りのあの瞳を恥じたことは一度もなかった。

通された城の中を、案内役の兵に連れられてどんどん奥まで進んだ。
そして開かれた扉の奥に、イシスは居た。
ひょろりと長い背丈に、とても細い体躯。一重の瞳は開いているのかわからないほど細く、軍服なのに兜ではなく大きな帽子を被っているのがとても不釣合いだった。
（狐みたい）
頭から被ったマントの裾から盗み見る。目を合わせてはいけないと思い、目を伏せる。
イシスの足元に、小さな影がある。
有希と同じ程度の身長の少女が、そこには立っていた。
裾のゆったりと長い赤いワンピースを着た少女は、怯えるようにイシスの手を握っていた。
「やぁ――お待ちしておりました」
「ご丁寧なご招待、ありがとうございます」
有希の耳に心地良い中低音の声がする。
（あ、猫かぶりモードだ）
勝手に決めつけた有希は、少女を見やる。
腰まであるだろうか。真っ黒な長い髪の毛はとても綺麗で、瞳は綺麗なグリーンだ。怯える少女と目があうと、有希はにっこりと微笑んだ。
一瞬、泣きそうに歪んだ少女の顔が、イシスに頭に手を置かれた

ことでこわばる。
「まさか、アドルンドの騎士王子に、少女趣味がおありになるとは思いませんでした」
つながれた手がぴくりと動く。少女趣味というのは、有希をそういう対象で見ているということだろうか。
（ちょっ！　何言ってるのよ！）
日本のアイドルも真っ青になるほどの美貌のルカが有希を――ましてや十歳ばかりの少女にしか見えない小娘に、そんな情を抱くことなんてありえないだろう。
必死に頭で否定するも、羞恥で顔に朱が走る。
「――ほぉ、なかなか可愛らしい反応をしますねぇ」
ねっとりとした口調で喋るイシスに、有希は繋いだ手と反対の手でマントを顎元まで引っ張った。
「この子もねぇ、最初の頃はよく手を焼かされたのですが、最近とんと大人しくなりましてねぇ、それはそれで愛らしいのですが」
ふふふ、と、甲高い気味悪い笑い声が響く。
「――商談の件なのですが」
ルカがやわらかく言う。笑顔も物腰も柔らかだが、どこか威圧的な雰囲気をはらんでいる。
「おゃ。商談だなんて堅苦しい。僕個人としては、あなたとは良いお友達になれそうだと思うのですが」
同じ趣味を持つ者として。と、ねっとりと話す。有希はその声音が気持ち悪くて、眉間にシワをよせる。
「それに、そんな話を今するのは無粋というものです――せっかくお客人がいらしたのです。宴でも開きましょう」
ルカが何か口を開くが、それよりも早くイシスが部下に指示を出す。
あれよあれよという間にイシスに事を運ばれ「準備ができますまで、部屋を用意いたしましたのでおくつろぎ下さい」と、にっこりと言われてしまった。

通された部屋は、とても少女趣味な場所だった。
どこもかしこもピンクのひらひらであしらわれていて、部屋の奥に異常なほど大きい天蓋つきのベッドが威圧的なほどの存在感を醸し出している。
ルカも有希も奥のベッドには近寄らず、手前のテーブルに着いて紅茶を飲んでいた。
ぐったりと疲れ、椅子にもたれている有希は紅茶をすすりながらちらとルカを盗み見る。ルカは角砂糖を紅茶に五つ目を入れていた。
（甘党……なのかな。それとも、考え事してて気づいてないとか……？）
沈黙が流れつづけている。有希は何か話そうと何度か試みてみたが、何を話したら良いのか、そもそも話のきっかけが見つけられない。
更に黙っていると、ルカが紅茶に口をつけた。壮絶なほどに甘いと思われるが、ルカは相変わらずの鉄面皮で紅茶を飲んでいた。
ぼんやりと何も考えずにいると、自分のことばかり目がいってしまう。
（あたし……なんでこんなところにいるんだろう）
突然泉に落ちたと思ったら、よくわからないうちに目の前の金髪王子に「主人」とされて。そして、何故か軍事交渉の場に居る。奇抜な格好をさせられて。
「そうだ」
ルカが視線だけを有希に送る。
「ねぇ、この後どうするの？」
捕虜の奪還をしたいという事は聞いている。だが、その具体的な内容を何も聞いていない。もしかしたら、自分にも手伝えることはないだろうかと思った。
「さぁ――相手の出方を見てから決めようと思っていたが。中々に面倒くさい相手だ」

嫌なものを見るような、蔑むような顔で目を細める。
（あぁ、あの変態に同属だと思われてたもんね……）
「だが、ああいう相手は正義感あふれている訳ではないだろうから、こちらが美味い条件を出せば飲むだろう」
はぁ。とため息を一つこぼした。
（美味い条件……）
有希にはイマイチ想像ができなかった。どういうことが美味くて、どういうものが不味いのだろうか。
「いざとなれば、囮などを立てて牢を開けてしまえばいい」
「……それって結構、大変なことじゃないの？」
開けてしまえば即刻そこから戦闘だろうな。とルカは淡々と言う。
（……この人って。実は何も考えていないようなフリをして実は考えてますーっていうフリをして、実は何も考えてないんじゃないのかな）
目の前でぼうっとどこかを見ているルカをみて、有希は少し不安になった。
ふと、扉の外で話し声が聞こえたかと思うと、ノックもなしに扉が開いた。慌てて有希はマントを被る。
「失礼。大変お待たせいたしました。宴の準備が整いましたので、お迎えにあがりました」
中から無骨な兵士が現れる。ぶすっとした顔が普通の顔なのだろうか。雄雄しい顔が、厳つく見える。
「いえ、随分お早いですね。さぁ、ユーキ、行こうか」
やわらかく微笑んだルカに、無骨な兵士が言う。
「宴にご招待するのは、ルカート様のみでございます」
「え」
「お連れ様には、こちらで寛いでいていただきます。食事もこちらへ運びます故」
マントの隙間から、縋るように見ると、笑みをたたえた笑顔がこちらを向く。

「なら、ユーキにはここで僕の帰りを待っていてもらおうかな」
兵士に背を向けたルカは、真顔で有希を見やる。その目が『ここに居ろ』と言っていたので、頷いた。
「じゃぁユーキ、行ってくるよ。すぐに帰ってくるから、出歩いたりしないように」
そういって有希の頭を撫で、ルカは出て行ってしまった。

「……やることがないわ」
ルカが出て行って数分。有希は天蓋付きのベッドにダイブして転がっていた。
兵士が言ったとおり食事が有希の元へ届けられたが、食欲が湧かず、そのままテーブルに置いてある。
「あの人、ホントどうするのかな」
もしかして、一人敵地に乗り込んで、惨殺されてしまったりということはないのだろうか。
「いや、だってそんなことしたら外の人たち黙ってないだろうし……」
それに彼は王子様だ。そんなことしたら戦争はもっと悪化してしまう。
「でもそれが狙いだったりして……ていうか、そもそもどうしてあたしも招待したのに、食事は別々であたしはここに閉じ込められているのよ」
おかしくない？　と、誰に問うでもなく呟く。
「……待ってよ。もしかしてあの「ここに居ろ」は、実は「お前に頼む」だったのかな」
考えれば考えるほどに不安になってくる。
もしかしたらそうじゃないか。と思えば思う程「そうに違いない」という風に、思考がどんどん摩り替わっていってしまう。
「……さながら、敵地に乗り込むヒーロー。――いや、せめてジュリエットに会いに行くロミオぐらいの気分ね」

ふふっと笑って、ベッドから降りる。
扉の前で、扉に耳を当てる。――なにも音が聞こえない。
おそるおそる開いてみる。
「ありゃ」
てっきり誰かいるのだろうと思ったのに、誰も居なかった。
「これはアレかな。神さまが行きなさいっていう思し召しかな」
そろそろと扉を出て、音を立てないように閉めて、マントを改めて被りなおした有希は、真っ暗な廊下を闇に紛れてさまよい始めた。

8

ルカは、通された部屋に入って愕然としていた。
何故か連れてこられた部屋は地下にあって、そして、その部屋には沢山の少女がいた。
「いらっしゃいませルカート様。どうです？この楽園は」
きらびやかなドレスを身に纏った少女達が、人形のように鎮座していた。
イシスは部屋の奥の椅子に、先ほど見かけた黒髪翠眼の少女を膝に乗せて座っていた。
「――この城は、先だってイシス殿が占有したと伺ったが？」
その言葉を聞いて、イシスが可笑しそうに笑う。ルカはその笑い声に嫌悪感を募らせる。
「そんなの、表向きですよ。この城を手に入れて、もう一月になりますよ。その間に、この町の少女達は私が貰い、後の女は売り払い、男は捕らえ、反抗するものは殺しました」
見てください。と、大仰に手を振るってみせる。
「この子達の絶望に縁取られた瞳を。――ゾクゾクするじゃないですか。ルカート様。あなたもそう、思いませんか？」
少女達はルカに目も触れず、壊れてしまったように座っている。
（……可哀想に）
「さて、ここで話の続きでも致しましょうか――そう、あなたの言う、商談を」
薄気味悪く笑うイシスの、その不敵な笑みにルカは眉をひそめる。
「あなたの国の捕虜なんですけどねぇ。あぁ、一応殺さず食事も与えてますよ――彼ら、本来なら本国に送りつけたり、私が好きに使って良かったりするんですけど、アドルンドの人間なんて何をするかわかったもんじゃないですからね。邪魔なんですよねぇ」
「……何をご所望で？」

やはり金か。と、軽い絶望を感じながらルカはイシスを見やる。
イシスは何が面白いのか、大声をあげて笑った。
「あなたはわかっていますね！　身のこなしを！　いやぁ、実に小気味良い。小賢しい駆け引きなんてすることが無駄だということをよくわかっていらっしゃる！」
ため息をつきたい気分になる。
（もう、少し――）
笑うことに飽きたのか、疲れたのか、イシスが息を一つついて、話を続ける。
「――ふぅ。ではそこで、面白い話を一ついたしましょうか」
意味深に笑うイシスに、興味ありげな視線を投げかける。くだらない話でも、時間を引き伸ばす手立てにはなる。
「ほぉ。――あなたがアドルンドを裏切ったお話ですか？」
目の前で、狐のように目を細めて笑う男はかつて、アドルンドの将軍だった。しかもそれなりの地位のあった。
だが彼はある日突然狂ったように幾人もの味方を惨殺し、アドルンドの情報を持ってマルキーへと逃げた。
ルカ自身、幼少の頃は彼と剣を交わしたこともあった。そして、彼は今でも尚、かつてのようにルカを「ルカート様」と呼ぶ。
「いえ、そんなつまらない話ではないですよ。あれはなるべくしてなったのですから。そうですね――ルカート様の戯れ話でもいたしましょうか？」
ルカの眉がぴくりと動く。
「あの少女は、――拾ってきたそうですねぇ」
「……さてな」
耳の長い奴だ。と、内心毒づく。
「そして、彼女はリビドムの喪い子だと聞いたのですが、はてさて事実なのでしょうかねぇ」
その言葉に耳を疑う。彼女がルカの元に来て、一週間ほどしか経っていない。なのに、どうして敵国の将校にここまで知れているの

だろうか。
「いやぁ、血がうずきますねぇ。リビドムの子といえば、不思議な力を持っていると聞きます。調教して私のものにしてしまえば、とてもとても利益になるとは思いませんか？」
「……さて、どうだかな」
（まだか……）
気味の悪い部屋に、一秒たりとも居たくなかった。そして紫の瞳の少女――有希のことが気に掛かる。
何故イシスは有希の正体を知っているのだ。
（くそっ）
一人にするべきではなかった。危険なのはルカ一人で十分だと思っていたが、むしろ危険なのは有希の方だ。
あの部屋に戻らなければ。そう気持ちは逸るが、あせっている姿を晒すわけにもいかない。
「――その話をした後で、何を要求するんだ？」
「相変わらずルカート様は聡い子ですねぇ――――彼女を、譲っていただけませんか？　それが、捕虜との交換条件です」
有希の話をけしかけてきたときからそうだろうとは思っていた。
（下衆が）
有希の重要性をわかっているのかいないのか、イシスを睨む。
イシスは飄々として、膝の上の少女の頬をなでた。
「その代わりと言ってはナンですが、ここに居る少女の一人を、差し上げましょう。誰でもいいですよ。私が自信を持って調教しましたから――それとも。ルカート様御自ら、捕虜の代わりに牢に入りますか？」
「いずれも、断る」
「おや、しかしルカート様に拒否権はないですよ？　彼女に出した食事には薬を盛ってありますからね。今ごろ兵が捕獲してるんじゃないでしょうか」
「！」

「愛すべき主人を差し出すか、主人のために自らを敵国に売るか。よく考えてくださいね」
膝から少女を降ろしたイシスが、すっと立ち上がる。
「ルカート様にはしばらくここで考えていて頂きましょう。私は、喪い子でもここに連れてきましょうかね」
高笑いをしながら、少女を連れて部屋から出てゆく。扉の外には屈強そうな兵士が数人、立っていた。ルカが逃げないようにとの配慮だろう。
「……っくそ」
（もう少しだというのに）
捕虜の件はきっともう片付いているだろう。だが、有希は大丈夫だろうか。そればかりが心配でならない。
（どうか上手くやってくれ……）

有希はあの少女趣味の部屋を抜け出してすぐ、兵士とすれ違った。灯りを持った兵士が向側から来て、慌てて有希はマントと共に壁にへばりついた。
広い廊下が幸いしたのか、兵士は気づかずに有希の横を抜け、有希の部屋の前に立った。
（見張り兵、やっぱりいたんだ……）
自らの強運に感謝しつつ、そのまますると遠ざかる。
（捕虜っていうことは牢屋だよね……牢屋って事は、地下かなぁ）
廊下の突き当たりに、上下に行く階段がある。逡巡して、降りる階段を歩く。
幾重にも曲がる階段を降りて行くと、ひんやりとした場所に出た。左右に分かれ道がある。
どこからか、水のしたたる音が聞こえてきた。
（水……そういえば、牢の壁を伝う水で飢えを凌いだ人がいるって聞いたことある）
日本でだけど。と、内心で突っ込みを入れる。

ふぅと深呼吸を一つして、目を閉じる。どちらから音が聞こえるだろうと耳をすます。
「……こっちだ」
有希は左側の通路を音を立てないように小走りで駆けた。

アインは太陽を睨んでいた。もう大分傾いて、陽光がとてもとても赤い。
後ろで束ねた藍色の長い髪が、紫のような夕闇の色にそまっている。東の空と同じ色だ。
「もう……いいですよねぇ」
ぽそりと呟いた声は、誰の耳に入るでもなく、風に乗って流れる。
「アイン様……多少早くったってルカ様なら大丈夫だって。早く入りましょうよ」
「うん……そうなんだけど、ユーキがいるからなぁ」
アインは少数の兵達と、フォル城の橋の下にいた。裏口のすぐ手前で、見張り番を倒して裏口の様子を見ていた。
「あんな娘っ子一人のために、ルカ様を危険に晒すことぁ出来ねぇじゃねぇか！」
「……あんた、さっきと言ってること矛盾してるよ」
押し黙った兵を見て、アインはため息をついた。
（あーあ、ナゼットが居れば、もっと上手くできるのになぁ）
「とにかく、もう少しだけ待ってください。これは、一応僕が指示を任されているんですから」
任せるときのルカの態度がとてもとても適当で、それはそれで不安が沢山残るのだが、あえてそれを言わずに虚勢を張る。
それは、ルカが唯一アインに教えたことだった。
（ルカ様……無事で居てくださいよね）

ルカが人形のような少女達の居る地下部屋でぼんやりと座っていると、慌しく扉が開いた。開いた扉を見やると、イシスが血相を変

えて飛び込んできた。
「彼女をどこにやったのですか！」
「はぁ？」
見張り番の兵に扉を開けていないか何度も確認した上で、ルカにつっかかってきた。
「食事に盛った薬が効きはじめる頃だと思い部屋へ向かうと、もぬけのカラだったんですよ。――ルカート様。彼女に何を吹き込んだのですか？」
「あいつが……いない？」
確かに有希に『ここに居ろ』と伝えた。そして有希も頷いたではなかったか。
「……ご冗談を。そうやって俺を揺さぶろうとでもしているのか？」
鼻で笑って見せると激昂したイシスが叫ぶ。
「彼女はどこへ行った！！」
荒く何度も呼吸を繰り返して、周りの兵士達に宥められて呼吸を整える。
「――まぁ、いいでしょう。捕虜と共にルカート様にも牢に入っていただきましょう」
「！？　それでは話が違う」
「何が違いましょうか。貴方が捕虜になれば、他の捕虜なんてどうでもいいことでしょうに」
さぁ。とイシスが言うと、見張り番をしていた兵がルカの身体を拘束する。反抗しようかとも思ったが、得策ではないと諦めた。
二人の兵に両腕をがっちりと固定されたルカは、そのまま部屋を引き摺るように連れ出された。
（アインっアイツは何をやってるんだ――）
アインがすでに有希を保護しているだろうか。そんな一縷の望みを持ちながら、暗闇へと歩みを進めた。

9

暗い石造りの廊下を、手探りで歩く。
聞こえるのはときおりピチョンと跳ねる水の音と、自分の吐息だけ。
蝙蝠でも出てくるのではないかという不気味さと、誰かに見つかったらどうしようかと思い、アーチェリーケースから取り出して組み立てた弓を左手に抱きなおす。
（ここ、どこよ……）
うねうねと曲がる廊下をずっと歩きつづけ、三半規管はもう狂っている。
自分がどこから来ているのかわからず、もしかしたら何度も同じ道を通っているのではないかとも錯覚してしまう。
（なんか心なしか寒いし）
ひんやりと冷たい石に触れつづけている右手も冷たい。
ひたひたと歩いていると、行き止まりに突き当たった。
「そんなぁ」
ここまで来たのに、引き返さなければならないのだろうか。
「もしかして、右側の道だったのかな……」
よく見えず、石の壁に手を当てておでこをこつんと当てる。緊張でのぼせたのか、ぐらぐらと熱い頭に冷たい石が気持ちいい。
「〜〜っ……っ」
「ん？」
人の声が聞こえる。とてもとてもかすかで、何と言っているのかわからないが、男の人の声だ。
石の壁に耳を当ててみる。少し声が大きくなったような気がする。
（この、奥かなぁ……）
向こう側は外なのだろうか。それとも、実はここは隠し扉で、どこか石の一つでも押せればガコンと向こう側に行けるのだろうか。

少しだけ慣れてきた目で、石壁のあちこちをさわる。
ふと、左手に何かが当たった。
「木？」
感触からして木だろうか。木が、石壁に縦に嵌っている。
「取っ手だ」
ならば、引くか押すかをしたら開くのではないだろうか。
（もしかして、この奥が牢屋なのかな）
こんな奥にあるのだ。間違いないと思い、思いっきり扉を引いた——が、扉はびくともしない。
「なんでぇ？　取っ手があるってことは、引くものじゃないの？」
逡巡して、いや。と呟く。
「ここは王子とか魔法とかが跋扈する世界よ。押してなにが悪いの」
よし。と、意を決して取っ手を思いっきり押した。
すると、取っ手が石壁にはまり込み、そのまま大きく倒れた。
「え？　うわっきゃぁ！」
石に乗るように倒れると、光のある場所に出た。
「いたたたた……」
ざわざわと声が聞こえる。やっと牢屋に出られたのだろうか。
むくりと起き上がってみると、両壁には檻がはめ込まれ、その奥に沢山の人が居た。
そして顔を上げると、有希のすぐそばにイシスと、そして離れたところに、兵に捕まっているルカの姿があった。ルカは驚いた顔で有希を見ている。
「え……え？」
何が起きているのだろうと茫然としていると、イシスに抱え上げられた。開いたアーチェリーケースから、矢がぽろぽろと落ちた。
「うわぁ！」
「飛んで火に入る——とはよく言いましたね。ルカート様」
腰がつかまって、片手で脇に抱えられる状態になる。
「残念でしたねぇ。彼女がいなくなったのに私がとても早く気づい

てしまって」
恍惚とした声が聞こえてくる。
（え？　なに？　あたし捕まったんだ？　でも、なんであの人も捕まってんのよ）
イシスがくつくつと気持ち悪く笑う。
（もしかして……捕虜の解放しようと思って捕まったのかな……それってヤバくない？）
頭がパニックを起こす。
「……ということで、彼女も、捕虜も、ルカート様も私のもの。ということでよろしいですねぇ？」
（え？　あたしが私のものってどういうこと？　つまりそういうこと？　え、そういうことされちゃうってコトおぉ？）
イシスのいいようにされる自分を思って、絶望的な気分になる。
（イヤっそれだけは嫌だ！――何か、何かあたしにできることは。あたしにできることはないの？）
考えがごろごろ回るが、いずれも空回りするようなことしか思い浮かばない。じたばた動くと、長いスカートとマントが邪魔で、思うように動けない。
（あぁもう、こんなカッコじゃ逃げるに逃げられないじゃない！）
ふと、何でこんな格好をする羽目になったかのいきさつを思い出した。
――幼女が実は魔女だったらしくてな……酷い返り討ちにあったらしい。
――お前は知らぬかもしれんが、この世界にはな、『伝説の魔女』と呼ばれる存在があってな。彼女の風貌が、十歳前後の容貌で、そして紫の瞳をしているということで有名なんだ。
不思議と辺りがしんとしているような気がした。
（そうか――この人は、きっと伝説の魔女に会ってるんだ。そして――酷い仕打ちを受けた）
すぅっと、自分がどうするべきかを理解した。

（あたしに、できるだろうか。いや、やんなきゃ）
ひとつ、大きく深呼吸をして、そしてくつくつと笑いだした。
「ふっふっふっふ……ぁあーっはっはっは」
けたけたと笑い出した有希に、イシスはもちろん、ルカも有希を見た。
「飛んで火に入る夏の虫……あなたが手に入れたのは、虫じゃないかもしれないわね。――魔女だったりして」
弓を掴んだ左手で顔もとのマントを剥いで、にんまりとイシスを睨みつけると、ぎょっとしたイシスは有希を地面に落とした。
さっと矢を一本掴んで、そのままマントを全て剥ぎ取る。
（ファーストコンタクトはオッケーだ。大丈夫。騙せる！　騙してみせる！）
ばくばくと破裂してしまいそうな心臓に「大丈夫」と言い聞かせて、有希は意地悪く笑う。
「おひさしぶり～～。何年ぶりかしらね、イシスちゃん」
ひっ。と息をつめたイシスが飛び退く。
「お、お、おおおまえは誰だ！」
「あァらやだぁ。イシスちゃんったらアタシのこと忘れちゃったの？　この紫の瞳に、見覚えなぁい？」
「むらさ…っ」
「思い出した？　ひどいわぁ。あんなに沢山遊んであげたのに」
「あそっ……あれはっあれのせいで、あれのせいで私はこの体のままなんだぞ！」
（この体のまま？）
どういうことだろう。――魔女は魔法みたいなものを使えると聞いた。もしかしたら、その類なのだろうか。
「いぃじゃない。可愛らしくて。アタシは好きだけどなぁ」
（あの人なら、知ってるかな）
振り返ると、ルカが不敵な笑みを浮かべている。有希の芝居の意図を理解してくれたのだろうか。

「ねぇ――ルカ、ぴょん。可愛らしいと思わない？」
一瞬目をひそめたルカが、あの猫かぶりの笑顔を向ける。
「えぇ、是非その帽子の下の姿を見たいですねぇ」
ルカがそういうと、「ヒィ」と言って帽子を必死に抑えるイシスがいる。まるでいじめっ子を恐がるようなそのしぐさに、少しだけ罪悪感と、ちょっとの爽快感が沸く。
（帽子をとればわかるってこと？）
イシスの身長は有希より断然高い。しかもおののいてあとずさってしまったイシスに、有希は帽子を取る術がない。
悔しくてぎゅっと拳を握ると、弓を持ったままだったことを思い出した。
（そうだ。これで――）
有希は弓を構えた。必死に絞って標的を合わせる。
（的が大きいから、いける）
「じゃぁ、とっちゃおっか」
言って、矢を放つ。矢はしゃがむイシスよりも早く帽子を射てそのまま壁にぶつかる。
イシスからは、狐のような黄金色の耳が生えていた。
「……」
「……」
ルカも有希も、ルカを捕まえている兵士さえも絶句した。
イシスは泣き叫びながら耳を隠そうとおさえている。
「っぷはははははは。かーわいー」
「あ、ああのあと、大変だったんだ！　他の魔女を捕まえて見させても、狐になる進行を抑制することはできても、お前じゃなければ治せないといわれて！　お前を探し回っても見つからないし！」
（……やっぱり、この口ぶりは伝説の魔女だ）
「あぁら。そんなに可愛いのに不満なの？ねちっこくて嫌味ったらしい姿より狐の方がぜんぜん可愛らしいと思うんだけど」
「い、いいから早く治せ！」

ふふ、と微笑んでいたのを、一瞬で真顔に戻す。イシスがぎくりと固まった。
「……人にモノを頼む態度って、それが正しいのかしら」
冷ややかに言うと、うぐっとイシスが息を飲み込んだ。
「アタシの事荷物みたいに抱えるしさぁ、アタシのかわいいルカぴょんにあぁいう仕打ちしてるしぃ？　それでアタシに『治してくださぁ～い』って。おかしくなぁい～？」
まずルカぴょんの事放してよね。そういうと、イシスは「は、はなしてやれ」と兵士に命じた。兵士は戸惑いながらもルカを放した。
「さ、さぁ、放したぞ。私を元の姿に戻してくれ！」
（そんな事言われてもなぁ）
自分では治す事ができない。なら――徹底的に叩いてしまおう。
イシスに歩み寄り、途中、矢をもう一本拾う。
――いざとなれば、囮などを立てて牢を開けてしまえばいい。
ルカの言った言葉が頭をよぎる。いざと言うときは今なのかなぁと、ぼんやりと考える。そして、ゆったりと矢を構えて、言った。
「そこの兵士サァン。ちょっと、この人殺されたくなかったら牢屋空けてくれる？」
「う、うそつきめぇええ！」
「嘘なんてついてないわ。ただチョットお願いしてるだけ。この矢ね、矢先がないけどイシスちゃんの頭くらい簡単に貫通しちゃうわよ」
アーチェリー用の矢を、さも特別仕様というような口ぶりで騙す。恐怖におののいたイシスが叫ぶ。
「あああああけろ！あけろって！何をしているんだ！」
イシスが矢から逃れようと後ずさる。一定の距離を保ちつつ、有希もイシスに歩みを進める。
困惑していた兵士二人が、威勢の良い声をあげて牢を開けた。
牢が開くと、中から出てきた人々に捕まり、兵士はそのまま床に倒れた。その上にも捕虜の人々が乗って身動きを取れなくしている。

その姿を見て取り、有希はイシスににっこりと笑って言った。
「ねぇイシスちゃん。元の姿に戻りたいのなら――投降しよっか？」

10

有希は座って、盛大な宴をぼんやりと見ていた。
フォル城はあのあと、突入してきたアイン達と捕虜となっていた兵士達が、あれよあれよと言う間に武装解除をして、占拠した。
有希によって捕らえられたイシスは先にアドルンド城に送られる事になった。
そして、フォル城では、宴が開かれていた。
上座の主賓スペースにルカと有希が居る。
占拠が一段落した頃、放心状態だった有希はアインに連れられて馬車に戻った。
気づけば着替えさせられて、今はピンクのさわり心地の良い生地のワンピースを着ている。
「……眠いのか？」
有希を見てぶっきらぼうに言うルカに、微笑んで返す。
「ううん。そうじゃなくて、なんだかまだ、終わった感じがしなくて」
あのときナチュラルハイになってたから。と、苦笑する。
「――迫真だったな」
何を思い出しているのだろうか、ルカがくつくつと笑う。
「生まれて初めてだ。あんな風に名前を呼ばれたのは」
かぁっと頬に熱が篭る。羞恥心で死にそうなくらいに恥ずかしい。目の前の青年を『ルカぴょん』とのたまったのは、紛れも無く有希なのだ。
「う、うるっさいわね！　魔女っていうくらいだから、あのくらいはっちゃけててぶっ飛んでる方がいいのかなって思ったの！」
ふいとそっぽを向いて、この気恥ずかしい空気をやり過ごそうとする。有希の反応に、またルカがくつくつと笑う。
「まぁ――そのお陰で助かった。感謝する。ユーキ」

真面目な声がして振り返ると、相変わらずの仏頂面が居たが、どことなくやさしい瞳をしている。
「べ、べ、別に。だって、あたしがあそこであんなことやらなくたって、アインさん達が入って来たら、ちゃんと事態は収まってたんでしょ？」
自分の早合点で、あそこまでの醜態を晒してしまった。
「あぁ。それは――そうだな」
少しは否定して欲しいんだけど。と、内心で思っていると、ふとあの少女の瞳を思い出した。
「ねぇ、あの子達はどうなるの？」
何が。という問いかけの目をよこし、だが勘が良いのか、ルカはすぐに「あぁ」と言った。
「彼女達は、イシスと共に先に城に戻った。――しかるべき施設に入れて、更生してくれればと思う」
「そっか……」
彼女達は、イシスによって心が壊されてしまっていた。それは、人形のように。
しんとした空気が流れていると、アインが飛ぶように走って上座に飛び上がる。
「ルカ様！　本っっ当にごめんなさい。許してください！　タイミング見誤ったのは僕の責任です！」
アインはルカの両腕を掴んで、がくがくと前後に揺すっている。ため息をひとつ吐いて、ルカはアインの手を止めさせた。
「――そうだな。まさか無血開城ができるとは思っていなかったからな。逆に、逸っただろうにあそこまで待ったアインに賞賛を送ろう。――俺個人からでしか送れないがな」
「め、めめめめ滅相もないです！」
そのままジャンピング土下座でもするのかというくらいの勢いで、床に頭をこすりつける。そして、がばっと顔を上げると、アインはまっすぐ有希を見つめる。

「ユーキも。ごめん。僕がもっと早く突入できていれば、ルカ様もユーキも危険な目にあわせていなかったのに」
捨てられた子犬のようにしゅんとしたアインに、慌てて有希は言う。
「いや、あたし別に危険なんかじゃなかったよ！　気にしないで！　それに、みんな怪我も無くて良かったよ」
だから、気にしないで。と笑うと、アインの目が潤む。そしてアインは破顔して有希に抱きつく。ぎょっとして身をすくめると、ひどく酒の匂いがした。
（あ、アインさん酔っ払ってるの……？）
「ありがとう！　ホントユーキは良い子ですねえ。僕に妹が居たらこんな感じなのかなぁー」
ぐりぐりと頭を撫でられて、ぎゅうぎゅうと抱きしめられる。
「アインさん、苦しいって」
「あぁ！　ユーキは可愛いですねぇ」
アインの背中越しに宴会を見ていると、一部の兵士達が憐れみの視線を有希に投げかけている。きっと、先ほどまでアインはあそこに居たのだろう。
（あ……あたしは犠牲者なのか）
茫然として諦めると、誰かに腕を引っ張られ、背中が何かに当たる。振り返ると、あきれ返ったルカが居た。
「もう！　ルカ様のいけずっ」
「アイン……お前まだ未成年だろうが」
「しっつれいれすね！　僕は今年で成人れす！　よって、もうお酒解禁していいんれす！」
顔色は至って普通のアインだが、よく見ると目がうつろだ。
「お前な……一応宮仕えだということを自覚しておけ」
どこからか兵士が水瓶を持ってきて、それをルカに渡した。ルカが転がっていたカップに水を注いでアインに渡す。
「ホラ、飲め」

「やった！　ルカ様のお酌ですか！　そりゃぁ飲むっきゃないですよねぇ！」
ホラ。と、アインは辺りにあったグラスを引っつかんでルカと有希に渡すと、無理やり「乾杯！」とグラスを合わせ、一気にグラスをあおった。
「っぷはぁー。やっぱりルカ様のお酌はさいっこうれすねぇ！　お酒の味がちがう！」
陽気に笑ったアインに、ルカは苦笑して「水だがな」と呟く。微笑みながら、有希もグラスをあおる。
ふふ、と、有希にも笑みがこぼれた。
ずっと気張っていたものが、ほころんだ気がした。
「あは。あはははははっ」
いっぺん箍が緩むと、あとからあとからどうしようもなく面白くなってきて、笑いが止まらない。
突然笑い出した有希に、ルカがぎょっとする。
「おい。トチ狂ったか？」
「ううん。っはは……なんでもない……ふふふっ」
（なんだか、居場所ができちゃったなぁ）
ずっとずっと、迷子のような気分だった。両親にマンションから落とされて、自分は要らない子だったのかなぁと不安になった。
突然溺れた泉では、目の前の口の悪い美青年に助けられた。
途方も無く広い暗闇に、ぽつねんと一人ぼっちになった気分だった。
いわれもなくオルガに憎しみを込めた目で見られたり、イシスには魔女扱いされたり。
この世界でも、紫の瞳は異端で。
カラーコンタクトレンズで隠していても、どれだけ普通を装っていても、本当は紫の瞳を受け入れて欲しかった。
今まで恐くて言い出せなかった。ただでさえ成長しないこの肉体が、加えてそんな紫の瞳をしているだなんて知れたら、何を言われ

るのか、大体見当がついていたから。
日本に居たときには口に出す事はできなかったけれど、今、ルカもアインも気味悪がらずに接してくれる。
瞳のせいで困れば、助けてくれた。――利用もされたが。
だが、役に立てることが嬉しかった。自分が居ても良いのかと錯覚してしまう。
（いつかは帰りたいけど……今は）
今なら、両親のことを小憎らしいと思うけれど、捨てられたという悲しい気持ちはあまり無い。
（今は、もう少しこの世界を満喫しよう）
有希は右手に、ワインの入ったグラスを持ちながら、ぼんやりと思った。
「それにしても、おっかしいなぁ～」
ふふ。と、笑みがこぼれる。
宴会が開かれている広場では、兵士達が酒を飲み、踊ったり歌ったりしている。
有希の座っている上座では、アインが暴れて兵士達ともみくちゃになっている。
それを斜に構えて、ルカも酒を飲んでいる。
「……ここの人たちが、怪我することなくて、ほんと、よかったぁ」
からからと喉が渇いて、辺りに無造作に置いてある瓶を掴んでそそぐ。
飲めば飲むほど、ふわふわと良い気持ちになって、５杯目を飲んだ辺りから、有希の記憶はぷっつりと酒の底に沈んだ。
翌日起床してから、前日の宴がどうなったのか皆に聞いたが、誰も答える人はいなかった。そして、「未成年が酒を飲むな」とルカにこっぴどく怒られた。

11

フォルを奪還して、アドルンド城に戻る馬車に乗り込むと、有希は大きなため息をついた。
「あたし……なにしたんだろ」
昨日の記憶が、途中からぷっつんと切れたように思い出せない。寝ていたのではないかと思ったけれども、周りの反応があまりにもおかしい。
たっぷりとルカに嫌味とお説教を食らって、もうお酒は飲まないようにとも言われた。
――ガキが飲むと成長が止まるぞ。
ルカの言った言葉が頭に残る。
（飲もうが飲まいが、成長止まってるっつの）
有希は、自分の実年齢をこの世界の人たちに言えないでいた。説明するのが面倒くさいというのもあったが、一番の理由は、普通の人と違うところを、これ以上見せたくなかった。
ガキガキと皆から子ども扱いされるが、いっそその方がマシであると思うほどには、有希は普通でありたかった。
「まさか、そのこと言ってたりしないよね……」
記憶の無い間の自分が一体何をしたのだろうか。そしてその事について、謀ったかのように誰も口にださない。そうすると、きっと口することが出来ないような事を、有希はしでかしたのだろうか。
（わあああああああああ）
頭を抱えてゴロゴロと転がる。消え入ってしまいたいと、アーチェリーケースを振り回した。
馬車はガラガラと音を立てて進んでいる。フォルを立ってまだ半日もたっていない。これからまた一週間と少しの移動だ。
「はぁ……」
へたりこんで、ため息をつく。何を考えるでもなくぼんやりとし

ていると、どこからか有希を呼ぶ声が聞こえた。
馬車の後方から頭を出すと、ずいぶん前に居るはずのルカと、そしてアインが騎乗して有希を呼んでいた。その声が酷くあせっているようだ。
「どうしたの？　なんだか慌ててるみたいだけど」
何かあったのかと問い掛けると、興奮しているアインは何を言うでもなく口をぱくぱくと動かしている。
（何？）
馬車が止まり、ルカ達も止まる。
「ナゼット――俺の臣下のだな」
ルカが苦々しい顔つきだ。眉をひそめた姿がとても綺麗だと思った。
「そいつの父親がマルキーの捕虜になっていてな。バレないように奪還してくるとほざいていたのだが、どうやらマルキーに見つかって追われているという情報が入った」
綿密に計画を立てたはずなんだがな。どこからか漏れたらしい。吐き捨てるようにルカが言う。その口調は何かをはらんでいる。
「……もしかして、あの底意地悪い人が関係してるの？」
「さてな。いずれにしても確証はない。――凱旋と行きたいところだが、俺達はこれから引き返してマルキーに向かう」
「え」
王子様が、そんな身軽に動けるものなのだろうか。一瞬疑問がよぎるが、それを聞いて良いものだろうかと思うと何もいえなくなる。
「お前も一緒に来い」
「え」
驚いて顔を上げると、ルカが馬を移動させて、荷台の横に着く。
「荷物は大丈夫か？」
「あ、うん」
有希の持っている荷物なんて、アーチェリーケースのみだ。
「そうか」

そういって、手をのばす。前に乗れという事なのだろうか。
おずおずと手を取ると、軽々と抱え上げられ、ルカの両腕の間にすっぽりと収まった。
「急ぐからな。落ちるなよ」
頭上から響く声が聞こえて、慌しく頷く。
「アインも、遅れるな」
「わかってます！」
行くぞ。そう言うと、馬が走り出す。
「っきゃぁ！」
馬だからそんなに早くないだろうと思っていたが、後ろにぐらりと傾ぐ。ルカの胸元に後頭部がぶつかる。
「落ちるなよ」
耳元でささやかれるような声に赤面しつつ、有希は姿勢を正してまっすぐ前を見据えた。

ルカとアインと有希は、そこから五日間走りつづけた。
日が暮れれば近くの町や村の宿に泊まり、衣類や保存食も行く先々で購入したり売却していた。
そんな生活の中で、ルカは王子様なはずなのに何故こんなにも簡単に出てこられるのかというのをアインに聞いた。
アインいわく「ルカ様は破天荒なんです」だそうだ。
『どういうこと？』
『ルカ様は、その……問題児だったんですよ』
『問題児……』
『ああ！　今はあんまり……というか、その。まぁ、昔の話ですけど、勉強をサボったり、家出したり、しばらく帰ってこないと思ったら、騎士養成寄宿にいるじゃないですか。それで気が付いたら騎士証持って帰ってきたとか。散々なほど浮名を流したりと、武勇伝だらけですよ。今は大分落ち着きましたけど、昔から僕はルカ様に振り回されっぱなしでした。――ホント、僕が傍にいて止めなきゃ

駄目なんですよ』
有希は絶句した。
『それもこれも、ルカ様が第四王子でいらしたから、許されるんでしょうけどね』
つまりは、後継者じゃないから、好きにしたらいいじゃないか。
という所で育てられたのか。
（それはそれで、いやだなぁ）
最初からあなたには何も期待していません。とい言われているようなものじゃないか。と、有希は憤慨した。
アインが少し悲しそうに話していたのが、風当たりの強さを物語っていた。

いくつも町々を行き、有希はこの世界の実情を垣間見た。
町の人の中には、こんな時世だからと優しく有希たちを迎え入れてくれる人もいれば、有希たちから金品を強奪しようとした人も居た。
同情を請われたり、施しを何もしないからと罵倒もされた。
その事に、ルカもアインも、怒ったり嘆いたり悲しんだりすることがなかった。どうしてと問うと「仕方の無い事なんです」と答えられた。
戦争と言うものはどこの世界も共通して、悲しみしか生まないのだと思うと、悲しくなると共に、少しずつ町の人と関わりあいたくないと思ってしまう自分もいた。
有希はルカとアインの行く先々に興味を持ち、くっ付いて歩いていたが、いつしか店の前で用事が終わるのを待つようになった。
瞳の色を見られる恐れもあったが、なによりももう、この戦争の悲しみを見たくなかった。
その日も、町に着いて買い物をしているルカとアインを店の外で待っていた。
ルカとアインは、本当にいろんな店を回る。何故かと問うたら「

ナゼットが痕跡を残している可能性があるから」と言っていた。言付けやら何やらで、場所の特定をするのだと言っていた。
今までやってきたどの町よりも大きな町だった。有希の目の前を、人々がめまぐるしく歩いている。
寂れた物悲しさは無いが、どこか空虚な賑々しさだと思ってしまうのは、今までだけで、戦争の傷の片鱗を見てしまったからだろうか。
町は夕焼けで紅蓮に染まっている。有希は夕焼けが好きだった。夕焼けに混じってしまえば、自分の瞳の色が薄いブルーグレーに見えるからだ。
頭から被っているマントを外す。一日中着用していると、頭が蒸れて仕方が無い。
扉の窓から店内を覗く。アインが両手いっぱいに荷物を持っている。もうそろそろ終わるかな。と思った。
「ユーキ」
突然後方から有希を呼ぶ声が聞こえて、思わず振り返る。大柄な、見たこと無い人が立っていた。後方には仲間だろうか、幾人かが有希を伺い見ている。
「おぉ、やっぱりお前で合ってたか」
にやりと気味悪く男の顔が歪む。思わず鳥肌が立つ。
――この人は、危険だ。
本能がそう察知して、扉を開けようと取っ手に手を掛けた。
「おっと。ルカート様んとこには行かせねぇぜ」
言うと、ひょいと持ち上げられる。
「きゃぁ！」
「行くぞ」
見ず知らずの男たち数人に、俵のようにもたれて連れ去られた。
声をあげて叫ぶと二人はこちらを向いて目を瞠ったが、とうに遅かった。
そのまま有希は、夕闇の町中に消えていった。

12

段々遠くなってゆく金色の髪が、人々にもまれて見えなくなるのはすぐだった。
絶望的な気分で連れられる。
人数は、有希を抱えた人を含めて四人。皆露出度の高い服を着ている。
（なんで、どうして）
頭がぐらぐらと揺れる。その度に首が揺れて痛い。
一体何が起きているのだろうか。唐突に突きつけられた事実に頭が追いつかない。
（もしかして、誘拐？）
これがそうなのか。と、変に納得してしまった。この戦争の最中、よくあることなのだろうか。
（だけど、この人あたしの名前、知ってたよね）
イシスの復讐だろうかと考えたが、彼は今アドルンド城へ移送中だ。情報を漏らすことは出来ないだろう。
（じゃぁ、誰が。なんのために）
自分なんぞを誘拐しても、一銭の得にもならないというのに。
有希がそんな事を考えてもどうする事はできず、気付いたら頭に布を被せられ、どこかの建物に入った。

扉の開く音が聞こえてしばらくすると、ふわりと身体が浮き上がり、地面に落とされた。
「いたっ」
したたか尻と肘を打ち付けてもんどりうつ。布を剥がされて、自分が男達に囲まれている事を知った。
恐い。という感情が真っ先に浮かぶ。この人たちは自分に何をするつもりなのだろうか。良い事ではないことだけはわかっている。

誰か助けに来てはくれないだろうかと、部屋を見渡す。どうやら宿屋のようで、右手にベッドが二つならんでいる。そして、背には窓がある。

そもそも、この世界にルカとアイン以外、知人なんて居ない。それだけしか知人が居ないのに、何故連れ去られなければいけないのか。そう考えると、ふつふつと憤りが湧く。

「……どういうつもりよ」

「どういうつもりもこういうつもりもねぇよ。俺等はお前を捕獲するように言われただけでぇ」

「誰に？」

そいつァ言えねぇなぁ。と、にやにやと笑いながら言う男には、歯が数本無かった。

この世界に居る期間はまだ短いが、こういう輩を見たことが無いわけではなかった。

この町に来る前に、族に襲われて食料を奪われてしまったという村を見た。そしてルカが族の住処に押しかけて蹴散らした。彼等はその族に良く似ている。

――ああいう奴等は、金のために何でもやる。

嫌悪を込めた言葉を言ったのは、ルカだった。

（誰に、頼まれたんだろう）

そんな考えが頭をぐるぐると回る。あの底意地の悪いルカの兄、オルガだろうか。――そうだとしても、一体何のために。

有希には何にも価値が無い。ただ珍しい瞳をしている以外、役立たずもいいところだ。

（――あ）

あの人の、ルカの主人だからだろうか。ふと考えれば合点がいく。彼はこの国と戦争している国。敵国の王子だ。そして彼は騎士で、有希と契約しているがために身体能力が高まっている。だから、有希を殺して契約を終了させてルカを殺める。そういうことなら合点がいく。

男達は獲物を目の前に舌なめずりしたように笑っている。有希が恐がっているのを楽しんでいる目だ。
「……ふざけないでよ」
「アァ？」
「あたし、殺されたりなんかしないんだからね！」
すっくと立ち上がって、男達に向かって突進する。面食らった男達は、両手を広げて有希を捕まえようとするが、屈んで腕をすり抜けて、扉の取っ手に手を掛ける。
扉を開けて、外に飛び出す。男達の怒号が聞こえる。
右も左もわからずとにかく走り出す。すると突然壁際の扉が開いて、中から大柄な男が出てきた。急に止まることも出来ず、有希は思いっきりぶつかり、尻餅をついた。
「っきゃぁ！」
「うぉわっ」
男は小柄な有希がぶつかったてもなんてこと無かったようで「大丈夫かぁ？」と、手を伸ばして来た。
「ご、ごめんなさい」
男は、オレンジ色の長い髪と褐色の肌が特徴的だった。男の手を取ろうとしたところで、腰に手がまわり、持ち上げられる。
「逃げてんじゃねぇよ」
ぎくりと体がこわばる。
「やだ。はなして！」
ぽかんと口をあけている男と目があう。
「助けて！」
「静かにしろ！」
そう叫んだところで口をふさがれる。何度も唸り、そしてまた部屋に連れ戻された。
今度はベッドに投げられた。起き上がろうとしたところで男にのしかかられる。先ほどとは違った意味合いでの身の危険を感じて両手足をばたつかせる。

（あの変態オヤジといい、こいつ等といい、この世界の風紀乱れてんじゃないの！？）
ワンピースの襟元に手を突っ込んだかと思うと引き裂かれた。
「〜〜〜〜っ」
そのままうつ伏せにひっくり返され、背中からワンピースを剥がれた。
「あるか？」
「いや」
男達が意味のわからない会話をしている。有希は必死に胸元を押さえて身を縮めた。剥き出しになった背中にひやりと外気が当たる。震えが寒さからくるものなのか、恐怖からくるものなのかわからない。
足首を掴まれて引っ張られる。
「や、やだぁ！　はなして！」
いよいよ身の危険を感じて、どうにか逃げられないかと身をよじる。
「静かにしろよ、オラァ！」
ぱん。と小気味良い音がしたと思うと、左側の頬に痛みが広がる。耳がきぃんと鳴って、何も考えられなくなる。
ごんごん。と、扉が叩かれたのはそんな時だった。
「あー、すいませぇん。えーと。ちょっといいですか？」
能天気な声が聞こえて、ごんごんと扉を叩きつづける音が響く。無視をしようとしていた男の一人が、しつこいノック音に舌打ちをした。
「おい、お前黙らせて来い」
「あぁ」
男の一人が扉の方へ向かう。扉を開ける音が聞こえたと思ったら、男が吹っ飛んで机にぶつかった。
男達が驚いて扉を見やる。有希も驚いて見ると、先ほど有希がぶつかった男が立っていた。有希と目が合うと、一瞬憐憫のようなも

のが浮かんだが、すぐにニカッと笑った。
「いつの世も、どこの国でも、こういうことはやっちゃいけないよなぁ」
「テメェ、何モンだ！」
族の男が褐色の肌の男に向かって腕を振り上げるが、大柄な体つきなのにすばやく動いて、鈍い音とともに族は床に伏した。
しばらくすると、族は皆、床や机に伏して気絶していた。
「おう、嬢ちゃん。大丈夫か？」
何事も無かったかのように、あっさりと笑うあなたのその笑顔が恐いとも思ったが、有希は頷いた。
「そうか。そりゃよかった。……あー、その、なんだ？　俺、隣の部屋取ってんだが、来るか？　ちょいとでかいかも知れんが、妹の服で良ければ貸してやれる」
「あ、ありがとう」
そう言って手を伸ばす。有希は今度こそ、その手を取った。

13

隣の部屋には、十五、六歳の美少女が、不安げな顔をして座っていた。抜けるように白い肌と、肩口までふわふわとした栗色の巻き毛が人形のようだ。瞳の色は、髪と同じ栗色の瞳だ。

少女は有希と男の姿を見ると、立ち上がって駆け寄ってきた。

「お兄ちゃん！　大丈夫だった？」

言うと、隣の男が快活に笑う。二人で笑い合ってすぐ、少女は有希を見た。

「あなたも、大丈夫？　酷い事されなかった？」

「え、えぇ。大丈夫」

ワンピースの胸元をぎゅっと掴むと、服が破れていることに気付いた少女が、悲壮な顔をした。

「ひどい……さ、早く着替えましょ？　少し大きいかもしれないけど、その服よりかはマシだわ」

そう言うと、有希の手を握る。クロゼットの前に案内されて、比較的丈の短い藍色のワンピースを選んだ。

着替えると、肩口が少し大きいが、大分気が楽になった。

座ってと少女に促されるままに椅子に座ると、テーブルに三人分の紅茶が置かれた。

「あ、あの。さっきは本当にありがとうございました」

頭を下げる有希に、男が笑う。

「なぁに、気にすんなって。困ったときはお互い様だろう」

でっかい手が向かいから伸びてきて、有希の頭をわしゃわしゃと撫でた。

少女が飲んでいた紅茶をソーサーに置いて、さて。と言う。

「挨拶が遅くなっちゃったわね。私はティータっていうの。あなたの名前は？」

「ゆ、有希」

「ユーキかぁ、素敵な名前ね」
少女がふわりと微笑む。心なしか、いい匂いまでしそうだ。
「そういえば自己紹介がまだだったな。俺はナゼットだ」
ティータ。ナゼット。と、聞きなれない横文字の名前を頑張って覚えようと暗唱した有希は、聞きなれないのに聞き覚えのある名前にはっとした。アインが何度か言っていなかっただろうか。
「ナゼット！」
うおぉ。と、驚いた顔でナゼットがなんだ。と、問い掛ける。
「あたし、その名前聞いた事あるわ。ナゼットってこの世界にそんな沢山居る名前なの？」
「さ、さぁなぁ。昔、寄宿舎に居た頃ナゼットって奴がもう一人いたが」
「そっか……えぇっと……なら、アイン！　アインは知ってる？」
ナゼットとティータが同時に驚く。
「アインって、アイン・レーベントの事か？」
聞いた事の無い名前に首を傾げる。もしかして、苗字だろうか。
「あ、ごめんなさい。アインっていう名前しか知らないの。ええと、藍色の髪の毛で黒い瞳をしている……」
「多分、間違いなくわたし達も知ってるアインね」
ふと、ティータが有希の手の指輪を見る。
「ねぇユーキ。さっき気付いたんだけど、騎士はどうしたの？」
「え？」
騎士。という事は、ルカのことだろうか。どうしたの、という問いかけは一体何なのだろうか。
戸惑っていると、ティータが有希の右手を取ってランプにかざす。
「……紫ね」
「紫だぁ！？」
ナゼットが驚いて有希の手を引っ張る。
「あぁ……紫だこりゃ」
この紫に光る銀色の指輪が、一体何なのだろうか。さっぱり意味

がわからない。
「あの、みんなこの色じゃないの？」
「あら。ユーキは知らなかったの？　騎士の色号によって変わるのよ」
「……騎士に色号なんてあるの？」
二人が絶句する。何か不味い事でも言ったのだろうかと、なにか取り繕おうと思っても何も言葉が出てこなくて、ただあわあわとしているだけだった。
「ユーキ。紫が一番上位なのよ？」
「えっそうなの？」
じゃぁそれだけ、あの人は偉いということになるのではないか。そう思うと改めて、何故自分が主なんてものをやっているのだろうと指輪を見つめた。
「紫の騎士なんて、それこそ国で数人……」
ティータが言って、こちんと固まる。それに不審がった有希とナゼットがティータを見つめる。
「待って」
「ど、どうしたティータ」
「ユーキはアインと一緒に居たのよね？」
「う、うん」
なんだか尋常じゃない空気に飲まれてどもる。
「そして、ユーキの騎士は、紫の騎士」
「おう、そうだな。それがどうしたん……」
ティータが立ち上がってきっとナゼットを睨む。
「お兄ちゃん、気付かないの？　ユーキの騎士ってルカ君に決まってるじゃない！」
「お？　――おぉ！　そうだな、そうだよな……えぇ！？」
突然興奮しだした二人に、有希はえ、え。と戸惑う。
「でもあのルカが、まさかまた契約するはずはないだろう」
「だけどそうしたら、誰がユーキの騎士だっていうの？　アインは

騎士にすらなれそうにないけど」
討論をする二人は有希を見る。
「で、ユーキの騎士はルカ君なの？」
人形のように綺麗な顔ですごまれると、それはそれで迫力が出る。ぶんぶんと有希は首を縦に振った。
「ほらね！　――でもよかった。これで毎晩酒屋に行く地獄から解放されたわ」
「酒屋？」
「そう。昔から言うでしょ？酒のあるところに情報は集まるって。だから、ルカ君たちも同じ町にいるなら酒場に行けば会えると思ってたの。でももうユーキがいるから大丈夫ね」
「あ……でも、あたし泊まってる宿とかもわかんなくて」
広いこの町で、文字も読めない有希は、迷子同然だ。ルカ達の探し人に会えたとして、どうやって合流できるのだろうか。
「ユーキ。何言ってるの？　ルカ君の居場所なんてすぐわかるでしょ――お兄ちゃん、騎士証出して」
ナゼットが懐から銅のような色の騎士証を出してティータに差し出す。
大人のこぶし大の大きさのそれは、ルカも持っていなかっただろうか。金色に光っていたが、それは紫色にも見えた気がする。
「はい、ユーキ」
ティータがチェーンを有希に渡す。意味がわからず戸惑っていると、微笑んで説明してくれた。
「ユーキは何も知らないのね。あのね、この指輪は引き合っているの」
ティータが自分の指輪を有希に見せる。それは有希のものよりも茶の色味が強い気がする。
「騎士証を持ってね、指輪を銀の鎖に繋いで垂らすの」
有希の右手中指から指輪を抜いて鎖に通す。そして端と端を合わせて、ティータが持つ。

指輪はしばらく揺れていたが、ぴたりと止まる。じっと見つめていると、今度は指輪が淡く光りだした。
「そうすると――ホラね。あっちの方にルカ君がいるわ」
指輪は光ったまま、扉の方に浮いていた。
この指輪に、そんな効果があったのか。と、一人で驚いていると扉を叩く音が聞こえた。
三人で顔を見合わせる。ナゼットが頷いて扉の方へ歩いてゆく。
ティータは無言で有希を奥に促す。ティータと有希はベッドの脇に屈み、扉の様子を伺った。
「さっきの人たちかしら」
「ナゼットさんが縄で縛ってたからそれはないと思うけど……」
ナゼットがランプの灯りを消す。ふっと薄暗い闇が落ちる。
用心深く扉が開く。しんとした部屋の中に、誰かが入ってくる気配がした。
「っ！」
ナゼットが動いて侵入者の首を取ろうとする。しかし、幾分早く剣を抜いていた侵入者が、ナゼットの首に剣を突きつける。
「……よぉ。久しぶりの再会に、えらい挨拶だなぁ」
そこには金髪の騎士――ルカがいた。
「ルカ君！」
有希の後ろにいたティータが走って駆け寄る。
「ティータ」
少しだけ驚いたような顔で、ティータを見る。次いでベッド脇の有希と目が合うと、すっと冷めたような目で見られた。有希はどことなく咎められているような気分になった。
ルカの後ろからひょっこり顔を出したアインが、ナゼットとティータの名を呼ぶ。
ルカは小さくため息をついた。
「――どういうことか、説明してもらおう」
連れ去られた事を怒られるんじゃないだろうかと思うと、気が重

たくなった。

14

五人は夜も更けたので、同じ宿に泊まる事にした。部屋の中で、ルカ、有希、ナゼット、アインがテーブルに着いて、ティータはベッドにちょこんと座っていた。

連れ去られた先で偶然二人に会った事、助けられた事を話すと、ルカは「そうか」と一言だけ言って、隣の部屋に行ってしまった。

しばらくすると、隣の部屋から物騒な物音が聞こえて、さらにしばらくすると涼やかな顔で戻ってきた。そして「わからん」とだけ告げた。

「身体に刺青がある『ユーキ』という紫の瞳の少女を連れ去る事を命じられたそうだ――詳細が詳しすぎる」

ティータが驚いて立ち上がる。

「刺青って」

「ユーキには刺青がない。それは確かだ」

確かに有希には刺青なんて入っていない。だが、どうして彼はこう断言できるのだろうか。訝しげに見ているとアインが「ホラ、城で着替えさせたときに、メイド長に確認させてたんですよ」と耳打ちしてくれた。

「だけど、首謀者はユーキが魔女だと疑っているっていうことですよね。――それは、フォル城での事があるからじゃないんですか？」

「……もしそうだとしたら、耳が早すぎる」

「だから、それだけ長い耳を持っている人ですよ。……僕等の身内で」

あたりがしんと静まる。身内を疑わなければならないという状況が、疑心暗鬼にさせているのだろう。だが。

「そんなの、あの底意地の悪い兄様なんじゃないの？　みんなそう思ってるんでしょ。どうして言えないの」

ルカが盛大にため息をつく。

「お前のその豪胆さは良いが、兄様はアドルンドの実権を握っている人だ。恐れ多くて口が開かないのだろう」
「そんなものなのかなぁ。……て、どうしてあたしが狙われてるわけ？　あなたが王子で、そんであたしが主人だから狙われたんじゃないの？」
「本当に俺を狙うなら、もっと幼少の頃に襲っているだろう――兄様は、お前をリビドムの遺児、つまりは皇女だと疑っていた」
「はぁ？」
「お前、何故戦争が起こったのかわかるか？」
　知らないわよ。と答えると、呆れたような声が返ってきた。
　この世界の人間じゃないんだからしょうがないじゃないかと憎まれ口を叩こうと思ったら、ルカが口を開いた。
「――昔。まだ昔と言い切れるほど風化した訳ではないが。二十年前にマルキーの王が亡くなった。そして、リビドムの王が行方不明になった」
　ルカは淡々と喋りつづける。
「十五年前、新しいマルキーの王が、未だにリビドム王を探していて不安定なリビドムに攻め込んだ。リビドム王には子が無かったからな。後継者がいなかったんだ」
「……そうなんだ。でも、どうして？　王室制度なら親族とかに王位を渡す事とかできないの？」
「リビドムは特別なんだ。――言われなかったか？　その瞳は特別だと。この世界でリビドムの王家だけが、その瞳を持つ事が出来る。そして、紫の瞳の者以外は、王になれなかった――そして、リビドムから紫の瞳を持つものは無くなった」
　そうなんだ。と、呟くと、ルカが紅茶を飲んで話を続ける。
「そして十年前、完全に戦争が終結した。行方不明のリビドム王が出てくることも、殺されたという話も出てこなかった」
「あの底意地悪い人が、あたしをリビドムの遺児だって言ったのはそういうこと？」

ルカがまぁな。と答える。
「戦争の発端は、まぁいくつかあるが、リビドムの国民は医術に長けていてな、その技術をマルキーが欲したが受け入れなかった事や経済的な問題……あとは宗教の問題だ」
最後の一言だけ、少し言いよどんだ事に、有希は引っ掛かりを覚える。
「その、宗教の問題で、アドルンドとマルキーも戦争になったの？」
「リビドムを制圧したマルキーはアドルンドにも戦争をけしかけた。だが、マルキーが連戦で疲弊していた事、アドルンドが断固戦争を拒否し、防戦しかしなかったので、停戦協定が組まれた。そして、協定が解かれた今、お互いに手探りあっている。だからまだ、本格的な戦争に至ってはいない」
侮蔑するように吐き捨てる。
「そう……なんだ」
「そしてこの戦争に、お前が使わされそうになっているんだ」
「え？　あたしが？」
ルカが有希をみて苦い顔をした。皆の視線がルカに集まる。
「停戦の解かれたこの戦争に、明確な理由が今のところ無いんだ。八年も経っているからな。昔の怨恨は風化しているも同然だ。だから攻め込むための大義名分がない。――そんな中に、喪われたリビドムの皇女をアドルンドが保護したとしよう。その皇女はマルキーに虐げられていたと言う。卑劣な事をしたマルキーに制裁をという大義名分で戦えるし、勝利すれば賠償金とリビドムが手に入る」
「ちょっ」
思わず立ち上がる。
「なにそれ！」
「くだらないと思うだろう。こんな下らないものだ。捏造してまでも戦争をしたがる」
「どうして」
ゆらゆらとランプが灯す光が、ルカの黄金の髪をゆらす。

「隣の国がうらやましいらしいな。あの国は栄えている。あの国は金を、武力を、技術を持っている。とな。そしてそれを奪いたい、発展させたい、豊かになりたい――人間の欲望は尽きんな」
言って、一瞬ルカは目を瞠った。何に驚いたのかと怪訝に思った瞬間、険しい顔をして立ち上がり、くるりと扉に向かっていった。
「ルカ様？」
「出てくる。明朝には戻る」
そう言うと、静かに扉を閉めて出て行ってしまった。
部屋には有希、アイン、ナゼット、ティータが残された。重い沈黙が苦しい。
すぅっとナゼットが立ち上がると「ちょっと見てくる」と言って出て行ってしまった。
そういえば有希は、今まで戦争がどのようにして起こったのかなんて、気にもとめたことがなかった。今までは知らない遠い地で起こっていたことが、こんなにも身近で起きている。
（しかも、あたしが戦争の原因になるって）
この世界の住人ですらないのに、渦中にいるだなんて信じられない。現実感がわかなくて、くらくらと頭が揺れる。
「……久しぶりね」
ティータが、ベッドに座り窓の外を眺めている。
誰に。と見ると、アインがティータを見つめていた。
「ご、五年も会わないうちに、随分変わったんだな」
外を見ていたティータがアインに向き直る。
「当たり前じゃない。――でも、アインは何も変わってないわね」
（……あれ）
ティータの様子がおかしい。先ほど有希に微笑みかけてくれたときは、人形のように美しかったのに。とても優しかったのに。
「変わったといえば、可愛げがなくなったかもしれないわね」
つんとまた窓を見やる。
「本当に、相変わらず可愛げが無いな！　嫁の貰い手、無いんじゃ

ないか？」
「あら、余計なお世話よ！　その前に、人の心配するよりは、自分のこと考えたらどう？」
「ナンだよ！　人が折角探しに来たっていうのに」
アインが立ち上がる。そしてそっぽを向いていたティータもアインを睨みつけて立ち上がる。
「探しに来た！？　あら、それはどうもご苦労様。でも探しに来てくれたのはルカ君で、アインは侍従なんでしょ！？」
「一緒だろ！」
「一緒じゃないわよ！」
大体アインは昔からそうじゃない。いつもいつもお兄ちゃんとルカ君の後ろばっかりくっついて歩いて。それはティータだって言えるじゃないか、習い事サボってまで遊びに来てさ。
突然良くわからない言い合いが始まってしまった。茫然と見つめる有希は、その喧嘩が何故起きているのかすら理解ができない。
事態に戸惑っていると、部屋の扉が開いてナゼットが入ってきた。
「ナゼットさん」
「おう、なんだ？　ナゼットでいいぞ――って。またやってんのか」
「また？」
あー、その。なんだ。と、頭を掻いてナゼットが言い合いを続けている二人を見て苦笑する。
「『いつもの景色』ってやつだな」
言われて有希も二人を見つめる。喧嘩しているはずなのに、何故か恐ろしいという気持ちも、不快だという気持ちも浮かばない。むしろこそばゆいほどの微笑ましさがある。
「あぁ、喧嘩するほど仲が良いってことか」
「よくない！」
綺麗にハモッた二人は、またそれをきっかけに嫌味を言い合っていた。

15

扉を閉めると、途端にひんやりとした風が通り抜けた。
大きく一つ、溜息をついて目を閉じる。身体を占める憎悪をやり過ごすように唇をかみ締める。
――ホント、人間の欲望って尽きないわね。
鈴のような声が脳裏を巡る。あの憂い顔が、自分に気付いて微笑みかける仕草が、閉じた目の向こうに見える。
どれだけ見まいとしても、華奢な手首、儚い笑顔がまとわりつく。
ルカは手をぎゅっと握り締め、ゆっくり息を吐き、歩き出す。
「ルカ」
呼び止める声が聞こえて足を止める。ナゼットの声だ。
鈍いが妙に鋭いナゼットは何を思っているのだろうか。振り返る事ができない。
「飲みに行くだけだ」
何事でもないように、繕って言葉を吐き出す。長年掛けて冷えた心が、痛みを麻痺させる。
「軽率な行動だということはわかっている。――アイツを頼む」
それだけ言うと、ルカは歩みを進めた。
何も言わなかったナゼットは、一体何を思っただろうか。
だが、だからといって、ルカにはどうすることも出来なかった。

飲み屋に行くとカウンターの隅に座り、ルカは一番強い酒を頼んだ。
少しだけ驚いた顔をした店主は、しかしルカの要望どおりの酒を出した。
グラスに注がれた琥珀色のそれを、一気に煽る。店主にもう一杯頼むと言うと、今度は何も反応もなく出される。それも一気に煽る。
喉を焼けるような熱が通る。気が付くと店主にまた同じのを頼ん

でいた。
吐き出した吐息が熱くて重い。それが酒の所為なのか違うのか、ルカにはどうでもいいことだった。
（この感覚も久しぶりだ）
かつて、自分に責務や王家としての自覚がまだ足りない頃に、ルカはこうして酒場に足を運んでは飲んだくれた。
公の場や、部下の居る前ではこうも投げやりに飲むことは出来ず、いつしか酒を控えるようになっていた。
（俺も成長していたということか）
自嘲するように笑うと、酒を煽った。旨くもない、ただ自身に強烈なだけのものを取り込む。
脳髄を自分ではない何かが押し入る。麻痺するような感覚が広がる。
視界の端で、身体のラインがはっきりと判る派手な格好で赤い口紅をした女が、卑下た笑みを浮かべるのが見えた。髪も派手に下ろし、短いスカートからは肉質的な脚が惜しみなく出ている。女はルカを狙うような目で見つめている。
女とルカの視線が絡む。唇を引き結んで笑む女が立ち上がり、ルカの隣へと座った。
「ここ、いいかしら」
座った後に言うな。と内心で思いつつ「あぁ」と答える。
熟れすぎて腐った果物のような匂いが鼻腔に広がる。甘すぎて悪酔いしそうだ。と酒を煽る。
「この店に入ってきた時から見ていたわ――綺麗な人ね」
知っている。と、内心で言う。女は亜麻色の酒を片手で弄んでいた。
「それはどうも」
店主、同じものを。と告げる。女は身を乗り出してルカに迫る。
「ねぇ、こんな所でそんな消毒液みたいな安酒飲んでいるのは勿体無いわ――もっと良いところがあるの。飲み直さない？」

女が誘うような目でルカを見つめる。遊び歩いていた時期、毎日のように見ていた目だ。
その目を、ついこの間も見たな。と一人ごちる。
少女のことが頭によみがえる。餓鬼にしか見えない姿のどこに、あの妖艶な色香があったというのだろうか。
（馬鹿馬鹿しい）
立ち上がって出された酒を煽ると、女を見下ろした。
「――もっと酔い酒があるんだろうな」
女は醜いほどの笑顔を見せた。
「もちろんよ」
女はルカの腕に自分のそれを絡めた。

有希は夢を見ていた。
父に抱きしめられている夢。有希は今よりもずっと幼い。五、六歳だろうか。
夢の中で有希は泣いていた。理由を父に言うこともなく、どうしようもない悲しみを小さな身体でいっぱいに受け止めて泣いていた。
父は「どうしたの？」としきりに聞いてくれたが、答えることが出来なかった。
――ゆうきちゃんのお父さんの目、きもちわるいね
その日の幼稚園で、友達に言われた言葉だった。
有希にはそれがとっても悲しかった。大好きな父親を気持ち悪いと言われたことが悲しかった。そして、カラーコンタクトで隠しているとはいえ、自分の紫の瞳も気持ち悪いといわれたような気がした。
大好きな父に、あなたが気持ち悪いと言われたの。そう言う勇気はなく、ただ泣いていることしか出来なかった。
まばたきをするほどの間があって、有希はいつしか中学校の制服を着ていた。

十歳の姿にえんじ色のセーラー服が似合わなくて、有希はあまり制服が好きではなかった。
夕暮れ時の学校で、教室の窓際に座っていた。
窓から見える校庭では、運動部が各々部活を行っていた。それをぼんやりと眺めている。
どうしようもないような虚無感が有希を襲う。
どんな部活動をするにしても、小柄すぎる有希はなにも出来なかったからだ。
唯一自分を支えてくれたアーチェリーも、体躯が小さいままの有希は、公共の場に出ることを拒み、大会にも出ることをやめていた。
いつしかアーチェリーをやることすら億劫になっていた。
頬を一筋の涙が伝う。
十歳になった頃は、周りの皆よりも成長が早かったために、皆より大きかった。けれど、いつの間にか皆に背を抜かれ、どうしようもない焦りがあった。
ありがたいことに、周りの皆が有希の成長は早いうちに終わったと思ってくれている。だから、チビだということで皆からはもてはやされた。
もう成長の限界になっているだけだったらよかった。だが、有希は髪の毛も伸びないし、爪も伸びることがないのだ。
皆と一緒に過ごしている時は良い。そんな事考える暇もなく楽しかった。だが、こんな風に一人ぼっちになってしまうと、えもいわれぬ悲しみに飲み込まれてしまいそうになる。
「……だから、一人になりたくないのに」
なのに、自分はいつまでも窓際に座っていた。

ふと気付くと、今度は高校の制服に身を包んでいた。紺色のブレザーはとても小さいが、短いスカートがよく似合ったと思っている。
周りには、放課後を一緒に過ごしていた同じ帰宅部の友達が笑っていた。

毎日のように放課後はどこかに寄り道して遊んでいた。
中学時代に部活に打ち込んでいた友人達の幾人かは、高校に上がると同時に帰宅部になっていた。
有希はあまり家に寄り付かなくなっていた。あの父の瞳を見ると、自分も同じなのだと思い知ってしまうから。
誰かといつも一緒にいたいと思っていたはずなのに、有希は一人になりたかった。
カフェで友人達と過ごすのは楽しい。だが、時折ふと、自分の存在があやふやなものであるような気がしてならなかった。
かといって一人ぼっちになると、自分の存在がもっともっとあやふやなものになってしまう気がして途方に暮れる。
結局、有希はどうすることもできずに友達と笑っていた。
いつの間にか、悲しくても笑う術を手に入れていた。

ふと目が覚めると、有希は泣いていることに気付いた。
耳に入り込んだ涙の感触が気持ち悪くて、起き上がる。
――また、あの夢か。
途方に暮れる夢を見ることは良くあった。普段気にしないつもりで居るから、反動で夢に出てくるのだろうと思っていた。
時計も何も持っていない有希は今何時かわからない。有希の隣ではティータが寝息をたてて休んでいる。隣のベッドでは、ナゼットが腹を出して寝ている。
もう一度眠る気にならなくて、有希はベッドを降りる。
隣のベッドに行き、ナゼットの毛布を引っ張って腹部に掛ける。
月明かりで、室内を見渡すくらいには明かりがある。
有希は喉の渇きを感じて、ひっそりと外に出た。

16

その宿屋は、飲料がセルフサービスだった。食堂とは別に給湯室のようなところがあって、お茶やホットミルクが自由に飲めた。

お湯を沸かしながらぼんやりと過ごす。

夜もだいぶ更けているらしく、番頭も船を漕いでいる。

湯が沸いたらしく、ぐつぐつと音が鳴る。あわてて茶葉を入れたポットにお湯を入れる。

何もかもが静止したように静かで、なんだか神聖な気分になる。自分がやっているお茶汲みでさえ、神聖な儀式のようにも思えた。

茶葉が開くのを待ち、カップに移す。綺麗な飴色のお茶が芳しい匂いと共に湯気を立てる。

お茶が冷めるのを待ちつつ、ポットを洗う。

突然、乱暴に扉を開ける音が聞こえた。静寂の世界に突如やってきた音に驚いて肩が跳ねる。

給湯室からひっそりと顔を出すと、そこにはフラフラと歩くルカが居た。

「！？」

何かあったのだろうか、と、飛び出す。揺れる身体を支えようと両手を伸ばす。番頭は物音に気付かなかったのか、とうとう机に伏して寝ている。

「だ、だいじょうぶ？」

誰かに襲われたのだろうか。怪我は無いだろうかと身体を見回すと、むっとするような甘い香りがした。

「――あぁ、お前か」

肩に手が触れる。見上げると、ルカがこちらを見ている。

「大丈夫か？」

何が。と、思う間もなく「すまなかった」と言われた。

「もっとお前をよく見ていれば良かった。嫌だといわれても店の中

に連れ込めばよかった」
　攫われたことを、心配してくれていたのかと思うと、涙が出そうな程嬉しい。
（怖かった。けど）
「あたしも、ごめんなさい。自分が狙われているって危機感、もっと持てばよかった」
　何故だろう。するすると素直に言葉が出てくる。じわりと目に涙が浮かぶ。
「――そうか」
　言葉を発して微笑んだルカの目がうつろだった。有希はぎょっとした。
「え、ちょっと、大丈夫？」
　覗き込むように正面から見上げると、甘い香りと共に酒の匂いがした。
（よ、酔っ払ってんの？）
　初めて見るルカの酩酊姿に面食らう。しかし、このむせるように甘い匂いはなんだろうか。
　眉をひそめていると、ルカの大きな手が後頭部に回る。
「うぇ？」
　あっという間に有希はルカの腕の中にすっぽりと入っていた。
　有希の首元に熱い吐息がかかる。そのくすぐったさにざわりと粟立つ。
「ちょっ何してんのっ」
　さらりとした金髪が首をくすぐる。鎖骨あたりにやわらかいものが押し当てられる。そこにあるのは、ルカの唇。
「〜〜っ」
　息が止まるほどに顔が真っ赤に染まるのがわかる。思わず手がルカの顔を押し上げる。
「な、何するのよ！」
「泣きそうだったから慰めてやろうかと思ったのだが……」

にやりと笑った顔で、有希の手を掴んではずす。空いたほうの手でまた頭を抱き寄せると囁く。
「ずいぶんと意地の悪いことをするのだな」
聞いたことも無いほどぞっとする色っぽい声に、跳ね続けていた心臓が躍る。頭がくらくらとするほどの甘い香りが鼻腔いっぱいになる。
背中を撫でる仕草が、ただ撫でるだけではないものを孕んでいる。
「よ、余計なお世話よ！」
「つれないな、あの時誘ったのはお前の方だというのに」
かぁっと顔が熱くなる。
（さ、さそっ誘ったって）
「誰と間違えてるのよっ！」
両手を突っぱねて距離を取り、平手でルカの頬を叩く。パシンと小気味よい音がして、また静寂が訪れた。
有希は後ずさり、肩で息をしながら躍動している心臓に手をあてる。ルカは叩かれた姿のまま立ち尽くしている。
（もしかしなくても、そういう店に行ってたのかな）
自分には当分縁が無いであろう雰囲気に、真っ赤になった有希は戸惑いを隠せないで居る。
突然、ルカがぐらりと揺れて膝から崩れ落ちる。そのまま身体が前に傾ぐ。あわてて近づいて支えると、呆然としている顔があった。
いつもの仏頂面とは少し違う、表情のない顔だった。
「ねぇ、ちょっとしっかりしてよ。大丈夫？」
話しかけても焦点は有希には合わず、ルカは呆然としている。
困り果てていると、人形のように表情のない顔の口もとだけが動いた。
「どうしても……」
「え？」
もう一度問いかけると、素直にルカはぽつりとこぼした。
「どうしても、あなたが消えない」

もう一度背中に腕が回る。だが、振りほどくことが出来なかった。背中をきゅっと握った手が、あまりにも頼りない。
「あなたはいつも微笑んだままで、いくら呼びかけても返事をしてくれない」
誰のことを言っているのだろう。酔っ払って有希のことを誰かと間違えているのか、それとも、独り言なのだろうか。
「呼んで下さい……」
消え入りそうなほどに頼りない声がする。有希はルカのこんな姿を見たことが無かった。いつも不遜で自己中心的で、何を考えているのか分からなくて周りの人を振り回している。そんなルカしか見たことが無かった。
あなた。とは誰のことなのだろうか。こんなに脆くてボロボロになったルカの姿を知っている人。こんな姿を見せても良いと思われている人。
有希は今まで出会った人を思い当たるが、そんな人は思い浮かばなかった。
「ルカと、呼んでください」
(そんな事言われても)
有希はルカの名を一度も呼んだことがなかった。どう呼んでいいのかわからなかったからだ。さんづけで呼ぶべきか、それとも呼び捨てするべきか。そんなことも聞けないほど、ルカのことを知らない。
自分がルカの名前すら呼ぶ事の出来ない存在だと思うと、キリリと胸が痛んだ。
何かを堪えるような瞳が有希を捕らえる。瞬間、動けないほどの強い視線に、息が止まる。
ルカは泣きそうな顔をしていた――正しくは無表情だったが、有希から見ればとても泣き出しそうな顔だった。
「ぁ……る、ルカ……」
喉から絞り出るように声が発せられる。どうしたら物悲しい顔を

やめてくれるのかと、ぎゅっと抱きしめる。
「ルカ、ルカ。もう大丈夫だから」
大丈夫だから、そんな悲しい顔をしないで。
有希は知っていた。あの顔を。
（泣いてしまいたいのに、泣くことが出来ない顔だ）
まるで鏡を見ているようだった。悲しいのに、苦しいのに、それを表面に出すことの出来ない。だからこそ強張る不器用な表情。
いっそ泣いてしまえばいいのにと、泣けない自分も彼に思う。
「泣かないで……ルカ」
有希の背中に回った腕が、痛いほどに有希を抱きしめた。

気が付くとルカは有希に抱きついたまま寝入っていた。
有希はどうしたらいいのかわからず途方に暮れていると、有希が居ないことに気付いたアインと、そのアインに起こされたナゼットがやってきた。
そして、ルカは二人に担がれて寝室に行った。
「悪い癖なんだ。あんなんなるのが」
ナゼットが頭を掻きながら言った。大仰なほどの溜息をアインはついた。
「僕が覚えてる限り、ここ数年はありませんでしたよ。――ユーキ、ルカ様に変なことされませんでしたか？」
「変なこと？」
ぽかんと見上げると、顔を赤くしたアインが言葉に詰まる。
「えぇと、その。あの、無事ならいいんです」
（あぁ、そういうことか）
アインの言いたい事を理解した有希も、ぼっと赤くなる。
「だ、大丈夫。……でも、よくああいう所行くの？」
「その――なんだ。そういう気分になるっていうのはあんだよ」
何かを忘れてしまいたい時なんかな。と、ナゼットが付け足す。
それにすばやく反応したアインが、ナゼットを睨む。

「そういうことは、情操教育上ユーキに良くないので言わないでいただけますか」
まるで有希の兄のような口振りに、笑みが浮かぶ。ナゼットは「あ、すまん」と頭を掻いていた。
「あはは」
有希は思わず笑った。笑ったが、空虚なそれはどこまでも空虚だった。心のどこかでは持て余すような感情が燻っていた。
何かを忘れてしまいたいとき。それは、ルカが「あなた」と言っていた人なのだろうか。
「――バカルカ」
部屋の出際に、有希は小さく呟いた。

17

部屋に戻って寝息を立てるティータの布団にもぞもぞと潜り込んだが、寝付く事は出来ずにそのまま朝を迎えた。
どうやらルカは昨晩の事を全く覚えていないのか、朝食で顔を合わせた時、いつも通り仏頂面が迎えてくれた。
正直言って、安心してしまった。
（なのに、あんなしれっとしちゃってさ）
覚えていて欲しくなかったが、覚えていて欲しかった。そんな矛盾を自覚しているからこそどうしようもない。
（少しは気にしろ、バカ）
一方的な八つ当たりで睨みつけると、気付いたのかルカが向く。視線が絡むと昨晩のことを思い出して顔が熱くなり、顔を背ける。
あんな熱情を込めて人に見つめられた事は初めてで、更にそういう意味を込めた抱擁も初めてだった。
（あたし一人、ドキドキしちゃってさ、馬鹿みたい）
ムキになって、朝食を無理やり頬張る。ナゼットが「おぉ、食うなぁ」と感嘆の声をあげる。
「ユーキ、もう少しゆっくり食べたら？　喉につまっちゃうわよ」
そう言って、優しいティータはお茶を差し出してくれた。
「ありがとう」
笑って受け取ると、一気に飲み干した。
（そうよ。気にすることなんて無い）
自分はどう見ても幼児なんだから。実際、彼等も有希のことを十歳前後の少女だと見ているだろう。
だから、ルカが酔っ払って有希に絡んだのも、酒の所為だ。それ以外の要因なんて絶対に無い。
有希はそう決め付けて、自分も昨晩の出来事を忘れる事にした。

無事にナゼットとティータと合流する事が出来た。だが、有希の聞いていた話だと「ナゼットの父親の救出」だったはずだ。そのためにナゼットもアドルンドを離れたのだと。
食後に部屋で集まり、その事についてナゼットが話し始めた。
「昨日ルカには言ったが、親父はマルキーに捕まった。お袋はこの町の前に着いた村で保護してもらってる。そのままアドルンドに入るようにと昨晩早馬を出した」
ナゼットの話を要約すると、両親の救出は出来たが、追っ手に追われて、ナゼットの父親――ダンテはナゼットの母親――アンとティータをナゼットに託してその場に残ったらしい。そして、捕らえられるのを見たが、そのまま置いて逃げてきたということだ。
そうするしかなかったんだ。と、ナゼットは思い出してうなだれていた。
「俺達は、もっと東へ向かう。きっとダンテ殿が連れ去られたというなら、きっとケーレだろう」
「ケーレ？」
都市の名前だ。といわれる。
「ケーレはマルキー王都の西側にある城塞都市だ。大規模な牢獄や捕虜の収容施設などがある」
へぇ。と感嘆の声をだす。この世界には、有希の知らない事が多すぎる。
「なんか、危険な感じがするねぇ。気をつけなきゃ」
下手をして、また捕まったりしてしまったら厄介だと、有希は手をぎゅっと握って気合を入れる。
「その事だが、ユーキとティータは、アインと共にアドルンドに戻れ」
「何故です！」
アインががたんと音を立てて椅子から立ち上がる。
「これ以上ユーキとティータを危険な目にあわせる訳にはいかん」
「何故僕も一緒なんですか」

「ユーキとティータだけでは心許ないからだ」
「なら、アン様のところに遣わした早馬に伝令を。こちらにも立ち寄るようにとお伝えください」
「ならん」
「どうしてですか。どうしてナゼットは連れて行くのに僕は駄目なんですか」
　更にアインが口を開きかけたところに、俯いているナゼットが口をはさむ。
「アイン」
「……なんですか」
　ナゼットは顔を上げてアインを見る。だだっ子をあやすように苦笑している。
「お前は、軍人でもなけりゃ騎士でもないんだよ」
　わかれ。と呟く声が響く。アインが手のひらを握るのが見えた。
「俺達は捕虜の奪還をする。マルキーに喧嘩を吹っかけるということだ。身元がばれればそのまま戦争だ。それだけ危険な所に乗り込む」
「そんなの、そんなのわかってます」
「そんな所に、女、子供を連れて行けるか？」
　ルカの瞳が、凍ったように冷たくみえる。思わず身震いする。
　アインは黙ったまま固まっている。手のひらを握る力が増すのが痛々しく見える。
「ルカ様は……」
　怒気を孕んだアインの黒い瞳が、かっと見開かれる。
「ルカ様は僕の事をどう思っているんですか！」
「お、おい。アイン、落ち着け」
　ナゼットがアインの後方から手を伸ばすが、アインがそれを払い落とす。
「あなたはいつもいつもそうだ。僕の知らないところで何でも勝手に決めてしまって。そんなに僕の事が頼りないですか？　信頼が置

けませんか？」
　早口でまくし立てて、アインは言う。
「……信頼を置いているから、護送を頼むんだ」
「そんなの、他の人にさせてください。僕は、ルカ様のお傍にいるのが役目なんですよ」
　声が憤りを含んだものから、悲しみのものに変わる。言葉尻は引っ込んで、自分に言うように発している。
　有希はアインを見ていて、切なくなった。
――ホント、僕が傍にいて止めなきゃ駄目なんですよ。
　いつだったか、アインはそんな事を言っていた。ルカ様はいつも無茶ばかりするから。と、とても輝いた顔で。
（どうして駄目なんだろう）
　有希はそんな事を考えてしまう。きっと想像を絶するくらいに危険なんだろうが、命の危険に晒されることない有希は、未だ実感が持てない。
　大きなため息が聞こえた。
「お前の主人が、戻るように命じたんだ」
　冷徹な声に驚く。ルカが冷ややかな目でアインを見ていた。
「お前の我儘など聞いていられないんだ」
　アインの黒目がちな目が見開く。きゅっと引き結ばれた唇は、何かをこらえるように震えている。
（ひどい）
　有希の中で、なにかがぷちんと切れる音がした。
「ちょっと！　言い過ぎなんじゃないの？」
　思わず言葉を発していた。その場の視線が有希に集まる。
「お前にどうこう言われる筋合いはないが？」
「わかってるわよそんなこと！」
　自分がなによりもの足手まといだということは、この世界にやってきたときから自覚している。イシスを捕らえたときは、少しは役に立てたかと思ったが、自分がいなくてもどうにかなったという事

実が、有希を苦しめる。
「じゃぁなんであたしをこんなところまで連れてきたのよ」
有希はオルガに面倒を見られるはずだった。それを強引に契約までして連れ出したのはルカだ。
「なのに『危険になったからやっぱり戻れ』って。都合が良いにも程があるんじゃない？」
本当は知っている。オルガの元にいたら、有希をリビドム皇女だと騙って戦争をけしかけようとされていた事を。それを知っていたルカが、有希をいいように遣われないようにと連れ出してくれた事を。
（だけど、そういうことじゃないの）
「あたしが許可するわ」
「は？」
ナゼットがぽかんと口をあける。ルカは眉間にシワを寄せて、意味がわからないという顔をする。
「あたしも一緒に、ケーレに行く」
「お前、人の話聞いてたか？」
お前はアドルンドに戻るんだ。そう言って有希を睨む。
「うるさいわね。アンタの我儘なんて聞かないわ」
ルカの眉がぴくりと動く。
「我儘を言っているのはどっちだ」
「あ・な・た・の主人が命令してるの。臣下は黙って命令を聞くべきなんじゃないの？」
有希がルカを指差す。中指にはめた指輪がきらりと光る。
（そうよ。あたしが主人なんだから）
有希は妙に興奮していて、肩で息をしていた。
ルカは眉間にシワを寄せて黙っている。何が可笑しいのか、ナゼットは笑いそうなのを必死に堪えている。
やがて諦めたように盛大にため息をついたルカが呟いた。
「んの、じゃじゃ馬が……」

「そんなじゃじゃ馬を主人にしたのはルカ、あなたでしょ」
責任転嫁はなはだしいようなことを言ってのけ、有希はつんとそっぽを向いた。
昨晩の出来事以外で、初めてルカの名前を呼んだので、気恥ずかしかった。
ちらりとルカを盗み見すると、少しだけ驚いたような顔をして固まっていた。そして有希と目があうと、ルカは溜息を一つついて、
「そういうことだ、準備を急げ」と言った。
「――っありがとうございます！」
そう言うと、アインは「馬の手配してきますね」と、飛び出していった。

18

ティータは少女の豪胆さに驚いていた。
自分たちとアインは、アドルンドに戻るという事を知っていた。
そして――アインが戻りたくないと言う事もわかっていた。
有希はまだ怒った興奮が冷め遣らないのか、肩で息をしている。
椅子に座ったルカはため息をついて机に頬杖ついている。
くすりと、笑みがこぼれる。
「ユーキ、ほら落ち着いて」
話し掛けると、有希は「え？」と、赤らんだ顔でこちらを見る。
興奮しすぎていて、頭が真っ白になってしまたのだろうか。
「今お茶入れるから、座ってて？」
ね、と言うと素直にコクンと頷いて、ルカの向いに座る。
「ルカ君も飲むよね？」
頼む。と、一言。わかったわと答えると、ナゼットが盆を持って現れた。
「あ、お兄ちゃん、ありがとう」
「おう、カップは人数分でよかったか？」
「えぇ、大丈夫よ」
ナゼットから盆を受け取ると、熱湯の入ったポットに、添えてあった茶葉を入れる。
ナゼットには紅茶を入れることができなかった。昔、紅茶を飲みたいと駄々をこねたティータに、とても渋い紅茶を入れてくれたのだ。それから今でも、ナゼットは茶葉の量の加減ができないのだ。だからこうして、準備だけしてくれる。
昔の事を思い出して、くすりと笑う。
「ホント、ルカ君って今も昔も素直じゃないね」
仏頂面だが、明らかに不機嫌な姿を見て、懐かしい姿と重なる。
「危険に晒したくないって、素直にそう言えれば良いのにね」

黒髪、紫色の瞳をした少女が、目をぱちくりとさせてこちらを見る。
「ティータ、それ、どういうこと？」
「ふふ」
「ティータ」
ルカが無言の制止の声をあげる。だがティータは聞こえないフリをした。
「あのね、昔。まだみんながお城に居た頃なんだけど、三人で狩りに行ったらしいの。でも、アインは最年少じゃない？　危ないからきちゃダメって言えばいいのに、ルカ君たら「邪魔」って言って終わらせちゃったの」
その後は大変だった。残ったアインはティータと一緒に遊んだのだが、やっぱり狩りに行きたくて行きたくて、ティータを連れて狩場まで行ってしまった。そして、ルカとナゼットに見つかった二人は大目玉を食らった。
その話をすると、有希が酷く申し訳なさそうな顔をして、ルカに謝った。そして謝ったかと思うと、急に怒り出した。
「それならそうと、どうして素直に言わないのよ！　アインさん張り切って行っちゃったじゃない！」
「だから先に来るなと言っていただろう」
「言葉が足りないわよ！」
そのやり取りがなんだか可笑しくて、くすくすと笑ってしまう。
お茶を煎れて、カップをそれぞれの前に差し出す。紅茶の柔らかな匂いが立ち込める。
「アインさんはルカを心配して言ってくれてるんだよ？」
「――アイツは、昔から心配性なんだ。だからあまり危険な事を危険だと知られたくない。危険に晒されたとしても、アイツは身を守る手段がないからな、守ってやれない可能性だってあるんだ」
珍しく素直に本音を言ったルカに驚いて、ティータはカップを持ったまま直立不動してしまった。

ルカの座っている有希だけが、満面の笑みを浮かべていた。
「……そっか。ごめんね、我儘言っちゃって。でもあの底意地の悪い人の所になんか行ってたまるかって感じだから、ついてくからね」
有希はそうのたまった。その強さに、ティータは微笑む。
（私だったら無理だわ）
聞けば有希は異世界の人間だという。異世界がどこかはわからないが、きっと別大陸の人なのだろう。突然現れて、文化も生活習慣も違うところに放り投げて途方に暮れていたところを、ルカが保護したと聞いた。
昨晩寝るまでずっと有希の世界の話を聞いていた。
とても便利で、安らかで豊かな国に育ったと聞いた。それなのに、彼女は幼い身でありながら、戦争に巻き込まれても強く強く生きている。戦争というものすら知らなかったと言っていたのに。
オルガに利用されそうになっても、誘拐されて身包み剥がされそうになっても、気丈に振舞っている。
ティータはそんな有希が羨ましかった。
カタン、と、扉から物音が聞こえたような気がした。閉じた扉の向うは見えない。
けれど、誰が居るのかは大体予想がついてしまった。
ティータは微笑んで、扉に歩み寄る。
「聞いてたのね」
こっそりと扉を開けると、真っ赤な顔をして立ち尽くしているアインが居た。両手で頬を挟んでいる。
「いや、あの、すぐそこで伝令に手紙を渡されたからお伝えしようと思って……」
あわてふためくその姿を、懐かしいと思う。狩場で必死に言い訳をしていた姿と重なる。
「る、ルカ様が、そんな事思ってただなんて」
「馬鹿ねぇ」
「ば、ばかとはっ……」

口をつけていない紅茶を差し出して、くすりと笑う。アインが拗ねたようにソーサーからカップを取った。
「ホント、馬鹿よ」
素直じゃないんだから。
ずっとずっと、暗い道ばかり歩いてきた。
捕虜として過ごす日々は陰鬱で、毎日が灰色に過ぎていった。
迫害されないだろうか、戦争が再び起きると殺されてしまうのではないだろうか。そんなことばかり考えながら生活していた。
逃げ出したときには、この瞳は絶望以外のものを見なくなっていた。いつ追いつかれるのか、いつになったら逃げ切れるのかと毎日震えて過ごしていた。
記憶の中で消えかけていた、懐かしくて暖かい記憶を必死に掻き集めて抱きしめて、こんな風に笑える日をずっとずっと夢見ていた。
じんわりと目頭が熱くなる。飲み終えたカップをソーサーに戻すと、アインがぎょっとした顔でティータを見ていた。
「な、なな何泣いてるんだよ」
「え？」
気付いたら、涙が頬を伝っていた。見ないで。と、慌てて裾で目元をこする。
「め、目にゴミが入ってたのよ！」
なんでもないんだからと、念を押すように言う。
（これからまた、危険な場所に行く事になっちゃった）
目の前でうろたえている彼も、その危険な場所に連れて行くことになってしまった。
（……でも。それはどこにいてもかわらない事だわ）
どこに居ても追われるというのなら、せめて、あのやわらかな記憶と共に居たいと思うのは愚かな事なのだろうか。

19

アインが伝令から受け取った手紙には、絶望的な内容が書いてあった。
ダンテを助けに行くという目標に、水を差すには十分すぎた。
「帰還しろとのことだ」
「帰還って、戻れって事？」
そういうことだ。と、ぶっきらぼうにルカは言う。
「はぁ？　どうして戻らなきゃいけないの。ダンテさん助けるためにマルキーに行くんでしょ？　それに」
それに、ルカは第四王子だから、政務に関わらなくていいんじゃないの。その言葉は有希の胸にしまわれた。
「俺は身軽だからな。一応兄様にはダンテ殿の奪還に向かうと伝えたんだが――」
どうやら兄様はご不満らしい。ルカがはっと一笑する。
「なにそれ。どうしてダンテさんのこと見捨てられるの！？　信じられない」
有希が憤慨していると、ナゼットが答えた。
「あー、そりゃ親父は、元々リビドムの人間だったからだな。アドルンドに亡命しようとしていた所にマルキーに捕まっちまったんだよ」
だからあんまりアドルンドの利にはなんねぇんだよ。と、あっさりとナゼットが言ってのける。
「でも、どうして突然戻ってこいだなんて……」
おかしいよ。有希が言うと、ルカは手紙を読んで言った。
「紫の騎士であるルカートには、ちゃんとした軍を構えて戦争に挑んでほしい。だと」
全くの正論すぎて、誰も何も言えなくなる。
まぁ、気にすんなや。と、快活なナゼットの声が沈鬱とした空気

を破る。
「俺一人でもなんとかなるし、ティータとお袋を保護してくれりゃぁ良い。戻れ、ルカ」
「いや、大丈夫だ。アイン、視察して、仔細情報を連絡しますと伝えてくれ」
「はいっかしこまりましたっ」
ナゼットがいぶかしげな顔をする。
「……助かるが、いいのか？」
「かまわんさ。俺もダンテ殿には世話になった――実の父親みたいなものだからな」
そう言ったルカが、少しだけ微笑んでいるような気がした。

ケーレという町は、城壁が沢山ある、バウムクーヘンのような町だった。
（ヘンな町）
城壁の外側に、また城壁が出来ている。アインに聞くと「ケーレは元々とても小さな城塞集落だったんですよ。それから城壁を越えて大きくなり、更に城壁を作り、と言う風に大きくなったんです。あの崩れかけた城壁はその名残です」と教えてくれた。
町の中はどこもかしこも灰色で、城壁はもちろん、店も活気も、なにもかも灰色じみて見えた。
「……陰鬱な町」
「そうだな」
ぽつりと呟くと、有希の後ろで手綱を引いているルカが同意した。まさか返答が返って来るとは思っていなくて、振り返る。
「ケーレは犯罪者の収容所だ。住人のほとんどが捕虜か浮浪者か、出所した奴等が生活している――元は犯罪者だ。犯罪が再び起こることも多い。この城壁も、服役者の仕事が無いときなどに意味も無く作らせた結果がこれだ」
「……詳しいのね」

一応王族だからな。と、鼻でわらったような声が聞こえる。有希の身長だと、ちょうど頭のてっぺんがルカの顎に当たる。そのため、声が降りかかってくる。
「ねぇ、どうやってダンテさんを救出するの？」
そうだな。そう言って黙る。沈黙が訪れる。馬の背で揺られ、蹴爪の音と、どこかで石を切る音が聞こえる。
「強行手段に出ても良いが、こちらは戦闘に向かない人間も居る。――賄賂も使える手だな。まぁ、今の状況が予想外だからな。あとでナゼットと話し合う」
へえ。と返す。
「ねぇ、そういえばナゼットとアインとはどういう関係なの？　幼馴染だけど、ルカって王子様なんでしょ？」
王子と今でも幼馴染を続けるという事ははたしてできるものなのだろうか。
「……それが何か関係あるのか？」
何故そんな事を聞いてくるのか意味がわからない。という声が降ってくる。
「べ、別にいいじゃない。気になったの！」
「何をそんな怒る必要がある」
かあっと顔が赤くなる。どうしてこんなにもムキになっているのか自分でもわからない。
「アインの家はな、アドルンドの軍師家系なんだ。アイツは末息子で、俺と一番年が近いからと俺の従者になった」
そういえば、アドルンド城に居た頃、有希の身の回りの世話をアインが何もかもしてくれたことを思い出す。
「ナゼットは孤児でな。ダンテ殿が保護して育てていたんだ」
「あれ？　ダンテさんってリビドムの人なんじゃないの？」
ああ。とルカは呟く。
「ダンテ殿はアドルンドの軍人だったが、生まれ故郷がリビドムだということで、リビドムとマルキーが戦争を起こした時に、軍を辞

任してリビドムの救援に行ったんだ」
その時にティータとナゼットはリビドムに移ったんだと聞いた。
「ナゼットは今、俺の近衛になる」
そうなのか。と、有希は一人で納得する。
ふと、右手側に広場があった。真中に人が集まっている。
（何やってるんだろう）
何かの催し物だろうか。今までも大きな町では広場で叩き売りをしている場面を何度か見かけた。活気のあるその催し物を見ているのが好きだった。
よく見えない。と、首を伸ばすと、視界をルカの腕がさえぎる。
「なにするの。見えないじゃない」
「バザールと勘違いしているのか？　あれは処刑だ」
「しょけ……」
耳慣れない穏やかじゃない単語に、有希は絶句する。ルカはため息をついた。
「言っただろう。ここは罪人の町だと」
瞬間、耳をつんざくような悲鳴が聞こえる。男の野太い絶叫があたりに響く。それは空気を振るわせるのではないかと思うほどに強烈だ。
「――っ」
有希はその痛々しい声に顔をしかめる。その声は何度か響き、そしてぱったりと途絶えた。そして辺りはまたしんと静まり返り、石を切る音だけが響いている。
広場からぱらぱらと人が散る。処刑が終わったようだった。
有希は宿屋に着くまで、ずっと耳を両手でふさいでいた。
そして背中のぬくもりに縋るように目を閉じた。

20

今まで泊まった中で一番物騒な宿屋に着くと、ナゼットは大部屋を取った。なぜかと問うと「危険だから全員一緒がいいんだ」と答えた。

そんなことは初めてだった。今までいくら物騒だからといっても、二部屋は取っていたからだ。（片方の部屋に侵入されても、反対側に逃げてナリをひそめる事が出来るから）

そして部屋に着いてからは、ルカとナゼットが交互に出入りし、忙しく何かをしていた。

有希はそれまでやれる事がなかったので、ティータとアインに文字を教わっていた。アインは「よくこんな状況で勉強できるなぁ」と感心していた。

夜は、疲れて帰って来るルカとナゼットに食事を作ったり、お茶を入れたりしていた。

数日も経つと、アインもどこかに出かける事が増えた。ナゼットと共に、どこに行っているのかはわからないが、いつも戻ってくるときはぐったりと疲れ果てていた。

有希には想像もつかないほど困難なことなのだろう。有希とティータがベッドに入った後も、三人は地図を目に議論していた。

（あたしに出来る事、あればいいのに……）

きっとティータも同じ事を思っているのだろう。真夜中、お互いに目を覚ます事が多かった。そして目が合うと、手を握り合って目を瞑った。

（何も出来ないのが一番、つらいよ）

有希も焦っていた。お荷物以外の何物でもない。そして我儘を言ってついてきてしまった。だが、後悔するには遅すぎた。

もう戻れないのだ。ダンテを連れてアドルンドに戻るまでは、進むことしか許されなかった。

鬱屈とした毎日を過ごしていた。有希もティータも、外の景色を見ない日々が長いこと続いた。
有希はいつのまにか読み書きが出来るほどに文字を覚えた。そんな折、その夜はやってきた。

「明日の明け方、牢屋に忍び込む算段ができた」
ぼんやりと暗いランプに包まれたその顔も暗く見えた。
「日も昇らぬ時間の朝一番に、捕らえられた捕虜と会って食料を渡すということで、番兵にいくらかの手付を渡した」
ルカは淡々と話す。綺麗な顔は活力を失ったように沈んでいる。心なしか幾分痩せたような気もする。アインとナゼットは黙ったままだ。
「だが、男を入れることは出来ないと言われた。牢破りを懸念しているんだな。――そこで、手伝ってもらう事になった。鍵は別口で入手した。だが、開けるのは俺達では出来ない」
その言葉に驚いてアインとナゼットを見やると、二人は何かを堪えるような顔をしていた。
（そうか――必死に他の案も探した後なのか）
たとえ他の案を探せたとしても、有希たちには時間がない。早くアドルンドに戻らないと、戻る事が出来ないほどに戦闘が進んでしまう。
有希はきゅっと手を握りしめた。自分が着いていくつもりだった。元々この世界の住人でもない有希が行けば、捕虜になっても捕まっても殺されても、この人たちの損失にはならない。
（いざとなれば、また魔女のフリしたらいいし）
「ということで、ティータについてきてもらう」
ルカが告げる。その場の空気がしんと静まり返っていて、まるで葬式のように湿っぽい。
（え、ティータ？）
まさかティータが選ばれるとは思っていなかったので面食らう。

ティータを見ると、戸惑った瞳がそこにはあった。
「……わかりました」
酷く怯えた目で、それでもしっかりとルカを見つめて言った。
「ちょっと。ちょっと待ってよ」
ティータは亡命してアドルンドに向かう途中だったのではないか。危険な目にあわせないために保護したのに、何故危険な目に晒さなければならないのだろうか。たとえ鍵を開けるだけだとしても、鍵を開けた後、どうなるのかは説明してもらっていない――きっと説明できない内容だということはわかっている。だって、牢屋はずいぶんと奥にあると聞いた。
「どうして？　どうしてティータなの？」
納得ができないよ。と言うと、ティータは有希の名を呼んだ。ティータを見ると、胸の前で握ってる手が震えていた。
「いいの」
「でもっ」
ティータは目を伏せて、首を振った。
「それがルカート様の命令ならば、私は従うわ」
ルカート様。いつもルカ君と呼んでいる彼女ではなく、それは、国に従事する人間だった。
「危険だという事がわかっているのに、申し訳ない」
「いえ、賜ったご命令、遂行してみせますわ」
そう言ってティータは頭を垂れる。
齢１５の少女が、震えながら微笑んでいる。その笑みはまるで人形のように美しく、そして悲壮だった。
恐いはずなのに微笑んでいる。その笑顔に有希の心臓は締め付けられる。いつか聞いた男の断末魔が再び聞こえたような気がする。その叫び声はいつまでも呼応して、有希の頭を巡って蝕む。
広場に集まった人だかり。灰色の町。死んだような瞳でうろつく人々。
いくつものヴィジョンが頭を巡る。

――ティータも、ああなってしまうのだろうか。
「そんなの、ダメだよ」
ぽそりと呟く声は反射で飛び出した。有希はもう一度、今度ははっきりと声に出した。
「そんなの、ダメ」
ティータは有希をしばらく見つめて、そして可憐に微笑んだ。
「ありがとうユーキ。でもいいの」
「よくないよっ」
よくないよくない。不安なときも一緒に居てくれた。有希を「強いね」って笑ってくれた。そんなティータが、危険に晒されてしまう。
（ティータは自分が死ぬかもしれないっていうことを、きっと自覚している）
だからこそ、こんな風に微笑む事ができるんだ。
「だって、ティータはまだ十五歳なんだよ！　十五歳の女の子にそんなことさせるなんて酷すぎるよ！」
睨むようにルカを見る。
「ならお前はどうだという。まだ十そこらのガキが」
「あたしは十八よ！」
仁王立ちになって言う。ああ。とうとう言ってしまったと思ったが、そんな事はどうでもよかった。
「あたしを選びなさいよ。異世界人で、魔女って偽ってカモフラージュできるあたしを。――ティータを危険になんて晒させられない」
その場に居る全員が絶句しているのがわかる。十八だなんていっても誰も信じてくれないだろう。
「ちょうどいいじゃない。もしあたしが死んだら、戦争の火種になりかねないのが消えるんだから。……それに、こっちの世界で死んだら元の世界に戻れるかもしれないでしょ？」
きっとそんな事はない。わかってる。
「ユーキ」

ティータが呼ぶ。見ると、とても不安そうな顔をしている。自分よりも身長は高いのに、とても小さな女の子に見えた。
「黙っててごめんね。あたしの見た目、こんなんだから誰も信じてくれないと思って」
にっこりと微笑んで男陣を見る。
「そういうことで、あたしを連れてって。矢の自信だけはあるわよ」
もし聞けないなら、命令するわよ。と、微笑んだ。

21

満天の星のもと、ゆらゆらと、ランプが頼りなくゆらめいている。
有希はランプが作り出す陰影を、じっと見つめていた。
（また、わがまま言っちゃった）
思い出すだけで消え入りたくなる。だが、後悔はしていない。
（もう二度と、ティータにあんな顔させたくないなぁ）
この世界に来て初めて出来た友達だった。優しくて、優しくて、そして消え入りそうなほどに儚い少女。
彼女はもう床に着いている。皆に見守られながら。
有希は宿屋の屋根に居た。ランプを片手によじ登るのは骨が折れたが、瞬く星々を見れたから善しとした。
風に吹かれるたびに消えそうになるランプをよそ目に、屋根に倒れる。三角屋根は程よい傾斜で、夜空を見渡す事ができた。
とても心が凪いだ気分だった。
フォルに入ったときとは違う、もっともっと危険な場所に行くというのに、不思議と恐い感覚は無かった。
（牢屋を開けて、そのまま脱走だなんて。結構強引だなぁ）
他にもっと賢い案はないのかと、有希も色々考えたが、敵対国に居る以上、間諜でも居ないとひっそりと行うことなんて出来ないとわかった。
目を閉じる。この世界にやってきたときは春風がそよいでいたが、季節はもう初夏だ。ティータは「葉の季節よ」と言っていた。青々と茂った葉が、世界中に零れる季節だと。
元居た世界に思いを馳せる。両親はあの後どうなったのだろうか。大学生になりそこねた有希はどういう扱いになっているのだろうか。行方不明？　神隠し？　それとも蒸発？　いずれにしろあまり良い噂は流れなさそうだ。
友達は元気にしているだろうか。大学デビューするんだと張り切

っていたあの子は。彼氏と遠距離恋愛になってしまったあの子は。
いろんな友人が浮かんでは霞んでゆく。彼女達は有希のことをどう思っているのだろうか。新しい生活に終われて、忘れてしまったのだろうか。
ふと目頭が熱くなり、じんわりと涙が浮かぶ。
――ちょうどいいじゃない。もしあたしが死んだら、戦争の火種になりかねないのが消えるんだから。……それに、こっちの世界で死んだら元の世界に戻れるかもしれないでしょ？
自分で言った言葉なのに、空しくなってくる。
（ちょっとだけ、否定して欲しかったな）
嘘でもいいから、必要だって言って欲しかった。
「違う」
本当は、役に立ちたかった。
何か、役に立つ事でこの世界に居る意味を、理由をつけたかった。喩えそれが、自分の命を落としたとしても。
「……何が違うんだ」
突然聞こえた声に驚いて目を瞠ると、ルカが軽々と屋根を上ってきた。
「……ルカ」
あまりにも軽々と上るその所作に、ちょっと憎らしいと思った。
「本当にお前はじゃじゃ馬だな」
鬱陶しそうに髪の毛を掻きあげる。月明かりに照らされた金色の髪が、さらさらとたなびく。思わず見とれていた自分にはっとして、目をそらす。
「うるさいわね」
ふいとそっぽを向くと、眼下には浮浪者が幾人か、路上で襤褸をまとって寝ていた。ふと、物悲しい気持ちに襲われる。
「……あたしも、ああなってたのかもしれないのよね」
ルカは有希の言いたい事を察したのだろう。「そうかもな」と言う。

「だが、お前の瞳の色は珍しいからな。浮浪者になるよりも売られているんじゃないか？」
相変わらずつっけんどんに、キツイ事を言われる。だが、それが何よりも真実に近くて、思わず笑える。
「売られるって。イシスみたいな変態狐に？」
「それか、誰かが言う「底意地の悪そうな人」にな」
あの兄様の事？　結局似たような状況になるじゃない。と、笑う。
「どうせ拾われるなら、どっかの第四王子様に拾われたいけどなー」
ぽつりと呟く。ルカが自分を見ているのがわかる。けれど、恥ずかしくて見返す事が出来ない。きっと真っ赤になっているだろう。だってこんなにも、あつい。
話をそらすように、空を見上げる。
「ほし、きれいねー」
この世界で、自分が置かれている境遇が、どんなに幸せなものだろうかということを思い知った。今まで両親のもとで過ごしていたあの生活が、どんなに幸せなものか、狂おしいほどに渇望している。
明日、もしかしたら自分が死んでしまうのではないかと思うと、何もかもが惜しくなってくる。それはそれは、泣きたいほどに。
有希がごちゃごちゃになりそうなほど感情を持て余しているというのに、星は何もしらない顔をして煌めいている。有希が色々ごちゃごちゃ考えているのに、知らない風に涼しい顔をしている、隣に座っている青年にそっくりだと思った。
どこかでまだ、石を切る音がしている。こんな時間まで働いていることに、少しだけ心が痛む。
音の聞こえるほうをぼんやりと見ていると、きらりと光るものが視界にはいる。見ると、ランプの光に反射した、有希の指輪だった。
（契約の証……か）
そういえばこの契約も、あの底意地の悪い兄への嫌がらせでしたものだったな。と、思い出す。
「ありがとね」

その契約がたとえ、有希のためでなかったとしても。
「契約してくれて。嬉しかった」
にっこりと微笑む。やっとルカの顔を見る事が出来た。でもなんだか今生の別れみたいだなぁと思う。
「……拾ってやる」
「え？」
ふいとそっぽを向いた顔が、ぽつり言った。
「またどこかに落ちたときは、俺が拾ってまた契約してやる」
ルカは遠いどこかを見ている。この青年が何を思っているのか、有希は出会ったときからさっぱりわからない。
「お前と契約した事。――軽いはずみでした事だが、後悔はしていない」
そう言った綺麗な横顔に、有希は見惚れる。きゅうっとしぼられるように心臓が痛む。
（なにこれ）
どきどきと心臓が高鳴る。何故か恥ずかしくてルカの顔を直視することができない。嬉しいはずなのに、何故か泣きそうになる。
（なにこれなにこれなにこれ）
自分の感情についていくことが出来ない。そして、視線が絡むルカに対して「見ないで」と思ってしまう。
「ふ、ふざけないでよ」
ごちゃごちゃした感情が、何もかもをわからなくさせる。自分が嬉しいのか、悲しいのか、後悔しているのか、寂しいのか。
「後悔してないとか。そんな風に言わないでよ」
（意味わかんない）
気が付けば、目からボロボロと涙が零れていた。
「契約してよかったって、言いなさいよ」
ルカが微笑んでいた。見たこともない笑顔だった。
「そうだな。退屈せずに済んでいるし――契約したのがユーキ、お前で良かった」

（何で笑うのよ。なにその言い草）
また心臓が跳ねる。ざわついたままの心は落ち着く事を知らずに飛び跳ねている。
「――バカルカ」
思わず笑えてきた。なんだか胸のつかえが取れた気がした。
それと同時に、泣きたいほど嬉しかった。

22

ナゼットがティータの眠るベッドに座り、ティータの寝顔を見ながらちびちびと酒を飲んでいた。
アインはそんな二人をみながら、所在なげに突っ立っている事しか出来なかった。
ルカがティータを連れて行くと言ったとき「ああ、やっぱりか」と漠然と思った自分が居た。
最初から、ルカは有希を危険に晒すのを嫌がっていた。フォルに居たときも、少女が主だと知られていなければ代わりを立てただろう。
普通の人なら幼い少女を連れ歩くのを嫌がるのは普通なのだろうが、アインの主は普通ではなかった。
正直に言って、変わってしまった。と思う。
幼い頃からルカを見知っている人たちには素で接してくれるが、それ以外の人間は道具としてしか見ていなかった。
間諜などでルカに詰め寄ってくる女の姿が昔あった。その時には、アインの中にトラウマを残すようなやりかたで女を罰した。
（なのにあの子はあんなにも軽々と）
瞳の色が変わっている以外には、何の変哲も無い子供だ。一時期はアインも魔女ではないか、間諜ではないかと疑った時期もあったが、どうやら杞憂のようだった。
（いや、何も変哲が無いからなのかなぁ）
彼女は幸せそうだった。――少なからずとも、幸せな家庭に育ったのだろう。人を疑う事を知らない。知らないものにはトコトン興味を示して「これはなに？」と、首を傾げてくる。幾度か物を教えると懐き、ことあるごとに話し掛けてきた。
終わり無く続いている戦争に疲弊した場所では、彼女のような人間を育てることは出来ないと思う。

ナゼットがふと動く。ぼんやりと考え事をしていたと我に返る。
寝返りを打ったティータの額に掛かった髪を、ナゼットがそっと払っていた。
数刻前は泣き叫んでいたティータだが、今は寝息を立てて安らかに眠っている――ナゼットが薬を飲ませたのだ。
アインは何も出来なかった。久しぶりに会う事ができた幼馴染が。普段あんな強気に振舞っている彼女が。「ルカート様」と震える唇からつむいだ彼女に、なにもしてやれることがなかった。
どうする事も出来なかったのだ。間諜を雇えば暗殺され、袖の下を入れようとすると逃げられ、あらゆる手を尽くしたが、謀ったかのように全て見通されていた。
だから明朝の特攻も、本当は罠なのかもしれない。
そう思っていたが、どうする事も出来なかった。ダンテを救わなければ、本当にリビドムは終わってしまう。
それは、ルカが言った言葉だった。ルカは国を再び三つに分けようとしている。
――罠だとわかっていても、行くしかないだろう。
本当は苦しいだろうその言葉も、いつもと変わらない無表情さで言ってのけた。彼はきっと、そうすることでアインが安心するのを熟知しているのだろう。
「お前にも、迷惑かけたなぁ……」
しんとした静寂のなかで、ぽつりと零れた言葉が響く。いつのまにかナゼットがアインを見ていた。
「どうしたんですか突然」
苦笑いしてみせると、大柄な身体がしゅんとすぼまってゆく。
「いや、オヤジのためでお前にも危険な目に合わせちまって……」
「何言ってるんですかもう」
むしろ腕力の無いアインを危険な目にあわせまいと奮闘していたのを知っているから、感謝の気持ちしか浮かばないというのに。
「嬢ちゃんにも、悪い事させちまったなぁ」

遠い目はどこかを捕らえている。ナゼットが何を考えているのかが手に取るようにわかってしまう。
「――でも、良かったですね」
嫌味でもなく、純粋に思った。大切な大切な妹が死地に行かなくて済んで。
「……ああ、いっくら感謝したってたんねぇよ」
苦々しい顔をして、ナゼットは俯いた。
アインとナゼットは、罪を犯した。ティータを護りたいが為に、まだあどけない、あの幸せに満ち溢れている少女を差し出した。
その証拠に、彼女が行くと言い出したとき、二人は何もいえなかった。ティータを連れて行くといわれたとき、あんなにも心がざわついたというのに、彼女のときは逆にざわついた。
――何も言わないでくれ。
心でティータに告げていた。だが、ティータは有希には行かせられないと泣き叫んだ。
止める事をしなかった。
それが、二人の犯した罪。その代償として天使のような笑顔と、えもいわれぬ程重たい空気を手に入れた。
アインはナゼットとは反対側に座り、ティータの寝顔を見つめた。
「本当に、良かった」
その呟きは、共犯であるナゼットの耳にだけ届いた。

こうして手を繋ぐのは何回目だろう。この世界にやってきたときに、一番最初に触れたものだった。
ルカは仏頂面で何を考えているのかいつもさっぱりわからなかったが、いつも手を差し伸べてくれて、手を握ってくれた。それだけで、とても安心してしまうのを、なんとかなるかもしれないと思ってしまうのを、この人は知っているのだろうかと見上げる。
繋がれた冷たい手が、じんわりと汗をかいている。だけども外す事は無く、しっかりと有希の手を握っていてくれている。

牢という名の塔に入った。塔の上は作業場で、地下が牢屋になっているらしい。
二人は入り口で荷物検査をされたので、食材の入った麻袋以外、何も持っていない。
持っているのは、麻袋と有希の懐に隠れている騎士証だ。
何に使うのかと問うと「ダンテ殿の偽者が現れるかもしれんだろう」そう言って、有希にダンテの主であるアンの指輪を持たせた。指輪はブレスレットとして、腕に通してある。
目の前には、たいまつを持った男が黙々と階段を降りてゆく。それを追うように二人も階段を降りる。
光においていかれないようにと焦ると、足元がもたつく。
足元がおぼつかない有希を、転ばないようにとしっかりつながれている手が、なんだか暖かい。
薄暗く静まった階段は、ひたすらに足音だけを響かせていた。
有希の心はとても凪いでいた。昨晩あれほど取り乱したというのに、一睡もできなかったというのに、とても穏やかな気分だった。
睡眠時間が無いため指先は冷えていたが、繋いだ手の方が冷たくて気持ち良い。
もしかしたら自分には、危機感が足りないのかなぁなんて考え事が出来るほどの余裕があった。
（それもこれも、ルカが居るからかなぁ）
このてのひらが頼もしいから、危機感を覚えないのだろうか。盗み見るように見上げると、たいまつの灯りに照らされた綺麗な横顔があった。
有希の視線を感じたのか、視線が合う。
内心でうわぁと焦り、慌てて視線を外す。脈が速くなって顔が熱くなる。
きゅっと、握る手に力が入った。
階段を降りきると、見張りの番兵が居た。そして、案内人が「こ

こだ」と言うや否や、ルカは素早く案内人に手刀をかまし、声をあげようとした番兵も締め上げた。低い唸り声と共に、男は気絶した。
ルカはふぅと一息つくと、牢屋を見やる。有希はしばらく男達が動かないか見つめていたが、ルカにならって牢屋を見る。
「すごい……」
牢屋はとても広かった。独房のような場所が沢山ある。とても一目でダンテを見つける事は出来ないだろう。
「ユーキ、騎士証を」
「あ、うん」
てきぱきと指示するルカに有希は頷いて、服の下から騎士証を取り出す。
ブレスレットに繋がれた指輪を垂らして、動いた方向にルカが走って行ってしまった。なんだか胸がざわざわして、有希も走って追いかける。
左右を確認しながら走っているルカに、囚人たちが声をかける。それはうめき声であったり野次であったり、叫び声であったりした。
その度に地下牢の音はこだまして、更に有希の不安を掻き立てる。
置いていかれないようにと走っていると、ルカがぴたりと止まる。
「ダンテ殿……っ」
牢の中を見ると、少し痩せた壮年の男性が茫然として座っていた。
どこかを見ていた視線はルカを捕らえると、途端に驚きで目が開いた。
「ルカ君……」
どうしてここに。そういう言葉を孕んだその声に、ルカはてきぱきと動く。
「話は後です。いずれ見つかります。早く出ましょう」
そう言うと、鍵で牢を開ける。
「動けますか？」
「あぁ、大丈夫だ」
あまり大丈夫ではなさそうだったが、だからといってどうするこ

とも出来ない。それをわかっていたのか、ダンテは力強く頷く。
「ユーキ、お前も大丈夫……」
振り返ったルカは固まり、有希の胸元を凝視している。
（え、何？）
有希も俯いて自分の胸元を見やる。そこには、何かが突出しているのか、何かが服を押し上げていた。
「なにこれ！」
慌てて拭くの襟を引っ張り覗き込む。そこにあったのは、浮遊している指輪。
「……え？」
取り出してみても、その指輪は宙に浮いたままで、その指輪の示す先は、ダンテの居た牢の向い。
住人を見て有希は更に驚いた。老齢の男性の右手中指が、きらきらと光っていた。
「どういうこと？」
老人は痛々しいほどに頬が痩せこけていた。遠目から見てもやせ細っていて、なのに眼光だけ鋭いのがアンバランスで恐い。
「お前……」
「え？　何？」
近寄ろうとしたところを、ルカに肩を掴まれて止められる。
「ルカ」
「お前……その指輪はどうした」
「どうしたって……」
（このネックレスは）
――これ、オレが唯一あっちから持ってきた物なんだけど、何か困ったことがあったら使って。肌身離さないでね。
懐かしいな。と、暖かな気分になる。いつまで経っても娘離れしなくて、よく抱っこされたなぁ。
きゅっとその指輪を握る。
「パパ……父親のよ」

老人が柵を掴んで叫んだ、
「カーン様！！」
その声は響き渡る。有希はびっくりしてすくむ。
「ああ！　カーン様。やはりあなたは生きておられたのですね！
このガリアン、一日千秋の思いでこの日を、この日を待ちわびておりました！」
がしゃがしゃと柵を動かすその様はまるで狂人のようで、恐くてルカの服を掴む。
「ガリアン？」
ルカが眉をひそめる。聞き覚えがあるのだろうか、ルカはこの人を知っているのだろうかと見上げる。そこには、いつもと同じ何を考えているのかわからない、ただただきれいな顔があった。
「……ルカ君、彼も連れて行ってはもらえないだろうか」
ダンテが言う。随分衰弱しているように見えるのに、声はしっかりと強い。
「無理は承知している。だが彼は、ガリアン殿だ」
ルカは神妙に頷いた。有希には誰かわからなかったが、快斗と関係のある人なのだろうかと、白髪の老人を見つめた。

23

有希はダンテの手を引き、ルカはガリアンの肩を抱えながら来た道を戻る。
行きにあった灯りはどこにもなく、ただただ暗闇を急いで上る。
しんとした空気が一瞬をいつまでも長く感じさせ、有希の心は混乱するばかりだった。
（ティータが言ってた。指輪は引き合うって）
快斗から渡された指輪が、老人と引き合っていた。ということは。
（あのおじいさんは、パパの騎士なの？）
更に、ルカもダンテもガリアンのことを知っている風だ。
（とにかく、ココを出なきゃ）
いつ見つかってもおかしくない状況で、そんな悠長なことは考えていられない。
握った手に汗が滲む。心臓がばくばくと躍動して、呼吸も荒くなる。
（もうすぐ外だ）
階段の終わりに着いた。扉の取っ手に手を掛けると、ルカに制止された。
「なに？」
外にはナゼットが居る。なのに何故止めるのだろうか。
「ナゼットは扉を開けて待っているはずだ」
ふと考える。
もしもナゼットが見つかってしまっていたら、姿が見えないはずだ。でも、入り口にいてくれるなら、有希たちに見えるように居るはずだ。
「……あ」
「やられたな」
どうりで効率よく進むはずだ。と、しれっと言われる。

「ど、どどどうすればいいの？」
「落ち着きなさい」
ダンテが有希の手をきゅっと握って言う。
「……突破するしかないだろう」
ルカがぽつりと言う。驚いて見上げると、老齢の二人も同意していた。どうやら有希に逆らう権利は全くなさそうだ。
「……何も考えずにとにかく突っ走れ」
暗闇の中でも、慣れた目がルカの瞳を捕らえる。しっかりと頷いて、扉から距離を置く。
ふと、手が握られる。見上げると、扉を見据えている綺麗な横顔があった。
「行くぞっ」
言うと、皆往々に走る。扉にぶつかるとそのまま押し開ける。
（まぶしい）
朝日がちょうど目にかかり、有希の視界が一瞬ぼやける。
「出てきたぞ！！」
「かかれ！」
ルカが予想した通りに、扉の前にはぐるっと囲んでいる人々の姿があった。みな手に持った凶器が朝日できらめいている。
とにかく走った。かつて無いほどに大股に、そして真剣に。
繋げた手がぴんと引っ張られる。それと同時に反対の腕も伸びる。
ルカがガリアンと有希、有希はダンテと手をつないでいた。二人はどうしても走るのが遅い。
真っ向から対峙して、突っ切るのは危険以外の何物でもないじゃない。そう思った直後、目の前の茂みから、ナゼットが現れた。
「ルカ、オヤジ、受け取れ！」
そう叫んで何かを放り投げる。ルカは更にスピードが上がり、有希と繋いだ手が離れた。同時にダンテの手も離れる。
ナゼットは投げたと同時に走り出す。手には大刀を携えている。
「嬢ちゃんはこのままっすぐな！ティータが居る」

有希は頷いて、男達に向かって走る。
咆哮を上げると同時にナゼットは大刀を横に大きく振り、有希に剣を振り上げていた幾人を簡単に殴り飛ばした。
傍目に、大刀が身体にめり込むのが見えた。
「ありがとう！」
そう叫んでナゼットとすれ違う。
左右からは男の野太い悲鳴が聞こえる。それを意図的に聞かないように、有希は精一杯走り抜ける。
しばらく走ると、有希を呼ぶ声が聞こえた。そちらを見ると、目立たないようにと頭からすっぽりマントを被ったティータとアインが居た。
「無事なのね！」
頭から足元までじっくり検分されて、ティータに抱きつかれる。
「ふ、二人も無事みたいね」
「ええ、僕等は足手まといですから」
近くで馬の鳴き声が聞こえる。
「馬を繋いでいるの？」
「ええ、皆が戻ってきたらすぐに行けるように……」
なら、荷物も全部あるのね。そう言うと有希は自分の荷を解き、アーチェリーケースを出した。
「ユーキ！？　どこにいくんですか！」
「あたしも手伝ってくる！」
「無茶ですよ！」
聞かずに有希はまた走り出した。

剣を振り上げて声をあげる男の鳩尾に膝を埋めて、倒れた足を切る。
ルカはこめかみから汗が流れるのを感じ、そのまま剣を翻して背後で構えている男の腹に剣を突き入れる。
男は白目をむいて倒れた。

息が荒くなるのを感じたが、休む間は無く敵はルカ達を襲う。
（何故、こうも多い――）
牢破りが見つかることは見当がついていた。だが、いくらなんでも人数が多すぎる。
（それに、強い）
その辺りの犯罪者にしては、こなれ過ぎている。それに団結力もある。
（どこかの小隊か）
五十人はいただろうか。
「うわぁー！」
大声を上げてかかってくる男の剣を避け、腕を切りつける。男は一転して悲鳴を上げて転がりまわっている。
「死にはしない」
言い捨てて、次々と切りつける。
ふと、遠くで男が悲鳴をあげて倒れるのを見た。その肩には矢が刺さっている。
「――まさか」
ルカは茫然と呟いた。

「やった」
有希は内心でガッツポーズをした。
嬉々として次の矢を矢筒から抜く。アインにお願いして買ってもらった矢は、何度も練習したお陰で滑りが良い。
「次、次っと」
矢を引いて狙いを定める。狙うのは、肩口。
（人を殺すのは嫌だけど、せめて戦力を削ぐことが出来れば……）
面前に出てしまえば、自分が役立たずなのは重々理解している。だけれど、こうやって後方から支援することならできる。
弓を構えて、キリキリと矢を引く。
一度目を閉じて、弓のしなりを感じる。

（よし、いける）
目を開き、狙いを定めて放つ。矢は綺麗に狙った男の肩口に刺さった。
グローブをつけた右手をきゅっと握る。
「次っ」
構えて矢を引いて、深呼吸をして目を閉じる。
次に目を開いたとき、目の前に人の足が見えた。
「え」
驚いて小さく声を上げると、頭上から野太い声が聞こえる。
「卑怯者の狩人はどこだ！」
ココか、と、有希の真横に白刃の剣が刺さる。
（殺される）
身体がすくんでしまって、動かす事ができない。ああ、見つかってしまったと、頭のどこかだけが冷静に事実を理解している。
そもそも、人を射るなんて思う事がいけなかったのかな。なんて、変に熱が冷めてしまった。
目を閉じて静かにしていると、男の悲鳴が聞こえて、男は倒れた。
「……なんで？」
自分の足元に流れてくる血を、茫然と眺めていると、頭上から声が聞こえた。
「矢の流れから、どこから放たれているか簡単にわかるものだぞ」
ルカの声だった。顔をあげると、血で汚れた後姿が目に入る。
「ルカ……」
「援護を頼む」
言って、ルカはまた走り出した。幾人かを切りつけると、有希から近いところで戦闘をはじめた。
ありがとう。その声はルカの耳に入ることなく消えた。
有希は矢をきゅっと握って、また狙いを定めた。

24

軍人ではない、契約騎士が集うというのはすごいことだと、アインが興奮しながら言った。
「大体、契約騎士は主に仕えるものですからね、集団で行動することは滅多にないんですよ」
だから被害もあまり無く勝てたんですね。アインは興奮気味に言った。
あの後、惨状と化した牢の入り口はしんと静まった。
立っているのは四人だけで、あとは皆、息絶えたり負傷したりとで倒れていた。
ナゼットが疲労困憊しているガリアンを抱えて走り、馬場まで来て馬に乗って逃走した。
それから数時間、林の中で一休みしていた。
男性陣は皆、どこかで会議をしている。有希とティータは二人でナゼットの甲冑を拭いていた。
「でもユーキが突然飛び出したからびっくりしちゃったわ」
驚いたように言うティータに、ふふっと笑う。
「なんかね、後方支援ならできるかなーって思ったら居てもたってもいられなくなっちゃって」
少しだけ恥ずかしくて頭を掻く。その姿を見て「やだ、お兄ちゃんの真似しないでよ」と、ティータに笑われた。
こびりついた血はなかなか落ちなくて、水で濡らした布で一生懸命こすった。
（なんか、嬉しいな）
半人前な見た目がある手前、あまり大人扱いされた事がなかった。今も大人扱いはされていないが、戦力外ではないという自信が、有希を強くさせていた。
自然と、甲冑を拭くのにも力が篭る。

（アーチェリー、やっててよかったな）
幼い頃からずっとやっていた。苦しいときも、悩んでいるときも、嬉しいときも、いつもいつも弓と一緒に居た。
成長が止まってからは表立って行う事がなくなったので、またこうやって活躍できるのが嬉しかった。
さわさわと、先ほどとは打って変わって心地の良い気分だ。
天高くのぼった太陽は、木々の葉を越えてやわらかく降り注ぐ。
梢は耳にやさしく、心に響いてくる。
「ねぇ、何か聞こえない？」
突然訝しげにティータが言う。
「え？」
有希が耳を澄ませて目を閉じる。
（人の泣き声だ）
小さな子供の泣き声が聞こえる。立ち上がって、声のするほうに走る。
「ユーキ！」
止める声も聞かずに走る。ややもすると、座り込んで泣いている男の子の姿があった。
「おかあさぁあんっ」
「ねぇ、大丈夫？」
近寄ると、転んで膝をすりむいたのか、膝元についた土に血が滲んでいるのが見えた。
泣きじゃくっている男の子に、有希は微笑んで言った。
「大丈夫？」
男の子が有希を振り返る。有希と目が合うと、ぴたりと泣き止んで恐いものでも見るかのような目をした。
「ああ、ちょっとヘンな色だけど、恐くないよ」
（ちょっとへこむ……でも、しょうがないか）
にっこりと微笑んで見せて、頭を撫でる。
「あんまり男の子が泣くもんじゃないぞー」

立ち上がって、手を差し伸べる。
「お姉ちゃん達、あっちで休憩してるんだ。手当てしてあげるからおいで」
男の子は頷くと、有希の手を握った。

有希が歩いて戻ると、有希の姿に気付いたティータが立ち上がってこちらを見ていた。
そのすぐ隣にはルカ達も居る。もう話し合いは終わったのかと揚々と歩く。
「ユーキッ」
ティータが不安げな顔をしている。
「男の子がね、そこで転んで怪我してたの。手当てしてあげようと思って」
にこにこと笑っていると、ルカが有希の前まで歩いてくる。男の子に用があるのかと思ってみていると、ルカは手を振って有希の頬を叩いた。本気ではないだろうが手加減もされていない。パン、という音が有希の耳に入る。
「ルカ君！」
耳鳴りがする。叩かれた頬が熱を持ってジリジリと痛む。
何故自分が叩かれたのかわからなくて、有希は赤くなった左頬に手をやり、呆然とする。
（なんなの？）
一体何をしただろうか。何か叩かれるようなことをしただろうか。そう思うと今度はふつふつと怒りが込み上げてくる。
「何するのよ！」
「いい加減にしろ」
睨むと、ルカは仏頂面だがとても怖い顔をしていた。その顔がとても怖くて、有希はたじろぐ。
「さっきから何なんだお前は。訳のわからない我儘を言ったかと思うとふらっと戦場に現れ危険な目に遭遇する。挙句の果てにガキが

ガキを拾ってきて、世話もろくろくできないというのにどうして足を引っ張るんだ」
足を引っ張る。その言葉が有希に槍のように刺さる。よかれと思ってやっていたことが、実は全て迷惑だったというのか。
（ばかみたい）
それなのに一人前のように振舞ったことが嬉しく思ったり、良い事をしたと思っていた自分が、急に恥ずかしくなる。皆も、子供も居る前でこんな羞恥を晒して、恥ずかしいと同時に消え入りたくなった。
目頭がじんと熱くなる。泣いちゃ駄目だと自分に言い聞かせても、スイッチの入ってしまった涙腺は止まりそうにも無い。
その場から逃げ出したくて、踵を返して走りだす。ティータの有希を呼ぶ声が聞こえたが、振り返って返事をする事が出来なかった。
木にぶつかりそうになると曲がり、そしてまた情動に任せて走る。抱えた恥ずかしさを消し去りたくて、この物悲しさを拭い去りたくて、息が切れても、わき腹が痛くなっても、有希は走りつづけた。
太ももが痛くなって、いつしか歩くようになって、それでもいくらか歩くと疲れ、有希はその場にぺたんと座り込んだ。火照った身体にひんやりとした感触がやさしくて、気持ちがいい。
「……っふぅ……」
涙がポロポロと零れる。拭っても拭っても湧き出る涙に「なんなのよぉ」と悪態をついた。
（やっぱり何も変わらないまんまだった）
こっちの世界にやってきて、少しは変われたと思った。
何の引け目も感じずにのびのびとすごせていたと思う。それもこれも、きっとルカのお陰だということもわかっていた。
「だから、役に立ちたかったのにっ……」
ぐずぐずと、誰に言うでもなく弁明してしまう。
（足を引っ張ってるって、言われちゃった）
つまりは役立たずという事ではないか。――昔と変わりなく。

（もう、一緒に居られないのかなぁあ）

走って出てきてしまった。沢山走りすぎて、自分が今どこにいるのかすらわからなくなっている。きっとこんな役立たず、誰も探しにこないよね、と自嘲して、それからまた泣いた。

めいいっぱい悲しい思いをしたら、元の世界に戻れるように仕組んでくれてたら良かったのに。そう神様を憎みながら。

25

ルカはため息を一つ吐いた。ティータが真っ赤な顔で怒っている。今にも噴火しそうで、手をつながれた少年が困惑している。

「ルカ君！追いかけて！」

案の定ティータの口から出た言葉は、有希を追えという言葉だ。

ルカはもう一つため息をついた。

「その前に、皆に聞いておいて欲しいことがある――」

ルカは一人、丸太に腰掛けて、ぼんやりとしていた。

ナゼット達はルカの話を聞くと驚いて、慌てて有希を探しに行ってしまった。

ため息を一つ吐く。

きっと酷く傷つけただろう。自分の主人だというのになじった事を、少しだけ後悔していた。

目にいっぱい涙をためて、それでも必死にこらえていた姿が脳裏に浮かぶ。頬が少し赤くなっていた。

（だが、いくら主人だとしても、本人に危機感が無ければこちらの守る術がないだろう）

そもそもルカには、何故有希が戦場に現れたのかわからなかった。

（確かに、援護は心強かった。弓の筋も良い）

だが、彼女はルカの同僚でもなければ臣下でもない。むしろ自分が守るべき主人である。

あの時は自分も焦っていて、つい援護を頼んでしまった。

（失態だ）

主人である彼女に――それも少女に、守られたことがルカにとっては不服だった。

（あの人は決してそんなことしなかった……）

脳裏に華奢な姿がよぎる。やわらかなトーンで名を呼ぶ声。

ふわりと鼻にやさしい花のような香り、病的なほど白い肌――。
「ルカ君！」
突然呼ばれてはっとする。そこには仁王立ちしたティータが居た。
「……まだここにいたの？」
返事をしないでいると、ティータは「まったく」と呟いた。
「ルカ君が怒るのも仕方が無いけど、どうしてユーキが戦場に行ったかわかる？」
わかるわけがない。という顔でティータを見ると、彼女はにっこりと微笑んだ。
「ユーキ、自分のことよりも人のこと優先しちゃうのよね。私が牢に行くって言ったときもそう。アインがフォルに置いていかれそうになったときもそう。――そんな子が、みんなが戦ってる時に、自分ひとりだけ逃げるなんて事、出来ると思う？」
ルカ君も気付かないだなんて。一体ユーキの何を見ていたの。と、少し呆れたように言われる。
「まぁ、しょうがないわね。どんなときでも相手を優先させる。それがユーキの良いところなんだもの」
（わかっている）
そんなこと、ティータに言われる前から。と、内心で悪態を吐く。
あの少女はいつでも他人のために動き、思いやっていた。オルガがルカに無理を言えば、ルカよりも憤慨していた。
いつかの真夜中も、ほとんどのことは忘れているが、自分を心配して見上げる瞳があったことだけは覚えている。
そして気が付けば、自分も彼女のために奮闘しているのだ。――先ほども、有希にダンテを見つけさせればよかったのに、番兵を絞め上げている自分がいた。
ふ、と笑みが零れる。
（あのじゃじゃ馬が……）
今ごろはどこかで自分のことをなじっているのだろうか。それとも、しおらしく泣いているだろうか。

「ルカ君！　謝って！」
顔を上げると、ティータは顔を紅潮させていた。
「あぁ、わかっている」
どちらにしても、あの小さな存在が自分の主人であることは変わらない。なじられても、泣かれても、傍にいる事が自分の使命だ。
ルカは指輪を外すと、懐から騎士証とチェーンを取り出した。

泣きたいだけ泣くと、悲しい気持ちも涙と共に流れ落ちたのか、少しだけ冷静になれた。
（目……痛い）
泣きはらした瞼は熱を持って重く、頭にも鈍痛がする。
憂鬱な気分だが、心はすっきりしている。
「謝んなきゃ……」
ルカにごめんなさいとありがとうを伝えなければ。
（だけど、走って逃げたし、今更どういう顔したらいいのかわかんないよ）
謝ったとしても、もう一度一緒に行くことを否と言われてしまったらどうしよう。そんなことを考えると、どんどん怖くなる。
（そしたらあたし、どうしたらいいんだろう）
今度こそ、売り飛ばされて襤褸をまとうような生活をする事になるのだろうか。
「いやいやいやいや、それは嫌！　土下座してでも連れてってもらおう」
いっそアドルンド城のメイドに雇ってもらおうかというところまで考えると、なんだかなんでもなるような気がした。
「よし、行かなきゃ」
ティータはきっと探してくれてるだろう。立ち上がって土を払う。すっかり冷えてしまった。
「おーい！」
誰か近くにいるだろうか。大声をあげてみる――しかし反応はな

い。
「随分走ったもんなぁ……」
どうしたものだろう。と、数度瞬きをする。泣きつかれて、少し眠い。
一歩、二歩と歩きつつ、時折「おおい」と声を出す。少しだけ傾いた太陽が、世界を朱に染める。
（だいたい、どうして騎士証がないと騎士を探せないのよ）
指輪を睨みつけるがどうしようもなく、しかしその鬱憤の晴らし方がわからずに手を振り回す。
「だいたい、ルカの方から見つけに来なさいよね！　いくら、いくらあたしが悪かったとしても手をあげるなんて短絡的すぎるもん……」
最後は尻すぼみになりながら、ぶつぶつと文句を言う。けれど、彼がしたことが正しいということは痛いほどよくわかっていた。
（所詮、十歳のガキンチョだもんね……）
「でもガキンチョならガキンチョで、保護者なら迎えに来いっつぅの！」
辺りを見回しても木々のみで、途方も無い気分になってきた。
（迷子は動くなっていうけど）
自分から迷子になりに行った場合はどうしたら良いのだろうか。うぅんと考えていると、左側の茂みが動いた。
「誰！？」
びくりと身体が跳ねる。有希の知っている人だろうか。それとも追剥だろうか。
がさがさと茂みが動いたかと思うと、少年がひょっこりと顔を出した。
「あ！　少年！」
ほうっと息をついていると、少年は茂みから抜け出して有希の傍に来る。
「お姉ちゃん……」

膝を見ると、誰かが手当てしたのだろうか、包帯がきちんと巻かれている。
「どうしたの？　……もしかして、あたしを探しに来てくれたの？」
少年がこくりと頷く。「お姉ちゃんに、僕、助けてもらったもん」
そう言ういじらしさに、有希は嬉しくなる。
「ありがとうね」
「……みんな、こっち」
少年がおずおずと手を伸ばす。有希はにっこりと笑ってその手を取った。

木々の隙間を縫ったように、六畳ほどの木々の茂っていない場所に出る。
そこで、少年が立ち止まってしまった。
「どうしたの？　ここになにかあるの？」
しゃがんで、少年と目線を合わせる。目が合うと、悲しそうな顔をしてふと伏せてしまう。
「お姉ちゃん、ごめんなさい……？」
（ごめんなさい？）
言葉の意味がよくわからない。少年は自分の服を両手でぎゅっと握り締めている。
「どうか、したの？」
「おかあさんが、おかあさんが……っ」
少年はぐずぐずと泣き出してしまった。
「おかあさん、たすけたくてっ……おねえちゃ……さがせって」
「……お母さんを助ける？」
首を傾げていると、人の足音と共に、とても見たくない顔を見つけた。
「――つまりね、お母さんが捕まってしまって、そのお母さんを助けるためには、紫色の目をしたお姉ちゃんを連れてこなければならない。そうしないと、お母さんも僕自身も、殺されてしまうから」

そこには、心底愉しそうに笑っているオルガの姿があった。そしてその手は、縛られた女性の縄をつかんでいる。
（何を）
「――アンタ、何でそんなことするのよ」
沸きあがる憎しみに、有希の中から一番低い声が出る。趣味の悪いその話に吐き気がする。
「何でだって？　面白いことを聞くね。答えは決まってるじゃないか――いらないから。いらないからだよ。コレも、コレの母親も」
そう言うや否や、オルガが剣を抜き、振り落とす。少年の母親と思わしき女性は、背中から剣を貫かれて、胸に剣が生える。すると壊れた人形のようにカクカクと動いて、そして倒れた。オルガは剣を素早く引き抜くと数歩歩き、少年に剣を落とした。膝に包帯を巻いた少年は、もう包帯じゃ間に合わないほどの怪我を負って息絶えてしまった。
「あ……っ」
一瞬の出来事だった。
目の前で血を吹いて倒れた少年に、有希は声にならない悲鳴を上げる。喉が酷く痛んだが、声を止める事ができなかった。
「ホラ、これでどうでもよくなった」
気持ち悪い生き物はいなくなったよ。そう言う声は、ひどく愉しそうだ。
「……なんでこんなところに居るのよ。何でこんなことするのよ！　どうして？　今は戦争中なのに、なんでよ、なんで城にいないのよ！」
混乱した頭で叫ぶ。さっきまでお母さんを助けたいと言っていた少年の顔が、目に焼き付いて離れない。
「ああ、戦争。戦争っていう聞こえはいいよね。でもね、実際はただ、リビドムの捕虜を殺し合わせているだけだから、僕の国にもマルキーにも、一切打撃はないよ？」
信じられない事をいうその姿を、あらん限りの憎しみを込めて睨

む。
オルガは有希と同じ目で微笑む。
「いいね、その瞳。ゾクゾクして――殺したくなるね」
「このっ……狂人！」
（底意地が悪いなんてものじゃない。この人は狂ってる。狂ってる狂ってる）
その狂気にあてられて、有希まで狂いそうになる。
「ありがとう、最高の褒め言葉だよ。――だけど、お前はそう簡単には殺さないよ。ぴったりの方法で殺してあげるよ」
「ふざけんじゃないわよ！」
叫んだ瞬間、首に衝撃が走る。貧血のように体中からすうっと血液が抜けるような感覚が走り、そのまま倒れた。
「僕と、マルキーの王子とでね」
そう不敵に笑った声は、有希には届かなかった。
有希の背後には、ガラス玉のような瞳の、人形のような青年が立っていた。

26

日が暮れても、有希を探す事は出来なかった。
ティータは歩きつかれて、棒のようになった足を引き摺りながら宿屋についた。
ルカが何度も指輪をかざした。そして、草むらの中から指輪を見つけた。そばにはガリアンの指輪もあった。そして――
「……ひどい」
ティータはあの光景を思い出し、悲しい気持ちになった。膝を擦って怪我をした少年。名前も聞いていなかった少年の亡骸があった。そのすぐそばに、彼の探していたのであろう『おかあさん』も、無残な姿で倒れていた。
――連れ去られた可能性が高い。
ルカが言っていた。とても苦々しい顔をしていた。そしてアインとルカが残って更に探す事になった。
(あんなルカ君の顔、見たことなかった)
怒ってしまったこと、そして有希が逃げた事。だから、連れ去られてしまった。その事で、酷く自分を責めているんだろう。
「ユーキ……」
途方に暮れてしまった。こんな陰鬱とした世情の中、有希だけはきらきらとして見えた。いつも明るく、楽しそうだった。そんな有希がいなくなってしまった事で、一行は一番星を見失ってしまった。
こんな状態で、有希の居ない状態で帰らなければならないのだろうか。あの味方の居ない城へ。
風呂上りに、タオルで髪の水気を取りながら、ティータはぼんやりとしていた。ここへ向かう途中皆黙ってしまって、とても息苦しかった。
「ちょっと、いい？」
コツコツと叩かれる音と共に聞こえたのはアインの声だ。アイン

はルカと残って、林に残っていたはずだ。
「えぇ、入って」
有希は見つかったのだろうか。逸る心を押さえる。――が、扉から入って来た、がっくりと肩を落としたアインを見て、ティータは愕然とした。
「……居なかったのね」
「うん、複雑だけど小さな林だったのに、見当たらなくて」
少し鼻にかかったその声に苦笑する。ティータと同じで、有希が居ないのが悲しいのだ。
「ルカ様の様子もおかしくて、僕、あまり気に病まないようにって言ったんだけど、あの調子じゃ絶対ご自身を責めてるよ……」
眉尻を下げて言うアインに微笑みかけ、部屋に入るように促す。
「座って。今お茶を入れるわね」
そう言ってアインを座らせる。アインがぐすぐすと鼻をすすっている。その音に聞こえないフリをして、ティータは準備をした。
「……相変わらず、泣き虫なんだから」
いつもそうだった。ナゼットからいじめられたり、ルカにつれなくされたりすると、いつもいつも泣きながらティータの所にやってきた。その度にティータが一生懸命慰めた。
何もかもがめまぐるしく変わっていく中、変わらない確かなものに、ティータは救われている。

何かが燃えつづけている音がする。
ごうごうと音をたてて、真っ赤に燃える炎がゆらめく。
有希の頭の中も、ゆらゆらと覚醒に近づいていく。
「！」
はっと目が開く。
（そうだ、あたし）
オルガを見つけて、あの少年が殺されて、そして何かに殴られて気絶した。――そこまでは覚えている。

身をよじると、身体が動かない。首を動かしてみると、後ろ手は縛られ、足も両方繋がれて、その先には鉄球がついている。
頭にきんと頭痛が走る。拘束具に顔をしかめ、ゆれる炎に目を遣る。
そこには何か道具が置いてある。煌々と火元で焼かれている。
「――やぁ、起きたね？」
聞きたくない声が聞こえて顔を上げると、ゆらめく炎の向こう側に、笑っているオルガの姿があった。
「……さいってーの目覚めよ」
言うと、冷ややかな瞳がくつくつと笑う。
「よくもその状況下で、嫌味が言えるものだね」
（怖くないわけないじゃない）
さっきから、無意識にがちがちと奥歯が鳴っている。
相変わらず黒い瞳は有希に憎しみを込めて見ている。コツコツと足音が聞こえて、有希はびくりと跳ねる。心臓が躍動する。
「ふふ、可愛らしく怖がることもできるじゃない」
見ると、オルガの後ろに誰かが立った。ぬっと現れたその人は、水色の長い髪の毛を束ねて、水色のガラス玉のような瞳でぼんやりと有希を見ている。
「彼はね、マルキーの王子だよ。伝説の魔女の姿を一目見たいって来てくれたんだ」
「あたしは伝説の魔女なんかじゃない」
どいつもこいつも何間違えているのよ。そう吐き捨てると、オルガが大声で笑い始めた。石造りの部屋に、反響して響く。
「おまえは馬鹿だねぇ。何も本当に伝説の魔女じゃなくていいんだよ。――リビドムの王女が、実は魔女だったということさえ伝われば」
「……なによそれ」
あはは、と、オルガは少年のように笑う。そして悪魔のような微笑を浮かべて言う。

「いいよ、教えてあげる。――僕等は今、リビドムの捕虜同士を争わせている。でもねぇ、リビドムの人間って本当に愚かしいんだ。まだ王は生きている、またいつか、リビドムを復興させてくれる。紫の瞳を持った王が、また現れるって」
そうやって死んでいく。お笑い種にもならないよ。侮蔑するような面持ちでオルガが言う。
「だから、紫の瞳を持つ人間を捕まえて、処刑しようっていうの。――伝説の魔女しか紫の瞳を持っている人間は居ないと思ったんだけど、ちょうどお前が現れてくれた。だからついでに、お前を魔女だと騙って、リビドムの人間達を絶望させてやろうと思って」
やさしいだろう。そうオルガは言う。
「……狂ってる！　狂ってるわよアンタ！　それで何が楽しいの？
それで何が得られるの？」
叫ぶ有希を見下して、オルガは冷酷に笑う。
「何がって？　人を殺すのは楽しいけど、僕がやりたいことは違う。――人間以外の物はこの世界にいらないんだ。魔女も、リビドムも、なにもかもいらないんだよ」
そう言うと、オルガは優雅に立ち上がって、有希の前に立つ。そして剣を抜くと、有希の服の胸元を引き裂く。
「――――っ」
怖くて目を瞑ったが、痛みは何も無い。ただ、胸元に頼りない風が吹く。
そのままオルガは、釜の元へと歩く。そして手にしたのは――火に炙られて真っ赤になった、鏝。
「いや……やだ」
がちがちと震えて歯の根が合わない。マルキー王子に助けを求めるが、ガラス玉のような瞳はこちらをぼんやりと見ているだけだ。
「おまえは魔女を、どうやって見分けるか知ってるか？」
「やめて……」
後ずさろうにも身体が動かない。いやいやと首を振っても、赤く

光った鏝は有希に近づく。
「身体に、花の刺青があるんだよ」
歪んだ口元が微笑んでいる。
瞬間、有希の胸元に赤々としたものが押し当てられる。肉の焼ける音と自分の悲鳴がこだまする。
痛い。と思った瞬間には声をあげていた。声にならない、咆哮のような声が。
（だれか、だれか誰かダレカ。――たすけて）
引きつった喉が痛くても止め方がわからず、この痛みからどうやれば逃げられるのか、この肉のこげる匂いからどうやって逃げることができるのか。何もかもがぐちゃぐちゃと巡り、そしてすべての意識を放棄した。

27

宿屋に戻って報告をし、そしてもう一度探しに出かけようとしたルカを、ナゼットが止めた。
「ルカ」
「すぐに戻る」
「ユーキは間違いなくマルキーに連れ戻されている。わかっているだろう」
ルカも理解している。もう有希はこの近くに居ないこと、そして、一人ではぐれたというわけではないことも。
「ならもう一度マルキーに向かう。お前は皆を連れ城に戻れ」
「ルカ！　自分の身分を弁えろ！」
ナゼットがルカの腕を掴む。ルカはそれを乱暴に払う。
「もうこれ以上城を空けるわけにはいかない。それぐらいわかっているだろ」
「ああ、わかっているさ、十分すぎるほどにな」
俺に自由なんてないんだからな。自嘲するようにルカが言う。そんな姿を見て、ナゼットは溜息を一つ吐く。
(何故、こんなにも荒れる)
「とにかく、一度城に戻るぞ。ユーキだってそう簡単には殺されないさ」
ルカは黙ったまま動かない。きっと、自分でもそうするべきでしかないということをわかっているのであろう。
「もう一度俺に失えというのか……」
ぽつりと呟いた声が、玄関で小さく落ちる。
思わずナゼットの動きが止まる。
「ルカ……お前もしかしてまた――」
「ルカ様！　ルカ様！　大変です！」
言いかけた言葉はアインの声に遮られる。

「どうした？」
ルカは平静を取り戻したように振返る。が、アインが一瞬怪訝そうな顔をする。
「ルカ様、何かありましたか？」
「――いや。それより、何用だ」
少し目じりの赤くなったアインは、ルカをみつめて言葉を探す。どう言ったらいいのか考えあぐねているんだろう。
「ルカ様、あの、えっと……」
しばらくすると、意を決したようにきりりとルカを見据えたアインは、こう言った。
「ルカ様に、謀反の疑いが掛かっています」
「はあ？」
思わずナゼットの口から言葉が飛び出す。
「おいおい、アイン、そんな冗談は――」
「冗談じゃありません。魔術士の緊急伝令で飛んできたんです。たぶん近いうちに、書状が届くと思います」
魔術士。その言葉に、アインの言葉を信じる他無くなる。
「僕の方に、ルカ様をアドルンド城に帰還させるようにと連絡が入りました。――何かの間違いだとは思うのですが、行って潔白を証明するほかありません。今すぐ戻りましょう。ティータにはもう荷造りを頼んであります。ダンテ様とガリアン様にもすぐに出立できるようにと準備をお願いしてます」
「だが、どうしてまたそんな疑いが掛けられたんだ？」
アインは目を瞠って、口をつぐむ。
そして、苦々しげに口を開いた。
「……ユーキが、伝説の魔女と騙ったのを、王宮は本気に取ったみたいです。ルカ様が魔女と結託して、魔女を善としないオルガ様を――。って思ってるみたいです」
「なんだそりゃ」
ばかばかしいにも程がある。

しかし、だからといって聞かずにいると、その見解を助長させるような事になるだろう。
「ルカ」
ナゼットは相変わらずの仏頂面を見る。仏頂面だが、長年付き合っているナゼットにはわかる――あれは、悔しがっている顔だ。
「……兄様にしてやられたな」
「ルカ様」
不安げに見上げるアインに、ルカは淡々と答える。
「アイン、城へ戻るぞ。面倒ごとを即刻片付けて、ユーキの奪還に急ぐ。ナゼット、俺とアインは先に行く。他の者を頼む」
「ああ」
言うと、踵を返してルカはナゼットの横をすり抜ける。

有希は真っ暗闇にいた。
真っ暗闇なのに、水色のガラス玉のような瞳と、漆黒の瞳が有希を見つめているのがわかった。
有希は叫んだ。力の限り。
「何がそんなに、憎いの」
返答は無い。
「何がそんなに、悲しいの」
「どうしてそんな目をしているの」
暗闇に問いかけても、返事は帰ってこない。
「ねえ、どうして」
どうして、そんな目であたしを見るの。
そんな遠くを見るような目で、そんな憎むような目で、そんな冷徹な目で、そんな無関心な目で。
「やめて……」
お願いだから。その懇願は暗闇に埋もれて、どこにも響かない。
「そんな目であたしを見ないで！」
どうでもいいなんて顔をしないで。

「お願い……あたしを、見てよ」
矛盾しているということはわかっている。でも、そんな目で見られるなら見て欲しくない。けれど、見られないと自分の存在がわからなくなってしまいそうで。
「ねぇ」
そう言葉をこぼした途端、心臓辺りが火を灯す。火は瞬く間に燃え広がり、有希の胸を焼いた。
「あああああああああっ」
痛みに倒れ、身をいくら捩っても、有希を見る瞳は変わらない。
心臓がギリギリと痛む。
火はジリジリと焼けて、有希の胸元に花のつぼみを写す。

はっとして目を覚ます。心臓がどくどくと躍動している。
（……ゆめ……）
体中から汗が吹き出ている。
起き上がろうと動くと、胸元が痛んで顔をしかめる。
有希の頼りない胸元には、花のつぼみの形に焼かれていた。
（何の花だろう……）
魔女は皆、このような花の刺青が入るのだろうか。むくりと起き上がってぼうっとする。
喉がヒリヒリと痛んで渇いていた。何かを発そうとしても声が嗄れてしまっていて、掠れた吐息以外発せられなかった。
それが、自分がどれだけ叫んだのかということを思い知らせた。
身の焼ける思い。というのは、こんなにも痛いことなのかと。
身体がどこか熱っぽい。それがこの胸の痕が原因なのは言わずもわかっていた。
（……冷やしたい）
胸の痕は、火傷をしたように今でもジリジリと痛む。実際、焼け爛れた部分以外には水ぶくれが出来ている。
（ここ、どこ？）

辺りを見回すと、とても簡素な部屋だ。自分が寝ていたベッドと、傍に小さなテーブルがある。いつかみたケーレの牢屋ではない。
自分は焼き鏝を当てられたとき、あまりの痛みに気を失ったのか。そしたらここはオルガに連れてこられた場所のはず。
（なのになんでこんな、きちんとした部屋に？）
一体自分はどうなるのだろうか。だが、痛みで麻痺したような頭は何も考えられず、ぼんやりとしてしまう。
唐突に、扉がノックされる。有希は過敏に反応して、扉を見やる。
今度はどんな事をされるのだろうかと思うと、冷や汗が吹き出る。
（もう、いや……）
あんな思いはもうしたくない。オルガにも誰にも会いたくない。
外側から鍵でもかけてあったのだろうか。がちゃりと鍵が開けられる音がしたと思うと、控えめに扉が開く。そこから出てきたのは――。
（マルキーの王子）
水色の長い髪を後ろで一つにまとめた青年は、桶と水差しを持って現れた。
呆然としていると、有希が起きている事に気付いたのか、少し立ち止まる。だが、何も写していないような水色の瞳は、翳ることも無く、迷い無く有希の座っているベッドまで歩み寄る。
思わず有希は後ずさる。背中が壁に当たる。そのまま壁にへばりつく。
マルキーの王子はそれに目もくれず、ベッドサイドのテーブルに手桶を置いて、無言で手桶からコップとタオルを出すと、コップに水を注ぎ、残った分を手桶に入れる。
（敵意は、ないのかな）
ぼうっとそれを眺めていると、コップが差し出される。
「え……」
掠れた声は声にならず、有希は不思議そうな顔をして、マルキーの王子を見つめていた。

「ただの水だよ」
ぽつりと言われた言葉に驚く。
（喋れるんだ……）
今まで一回も口を開いているところなんて見たことなかった。相変わらず瞳はどこか判らないところを眺めていた。
彼はコップを持ったまま、別段有希が怯えるのも気にせず立っていた。
目の前に水が現れると、渇いていた喉がさらに欲してしまう。
（だけど、本当に水だけ？）
信じられるはず無い。この人は有希が焼き鏝を押し当てられているときも、ずっとこうやってぼんやりと見ていた。
（人を殺すのにも、躊躇しないのかな……）
だが、ひどく喉が渇いている。欲しい。喉がごくりと鳴る。
「……」
コップをただただ見つめているだけの有希に気付いたのか、そして有希の考えている事にも気付いたのか、ついとコップに口をつけ、ごくりと喉を鳴らすと、もう一度有希に差し出す。
「ただの水だよ」
無機質に淡々と告げられる。疑った事を悲しむでもなく、怒るでもなく、ただ淡々としている。
有希は疑ってしまった事に申し訳ない気持ちを覚えつつ、コップに手を伸ばす。一気にあおると、喉にきんと冷えた水が流れ込む。
身体が水を求めるがままに、有希は飲み干した。
それを無表情に見届けると、今度は持っていたタオルを手桶に浸し、絞って有希に差し出す。
「……？」
「冷やすといい」
驚いて目を見開く。
（なんで？）
どうしてこの人は気遣ってくれるんだろう。

優しさや憎しみなど浮かばない、ただ無機質な人に見える。なのに確実に、やさしい。
だがひりひりと痛む辛さには勝てず、タオルを受け取って、胸元に当てる。ひんやりとしたタオルが火照った箇所を気休め程度に冷やしてくれる。
気持ちいい。心の中で呟くと、さらに淡々とした声が降ってきた。
「君の処刑の日が決まった」
「え」
処刑。今確かにそう聞こえなかっただろうか。
「十日後の朔の日の夕刻行われることになった。――今朝布令が出た。早くて三、四日で前線に情報が回るだろう」
今日の天気は曇り時々晴れ。そんな事を言うような感覚で、有希は宣告された。

28

空の色。というよりも、プールの色のような水色だった。どことなく作り物のような――ガラス玉の瞳。
マルキーの王子が居なくなってどのくらい経っただろうか。有希はぼうっとしてすごしていた。
頭は処刑の事、火傷の痛み、オルガの事、はぐれてしまった皆の事でぐるぐると混乱する。
（だめだ、ぐるぐるする。順番に考えよう）
窓から見える日が、昇りきる頃に、よしと決意して座りなおす。
（まず、なんであの兄ちゃんはあんな所にいたんだろう）
オルガは王位第一継承者で、ずっと城にいるのだと、いつかアインが言っていなかっただろうか。
しかも敵国であるマルキーに。そして、マルキーの王子ともどこか親しげだった。
（戦争中だって言ってなかった？）
本当は仲がいいのだろうか。そう考えて首を振る。
意味がわからない。じゃぁ何のために戦争なんてしているのだろうか。
（だめだ。まとまらない。次、次）
ふと、自分の胸元を見つめる。
快斗から肌身離すなといわれた指輪は、どこかへ行ってしまっていた。
（ごめんなさい、パパ）
なくしてしまった。快斗の指輪も、自分の指輪も。
（ていうか、指輪を「困ったときは使え」って。売れって事じゃなかったのね……）
てっきり、金に困ったときに物入りしなさい。という事だと思っていた。

（これで騎士を探しなさい。とかさ、騎士の探し方とかさ、最初ちゃんと教えてくれてれば、あたしこんなに困らなかったのに！）
いや、もし騎士を探せたとしても、ガリアンは牢屋にいたから無理があったのかもしれないが。
（――そういえば）
快斗は自分に他にも何か言っていた気がする。
（何だっけ）
あの時、快斗の突然のカミングアウトと、ものの五分もたたないうちにベランダから落とされた。そしてそこからめまぐるしく事態が変わったので、ろくろく覚えていない。
（なんか、すっごくファンタジーな発言したと思うんだよね）
うぅんと頭をかかえる。
（こっちでの名前とか言ってたよね。なんだっけ。確か、快斗じゃなかったんだよ）
カーン様。ガリアンはそう言ってなかっただろうか。
（そうそう、何とかカーンって言ってた）
少し思い出したことにすっきりして、そしてはたと気付く。
（そこじゃない、そこじゃないって！　思い出せ春日有希！）
ベッドに転がってうんうんと唸っていると、ふと、耳に懐かしい声が聞こえた。
――もし有紀に力が発現したら、人前でみだりに使ったりしないことを約束して。
あまりにもリアルにその声が聞こえたので、がばっと起き上がる。そして快斗がどこかにいるんじゃなかろうかと何度か見回して、まさかね、と息を吐いた。
（……そうだ、力だ）
言われたときは微塵にも信じていなかったが、この世界はファンタジーそのものだ。魔女も居れば魔物も居る、騎士も魔術士もいるし狐耳の変態男もいる。今更超能力があったっておかしくない。
発現したら。快斗はそう言っていた。ならばまだ自分は発現して

ないんだろう。
（どんな力なんだろう）
騎士のように、強固になるのだろうか。それとも、魔女のようになるのだろうか。いずれにしても、見当がつかない。
（いっそのこと、今ここで発現して、あの窓からぴゅーっと飛んでいけたらいいのに）
窓に掛かったカーテンがひらひらとゆれている。先ほどベランダに出てみれば、そこはとても高く、壁を伝って降りる事はできなさそうだった。
カーテンを裂いて、縄にしようとも思ったが、カーテンにシーツを足しても、地上には足りないと断念した。
ここはどこなのだろうか。見下げる眼下には、山々が連なっているだけで、何もわからなかった。
（結局、あたしは無知で無力だ）
今自分の居る場所も、置かれている状況も全くわからない。
何をすることも出来ずに、呆然としていることしかできない。
右手中指の、指輪が嵌っていた辺りを撫ぜる。そこにあった指輪も、今はもう無い。
本当に、何もなくなってしまった。この世界との接点も、ルカ達との接点も。
「最低だ……」
ぽつりとこぼした言葉はしゃがれていて、それがなんだかおかしかった。
（最低だ）
無知で無力なのに、どう足掻いても足を引っ張る事しかできないのに。
長く一緒にいたはずなのに、年も、趣味も、好きな食べ物も知らないのに。
なのに。
（こんなにも、助けてもらいたがってるなんて）

頭がぐらぐらする。傷のせいで熱が上がったのだろうか。
「最低だ」
熱のせいだろうか、自己嫌悪のせいだろうか。目頭がじんわりと熱くなる。
有希はそのままベッドに倒れ込み、浅い呼吸を何度も繰り返すうちに眠ってしまった。

三国には、明確な境界線が引いてある。山脈だ。アリドル大陸をYの字に山脈が流れている。西をアドルンド、東をマルキー、そして狭い北がリビドム。かつてより幾度となく戦争が起きたが、最終的にはやはり山脈が国境になっていた。
ケーレからアドルンドに戻るには、やはり山を越えなければならない。
ケーレはマルキー最南の町だ。だから、海側を回る事もできるが、いかんせん今回は時間が無かった。
ティータとナゼットには、老体の事も考えて海側を回るように言った。
ルカとアインは、山を駆ける事になった。
途中立ち寄った小さな村の宿屋で、伝令と会った。よほど至急の事なのだろう。近隣の各町に伝令を滞在させていたらしい。
書状には『十日後の朔の日に、アドルンド城で審議を行う』と書いてあった。ケーレからアドルンド城まで、普通に行けば十日ではとても足りない。更に、書状の十日後と書いてあったが、朔月の日はもう九日後になっていた。
――兄様は容赦がないな。
ルカはそう言ってほくそ笑んでいた。有意義な口ぶりに、その余裕を下さいよ。という言葉が、喉まで出掛かった。
（言わなくて良かった）
アインは安堵した。そう笑うルカの目が、全然笑っていなかったからだ。

（いつものルカ様だ）
仏頂面というより無表情で、そして眼光だけが異常に鋭い。それがいつも見ていたルカだった。
最近は、有希の存在あってか、雰囲気が少しだけ丸くなったと思ったが、あの柔らかな表情は今、微塵もない。
（それとも、ユーキの為にこんな必死になってるのかなぁ）
凍ったような表情の主人は、相変わらず何を考えているのかわからない。
ただ、いつもよりも数倍、馬で駆ける速度が速い。乗馬の授業が不得手だったアインには拷問だ。
気が付けば、ルカがずいぶん先まで駆けていた。
「ちょっルカ様ー！　ちょっと、ちょっとだけ待って下さーい！」

29

パティは呆然と少女を見下ろしていた。
少女はまだ眠っている。とても苦しそうに。
少女が寝続けて三日が経った。胸の火傷が原因なのだろうが、パティにはどうしたらいいのかわからず、とりあえず額と胸の傷を冷やしていた。
時間を見つけては、ケーレの塔の最上階を訪れ、少女の額と胸元に冷えたタオルを添えた。少女がうめいて胸の傷を掻き毟ろうとしたので、両手首を縛って、ベッドにくくりつけた。
少女がいつ目を覚まして、手が不自由でもすぐに食事を取れるようにと、干した果物や穀物をわかりやすく置いたが、今のところ食べた形跡は無い。
――あれから、一度も目を覚ましていない。
このままでは、処刑の日を前にして、死んでしまうのではないだろうかと思った。
この少女が魔女として処刑されるのではなく、自然に死を迎える。
パティは瞑目して、もう一度少女を見やる。
少女は眉間に皺を寄せて、ひどく苦しそうだ。この顔は、この三日間、見つづけている。
（いや、あの日からだ）
あの日、オルガが彼女の胸にリコリスの蕾を植え付けた日からだ。
彼女はまるでその刻印を拒絶しているようだ。自分が魔女ではないと、そう必死に主張しているようにも見える。
けれどパティは知っている。自分にはどうすることもできないと。
少女は未だ、苦しそうに唸っている。
このままでは、伝説の魔女だと吊るし上げられる前に死んでしまうのではないだろうか。
「……その方が、良いのかもしれないな」

少女の汗ばんだ額に掛かる前髪を、払いながらパティは呟いた。
ゆらゆら、たゆたうようにゆれている。
背中が並んでいる。
皆が有希に背中を向けて立っている。
有希は皆の中心に座っている。
「パパ！」
見慣れた灰色の髪がゆれている。
「パパ！　ちょっと、あたし大変な事になったの、あの世界の事教えて！」
ゆらゆら、灰色の髪がゆれている。
「有希は大丈夫。俺の子だもん」
「大丈夫じゃない、大丈夫じゃないよパパ！」
お願い。そう叫んでも、快斗は振り向いてくれない。
「ママ！」
「大丈夫よ有希ちゃん、あなたはパパの子だもん。そっちの世界で大きくなって、いい男見つけなさい」
「っママ！　あたし大きくなってない！　ねぇ、なってないんだってば！」
「大丈夫よユーキ、だってあなた、ルカ君にあんな啖呵きれるんだもん」
「もう怖いものなんてないですね」
「あっはっは。嬢ちゃんはすっげぇなぁ」
「そんなことない！」
そんなことない。本当はいつでも怖かった。いつでも劣等感ばかりだった。今もそうだ。自分のちっぽけさに辟易して、そしてこうやってぽつねんと座って。誰かが助けてくれるのを。誰かが慰めてくれるのを。誰かが有希を必要としてくれるのを待っていた。
「大丈夫よ、有希ちゃんは強い子だから」
「そう、有希はとっても良い子だ」

「ユーキは凄いわね」
「僕はユーキが羨ましいです」
「嬢ちゃんは頼もしいなぁ」
やめて。
「……そんな風に言わないでよ」
（違う。あたしはそんなんじゃない。もっと卑屈で、もっとひねくれてて、もっともっと――弱い）
褒められるようなことも、頼られるような事も、何一つ出来たわけじゃない。いつだって苦しい、いつだって悲しい。いつだって、いつだって、崩れそうになるのを必死に堪えているんだ。
ゆらゆら、ゆらゆら、世界がゆれている。足元もゆれて、とても立てそうにない。
ゆらゆら、ゆらゆら、水面にゆれるように、綺麗な金髪がゆれている。
「ルカ」
ゆらゆら、ゆらゆら、彼の身体がゆれている。ぶらぶらと手が有希の前に躍る。
きっとあの手は。あの手は嘘をつかない。
有希の不安も、有希の困惑も、全てあの手がぎゅっと掴んでくれる。
あのひんやりとした手が、きっと有希の中で煮えるぐちゃぐちゃな想いも冷やしてくれる。
右手を出そうとすると、左手が引っ張られる。あまりの勢いに横転する。
（――手が）
手が、何かにつながれている。
「そんな」
ゆらゆら、有希の前の手がどんどん離れてゆく。
「やだ」
行かないで。お願いだから。

頬を涙がつたう。
「やだ……嫌だよ、ねぇルカ！」
ゆらゆら揺れていた金髪が振り返る。そこには、つるりとしたように顔の無い、人。
次々と皆が有希を振り返る。皆のっぺらぼうのような顔で、寝転がっている有希を見ている。
「イヤァァァァ！」
驚愕に悲鳴をあげたところで、視界は真っ黒に塗りつぶされた。

自分のイビキで目を覚ます人が居るという事を聞いた事がある。
そんなまさかと笑ったのは、いつだっただろうか。
有希は自分の悲鳴で起きた。
何が起きたのかわからなくて混乱していると、涙がボロボロと零れた。
あの形で開いた口からは絶えず声が零れる。声というよりもうめきのようだ。
怖くて、何かから逃げたくて身をよじると、両腕が頭上で固定されているようで動かない。
混乱してまともな言葉が出ない。どれだけ動かしても、きっちりと固定されている何かは緩まない。
「イヤァ！　ヤダ！　アァーーッ！」
何がこんなにも怖いんだろう。何がこんなにも悲しいんだろう。
過呼吸気味で、息が苦しい。ヒューヒューと喉が鳴る。苦しくて更に涙が流れる。
「やだ……」
何が嫌なんだろうか。それすらもわからないのに拒絶の言葉ばかり出る。
（もういやだ……）
顔は涙と鼻水でぐしゃぐしゃになっている。汗でじっとりと濡れた服は肌に張り付いて気持ち悪い。

頭が真っ白になる。何も考えられなくなると、少しだけ呼吸が落ち着いた。

（ゆめ）

夢だった。とても気持ち悪い夢だった。

夢だと気付いた後も、涙は止まることなく流れつづけた。

ヒューヒューと鳴りつづける喉の音だけが、部屋に響いている。

30

少し細くなった下弦の月が、空を射るように浮いている。
夜闇の藍色にも見える空を、時折雲が白く染めている。
今朝見たときは、未だに苦しそうに眠っていた。そろそろ起きなければ、本当に衰弱してしまう。
パティはトレイに入った食事を持って、ゆっくりと階段を上る。階段を上りきる頃には、傾けてしまったせいでこぼれて、スープが半分になってしまっていた。
少女は起きただろうか。そう思ってひっそりと扉を開け、音もなく部屋に入る。
いつも聞こえる呻き声が聞こえない。ベッドを見やると、少女が横向きに寝ていた。その目は開いていたが、パティすら見えないようで、どこかをぼうっと見ていた。
見ると、シーツやブランケットはぐしゃぐしゃに足元にからまっている。手首が真っ赤に染まっているのを見ると、大分無理をしてはずそうとしたのだろう。
「……一国の王子様ってみんな暇なの？　王宮からそんなこまめにこんなとこ来ていいの」
呟かれた声は少し鼻にかかっている。少女らしく、高くて響く声が聞こえる。
「ケーレの知事を任されているから。それに君の姿をあまり人に晒せない」
返事を返すと、少し驚いたように目が開く。
そしてパティと目が合うと、少女はゆっくりと微笑んで言った。
「あの食料も、あなたが置いていってくれてたのね。ありがとう。この手も、傷を引っかいたりしないようにってやってくれたの？」
パティは驚いて固まる。
確かにその通りだ。だが、この状況下でそんな冷静な判断ができ

るとは思ってもいなかった。
「もう大丈夫だから、外してもらえますか？」
ベッドサイドにトレイを置いて、言われるまま手枷を外す。真っ赤になっていた手首には、うっすらと血が滲んでいた。
少女はそれを見て苦笑した。
「あたし、何日寝てた？」
紫の瞳がまっすぐパティを捕らえる。中心にある黒が、何もかもを吸い込みそうなくらいに澄んでいる。
「丸三日、眠っていた。夜が明けて四日になる」
四日かぁ。少女は小さく呟く。
「あと六日……」
この三日でやつれた少女は、いつか会ったときよりも、はるかにまっすぐな目をしている。
不安で仕方の無いという顔が、どこかにいってしまった。
声も掠れているが、しっかりとしている。
一体この少女には何が起きたのだろうか。パティには理解ができなかった。少女は立ち尽くしてどうすることもできないパティに、茶目っ気たっぷりに笑った。
「とりあえず、この食事はあたしのためって思っていい？　おなかが空きすぎて気絶しちゃいそう」
それと、喉が渇いちゃったんだけど。
あと、顔も洗いたいんだけど、どうしたらいい？
彼女は図太くもそう言ってのけると、ベッドの端に座り、トレイを膝に乗せてスプーンを取った。
高い塔に閉じ込められて、外を眺める事しかできない。
――まるでラプンツェルみたいだと思った。
「ラプンツェルかぁ」
魔女に連れ去られたラプンツェルが、王子の為に髪の毛を垂らす。

その髪は無尽蔵に伸びるという。
「……ここ8年分の髪の毛が伸びたとしても、地上には足りないだろぉなぁ」
ベランダから見下ろす。雲ひとつ無い空はさんさんと太陽の光を地上にまぶす。青々と茂った山と、森で視界はいっぱいだった。
昨晩、マルキー王子から食事を貰って、水を貰って、更に手桶で顔を洗って、着替えてもう一眠りした。
寝て起きるともう悪夢は見なくかった。けれど数日間何も食べずに過ごした為に衰弱してしまっていて、動けずに更に二日、ほとんど寝て過ごした。
そして三日目の今日に、やっと立ち上がることができた。
「いてて」
手首を動かすと、少し痛む。
真っ赤に擦れた傷は、手首をぐるりと一周している。この数日で少し細くなった腕は、骨がうっすらと浮き出している。
――あと三日。
ぐるぐると、その言葉が頭を巡る。
手が、足が、胸がざわざわとして言いようもない焦燥がこみ上げる。
（あと三日で死ぬとか、実感わかないよ）
それでも、怖いという気持ちだけは膨れ上がっている。
目に見えない不安に押しつぶされそうで、気がおかしくなりそうだ。
「そもそもさぁ、どうしてあたし、こんな世界にきちゃったんだろ」
あーあ。と、空を仰いで目を細める。綺麗なシアンブルーを落としたような青は、作り物のようにも見える。
――父親が、この世界の住人だったから。
（本当に、それだけなのかな）
どこかで聞くファンタジーな物語は、ウッカリ主人公が間違えて召喚されるとか、必要とされて召喚されるとか、伝説の史実どおり

の人間だったりする。
（それに比べてあたしは）
何も無い。本当に、無力だ。
特別な能力もそなわってない。ただ無鉄砲に、無遠慮に、この世界にずかずかと踏み込んできただけだ。
（もし、理由があるのなら）
もし、この世界に有希が居ることが必要なのであるならば。
「嬉しいのにな」
それがどんな理由であれ、有希がここに居ても良いという事になるのではないだろうか。
有希が今、何よりも欲しがっているものだ。

31

ルカ達は疾走していた。
山を越え、前線を抜け、アドルンド城に向けて走っていた。
食料が無くなれば町へ行き、それ以外は野宿でずっと走っていた。
その日は、3日野宿を超えた四日目の夜だった。
アドルンド目前にして、町に辿り着いたのが遅かったために、そのまま宿に泊まる事になった。
馬に乗りつづけていた事ですっかり疲弊した身体、は、宿屋に着くと共に、まともに動けなくなった。
「明らかに運動不足だなぁ～」
簡素なベッドの上で、ふくらはぎを揉む。ぱんぱんになったそこは、張り詰めて固くなっている。
「ほんっとに、ルカ様はタフだなぁ」
騎士の恩恵って、そこにも現れてるのかなぁとひとりごちる。
ルカは今、買出しに出ている。一国の王子に買出しなんてさせられませんと抗議したが「動ける奴が動くのは当然だろう」と一蹴されてしまった。恥ずかしい事に、アインはそのとき立っているのもやっとだったのだ。
そもそも、ルカとアインの育ちが違う。
ルカは親族にあまり重宝されなかったために、幼い頃から剣になじみ、大人にまじって稽古をしていた。そして年とともに腕は上達して、国でも幾人しか居ない紫の騎士の号を取ってしまった。
一方、魔術士家系のアインは、エリート家系の中では能力がなく、落ちこぼれと言われてこれまた重宝されなかった。しかし、アインはそれに甘んじてたらたらとすごしていた。
――剣術習っておけばよかったかな。
何十回も何百回も思ったことだった。だが、そんな落ちこぼれのアインを、ルカは捨て置かないでいてくれた。

（まだ術士舎も卒業してないのに）
魔術士が術士になるための学校を、卒業する前に、アインは成人を迎えたルカの元へ召された。
当時、ルカが十八、アインが十四だった。マルキーとアドルンドの間で停戦協定が組まれ、ボロボロになった国土を潤すのに皆が躍起になっていた頃だ。
本来、主よりも年下の臣下などは召さない。なのに、ルカにはレーベント家の落ちこぼれをあてがわれた。
それだけ、ルカの地位は低いのだ。
（あれから、四年……）
それなりに充実した毎日を送っている。
奔放に動き回るルカに振り回されながら、時間は駆け足に過ぎていった。
昔の出来事を思い返すと、ふと笑みがこぼれる。
「はは。今も、振り回されっぱなしだ」
そしていつも楽しさの裏側に張り付いている不安が首をもたげる。
臣下のはずなのに、主人に甘えて。
臣下のはずなのに、主人より情報を得るのが遅くて。
臣下のはずなのに、主人に叱られて。
臣下のはずなのに、臣下のはずなのに。
「……僕は、ルカ様のお役に立てているのかなぁ」
その呟きは、キィンという音に掻き消えた。

魔術士は皆、自分の水晶を持っている。
その水晶を通して、他の魔術士と連絡を取る事が出来る。
術士の力量によって、距離や精度が変わってくる。精度が低ければ、文面しか送れない。高ければ、声が届くようになり、精度の高い者同士だと、映像会話も出来る。
『魔術士ってことは、召喚とかできたりするの？』
いつだったか、有希が素っ頓狂な質問をしてきた。

『違いますよ。魔術士っていうのは、文官の中の一つの役職です。まぁ、才能や素質に左右される、特殊な役職なんですけどね』
魔術士の役割は、情報伝達や薬剤調合が主だ。後は人それぞれに得意分野は変わるが、星見や風読み、特殊な術士ならば治癒もできるといわれている。
アインには、残念ながら特殊な能力が備わる事はなかった。そして、精度もそんなに高くないし、伝達距離もそれほど広くない。
アドルンド城が近づいてきた今、アドルンドに居る友人からコンタクトが飛んできた。友人はひどく興奮していて、疲弊して冷め切っていたアインにも気付いていなかった。
そんな友人が発した内容は、とんでもないものだった。
「え」
思わず、送られてきた文面に返事を返してしまう。
「……伝説の魔女が、とうとうマルキーに捕縛された？」
ルカの呟きと共に、扉が開かれる。
顔を上げて、君主のこわばった顔を見て、アインはため息をつきたくなった。
（もう、知ってるんですか）
一体どうやって情報仕入れているんですか、と聞きたくなるほどに、ルカの情報能力収集は長けていた。
「謀られたな」
「え？」
ルカはずかずかと歩いてくると、掛けてあったマントを取る。
「伝説の魔女とは、ユーキのことだろう」
マルキーで何者かに連れ去られた、紫の瞳の少女。
見た目の年頃も、紫の瞳も、伝説の魔女のそれと同じだ。
「まさか」
有希を、伝説の魔女に仕立て上げたのか――かつて自分たちが行ったように。
キィンと、更に水晶が音を立てて淡く光る。

水晶に目を落としたアインは絶句した。
『魔女の処刑の日は、朔の日の夕刻だそうだ。お前、見に行くか？』
「そんな」
有希は魔女ではない。それは、この二人がよく知っている。
それに、有希が魔女として処刑されてしまうということは――。
アインは再び顔を上げる。
朔の日。それはルカが審議に掛けられる日だ。きっとその日を遵守しなければ、ルカへの疑惑は確定となってしまう。
君主の冷たい瞳を見据えて、自分が何をするべきかと目線で問う。だが、それは意味の無い事だとわかっていた。きっと彼はこう言う。
「マルキーへ行く」
ほらね。と、自分を褒めてやりたいと思った。
アインは息を吸うと、きゅっと腹部に力を入れた。
「なりません」
きっぱりと言うが、ルカは聞くそぶりも無く、荷物に手を掛ける。
「なりません、ルカ様」
もう一度、はっきりと言う。
（ごめん）
「ルカ様、ご自身の立場をもう一度考えてください。あなたが今アドルンドに戻らなければ、ルカ様がオルガ様に対して弑逆しようとしているという疑惑が確定してしまいます。ルカ様は身の潔白を証明する事だけお考え下さい！」
（ごめん、ユーキ）
いつもニコニコと愛らしく笑っている笑顔がよぎる。
（君のこと、守りたくないわけじゃないんだ）
彼女は自分を庇ってくれた。それなのに、アインは有希になにもしてやれない。
「ルカ様、アドルンドにお戻りください」
きっと目の前の君主なら、何とかして有希を救う事ができるだろう。確証はないけれど、ルカはそういう人間だ。

「――マルキーには、僕が行きます」
（ルカ様はやれないんだ。だから僕で我慢して、ユーキ）
アインに背を向けて立っていたルカが、振り返った。

32

この世界にやってきて、一ヶ月は過ぎた。
もう一ヶ月なのか、まだ一ヶ月なのか、それはよくわからない。
ただ一つだけいえることは、この世界にやって来る前には、考えもつかなかった。
自分が処刑されて死ぬかもしれないっていう直面に出くわすなんて――。

鍵を開く音が聞こえる。
ふと振り返ると、トレイを持ったパティが立っていた。
彼はまずベッドを見遣り、そして有希が居ない事に気付いて、部屋を見回す。
ベランダに立っていた有希と目が合うと、瞬きを数度した。
「……大丈夫なのか」
きっと少しは驚いただろうに、微塵も表情が崩れない。
有希は微笑んだ。
「すっかり。もうお昼の時間なのね」
パティはトレイをベッドサイドのテーブルに置く。置かれたスープは相変わらず半分ほどこぼれている。
有希はベッドサイドに座って、トレイを膝の上に載せる。
「いただきます」
手を小さく合わせて言う。それをぼんやりと見つめて、パティは立っていた。
最初はそのしぐさに目を瞬いていたが、もう慣れてしまったらしい。
有希は食事をもりもり食べる。今までずっと動けずにいて、すっかり痩せてしまったからだ。
（逃げるとしてら、やっぱり体力はないと）

いつまでもうじうじしてなんていられない。いくら悶々としても、自分の処刑される日が延びるわけではい。
それならば、思いっきり抵抗してやろうと思う。
（そもそも、あたし伝説の魔女なんかじゃないし）
いわれの無い誤解で殺されるだなんて、お笑い種にもならないじゃないか。
考えれば考えるほど、怒りが湧いてくる。
「何もかも、あの変態狂人オニーサマのせいだ」
（一体どうしてくれるっていうのよ。無知で無力でか弱い女の子に）
ふと、水色の瞳と目が合った気がした。
「……あなたも、本当に暇なの？」
ケーレの知事を任されているって言っていた。知事っていうのは日本でいう知事と同じポジションだと思っても良いのだろうか。
長いこと待ったが、返事は無い。有希はため息を一つついた。
「……もう、暇だって思っていいのね？」
言って、ふと気付く。
（そういえば、あたし、この人の名前知らない）
考えてみれば、自己紹介すらしたことがない。
見上げれば、やはりガラス玉のような瞳が見つめてくる。
「ねぇ、あたし春日有希っていうの。あなたの名前は？」
ふと合った目線は、何を考えているのかわからない。
「……ウル・パティメート・マルキー」
呟かれた言葉は、答えをあまり期待していなかった有希には衝撃だった。
「うるぱ……なに？　なんて呼べばいい？」
「――パティで良い」
パティ、パティと何度か呟く。
そして、顔を上げてパティの目を見据える。
「ねぇパティ、気になってたんだけどさ、どうして魔女は処刑され

るの？」
「……」
（無言ですか）
昔、大々的な魔女狩りがあったとアインに聞いた。
事の発端を聞き忘れてしまったなあと、ため息をついた。
ベランダの外を見遣り、風の音に耳を傾ける。
「――魔女は、狂わせると」
パティの中低音が耳に入る。驚いて振り返ると、その視線は宙を泳いでいた。
「人を、狂わせると言っていた」
最初にパティを見たときに、ひどく空虚だと思った。
少しずつ知っていくと、とても優しい人なんだと思った。
（でもやっぱり、空虚だ）
むなしい。その言葉が一番似合う。
「……本当にそうなのか、私にはわからない」
（自分の意見まで言ったよ！）
あんぐりと口をあけて見入ってしまう。微塵も動かない人形のような顔の持ち主は、一体何を考えているんだろう。一体、どうしてこんな風になっているんだろうと、少しでも知りたかった。
パティはしばらく有希を見つめて、そして口を開いた。
「お前は……怖くないのか？」
「え……何が？」
幾度か瞬きをする。何か以外に思ったのだろうかと首を傾げる。
「私が怖くないのか？　処刑される事も、怖くないのか？」
意外な質問に、今度は有希が驚いた。
「パティは怖くないよ。――確かに最初は『酷い人』って思ったけど、今はそんな事無い」
ほんとうだよ。そう言って、パティに微笑む。
「処刑される事は――そうだなぁ」
言葉尻が言いよどむ。

正直、不安だ。不安で不安で、怖い。何で自分がそんな目に遭わなきゃいけないのだろうか。そもそも、どうしてこんな世界に来てしまったのだろうか。
言いようも無い孤独に、自分の必要性の有無に、悲しいほどの虚無感に、怖くて怖くて涙しそうになる。
（けど……）
もしも、処刑されるのが自分の運命なんだとしたら。
そう考えてしまうと、どうしても嫌だと思えない。
死んでしまうのは、怖い。怖くて怖くて、逃げ出してしまいたくなる。
（もしも、あたしがそうやって死ぬことで、この世界に安寧がやってくるなら）
そう考えてしまうと、足掻く事が出来ない。
「……あたしが死ぬことで、誰かが救われるかなぁ」
こぼした言葉は返事になっただろうか。
「もしあたしが死ぬことで誰もが救われるなら、喜んで死ぬわ」
色の無い瞳を見て微笑む。上手く笑えたか、あまり自信がない。
（嘘。怖いに決まってるじゃない）
泣きそうになった。

パティが部屋を出て行って、どのくらい時間が経っただろうか。
逃げ出す事を考えなければならないはずなのに、ぼうっとした頭は考える事を拒否したように、動かない。
（もしかしたら、あたしがこの世界にきたのは、生贄になるため？）
そんなまさか、と自嘲する。
「あたしがこの世界にきたのは、パパとママの気まぐれ……っていうか陰謀よ」
自分に言い聞かせるように、両腕で自身を抱きしめる。
「だから大丈夫、有希、あなたは死ななくていいの」
死んだら駄目。死んじゃ駄目。繰り返すように言い聞かせる。

そうやって何度も何度も言い聞かせていると、少し落ち着きが戻る。
（そういえば、前もこんなことあったなぁ）
大分昔のように思える。
ケーレの牢屋に入る前夜だ。泣きじゃくるティータをなだめて、有希が行く事になった。
（自暴自棄になって、あたしくらい死んだっていいでしょ。なんて言ってたなぁ）
なのに、今はこんなにも怖がってる。
ふふ、と笑みがこぼれる。
「おかしいの」
何でこんなにも矛盾しているのだろう。
誰かのためになるならば死んでもいいかな、なんて思ったのも事実。死にたくないよって思ったのも事実。
「あーあ。もう、最初っからやり直したいわ」
この世界にやってきた一番最初。
もう懐かしいとまで思ってしまう。
ルカに助けられた事、お城に連れて行かれて、よくわからないうちに契約されてしまった事。
全部を最初っから、もう一度やりなおしたい。
「でもなぁ、落ちる場所によっては、ホームレスみたいになるかもしれないしなぁ……」
うぅんと考え込む。
――拾ってやる。
はっと、あの夜の言葉がよみがえる。
――またどこかに落ちたときは、俺が拾ってまた契約してやる。
ふと、自棄じゃない笑みがこぼれた。なにか、心の奥を暖かいものが満たしてくれる。
「……そっか」
ルカは、また拾ってくれる。

ざわついた心が、すとんと楽になった気がした。
（あたし、またこの世界に戻ってくる事、考えてる）
何かに毒されたかなぁ、と、笑う。
（そうだ。死ぬくらいなら、もう一回死ぬ覚悟で飛べばいいんだよ）
そしてまた、最初っからやり直す。そうすれば、有希はアドルンド城に、きっと皆が行ったであろう場所に戻れる。
ベッドから降りて、ゆっくりと歩む。
レースのカーテンをそっと抜けて、窓を開ける。纏っている真っ白なワンピースの裾が翻る。
太陽はもうどこにも無くて、空の奥が濃紺に染まってゆく。手前のオレンジと重なるグラデーションがとても綺麗だ。
手すりに手を添えて、眼下を見下ろす。この高さは、どこかで知っている。
（うちのマンションも、このくらいの高さだったなぁ）
今となってはどこか懐かしい、ずっと暮らしていた家。
初めて親に抱かれて見下ろした景色は、吸い込まれて落ちるのではないだろうかと思うほどにくらくらした。

高い塔に閉じ込められて、外を眺める事しかできない。
――まるでラプンツェルみたいだと思った。

「何がラプンツェルよ」
有希の王子は、この塔の下には来てくれない。
（だって）
よっと掛け声を出して、手で手すりに乗る。ぐらぐらと揺れて、慌てて片足を掛ける。
「あたしの王子はひねくれものの二重人格者なんだから」
初めて会った時の、あのまばゆいばかりの笑顔を思い出して苦笑した。
「そんな王子様には、あたしから会いに行かなきゃ」

両足を掛けて、手すりに座る。ぎゅっと握った手すりがじんわりと汗ばむ。
（下見ちゃだめ、下見たら決心が鈍る）
深呼吸を二回したあと、有希は両手を突っ張って手すりを押した。
身体が、ふわりと宙に浮いた。
――直後、がくんと身体に衝撃が走った。

33

パティが扉を開いて中を見ると、有希が手すりに上っていた。
（何を――）
考えるよりも早く、彼女がやろうとしている事を身体が理解した。
持っていたトレイが落ちる。
有希は両足を手すりの向こう側に放り投げている。
パティは部屋を走り抜ける。すぐ近くな筈なのに、そのときは部屋がひどく広いような気がした。
ベランダにパティが出る頃、有希は俯いている顔を上げた。
「そんな王子様には、あたしから会いに行かなきゃ」
必死に両手を伸ばす。
少女がふわりと空に舞う。有希の両脇にパティの腕が回る。
勢い余ってそのまま、パティは手すりに激突した。
「――っ」
声にならないうめきが上がる。腕の中で有希がもがいている。
「え、え、何？　……あれ？」
きょとんとした声が聞こえて、思わずパティは抱きしめている腕に力を込めた。

月がどんどん細くなってゆく。
部屋に灯された灯りが、風で揺れる。
あの月が見えない日に、自分は処刑されてしまうことになるのだろうか。
有希は飛び降りるのを、パティに見つかって、阻止されてしまった。そして、またベランダから飛び降りようとしないようにと、足枷をつけられてしまった。
足枷から伸びた鎖はベッドに括り付けられたが長さは適度にあり、小さな部屋を動き回るには不便がないが、ベランダの外には出られ

なくなってしまった。
「困ったなぁ」
別に自殺する気なんて無い。なのに勘違いされてしまった。
（でもまぁ、無理もないか）
だが、そんな一言では片付けられない。身動きが更に取れなくなってしまったのだ。
このまま過ごしていると、自分は処刑されてしまう。
夜が大分更けたが、最近睡眠ばかりとっていたことと、妙な興奮状態になっているのが合わさって眠気もやってこない。
「どうするかなぁ」
腕を組んで頭を傾ける。
部屋の扉には鍵が掛かっている。突破したとしても、下に降りる間に間違いなく捕まるだろう。
外に出られる場所はベランダ以外にはない。落ちることも出来ない。
（……ここはやっぱり、パパの言う力の発現っていうのに期待してみるかなぁ）
だが、どうやったら発現するのか、皆目見当がつかない。
（修行、とかが必要なのかなぁ）
うーんと考え込むが、いい案が見当たらない。自分の命が掛かっているのだと思うと、少し怖くて更に思考回路が回らなくなる。
「やっぱり駄目、思いつかないよ」
不貞寝するように、ベッドに横たわる。
少し固いマットが、有希の頬を押し上げる。
ふと、右手中指の付け根を撫ぜる。
（明々後日か……）
本当に、時間がない。
『もしも明日死ぬならば、最後に何をしたいですか』
高校の卒業文集に、そんなアンケートがあったなぁと、思い出す。
そのときは、その『もしも』が現実になるなんて思ってもみなか

った。
（なんて書いたっけ……）
ノリで書いた記憶がある。友達は笑いながら「えぇ！　そんなことなのぉ」なんて言っていた。そんな日々が懐かしい。
風の音が聞こえる。
レースのカーテンがひらひらと揺れて、部屋の中に綺麗な空気を入れてくれる。
少しずつ暖かくなってきたので、窓を開けたままでも眠れる。
夜空は遠く、星々が煌めいている。
そこには、頼りの無い月が、ひっそりと浮かんでいる。
目を閉じて、ため息を一つつくと、風の音を打ち切るように、ガチャリと鍵が開く音が聞こえた。
（……パティ？）
こんな夜更けに尋ねてくるのなんて、有希が熱にうなされていた日以来ではないだろうか。
（何かあったのかな）
むくりと起き上がって、扉を見遣る。だが、開く気配は無い。
スープを全部こぼしてしまったのだろうか。ふと考えて、だが夕食はもう既に食べ終えている。
（もしかして、夜食？）
処刑が近いから、最後に贅沢でもさせてやろうという魂胆なのだろうか。思い返してみれば、心なしか夕食も豪華だったような気もする。
不安と期待が入り混じって、すこし小腹がすいた気持ちを持て余しながら扉を見る。
扉が音も立てずにひっそりと開く。そこから顔を出したのは――パティではない。
（誰）
誰かが、中を伺っている。急に部屋中の空気が変わる。探られているような、検分されているような。

はたとベッドの中心に座っている有希と目が合う。
「……誰？」
有希は怪訝な顔をして言う。パティは「お前をあまり人目に触れさせられない」と言っていた。だから、誰もここへは入ってこられないはずだ。パティはこの国の王子だし、パティは嘘をつくような人でもないと思う。だからその言葉は信じても大丈夫だ。
――なのに、誰かが来ている。
「誰なの？」
不機嫌な声を出すと、ゆっくりと扉が開いた。
灯りに照らされて立っていたのは、年のころは有希と同じくらいだろうか。夜目にもわかる、綺麗な群青色の髪を持った、精悍な顔立ちの青年だった。
耳にかかる程度の長さの髪が、風に揺れる。
真顔に近い顔をしていた青年が、ハァと息をついて、笑った。
「まだ起きていたなんてな」
そう言って肩をすくめる姿に、有希は不審感を募らせる。
（寝てる所に来ようとしたわけ？）
非常識にも程がある。仮に十歳にしか見えないとしても、有希は十八なのだ。
「あなた、誰？　どうしてここに入れるの？」
青年はつかつかと悪びれもなく部屋に入る。そして有希と向かい側の壁にもたれる。
「誰……ねぇ、別にお前の部屋でもねぇだろ」
夜這いに来るわけもねぇし。淡々とそう言ってのける。
（そ、そうだけどさぁ）
それでも、今はこの部屋を自分にあてがわれている。それに、夜這いしないからといって、無断で部屋に入るのは、やっぱりおかしいと思う。
「明日っから俺が面倒みなくちゃなんねぇ伝説の魔女サマがどんなヤツか、見に来ただけだよ」

「え……それ、どういうこと？」
――面倒を見る。その言葉は聞き違いではないだろうか。
「パティは？」
今までずっと、パティが身の回りの世話をしてくれていた。ずっとそうなのだと思っていた。
青年の眉がぴくりと動く。
「パティ……ねぇ。兄貴もよく呼ばせるよなぁ」
（兄貴……って事は、パティの弟？）
「兄貴は明日から、お前の処刑の事で更に忙しくなるんだ。それで、わざわざリビドムから呼ばれてきてやったんだよ。感謝しろよな」
（リビドムから……）
青年はくるくると話を進める。軽い印象の強い青年は、かつかつと有希に歩み寄り、そしてベッドサイドに座る。
「――お前、本当は伝説の魔女じゃないんだってなぁ。アドルンドの貴族のお嬢様か？」
近づいて見ると、瞳の色も群青色だという事に気付いた。
「違うわ」
「嘘なんかつかなくていいさ」
何も変わらない。そう言って笑って、青年は立ち上がる。
そのまま数歩歩いて、有希に背を向けたまま言った。
「どうせお前は、伝説の魔女と言われて死ぬんだ」
（嫌なヤツ）

34

アインの頭は混乱していた。
一体何が、どうなって、こんな事になってしまったのだろうか。
自分の主であるルカが、突然少女を連れてきて、そしてあろう事か契約までしてしまって。
そしてフォルに赴いた。少女は活躍してくれた。
アインが時期を見誤っている間に、主人は裏切り者のイシスに捕まり、そして牢に入れられそうになっていたと聞く。
そんな中、少女が機転をきかせて、イシスのトラウマである伝説の魔女を騙って、イシスを投降させたという。
（ユーキは、ルカ様を救ってくれた）
ケーレに行くときは、アイン自身を助けてくれた。
あの、抱き壊せそうな程に小さい少女に。
一体、どこからおかしくなったのだろうか。
ルカが気まぐれに契約をしたこと。
オルガが有希に関心を示したこと。
フォルに有希を連れて行ったこと。
ティータ達を迎えに行ったこと。
そもそも、有希が現れる前から、おかしくなっていたのだろうか。
（でも、いつから）
今までの記憶がぐるぐると巡る。
幼い頃、皆と一緒に遊んだ事。当時は王子や臣下などという身分関係なく遊んでいた。
ルカがすさんだ頃、アインはそんなルカが怖くて、術士舎に篭っていた。
あの時、傍にいてやればよかったと、後悔しても今更、遅い。
（どこから）
どこから、この国はおかしくなったのだろうか。

何故、戦争ばかり起こるのだろうか。
（どうして）
どうして、この世界は狂ってしまったのだろうか。
アインは頭を数度振って、前を見据えた。
ルカと別れてからもうすぐ五日。ケーレは目と鼻の先だ。
太ももが痙攣して、もはや痛みなどというものは忘れてしまった。
しびれて感覚がなくなっているのだ。
（待ってて下さい、ユーキ）
あの小さな少女は、今何を考えているだろうか。
（――もう、なくさせません）

青年は、予告どおりに朝方やってきた――有希の食事を持って。
遅い時間まで起きていたために、朝方まだ眠り足りなくてまどろんでいた。そんな所に、ドアを足で蹴り上げて入ってきた。
「オラ、人が飯を持って来てやったんだ、いつまでも寝てんじゃねぇよ」
そう横柄に言って、サイドテーブルにトレイを置いた。
すると一旦外に出て、椅子を持って戻ってきた。
有希は寝ぼけ眼でその一連の動作を見ていた。
「ったくよ、明後日には処刑されるっていう人間が、よくチンタラ眠ってられんなぁ」
（騒々しいなぁ）
今まで、パティが何も喋らなかったので、ずっと静かな空気が部屋に満ちていた。
こんな突然に、騒がしくなると戸惑ってしまう。
青年が何かを投げる。有希は顔を上げてそれを見ると、べしっと顔面に直撃した。ひんやりとしたものが当たる。
「顔拭け」
「あ……ありがとう」
湿ったタオルだ。何も投げる事はないじゃないか。と思ったけれ

ど、少し驚いた。
（昨日あんだけ不服そうにしてたのに）
まるで別人のようだと思っていると、睨まれた。
「早く食えよ」
「あ、う、うん」
両手を合わせて「いただきます」と言って、スプーンを手にとる。
青年は椅子に座って足を組みながら、そんな有希の姿を見ていた。
「あ」
有希はいつものようにトレイを膝に乗せて、気付いた。
「何だ？　食えないモンがあっても食えよ」
「あ、うん」
（スープ、こぼれてない）
いつも冷めたスープばかり飲んでいたのに、今日のスープは温かかった。
思わず笑みがこぼれる。
（別人みたい）
食事をしていた手が止まる。一度笑い出したら、なんだかおかしくて止まらなくなる。
「ふ、あはははは っ」
青年が眉間に皺を寄せて睨む。
「んだよ」
慌てて有希は首を横に振る。
（随分、面倒見がいいんだなぁ）
なんだか兄が出来た気分だ。と、のほほんと考えてしまう。ほんわかと暖かい気持ちになる。
「ねぇ、あなたの名前は？」
そんな言葉が口からこぼれた。
「はぁ？　お前、頭大丈夫か？」
黙って食えよ。そう言われて、しぶしぶスプーンを動かす。
カチャカチャと、有希が食器をぶつける音だけ響く。

降りかかる視線を受け止めつつ、有希は黙々と食べた。
（いい人なのかもって思ったんだけどな）
すこし粗野で、すこしキツいだけなのかな。と思ったが、どうやらそうでもなかったらしい。
顔をあげた有希と目線が合うと、酷く険しい顔をしていた。
まるで、憎悪をたたえたような目。
（面倒見いいのに、怖い）
気付いてしまった。面倒見がいいのは、きっと公私混同をしないからだ。
有希のことは憎い。けれど仕事はきっちりやる。そういう人なんだ。
「……ごちそうさまでした」
食べ終わる頃には、すっかり意気消沈していた。
「……」
有希が食事をしている間中、ずっとだまって座っていた青年が、口を開く。
「お前、本当に自分が死ぬってわかってんのか？」
「え」
突然考えてもいなかったような言葉をいわれて詰まる。
自分が死ぬ。それは何度も考えた。こんな事になってしまったことを、何度も後悔した。
「昨夕、あそこから飛び降りようとしたらしいな」
知っていたのか。と、群青の瞳を見つめる。
「どうしてだ？」
「え……」
「どうして飛び降りるなんて事を考えたんだ。――国の為に死ぬのは嫌か？」
（国の為に？）
「お前が魔女として死ねば、うちはアドルンドを攻める理由がなくなるからな」

思わず絶句する。
（この人は、なにを）
何を言っているのだろう。
伝説の魔女と謳われている彼女が死ぬことで、どうしてマルキーとアドルンドの戦争が終わるのだろうか。
「お前はそんな事にも気付かなかったのか？　何故自分が魔女として殺されるのか。魔女として殺される意義を、考えた事はないのか？」
突然言われて、戸惑う。
（え、何？　戦争が起こっているのは、魔女のせいなの？　でも、あたしが死ぬことで戦争が終わるって）
「どういうこと？」
まったくわからない。そう伝えると、青年は激昂した。
「だから貴族は嫌いなんだ。そうやって何も知らずにただ護られてのうのうと生きている。お前は知らないだろう。何も、何もかも。そうやって何も知らされないのが不幸だということにどうして気付かないんだ！　どうして気付こうとしない！」
立ち上がって大声を出される。びくっと肩がすくんで、思わず目をぎゅっと閉じる。
足音が近づいてくる。怖くて身体が動かない。
痛いほどの侮蔑が、嫌悪が、憎しみが、有希を硬直させた。
「お前は何も知らない。知らない事が罪だという事も知らない。――さぞ、幸せだったろうな。え？　アドルンドのお嬢様よぉ」
髪の毛を捕まれる。無理やり顔を掴まれて、目を開けさせられる。
（どうして、そんなこと言うの）
涙の薄い膜の張った向うは、群青色の瞳が歪んで写っていた。
「っ何も、知らない事を、幸せだと思ったことなんか、ない」
口をついて出る。悲しみと怒りで、声がふるえる。
いつでも、自分の無知が、無力が、情けなくてしかたなかった。なのに何故、それを更に責められなければならないのだ。

「なら何故、飛び降りるなんていうことをしたんだ。どうせ死ぬなら、国を想って死ね」
（どうしてみんな、死ねっていうの）
オルガも、この青年も。
折角この世界で、やっと自分の存在を見つけられたと思ったのに。ここに居てもいいんだって思えたのに。
どこか奥が、ぷつんと切れた気がした。
「……っあたしは！」
両腕を想いっきりばたつかせる。青年の顎に掌が直撃する。髪を掴んでいた手が離れる。
「あたしは、死にたくない！　絶対に死なない！」
切れたのは、涙腺だったのだろうか。有希の瞳からぽろぽろと涙がこぼれた。
（泣いちゃダメ）
「……んの、クソアマ」
「あたしは確かに無知よ！　何も知らない、なにもわからないわよ！　もし、もしあたしが魔女だっていわれることで死んで、それで、それで本当に世界に安寧が訪れるなら、喜んで死んでやるわよ！だけどねぇ」
（この世界が、魔女のせいで戦争しているなんて知らない）
「無知なお陰で、死んで得するのは、あの狂人オルガかアンタくらいしか知らないもの。だから死んでやらないんだから！」
「……戯れ言だな！」
「そうよ、悪い？」
ぴりぴりした空気が数秒流れたかと思うと、青年がため息をついた。
そして、笑みをたたえてこう言った。
「なるほどな……処刑されない自信があるっつうんだな。――誰かが助けに来てくれるなんて思うなよ」
そう言うと、青年はトレイを持って出て行ってしまった。

扉が閉まるのを見届けて、有希はその場にへたり込んだ。
「……なんなのよぉ」
ぐすぐすと嗚咽を漏らして、服の袖を濡らした。
外は憎らしいくらいに晴れ渡っているのに、有希の気持ちは暗雲が立ち込めていた。

35

ああ、帰ってきた。
ルカはぼんやりとそんな事を思った。
今まで長期でアドルンドから離れることは何度もあった。
それこそ政務であったり、個人的な感情で帰らなかったことも多々あった。
疲弊した身体を奮い立たせながら、馬を操る。
城下を歩く。その姿は誰に見咎められる事もない。
ルカが公式の場に出る事は殆どない。騎士として軍を引き連れるときも、顔を見られないようにと頭を覆うような兜を装着していた。
アドルンドの巨大都市である王都は、戦争下にあるが、まだ活気がある。それらを印象付けるように眺める。
（しばらくは出られなくなるだろう）
きっとオルガは、簡単にルカを放してくれないだろう。
（いっそ兄様を――）
そう考えて、馬鹿馬鹿しいと自嘲する。
（兄様の思惑は、それだろうに）
オルガは一体、何をやりたいのだろうか。ルカには理解ができない。
いずれアドルンドの王位を継ぎ、栄光を手にできるというのに。
（まぁ、俺はなりたくないがな）
オルガは王になるために生まれ、王になるために育てられている。
王になることに疑問をもたないように、賢帝と呼ばれることになるように。
（兄様、あなたはこの国をどうしたいのですか）
この豊かな国を、美しい国を。愛しい国を。
（彼女の愛した、この国を――）
ルカはその面影に、瞑目した。

ルカが城門をくぐると、即刻門番に捕らえられた。
馬から引き摺り下ろされ、まるで罪人のような扱いだった。
そして縄を掛けられたままの姿で、謁見室に連れて行かれた。いつかを再現したような構図だ。
「やぁルカ、来たね？」
高座に座るオルガは、優雅に微笑みを浮かべている。
「兄様、これはどういうことですか」
ルカの後方には、武装した番兵が二人、立っている。
「どういうこと？　それは僕がルカに言うべき言葉なんじゃないのかなぁ」
足を組んで、くいと顎をあげて、ルカを見下す。
「――あの子、魔女なんだってね。しかも年季の入った」
知らなかったなぁ、と大仰に嘆いてみせる。
（白々しい事を）
本当は知っているであろうに。
有希が連れ去られたのは、間違いなく目の前に居るオルガが原因である。それは間違いがない。
オルガはここ数日、城にいなかった。
「ねぇルカ、どうしてそんな事を？」
傷ついたような顔をしている。その顔をよく見ると、目が笑っている。
「――兄様、彼女は魔女ではありません」
「へぇ、じゃぁ、どうしてあんな色の瞳をしているの？　リビドムの王様が実は生きていたとか寝言を言うの？」
「ええ」
ルカはきっぱりと言い放つ。
（ユーキはこのままでは殺されてしまう）
その有希が生き残る方法。それは、有希自身に価値ができること。
考えて考えた結果にだした決意。そのために、ルカはここまで戻

ってきた。
「彼女はかのリビドム王、ロイコ・カーン・リビドムのただ一人の娘です」
目の前でルカを見下しているオルガは反応がない。後方の番兵がたじろぐのがわかる。
そして、いくばくか間があり、オルガは狂ったように笑い出した。
「何故？　何故そうだと言い切れるんだいルカ、え？　リビドム王が生きている！　それはリビドムの妄想じゃないのか？」
「彼女はリビドム王の騎士であるガリアン・マノタントと対の指輪を所持しております」
しばらく笑っていたオルガが、ふと、真顔に戻る。いつもの笑みが消え、がくんと上体が倒れ、顔を上げるとぎょろりとした目だけがルカを捕らえる。
「あぁ……そう……」
そしてまた沈黙が訪れる。前傾姿勢が元に戻る頃には、いつもの微笑みをたたえている。
「それで、ルカはその少女をどうしたいの？　もう戦争ははじまっちゃったよ」
「！？」
ルカが驚いて目を瞠ると、オルガは嬉しそうに笑った。
「今朝、やっと追撃命令を出したんだ。アドルンド軍のね」
（どういうことだ）
有希をアドルンドに連れ戻す事で、本格的にマルキーと戦争になってしまう。それがわかっていたから連れ出した。それがわかっていたから、アドルンドに戻るのをためらった。その躊躇いが、彼女を危険に晒した。
だから、有希を連れ戻して、マルキーと戦争になるのならば、仕方のないことだと決めた。
それなのに。
「彼女をダシにしようかとも思ったんだけど、面倒くさくてねぇ」

持て余すように、手で遊んでいる。組んだり、あわせたり、反らせたり。
そんな事も気にならないくらいに、呆然とルカはオルガを見ていた。
「兄様！」
思わず叫んでいた。
ルカは自分の考えていた計画を、話すためにここに居るのだ。
「それならば、彼女をリビドム王として、リビドムを再び建国されてはいかがでしょうか。そして彼女を娶れば、戦争もせずに、リビドム領が手に入ります」
オルガが真顔になる。その顔は、どこかルカに似ている。
「……そう。そういう考え方もあったね。――でも、その彼女はどこにいるの？」
ルカは言葉に詰まる。
「彼女が魔女じゃないっていう証拠もない、彼女がいないから、指輪も見せてもらえない。それなのに、そんな言葉を信用しろって言うのかい？　ルカ」
返す言葉もなく、黙りこくってしまう。
「でもまぁ、いい考えだよねぇ」
どこか夢見るような視線で、オルガはどこかを見ている。
（聞き入れてくれるか）
そう、淡い期待を抱いた瞬間、オルガは憎悪の浮かんだ笑みを浮かべた。
「彼女がいないなら、明日マルキーで処刑される魔女をあの子に仕立て上げればいいじゃない。そしてその魔女が死んだ後『実はアドルンドが保護していたリビドム王女だった』そう言って攻め込んでしまえばいい。そうすれば、リビドムだけじゃなくてマルキーまで手に入る。――素敵な筋書きじゃないか」
（はじめから、それが狙いだったのか）
「兄様！　あなたはご自分が何をなさろうとしているのかわかって

いるのですか」
思わずルカは声を張り上げる。すると、両脇の番兵がルカを押さえて床に押し付ける。
「ルカ、君は僕を弑逆しようとしていたっていう嫌疑が掛かっているんだよ。そのための弁明に来たんじゃないの？　僕の心配をしてくれるなんてルカは優しいねぇ」
オルガが優雅に立ち上がる。そして、一歩一歩高座から降りてくる。
ルカの目の前で止まると、更に言葉を続けた。
「でもまぁ、弑逆っていうのは外聞が悪いし、ルカの言う『リビドムの王女』が僕を尋ねてくるまでは監視させてもらうよ。その頃にはほとぼりも冷めるだろうしね」
処刑される魔女が有希である以上、有希がルカを尋ねてくることなんてまずない。
（それをわかっていながら）
「ねぇルカ。僕はルカが大好きだから、どうにかしてルカが助かる方法を探すよ」
だから少しだけ、待っててね。
そう言うオルガの顔は酷く歪んでいるように見えた。

36

アインは、朔の日の前の夕方に、ケーレに辿り着くことができた。
空は藍色に染まり、灰色の町は茜に染まっている。
（ユーキは……）
馬を引きながら、ケーレの町を歩く。
アインの足取りはとても頼りなく、アインが馬を引いているのか、馬がアインを引いているのかわからない。
（ユーキはどこにいるだろうか）
そればかりが頭を巡る。
視界がぼんやりと霞がかっているのは、疲労のせいだろうか。アインはふらふらと歩く。
（とりあえず、宿を取って厩にコイツを繋いで、あぁ、どうやってユーキを探しだそう。まず居所を探さなきゃ。番兵あたりに袖の下を通したら教えてもらえるかな、前に教えてもらえたから多分大丈夫だとして、どうやって助けるか。だよなぁ）
頭がぐらぐらと揺れる。考えた先から考えていることを忘れてしまう。
（この前みたいに地下に居られたら確実に無理だ。そうだったら処刑直前を狙わなきゃならない）
ああ、と自分を恨みがましく思う。
こんな時、自分にもっと能力があればよかったのにと思う。
軍師家系のレーベント家は、軍師であると共に魔術士の家としてはエリートだった。
（兄様達なら透視も可能なんだろうけどなぁ……って、考えてもしょうがないか）
その後、アインは宿を取り、夜が更けるまで休息を取った。
寝て起きると頭はすっきりして、俄然やる気が出てきた。

「待っててくださいね、ユーキ！」
あなたを殺させなんてしませんから。そう、どこにいるかわからない有希に叫んだ。

夜が更けても、石を切る音がどこからか聞こえてきている。
酒場のような華やかな場所は無く、どこもかしこも寂れて切ない心持になる。
アインは塔に向けて静かに走る。
――罪人は、あそこにいる。
ルカがいつかそう言っていた。実際、ガリアンもダンテもあの塔の地下にいた。
ならば有希も、きっとあの塔に居るのだろう。
（詳しい計画なんて何も立ててないけど！　せめて番兵に掛け合うくらいは！）
牢破りをされたばかりの牢は、強固に護られているだろうが、なんだか何とかなりそうな気がした。

幾分か走ると、塔の麓に出た。アインは茂みに隠れて、番兵の数を数えた。
（……別に、べつに、押し入ろうって訳じゃないんですけどね！）
誰に言い訳するでもなく、慌てふためく。
「……それにしても」
番兵が多い気がするのは気のせいだろうか。塔をぐるりと、等間隔で番兵が立っている。
（ということは）
有希がここに居るから、誰にも侵略されないようにとの配慮だろうか。
（きっとそうだ）
となれば、アインには出来る事は何も無い。
ここに居つづける事よりも、部屋に戻って、処刑の時にどうやっ

て有希を救出するか考えていたほうが良い。
「ユーキがココにいるとわかれば、何らかの計画も立てられるし」
そう言って、茂みから立ち上がる。くるりと振り向いて前に歩こうとした所で立ち止まる。
目の前に、誰かが立っている。
見たところ、アインと同年代らしい青年である。深い色味の髪が、夜闇と同化している。
（やばい）
「誰か、捕まっているのか？」
「え？」
アインよりも身長の高いその青年は、人懐っこい笑顔で言った。
「時折来るんだよ。捕まってるヤツの家族とかが。『無事かなー』って。お前もそうなんだろ？」
（なんだ、この人）
とりあえず、アインも愛想笑いをする。
「どんなヤツだ？」
「え？」
目の前の青年が優しく笑う。
「見てきてやるよ。そいつが無事かどうか。――気になるんだろ？」
アインの頭の中で警鐘が鳴る、
（なんか、雰囲気が違う）
番兵とも違うし、騎士とも違う。それでいて、誰かに似ているようなこの雰囲気。
「俺、こう見えても、あいつらには顔が利くんだ」
優しそうに見えるが少し威圧的な空気に、アインは若干圧倒される。
「いや、今日はもう遅いし、寝ているかもしれないから……それなら明日、お願いしていいですか？」
青年が意外そうな顔をする。
「遠慮すんなって。どんなヤツなんだ？」

何かが、どこかがおかしい。どうしてこんなにも、アインに執着するのだろう。
ニコニコと笑っている青年は、アインに歩み寄る。
「もしかして、女か？」
「え……あ、まぁ」
たじろぎながらも答える。
（あああ、早くこの場を去りたい！）
青年は笑顔を崩さずに続ける。
（あ）
気付いてしまった。違和感の原因に。
（この人、目が笑ってない）
じっとりと絡みつくような視線が嫌で、目をそむける。
「そいつはもしかして、黒髪、そして紫色の瞳の、クソガキか？」
（ユーキ！）
驚いてアインは青年を見る。青年は、にやりと笑った。
「――見つけたぜ、あのお嬢様のナイトをな」
（しまった）
走って逃げようと踵を返すと、いつのまにか、塔の辺りにいた番兵に囲まれていた。
「っ――！」
アインは番兵の一人に、膝蹴りを腹部に受けてうずくまる。
「安心しろって、別に取って殺しゃぁしねぇよ」
地にへたり込んだアインの髪を持ち上げる。
「お前にはな、アイツの処刑を特等席から見てもらう」
（ルカ様）
心の中で主の名を叫ぶ。申し訳なさと、悔しさと、悲しさと、自責の念と、その全てを持て余したまま、アインは縛り上げられて塔の中に連れ込まれた。

37

今日の昼、自分が処刑される。
その事実を目の前にして、有希は戸惑っていた。
そもそも、処刑といわれてもどうやって殺されるのかがわからない。
（日本だと、絞首だよね……）
でも、ここは日本でもなければアメリカでもない。地球なのかすら怪しいというのに、想像などつくはずがない。
（ああやだやだ、死ぬことなんて考えたくない！）
ぶんぶんと首を振り、違う事を考えようと、ベッドの上をゴロゴロと転がる。
今日という日は、処刑日和というのだろうか。
大分早い時間、それこそまだ日の昇る前に目が覚めてしまった。
高い塔から見る朝日はまぶしくて、とても綺麗なものだった。
（処刑日和だなんて、縁起でもない）
自分に突っ込みを入れて、むくりと起き上がる。軽くストレッチをして、頬を両手でパシパシと叩く。
「しっかりしなきゃ。どうするか、考えなきゃ」
結局、快斗の言う「力」というものは発現しなかった。足枷も、自力では外す事ができず、むやみやたらに動かしたために足に怪我をした。
両手首の擦り傷はかさぶたになり、所々はがれかけている。
それを見るたびに「ああ、時間が経ってしまった」と思い知る。
――早く。あの人が来る前になんとかしなければ。
パティの弟。名前も知らない彼がやって来る前に、どうにかして動かなければならない。
（でも、どうやって？）
籠の鳥の状態の有希に、一体何ができるだろうか。

いても立ってもいられなくて、ぐるぐると部屋中を歩き回る。それに引き摺られる鎖の無機質な音が響く。
「……やっぱり、処刑場に連れて行かれるまでの間かなぁ」
その隙に、もしかしたら誰かが助けに来てくれているかもしれない。
そんな淡い期待が、胸に灯る。
（やだな……まだ期待してる）
現実逃避なのだろうか。それとも、本当に期待しているのか。考えすぎてしまって、もうよくわからない。
彼等は有希のことをどう思っていたのだろう。どのくらい、親密になれたのだろう。
（そこばっかり考えてるなぁ）
ずっとずっと、その事ばかり考えていた。
アインは、ティータは、ナゼットは――ルカは。どう思ってくれていたんだろうか。
「……あいたいなぁ」
皆とはぐれてから、ぽっかりと心に穴があいたような気分だ。
人間扱いされないし、魔女だ魔女だと言われて、憎しみの目は侮蔑の目に晒されつづけていた。
あの暖かなまなざしが懐かしい。
皆の顔を思い出すだけで、心がほかほかと温まる。
「……うん、会おう、会いに行こう」
あたしは元気だよって、心配かけてごめんねって。
「ルカにも、謝らなきゃ……」
我儘を言って、迷惑をかけて飛び出して。
力になりたいのに、足ばっかり引っ張ってしまった。
右手の中指を撫ぜる。すっかり癖づいてしまったそれが、おかしくて笑う。
（うん。やっぱり処刑場に行く間際だ）
これからの自分の行動をシュミレートする。

（鎖はベッドにつながれてる。あそこには外す場所がついてない。外すのはこの足の方に間違いない。その外された瞬間に、ベランダに駆けてって飛べばいいんだ）
様々なシュチュエーションを考える。
もし人数が多かったら、もし転んだら。もし、もし、もし。
そう考えているうちに、どんな状態になったとしても、ちゃんと飛べるような気がしてきた。
「よし、大丈夫。きっといける。ううん、絶対いける」
ぎゅっと手を握り締めて、自身を鼓舞する。
もう大分昇った朝日を睨んでいると、ドアが乱暴に開く。そこにいるのは、パティの弟。
（一人なんだ）
ひどく心が凪いでいる。落ちついて考えられる。
（大丈夫、冷静でいられる）
「飯だ。食え」
そう言って、トレイを粗野に置く。青年はそのまま部屋の椅子に座る。
トレイの横に冷たいタオルが置いてある。有希はそれを持って顔を拭く。ひんやりとしたタオルが気持ちいい。
大きく深呼吸をすると、ベッドの縁に座ってトレイを膝の上に載せる。
「いただきます」
両手を合わせて言って、スプーンを手にとる。最後の日なら少しは豪華なのかななんて思ったけれどそんな事は無く、いつもと代わり映えのしない食事が乗っていた。
（食べられるだけでありがたいんだけどね）
黙々と食べると、しんとした空気が流れる。青年の視線を感じるが、見向きもせずに食べる。
（それにしても、一人で来るなんてな）
てっきり誰かを連れてくるのかと思った。

（それとも、食べ終わったら誰かが入ってくるのかな）
そう思うと、緊張が身体を走る。扉の奥に誰かがいるのではないかと思うと、ちらちらと見てしまう。
食事の味がよくわからない。
気付かない内に興奮しているのだろうか。
ふと、青年と目が合う。
青年は笑みを浮かべて有希を見ている。
（嫌な笑顔）
どこか高圧的な、高慢な笑顔だ。
自分は目の前の有希よりも、圧倒的に上の立場にいるとでも言いたげな目は、有希を蔑んでいる。
構わずに食事に集中する。スープを口にしようとしたらまだ熱くて「あちっ」と慌てて離す。少しこぼしてしまった。
そんな仕草を見られたのも嫌で、青年をちらと盗み見る。――やはり有希を見つづけている。
「余裕だな」
「……何の事？」
「いやぁ、アドルンドのお嬢様には、やっぱりナイトが迎えにくるって？　――お前、本当にそんな事信じてるのか？」
軽そうな笑顔が、重たい事実を軽くする。
（そんなこと）
「思ってるわけないじゃない」
吐き捨てるように言って、食事を急いでかき込む。早く食べ終えて、このおしゃべりな男の口を止めたい。
「そんな事言って、本当は待ってるんだろ」
「うるさい」
言って、ラストスパートを掛けるように、皿を傾けてスプーンでかき込む。最後にスープを飲んで流した。
「待ってんだろ。藍色の髪の毛の、王子様をよ」
「は？」

誰の事を言っているの。そう言おうと立ち上がると、それよりも早く扉が開く。
そこから入ってきたのは、数人の番兵と――縄に繋がれたアイン。
「アインさん！」
猿ぐつわをされたアインと目が合う。どんな仕打ちを受けたのであろうか。目が赤くなっているアインは有希を見て、くしゃっと顔をゆがめた。
（なんで、どうして）
どうしてアインがこんなところに。
（そんなの決まってる）
有希を助けるためだ。それ以外に、こんなところに来る理由は無い。
申し訳ない気持ちでいっぱいになる。そんな格好をさせることになってしまって、きっと苦しい思いも沢山しただろうに。
（あたしのせいだ）
アインに駆け寄ろうと、ベッドを降りた瞬間、ぐらりとめまいがした。
「あ……れ？」
平衡感覚が鈍ったように、あたまがぐらぐらと揺れる。それは立っていられないほどのもので、その場にぺたんと座り込む。
視界の中のアインが歪む。
（なに、これ）
きぃんと耳鳴りが絶えず聞こえている。アインの叫び声も聞こえる。そんな中、青年の声だけが不思議とはっきり聞こえた。
「お前に抵抗されると困るからな。昏倒する薬を飲んでもらった」
その声を皮切りにぷっつりと音が途絶えた。耳鳴りも聞こえない。
（しまった）
次第にゆっくりと、視界がフェードアウトしていった。

38

ぐらぐらと揺れる。
それは気分の悪い日の朝のようで、起きるのが億劫で仕方が無い。
そんな日はいつも、布団の中で丸まって、裕子が何度も起こしに来てくれるのに――つねったり、叩いたり、時にはオリジナルの歌まで歌ってくれる。そんな裕子の陽気さに救われていた。
背中を丸めようとしても、上手くいかない。なんでだろうとぼんやり考えていると、耳がだんだん過敏に聞こえるようになる。
「殺せ！」
男の怒号が聞こえて、はっと目を開ける。
（なにここ）
目の前にいっぱい広がる、広場のような場所。黄土色の土が満遍なく敷かれている。そして柵は灰色の石。その向こう側に群がる人、人、人。
「そうだ！」
自分を検分する。両手が動かない。足も動かない。
首だけを動かすと、木材か何かに十字に貼り付けにされている。そして足元には、薪だろうか。木材が組まれている。
（もしかして）
これで自分は焼かれるのだろうか。そう思うと身の毛がぞっと逆立つ。
広場の中を、真っ黒なもので身を包んだ人たちが、動き回っている。
（火あぶり）
「いや……」
今まで何でもなかったのに、全身が恐怖に包まれる。
手ががくがくと震え、寒くも無いのに歯がガチガチと鳴る。
想像もできなかったものが、今は痛いくらいに有希につきつけら

れている。暴力のような恐怖は、逃げる事しか考えていなかった有希に残酷に襲い掛かる。
「ユーキ！」
自分の名前を呼ぶ声が聞こえて我に返る。
声の主は広場の、有希から少し離れたところにいた。
「アインさん！」
「ユーキ、すみません、僕、僕」
後ろ手に縛られているのか、有希からはアインの腕が見えない。
アインがくしゃりと顔を歪ませた。
有希は首をぶんぶんと振る。
「ううん、あたしこそ、ごめんなさい」
ごめんなさい。ごめんなさい。何度も心の中で反芻する。
そんな格好をさせてしまって、そんな場所に座らせてしまって、ごめんなさい。
（これは、罰だ）
こんな事なら、何も望まなければよかった。
助けに来て欲しいだなんて、そんな甘い考えをもたなければ良かった。
目の前のアインはボロボロで、そんな風にさせてしまったのが有希なのだと思うと、ごめんなさいという気持ちで消え入りたくなった。

有希の目の前に、今はどこか懐かしい、あのガラス玉の瞳をもったパティが立っている。
絶望に呆然としている有希の前で、とうとうと、抑揚なく無表情で何かを喋っている。
アインが視界の端で泣いている。涙を拭うことが出来ないのだろう。ぱたぱたとこぼれた涙が足元で小さな水溜りを作っていた。
パティの後方で、青年が立っている。今朝はあんなにも軽そうな笑顔を振り撒いていたのに、どこか真剣そうな面持ちだ。

一体何が起きているのだろうか。
ぼうっとした頭が動かない。それは諦めなのか、それとも現実逃避なのか、わからない。
ただ、どこかで響く「殺せ」という言葉が、心を蝕む。
――それは、有希に対しての言葉なんだろう。
あちらこちらから聞こえるその言葉。それを発する誰もが、有希が死ぬことを望んでいる。有希が処刑される事を望んでいる。
その言葉が、ゆるやかに有希を死へ誘う。
『もしあたしが死ぬことで誰もが救われるなら、喜んで死ぬわ』
この広場の、石の柵の向うで有希を見ている人は、有希が死ぬことで喜ぶ人なのだろうか。
（こんなに、いっぱい）
見れば、老人や、幼い子供までいる。その誰もが、有希の死を望んでいるのか。
「ユーキ」
パティが、有希を見ている。その目はどこまでも空虚で、何を考えているのかわからない。
「何か、言う事はあるか？」
なにか、いうことはあるか。
それは、最後の言葉という意味になるのだろうか。
「……ねぇ、パティ」
パティは黙ったまま動かない。
「ここに居るみんなは、あたしが死ぬことで、喜ぶのかなぁ」
（誰かの死を、喜べるなんて）
「幸せに、なれるのかなぁ」
（誰かの死の上に、幸せって成り立つの？）
それが、この世界の実態なのだろうか。有希にはわからない。
パティは有希の質問を、まったくの無表情で受け取る。
やや間があって、パティは口をひらく。
「わからない」

わからない。パティの無機質な声が耳に響く。
「わからない？　どうして？　パティもあたしが死んだ方が良いって思ってるんでしょ！？」
パティが数度瞬きをする。有希ははっと目を瞠る。
――知っている。これは、パティが驚いたときに取る行動だ。
（何？　そんな事思ったことなかったっていうの？）
パティは、有希を死ななくても良いと思っていてくれていたのか。
けれど、何故。
どうして助けてくれなかったのだろう。どうして見殺しにするのだろう。どうして、死ななきゃならないんだろう。
どこに行く事も無かった怒りが、ぐつぐつと煮えたぎる。ずっとはけ口を探していた怒りが飛び出す。
「なら……ならどうして！　どうして助けてくれないの？　あたしが死んだ方が良いって思ってるから何もしなかったんでしょ！？　わからないって何よ！」
頭が真っ白になる。このぼんやりとした人は、一体なにを考えているのだろう。なにをしたいのだろう。
「わからないって、なによ……嘘でも言いからそうだって、ユーキが死んだら皆が幸せになるって、言いなさいよ」
（そうしたら、踏ん切りがついたかもしれないのに）
「あたしのここに来た意味って、生きていた意味って何……？　教えてよパティ。答えて、ねぇ、答えて！　答えてよパティ！」
（いやだ）
死にたくない。死にたくないしにたくない。
「死にたくないよ！　ねぇ、助けてよパティ！　パティーーッ！！」
パティが、弟に連れられて離れてゆく。パティは一度有希を振り返ったが、背を向けて遠くへ行ってしまった。
胸の傷が、ジリジリと痛む。もう痛くないと思っていたのに、焼けるように痛い。
胸の痛さに眉をひそめていると、黒づくめの人が、たいまつを持

って現れた。
（うそ）
まさかそれで、この木を焼くのか。
「いやだ」
いっそう賑わう辺りの声に、有希の呟きは掻き消える。
黒い覆面をしてあるその人が、どんな顔をしているのかわからない。
（笑ってる）
なのに、有希はそう感じる。
（みんなみんな、笑ってる）
何故だか、そう悟ってしまった。みんなみんな、有希の死を望んでいる。みんなみんな、有希の死を願っている。
気付くと、覆面が数人現れて、有希を囲む。皆手にたいまつをもっている。
「何がそんなに嬉しいの」
どの言葉が切欠だったのか。覆面が一斉に有希の貼り付けられている木の根元に火をつける。木が組まれていたそこに、火が燃え移る。
（あつい）
火は有希のところまでやってきていないが、熱気が立ち昇る。それが、火傷しそうに熱い。
ああ、とうとう逃げられずにここまで来てしまった。
さっきまで半狂乱になって叫んでいたのに、頭のどこかが冷静になっていた。
有希に死ねと唆す声援も、いまはなにか別のもののように聞こえる。
去っていく覆面達が見える。何かを叫んでいるアインの姿が見える。
不思議と、遠くに居る人々の顔まではっきり見えた。
（笑ってる）

みんな、笑っているように見えた。とても嬉しそうで、とても充実している笑顔。

思わず、有希もつられて笑った。

笑ってみると、何もかもを全て忘れられるような気がした。

39

風が吹いた。はじめそれは、やわらかなものだった。どこからか甘い香りを運んでいる。

風が吹いた。気付けば砂埃が舞っていた。赤い花弁も、どこからかやってきて舞っている。

風が吹いた。やがて有希を燃やす炎も横になびく。

風が吹く。それはかまいたちのようにとぐろを巻いて、木々を揺らす。花びらが、舞い上がる。

有希の前に一人の女性が立っていた。年のころは二十代中頃。ショートヘアーの黒髪が、風にたなびいている。

女性は笑って言った。

「この状況で笑ってみせるなんて――キワモノねぇ」

全ての感覚が見当たらない。炎がごうごうと燃える音も、焼ける痛みも、何もかも感じない。そんな中、女性の言葉だけが素直に入ってくる。

「アタシの偽者が捕まったって聞いたから来てみれば――本当に紫の目の子見つけるだなんて。頑張ったわねぇ」

女性は腕を組んで、ぼやくように言っている。しげしげと有希を見ている。そして、胸元の傷に気がつくと、途端に顔が苦くなる。

「手の込んだ事を――しかもリコリスだなんて……それも、蕾っていうのがやらしいわ」

女性が少し、縮んだ気がする。いや、間違いなく縮んでいる。

「アドルンドのマザコンも、趣味が悪くて胸糞悪いわ」

女性――というより、十代中頃に見える少女は、有希と目が合うと、にっこりと笑った。

「アンタも可哀想にね、そんなモン付けられて。――痛かったでしょ」

慈悲を浮かべた少女は、気付けば有希と同じくらいの体格になっ

ている。
「あなたは……？」
黒髪ベリーショートヘアの少女は、ニッコリ笑って言った。
「アンタの本物よ」
少女の紫色の瞳が、きらりと光ったような気がした。
有希の本物――つまり、伝説の魔女ということか。
「昔からよくあるのよー。アタシの偽者捕まえたーっていう話。――まぁ、ここしばらくなかったんだけど。唆された魔女が瞳を紫に見えるように幻視をかけたり、暗示をかけたりしてサァ」
少女がじぃっと有希を覗き込む。
「でもアンタ、本物だね」
（え、え、ええ？）
何も理解できないでいる有希を放置して、少女は言いつづける。
「まぁ、偽者だろうが本物だろうがどうでもいいんだけどさ、助けてあげるね？」
「……へ？」
突然あらわれてあっさりと「助ける」と言われても、困る。
「どうして、助けてくれるの？」
助ける義理なんて無いだろうに。むしろ、有希は少女の名を騙っている。
「どうしてって、面白いこと聞く子ね。助かりたくないの？　そんな状況でさぁ。さっきあんだけ泣き叫んでたのに」
それは、そうだけど、と口篭もる。下を向くと、炎が固まっていた。
（そういえば、熱くない）
炎が燃えているその形で固まっている。
少女を見遣ると、あぁ、と笑う。「こうでもしないと、アンタと会話できないじゃない」
「困るのよねー、伝説の魔女が死んじゃうっていうと。せめてアタシが死んでからそういう話題をして欲しいわー」

やれやれと肩をすくめる。
「とりあえず、面倒だからアンタをそこから降ろして、テキトーに連れ出すわ。それでいい？」
それでいいかと突然問われても、有希には何がどうなっているのかさっぱりわからない。
（そもそも、今、この瞬間、どうやってどうなってるの？）
理解ができない。と、頭を抱えたくなる。
「いい？」
少女が念を押すように聞く。返答に困っていると、ため息が聞こえた。
「ああもう、アンタは生きたいの？　死にたいの？　どっち！？」
瞬間、先ほどの惨状がよみがえる。足元から上る熱気、そこら中に蔓延した殺気。狂気。無機質な瞳。あちらこちらから聞こえる「死ね」という言葉。
「っ死にたくない！」
少女がニッコリわらった。
「ヨクデキマシタ」
少女が、指をパチンと鳴らした。

ふと気付くと、全ての感覚が戻った。
足元が焼けるように熱い。辺りから聞こえる喧騒と、野次と、怖いほどの殺気。
先ほどと違うのは、甘い花の香りがすることと、アインと有希との間に立っている、少女の姿。
少女がにやりと笑う。そして高らかに声をあげて笑った。
信じられないほどに響いたその声は、辺りを静めるのには何の苦労も無かった。
「見てる？　マルキーの王様、そしてへっぽこ王子様」
どこかに向かって手を振っている。その少女の足元から、薔薇の蔓が無数に延びている。そしてそれが有希の所に向かってきている。

やがて蔓は有希の足元の炎を鎮火して、更に上に上にと伸びてくる。
「だめじゃない。アタシのこと間違えちゃ――オシオキしちゃうぞ」
風が、舞い上がる。
「何、コレ」
いつのまにか有希を包んでいる蔓にうろたえる。
「ユーキ！」
アインの声が響く。
「アインさん！」
少女がアインを見る。
「あら、アンタあの子の知り合い？」
「ユーキをどうするんですか！」
「アンタ、あの子助けたい？」
「当たり前じゃないですか！」
「ならアタシが助けてあげる。――アンタも捕まってるのね」
にっこりと微笑むと、アインの目の前で手を叩いた。すると、アインは力が抜けたように、すぅっと横に倒れた。
「アインさん！」
有希が叫ぶと、手をひらひらと振りながら鷹揚に少女が言う。
「だーいじょーぶよー。悪い事はしないから」
少女は再び、どこかを睨んでいる。
「アドルンドのマザコンになに言われたか知らないけどねぇ、アンタもシスコン直さないと、世界が壊れるわよ」
蔓が有希の体中を包む。風が舞う。真っ赤な花弁が舞う。
有希は蔓に包まれ、視界が真っ暗になった。
次に目を覚ましたのは、見たことも無い家だった。

40

こうやって、知らない場所で目を覚ますのは何度目だろうか。
危機感がないなぁと毎回思ってしまう。
「起きたぁー？」
どこかで声が聞こえる。むくりと起き上がると、そこは普通の部屋で、可愛らしいデザインのベッド、テーブル、ソファがある。
有希はソファに寝かされていたらしい。
「起きました……」
何があったのか良くわからない頭で、返事を返す。
部屋の隅には次の部屋へ続いてるらしい隙間がある。なんだかとてもいい匂いがする。美味しそうな匂いに反応して、身体が空腹を訴える。
（どうしてこう、緊張感がないかなぁ）
自分でも恥ずかしいと思いつつ、きゅるきゅると鳴る腹部をさする。
しばらくさすっていると、少女がトレイを抱えて入ってきた。
「はい！　お待ちどーさま！」
言って、トレイをテーブルに置く。
こなれた手つきでグラスに水を注ぎ、椅子に座る。きょとんとしている有希に、少女はホラっと声を掛けた。
「何してんの？　早く食べなよ」
「え？　あ、ハイ……」
全くわからない。だが、言われるままに向かいの椅子に座る。少女は既に食べ始めていた。
「いただきます……」
おずおずとスプーンを手に、食事をはじめた。
伝説の魔女の作った食事は、美味しかった。

そういえば、伝説の魔女の名前を、誰も教えてくれなかった。
食事を終え、お茶を飲んでいるときにふと思い出して、少女に言うと『知らなくて当然よ。伝説の魔女っていう単語が一人歩きしてるんだから』と笑った。
「ヴィーズィー・ヴィリー・ディヴィドゥム、ヴィヴィって呼んで」
「ヴィー……？　ヴィヴィ、ね」
どうしてこの世界の人たちの名前はややこしいんだろうと、目をぱちくりとさせた。
「アンタの名前は？」
「春日有希、有希って呼んで」
ヴィヴィは『ユーキね』と、笑む。
「でも何で、アタシの名前騙ったりしたの？」
「あぁそれは」
フォル城での出来事を話したら、ヴィヴィは腹を抱えて笑い出した。
「あー、あのネチネチ狐ね！　へぇーっ、そんな事したんだ！　あっはっはっは」
未だに狐になりきってないと言うと、真顔で『今度もう一回行こうかしら』と言った。
ひとしきりヴィヴィの笑いが収まると、有希は居住まいを正し、頭を下げた。
「あの、助けてくれて、ありがとうございました」
「あら。どういたしまして」
「それで……一つ聞きたいんだけど」
「なにー？」
二杯目の紅茶を入れながら、ヴィヴィが視線だけを投げる。
「あの、アインさんはどうなったのかなって」
「ああ、あの魔術士の子？　――あの子はアドルンド領地に放り投げてきたわ。あぁ、本当に放り投げたんじゃなくて、そっと置いてきたわ。今ごろ家に帰ってるんじゃない？」

（それは同じ事なんじゃ……）
あえて聞かずに、へぇとだけ答えた。すると、ヴィヴィは何かを思い出したようにむすっとした。
「あれだけ大仰に騒ぎ立てたのに、ユーキ……っていうかアタシ？　死んだことになっちゃったじゃない」
ぷりぷり起こりながら、ヴィヴィは紅茶を一気に飲む。
「え？　だって、あんなに派手に……」
「そうよ！　だからあんなに派手に救出したっていうのに！　きっと、マルキーがお抱え魔女でも出して幻視でもさせたんでしょうよ」
「お抱え魔女？」
聞きなれない言葉に、聞き返してしまう。
「あぁ、そうか。普通の人は知らないのよね。ユーキ、前に魔女狩りがあったのは聞いてる？」
普通の人じゃないんだけどな。と思ったけれども、黙って頷く。
「うん、少しなら」
そう、と、ヴィヴィは声のトーンを落として喋る。
「前にね、結構大きな規模の魔女狩りがあったの。十年くらい前かしら。リビドムが滅んだ頃あたりね。――その時に、捕縛された魔女はこう突きつけられたの。『死ぬか、この国に忠誠を誓うか』って」
「そう……なんだ」
知らなかった事実に、有希は驚く。
力の弱い魔女は皆殺され、長生きしている魔女は自分の矜持を持って死んだ。屈服した魔女は、時に慰み者にされ、時に力を悪用され乱用され、ボロボロにされて殺された。
そして、いよいよ魔女人口が減ってきたあたりで、各国は魔女の重要性に気付き、無体をすることは減ったという。
「表向きは、魔女なんてーって迫害してるのに、その実情は魔女を囲ってるの。――魔女には忠誠を誓うような国なんてないのにねぇ」
「でも、どうして魔女を迫害するんだろう……あたし、魔女がそん

な悪いようには見えないんだけど」
魔女は、一体何をしてそんなに迫害を受けるようになったのだろう。
ヴィヴィは一瞬きょとんとして、そして派手に笑い始めた。
「ふふ、あはははは。おっかしいの！　アンタ本気でそんな事言ってるの？」
魔女を庇う発言をして、それを笑われたのが不服で、有希はヴィヴィをねめつける。
「いい？　覚えておきなさいユーキ、魔女はね、基本的に悪いものなのよ」
「どうして」
ヴィヴィは有希を助けてくれたではないか。そう言うと、失笑される。
「それは気まぐれよぉ。伝説の魔女を騙る人間なんて、今時そうそういないからねぇ――でもねユーキ、アタシが本当に優しかったら、あの魔術士の坊やもちゃんとお家まで届けてるわ」
魔女はね、女なのよ。
ヴィヴィはそう言って淫靡に笑う。その体躯に似合わない妖艶さが、よりいっそう色香を匂わせる。
「いっくらでも装っていい女になれるから、容姿に恵まれる。そしたら今度はイイ男を捕まえたい。狙ったら落とすまで気がすまない。侍らせたい、モテたい。ちやほやされたいっていう欲求に素直に従っちゃうの。だから男に妻がいようが婚約者がいようが気にしない。何だって出来るわ。惚れ薬を調合したり、好みに合わせてみたり。それで骨抜きにして飽きたらポイって捨てちゃう。――でも人間の女はどう？　すぐ老いるし、美貌だってイイのはほんの一握り。そんな女と魔女が張り合えると思う？」
そして、狂った女はアタシ達や男を殺す。何事もないようにそう言われ、有希は目を瞠る。
まぁ、それならまだいいわ。ふと、十歳ばかりの身体に見合う笑

みを浮かべる。
「さてココで問題。魔女が狙った男が、王様だったり、王子様になったらどうなると思う？」
突然振られた問題に、有希は戸惑う。
（え、えーと、魔女は男の人が好き、で、人間の女の人は魔女には敵わない、で、その狙った男の人が王子様とかだと……）
「わかった！　子供が生まれない」
魔女はなかなか孕まないと、アインが言っていた。自信を持ってヴィヴィを見ると、ヴィヴィはにんまりと笑って『ブーッ』と言った。
「何で？」
「ユーキ、王や王子にはね、身分のたかーい正妃様っていうのがつくの、わかる？　大抵その人の子供が次の王様になるもんなの」
「へぇ……そうなんだ」
（知らなかった）
「そこで、よ。もし王様ないし、王位継承者を魔女が夢中にさせちゃったら、正妃の所に行かなくなるのよ。トーゼンね」
嬉しそうにヴィヴィが笑う。その『正妃の所に行かない』自信はどこから湧いてくるのかと思うと、すこし怖い。
「正妃っていうのはね、イイ家の娘だからね。正妃ないし側室になって、王の寵を貰うためだけに育てられるのよ。それなのに寵がもらえない、自分の存在価値が無い。貴族の娘も矜持があるから、そこで企てるわけ。――魔女を殺そうって」
「ど、どうしてその、魔女を殺そうってい所まで飛んじゃうの？」
「さぁ？　身の危険になるようなものは排除したいんじゃないのー？」
アタシ魔女だからわかんなーい。と、けらけらと笑う。
「でもね、人間だけが悪いわけじゃないのよ。――魔女は、それこそ人を呪ったりするしね」
「え？　なに？」

最後がよく聞き取れなかった。と言うと、ニッコリと笑われる。
「なんでもないわよー？　まぁ、一人の魔女を争って、国の王子サマが争ったりして戦争になったこともあるからねぇ、魔女は危ないの。――でも、魔女の力がないと、国が繁栄していかないのも事実なの。だから魔女を全滅させることが出来ない。魔女のお陰で出来た文化もあるわけだし」
「へ、へぇ。そうなんだ」
「そうよー。騎士制度だって……」
言って、ヴィヴィは有希をまじまじと見た。
「あれ、アンタ契約してるんだ」
「え？」
有希は自分を検分する。特に何も変わらない。
「わかるの？」
契約の証である指輪を、有希は今持っていない。思わず右手中指を触る。
「わかるわよ。魔女だもん。騎士と主人は繋がってるの。でも人間には見えないから、人間にもわかる契約の証として指輪作ったんだから」
言って、ふーん、へぇー、そうなんだぁー。と、ヴィヴィがニヤニヤと笑う。
「ユーキわっかいのに、よくやるわねぇ」
下世話な笑顔で、ヴィヴィ笑う。
「え、なに？　やっぱカッコイイ？　ちょっと教えなさいよぅ！」
「カッコイイって……」
言って、有希はルカを思い浮かべる。
高い身長、整った顔立ち、深い海の色の瞳。――非の打ち所が無い。
「う、うるさいなぁ！　ヴィヴィには関係ないでしょ！」
「あぁん、ちょっと、そんな意地悪いわなくったっていいじゃない」
なんだか、言いたくなかった。

41

魔女は成長をしない。そんな言葉を聞いて、心のどこかで『実は魔女なんじゃないか』と思っていた。
本物の魔女――しかも、伝説の魔女と謳われているヴィヴィを目の前にして、言おうか言うまいか、悩んでいた。
有希が起きた家はどうやら、ヴィヴィの『今のところの』寝床らしく、普通の家だった。
外に出てみると、辺りは深い森で、すこし歩いたところに小さな滝と泉があった。
起きた時間も朝だったらしく『ユーキの騎士について』根掘り葉掘り聞かれる前に、そそくさと散歩に出かけた。
靴を脱いで足を泉に突っ込むとひんやりとして気持ち良い。
時折足をばたつかせて、きらきらと輝く水に、ほうっと見とれていた。
（あたし、実は本当に魔女なんじゃないかなぁ）
日本人は、この世界でいう魔女なんじゃないかとも思う。
（だってホラ、パパが『力』とか言ってたし）
それは、魔女のそれと同じなのではないだろうか。
（魔女は身体に刺青があるって言うけど、あたしはまだ力が発現してないから、出てないだけっていうこともありうるよね……）
もし、自分が魔女だったら。
全く持って想像つかないけれども、そうだったら、これから何年この姿で生き続けなければならないのだろうか。
そう考えると、ため息ばかり出た。

伝説の魔女。というと、どこかとっつきにくくて、怖い人だと勝手に想像していた。
実際のヴィヴィは面倒見がよく、いろんな話をしてくれる。お茶

を飲みながら話をするのがとても好きらしく、いろんな種類のお茶を持っていた。
時折、恐ろしいことを口にするのを見ると「ああ、魔女なんだなぁ」と思う。長年生きているからこその言葉の重みなんだなと感心させられる。
昼食も済んだ頃、お茶を入れながらヴィヴィが突然「で、ユーキはこれからどうするの？」と問い掛けてきた。
「え？」
「いつまでもウチに居ないでしょ。この後どうするの？」
「ええと、とりあえずアドルンドに戻らないと……みんな心配してるだろうし」
（それに、ちゃんと謝らなきゃ）
ヴィヴィが怪訝な顔をする。
「アンタみたいな子供がどうやってアドルンドまで行くのよ」
（子供って……ヴィヴィも似たようなものじゃない）
深みのある紅茶の匂いが立ち込める。ヴィヴィの淹れる紅茶はとても美味しい。
有希はカップを持って、唇を尖らせて言った。
「あたし、こう見えても十八なんだけど」
「え！？」
驚愕に顔を有希の方向へ向けたために、カップから紅茶がこぼれる。
しばらくヴィヴィは有希をまじまじと見つめて「あぁ、なるほど」と呟いた。
「成長、止まってるのね」
あっさりと容認したヴィヴィの寛容さに驚きつつ、有希は頷く。
「……ねぇ、ヴィヴィ」
ヴィヴィはカップに口をつけながら有希に視線を送る。
「あたし、実は魔女なんじゃないかなって思うの」
瞬間、ヴィヴィが紅茶を吹いた。

対面に座っている有希に、盛大に紅茶が掛かる。
「あっつ！　何？」
吹いたと同時に器官にも紅茶が入ってしまったらしく、ヴィヴィが苦しそうにむせている。
「ヴィヴィ、大丈夫？」
覗き込むように見れば、信じられないものを見るような目で有希を見ている。
「アンタ……本っ当に何も知んないのね」
手近にあったランチョンマットで、ヴィヴィが有希の顔を拭きながら言う。
「アンタは魔女じゃないわ。それは、紛れも無く事実よ」
「そうなの？　でも、あたし成長止まってるし、もしかしたらどこかに刺青が」
「ないわ」
わかるの。ヴィヴィがキリリと答える。
「アンタには花が無い」
「っ悪かったわね、華がなくて！　そりゃぁ、そんな綺麗な顔なんてしてないし……」
「違うわよ。花の刺青、とも言うけど刻印（しるし）よ。故意に隠そうとしない限り、基本的に魔女はわかるわ。……っていうか、ユーキ。魔女の成長がどうやって終わるか知ってる？」
「え、知らない」
ヴィヴィがやれやれと肩をすくめる。
「魔女は皆花の蕾を持って生まれるの。そして花が開くと同時に、成長が終わるの」
「へぇー、そうなんだ。それで、どうやったらその、成長が終わるの？」
「男の人とすること」
「する？　するって何を……」
言うと、ヴィヴィが淫靡に笑う。有希は顔がぼっと赤くなるのが

わかった。
（ちょ、それは、そういうことデスカ！）
ということは、ヴィヴィはかなりの早熟だったのではないのかと、下世話な事を考えてしまった。
「だから、元々刻印が無いなんていう魔女はいないの。わかった？
――それに、ユーキのは成長しないんじゃなくて『止まった』のよ」
確信しているような口ぶりに、有希は不審を募らせる。
「どうして、そうだって言い切れるの？」
髪の毛も爪も伸びない事を、ヴィヴィに言った覚えは無い。
ヴィヴィがふっと微笑む。
「アタシは赤味が強いけど、ユーキは青味が強いのね」
何が。と、問い掛けようとして気付く。
（紫色だ）
「ねぇユーキ、この世界で紫色の瞳がどうして珍しいかは知ってる？」
「え？」
珍しいというのは、単に滅多に現れないからではないのだろうか。
「劣性遺伝子だから？」
「れっせいいでんし？　なにそれ。知らない。――なら、リビドムの人間には不思議な力があるっていうのは聞いた事ある？」
「あ、うん。それは知ってる」
（アインさんに聞いた）
「そう。リビドムはその力で、荒れてた土壌を豊かにしたり、医療技術を発展させたわ。だから、その不思議な力を持つ国の頂点に居る人は？」
はっとしてヴィヴィを見ると、「わかった？」とニッコリと笑われた。
「アンタも、不思議な力を持ってるのよ。紫の瞳は、とても強い力を持ってる証なの」

それは、快斗が言う『力』と同じものを指しているのだろうか。
「でも、あたし……そんな力なんてないよ」
この世界に来たら、何かが変わると思っていた。
「アンタの力、特化しちゃったのね。精神と肉体に負担が掛かりすぎるから、止まったみたい」
言う事がよくわからない。つまり、力に自分が付いていけないから、止まったという事か。
「それは……あたし、ちゃんと年相応になれるって事？」
「なれるわよ」
有希が八年間悩んでいた事を、気持ちのいいくらいの即答でかえしてくれた。有希は驚いたのと嬉しいのとで舞い上がる。
「ホント！？　いつ？」
「いつか。くるかもしれないし、こないかもしれない、いつか」
喜んだのも束の間、一蹴された。
「……ヴィヴィ、そういうこと出来ないの？」
「できないわよー。そんな人体こねくりまわすなんてこと」
「え、だってイシスの事狐にしたじゃん」
「あれは幻よ。周りも本人もそう見えるようにしただけで、実際は普通の耳。治癒系は人体に影響するけど、アンタのはそれとは違うしねぇ」
沢山の情報が頭に入り込んできて、よくわからない。
「結局、どうしたらいいの？」
ヴィヴィがきょとんとして言った。
「アタシに聞くの？　自分で決めなさいよ。アタシはアンタの母親じゃないんだから」

42

髪の毛を、伸ばしたいと思っていた。時にはばっさり切って、ショートカットにもしてみたかったが、伸びる見込みが無いからセミロングの長さから変えることができなかった。
目線の高さも、もっとあればどれほど良いかと思っていた。
もっと。
もっと。
もっと――。
願いは尽きない。だがそれが突然手に入ってしまうと逆に戸惑ってしまう事もある。
有希は、まさにそんな状況だった。

事の発端は、有希が「アドルンドに行く」と告げた事だった。
早く行かなければ。皆に会わなければ。突然いなくなってしまった事を、きっと気にしているだろう。
そう、気を揉んでいる有希に、ヴィヴィは言った。
『別にいいんじゃないのぉ？　行かなくても』
『ううん、ちゃんと謝る』
『あらそう。でも、目立つよ？　紫の瞳を持った十歳の女の子が一人旅だなんて』
『……わかってる。でも行かなきゃ』
どうするべきかうんうんと悩んでいると、対面のヴィヴィが、すごく楽しそうに笑っていた。
『……何？』
『いやだ。ヴィヴィちゃん、すっごくイイ事思いついちゃった』
（ヴィヴィちゃんって）
『自分が戦場に行く事よりも、皆に会ってちゃんと謝りたい。皆が心配で心配で仕方が無い。ねぇ。健気だこと。だからそんな健気で

可愛いユーキちゃんの為に、一肌脱いであげよう』
語尾にハートが飛びそうな程に甘ったるい声を出して、ヴィヴィが有希に詰め寄る。
『あんまりにも健気だから、おねーさん親切と一緒に――意地悪もしたくなっちゃう』
『え！？』
ヴィヴィがパチンと指を鳴らした。
途端に、有希の足元から薔薇の蔓が巻き上がる。視界が真っ赤な薔薇の花びらで埋まる。
『やだ、ちょっと何コレ？』
次に視界が開けたとき、ヴィヴィが低い位置に居た。

背中の中ほどまで髪の毛がある。先ほどまで着ていたヴィヴィの服も、大きなサイズになっている。
ヴィヴィが有希を見上げている。満足そうに笑って「どう？」と言った。
「どうって……」
「いや、だから、一人旅しても大丈夫なくらいの年齢にしてみた。十六くらいかなぁ。ユーキ十八なんでしょ？それなら大きくなったときに実感したらいいから、十六歳にしてみた」
見てみる？　と、部屋にはめ込まれているクローゼットの扉を開く。扉の裏側が姿見になっている。
そこの前に立って、改めて検分してみる。
少し大人びた顔、背中の真ん中あたりまである黒い髪、伸びた手足、そして――。
「黒い瞳だ」
虹彩が黒くなっている。
「そ、下手に紫だと売り飛ばされたりしちゃうからねぇ」
「これも、幻なの？」
「ううん。コレは、元の身体に色々くっつけたの。瞳あたりはまぼ

ろしだけどね。でもまぁ、他の魔女が見てもわかんないようにはしてあるからだいじょーぶ！」
「……ありがとう、ヴィヴィ。優しいね」
じんわりと嬉しさがこみ上げる。どうして、からかいながらもこんなに優しくしてくれるのだろうか。
有希は姿見に見入る。大きくなった自分の姿を何度も想像した。何度も何度も夢見ては落胆した。
（黒い瞳）
みんなと同じ、黒い目。
鏡に映る自分の頬を撫でる。ふと、真面目な声が聞こえる。
「そう……誰にもわからないようにしてある。だから、ユーキの友達が見ても、ユーキだってわかんないよ」
「え」
振り返ると、冷めた笑みを浮かべているヴィヴィが居た。
「ヴィヴィ？」
「……アタシは優しくなんかないわよ」
人が変わったように酷薄な笑みを浮かべるヴィヴィに戸惑う。
「長いこと生きてるとねー、退屈なのよ」
ニッコリと笑ったその笑顔はどこか怖い。どこがと聞かれると困る。ヴィヴィは確かに笑っている。笑っているから、怖い。
（本当に笑ってるのに、怖い）
オルガのように目だけ笑ってないわけではない。本当に、楽しんでいる。
「退屈だからあちこちに、種をまくの。楽しいコトの種を」
「種……」
「そう、種。楽しい事が起きそうなら、手助けでもなんでもしてあげる。だから、アタシを楽しませて頂戴？」
その冷ややかな笑みが、ぞわりと背筋をなで上げる。
「ゲームをしよっか。カンタンなゲーム。ユーキが元の姿に戻ればいいだけ。そしたらユーキの勝ち」

「え、ええ！？」
「戻れなかったら、ユーキは一生その格好ね――あぁ、そこんとこも考えて、年齢と共に老いるようにしてあるから」
そうねぇ、と、愛らしく口元に人差し指をあてて考える仕草をする。そして、何かを思いついたようにぱぁっと笑う。
「ユーキの騎士と目が合うまで！　カンタンでしょ！」
「ちょっと待って、待ってよヴィヴィ！　いくらなんでも勝手すぎるよ！」
「……勝手？」
きょとんと有希を見つめたのも束の間、底抜けに無邪気な笑顔で言った。
「ユーキは思い知るといいのよ。アンタのその献身さが、みんなの目にどう映ってるか。人と人とのつながりの曖昧さとか、薄っぺらさを」
有希に歩み寄り、背伸びをして頭を撫でた。
「そしてアタシに見せて。騎士と主人の絆を」
必要なものは何でも渡してあげるから。どこか寂しげに言うと、有希から離れてするすると隣の部屋に行ってしまった。
（何か、あったのかな）
気に障るような事でも言ったのだろうか。
時折見せる、悟りきったような表情。何が彼女をそうさせているのだろうと思うと、少し胸が痛い。
（思い知るといい……か）
有希はヴィヴィのやることを、憎いとは思えなかった。
どれだけ長く生きているのだろう。聞けば「忘れた」とはぐらかされた。
途方も無く長い時間。きっと有希には想像すらできないだろう。
突然「ゲーム」と称して、おかしな事を言ったけれども、なんだか憎めないでいる。
（それにしても、騎士と主人の絆……かぁ）

そんなもの有希とルカの間にあっただろうか。

有希が居たところは、リビドムだった。

食後のお茶を終えたかと思うと「思い立ったらソッコー行動！」と言って鞄を持ってきたヴィヴィに言われた。

ヴィヴィに着替えと路銀を貰い、そして地図を渡された。地図はテーブルの上に広げてある。

「いーい？　ココはリビドムのちょーどド真中なのね。それで、西南に下っていくと山脈があるの。確かこのあたりの山が一番小さいかな」

そう言うと、ペンでそのあたりに丸を書く。

「山を下ったら更に南下。この海のちょっと手前がアドルンド王都ね」

結構遠いわよー。と、のん気に言われる。

有希はその一言一句忘れないようにと頭に叩き込む。

「……うん、大体わかった」

（とりあえずは、南下して山を越えなきゃ）

「ありがとうね、ヴィヴィ。わざわざ教えてくれて、お金まで貰っちゃって」

笑いかけると、面食らったような顔がある。

「……？　どうしたの？」

更に問いを重ねると、ヴィヴィはこれ見よがしにため息をついた。

「ユーキって、底なしのお人よしなの？　普通はそんな、一方的に勝手にゲーム押し付けた魔女に対して「ありがとう」とか言う？　それとも何、ただのバカ？」

「バッ……バカじゃないよ！　あたしよりも、ヴィヴィの方がお人よしだと思うけどなぁ。あたしの事助けてくれたし、こうやって荷物だってくれたじゃない。――本当に貰っていいの？　やっぱり返したほうがいい？」

「いらないわよ！　まったく、アタシはいいの。単なる親バカだか

ら」
（親バカ？）
誰に対しての。と、聞くよりも早く笑ってはぐらかされてしまった。
「この世界の子達はみんなアタシの子供なの！　さ、行った行った！」
シッシッと、手で追い払うように急かす。
「あはは、行ってきます」
扉に向かって数歩。そして、くるりと振り返る。
「ヴィヴィ、正直騎士と主人の絆って何なのか、あたしわかんない。だからそれをヴィヴィに見せられるかどうかもわかんない。でもね、もしあたしが騎士と――ルカと会えたら、会いに来て？」
「……どうして？」
有希はしばらく、うーんと考えて、口を開いた。
「ルカがどれだけカッコイイか、わかると思うから？」
ぽかんとする事数秒、ヴィヴィは笑い出した。
「なんで疑問系なのよ……そうね、ユーキが元に戻れたらね」
「ありがとう」
そのヴィヴィの笑顔に安心して、有希は扉を開けた。
扉を閉めて振り返ると、そこには家が跡形も無く消えていた。

43

少女が扉を閉めた瞬間に、ぱちんと指を鳴らす。これで少女はこの家を判別できなくなった。
ヴィヴィは笑顔を消して、溜息を一つついて机に突伏した。
「やさしいね――かぁ」
久しぶりに言われた言葉だ。と、目を閉じる。
朗らかに笑う少女の笑みが、瞼の向こう側に見えたような気がする。
「結構意地悪したと思うんだけどなぁ」
嫌味を言っても、意地悪を言っても、彼女は笑って「ありがとう」と言った。
心のどこかに居心地の悪さを感じて、机に額をぐりぐりと押し当てる。
「やっぱりアタシは意地悪よ……アンタに何も教えてないもん」
だがそれは、自分で教えないと決めたことだ。だから後悔はしていない。
あの無垢な笑顔が、あの無邪気な笑顔が、まだ部屋いっぱいに残っているような気がする。
溜息を一つ吐いた。
椅子の背もたれに寄りかかって、背中を反らす。
「ユーキに、アリドルの加護がありますように」
そうぽつりと呟いた。

深い森は太陽の日差しを浴びて、地面にきらきらと光をまぶしてくれる。
有希は目を細めて、太陽の位置と地図を見比べる。
その目はどこかうつろで、足取りもおぼつかない。
――あれから、五日経った。

ヴィヴィの家を後にして、真っ直ぐ南下した。はずだった。
どれだけ歩いても、歩いても、山は見つからない。あるのは高い木々の森で、その隙間からは光のシャワーが降ってくる。
食物も飲み物も底をついて、有希はおぼつかない足で踏ん張る。
「ここ……どこぉ？」
今までの移動はずっと馬だった。それが、ここ五日間歩き通しだ。疲労にがくがくと震える足が悲鳴をあげ、力が入らない。
「のど、かわいた……」
鞄。鞄と呼んでいいものなのだろうか。麻袋に紐を通したものを両腕に通し、背中に麻袋を背負っている――には、衣服と乾物、そして水袋が入っていた。
全て最初の三日でたいらげてしまったが。
最後の力を振り絞って、大きな木の根元に座る。昼夜問わず緊張しっぱなしだったために、疲れが取れない。
（こんなところに放り出すだなんて……）
悪戯っぽく笑う幼い笑顔に悪態をつく。
（迷ったじゃない！）
時には目印を置きながら、時には木に目印をつけながら進んだが、歩けども歩けども同じ所をぐるぐる回ったり、全く知らない場所に出たりと、全然進んでいる気がしなかった。
日差しは有希の頭からさんさんと降り注ぎ、熱を吸収する黒い髪が思考をぼやけさせる。
木の幹に背をもたれて、目を閉じる。
じっとりと汗をかいた首筋に、やわらかな風が吹く。目を閉じると木々の梢がこまやかに聞こえる。
（せめて、雨でも降れば良いのに……）
喉が渇きすぎて、舌まで渇いている気がする。
歩いていれば、そのうちどこか水場でもみつかるだろうと考えていた。
歩いていれば、そのうち誰かに会える。

歩いていれば、そのうち山も見えてくる。
歩いていれば、そのうち町や村が見えるかもしれない。
歩いていれば、そのうち、そのうち、そのうち。歩いていれば。
「……何にも無いじゃない」
甘かった。何もかもが。
近くに誰がいるわけでもない。それなのに、そんな甘い考えで歩きつづけていた。
後悔したときにはもう遅く、それでも有希は歩きつづける事しかできなかった。そうすることしかできなかった。
きゅるきゅると腹が鳴る。そのさもしい音にため息をついて、寝入る体勢に入る。
夜は夜で、全ての物音が動物や虫のもののような気がして、おちおち寝ても居られなかった。
（虫が夜行性だなんて知らなかった）
それとも、この世界だけなのかなぁと思うとやっていられない気分になる。
（ちょっとだけ、休憩）
そう自分に言い訳して、大きく息を吐いた。

雨の匂いがとても好きだった。
突然湿度の上がった空気、土と合わさったときのむわっとした香り。
きんと澄んだような匂い。
雨が降る瞬間が、とてもとても好きだった。
突然、首の右側に痛みが走る。
「いたっ」
驚いて飛び起きる。そして、右手で首を触る。そこには――何かの感触。
「う、わぁああっ！」
慌てて手でなぎ払う。視界に小さな虫が現れる。

（か、噛まれた？）
慌てて立ち上がって、麻袋を掴んで虫から離れる。もし蜂のように襲ってきたらどうしよう。そう思うと、腰が抜けそうになる。
虫は草の中に落ちたようで、特に有希の所に飛んでくる気配はない。
どきどきと心臓が跳ねる。首を両手で押さえて、虫の居た辺りを凝視する。
（何？　やだ、うそ）
ぽつり、ぽつりと頬に冷たいものが当たる。
そこかしこに充満していた雨の匂いが、雨を誘う。
有希の喉が鳴る。
首を押さえて立ち尽くす有希に雨が襲う。
どのくらい寝ていたのだろうか。あれほど晴れていた空がどんよりと黒ずんでいる。
（雨……）
あめ、あめ。
急に喉の渇きを思い出した。
「雨！」
叫ぶと共に、空を仰いで口をあける。ぽつぽつと水が身体の中に染みこんでくる。
（もっと、もっと）
この雨はにわか雨かもしれない。ふとそう思うと、有希は森の中を見渡す。
大きな葉を探して、くるりと巻くと、麻袋から水袋を取り出して口に添える。葉に当たった雨は、葉を滑って水袋の中に落ちてゆく。
小さな枝で葉を固定して、有希はいくつも三角に巻いた葉を作って倒れないように固定する。
少しずつ水の溜まった葉に口をつけ、ぐいぐいと飲んだ。
「生き返ったぁー！」
三回同じことを繰り返したところで、はぁと息をついた。雨はま

だやむ気配がない。
有希は頭から流れ落ちる水を拭う。
「……そういえば、ずっとお風呂も入ってないじゃん」
空を見上げると、どんよりとした雲はどこまでも続いている。
「丁度いいじゃん！　水浴びしよう水浴び！」
何故か段々と愉快な気分にな気分になってきた。少し休んだからだろうか、とても気分が良い。
そのまま履いていたサンダルを脱ぐ。水を含んだ土と草が、やわらかく有希の足を包み込む。
ぴしゃぴしゃと泥水が跳ねても、有希はその場ではしゃいでいた。
体中を水が打つ感覚が気持ちよくて、ずぶ濡れになっても笑っていた。
雨に打たれて、いつまでも立ち尽くしていた。

どのくらいそうしていただろう。いつの間にか目を瞑っていた有希は、人の声で目を開いた。
「――こんな所で水浴び？　いくら暖かくなってきたとはいえ、冷えるわよ」
落ち着いた低い声が聞こえて、驚く。身構えて声の在り処を探すと、そこには傘をさした青年が居た。
（おとこの人？）
遠目でもすぐわかるような長い深緑の髪。長身で少し筋肉質なのに、とても綺麗な顔をしている。左足の膝から下がなかった。膝下から生えるように木の棒があるだけだった。
伺うように見上げると、青年と目が合って、青年は苦笑した。そのまま有希の居る方向へと歩いている。
「その格好も、目に毒だと思うんだけど」
なにが、と思って自分を見返す。
薄手のシャツが濡れて、ぺっとりと身体に張り付いている。申し訳程度に盛り上がった胸元のラインが露になっている。

「うわー！！」
（か、かかか隠さなきゃ、た、確か麻袋の中に上着が……）
慌てて左右を見回す。髪の毛が遠心力で飛ぶ。ぺちりと髪の毛が頬にあたる。
少し離れた草の上に、麻袋が放られていた。
（あ、あった）
取りに行こうと足を出すと、腕を取られた。見上げると、茶緑色の瞳が有希を見つめていた。
「あなた――ブイブイに噛まれたのね？」
「え？」
（ぶいぶい？）
青年の空いていた手が有希の顎を持って動かす。有希はされるがままに左を向かされる。右側の首に青年の視線が当たる。
「やっぱり。――ねぇ、気分が高揚したりして……」
言いかけて、青年はずぶ濡れになって泥だらけになった有希を上から下まで見下ろして、
「るわね」
困ったように笑われた。
（綺麗に笑う人だなぁ）
有希がそんな事をぼんやりと思っていると、青年は有希の首に噛み付いた。

44

昔、ドラキュラの映画を見た。
ドラキュラが綺麗な女性の首に噛み付く時、いつでも女性は恍惚とした顔をしていた。
その淫靡な行為を、幼心にドキドキしながら見ていた。
――なのに、自分はというと。

「いっったぁーい！」
首の一部が何かの引力で吸い取らる感覚がして、体中の毛が逆立つ。
「ぅわぁ！　ちょっと！　やぁっ」
ぢゅ、という明らかに吸われている音が耳に入る。
（いやーーーっ）
悲鳴は声に出すことが出来ず、口がぱくぱくと動く。もがけどもがけども、青年の力が強くて離れられない。
どのくらい時間が立っただろうか。首もとから生暖かいものが離れる。
ぺっと吐き出す音が聞こえて、草むらの一部が赤く染まっている。
（ど、どういうこと？）
首元にまだ残っているぬくもりを感じて両手で押さえる。青年を見上げると、青年は服の袖で口元を拭って言った。白い服の袖が赤く染まっている。
「一応、遅いかもしれないけど毒抜きしたわ。駄目よ？　この辺りはブイブイが沢山居るんだから」
（毒抜き？）
もしかして、あの虫は毒を持っていたのか。それを、この青年が助けてくれたのだろうか。
「ごめんなさい、あたし知らなくて」

「無知は言い訳にならないのよ？」
困ったように笑うその顔も綺麗だなぁと見惚れていると、青年は柔らかな笑みを湛えたまま言う。
「ブイブイの毒は興奮状態の後に熱が出るから、いらっしゃい」
そういうと、有希を俵のように担ぐ。とても軽々と。
「うわぁ！　ちょ、ちょっと何するの」
「この辺りにウチ以外の家はないの。手当てしてあげるから黙っていらっしゃい」
そう言うと、青年は有希の麻袋を拾い上げて、歩き出してしまった。

こうやって、俵のように担がれるのは二回目だ。宿屋に連れて行かれて、身包みはがされて、ナゼットに助けてもらった時だ。
あの時は小さな身体を恨んだ。
けれども、少し大きくなった今でも、その状況は打破することはできないらしい。
散々暴れてみたが、有希に回された腕が外れることはなかった。
「もう、じっとしてないと駄目じゃない」
呆れたように言うその言葉は、とても柔らかだ。男性なのに女性のような口調があまりにもしっくりしている。
「いや、だって、ちゃんと説明してよ」
「この状態で？」
青年の身体が揺れる。くすくすと笑っているのがわかる。
「話は、私の家に着いたらちゃんとするから、怖がらないで。――といっても、難しいかしら」
（なんだか、あたし一人でバカみたいだ）
なんでこの人はこんなにも余裕なんだろうか。一人で慌てて、恥ずかしがって、混乱して。
無意識に下唇を噛む。とても泣きたい気分になったが、涙腺はびくともしなかった。その代わりのように、お腹がきゅるきゅると鳴

った。
「――――っ」
羞恥と重力で顔に血が上る。青年がまたくすくすと笑いだした。
「ご飯食べてないの？　なら、何か作ってもらうわね」
恥ずかしくて押し黙っていると「あらやだ」と言う声が聞こえた。
「私、まだ喧嘩の途中だったのに」
誰と。なんて聞けなかった。
おっとりと歩く青年に担がれながら、雨の上がった森を見ていた。
再び太陽が顔を出したのか、木々の葉がきらきらと輝いていた。

『興奮状態の後に熱が出る』
青年はたしかそう言っていた。
（身体が重い……）
自分で歩いている訳ではないのに、身体がぐったりと重い。心なしか呼吸も早くなっている気がする。
軽いめまいがして、頭がぐらぐらと揺れる。雨に濡れた髪が、服が、体中の体温を奪っていくような感覚がして、寒い。
この状態がいつまで続くのだろうか。
こうやって担がれていると、青年の進む先がわからないから途方もない時間のようにも感じる。
そんな有希の不安が伝わったのか、ずっと黙っていた青年が有希に声を掛ける。
「大丈夫？　具合悪くなったりしてない？」
「んー……」
正直言うと、とても気分が悪い。けれども、それを言う気力もない。青年が歩くたびに腹部が圧迫されて、頭は左右に揺れている。頭に血が上ってこめかみあたりが痛い。
「やだ、大丈夫？」
反応がない有希を不審に思ったのか、青年が有希の背中を掴むとそのまま引っ張る。上体が起きたと思ったらすぅっと頭から血が下

がる。
　そのまま青年の手が素早く有希の膝裏に回り、気が付けば横抱きにされていた。
「こっちの方が良かったかしら？」
　やわらかな低い声が聞こえ、微笑まれる。とても近い位置に青年の顔があって、有希は戸惑う。
「え、あ、あの、えぇと」
　しどろもどろになって目が泳ぐ。微笑んだ青年が口を開く。
「私はリフェって言うの。あなたは？」
「ゆ、有希」
　恥ずかしくて目を伏せる。どこに視線をやればいいのか困る。
　がっしりとした胸板、一見細身に見えるけれど、筋肉の盛り上がった腕。そのどれもと密接だ。
　水気をはらんで身体にぺっとりと張り付いた服が、リフェノーティスの服にじんわりと染みを作る。
「ユーキ、あそこが私の家よ」
　言われて顔を上げる。リフェノーティスの視線の先を見ると、そこには木製の家があった。
　リフェノーティスは器用に片手で扉を開けると、突然怒声が聞こえた。
「リフェ！　やっと見せる気になっ……」
　声と共に、部屋の奥の扉が開かれる。そこに立っていたのは、有希より少し年下だろうか、茶色がかった赤い髪が印象的な少年だった。有希と目が合うと、明らかに顔をしかめた。
「……リフェ、ソイツ誰？」
「お客さまよ。ブイブイに刺されていたので手当するわ。エストのベッド借りるわね」
　少年の怒りなんて気にも留めずにリフェノーティスは部屋に入る。そのまま真っ直ぐ廊下に出て、すぐ左側の扉を開ける。
「ごめんなさい、客間がないから、この部屋で我慢してやってね」

そういうと、リフェノーティスは有希をベッドにゆっくりと寝かせた。
「ちょっと待てよ！」
部屋の入り口には、先ほどエストと呼ばれた少年が立っていた。
エストは腕を組んで仁王立ちしている。
「何でオレの部屋なんだよ」
「あぁ、エスト。彼女になにか食べやすいものを作ってあげて」
リフェノーティスがどこかのタンスからタオルを取って有希に差し出す。
「ユーキ、これで体を拭いて。今、着替えを持ってくるわね」
そう言うと、有希の前髪を上げて額に手を当てる。
「――けっこうあるわね。寒気は？」
聞かれるままに頷くと、慈悲に満ちた笑顔をくれた。
「リフェ」
少年が部屋の入り口に立っている。
「……なぁに？」
「オレは、怒ってるんだからな」
そう言うと、有希を一睨みして、踵を返した。
エストの立ち去った場所をぼうっと見ていると、それに気付いたリフェノーティスが肩をすくめた。

45

リフェノーティスが持ってきた着替えというものは、有希より遥かに大きなものだった。
大きなシャツのようなものを、ワンピースのようにすっぽりと頭から被った。
足元がこころもとなかったが、膝辺りまで隠れたので、そのままベッドに横たわった。
リフェノーティスはそんな有希を見て満足したのか、何か道具を持って有希の居る――エストの部屋にやってきた。
ベッドサイドにテーブルと椅子を移動させると、その上に載っている道具と、見たこともない草でなにか作業を始めた。
「……」
横向きになり、黙ってリフェノーティスが作業しているのを見つめていると、リフェノーティスが有希に視線を向けずに喋り始めた。
「ユーキの薬を作ってるのよ」
「薬……？」
「そう、ブイブイに噛まれても死んだりしないけれど、毒で長いこと高揚したり、下手すると酩酊しちゃうから」
すり鉢に葉と木の実を入れたかと思うとゴリゴリと擂りはじめる。途中でどこかに立って、ビンに入った液体を持って戻ってきた。それをすり鉢に加えて更にゴリゴリと擂る。
その作業をぼんやりと見つめる。先ほどからこめかみをずんと押すような頭痛がしている。
「……ねぇユーキ、あなた、どうしてあんなところに居たの？」
耳に優しい低音が響く。
その言葉の意味を考えあぐねていると、察したのか、リフェノーティスが言う。
「ここはね、滅多に人の来ない所なの。場所で言うと、三国の丁度

中心。山の頂上あたりなの」
（山の、頂上？）
ということは、有希は知らず知らずのうちに山に入っていたのか。
（それなら、山が見えなくても当然かぁ）
「この周りには村も町もないわ。――どうしてそんな所に、そんな軽装で居たの？」
リフェノーティスが、葉に擂った物を塗りつける。そして、有希に寝返りを打たせて、首に貼り付けた。途端に、首筋に電流のような痛みが走る。
「――っ」
「痛いけど、我慢して」
視界の端に白いものが見える。それは包帯だった。リフェノーティスは器用に有希の首を巻くと、次の薬を作り始めた。
「でも正直言うと、感謝もしてる」
（感謝？）
再び椅子に座って何かを作るリフェノーティスを、もう一度寝返って見つめる。
その横顔はとても綺麗で、ゆるくウェーブの掛かった髪が、とても綺麗だと思った。
有希の視線に気付いたのか、リフェノーティスと目が合う。
「エストとね、喧嘩してたの」
そういえば、抱えあげられたときに、そんなことを言っていたなぁと思い出す。
ぼんやりと見つめる先に居るリフェノーティスは、どこか物憂げで、現実味があまりない。
（綺麗な男の人なのに、どうして口調が女の人なんだろう）
有希の住んでいた場所にも、そういう人は居た。
（リフェさんは、オカマさんなのかな……）
けれども、そう呼ぶのにはどこか違和感があるような気がした。
「原因はね、私にあるんだけど――隠し事って難しいわね」

作業をしながらリフェノーティスははっと気付いて有希を見る。
そしてリフェノーティスを見つめていた有希と目が合うと、困ったように苦笑した。
「やだ。私何言ってるのかしら。……ユーキの瞳って不思議ね、なんだか何でも言っちゃいそうになるわ」
ふと、目を眇める。
「私の良く知っている人に似てるわ」
「……」
とても、とても懐かしそうにその声は言った。その言葉は、もう会うことの出来ないとでも言うようで、どこかリフェノーティスの深い部分を見てしまったような気がした。
「といっても、その人は男性だけどね」
何かを諦めたように微笑むその顔にはっと息を呑んでしまう。それはとてもとても、儚い笑みだった。

綺麗な微笑みというのを、この世界に来てからよく見るようになった。
ティータの微笑みもとてもやわらかで綺麗だし、ルカの猫かぶりの笑顔も、作り物のように綺麗だった。
リフェノーティスの笑顔というのは、何かが苦しい笑顔だった。
リフェノーティス自身が苦しんでいる笑顔ではなくて、見ているこちらが、心臓をきゅうっと掴まれたような苦しさに襲われる。
それを人は『切ない』と言うのかもしれない。
綺麗な綺麗な笑顔に言葉を失っていると、粗雑に扉が開かれた。
それと同時にふわりと鼻腔をくすぐる匂いがかおる。
「メシ、できたぞ」
その言葉に、ごくりと喉が鳴る。思い出したように腹が空腹を叫ぶ。口中にじんわりと唾液が溜まる。
エストはリフェノーティスとは反対側のベッドサイドから、体を起こした有希の膝元にトレイをぽんと置いた。

「熱いから気を付けて食えよ」
そっけなく言われる。トレイの上には、湯気の立っているお粥のようなものがある。
「これ……、あなたが作ったの？」
山菜でも入っているのだろうか。所々に緑色が混じっている。
「そうだけど？」
エストを見上げると、大きなシャツと七分のパンツスタイルのエストが「それが何？」という顔をしている。
「凄いね……」
「べ、別にっ！　いいから冷める前に食えよ」
せかされるまま、両手を合わせて「頂きます」と告げて、スプーンを取る。お腹がよじれるほどに食べ物を求めている。
スプーンに掬って物凄い勢いで息を吹きかける。数度吹きかけて、それでも待ちきれなくて頬張る。
（あちっ）
一瞬顔が熱さに曇ったが、それよりも、舌に広がる香ばしい香りにうっとりとする。
（おいしい……）
続けざまに何度も掬っては満足に冷まさずに食べる。
「よっぽどお腹がすいてたのね……」
そんな有希を見ていたリフェノーティスが感嘆の声をあげる。
有希はうんうんと頷いて、それでもがっつくのを止められない。
「もう一杯……食うか？」
言われて、視線をエストに移す。そこには、有希の食べっぷりに嬉しく思ったのか、嬉しそうなエストが居る。
「いいの？」
がっついて食べたので、もう幾分も皿には残っていない。しかし、未だお腹はきゅるきゅると音を立てている。
「あぁ、かまわねぇよ。――リフェ、ついでにオレらもメシにするか？」

初対面の有希でも判るほどのぎこちなさで、エストはリフェノーティスに話かける。
リフェノーティスは柔らかに笑って「えぇ」と答えた。
「――っ待ってろ、今鍋ごと持ってくっから」
そう言って部屋をばたばたと出て行くエストを見送り、有希はお皿にぽつぽつと残ったものをかきこんだ。
リフェノーティスは、エストの出て行った扉を見て、微笑んでいる。
（仲直り……したのかな）
不思議な関係だと思った。

46

空腹が満たされると、ようやっと周りに目が届くようになった。
二杯目をもぐもぐと食べている時に、はっと気付いて突然頭を下げた。
「あ、ありがとうございました。食事に着替えまで」
あまりの唐突さに驚いたのか、リフェノーティスもエストも面食らったように有希を見る。
やがて、ぷっと吹き出したリフェノーティスが、いいのよと告げた。
「食べ終わった？　それなら、これを飲んで」
そう言うと、木の器を差し出す。そこには、先ほどゴリゴリと擂っていたものだ。
「解熱剤よ」
言われて、仕方なく受け取る。
（薬、嫌いなんだけどなぁ……）
しかも、錠剤やら飲み薬ではない。
（でも、折角作ってくれたわけだし）
えぇいと腹をくくって、どろりとしたものを飲み下す。
（まっず……）
なんとも苦い後味にえづいて、残りの粥を口直しに含む。
「うわ……よく飲めたな、ソレ」
エストが顔をしかめて有希を見ている。やはり飲めたものではないのか。
「エストも昔、ブイブイに噛まれたのよ。それ以来、この解熱剤が嫌いなのよね」
ふふ、と微笑むリフェノーティスに、エストが叫ぶ。
「い、いつの話だよ！　――っ大体、なんであんな所に居たんだよ、お前」

強引に話の矛先を有希へ持っていこうとするエストに、微笑ましい気持ちになる。
「え、えーと……なんて言ったらいいのかな」
二人の視線が有希に集まる。
(何を、どこまで話したらいいんだろう)
伝説の魔女として処刑されそうになった所に、本物の伝説の魔女に助けられて、ここに置き去りにされました。
(……そんな事、言えるはずない)
力なく首を振ると、リフェノーティスが苦笑する。
「まぁ、あんまり無理強いして聞くつもりもないけど」
「いや、ちゃんと言う……」
(ここまでお世話になっていて、何も話しませんだなんて、フェアじゃないものね)
しばらくうんうんと考える。リフェノーティスは食事の手を休めて有希を見つめているが、有希に話を振ったエストは、飽きたのか、がつがつと粥を食べている。
「あたし、アドルンドに行きたくて南下してたの。そしたら、迷っちゃって、食料も飲み物も底ついて、それで」
「バッカじゃねぇの？　それでブッ倒れたっつうの？」
「エスト」
たしなめるようにリフェノーティスが言い、エストが首をすくめた。
「それで私に会った。ということ？」
頷く。
「……そう」
「あ、あの、それで、お願いがあるんですけど」
(差し出がましいのは承知だけど、急がなきゃ)
「なぁに？」
やわらかく微笑むリフェノーティスに、どうしてだか緊張してしまう。

豊かな髪が、窓から差込む光できらきらとしている。
「助けてもらって、薬やご飯まで頂いた上で言うのはおこがましいんだけど、食料を少し、分けてもらえませんか？」
リフェノーティスは表情一つ崩さない。有希がそう言うのを、まるでわかっていたかのようだ。
「あ、あたし、早く行かないと」
（早く皆に会って、謝りたい）
不安で不安で、胸がちりちりと痛む。心細くて心細くて、くじけてしまいそうだ。
「家族がアドルンドに居るの？」
首を振る。
「恋人とか？」
首を振る。
「なら、行かなくていいじゃねぇか」
茶々を入れるエストを睨みつける。
「エスト」
（確かに、恋人でもなければ家族でもない。でも、あの人たちは）
右も左もわからない有希を、受け入れてくれた。そして、沢山助けてくれた。
「大事な人たちなの」
有希は二人を見る。
「……無知は言い訳にならないって、私が言ったの覚えてる？」
その顔は、とても綺麗なのに何を考えているのかわからない。
「うん」
ブイブイという虫が毒虫だということを知らないと言ったら、リフェノーティスはそう言った。
「ユーキがアドルンドに行く行かないはあなたの勝手だわ。でも、アドルンドが今どんな状況にあるか知っていて、行きたいと言うの？」
「え……どういうこと？」

意味がわからないよ。と告げると、困ったようなため息が漏れた。
「えと、あ、戦争がはじまっちゃったのは知ってるよ」
「そうじゃないわ」
「じゃぁ、何？」
「アドルンドだけじゃない、今、全国で十日熱が流行りはじめてるの。だから戦争どころじゃないわ。どこも皆、十日熱に備えてる」
「十日熱？」
「かかると、十日以内に確実に死んでしまう熱病よ。――奇跡的に助かった人は、一生掛からない病気なんだけどね」
「へぇ……」
「その十日熱の被害が一番出てるのは、アドルンドなのよ」
「そうなんだ」
どこかつかめない。という表情をしている有希に、リフェノーティスが続ける。
「ユーキ、十日熱に掛かった事は？」
「ないよ、そんな」
（そんな恐ろしい病気）
「なら、アドルンドに行けば掛かるかもしれない。きっと掛かるわ。それでも、行きたいっていうの？」
リフェノーティスの口調が少しずつきついものになってゆく。
「私わね、医者じゃないから止めたりはしないわ。でも、一旦有希に処置を施してしまった。なのにその人をのこのこと病原地に送り出すと思う？」
「でも、絶対に掛かるって訳じゃないし」
「甘いわ」
ぴしゃりと言われて、有希は押し黙る。視界の端で、エストが哀れみの目を向けている。
「ユーキ、前回十日熱が流行ったのはいつか知ってる？」
「し、しらない」
「約百五十年前よ。その時、マルキーから流行ったその病気は、瞬

く間にアリドル全域に及び、そして猛威を振るい終えた後、アリドルの人口は七分の一になったの」
「ななぶんのいち……」
思わず絶句する。
それは、昔日本で流行った結核のようなものなのだろうか。
ざわざわと、肌に鳥肌が立つ。
「十日熱で先日、アドルンドの王子が亡くなったわ」
「え」
アドルンドの王子。その言葉に目が見開かれる。
（ルカ？）
「誰！　ねぇ、誰？」
思わず身を乗り出して聞いてしまう。
あまりの剣幕に驚いたのか、リフェノーティスがどもる。
「え、あぁ、第三王子のカーティス王子よ」
（カーティス）
聞いた事も無い王子の名前だ。
（良かった、ルカじゃない）
ほうっと胸を撫で下ろしたのも束の間、リフェノーティスは淡々と話しつづける。
「一国の王子が感染して、国の医療機関総動員しても亡くなってしまった。それほどなのよ。十日熱は」
「それでも……」
「それでも行くと言うなら止めないわ。食料もあげないなんて意地悪も言わない。だから、せめて熱が下がるまでは大人しくここに居なさい。そして、ちゃんとゆっくり考えなさい」
そう言って立ち上がると、不ぞろいな音を立てながら、リフェノーティスは出て行ってしまった。
ぐるぐると頭がこんがらがっている有希に、とうに食事を終えていたエストが言う。
「そんなに、大事なヤツなのか？」

力なく頷く。
「みんな、アドルンドに居るはずなの……みんな、無事かなぁ」
あの病弱そうなアインやティータは大丈夫だろうか。そもそも、無事にアドルンドに戻れたのだろうか。それすらも、わからない。
（早く、会いたい）
「居るはず？　わっかんねぇの？」
子馬鹿にされたようで、悔しくて悔しくてエストを睨む。
「わかんないわよ！」
（どうせ、どうせ何の手がかりも無いわよ）
無意識に、右手の中指をぎゅっと握る。アドルンドの王子。それがルカなのかすらもわからなかった。
（あたしには、指輪がないとわからない）
『騎士と主人は繋がってるの。でも人間には見えないから、人間にもわかる契約の証として指輪作ったんだから』
（わからないよ……）
悔しくて悲しくて、そして心配で。涙が滲む。
「ちょっ、な、泣くんじゃねぇよ！　オレが泣かせたみたいだろ！」
みたいだろ、じゃなくて事実だよ。と、責めるように睨む。その顔は酷く狼狽していて、あぁもうと言った。
「わかんねぇなら、リフェに聞けばいいじゃねぇかよ」
「……？」
がしがしと頭を掻く仕草をしたと思うと立ち上がり、リフェノーティスの残した食器をがちゃがちゃと片付け始めた。
「情報屋魔術士リフェノーティス。結構有名らしいぜ」
エストが自慢気に、屈託無く笑った。

47

情報屋魔術士リフェノーティス。
それは、どういう意味だろう。
煮えそうな頭を叱咤激励してエストを見ると、苦笑したエストに目を覆われた。
「いいから、寝ろって。寝て起きて、そっから考えろ」
そのまま肩をトンと押されて、ベッドに横たわる。目元から外された手が、腹部あたりで折れ曲がっていた毛布を引き上げて、頭をポンポンと叩く。
（また、子ども扱い）
実年齢はあんたより年上なのよといいたい気分を押し込めて、言われるままに目を閉じる。
熱っぽくて涙が出そうだった。体中が寒くて、けれど吐き出す吐息がとても熱くて、自分は火を噴くドラゴンなんじゃないかと思った。
（寝てる暇なんて……）
考えなきゃならない事が沢山ある。
皆の事、これからの事。みんなはどこに居るのだろうか。元気にしているのだろうか。これからどうやって探そう。情報屋。リフェノーティス。ルカは元気だろうか。アインは無事だろうか。ヴィヴィはどこに行ったのだろうか。十日熱。熱。ブイブイ。
色々考えては消え、考えては熱に浮かされた。
有希はそのまま、眠りに落ちた。

とてもとても気持ちのいい目覚めというものがある。
それは突如訪れるもので、出会うとびっくりする。
起きる時間の何時間も早かったりすると、少し損をした気分になる。だが、すがすがしい朝を思うと、得をした気分にもなる。

すっきりとした目覚めは、突然と訪れた。
目がパッチリと開いた。
「……暗い」
目が開いているはずなのに、それがわからないくらいに、暗い。
（今、何時……）
どのくらい眠っていたのだろうか。とてもスッキリした気分で起き上がると、多量の汗をかいたようで、着ているシャツがぐっしょりと濡れている。
ぱさりと、手に何かが落ちる。取ってみると、濡れたタオルがある。
（誰が）
ふと、この家の住人の顔を思い出す。優しそうな笑みを浮かべるリフェノーティスだろうか。それとも、なんだかんだと悪態を吐きながらエストがやってくれたのだろうか。
いずれにしても、礼を言わなければならないなと思った。
（すごい、すっきりしてる）
数時間前まではとても気分が悪かったのに、思考がとてもクリアだ。
（なら、ちゃんと考え事ができる）
有希はうんうんとうなり始めた。

皆の安否や今の状況を考えて考えた結果、有希は灯りの漏れている扉の前に立った。家の最奥。廊下の突き当たりの部屋だ。
そして一つ深呼吸をして、扉を叩いた。
「――どうぞ」
ゆっくりと扉を開ける。底には、大きな水晶の前に座っているリフェノーティスの姿があった。水晶には誰かの姿が映っていたが、一瞬の後に消えてしまった。ちらりと見えたその姿に、一瞬だけ違和感を感じる。
「あ、今大丈夫？」

「ええ」
言うと、リフェノーティスは部屋の端にあった椅子を部屋の中心に移動させる。
部屋は窓が無く、有希が寝ていた部屋よりとても狭い。おまけに水晶の置いてある机以外の場所は、全て棚で埋め尽くされている。きっと有希の薬もここから取り合わせて調合したのだろう、おびただしい量の容器が並んでいる。
「具合はもういいの？」
案じるように問われ、ニッコリと笑みを返す。
「うん、リフェノーティスの薬のお陰ね」
「ふふ、上手ね」
二人で笑いあう。しばらくすると、リフェノーティスが「それで」と問いかけた。
「どうしたの？」
「……あのね、あたし考えたの」
椅子に座ってリフェノーティスを見上げると、目線で先を促される。
「リフェは言ったよね。『無知は言い訳にならない』って」
「えぇ」
「そう言われて、あたし、何も言い返せなかった」
お前は何も知らない。そう散々言われてばかりだった。
（なのにあたしは、知らない知らないって駄々こねてばかりだった）
この世界のこと、この世界の人たちの事、知らない事ばかりで、自分では何も計れない。
（――なら）
「だから、情報屋のリフェノーティスさん。あたしに情報を教えて」
リフェノーティスの穏やかな目が、一瞬ぴくりと動く。
「……エストね」
情報屋だというのを教えたのは、という事だろうか。有希はこくりと頷く。

リフェノーティスはしばらく有希を見つめ、そして何かを諦めたかのようにため息をついた。
「まったく……子供ってこれだから困るわ。一生懸命で、一途で」
やわらかだがどこか悪戯っぽい笑みを浮かべたリフェノーティスは、一瞬できりりと真面目な顔つきになる。
「いいわ。――ただし、お代は何かの情報で頂くから」
有希は一瞬詰まる。
(情報……そんなもの、特に無いけど)
きゅっと下唇をかみ締める。
「っいいわ。あたしで話せることがあるなら」
リフェノーティスがにっこりと極上の笑みを浮かべる。
「交渉成立ね。――で、何が知りたいの？」
「えーと」
有希は頭で整頓してきた事を反芻する。
「今、アドルンドとマルキーの戦争ってどうなってるの？」
「どこから話せばいい？」
(それは、その量によって料金的なものが跳ね上がるっていう、あれですか、ぼったくりですか)
責めるように見上げると、表情の読めない綺麗な笑顔がある。
「――全部！」
にっこりと「まいど」と微笑まれる。
「つい先日まで、マルキーの西側に前線があったわ。それは、お互いの国の捕虜になっていた元リビドム軍よ。それが先日、何者かの指揮によって、戦闘は凍結。いつのまにか前線自体が消えていた」
(リビドムの潰しあいが、消えた)
潰しあい。それは、いつかオルガが言っていた。だが、前線が消えた事は知らなかった。
「そして先日。マルキーが伝説の魔女を処刑したわ」
「！？？」
有希は一瞬、どきりとしたが、悟られまいと平静を装う。

「その魔女をアドルンドが『リビドム皇女ではないのか』と疑って、追軍を出したの。これは、アドルンド第一王子、オルガー王子ね」
「オルガー……」
あの、憎悪に満ちた瞳を思い出す。
「そして、その直後。謀ったかのようにカーティス王子が倒れたわ。そのまま国中に十日熱の恐怖が響いて、戦争どころではなくなった。追軍達は、アドルンド東側で往生しているはずよ」
（アドルンド軍は立ち往生している……）
リフェノーティスの言葉を反芻する。
（なら、別に今は激戦になっている訳じゃないのか）
「……他には無い？」
リフェノーティスは表情の読めない笑顔を浮かべたままだ。
有希は再び口を開いた。
「その、さっき言ってた十日熱だけど。予防法とかはないの？」

48

十日熱。それは、百五十年前にアリドル大陸で大流行した病気らしい。
掛かった人間は十日以内に確実に死んでしまうという病気。
奇跡的に回復した人間は、以降、病気に苦しむことがないという迷信があることから「魔女の祝福」とも呼ばれているらしい。
効果的な治療法は未だ無い（というか、研究機関があったリビドムが崩壊した）ので、危険な病気として恐れられている。
治療の方法がわからないということは、予防もどのようにするべきかはわからないとリフェノーティスは言った。
「……そっか」
「なぁに。本当にアドルンドに行くつもりなの？」
「うん」
「行かないほうが良いって勧めても？」
「うん」
「……強情ね」
「リフェは、世話焼きだね」
笑いかける有希に、リフェノーティスは面食らう。そして、ふと柔らかな笑みを浮かべる。
「そりゃぁ、依頼関係以外でお客さんが来るのなんて、五年ぶりだもの」
「五年？　そんな前なの？」
「えぇ、ユーキより小さな男の子だったわ。私の事を変態だの男女だの色々言ってくれたわ」
何かを思い出すように、リフェノーティスはくつくつと笑う。
「ほんと、大きくなったわ」
（え、大きくなったって）
今も身近にいるという事。それは、有希が知りうる限りでは一人

しかいない。
「え、エストなの！？？」
「えぇ。身寄りが無くて保護したら、そのまま居着いちゃって」
「居着いちゃってって、リフェの家族は？」
言った直後にしまったと思った。
（戦争が絶えず続いているんだから、身寄りがなくなるのも仕方ないか）
ばつの悪そうな有希を不思議そうに見つめて、そしてくすりと笑った。
「もしかして、エストに何か聞いた？」
「え、ううん」
ぶんぶんと首を振る。
「リフェが情報屋で有名だっていう話くらいしか」
「そう……私にはね、母がいたの」
（いたの）
過去形、ということは。
「もう大分前に亡くなったわ」
「あ、ごめんなさい」
リフェノーティスが微笑む。
「謝る事なんてないわ。母さまの年齢が年齢だったし」
（年齢……遅いときにできた子供なのかな）
有希自身がとても早い子供だったので、あまり触れないようにしようと違う話題を探す。
「ねぇユーキ、ユーキは魔女のこと知ってる？」
「え？　うん。ある程度なら」
「私ね、魔女に育てられたの」
「え」
（魔女に、育てられた）
「私、魔女の子供なのよ」
「え、だって、魔女は子供を産んで、それが男の子だったら」

「ええ、置き去りにするのが通例ね。でも私の母は私を連れてここへ来た」
それは普通、ありえる事なのだろうかと逡巡していると、有希の考えていた事が手に取るようにわかるのか、リフェノーティスが言葉を続ける。
「異例よ。私以外で似たような話は聞いたこと無いわ。――私の母ね、五百年以上生きていたらしいの。その中で子供を産んだのが二回。二回とも男の子が生まれた」
リフェノーティスが手元に視線を落とす。
「三人目の子供を身篭って、母さまは『これが最後かもしれない』って思ったんですって。そして、生まれたのが男だった」
ふふっと笑う。
「母さまったら『子供を育ててみたかった』なんていうのよ。今までずっと遠くから見ていることしかできなかったからって。――それで、私は母さまとずっとここで暮らしてた。結構出来の良い子供だったのよ」
（お母さんの事、好きだったんだな）
思い出話を、とてもとても楽しげに話している。
「ユーキは知ってる？　魔女の息子はね、魔術士の才能があるのよ」
「そうなんだ！？？」
「歴史に残る高名な魔術士たちは皆、魔女の息子だって言われているほどにね。少なからずとも、魔女の子だっていうのが影響しているみたい」
（へぇー）
感歎の声をあげる。リフェノーティスは楽しそうに続ける。
「私も魔術士として母さまに厳しく教育されたわ。魔女しか知らない薬の調合とか、沢山教わった。――厳しかったけど、楽しかったわ」
ほんとうに、楽しかった。かみ締めるように繰り返すリフェノーティスに、有希も暖かい気分になる。

「でも十歳の時、母さまが死んだわ。寿命で」
魔女は不老不死だと思ったのに、ある日ぽっくりとね。
「……それで、リフェはどうしたの？」
「母さまにリビドムの魔術士養成寄宿舎に行くように言われてね、そこに通ったわ」
十歳の少年……目の前のリフェノーティスの幼い頃を想像してみる。この綺麗な男の人は、やっぱり子供の頃から綺麗だったのだろうか。
「初めての連続だった。この口調がおかしい事も知らなかったし、母さま以外の人と接するのも初めてだった」
「いじめられたりしなかった？」
「それはなかったわ。なにせ魔女の教育を受けていたお陰で優秀だったから。それに、私こう見えても力持ちなのよ？　……だから、卒業を前に君主が決まったわ」
「へぇ」
普通は卒業して更に鍛錬して、そして君主が着くのによ。と、リフェノーティスはどこか興奮気味だ。
「それ、誰だったの？」
「――リビドム王よ」
途端に、リフェノーティスの顔から表情が抜け落ちた。
（リビドム王……それって、行方不明の）
ふと、自嘲するような笑みを有希に向ける。
「やだ、私ったら何話してるのかしら。ユーキったら聞き上手ね」
どこか無理をするような笑みを見せ、リフェノーティスは立ち上がる。
「もうこんな時間だわ、もうそろそろ寝ないと……」
「リフェ」
「ユーキも、病み上がりなんだから寝なさいな」
てきぱきと、机の上のものを片付けているリフェノーティスの背中に声を掛ける。

（そんな、あからさまに隠さないでよ）
何を聞かれたくないのだろう。そんな必死に隠すような事なら、無理に聞こうとしないのに。
立ち去ろうと立ち上がると、ふと、一番最初にリフェノーティスが言った条件を思い出した。
「あ、待って。あたしリフェに何も話してない」
「いいわよ別に。たいした機密を話したわけでもないし。半分は私の昔話だったし」
「でも……」
なんだか甘やかされている気分だと思っていると、饒舌になったリフェノーティスがつらつらと喋る。
「今聞いた昔話を黙っていてくれるんだったら、明日にでもあなたの探し人の手がかりを探してあげるわ」
（探し人）
はっと目が開く。探し人。その人は今、十日熱の蔓延している場所の渦中にいるではないか。
（どうして気付かなかったの！　あたしの馬鹿！）
きゅっと拳を握る。聞くだけなのに、とても緊張する。
「リフェ！　あ、あのさ、アドルンドの第三王子が十日熱に掛かったって言ったじゃない」
「えぇ、言ったわ」
「他の王子は、大丈夫なの……？」
「あぁ、第一王子は平気みたいだし、第二王子は西の神殿だから被害は無いでしょ。末の双子も無事みたい」
（その間は！）
屈んで何かを片付けていたリフェノーティスの動きがぴたりと止まる。
「第四王子は……そうね、十日熱に掛かったっていう話は聞いてないわ」
「……なんか、十日熱には掛かってないけど何かある。っていう言

い方だね」
「ユーキ、どうしたの？　ルカート王子なんてあなたには関係ないんじゃないの？　――あぁ、もしかして、彼のファンなの？」
「違う」
明らかに何かを隠そうとするリフェノーティスを見つめると、リフェノーティスが困ったように微笑む。
「彼については、機密だから言えないわ」
「教えて！」
（機密って、ルカ、何かやったの？）
立ち上がって、リフェノーティスに詰め寄る。有希の剣幕に驚いたリフェノーティスが、眼を見開く。
「この情報、高いのよ」
「それは、何かの情報と交換なら、話してくれるってこと？」
リフェノーティスは微笑んでいる。
（情報、何か、誰も知らないような機密……）
自分が紫の瞳の所持者であること。それは今のこの姿じゃ何も説得力が無い。
（何か、なにか――）
目を泳がせて必死に頭の中をめぐらせる。そんな有希の必死さに何を感じたのか、リフェノーティスが再び椅子に座る。
キリリとした顔は、先ほどまでのやわらかな笑みはどこにも無く、情報屋の顔になっている。
（国家機密レベルとか……何か、思い出して）
知らぬ間に右手の中指を掴む。何度も指輪のあった辺りを撫でる。
『騎士と主は繋がってるの』
ヴィヴィの楽しげな顔を思い出す。彼女は、ルカを見てみたいと何度となく言っていた。
「！　そうだ、ヴィヴィ！」
はっと思い出す。処刑されたはずの伝説の魔女は、今もこうしてどこかに生きている。それを、目の前の彼は知っているのだろうか。

（本当は、言っちゃいけないのかもしれない）
自分がそうやって口に出す事で、こうやってまた、リフェノーティスから聞き出そうとする人がいるかもしれない。
（でも）
どのくらいの時間、悩んだだろう。顔を上げると相変わらずきりりとした顔が有希を見ていた。
ゆっくりと、口を開く。
「処刑された、伝説の魔女なんだけど」
「……えぇ。彼女のことで、何か？」
こくりと頷く。
「彼女は名前すらも公開されなかったわ。私も彼女のことについては情報不足なの」
（名前……）
とても長ったらしい名前だった。どうしてこう、この世界の人間は名前が長いんだと悪態をついた。
（思い出せ、思い出せ）
「名前は、ヴィーズィー・ヴィリー・ディヴィドゥム。何歳かは知らない。濃灰色の髪と、赤味がかった紫の瞳。見た目は十歳くらい……」
リフェノーティスは黙ったまま、有希を見つめている。
（ごめん、ヴィヴィ）
「マルキーで処刑されたのは、彼女じゃない。っ彼女じゃないっていうのも違うんだけど、だからといってリビドム王女でもないんだけど、とにかく、伝説の魔女は生きてる」
「……どういうこと？」
「処刑されそうだったのは、ただの少女で、えっと、伝説の魔女が処刑されるっていうのが不服だったみたいで、その少女を助けたの。でも、マルキーとしては外聞が悪いからって、魔女を処刑したことにしたの」
しどろもどろになりつつ説明すると、リフェノーティスはしばら

く髪の毛をふわふわといじりながら有希を見つめた。そして長いため息を吐いて、言った。
「……元々、何か理由があってココに来たんだろうとは思ってたけど、まさか、伝説の魔女にルカート王子の関係者だったなんてね」
（また、謀ったのね）
有希は自分がルカとヴィヴィに面識があることがリフェノーティスに知られてしまった。
キッと睨むと、朗らかに笑われて一蹴されてしまった。リフェノーティスは髪の毛を指先でくるくるとさせながら、口を開く。
「ルカート王子には今、魔女と契約したという疑惑が掛かってるの。魔女と契約して、王位継承権第一位のオルガー王子を失脚させようとしているっていうね」
（魔女と、契約？）
それは、フォルでの出来事だろうかと考える。
（でもルカは、王位なんて興味なさそうだったのに……）
「おかしな話なのはね、ルカート王子が契約したのはリビドムの王女だと言っているの。言い逃れにしか聞こえないし、そんな事、ありえないからって貴族達は大もめ。王子が狂ったとか、逃げ口上だとか、実は真実なのでは。とか。挙句の果てにはリビドム王女が魔女だったなんていう話も浮き上がってきたわ。それで貴族の立ち位置の問題もあって、ルカート王子は幽閉されたって訳」
（リビドム王女）
それは、オルガがこじつけに作った話だ。
「そんな嘘、信じるなんて……」
（貴族って何？　みんな頭おかしいんじゃないの？）
「何も、知らないのに」
「知らないっていうのは、そういうことなのよ。無知は言い訳にならないの。もっとも、自分が無知だなんて思ってないわよ。国を牛耳っているのは自分達だなんて勘違いしているような人たちだもの」
そう言うリフェノーティスは、どこか諦めたような顔をしていた。

49

リフェノーティスと話していると、とてもとても自分が何も知らないということを思い知らされた。
（考えてることも甘いしさ）
有希はごろりと寝返りをうつ。『もう遅いから寝なさい』と言われ、部屋を追い出されてしまった。
再びあてがわれた部屋に戻ってベッドに横になったが、その前に気持ちよく寝ていたために、もう一度睡魔がやってくることはなかった。
暗闇に慣れた瞳は、部屋の中をぼんやりと見渡せる。うっすらと窓に光が差し込んでいる。
眠くもないのにベッドに横たわっているのに飽きて、窓辺に寄る。窓から外を見上げると、船のような形の月が浮いている。
（朔の日から、大分経ったな……）
めまぐるしくあわただしく過ぎ去った日々。
（この世界に来てからどのくらいの日数が経ったんだろう）
数えている余裕もなかった。
（いろんなことがあった）
見上げる星々の数には敵わないが、濃い日々だった。
楽しいことも、苦しいことも。
胸に刻印を入れられたとき、いっそ殺してくれと思うほど痛かった。逃げたいほどの痛みなんて、一生味わうとは思わなかった。
焼け爛れていた胸元に手をやる。ヴィヴィに繕われた体には、そんな傷一つなかった。
『所詮はまやかしよ』
ヴィヴィは有希にそう告げた。
『ホンモノのユーキはガキのまんま。たとえ見た目が少しでかくなったとしてもね』

『……それ、どういうこと？』
あの時は、ヴィヴィの言っていることが理解できなかった。
（でも今は、少しわかる気がする）
この世界にやってきて、こうやっていい人たちに恵まれてきたからこそ、今穏やかに過ごせている。
なんどもそのことには感謝したが、その度合いが足りなさ過ぎることも知った。
（でも、無知は言い訳にならない）
ならば、これから出来ることをしなければ。
（けど、あたしに出来ることって、なんだろう。ルカを助けること？　……アドルンドの牢屋にどうやって乗り込めばいいの）
それすらもわからない自分の無知さに、苛立ちすら覚える。
（とりあえず、アインさん達に会おう。きっとティータ達と合流してるよね）
そこまで考えて、ふと、口からこぼれた。
「みんな、あたしがこの格好でも気付いてくれるよね？」

それからまたベッドにもぐりこんだが、眠気はやってくることなく朝を迎えた。
まだ日が出たばかりの薄暗闇の中、廊下を誰かが歩く音が聞こえて、むっくりと起き上がった。
（こんな時間に？）
ひっそりと扉を開けて廊下の様子をうかがう。足音は居間を抜けて外に行ってしまった。
「……」
持て余していた暇の代わりに、好奇心がむくりと首をもたげる。
（昨日のお礼言いたいし、お手伝いできる事があればやりたいし）
そんな風に自分に言い訳をして、有希は外に出た。

扉を開けると、太陽の光を真っ向から浴びる。

まぶしさに目を細めると、ひんやりと夜に冷やされた空気が頬に触れる。その心地いい冷たさを思いっきり吸い込んで吐き出す。
冷たい空気が、身体をすっきりとさせてくれるような気がした。
「――なんだ、起きたのか」
声が聞こえて、少しだけ光に慣れた目を無理やり開ける。ふと、エストが荷物を持って立っていた。
「もういいのか？」
「うん。お陰様で」
あのおでこの布、あなたでしょと問うと、エストはぷいと顔を背ける。
「ありがとう」
「べ、別に……」
思わず笑みがこぼれる。
「ねぇ、今からどこ行くの？」
問うと、エストは気だるげな声で。
「朝のお勤め」
と言って、にやりと笑った。
「なんてな。朝食作る前に色々あんだよ」
「ふぅん……」
（朝食）
そのこなれた口ぶりから、いつもエストが朝食を作っているのだろうか。
「……来るか？」
「っ行く！」
えへへ、と笑ってエストの横に並ぶ。
「……言っておくけど、何も楽しくないぞ」
訝しげに言ったエストがなんだか面白くて、もう一度笑った。
エストはまず、井戸に行って顔を洗い（有希もそれに倣って洗った）、持っていた手桶に水を汲んで、少し歩いたところにある小さ

な畑の作物に水を遣り、そのままいくつか野菜を収穫して、雑草も抜く。そして次は小さな小屋に入る。小屋は養鶏場だったらしく、二羽の鳥がいた。そこから卵を取って、餌箱に穀物を入れる。

それが終わると、また井戸に戻って、野菜を洗う。

途中で、いろんな話をした。

名前はエストラスタント・リノー。有希より一つ年下の十七歳だ。有希の方が年上だと告げると、とても驚いた顔をして「なら呼び捨ててくれ」と苦笑した。エストは十二の時にリフェノーティスに拾われてリフェノーティスの家に住み着いたという。

住み着いてしばらく経った頃、リフェノーティスに「近くに孤児院があるわ、そこに行きなさい」と言われたが、リフェノーティスの家があまりにも散らかっていた事、ごはんをちゃんと食べていなかった事が、リフェノーティスを女みたいにしたんだと言って、無理やり居座ったという。

それ以来、家事は全てエストが行っている。エスト曰く「リフェは黒焦げ料理しか作れないんだ」と、諦めたように言っていた。

その言い方がなんだか憎めない言い方で、思わず有希の顔はにやけた。

「仲がいいんだね」

外での仕事が終わり、朝食の準備を手伝いながら有希は言った。

アンバランスに見えるがエプロン姿が様になっているエストの包丁捌きは見事で、見る見る間に野菜が千切りにされていく。有希はその横で葉野菜を一口サイズにちぎっていた。

背中側にある囲炉裏というか、バーベキューの時に使う炭の上に網の乗っているもの。日本で言うところのコンロには、鍋でくつくつと粥のようなものを煮立てている。

「そりゃぁ、もう五年も一緒に暮らしてりゃぁなぁ」

話しながらも手は休まる事はない。

「じゃぁもう、家族みたいなものだね」

「あぁ、ホント世話の焼けるヤツだよ」

はは、とエストが笑う。

くつくつと粥の煮える音と、テンポ良く野菜を切る音が、耳にとても心地よかった。

50

見事な食事が出来上がり、器に移して居間のテーブルに移す。
太陽も気が付けば少し上昇したようで、日差しが朝日とは呼べないものになっている。
「……リフェ、起きないね」
「朝はダメなんだよ、リフェは」
エストは有希に水差しに水を汲んでくるように言うと、奥の部屋へと消えていった。
言われるがままに井戸に行き、水を汲んで戻っても、まだ二人の姿はないままだった。
どうにも居場所がなかったので、とりあえず食器を漁ってコップを三つ取り出す。取り出してしまったら今度は食器を整頓させる。それも済んでしまうと本当にやる事がない。
（それにしても、これは無防備なんじゃないの？）
考えてみれば、有希は自分の事を何も話していない。リフェノーティスはルカとヴィヴィの知人だという事は知っているが、エストは何も知らない。
（ルカとヴィヴィの知人っていうだけで、かなりうさんくさいんじゃないかなぁ）
伝説の魔女と幽閉されている王子。聞いただけで凄い響きだと思う。
（……幽閉）
自分はこんなにも穏やかな場所に居る。有希の騎士は、今何をしているのだろうか。
（拷問とか……されてないよね？　だってあんなにひねくれ者でも、一応王子様だし）
できれば、無体をされていないと信じたい。でないと、自分の心がもたないような気がする。

本当なら、こうして朝日を浴びて朝食を楽しむ。そんな時間すら惜しいはずなのに。
（早く、アドルンドに行かないと）
きっと、この世界の人たちはこういう生活をしているんだろう。それがわかっただけ、この家にいたのはいいじゃないかと言い訳して、目を閉じる。
「ホラ、アイツ客だろ？　待たせてどうすんだよ」
エストの声が聞こえる。ふと目を開けて奥の扉を見て、有希はぎょっとした。
「……リフェ、大丈夫なの？」
そこには、エストにおぶられるように両腕をエストの肩にだらりと掛けている。エストがその腕を持って引っ張っている。
エストよりも大きいリフェノーティスは、地に付いている足をよたよたさせながら歩いている。
「いつもの事」
慌てて立ち上がり、リフェノーティスが座る椅子を引く。
「どーも」
器用に立ち回り、エストはリフェノーティスを椅子に座らせる。
「水、くれる？」
「あぁ、うん」
言われるまま、水差しから注ぐ。エストはそれをリフェノーティスの手に無理やり握らせる。
「ホラ、割るなよ」
（割るって……）
揃いで作られたであろうコップは、土焼のもので結構分厚く作ってある。
リフェノーティスの髪の毛は寝癖でとてつもないことになっている。後頭部から天に向かって飛び跳ね、左右にも飛び跳ねている。ウェーブのかかっている綺麗な髪はどこへ行ったのか、見るも無残なボサボサ頭だ。

「んー……」
のっそりと動いたのはコップを持った右手だ。はらはらしながら見つめていると、特に何事もなくコップが口元に運ばれる。
そのままぐびぐびと飲み干し、コップはテーブルの上に置かれる。
エストはリフェノーティスの向かい。有希の隣に座り、食べ始めた。
「だ、大丈夫なの？」
まだ目が覚めていなさそうなのにと、エストを見ると、エストはスプーンで向かいを指した。
そちらを見ると、のろのろとではあるが、リフェノーティスがスプーンを持って動かしている。
「おぉ……」
なぜか少しだけ感動を覚える。
「リフェは朝弱いんだ」
（弱いっていうレベルでいいのかな……）
「メシ食ってる間に治る」
「はぁ……」
その言葉をとりあえずは飲み込んで、有希もスプーンを手にとる。
「頂きます」
ちらと視線を寄越したエストは、そのまま無言で食事を続ける。
しっかりした大人のように見えるのに、この有様に有希は戸惑っていた。
（な、なんか、今のこの状況で出て行くとも言えないし……）
とりあえず無言で食事をしていると、気を使ってくれたのか、エストが口を開いた。
「俺が初めてこの家にやってきたとき」
「え？」
「この家は、魔窟だった」
「ま……くつ？」
（魔窟って、ナニ？）

目をぱちぱちとさせていると、エストと目が合う。綺麗な灰色の目が、冷たい印象を残す。
「オレがリフェに拾われたって言う話は」
確認するように問う。
「あぁうん。昨晩リフェに少し……」
「そうか。――見つけられたのが真夜中だった。深夜に散歩していたリフェに見つかって、そのままこの家に連れてこられた。そのまま暗い部屋に通されて、寝かされた」
エストはどこか無表情で、粥の入った皿をずっと見ている。
「当時オレの特技なんてメシ作る事くらいだったから、翌朝一宿一飯の礼にと飯を作ろうと思ったんだよ」
「……うん」
「したらこの部屋がよぉ。魔窟だったんだ」
（だから魔窟って）
少しずつ饒舌になっているエストを見遣り、詳しく問う。
「……どういうこと？」
「どういうこともこういうことも、とにかく汚ねぇんだよ。台所になんて入れもしなかったんだからな！」
「は！？　なんで？」
「台所で火器を使う実験して、それを片付けないからどんどん物が増えて、増えまくって山みたいになって。触って崩れたら嫌だからってそのまま放置してそれ繰り返してたら入れなくなったんだと」
「……それは」
（片付けられない男……あ、いや女か）
有希の居たところも、そういう特集番組があったなぁと思うと、乾いた笑いが漏れる。
「はは、ははは」
笑ったことが不服だったのか、それともただ単に聞いて欲しいだけなのか、エストが更にまくしたてる。
「笑い事じゃねぇんだって。台所だけじゃない。この居間だって、

酷かったんだぞ！　誇りまみれだし、カビ生えてるし。フツーの人間ならぜってー病気になってるレベルだったなあれは」
「それは……」
ちょっと想像しがたい。盗み見るようにリフェノーティスを見ると、もそもそと粥を食べている。前髪がもっさりと目元までかぶっていて、どんな表情なのかいまいちわからない。
「料理作ったと思えば黒焦げだし。よくそれで三十年も生きてこれたよなぁ」
「は！？　え、ちょっ誰が？」
「リフェが。――オレと会った時が三十だから、今年三十五だぜ」
「年の話はしないでよ……」
ぽそりと声が聞こえて、はっと向かい側を見る。
「事実じゃん」
「私は見た目の年齢が若いからいいの」
そこにはまだ眠そうにしているが、はっきりと目を覚ましたであろうリフェノーティスが居た。左手で前髪をかきあげると、目の下にうっすらと隈ができていた。
「お、おはよう」
どうしたらいいのかわからなくて、咄嗟に挨拶をしてしまう。
「おはよう」
にっこりと美しい笑みだった。メデューサのように爆発している頭さえなければ、顔はとても美しかった。

51

リフェノーティスは目が覚めると、一連の動作を思い出させない程に軽快に喋っていた。
二人はポンポンと会話しながら、どんどんと食事を平らげてゆく。
「んでそんな隈作ってんだよ」
「あ、それはあたしが遅くまで……」
「ホラ、私夜行性だから」
有希の言葉をさえぎるようにリフェノーティスが言う。見ると、目が合ってちらりとウインクされる。
「っ年なんだからいい加減に早く寝るようにしろよ！」
「だから年齢のことは言わないでちょーだい。エストがお昼まで寝かせてくれたなら隈も消えるしお肌も荒れないわ」
「朝日浴びなきゃカビ生えるぞ」
「生えないわよ」
そこまで言うと、突然しんと静まり返る。
「どうせ、また無駄な人探ししてたんだろ」
「……」
突然訪れた静寂に、疎外感を感じる。
（人さがし……？）
ふと、昨晩リフェノーティスの机の上の水晶に映った人影を思い出した。
（あぁ、あの人を探していたんだ）
妙な納得をして、うんうんと頷く。
（でも、なんだろ、この空気の悪さ）
ぴりぴりとしている。――正確には、エストが。リフェノーティスは何事もないように食事を続けている。
「エスト、お客様の前よ」
「……オレは、怒ってるんだからな」

聞き覚えのある言葉にうっかりエストを見てしまう。視線に気付いたのか、ばつの悪そうな顔をしたエストは無理やりかき込んで立ち上がる。
「……食器はそのままにしてていいから」
有希にそう言うと、エストは立って入り口に向けて歩く。
「エスト」
「頭、冷やしてくる」
入り口のすぐ傍に立てかけてある道具箱のようなものを担いで、エストは出て行ってしまった。
扉の閉まる音がしても、二人は扉を見つめていた。
やがて、ふぅとりフェがため息を吐いた。その一息が、とても空気を軽くする。
「ごめんなさいね」
「うぅん」
喧嘩をしていた。と、リフェノーティスから聞いていた。
（人探しのことで、喧嘩してたのかな）
「難しい年頃ね」
「え？」
リフェノーティスが目を眇めて有希を見ている。
「ユーキはエストの年下なの？」
「ううん、あたしが一つ上」
「そう……」
そのどこか懐かしそうな、穏やかな顔をどこかで見たことがあった。
（パパの笑顔と似てる）
マンションの十四階から有希を放り投げた、あの優しい人。
（そっか、リフェはパパと同年代かぁ……あ、でも二つの差って大きいのかな）
ちらりと見遣ると、リフェノーティスは黙々と粥を食べている。
（喧嘩かぁ……）

「そもそも、喧嘩の原因って何なの？」
つと、リフェノーティスが顔を上げる。
（あ、失言かも）
立ち入った内容だったかもしれないと、口に出してから気付く。
（馬鹿）
内心毒づきながら、伺うようにリフェノーティスを見る。リフェノーティスは、苦笑していた。
「それがね、私にもよくわからないの」
「わからない？」
「エストも言ってたけど、私、ある人を探していてね」
ある人。その言葉を聞いて、昨晩のあの朧な人影を思い出す。
「そしたら突然、エストがそれ誰。って聞いてきて」
「うん」
「答えられないでいたら、怒っちゃって……」
正直困っているの。そう告げるリフェノーティスは、本当に困っているようだった。
謂れもなく腹を立てられて、逆にリフェノーティスが怒ってもいいんだろうに、そこで怒らないのは人柄だろうか、それとも大人だからなのだろうか。
「……どうして、答えられなかったの？」
この質問こそ立ち入ってるかもしれないと思ったが、乗りかけた相談はちゃんと聞かねばならないと思った。
「私、探してるって思ったことなかったの」
言って、ううんと首を振る。
「探してるって言葉を使いたくなかったんだと思うの」
（？　よくわかんない）
有希の考えてる事が筒抜けなのか、リフェノーティスが笑う。
「探してるって言うと、その人は居ないことになるじゃない。見つからない、居ないから探す。でも、あの人が居ないっていうことを、私はただ認めたくなかったの。それは今も。あの人居ないって認め

てしまうのが嫌なの」
（……哀しい笑顔）
リフェノーティスは見たくないものに蓋をしている。蓋をしているとわかっていても、ずっと見ないフリをしていたという。
痛々しいほど傷ついた物を見たくないと思うのは、仕方のないようなことだと思う。
（でもなんか、違和感……。エストが現実を見ろって言うんだったらわかる。でも『無駄な人探し』っていう事自体には怒っていない気がする）
エストとろくに会話をしたのなんて今朝が初めてだったが、彼の優しさは昨日今日で少しは知っているはずだ。
リフェノーティスにあれこれと文句を言って、それでも面倒を見てしまう。二人の過ごしてきた日々は、きっとずっとそうだったんだろう。
穏やかで、やわらかな生活。外界とほとんど交わらないとリフェノーティスも言っていた。
二人だけの、孤立したような世界。
そんな中で、リフェノーティスは苦しい思い出にとらわれている。有希がこんなにもたやすく気付いてしまったのだ。エストも知っているのだろう。
二人しか居ない中、リフェノーティスが苦しんでる。それも、他の誰かの事で。
（……もしかして、独占欲？）
ちくりと、胸元が痛む。
「やだ、私ったらまた変な話して。――ユーキは本当に不思議だわ」
リフェノーティスが水を飲み干す。ごまかすようなその笑顔も、綺麗だ。
「……たぶん、たぶんだよ？」
真摯にリフェノーティスを見ると、リフェノーティスの顔から笑顔が消える。

「心配、してるんじゃないかなぁ？」
「心配？　……それでどうして、エストが怒るの？」
「それは、んー……どれだけ心配しても、リフェが変わらないから。っていうのと、多分エストは自分が出来る事がないからやきもきしてる、のかも」
「やきもき……」
そう言ったまま、リフェノーティスは黙り込む。
五年も二人で暮らしてきたのに、昨日今日乗り込んできた小娘が、そんな仲違いを正せるとは思っていない。
（でも、少しは役立てるかもしれない）
「私、エストに心配させてたのかしら」
「たぶん」
自信ないけど。そう付け加えたが、リフェノーティスは考え込んだままで、有希の言葉なんて届いていないようだった。
「……こんなに、長い間？」
（わかんないけど）
リフェノーティスがいつからその探し人をしているのか、そのことにエストがいつ気付いたのか。それは有希にはわからないほど昔の話だ。
突然、がたんとリフェノーティスが立ち上がる。その思いつめたような顔が、痛々しい。
「私、謝ってくる」
「え？」
そう言うと、エストが出て行った道をたどるように、リフェノーティスも出て行ってしまった。
有希は状況がよく飲み込めずに、黙って見送る事しかできなかった。
（……これで、良かったのかなぁ）
扉の閉まる音がしてしばらく。有希は一つ息を吐いた。
「……それにしても」

（二人とも、無防備すぎるんじゃないのかなぁ）
家主は両方とも出て行ってしまった。家に残されたのは、突然現れて家人に拾われた有希一人だ。
「いや、別に何かしようって訳じゃないんだけどさ。二人が仲直りしてくれたんだったら、それでいいんだけどさぁ……」
誰に言うでもなく、有希は一人で言い訳をして、冷めた粥をすすり始めた。

52

有希が朝食を食べ終える頃に、リフェノーティスはすっきりとした面持ちで戻ってきた。
そして大仰に礼を有希に告げると、一緒に来るように言われた。
言われるままにリフェノーティスの後に付いて歩くと、昨晩訪れた奥の部屋に通される。
リフェノーティスが有希の分の椅子も出し、そこに腰掛けるように言って、自身も椅子に座る。
椅子にすわると、リフェノーティスと向かい合うようになった。
「仲直りできたんだね」
ニッコリと笑うと、極上の笑みが返って来る。
「えぇ、ありがとうねユーキ」
そう言うと振り返り、台に乗った水晶を台ごと間の机に移動させる。
「さてと。お礼にユーキの人探しでもしましょうか」
不思議な色合いの水晶だ。まるで水晶の中が液体のようにうねうねと動いている気がする。正確には、その光が。
「……不思議な水晶だね。綺麗」
「ありがとう。母さまからのもらい物なの」
へぇと息をついて見入る。
「人探しするのに、とても使い勝手がいいの」
身体を移動させてあらゆる方向から覗き見ると、リフェノーティスが面白そうに笑う。
「ユーキ、手を」
「え？」
斜め下から天を仰ぐように見ていると、リフェノーティスが左手を差し出している。
「私の手を取って」

身体を戻して佇まいを直し、右手でリフェノーティスの手の平に手を重ねる。
「目を閉じて」
「うん……」
ろくろく説明もされずに、言われるままに目を伏せる。
「探し人のこと、思い浮かべて」
そうねぇ、と、耳に優しい中低音が聞こえる。
閉じた目は、部屋のどこかの証明の光でちかちかとまぶしい。
「思い浮かべてってアバウトだなぁ。具体的にはどうしたらいい？」
「何でもいいわよ。一緒に過ごした日々を思い返したり、顔を思い浮かべてみたり」
（顔……）
閉じた目に、恐ろしく綺麗なルカの顔が浮かぶ。
次いで、一緒に見上げた夜空。馬に乗った時の暖かな背中。頼もしい背中。
騎士の正装をしている姿が浮かぶ。灰銀色の甲冑を纏って、有希の足元に跪いた。
泉に入った為にびしょ濡れになった姿。面倒くさそうに、とても不敵に笑う仕草。
――あそこから、全てが始まった。
「……もういいわ。目を開けて」
やわらかなのにどこか従わせる声色に従って目を開く。
「この水晶はね、人の願いを聞いてくれるの」
「願い？」
「そう、願い。限度もあるし、魔女のものだから機嫌が悪いときもあるの」
（機嫌って、人間みたいだなぁ）
「願いだから、直接見ると願望も混ざっちゃって、情報がごちゃごちゃしちゃうのよ。だから、ユーキの願いは私を通してこの水晶に映るの」

「でも、願いでしょ？　あたしはルカが居る場所わからないよ」
リフェノーティスが綺麗な笑みを浮かべ言った。
「あら、私魔術士よ？　ユーキは魔術士の能力は知ってる？」
「あ」
水晶を通して、いろんな人とコンタクトが取れる。
（なんて便利な……）
ある意味電話よりも便利。むしろ発信機並ではないかと内心で突っ込みを入れる。
水晶の中には、ルカの姿があった。ふわふわと揺れていて、ルカを知らない人にはきっとルカには見えないだろう。
不安定に揺れて、ずっと眺めていると酔いそうだと思った。
「ルカート王子は、アドルンド城にいるわね」
名前を言い当てたリフェノーティスを見ると、ふふ、と意味ありげな笑みを返される。
リフェノーティスはまた水晶をじっと見ている。
「アドルンド城だろうけど……自室じゃないわね。――牢かしら。暗くて冷たい場所だわ」
（牢。やっぱり幽閉されてるんだ）
「アドルンド城の牢は地下にあるの」
それは、見ているものではなくリフェノーティスの知識だろう。
（――ルカ）
水晶の中でゆらゆらと揺れる人影。
居てもたってもいられなくなって、有希は立ち上がる。
「――行く」
「行ってどうするの」
「わかんないけど、行かなきゃ！」
「正直、ユーキが行ったところでどうにかなると思えないんだけど」
繋がれた手はほどかれていない。ぎゅっとリフェノーティスが掴んだままだ。
「ユーキはルカート王子とどんな関係なの？」

（どんな？）
「ただ、ユーキが王子を好きなだけ？　それとも、恋人なの？」
「違う」
エストにも聞かれた。家族、恋人。ルカはどっちでもない。
（どっちでもない。どっちでもないけど）
全てはあの日、あの場所で出会ったことから始まった。
「あたしも、拾われたから」
リフェノーティスが黙ったまま有希を見上げている。
「右も左もわからない場所で、ルカがあたしを拾って居場所を作ってくれた。ここに居ても良いって言ってくれた。一緒に来いって、言ってくれた！　だから今度はあたしが助けたいの。それじゃぁダメ？」
じんと目頭に熱が篭るのがわかる。
（泣いちゃ、だめ）
ぶるぶると震えながら泣くのを堪えていると、強い力で手をぐいと引かれる。そのままバランスを崩し、有希はリフェノーティスの胸元に納まっていた。驚きで涙が引っ込んだ。
「嫌な事言わせちゃったわね……。ごめんね、意地悪言って」
宥めるように、頭を撫でられる。ふわりといい匂いがする。
ぐずぐずと鼻をすすると、背中をトントンと叩かれる。
「ユーキをいじめようと思って言ったんじゃないの。ただ、ルカート王子はあの美貌でしょ？　公に出ない分、ファンの子達が無茶するのよ」
だからちょっと試してみたの。至近距離で聞こえるやわらかな声が、とても心地良い。
「でもまさか、ユーキがねぇ……」
どこか含みのある声が聞こえるが、有希からは顔が見えない。
ややもすると、どちらからともなく離れる。リフェノーティスは幼子にでも言うように有希の両手を取ると、こう告げる。
「私の知人がね――医者なんだけど。薬草と新しい義足を持って来

てくれる手はずなの。彼等はこの後あちこち歩きながらアドルンドまで行くそうなのよ。――ユーキ、彼等と一緒に行ったらどう？」
「え？」
突然の提案に目をぱちくりとさせてしまう。
「ちょっと遠回りしてしまうかもしれないけど、一人で行くよりも断然良いと思うわ」
（え、それは）
「行っても、いいの？」
「元々私の許可なんて関係ないじゃない。――でも、女の子の一人歩きは関心できないからね」
「っありがとう！」
嬉しくてぎゅっとリフェノーティスに抱きつくと、これみよがしにため息が聞こえた。
「……信じてくれるのは嬉しいけど、あんまり簡単に人を信用しちゃだめよ？」
身体を離して、リフェノーティスを見下ろす。困ったようなリフェノーティスが、どこかおかしい。
（それを、リフェが言う？）
見ず知らずの人間を拾って、家にあげてろくろく事情も聞かずに家人は家を空ける。それも数度。あまりの無用心さに面食らったのは有希の方だ。
（最初っから、疑う余裕すら与えてくれなかったくせに）
それは、有希の事を最初から信じていたからだとわかる。――そう、信じたい。
くつくつと笑えてくる。リフェノーティスが気付いていない手前、笑ったら失礼だとも思ったけれども、堪えようと思えば思うほどに笑えてくる。
「いい？　年寄りのぼやきにはちゃんと耳を貸しなさいよ？」
ますます墓穴を掘るリフェノーティスに、有希は堪えきれずに噴きだした。

リフェノーティスは複雑そうな顔をしていた。
「なによ、私の顔、そんなに面白い？」

53

有希が思っているよりも自分自身が子供で、リフェノーティスは大人なんだということを思い知った。
それは、ものの考え方、見方もそうだが、狡さや狡猾さも言える。
「でも、その人たち、あたしが一緒に行っても良いって言うかなぁ」
と、昼食時にぼやいた時だった。
「実はもう、先方には話を通してあるのよね。本人に会って決めるって言われたけど、まぁユーキなら大丈夫よ」
リフェノーティスはにっこりと笑う。何を考えているのだろう。心の中が全く持ってわからない。
「え、何が？」
すっかり機嫌が直ったのか、エストは上機嫌だ。
「ヴィーゴ達よ」
「え、何？　お前アイツらと一緒に行くんだ？」
聞きなれない名前に戸惑うが、きっとリフェノーティスの言う人たちなんだろうと頷く。
「へぇ……。会って決める、ねぇ」
「エストも思うでしょ？　大丈夫だって」
「あぁ……猫っ可愛がられそうだ」
どこか嬉しそうにリフェノーティスはニコニコと笑っている。
「で、いつ来るんだ？」
「三日以内には着くって昨晩言ってたわよ」
「じゃぁ、明後日くらいか」
（昨晩……？）
ふと、違和感を感じる。
リフェノーティスが有希に一緒に行くように言ったのは、今朝だ。
（っていうことはもしかして）
「ねぇリフェ、もしかして判ってたの？」

リフェノーティスはやわらかで綺麗な笑みを浮かべ。
「何が？」
と、有無を言わさぬように笑った。
（ヴィヴィといい、リフェといい。本当に何考えてるかわかんないわ。恐るべし……魔女と息子）
昼食は、野菜たっぷりのふわふわのオムレツとパンだった。

有希はそれから、二人。――ヴィーゴとセレナという二人が来るまで、エストの手伝いやリフェノーティスの手伝いをしながら過ごした。
エストは毎日昼過ぎになると、剣を持ってどこかへ行ってしまった。リフェノーティスに聞くと「エストは騎士になりたいみたいよ？」と、くすぐったそうに答えた。
なんの為に。口を開きかけてやめた。リフェノーティスの足がちらりと視界に入ったからだ。エストがもし誰かの騎士になりたいと思うなら、その人を尋ねるだなんて愚問だと思った。
リフェノーティスは気ままな生活をしていた。読書をしたり、薬を調合したり。時には火気を使うからと台所に立ち入って、台所をごちゃごちゃにしてエストに怒られていた。
「この近くにね、まぁ近くって言ってもそんなに近くないんだけど。――とにかくそこに孤児院があって、よくそこには薬を渡してるのよ」
そう言って、リフェノーティスは大量の薬を作っていた。
有希が見ている限り、リフェノーティスはずっと同じ薬を作り続けていた。
その日は二人が来るだろうと言われていた三日目で、昼を過ぎても彼らがやってくる気配はなかった。
エストは稽古から戻り、外で薪を割っている。
有希は薬を作っているリフェノーティスの手伝いをしていた。
「……ずーっとおんなじ薬作ってるけど、これは何の薬？」

「十日熱のよ」
「え？」
（十日熱！？　でも確か）
「十日熱には対処のしようがないって……」
それは、目の前に居るリフェノーティスが言っていたことだ。
「えぇ。でもヴィーゴが、これから来る医者が薬を作るのに成功したみたいなのよ。まぁ、特効薬っていう訳じゃないけど、死亡する確率は減らせるみたい」
さらりとリフェノーティスは言ってのける。けれどもそれは。
（凄く、すごいことなんじゃないの……？）
「これに更に必要なものがあって、それをヴィーゴが持ってきてくれるの。それまでにできるだけ作っておこうと思って」
「その、ヴィーゴさんて、どんな人なの？　リフェとどんな関係なの？」
「ヴィーゴは医者であり研究者ね。昔リビドムに居た頃の知り合いよ。今はセレナと一緒に世界中放浪しながら薬になりそうなものを探してるわ」
「へぇー。それで、十日熱の薬も研究したんだ。凄いね！
「そうみたいねぇ。まぁ、お仕事が貰えればそれでいいんだけど」
「……ぇ？」
（仕事が貰えれば？）
思わず手が止まる。リフェノーティスを見ると、調合されたものを飲みやすいようにと丸めている。有希の視線に気付いたようで顔を上げると、微笑みを浮かべる。美しい微笑みを。
「ホラ、生活できなくなっちゃうじゃない？」
「あぁ、そっか、そうだよね」
（生活するためには、ちゃんとお仕事しないといけないもんね）
どこか違和感は消えないままだったが、また作業に戻る。
覚えた違和感は有希をぎこちなくさせ、すこしだけ居心地悪く感じた。

夕方になると、有希は外に出て洗濯物を取り込む。
この三日間で有希の仕事になりつつある。
棒を引っ掛けて、物干し竿を外す。そして掛けてある洗濯物を回収する。
日光を浴びてほのかに暖かくなった洗濯物の匂いがとても好きで、思わず顔がゆるむ。
後方では、鍛錬から戻ってきたエストが薪を割っている。時折綺麗に割れる小気味良い音が聞こえると、何故か有希まで嬉しくなる。
洗濯カゴに次々に乾いた物を放り込む。手際よくできたときの達成感はちょっと誇らしいものがある。
木々の間から漏れる茜色の西日を追うように東の空は藍色だ。
突然、ふわりと強い風が吹いた。びゅうっとかすめた風は、カゴに放った白いシャツを巻き上げる。
「あ！」
舞い上がったシャツを仰ぎ見る。ひらひらと風に攫われて飛んでいる。
気が付いた時には追いかけていて、手に持っていた物干し竿が落ちる音が聞こえた。
（早く、取らないと）
蝶のように不安定にひらひらと舞うシャツは、空の色に紛れて紫色になっていた。
突然、追いかけていたシャツに誰かの手が寄る。寄ったと思ったらその手はシャツを掴んでいた。
驚いて立ち止まると、そこには二頭の馬が居た。
「……いつからあっこは託児所になったんだ？」
馬に乗馬しているのは、甲冑を纏った女性と、そしてシャツを掴んでいる男性。もっさりと髭が生えていて、どこか疲れたような顔をしている。
「ユーキ、大丈夫か……っヴィーゴ！　セレナ！　遅かったじゃん

！」
振り返ると、エストが走って来ていた。手を大きく振っている。
「おぉ、チビ、でっかくなったなぁ」
矛盾した物言いだが、どこか楽しそうだ。
（この人達なんだ）
見上げると、西日を受けて顔が赤くなっている。
甲冑を纏った女性と目が合う。慌ててお辞儀をすると、にっこりと笑われる。
（挨拶しなきゃ）
「あ、あの！　これからお世話になるかもしれません！　よろしくお願いします！　あ、あと洗濯物も捕まえてくれてありがとうございました」
いっぺんに言うと、頭を下げる。
しんと空気が止まる。
（あ、れ？）
返事も何もない。いぶかしげに顔を上げると、丁度甲冑の女性――セレナが馬から飛び降りて有希の正面に立った。
「！」
あまりの近さに驚いて一歩後ずさると、セレナの腕が有希に回る。次の瞬間には、物凄い勢いで抱きしめられていた。
「え、え？　えぇ？」
「あぁもう、なんて可愛いの！」
ぎゅうぎゅうと抱きしめる腕も、胸元も、冷たい甲冑が当たって痛い。おまけに力も強く、肋骨がきしむような気がした。
「あぁ、やっぱりな」
その声はエストのもので、有希はその言葉の理由を思い出す。
『あぁ……猫っ可愛がられそうだ』
（……こういうこと？）
「ヴィーゴ、この子、連れて行くわよ！　旅の癒しにする！　もう毎日毎日同じ顔ばっかり。見飽きたもの！」

「そりゃ悪かったな。――エスト、とりあえず家まであの馬引いてくれ」
「わかった」
「ヴィーゴ、ちゃんと聞いてよ！　だってこの子いじらしいじゃない！　見た？　さっきの！　あぁもう可愛いわ！」
更に力を込められる。
（あぁ……）
なんだか大変な人に会ってしまった。

54

客人二人がリフェノーティスの家にやってくると、ヴィーゴは奥にあるリフェノーティスの部屋へ行き、セレナは長旅だったということで湯を使った。

その間にエストと有希は夕食を作り、あっと言う間に晩餐の時間になった。

リフェノーティスは初対面の有希の為に二人を紹介してくれた。

ヴィーゴ・コロとセレナ・ビューテント。二人はリフェノーティスと同じくリビドムに仕えていたらしい。

セレナは黒の騎士で、ヴィーゴと契約しているらしい。右手には黒い指輪がはまっていた。

（あぁ、色号と同じ色の指輪なんだ……）

有希の指輪は紫で、ティータ達の指輪は茶色だったと思い返すと、心臓の辺りがきゅっと痛んだ。

「それで、早速なんだけどユーキを連れてってくれるわよね？」

五人で小さなテーブルを囲みながら食事を終え、エストが食後のお茶を入れているとリフェノーティスが言った。

食事をしながら、かいつまんで有希の話も済んでいた。

「んなこと言っても、どうせ連れて行かせるんだろ？」

そう言ってヴィーゴはコップをあおる。一人だけ酒を飲んでいるので、吐き出した息に酒気が混ざる。

「まぁね」

そう言って笑うリフェノーティスはどこか砕けていて、あぁ、仲良しなんだなぁと見ていて思う。

「私は大賛成よ！　愛する人の為に危険を顧みずに行くだなんて、どうしようもなく無謀だけど良い話じゃない」

（愛する人って言うわけじゃないんだけど……しかもさらっと無謀って）

セレナの左手はずっと有希の頭の上に乗せられている。常に有希の頭を撫で続けている。
「セレナ、あなたほんっとうに人の話聞かないわね」
「あら、私ちゃんと聞いてたけど？」
リフェノーティスが溜息をつく。タイミング良くエストがリフェノーティスの前に紅茶を置く。湯気と共に馨しい匂いが立ち込める。
「とにかく、私は賛成。ヴィーゴは？」
セレナに睨まれたヴィーゴは、のんびりと酒を飲んで、有希を見た。
「俺達は今から、リビドムを回って薬を配る。だから遠回りをすることになる」
「うん、わかってる」
間髪入れずに返事をする有希に、ヴィーゴの片眉が上がる。
「いい返事だ。――だがな、わかってるか？　それは十日熱の蔓延しているところに行くって事だ」
（十日熱……そうだよね。リフェが薬作ってたもん。それを配るのが、この人たちの目的だもんね）
「それも、わかってる」
きゅっと唇を結ぶ。
「わかってねぇな。お前さんが十日熱に掛かるかもしれねぇっつってんだ」
（あ、そうか）
死に至るかも知れない病が蔓延しているところに、のこのこと赴く。そういうことだ。
「セレナは騎士だから掛からん。まぁ掛かってもそんなにたいした事じゃない。ちなみに俺は昔掛かって生還したタチだ。二度と掛からん。だから俺たちはそういう死地に向かう事ができる。――お前さん、十日熱に掛かった事は？」
（おたふくと水疱瘡と麻疹は……って、関係ないか）
「……ない」

はぁ、とため息が聞こえる。同時に酒のにおいがぷんと鼻につく。
「ない。……けど！」
皆の視線が有希に集まる。
「死ぬ気もない！　だからついて行きます！」
思い切り机を叩くと、紅茶を置こうとしてくれていたエストがびくっと反応する。
「あ、ごめん」
「あぁいや。まぁ……飲めよ」
こくんと頷いて紅茶に手を伸ばす。その手はカップを掴む前に、セレナの腕にからめとられる。
気が付けば、有希は隣に座っていたセレナの膝の上に居た。そしてまたぎゅうぎゅうと抱かれている。
「あぁもう、なんて短気で健気なの！　可愛い！　可愛いわヴィーゴ！」
（短気って、褒めてる？）
背中に当たるやわらかい感触と、ふわりと香るいい匂いが心地良い。そういえば、両親も有希を抱きしめる癖があったなぁと思うと、抱擁が久しぶりで懐かしい。
「こまっしゃくれたガキだなぁ……リフェノーティス。また変なの拾ったなぁ」
「あら、ユーキはいい子よ？　気は利くし、よく手伝ってくれるし。整頓がとっても上手だったわ」
「そりゃお前がド下手なだけだろ」
「あら、違うわよ。みんなが上手なだ・け」
「そうかよ」
そう言って、コップの酒を全て飲み干す。
「おうマセガキ。お前の度胸に免じて、連れてってやっても良い」
「ほんと？」
その言葉を発したのは、有希ではなくセレナだった。
「やったわね、ユーキちゃん。リフェノーティスに感謝しなきゃね

！」
「え、え？」
（何でリフェ？）
ぎゅうぎゅうと抱きしめてくる腕に、もごもごと反抗して身体を反転させる。すると今度は背中から羽交い絞めにされたが、リフェノーティスの顔が見えた。
「だって、ヴィーゴったら最初っから反対してたもの。あなたにもそうだったんでしょ？　リフェノーティス」
「そうなの！？」
驚いてヴィーゴを見ると、机に突っ伏して寝ていた。盛大ないびきをかいている。
リフェノーティスは何も言わずにただ微笑んでいる。
「ユーキちゃんも、よっぽどリフェノーティスに気に入られたのねぇ」
まぁ、私も気に入っちゃったけどね。そう言ってまたぎゅうっと抱きしめられる。
「ぎゃっ」
腕が喉に掛かって首が絞まる。あぁごめんなさいとセレナが腕を緩める。
「……リフェ、大丈夫だって言ってなかった？」
話が違う。と口を尖らせて言うと、リフェノーティスはあら。と笑った。
「大丈夫だったじゃない」
「でも、ヴィーゴさんは反対してたって……」
「でも賛成したわよ」
それはここに居るみんなが証人よ。と、微笑んでいる。
（そりゃぁ、結果的にはそうなったのかもしれないけど……）
もし上手くいかなかったらどうしていたんだろう。
「ヴィーゴがお酒に弱いからいけないのよ。付け込まれるっていうことを考えもしないんだから」

「え？」
（それは……）
背中で「あぁ、こわっ」という呟きが聞こえた。
「元々、酔いに任せてゴリ押しするつもりだったの……？」
返事はなく、ただニッコリと美しい笑みだけだった。
「そもそも、私に歯向かおうっていうのが気に食わないのよ」
そう言って、リフェノーティスは紅茶を飲み干した。
（……これが大人っていうことなのかなぁ）
どこまで計算し尽くされているのか。考えるだけで感歎の息が出る。
「あぁ、だからリフェノーティスは敵にまわしたくないのよ！　エスト！　エストはこんな大人になっちゃダメだからね！　あぁ、ユーキちゃんもこんな狡賢い大人になっちゃイヤッ」
また力一杯抱きしめられる。
（う、で、出る）
「せ、セレナさんっ」
「そんな他人行儀な呼び方イヤッセレナって呼んで！」
更に腕に力がこもる。
「せ、せせれなぁああの、腕、うで。ごはん出る……」
「リフェ、紅茶も一杯飲むか？」
「お願い。――セレナ、あなた年甲斐もなく可愛い子ぶるのやめたら」
「あなたがその口調直したら考えるわぁ～」
「せ、せれな……」
そして聞こえるのはヴィーゴのいびき。
そうして、夜は更けていった。

55

気が付くと、有希はセレナと同じベッドで眠っていた。
二人で暮らすのに丁度いい大きさの家に、五人も寝泊りしている為に、寝床がないからだ。
（また早く目が覚めちゃったなぁ）
朝日が少しだけ出ているのだろう。まだ暗い中、窓の下辺りが白んでいる。
もぞもぞと動いて、ベッドから出る。
大きなあくびを一つして、リフェノーティスの部屋を出る。
暗い扉を開けると、居間とは反対の戸口がうっすらと明るい――リフェノーティスの小部屋だ。
「リフェ、起きてる？」
ノックをすると返事が返って来る。扉を開けると、むわっと草の匂いがたちこめる。
そこでリフェノーティスは、例の十日熱の薬を作っていた。
「リフェ！？」
「あぁユーキ、おはよう」
作業をしながらちらりと視線が有希に来る。リフェノーティスの綺麗な顔に、隈がしっかり出来ている。
「何やってるの……？」
見ればわかる事だ。薬を作っている。それでも、聞かずにはいられない。
「ホラ、セレナが今日出発するって言ってたじゃない？　少しでも多く作っておこうと思って」
有希の親指の爪ほどの大きさの薬が、有希が手伝っていた時の数倍の量になっている。
（すごい……）
「これ、どうやって飲むの？」

「水かお湯で戻して、それを飲むの。デロデロになるから見た目が結構えぐいんだけど、まぁ治ればえぐいも何もないわよね」
　リフェノーティスが指先で丸い薬をもてあそぶ。深緑と青緑が混ざったような薬が、水に戻された姿を想像するだけで口がすっぱくなった。
「これってさ、とっても凄い発見なんじゃないのかなぁ」
　昔この世界の人口の過半数を減らした病の特効薬を作った。それは、もしかしなくてもとてもとても凄いことなのではないだろうか。
「どうかしら。これで致死率が下がったらまずは成功でしょうね。でも、必ず治るっていうわけじゃないから変に期待は持たせられないわ」
「？　どうして？」
「飲めば必ず治るってものじゃないもの。たとえ薬を売って、患者さんが治らずに亡くなっても責任は持てないわ」
「そっか……」
（薬一つ作るのにも、大変なんだなぁ）
「それに、十日熱の薬はもう何十年も前から研究されているわ」
「そうなの？」
「えぇ。それに更に別の物を加えたのがコレよ」
　有希は手伝いで材料を見たが、色々な緑が混ざったこの薬を、疑わずにはいられないだろう。
「そういえば、ヴィーゴさんが持ってきたものも加えたんだよね。どんな薬草だったの？」
「ん？」
　リフェノーティスはニッコリ笑って、どこかから紫色の鉱石を取り出した。
「これよ」
（い、いし？）
「びっくりした？　私も驚いたわ。ヴィーゴの考える事はやっぱり吹っ飛んでるわねぇ」

（ほ、ほら、地球の医学も、確かカビとかから発見したとか言うしね……）
きらきらした紫色の鉱石を眺めて頷いた。

そらからしばらくして、皆が起きてエストの作った朝食を食べ、荷物を詰めて出立の準備をした。
有希はヴィヴィから渡された麻袋に、エストのお下がりの着替え数着と、十日熱の薬、そして乾物とドライフルーツを入れた。
エストがあれもこれもと用意してくれて、有希は少しほっとした。
日も昇り、あまり遅い時間になってはいけないということで、昼食を食べてすぐに出立となった。
ヴィーゴは「またやられた」と二日酔いで辛そうだったが、やけに明るいセレナに急き立てられて、すごすごと馬に乗った。
有希もセレナに呼ばれ、荷物を肩に掛ける。
リフェノーティスとエストがそれを見守っている。有希は肩から麻袋をかけなおして、頭を下げる。
「数日間、本当にお世話になりました。右も左もわかんないあたしに良くしてくれて、本当にありがとう」
ニッコリと笑うと、リフェノーティスは笑み返し、エストがぷいとそっぽを向く。エストのそれが照れ隠しだとわかってしまうほど、仲良くなれたと思う。
「リフェも。沢山話をしてくれてありがとう。お陰でやりたいことがわかった気がする」
「そう？　なら良かったわ」
あぁそうだ。そう言って、リフェノーティスは後ろ手から黒い麻袋を差し出す。
「餞別」
「え、ありがとう。見てもいい？」
頷くリフェノーティスを見て、細身の麻袋を開ける。
「――え」

そこには、弓と矢。そして皮手袋が入っていた。
「どうして……？」
「手を握ったときにね、指の皮が厚かったから」
その笑顔は、雨の中で会った時と何も変わらない。
（……リフェは面の皮が厚いと思う）
「ユーキ。私たちと彼等はまぁ、一応信頼が置けると思うわ」
そう前置きをして、有希の目線に屈む。
「そんな私が言うと説得力ないかもしれないけど、あんまり初対面の人を信じない方がいいわ。ユーキは無防備すぎるわ」
これから危険な所に行くんだから。そう告げられる。
（それは、そうかもしれないけど）
自分が今までどれだけ出会う人に恵まれてきたか。いろんなものを見て、沢山知った。
「リフェの言う事は正しいと思う」
そう、リフェノーティスの言うことはいつでも正しかった。
（でも）
「あたしみたいなちょっと変わってる人間は、先に人を疑っちゃいけないの。信じてあげなきゃいけないの。だってあたしから先に疑ってかかったら、相手はあたしのことをもっと疑っちゃう。信じてもらえなくなっちゃうよ。――『自分が信じるから、相手は自分を信じてくれる』」
セレナが有希を呼ぶ声が聞こえる。
「それが、パ……お父さんの教育方針なの！　あたしはどんな人でも、信じる事をやめないよ」
言ってて恥ずかしくなって笑ってごまかす。どうにか話を逸らそうと考えていると、水晶に映った人影を思い出した。
「そ、そういえば、前リフェの水晶でチラッとみた人、お父さんに似てるかも」
笑いかけると、リフェノーティスの目がどこか真剣だった。
「その……お父さんは今、どこにいるの？」

「え」
心に、あの日が蘇る。憎らしいほどに晴れ渡った空。くるりと反転した世界。
「……遠いとこ」
セレナの声が響く。
「ユーキちゃん！　行くわよ！」
「あ、はぁい！　じゃぁ、行くね。弓と矢、ありがとう！」
手を振って、小走りに駆けて行く。
「ユーキ！」
振り返る。そこには、新しい義足をつけたリフェノーティスが跪いている。
「……どうか、健やかに……」
「うん、ありがとう！」
大きく頷いて、再び手を振る。
そして、セレナの長い腕にしがみついて乗馬した。
馬は手綱を引かれて、くるりと反転する。
有希は振り替えずに、しっかりと前を見据えた。
「まずはここから一番近い場所にある孤児院に行くわ」
「わかった」
「舌を噛むから、喋らないようにね」
こくりと頷くと、セレナが馬の腹を蹴った。

あの少女と君主が似ていると、数度思った。
こんなにも天真爛漫な人間が、あの人以外にも居たのかという驚きと、あの人だけでもかまわないのにという虚脱と、そして、懐かしい温かな気持ちがあった。
『自分が信じるから、相手は自分を信じてくれる』
常に自身に言い含めて、誰にでも献身的に尽くしていた君主。感謝されることよりも、唆される事の方が圧倒的に多かったのに、それでも家臣を、民を信じ続けた。

――そんな人だからこそ、全力で守りたいと思った。
「カーン様……」
守ることの出来なかった、たからもの。
『……遠いとこ』
きっと彼女の言う場所に、リフェノーティスは行けないのだろう。
否、行こうと思えば行ける場所だが、会えるとは限らない。
「――それ、リフェの探してる人？」
はっと我に返ると、どのくらい立ち尽くしていたのだろうか。蹴爪の音すら聞こえなくなっていた。
（ずっと、そこにいたの？）
口を開いても、何と声を掛けていいのかわからない。
エストは、ずっと彼を嫌っていた。見たこともない彼を。自分がずっと探していることを心配して。
（心配……）
灰色の目が、まるで反応を見るかのようにじっと見つめている。
（心配、してくれてるの？）
困惑していると、わざとらしいほどの溜息が聞こえた。
「もぉいいよ。別にソイツの事探してるのを怒ってるんじゃないから。む、むしろ今まで手伝わなくて悪かったな。今度からオレも一緒に手伝うよ」
きゅうっと心臓が痛む。わかっていた君主の喪失よりも、小さかった少年が大きくなっていること、あまつさえ心配してくれていることが、沁みるほどに痛い。
（こんなに、長い間）
いつから気付いていたのだろう。いつからこうやって、見守っていてくれていたのだろう。あの小さな体で。
そうしようと思う前に、体が動く。
「で？　ソイツの名前、なんていうんだ？」
両手がエストの肩に回る。自分よりもふた周りも小さなその体を抱きしめる。

「え、あ、リフェ……？」
「もういいの」
「もういって」
「いいの。――あの人は、もう居ないから」
そんなの、もうずっとずっと前から知っていた。
ただ認めるのが嫌だと意固地になっていた。
それがどれだけこの子を苦しめたのだろう。
（ごめんね、ありがとう）
力を入れたら折れてしまいそうで、それでも、リフェノーティスを必死に支えようとしてくれた。いつもいつも傍らに居てくれた。
（あの人は、もういない。でも、私にはこの子がいる）
今度こそ、全力で守らなければならないと、思った。

56

リフェノーティスとエストの家から一番近い聞いていた孤児院は、馬で三時間ほど走ったところにあった。
どうやら孤児院の方々と二人は顔見知りのようで、何のためらいもなく通された。
孤児院といっても、そんなに大きくなく、幾度となく見てきた宿屋に良く似ていた。
有希達は孤児院の院長と挨拶をして、少し世間話をする。
初老の院長は柔和に微笑む人だと思った。
ほどなくして、子供達がわらわらとやってきた。やっと歩き始めたような子から、小学生くらいの子まで大小様々な子達だ。
客人が珍しいのか、部屋から顔だけ覗かせている子供も居る。
「ねぇおねえちゃん、どこからきたのー？」
「遊ぼう！！　あたしね、こないだせんせぇにあたらしいにんぎょうつくってもらったの！」
「え、えぇ？　えっと……」
我先に我先にと子供達がまくしたてて話す。どの子を相手にしたらいいのかわからずに戸惑っていると、セレナが近くにいた幼子を抱き上げる。
「はいはい、みんな遊んであげるから！　あっちの部屋に移動しようか」
「うん！」
「はやく！！」
セレナが有希にウインクする。
「ユーキちゃんはそこでヴィーゴのお手伝いしてちょーだい」
そう告げると、子供達と奥の部屋に入っていった。
また静かな空気が流れる。ヴィーゴは大きなあくびをした。
「んで？　院長、特に具合の悪い子供は居ないんだな？」

「それが……一人、ここ数日悪そうにしている子が居ます」
ヴィーゴの目の色が変わる。
「その子はどこに？」
「たいした事無いと言って、今あの部屋で子供の世話をしています」
「何だって？　体調が悪いのに？」
院長は申し訳なさそうに口を開く。
「ここは幼子が多いので、数少ない年長の子には、小さい子を見てもらっているんですよ」
「その子が十日熱で、チビに感染したらどうするんだよ！　ックソ」
ずんずんと歩き出す。慌てて有希もそれについていく。
「院長、小さな部屋で良い。誰も入れなくできる部屋を用意してくれ」
「は、はい！」
顔を出していた子供達が、首を引っ込める。それと入れ替わるように部屋に入ると、先ほどの子供達が一人の少女にべったりとくっ付いている。
数人に囲まれて座っている少女の年の頃は十四、五くらいだろう。赤黒い髪の毛がとても印象的な少女だった。
少女は乳飲み子を抱いて、きょとんとヴィーゴを見ている。
（なんだ、普通じゃん）
「この子だな」
決め付けたように、ずんずんと少女に向かう。ヴィーゴの気迫が怖いのか、子供達が少女の後ろに隠れようと皆でぎゅうぎゅうと押し合っている。
「な、なんですか？　今やっと寝入った所なので――」
聞く耳を持たず、ヴィーゴは少女の額に手を当てる。
「――大分高いな。相当無理してるだろう。いつからだ？」
少女が驚き、次にむっとした表情を浮かべる。
「別に、平気です」
「いつからだ？」

さらに追い詰めるように聞くと、少女は小さく「三日くらい前」と呟いた。
「三日前……ックソ」
少女の手からひったくるように赤子を取ると、有希に押し付ける。そしてヴィーゴは少女を横抱きして、部屋から出て行った。
（お姫様抱っこだ……）
泣き出してしまった赤ん坊と、あまりの気迫におののいた子供達を宥めながら、有希は凄いと思っていた。
「お医者様って、凄いね」
きっと、有希も子供達も、少女が行ってしまった場所にはいけないだろうということで、少女の代わりに有希がなろうと思った。

その小さな孤児院には、院長以外は孤児しかいなかった。
子供の人数は二十人。内十歳以下の子供が十五人もいた。
高熱で倒れてしまった少女、チルカが最年長の十五歳。チルカの次の年長は十三歳の男の子だった。
孤児院は全てチルカが仕切っていたらしい。食事のことも、子供達のことも。
幸い、セレナが居てくれたので、有希とセレナは倒れたチルカの代わりに子供達をあやし、夕食を作った。
「それにしても、あの子すごいわねー」
「ね、一人で全部やってるだなんて、本当に凄い」
「そうじゃないわよぉ。ここの子達、みんな上の子が下の子の面倒見てるの。そういう風に教育するの、大変だったと思うわぁ」
わいわいとにぎやかな食堂は、とても活気が溢れている。
有希がスープを入れると、十歳前後の子供がトレイに置いて持っていってくれる。その光景が微笑ましくて、顔がほころぶ。
セレナが隣で麦の粥をすくっている。
「でも、何で子供達しかいないんだろう。セレナ、前もココに来た事あるんだよね？　前からこんな感じだったの？」

「前はもっと年上の子が居たわよ？」
「じゃぁなんで――」
「戦争があったからに決まってるじゃない」
驚いて、スープが手に掛かる。不思議と熱さは感じなかったが、左手がチリリと痛んだ。
「あぁ、もう。大丈夫？」
セレナがタオルを差し出す。受け取ったはいいが、その場に立ち尽くす。
（戦争があった）
そう。リビドム兵が、アドルンドとマルキーの戦争の一番の犠牲者だった。
（リビドム兵って言っても、普通の人も居たはずなのに）
彼らも、この場所で、今の有希と同じように子供達に食事を与えていたのだろうか。
そう考えると、酷く切ない。悲しいのだと思っても、それを表に出してはいけないような気がした。
「お姉ちゃん、どうしたの？　手ぇいたい？」
小さな男の子が、有希を覗き込んでいる。
その仕草が可愛らしいなぁと暖かい気持ちになると、それと同時に、同じ頃の少年が目の前で切り捨てられた瞬間が蘇る。
自分の無力さ、非力さが、とても悔しかった。
「お姉ちゃん？」
小さな男の子が有希を覗き込んでいる。
「大丈夫だよ。ありがとうね」
（なに、小さい子に心配掛けさせているんだろう）
そもそも、お手伝いをするために居るというのに。
ニッコリと笑って頭を撫でると、男の子は満足気に笑ってくれた。
「もしお姉ちゃんを泣かせるやつがいたら、ボクがやっつけてあげるからね！　ちるか姉ちゃんが、おんなのこにはやさしくしなさいっていっつも言ってるんだ！」

男の子が拳を握って得意に言ってみせる。
「ホント？　なら、ここの女の子のことも守ってあげてね」
「モチロン！　ちるか姉ちゃんもボクが守るんだよ！」
（本当に凄い）
チルカという少女は、こんなにも子供達に慕われている。
そんな彼女は、熱にうなされている。
「チルカ姉ちゃん、早く治ると良いね」
（早く、治って欲しい）
この子供達の笑顔を守るためにも、この孤児院を守るためにも。
そんな儚い思いも虚しく、その夜チルカは発疹した。

57

十日熱は、二、三日の潜伏期間を経て、発症する。
最初は高熱が出て、それがしばらく続くと発疹する。
十日熱に掛かって治る人は大体、発疹する前に熱が引くという。
発疹して、それから治る人は殆どいないという。
ヴィーゴからそう聞かされたが、それでも希望は捨てられないでいた。

――チルカが発疹して、三日が経った。
チルカが発疹したということは、風邪ではなく十日熱だということが確信付けられた。
子供達はチルカの居る部屋に立ち寄る事すら出来なくなってしまった。
孤児院の最年長で、皆のまとめ役だったチルカが居なくなった事で、皆不安そうにしていた。
どれだけ有希やセレナが子供達と遊んでいても、最初に会った日のような笑顔は、見られなかった。
ヴィーゴはチルカの傍にずっと居るから、子供達と関わってしまったら感染させてしまうかもしれないからということで、ヴィーゴにも会っていない。食事や雑務は全てセレナがやってくれた。
「なんか申し訳ないわ。本当はもっと早くココを出るつもりだったんだけど」
洗濯物を畳みながらセレナがぽそりと言う。子供達は遊びつかれて昼寝をしていた。
有希は首を振る。
「ううん。早くアドルンドに行かなきゃって思うんだけど……たぶん、あたしは何も出来ないから」
（今も、こんなにも何も出来ていない）

「それに、こうやって普通の生活っていうのも勉強になるし！」
有希の知らないこの世界の歴史、常識、秩序。そのどれもが新鮮で、そのたびに自分の無知を呪いたくなる。
（でも、無知は言い訳にならない。だから、知ろうとしなきゃ）
セレナはぽかんと有希を見つめる。
「なんか、今まで普通の生活してなかったー。みたいな口ぶりね」
「え？　あ、えぇっと、あたし、ずっと外国に居たの」
「え、海の向こうから！？」
こくんと頷くと、セレナが感歎の声をあげる。
「時々流れ着く人が居るって聞くけど、ユーキちゃんもそうなのねぇ」
「そうなの。それで、流れ着いた時にお世話になった人が今アドルンドに居るの」
（嘘は、言ってないよね）
「なぁんだ。てっきり別れ別れになった愛する人に会いに行くのかと思ったのにぃ」
拗ねたように唇を尖らせる仕草が可愛らしい。ふふっと笑って、次の洗濯物を取る。
「愛する人、かぁ。向こうはあたしの事どう思ってんだか」
セレナの目がキラリと光ったような気がした。
「なになになに？　その人ってやっぱり男なの？」
詰め寄るようにもぞもぞとセレナが近寄ってくる。畳んだ洗濯物が倒れそうになって、慌てて手で押さえる。
「やっぱりって……まぁ、そうだけど」
「きゃー！　で、どんな人なの？」
「ど、どんなって……そ、それよりセレナはどうなの？」
「私のことはどうでもいいのよ」
「っそれずるい！」
ばれたか、とぺろっと舌を突き出す。
「じゃぁ、ユーキちゃんが話すなら、私も話すわぁ」

そう言って、セレナは淡々と洗濯物を畳む。
決して有希を強制させない物言いをするセレナに、思わず微笑む。
（大人だなぁ）
可愛らしい発言をするけれども、決して有希の中にずけずけと踏み込んでくる事はしない。その気遣いが、どこか嬉しい。
（あたしが話すなら……）
「特に、話すことなんてないよ」
セレナの視線がちらりと有希を捕らえる。それに気付いて、微笑みかける。
「たまたまあたしが落ちた所に居て、気まぐれに保護してくれて」
（気まぐれに契約までして）
右手中指を撫ぜる。
「どこか行くっていうと連れてってくれたり、あたしが付いて行くってワガママ言って迷惑かけたり。それで逆上しちゃって飛び出して、離れ離れになって……ホント、それだけ」
（言葉に出すと、薄っぺらい関係だなぁ）
「沢山迷惑かけたの。探しにきてくれた人も居たのに、やっぱりはぐれちゃって。あたし、本当に何も知らなくて、ただ与えられるままになってて、甘えて、それなのにワガママばっかり言ってた」
（もし次会ったとき、契約破棄。とか言われちゃったらどうしようかな）
思わず自嘲の笑みがこぼれる。右手を掴む手に力が入る。
「それで、謝りに行くの？」
「……うん」
「そう。ならいいじゃない！　謝るのって勇気いるもんねぇ。許してもらえないんじゃないかとか、酷いこと言われるんじゃないかとか。考えただけで怖いわぁ」
ぶるぶると震えて見せるセレナに、思わず笑みが浮かぶ。
「ユーキちゃんはいい子ね」
「そうかなぁ」

（今散々ワガママ言い放題だったって言ったばっかりなのに）
セレナが何を考えているのかわからないと見ると、エへへと苦笑するセレナが居る。
「私は強情っぱりだからなかなか謝るっていう事できないのよねー」
ヴィーゴにも謝った事なんてないわ。ときっぱりという様がすがすがしい。
「そういえば、セレナとヴィーゴさんってどんな関係なの？」
二人と一緒に行動しているとき、もし恋人同士だったら邪魔かもしれないと心配したのだが、そういう空気を今のところ一切見ていない。もし有希に気を遣っているのなら申し訳ないと思った。
セレナはあっけらかんと言った。
「私とヴィーゴ？　そうねぇ、言うなればキョウダイかしら」
「え！？」
目の前のセレナを凝視する。薄紫の髪にオレンジ色の瞳。全体的に色素が薄く、儚げに見えるセレナと、粗野という言葉がとても似合う、あの無精ひげの男が。
「え、えーと、どっちが上なの？」
有希の考えている事がわかったのか、ぎょっとしたようなセレナが言う。
「ちょっと嫌だ、どんな想像してるの？　実の兄妹じゃないわよ。義兄妹ってヤツ！　私の旦那がヴィーゴの弟なのよ」
「え？」
旦那。その言葉に有希は面食らう。
「セレナって結婚してるの！？」
思ったより大きくなってしまった声にはっとして、口に両手を当てる。
辺りを確認したが、子供達が起きる気配は無い。ほっとして手を外す。
セレナはにやにやと笑っている。
「まぁねん。前は旦那の騎士だったのよ私。地元じゃ有名な夫婦だ

ったんだから」
男女逆転のね。と付け加えて笑う。有希もつられて笑う。
「へぇ～、そうなんだ。――でも、じゃぁどうしてヴィーゴさんと契約したの？」
どういういきさつで、旦那ではなく、旦那の兄と契約し直したのだろう。
よくわからないと首を傾げると、逆にセレナが首をかしげた。
お互いに良くわからないという顔をしていると、突然セレナが何かを察したように言った。
「あぁそうか、ユーキちゃん外国から来たんだもんね、知らなくて当然かぁ」
「何が？」
「旦那ね、死んだのよ。それで遺言が『兄をよろしく』っていうもんだったから、あの放蕩者の兄を守ってるっていう訳」
（死ん……）
また地雷を踏んでしまったかと悲壮な顔になると、慌てて気にしないでとフォローが入った。
「まぁ元々私とも仲良かったから、まぁこれから一生付き合うことになってもいいかなーって思ってねぇ」
（……一生？）
一生付き合う。それはヴィーゴとだろうか。
「一生って、どうして？」
「あら、だって契約したら騎士か主人が死ぬまで契約は放棄できないもの」
（死ぬまで、契約を放棄できない？）
「ユーキちゃんは知らないかもしれないけどね、ここじゃ男女の契約はプロポーズみたいなモンなのよ。――あぁ、稀に兄弟で契約している人とかも居るけど」
「プロ……ポーズ？」
「そう。だから騎士が女の子を主人にするっていうのはそう言う意

味なのよ。乙女の憧れよ！　目の前で騎士が跪いて一生守るって誓約するの」
中指を撫ぜていた手がかちんと固まる。
「……まぁ私も、お陰でよくヴィーゴとは夫婦だって勘違いされるのよねぇ。だから自由に恋愛もできないの。ほんっと、あのヒゲ男が憎たらしいわぁ」
（乙女の、憧れ）
あのだだっ広い広間で、沢山の軍人と、オルガの前で跪いたルカ。
契約したという事に、アインは酷く怒って、ナゼットもティータも、酷く驚いていた。
それがどういうことかわかっているかと問うたオルガ。
契約した人が、国の王子だったからみんな驚いているのだと思っていた。それと有希が異邦人であること。
なにか不備があれば契約を破棄するのだろうと思っていた。
なのに。
「……軽はずみでしたこと」
あの恐ろしく綺麗な男は、間違いなくそう言った。
星が降ってきそうな程に綺麗な夜空だった。
（一生ものの契約を、軽はずみで……）
プロポーズ。乙女の憧れ。どちらかが死なないと契約は終わらない。
そんな言葉が頭をぐるぐると駆け巡る。
今なら、にやにやと笑っていたヴィヴィの笑顔の意味がわかるかもしれない。
「……ユーキちゃん？　どうしたの？」
ぼっと顔が赤くなるのがわかる。
「なに？　どういう意味？　軽はずみでしたけど後悔はしてないってどういうこと？　え、なに？　そういうことなの？　そういうことって何？」
あわあわと混乱してしまう。躍動した鼓動は止まる事を知らず、

有希の顔を真っ赤に染める。
「もしかしてユーキちゃん、騎士と契約してるの？」
（契約）
イコール、プロポーズ。その言葉が有希を支配する。
「うわぁあぁっ」
恥ずかしさに、洗濯物の山に顔を埋める。
一生に一回あるかないかのプロポーズ。いつか大人になって、好きな人が出来て、恋をして、そしていつか。どきどきしながら迎えるものだと思っていた。
なのに、知らないうちにされていた。しかも、周りの皆は知っていて、有希だけその意味を知らなかった。
（どうして皆、教えてくれなかったの！）
「〜〜っバカルカ！　バカルカ！　ルカのバカァ！　そういう大事なことは、もっとちゃんと説明してよぉおお！」
どれだけ罵っても、なかなか平静は取り戻せない。
もう一度叫ぶと、その声に子供達が目を覚ましてしまった。
起きた子供達は、真っ赤になった有希と「超可愛い」と叫んで有希を抱きしめているセレナを見て、きょとんとしていた。

58

あまりにもセレナが有希を笑うので、猫のように威嚇して、フーフー呼吸をしていると、大笑いしたセレナが手を放す。
「あはは、冗談よ。半分いかないくらい」
「それって冗談じゃないよ！」
きょとんとした子供達は、何か楽しそうな事をしているのだと勘違いをし、わらわらと駆け寄ってくる。
「うんでも、契約するっていうことは、ユーキちゃんのこと、悪くは思ってないんじゃない？」
セレナは立ち上がると、子供達の布団を畳む。
「普通は嫌いな人と契約なんてしないわよ？　たとえどれだけお金を積まれたとしてもね」
有希はセレナの分まで畳む。
「じゃぁ、セレナもヴィーゴさんの事好きなんだね」
「えっ」
突然動きを止めたセレナに、子供が激突する。泣き出す直前の子供を抱きしめて、セレナは有希を凝視する。
「え、なに？　違うの」
「いや！　違くないわよ！」
慌てふためくセレナが、有希にはイマイチ理解できない。
「えぇ――好きよ。大好きよ！」
有希は破顔して、次の洗濯物を引っ張る。
「よかった、あたしもねぇ、好きだよ。ヴィーゴさん。口調はキツイけど面倒見がいいところとか。あ、セレナも好きだからね」
そう告げると、あからさまに落胆した様なセレナが、布団にぱたんと倒れる。
「……ユーキちゃん、それは酷いわ。卑怯よ」
「え？　何が？」

布団に倒れ込んだセレナが面白いのか、次々に子供達がセレナの上にのしかかる。人間布団のようになった子供達は、楽しそうにはしゃいでいる。
セレナも笑って、子供達と格闘をはじめる。
洗濯物を片付け終えた有希は、全て重ねて立ち上がる。
「リタも手伝う」
声に振り返ると、有希の服の裾を引っ張っている小さな女の子。リタが居る。
リタは大人しい性格だが、よく気が付くいい子だ。
「ありがとうリタ、じゃぁ、これだけ持ってくれる？」
両手を差し出す小さな手に、数枚のタオルを載せる。
「リタ、あたし、この服をどこに置くのかわすれちゃったんだけど、どこか案内してもらえるかな？」
聞くと、リタは嬉しそうに頷いて「こっち」と先導する。
その小さな身体を見ながら、ゆっくりと着いて行く。
（ここの子達は、本当にいい子だなぁ）
頬がゆるむのを自覚して、へらへらと笑う。
廊下を歩いて、ある部屋の前でリタが振り返る。
「おねえちゃん、ここだよ」
「あぁ、そうだっけ！　ありがとうリタ」
お礼を言って、扉を開ける。
その部屋に居た人物を見て、有希は絶句した。
（――マルキー王子）
ずきりと、見えない胸の火傷跡が痛む。
そこには、院長と、あの塔で顔を突き合わせていた、マルキー第二王子が居た。
「パーシーちゃん！」
第二王子――パーシーに気付いたリタは、満面の笑みを浮かべてパーシーに駆け寄る。
「リタ！」

「これリタ、そのように呼んではといつも……」
「あぁいいんだ、気にしないでくれ。リタ、何してたんだ？」
「せんたくものかたづけに来たの」
パーシーは「偉いな」と言って、リタの頭を撫でる。そして立ち尽くしている有希に気付いたのか、顔を上げる。
見覚えのある群青色の瞳が有希をとらえる。思わず、ふいと目をそらしてしまう。
「お前――」
（やばっ）
あからさまに顔をそむけ過ぎただろうかと後悔する。
（でも、あたし今姿違うし、だ、大丈夫だよね）
顔を上げて、ニッコリと笑う。パーシーが面食らったように目を瞠る。
「彼女は、今ここに滞在してらっしゃるお医者様のお手伝いさんです。子供達の面倒など見てくださって、とてもよくしてくれているんですよ」
院長が注釈を入れてくれる。それにパーシーはおざなりに返事をする。
「そ、そうか」
パーシーは何か言いたげに、ちらちらと有希を見る。
（やっぱり、面影あるもんなぁ）
ヴィヴィは有希を全くの別人につくらなかったようで、瞳の色と身長以外、特にあまり変わっていない。
「……お前、妹はいるか？」
「いえ、居ません」
「そうか失礼した」
（別人みたい）
あの塔で会った時の、あの剥き出しの悪意はどこにも見られない。
「ユーキさん、こちらのお方は……」
「パーシーだ。時折こうして世話になっている。今日からも数日間

世話になる。その間はよろしく頼む」
（世話になる？　一国の王子様が？）
しかも、今の言い方は明らかに自分の身分を隠そうとしている。
（なんで、マルキーの王子がリビドムの孤児院に？）
疑問が幾つも浮かんだが、こちらこそよろしくお願いしますと頭を下げる事以外できなかった。
「パーシーちゃん、あそぼ」
いつのまにかタオルを仕舞ったリタが、パーシーの手を引っ張っている。
「おぉ。いいぞ。皆は今広間か？」
「うん」
言うと、リタが両手を広げて抱っこをねだる。パーシーはねだられるままにリタを抱き上げる。
「じゃぁ院長、そういうことで頼む」
「はい、畏まりました」
リタを抱いたパーシーは、院長と有希に一瞥すると、部屋を出て行った。
途端に、部屋が広く感じた。
（思ってたけど、存在感のある人だなぁ）
早いところ洗濯物を片付けなければと、棚を開いた。
「ユーキさん。少しお話が」
間違いなく、パーシーの事だと気付いた。
「なんでしょうか」
立ち上がって、姿勢を正す。
「ユーキさんは、マルキーが憎いですか？」
「え？」
思いも寄らぬ質問に、素っ頓狂な声が出る。
「あ、ご、ごめんなさい。憎い――」
マルキーに居た頃を思い出す。塔に侵入して、牢を破って、ダンテとガリアンを救出して。捕まって、パティに会って。

（そして処刑された）
処刑場の光景を思い出すと、今でも恐怖で身体が震え、胸の刻印が痛む。
「憎い、とは思えません」
「それは、どうして？」
（どうして？　だって、マルキーがあたしを処刑したのだって、元はと言えばあのクソ兄様が）
そこまで考えて、違うと気付く。
（リビドムは、マルキーと戦争したんだ。そして、民間の人を徴兵して、戦争に送り出している）
家族や友人や恋人を失った人が沢山いる。悲しみを抱えきれない人々が、今もこの国で絶望している。
（あたしは）
とても、申し訳ない気持ちになる。
「あたしは、マルキーとリビドムの戦争を経験していないからだと思います」
院長が意外そうな顔をする。
「あたし、遠いところから最近来たんです。だから、この世界のこともよくわからなくて、勉強がてらヴィーゴさんたちに着いて来ているんです」
（嘘じゃないよね）
じっと見つめると、院長は穏やかに笑む。
「そうですか。――パース……パーシー様は、マルキーに統合されたリビドムの知事を行ってる方なのです」
（へぇ）
年のころは有希と同じくらいなのに、そんなに偉い地位なのかと驚く。
（でも、パティもケーレの知事って言ってたっけ）
あの水色の長い髪と、何もかもを透かしそうな水色の瞳を思い出す。

「やはり戦争の傷痕というものは、根強く残り、はじめは皆、パーシー様を快く思わなかったのです」
「それは、そうでしょうね……」
日本だって、終戦から何十年たっても、未だ確執の残っているところが沢山ある。
「それでも、パーシー様はリビドムの民を憐れんで下さり、沢山の施しをしてくださいました。この孤児院もそうです。食料も衣類もなにもないこの孤児院に援助してくださったのは、パーシー様なのです」
「そう、なんですか」
あまりにも意外すぎて、言葉に詰まる。
「勿論、パーシー様をよく思わない者もおりました。……というか、皆がパーシー様を憎んでいました。平和だったリビドムを侵略しておいて、今度は施しを与える。これ以上リビドムの民を侮辱するのか、と」
苦いものを噛み潰すかのように、院長は続ける。
「けれども、どれだけ罵倒されても、あのように姿をお見せになり、そのたびに食料や衣類を分けてくださった。すまないと何度も頭を下げられて――」
（そうなんだ）
想像もなにも出来ない。院長の声は少し震えている。
「考えてみれば、リビドムが戦争で敗れた際、パーシー様はまだ七つにもなっていなかったんですよ。それなのに、何度も、何度も――いつのまにか、私共はパーシー様を受け入れるようになりました。私共だけではありません。リビドムの民は皆、もうパーシー様を支持しているのです。ですからどうか、パーシー様を厭うのは……」
やめてくれ。と目が訴えかけている。
「はい……」
なんとか返事はしたが、正直、混乱している。有希に何度も死ねと言った彼が、リビドムを助けている。

「それはよかった。では、私も失礼します」
そう言うと、院長は会釈をして出てゆく。
ぽつんと取り残された有希は、その場に立ち尽くしてしまった。
「……なんで？」

59

世話になる。そう言われた通り、有希達はパーシーの世話もするようになった。
といっても、特にやることはなく、むしろパーシーが子供達と一緒に手伝いをしてくれる程である。
この孤児院にはよくやってくるらしく、子供達はとてもパーシーに懐いていた。
「コラ、勿体無ぇから残すなよ」
「ヤダ！　もったいないならパーシーちゃんが食べればいいじゃん」
「こっのヤロォ」
いーだ。と、口を広げる男の子の頭をゲンコツで殴るくらい馴染んでいる。
口は悪いが面倒見がとてもよく、その光景は、どこか塔の最上階での出来事を彷彿とさせた。
（面倒見がよかったのは、ココに来ていたからなのかな）
パーシーが孤児院に来てからと言うもの、彼の事ばかり目で追ってしまう。
「なぁにユーキちゃん。彼の事気になるのぉ？」
そんな有希に気付いたのか、目ざとくセレナがからかう。
「ち、ちがうよ」
（違うけど）
そう、違うから驚いている。彼は紛れもなく、有希に国の為に死ねと言い放った人物そのものだ。
（意味がわからない）
一体何故、何のために彼がこの孤児院で世話になっているのか。
（王子っていう身分も隠しているみたいだし）
きっと知っているのは院長だけなんだろう。でなければ子供達がパーシーちゃんなどとは呼べないだろう。

「まぁ、彼、見た目クールなのにお兄ちゃんみたいに面倒見いいわねぇ。ここのパトロンのお子さんなんだってね」
「へぇ、そうなんだ……」
「ユーキちゃん、狙ってみたらどう？　あ、でもユーキちゃんには騎士様がいるもんねぇ」
「っセレナ！」
どうしてそういうこと言うのと睨むと、からからと笑ったセレナに頭を撫でられる。
むうと頬を膨らましていると、ふと視線を感じた。ちらりと見ると、パーシーが有希をじっと見つめている。目が合うと、ふいと視線をそらされる。
「……彼もまんざらでもないのかしら」
セレナをもう一度睨んだ。

チルカの症状が悪化したとヴィーゴから告げられたのは、子供達が寝入った頃だった。
皆と時間をずらしているヴィーゴはどこか疲れたような顔で食事を取っていた。チルカの部屋にはセレナが行っている。
「子供達は？」
「大丈夫。感染しているような子は多分いないと思う。……潜伏期間なのかもしれないけど」
二人人しかいない食堂はがらんとしていて、つい数時間前まで、声を張り上げなければ会話が成り立たなかっただなんて想像もつかない。
「……危険だな。彼女が発病してから六日。そろそろ子供達にも影響が出てくるだろう」
大きくため息をついたその姿を、有希は見つめる事しかできない。
「一番感染を気をつけなきゃならんのは院長だ。彼は老齢だから治るにしたって体力がもたん」
ヴィーゴは表情を歪めた。

「子供達はまだいい。子供の頃に感染すれば、それこそ症状は重くなくて済む」
（子供の頃は症状が軽いって、おたふく風邪みたい）
もしかして、似たようなものなのではないかと思ってしまう。
「彼女は、今夜が戦い時だ」
（今夜）
それは、今夜が峠だということなのか。絶句していると、ヴィーゴは有希を見る。
「悪いな、早いとこアドルンドに行ってやりたいんだが、俺は病人を見捨てないんでな」
慌てて首を振る。
「ううん、あたしもチルカには早く良くなってもらいたいし、気にしないで」
本当は一刻も早く行きたいが、チルカを心配しているのもまた、事実だ。
穏やかに笑ったヴィーゴは、有希の頭をわしゃわしゃと撫で回す。
「リフェノーティスの言う通りだな」
「え？」
「一生懸命でいい子って事だ」
そう言うと、ヴィーゴは立ち上がる。
「ヴィーゴさん」
出口に向かって歩いていたヴィーゴが振り返る。
「ヴィーゴさんも疲れてるでしょ？　あんまり無理しないでね」
ヴィーゴは苦笑して、そして礼を告げると出て行ってしまった。

片付けを終え、戸締りのために部屋を回る。
子供達は安らかな顔で寝ている。
部屋の窓を閉めて歩いていると、外に誰かが立っている。
孤児院の前にある大きな木の、すぐそばに。
（パーシー王子）

月明かりに照らされた孤児院の庭に、ぽつんとパーシーが立っている。初夏とはいえ夜はまだ冷えるのに、薄着だ。
（何、してるんだろう）
その後姿がどこか切ない。
一体彼が何を思っているのか、わからない。
何故、有希に死ねとほのめかしたのか、皆に嫌われても孤児院に通いつめたのか。
（教えてくれるかな）
聞きたいと願えば、彼は答えてくれるだろうか。
有希はブランケットを持って、玄関に向かった。

60

パーシーは有希が見つけたときから動いていないのか、全く同じ体勢で立っていた。
月明かりに照らされた森は神秘的で、どこか近寄りがたい雰囲気を醸し出している。
すぐ傍にある大きな木は、風に揺れておおきくざざめいている。
「――何を見ているの？」
ゆっくりと近づいて、そっと声を掛ける。すると驚いたのか、目を瞠って振り返る。そして有希の姿を確認して、ほうっと息を吐いた。
「あ、驚かせちゃってゴメン」
「いや、いい」
お互い黙り込み、沈黙が訪れる。
(何を話せばいいんだろう)
正直、まだ少し怖いという思いもあった。憎悪を込めて睨まれて、何度も何度も耳の痛い皮肉を言われた。
なのに今、こうして隣に立っている。
「……どこに行くのかと思ってたんだ」
「え？」
突然発せられた言葉に驚いて顔をあげる。
「人は死ぬと、どこに行くのか考えてたんだ」
バカみたいだろうと苦笑いされる。
「そんな事考えたとしても、死んだ奴が俺に何が出来るって訳でもないんだけどな」
そう言って有希を見つめて、似てるんだと言う。
「つい最近死んだ――いや、俺が殺した子供に、アンタよく似てるんだ」
苦しそうに顔を歪めている。その子供というのは、有希の事だと

すぐわかった。
（でも、殺したって）
有希はパーシーに殺されたわけではない。なのに何故パーシーはそんな事を言うのだろうか。
どきどきと心臓が脈打つ。もしかしたらバレるのではないかと思うと、掌にじっとりと汗が浮かぶ。
「本当にガキだったんだ。ココのガキ達と一緒で、何も知らなくて、そのくせ生意気で意固地な奴だった」
なら何故。
「じゃぁ、何で殺したの」
思わず口をついて出てしまった。パーシーは跳ねるように顔を有希に向ける。とても怒った表情で有希を見て、そして力なくうなだれた。
「アイツが死ねば、戦争が終わるはずだったんだ」
（まただ）
国の為に死ね。民の為に死ね。彼は有希にそう言った。
けれど、有希が死ぬ事でどう救われるのか、どれだけ考えてもわからなかった。
「どうして、そんな子供が死ぬ事で戦争が終わるの？」
日本がもし戦争を行ったとして、誰かが死ぬ事で戦争は終結するのだろうか。もしそれが天皇や首相だったらいざ知らず、何も関係のない一般人だ。
（死んだのは、伝説の魔女としてだったけど）
魔女が死ぬことで、戦争は本当に終わったのだろうか。
パーシーはしばらく有希を見つめて、ふいと顔をそむける。
「ソイツを殺せば、攻め込まないと言われたんだ」
（誰に）
真っ先に思い浮かんだのは、アドルンドに居る、彼だ。
有希を捕らえ、胸に鏝を押し付けそしてマルキーに引き渡した。
（オルガ……）

胸がぎゅっと痛み、持っていたブランケットを思い切り抱きしめる。
「アンタを見たとき、アイツが生き返って復讐に来たんじゃないかと思った」
「え？」
痛みを凌ぐのに必死で、よく聞き取れなかった。
ふと目を合わせたその顔は思いつめていて、殺気にも似た激しさがある。
（なに？）
「その目が、アイツと一緒なんだ」
突然、パーシーが有希の手を思い切り引いた。引かれた手からブランケットがずるりと落ちる。
「――った」
そのまま有希は大きな木に肩をぶつける。痛いと思ってすぐ、パーシーを責めようと睨みつけると、捕らえるように手が伸びてくる。逃げようと後ずさると、ざらりとした木の幹に背中が当たる。
（まずい）
どうにか逃げようと身をよじろうとすると、顔の両脇に手が置かれる。必然的に、有希はパーシーと向かい合う形になる。
「その目だよ。俺を責めるようなその顔。――なぁ、お前、誰だ？」
「……ユーキよ」
（怖がらせようったって、無駄なんだから）
一生懸命自分を奮い立たせて、睨みつける。
獣のように眼光を光らせた目が、舌なめずりするように有希を見ている。
「俺の殺したガキもそういう名前だったんだよ」
「あらそう、それなら他人の空似なんじゃない？」
「っざけんな！　オマエ俺を殺しに来たんだろ、お前に散々国の為に死ねと言って、そしてお前は死んだ！　なのに何も変わらない！　俺が憎いんだろ！　オマエを殺した俺が憎いんだろう！」

怒声に身がすくむ。苦しそうに叫ぶパーシーを見つめることしかできなかった。
パーシーは有希を憎んでいる筈。何度も死ねと、言った。なのに言葉の端々に悔恨が浮かんでいる。
（どうして？）
「ココに何をしに来た。お前は俺を憎いんだろうが！」
そう雑言を浴びせ掛ける顔が、言葉とかみ合っていない。有希の胸がえぐられそうなほど、悲壮な顔をしている。
「何をしに来た……」
その顔には、もう獣のような獰猛さはどこかに消え、むしろ懇願するようにも見える。
「お前は俺を殺しに来たんだろう。殺すなら、俺を殺せ……チビ共は連れて行くな。もう、誰の死ぬところも見たくない」
その言葉が有希の胸に突き刺さる。驚きに瞠った目から、涙が出そうだった。
（そっか）
わかってしまった。
あの塔での不可解な出来事も、何も知らないという事が幸せだと言った彼の言葉の意味も、国の為に死ねと言った意味も、そして――自分を殺せと言った意味も。
（大切なんだ）
マルキーも、リビドムも、孤児院のみんなも。
（そして、見ず知らずのあたしが死んでしまった事も、悲しんでくれている）
気付いてしまうと、一気に目の前の青年がいとおしく見えてしまう。
嬉しくて嬉しくて、何かからじっと堪えるような顔をしているパーシーに両手を伸ばし、思いっきり抱きしめた。
「ありがとうっ」
「――なっ！」

剥ぐように背中に手が回されるが、知るもんかと腕に力を込める。首が絞まっているだろうと思ったけれど、力を緩める事はしなかった。
「優しいね、パーシーちゃん！」
皆がそう呼ぶ理由もわかってしまったような気がする。うめき声が聞こえるが、かまわず続ける。
「大丈夫、あたし死神じゃないから誰も殺さないよ！　でも嬉しいなぁ」
この喜びをどう伝えていいのかわからず、行き場のない嬉しさは顔のにやけに現れる。
「――っだぁ！　んだよいきなり！」
一瞬力が緩んだ隙に、有希から両手を剥いだパーシーはどこか呆れ顔だ。
「死んでないよ」
「はぁ？」
「だから、その女の子。死んでないよ。生きてる。生きてて、ちゃんとパーシーちゃんのことわかってるから」
すっかり有希に毒気を抜かれてしまったパーシーは、真面目な顔で言う有希を鼻で笑う。
「下手な慰めはいらねぇよ」
「慰めじゃなくて事実。ちゃんと、パーシーちゃんが国の事を考えて言った事だってわかったから、憎くもないし殺したいとも思わない」
貴族は何も知らない。知らないから幸せだ。
そう言ったのは、目の前に居る彼と、どこか懐かしい深緑の美しい青年だった。
（あたしは今、知ることができて良かったよ、リフェ）
ニッコリと笑うと、二の句が告げないのか、眉間に皺を寄せたまま有希を見ている。その顔は、有希の言っている事を一片も信じていない。

「あ、信じてないでしょ。――ならいつか、ちゃんとした姿で会いに行くよ」
（そう、元の姿に戻ったら、ちゃんと言おう。あたしは生きてるよって）
「だから、今度こそ名前を教えて？」
ニコニコと笑う有希に根負けしたのか、パーシーはため息を一つ吐いて答えた。
「マノ・パースウィル・マルキーだ」

61

有希に問われるままに名前を名乗ったパーシーは、その直後に慌てふためいていた。王子であることを隠したかったらしい。
それに更に笑って、王子であることを知っていたと答えた。
「あたし、貴方の事見たことあるもの」
「――そうだったのか」
一安心したように胸を撫で下ろしたかと思うと、キッと有希を睨みつけて「チビ共には言うなよ」と真剣に言ったので、吹き出した。
「……アンタ、ヘンな女だな」
「そお？」
笑いすぎて目じりに涙が浮かぶ。ブランケットを持って呆れている姿を見て、更に笑う。
「真顔で面白いのは、血筋なのかなぁ。兄弟そっくりね」
「――兄貴を知ってんのか？」
頷くと、パーシーがどこか不機嫌そうになる。
（あれ）
「もしかして、パティの事嫌いなの？」
どんどん表情が曇ってゆく。
「パティ……ねぇ」
「あぁ、ごめん。お兄さん」
呼び捨てたのがダメだったのかと思ったが違ったようで、苦渋に満ちた顔になる。
「兄貴は何もしようとしてねぇんだよ。戦争も、親父も、伯母様も止めようとしねぇ。何もしねぇでただぼんやりと見てる」
逃げてんだよ。どこか蔑むように言う。
「あの魔女に何言われたのか知らねぇけど、兄貴は人形みたいになっちまった」
「魔女？」

聞き返すと、逆に驚いたような顔をされる。
「知らねぇの？　有名な話だけど」
知らないと首を振ると、不思議なものを見るような目をされる。
「兄貴な、魔女の呪いに掛かってんだよ」
「呪い！？」
（そういえばヴィヴィに聞いたことある、けど。ホントにそんな事あるんだ……）
「ちなみに、どんな呪いなの？」
「兄貴もよくわかんねぇみてぇだけど、表情がなくなったんだよ」
（表情が、ない？）
あのガラス玉のような瞳を思い出す。
（確かに、あんまり表情豊かだとは思わなかったけど）
まさか、魔女の呪いだとは思わなかった。
「……なぁ、アンタ、貴族なのか？」
「へ？」
突然の問いかけに、素っ頓狂な声が出る。
「俺はともかく、兄貴はここ数年、まともに公式の場に出ていないんだ。なのに面識があるって」
（やばっ）
「あは、あはははは。ちょーっとお世話になっただけ！　そうそう」
（公式の場に出てなさいよ、パティめ！）
何もかもを見透かしてしまうような水色の瞳。とてもとても澄んでいて綺麗な瞳だった。
――彼との最後の思い出は、処刑場だった。
何か言い残すことはと事務的に問いかけたあの瞳。
有希が死ぬことで皆が幸せになるのかと問いかけた時、驚いたように数度瞬いていた。
「……おい？」
「別れ際、酷い事言っちゃったの」
思い出しただけで苦々しい気分になる。そんな罵詈雑言を言われ

た彼は、何を思ったのだろうか。
「もう、会うことないかもしれないなぁ」
謝りたかったのにと呟くと、ぽんと頭を撫でられる。
「なら、会わせてやるよ」
驚いて見上げると、どこか恥ずかしそうに笑っていた。
「俺もアンタに酷い事言ったからな。詫びと礼だ」
「礼？　別にあたし……」
「いいんだ。でないと俺の気がすまない」
結局、何に対しての礼なのかわからなかったけれど、問い詰めるのはどこか野暮な気がして、そのまま黙り込んだ。
「悪かったな。怖がらせて」
「ううん、あたしこそ、突然抱きついたりして、ゴメン」
突然可愛いと叫んで抱きつかれて、迷惑だったろうと上目遣いに伺う。
「べ、別に。あんなのはチビ共にじゃれ付かれたのと一緒だろ」
「それもそうだね」
クスクスと笑うと、ヘンな女とまた言われた。
「なぁ、アンタ、これからどこ行くんだ？」
「え？　あぁ、ここを出たら、こんな風にあちこち回ってアドルンドに行くの」
「アドルンドに？」
ぴくりと眉をひそめられる。
「――あ」
（言わないほうが良かったかな）
有希の居る場所は元はリビドムといえど、今はアドルンドと戦争をしているマルキーなのだ。
気まずく思ったのが伝わったのか、かまわねぇよとパーシーは笑って見せた。
「ただ、今のアドルンドは物騒だ。――町中とかそういう場所じゃない。アンタがもし貴族なんだとしたら、あんまり深入りすんなよ」

「どうして？」
「気付かないのか？　アドルンドの王子が十日熱で死んだ」
「それは、知ってる」
「なら何故、感染したかわかるか？　王宮に居れば少なからずとも家臣達が危険を遠ざける」
（それは、そうかも）
「故意に、感染させられた可能性も強い。病死なら仕方がないって嘆く事ができるもんなぁ」
　考えていなかった事を告げられて瞠目する。
「誰かが、第三王子をよく思っていなかった。ってこと？」
「そういうようにも考えられるだろ？　まぁ、事実はどうなのか知らねぇけど」
（……もしかして、とんでもない事なんじゃないのかなぁ）
　ぺろっと言ってのけるその横顔に感心し、そして同時に畏怖もする。
（わけわかんないよ。なんでこんなにいろんな物事がごちゃごちゃしてるの？　情報もどれが本当に正しいのかわかんない。――あぁ、だからリフェは情報屋なんてやってるのかぁ）
　ひょっとしたら、今こうして有希の隣に立っている少年も、誰かに良く思われなくて身の危険を感じたこともあったのだろうか。
（絶対あるよね）
　凄い人だと感心してしまう。
「……難しいんだね」
「そうだな。俺はここの生活みたいに、チビ共と遊んで、畑耕してその日のメシにありつけて、生活するために働けりゃそれでいいんだけどな」
（そっか、だからこうやって、何度も何度も足を運ぶんだ）
「アンタも気をつけろよ。十日熱はアドルンドが一番蔓延してるんだから」
「うん。でもパーシーちゃんも、いいの？　チルカが発症してるわ

けだし、同じ建物に居るのってダメなんじゃないの？」
「……チルカは、そんなに悪いのか？」
「今夜が、峠だって」
「そうか」
そうして、また静寂が訪れる。
どれほど出ていたのだろうか。少しだけ肌寒い。
空を仰ぐと、青白い月が雲を照らしている。星々が所々に見える。
「お星様になるっていう通説も、あたしの国にはあったよ」
「……星？」
「人が死ぬとどこへ行くのか。っていう話」
「あぁ」
「お星様になって、みんなを見守ってくれるんだって」
言って、夜空をもう一度見上げる。パーシーも倣って空を仰ぐ。
「……たいそうな人数に見守られてるな」
「悪い事できそうにないでしょ？」
「まったくだ」
二人でひっそりと笑いあった瞬間「いくな」という叫び声が聞こえた。
それは孤児院の二階――チルカの寝ている部屋からだ。
いくな。それは、逝くなということなのか。
「――っ」
突然パーシーが駆け出す。
「あっちょっと待って！」
（行っちゃいけない）
パーシーはこの孤児院に来てから、一度もチルカの顔を見ていない。
（感染っちゃうよ！）
有希もパーシーを追いかけて走った。
庭に、はらりとブランケットが舞った。

62

足の長さの違いなのか、運動能力の違いなのか、わかってはいたが有希はパーシーに追いつけなかった。
有希がパーシーに追いついた時、パーシーはドアノブに手をかけていた。
「開けちゃダメ！」
そう叫んだのが先か、パーシーが扉を開いたのが先か。
パーシーは扉を開けて中に飛び込んだ。
「パーシー！」
有希も次いで中に飛び込む。
ベッドに寝ているチルカに馬乗りになり、心臓マッサージしているヴィーゴの姿があった。
「逝くな！　戻って来い！」
入ってきた有希たちに目もくれず、叫んでいる。
チルカは、一番初めに会った時の面影はどこへ行ったのだろうか。疱瘡が全身に回っているのだろう。体が真っ赤に見える。
（――そんな）
まさか、こんなにもひどい状況だったなんて。
「チルカ！」
パーシーがベッドサイドでチルカの手を握っている。その手もぼこぼこと疱瘡で真っ赤になっている。
（だめだよ）
まるで、ドラマのワンシーンのようだ。どこか現実味がなくて、どこかフィクションのようで。
「だめだよ、チルカ……」
ふらふらとベッドサイドに寄る。ヴィーゴに押された反応で跳ねる腕をゆっくりと掴んで、祈るように額を寄せる。
「チルカ、死んだらだめだよ」

（みんなみんな、チルカが治るのを待ってる。チルカが元気になるの待ってるんだから）
皆が叫んでいる。大きな声でチルカの名前を呼んでいる。それがどこか非現実的で、夢の中にいるようだ。
（チルカ、早く戻っておいで。元の元気な姿を見せて）
何度も何度も話し掛ける。ヴィーゴの力で跳ねていた腕はそのうち動かなくなった。
目を開けると、ヴィーゴがチルカの胸元に耳を当てている。
「――よしっ」
噛み締めるように言った顔はどこか嬉しそうで、チルカが戻ってきたことはすぐにわかった。
「チルカ、チルカ」
有希とは反対側の手を握っていたパーシーが、何度も話し掛ける。
すると、チルカの目がうっすらと開く。
「チルカ！」
破顔したパーシーはチルカの頭を撫でた。
「良く頑張ったな、チルカ」
「……シー……」
「喋らなくていい。ゆっくり休むんだ。な？」
慈しむように話掛ける。チルカはそれに頷くと、すうっと寝入った。
「もう大丈夫そうだな」
ほっとしたように息をついたヴィーゴにお疲れ様と声を掛ける。
ヴィーゴは汗だくで、目の下に黒々と隈ができていた。
「それは、チルカは治るって事？」
「まだ予断はならんがな」
途端に嬉しくなる。顔がどんどんと綻んでくる。
「――んで、なんでお前さんはここに居るんだ？」
「え？」
にやけた顔でヴィーゴを見ると、険しい顔をしていた。

「感染する可能性があるから入るなと言ったのは覚えてるよな？」
「……はい」
「そこの兄ちゃんもだ。何故入ってきた」
「ヴィーゴさんが、チルカに逝くなって言ってるのを聞いたら、なんだかいてもたっても居られなくなって」
「それでお前さん等も応援しにきたって訳か」
頷く。
「馬鹿か！　それで感染したらどうなる！」
「まぁまぁいーじゃない！　ヴィーゴ、疲れてるからってユーキちゃんに当たらないで」
ベッドの傍らに立っていたセレナが、ヴィーゴの肩を叩く。
「ユーキちゃんだって、いけないことだってわかってたわよきっと。でも心配で心配で仕方なかったんだから。――それに、チルカちゃんだって、二人が呼んでくれたから戻ってきてくれのかもしれないでしょ？」
労わるようにヴィーゴの両肩を揉みしだきながら、視線を有希に移す。
「二人とも、後で薬飲んでおいてね。少しは予防にもなると思うから」
そう言ってウインクをする。
ヴィーゴは何かを諦めたようにため息を吐いた。
「――わかったなら、早く出て行け。オラ、そこの兄ちゃんもだ」
パーシーはいつまでもチルカの頭を撫でていた。ヴィーゴに言われて、しゃんと立ち上がる。
「彼女を救ってくれて、感謝する」
「お前さんに礼を言われるほどじゃない。俺は俺の仕事をしたまでだ」
「それでも、ありがとう」
そう言って、頭を下げた。
ニカッと笑ったヴィーゴは、パーシーの頭をわしゃわしゃと撫で

る。
「そう思うなら、この後もこの孤児院に良くしてやってくれ」
「――あぁ」
「オラ、出た出た」
しっしと手を払って、ヴィーゴは有希とパーシーを追い払った。
有希たちはすごすごと部屋を出て、冷めやらぬ興奮と、嬉しさを噛み締めた。

扉が閉まるのを見届けて、ヴィーゴはベッドに歩み寄る。
その寝顔はとても安らかで、数分前まで心肺停止していた人間には見えない。
「……奇跡としか言いようがないな」
「あら、二人の愛の雄叫びの力かもしれないわよ？」
茶々を入れるセレナも、どこか真面目だ。
チルカの頬に手を添えて、首もとの体温を測る。すると、赤黒く変色したかさぶたが、ポロポロと取れた。
「っ！？」
驚いて思わず手が引っ込む。
かさぶたの取れた下からは、きれいな肌が見える。
「まさか、ありえない」
頬を数度撫ぜると、やはりかさぶたは簡単に剥がれてゆく。
「もう治ってるだと？」
普通、疱瘡は数日かけてゆっくりとかさぶたに変わり、取れるものだ。
「どうしたの？」
覗き込んでくるセレナに見せるように、もう一度チルカの頬を撫ぜた。セレナも絶句している。
額に手を当てる――やはり、先ほどまでの高熱は無く、じつに健康体だ。
「愛の力ってこんなに威力凄いものなのかしら。あの少年かしら」

「さぁ。愛っていうヤツが病気の全てを治しているなら、大抵の人間は死なんさ」
ベッドから外して、窓の外を見遣る。青白い月が、近隣の雲を藍色に染めている。
「だが、奇跡は人間を生かしてくれるらしいな」
太陽の光でもないのに、目の奥に沁みる。
その青白い月を眺めて、目を細めた。
「セレナ……お前は見たか？」
「嬉しそうなヴィーゴの姿は久しぶりに見たわ」
「そうじゃない。あの子だ」
「あの子？」
（見ていない、か）
白い肌に黒い髪、黒い瞳の、まだ幼い面影の残る少女。
ヴィーゴは視界の端で見てしまった。
祈るようにチルカの手を握っていた有希の身体が、淡く発光していたのを。

63

翌朝、チルカの部屋に行っても良いという許可が出て、子供達は一日中チルカの部屋に入り浸っていた。
食事もチルカと一緒、昼寝もチルカの部屋で。
せめて二三日は安静にしていなければならないということで、ベッドに横になっているチルカに、子供達は嬉しそうに次々に話し掛けていた。
チルカは身体のあちこちからかさぶたが剥がれ、所々健康的な白い肌が見え隠れしていた。
「でも、本当に良かった」
チルカの部屋でセレナと並んで立って、子供達と遊ぶチルカを見ていた。
「瀕死の状態から、奇跡の生還。そして脅威の回復だものねぇ」
「うん、ホント、すごい……みんなの想いのお陰かなぁ」
「そうかもしれないわねぇ」
ほのぼのと見ていると、ふと、ヴィーゴの姿が見えない事に気付いた。
「あれ、ヴィーゴさんは？」
「まだ寝ていると思うけど……」
そう言った途端、扉が開く。そこには、更に無精髭の濃くなったヴィーゴが居る。まだ眠そうな目をしている。
「あら、おはよう」
ヴィーゴはおざなりに返事をして、チルカに歩み寄る。
いくつか質問をして、熱を見て、そして扉脇に立っていた有希たちのところにやってくる。
「この近くにある家に、どうやら感染した人間が居るらしい。ちょっと行ってくる。夜には戻る」
簡潔に言う。セレナも簡潔に返事をする。すると、ヴィーゴは有

希の顔を覗き込んでくる。
「ユーキ、お前さんは何とも無いか？」
「え？」
「少し顔色が悪いな」
そう言うと、目の下に親指をあてて、目の裏側を見られる。
（やっぱり、お医者様なんだなぁ）
本当は、昨晩から少し体調が悪かった。身体が重たくて、貧血気味だった。
「うん、ちょっと」
「そうか。――今日はあまり動き回るなよ」
頷いた有希を見て、ヴィーゴは手の平ほどの大きさの薬入れを渡す。
「……何？　これ」
「ユーキ、体調の悪い所にすまないが、そいつに早く治るようにって祈ってやってくれ。お前さんの祈りはご利益がありそうだからな」
「え？　う、ウン」
（祈るって、こうでいいのかな……）
薬入れを両手で包んで、懺悔をするように胸元で抱きしめる。
（どこの誰だかわからないけど、早く治って元気になりますように）
念を込めて、ヴィーゴに戻す。
「ありがとな」
そう言ってぽんぽんと有希の頭を撫でて、ヴィーゴは出て行ってしまった。
「……ユーキちゃんって、凄いのねぇ」
「え？　何が？」
「ううん、何でもないわ。そういえば、明日の朝には出発するみたいだから、荷造りちゃんとしておくのよ。体調が悪いなら、荷造り終えたら寝ちゃいなさい」
「う、うん」
（荷造り……）

頑張ろう。と、ぎゅっと拳を握った。

セレナとヴィーゴにはあまり無理をするなと言われたけれど、明日出立だと思うと名残惜しくて、荷造りを終えた後、子供達と遊んでしまった。

子供達が孤児院に居ると、チルカの部屋にばかり行ってしまうので、皆で近くの森で昼食を摂ることになった。

さわさわと梢が聞こえる中、子供達はすっかり寝入ってしまった。梢の音など意識できないほど騒がしかった。

子供達はそれぞれに違う遊びをし、有希とパーシーはあちらこちらに呼ばれて引っ張られて、たらいまわしにされた。

馬車馬のように遊んだかと思えば、ぷっつりと充電が切れてしまったかのように、皆眠っている。

孤児院から持ってきた遊び道具があちこちに散らばっている。それをいそいそと拾いながら、子供達の寝顔を盗み見る。

「いやー、遊んだねぇ」

パーシーも有希と同じように、遊具を鞄にしまっている。パーシーは顔を上げると苦笑して「あぁ、久しぶりにこんなに動いた」と言った。

「あれ？　王子様って運動しないものなの？　やっぱり勉強ばっかりしてるんだ」

「違う違う。剣も習うぜ。誰も連れていない状況に陥った時には自分で身を守らなければならないってな。だけどこっちに来てからは、身体動かしてないなぁ」

（やっぱり大変そうだなぁ）

「嫌だった？」

「いや？　むしろ好きだったな」

そう言って微笑む。つられて有希も微笑んでいると、パーシーの笑顔が濁る。

「あぁ。王子だっつぅ事で表向きにへつらって、裏で俺の事クソみ

たいに言ってる貴族を堂々とヤれたからな」
　その言葉に、思わずきょとんとしてしまう。貴族は皆王家を大切に思うものではないのかと思った。
（あぁでも、パーシーは貴族嫌いみたいだし）
　塔で言われた事を思い出す。お互いに相容れないのだろうか。闘技場で貴族をのして笑っているパーシーを想像して、吹いた。
（きっと凄く楽しそうに笑ってるんだろうなぁ）
「楽しいぜ。俺の事舐めくさってたのに、俺にやられた時のあの顔を見るのは」
「あはは、性格悪ぅ」
「当たり前じゃねぇか。アンタみたいなめでたい性格してたら、王宮ん中生きていけねぇって」
「そうかなぁ……」
　別にそんなにおめでたくないけど。ぶつぶつといいながらナプキンを畳む。
「アンタ、本当にヘンな女だよな」
　えぇ、と声を上げてパーシーを見やる。
「王宮の貴族みたいにヘコヘコしないし、リビドムの人間みたいに頭も下げない。ホント、ヘンな女」
「だって、別にパーシーにヘコヘコする必要ないし、頭も下げる義理ないもん」
　言って、ふと今こうして有希の片付けを手伝ってもらっているという事に気付く。
「あ、片付け手伝ってくれてありがとう」
　言って頭を下げると、パーシーはどこか楽しそうに笑った。
「そこかよ」
「だって今のところそこしか思い浮かばないし」
　そう言って、有希も鞄に食器を詰める。
　食器鞄を仕舞い終えたところで、リタが小さくくしゃみをした。見ると、寒そうに身体を丸めている。

「――風が冷たいかな」
持ってきた鞄からブランケットを引っ張り出して、リタにふわりと掛ける。風で飛ばないようにとリタの腕をブランケットに乗せて、寒そうに眉をひそめていたのがなくなるのを見て、立ち上がる。
（――あ）
頭からさぁっと血が引いていく感覚が巡る。ギーギーと耳鳴りが聞こえて視界が白く濁る。
貧血だと思った時にはもう平衡感覚を失っていて、足元がおぼつかない。
全身に力が入らなくなって、崩れ落ちそうになった所で、右腕を引っ張り上げられた。
視界がぐらぐらと揺れる目で見ると、パーシーの顔が揺れている。その景色に酔ってしまいそうで目を閉じる。
「ど、どうしたんだよ」
「ぁー、ごめん、貧血」
うろたえる声に、何も考えられない頭でかろうじてそれだけ吐き出す。引っ張ってくれる腕に甘え、ずるずると膝は崩れてゆく。
（バカだ）
ヴィーゴに顔色が悪いと言われていた。セレナにも休めと言われていたのに。
（ばかだぁ）
膝が地面に着く。頭が地面に向かわないのは、パーシーが腕を持っていてくれているからだ。
「ちょ、オ、オイ、俺はどうすりゃぁいい？」
「んー……」
なんとかやり過ごそうとしても、頭の奥がジーンと痺れている感覚が消えない。頭がぐらぐらと揺れる。
「寝かせて」
ポツリと言った言葉が聞こえたのか、わきの下に何かが触れる。背中にも暖かい何かが触れる。

「引っ張るぞ」
耳元でそう声が聞こえる。こくんと頷くと後ろに引っ張られ、踵ががずるずると地面を引っかいた。
どのくらい引っ張られたのだろうか。背中からぬくもりが消えたかと思うと、ゆっくりと体を横に倒される。ごつごつとひんやりしたものが背中に当たる。
「だ、大丈夫か？」
伺うように聞いてくるパーシーに、ありがとおと返事を返す。
身体が前後に揺らめく感覚は無くなったが、目を閉じていても世界がぐるぐると回っている感覚がする。
「だいじょうぶー。まだ頭ぐるぐるしてるけど、頭ははっきりしてきた」
そう告げると、ほっとした息が聞こえた。
「あ、頭。貧血ん時って頭上げておいた方がいんだろ？」
頭上からそう声が聞こえたかと思うと、そっと頭を持ち上げられる。ゆっくり戻されると、後頭部に柔らかくて暖かいものがある。
「こっちの方が少しは楽だろ」
緑の葉の間から、きらきらと日差しが瞼に落ちてくる。
（膝枕）
「うん、ありがとう」
頭の奥の痺れが少し和らいだような気がする。
頭上から聞こえる声も、どこか柔らかだ。
「ごめんね、頭重いでしょ」
「あ？　あぁ、別に」
そっけない返事が返ってきて、思わずくつくつと笑ってしまう。
（優しいのになぁ）
優しいのに、この不器用さがくすぐったい。
「なに笑ってんだよ」
そう言って有希の頭を叩くてのひらも、優しい。
「優しいね、パーシーちゃん」

昔この孤児院にいた年長組がパーシーをそう呼んだという。今はもう、戦争に向かってしまった人たちだと、パーシーは言っていた。
「……その名前で呼ぶな。もうガキじゃねぇんだから」
「みんな呼んでるじゃない」
「チビ共にも呼ばせない」
(そんなの無理なのに)
その名前は孤児院の皆が呼んでいる。
「無謀ね」
「――もういいから寝とけよっ顔真っ青だぞ」
手の平が瞼に翳されたのがわかる。視界が一気に真っ暗になった。
「……うん」
そう呟いて、一つ深く呼吸をした。
「ありがとね、パーシー」
そう告げると、意識を失うように寝入った。

64

孤児院を出てしばらくすると、ヴィーゴは馬から降りて木陰に座る。

懐から手の平にすっぽり収まる大きさの琥珀色の水晶を出して、手を翳す。瞬く間にそれは淡く光り、水晶の中に人の姿を映す。深緑の豊かな髪の毛がゆらゆらと揺れている。ヴィーゴの呼びかけに気付いたのか、リフェノーティスは振り返り、歩み寄ってくる。

「あらヴィーゴ、どうしたの？」

「どういう事だ？」

「どういうことってどういう事？　ちゃんと端折らないで説明してくれない？」

ヴィーゴは髭面の顎を撫ぜて、ため息を吐いた。

「あの嬢ちゃんは、何者だ？」

水晶の中で微笑んでいた顔が、ふと真顔になる。

「それは……どういうことかしら」

「どういうことも無い。孤児院に十日熱に感染した子供が居た。絶望的だった。そこにあの子がやってきて、子供の手を取って祈っていたら発光した」

リフェノーティスは驚いて目を瞠る。

「その直後だ。子供は完治した。疱瘡も何もかも全てだ。何日もかけて治るものを一瞬で。これはもう奇跡としか言えない。そしてあの子がやったとしか思えない」

「――そう」

驚いて見せたのは一瞬で、何か納得するように頷いている。

「お前、何か知っているんだろう。お前に頼まれて仕方なく連れてやってるんだ、とっとと言え」

「あら、快諾したのはヴィーゴでしょ。――私もユーキにそんな力があるとは知らなかったわ」

（快諾した覚えはない）
知らなかったと告げる水晶の中に居るリフェノーティスは、しかしどこか冷静だ。
「けど……そうね。不思議じゃないと思うわ」
「どういうことだ」
「私もユーキに詳しく聞いていないわ」
すべて私の憶測なんだけど。そう前置きをして、リフェノーティスは言葉を続ける。
「ユーキはカーン様の娘よ。……そしてカーン様はもう居ない」
さらりと言われた事実に、ヴィーゴは大口を開ける。
「はぁ！？　おま、お前、なんでそんな大事な事を言わないんだ！」
有希を十日熱の患者の居る部屋に入れてしまったことを思い出し、激しく後悔した。
「だって、ヴィーゴは嘘をつけないじゃない。あの純粋な目で見つめられてごらんなさい？　何もかも白状しちゃうわよ。――ユーキは自分の身分を知らないようだったし」
茶目っ気たっぷりに言われ、大仰にため息を吐く。
「……どうしてカーン様の娘だとわかったんだ？」
「臣下の勘かしら」
おどけて笑うリフェノーティスを睨みつける。
「っざけんな。それだけで娘ってわかっ」
「『自分が信じるから、相手は自分を信じてくれる』それが父親の教育方針だったんですって」
（……久しぶりに聞いたな）
自分の君主が常々言っていた言葉を久しぶりに聞いて、目を眇める。そんなめでたい言葉を言う人間を君主以外に想像ができない。
（そういうことか）
リフェノーティスの放った言葉に、ヴィーゴも妙に納得してしまった。
「実の娘かどうかはわからなかったけど、ヴィーゴの話を聞いて色

々納得したわ」
「……色々納得？」
「ユーキね、私に会う前に、薔薇の魔女に会ってるのよ」
「はぁ？　薔薇の魔女って、あの魔女か？　だってソイツは」
「そう、先だってマルキーに処刑された。という事になっている。――その魔女はまだ生きていると言った。そもそも、処刑されたのは魔女じゃない。そうユーキは言ってた」
　リフェノーティスはニッコリと笑みを浮かべて告げた。
「どういうことかわかるかしら？　つまり、誰かが薔薇の魔女を偽って。もしくは薔薇の魔女に仕立て上げられて、処刑された。でもその誰かは実は生きている。その誰かはどうして薔薇の魔女と呼ばれたのかしらね」
　言外に、リフェノーティスの言わんとすることが取れる。
「そしてユーキは、薔薇の魔女に会っているの」
　薔薇の魔女。伝説の魔女とも呼ばれる紫の瞳を持つその魔女は、気まぐれに人の前に現れ、造形や見目を変えて遊ぶ事で有名だ。
「……ユーキが紫の瞳だったから、処刑されそうになり薔薇の魔女と接触した。そういう事か？」
「私はそう思ったけど」
（確かに、そうでなければおかしい）
　カーンの娘で、何かしらの力が発現したということは、それは間違いなく、王家の力。
「でもユーキは何も知らないのよ。それに、ユーキはアドルンドに行くって言ったし。私がカーン様の言う事断れないの知ってるでしょ？」
「そりゃ娘でも有効なのか？」
「当然よ」
「そりゃご苦労なこった」
「とにかく、ユーキの自由にさせてあげて。それから、何かあったら手伝ってあげて。あと、ユーキは自分の身分を知らないから、仰

々しくしないであげて」
（激甘だな）
その世話焼きぶりに懐かしさを覚える。思わず頬が緩んでしまう。
「あぁ、出来る限りは手伝ってやるよ」
「頼んだわよ。私は私で準備をすすめるから」
「準備？　何の準備だ？」
リフェノーティスが氷の微笑を称える。それが何も聞くなという合図だという事を知っている。
「後々のお楽しみ。ヴィーゴはとにかくリビドムを回って十日熱の人たちを治して頂戴」
「わぁったよ」
リフェノーティスの奥から、リフェノーティスの名前を呼ぶ声が小さく聞こえる。
「今行くわ。――ヴィーゴ、それからあなたに言う事があったわ」
「何だ？」
「ガリアン様がケーレの牢から脱走しているわ。今も見つからないままよ」
その言葉に、ヴィーゴの目が丸くなる。
「それ、どういう事だ」
「詳しくは私も知らない。だから気をつけて」
もう一度、リフェノーティスを呼ぶエストの声が聞こえる。
「じゃぁ、そういう事で。ユーキの事くれぐれもよろしくね」
リフェノーティスがそう告げると、水晶の光が消える。
（めまいがしそうだ）
目頭を指先でつまんで、息を吐く。
「リフェノーティスめ、まったくとんでもないモンを預けてくれたな」
内心毒づいて、よろよろと馬に跨った。
「カーン様の娘だって？　あの能天気娘が？」
言われてみれば、その能天気さはとても父親と似ている。

ヴィーゴは再び大きくため息を吐いた。
「まぁ、なるようにしかならんか」
そう言って、馬の腹を蹴った。

それは突然の信号だった。
近くに居る誰かに、誰でもいいからという発信だった。
真夜中に水晶は光り、文字だけが飛んできた。
『十日熱に掛かった娘が居る。助けて欲しい』
とてもシンプルな文章だった。
返事を返すと、とても近場だということを知った。
孤児院はリビドムの集落からとても離れた所にあるというのに、すぐ近くからだった。
どこかの集落ならば、医者の居る所は把握しているだろうに、何か訳でもあるのではないかと思った。
そして告げられた場所に着いて、考えは的中したのだった。

家というよりもあばら家に近かった。
多分戦争の時に焼けた村にでも滞在しているのだろう。その集落は死んだようにひっそりとしている。
蹴爪の音が聞こえたのだろう、数人の男が不安そうな顔をして立っていた。
「お医者様でいらっしゃいますか？」
「あぁ。患者はどこに」
馬から降りると、一人の男に手綱を預ける。
こちらへ。と別の男が手を挙げる。
村の中を歩くと、ちらちらと視線を投げかけられる。その姿を見ると、どれも全て男で、眉をひそめる。
（……どういうことだ）
歴史の中で消え去った村に滞在し、そこには男しか居ない。
まるで亡霊の村のようだ。

男は村の一番奥――長の家の前で止まる。
「こちらです」
「中には患者だけか？」
他に感染した可能性のある人間は居るだろうかと探ると、男は首を振る。
「いえ、契約騎士が数名おります」
契約騎士。それならば感染の恐れはないと安堵する。
「案内感謝する。後は大丈夫だ」
「――ティータ様を、どうかよろしくお願いします」
そう言って男は頭を下げて、村に戻った。
（ティータ様……貴族か？）
ならば何故こんなところに。そう思いつつ扉に手を掛ける。
扉を開けて、視界に飛び込んできた人物に、ヴィーゴは呼吸が一瞬止まった。
「！？」
「貴方が、医者様かね？」
目の前に、壮年の男性と、褐色の肌の青年。そして、先ほどリフェノーティスと話題に出た人物がそこに立っていた。
ヴィーゴの記憶にある人物とは大分異なっている。やせ細って、大分老けてしまっているが、あの鋭い眼光は鮮明なほどに変わらない。
（……ガリアン様）
思わず、鞄を取り落としそうになった。

65

ガリアン・マノタント。その名前は、軍人で知らない人間は居ないと言うほどに有名だ。
前リビドム王ロイコ・カーン・リビドムの騎士であり、かの戦争では、ガリアンが居たからこそマルキーはリビドムにてこずったと言われている。
そして、彼はヴィーゴ等の師だった。
ガリアンがケーレから逃げたと言われ、酷く驚いた。逃げたという事は、まだ諦めていないという意思の現れなのだろう。
まだ、カーン王を。リビドムを諦めていないという。
（そういうことか、リフェノーティス）
リフェノーティスは自分で準備があると言った。それは、ガリアンを支援するためのということで間違いは無いだろう。
ヴィーゴは落としそうになった取ってを握り、ベッドに歩み寄る。
「患者は、その子ですか？」
かつて師として敬った人間が居る手前、おのずと口調が丁寧になる。
ベッドにはまだ幼い。十六程の少女が眠っている。その寝顔は苦悶の表情を浮かべている。
（ユーキと同じくらいか）
ベッドサイドに行き、ざっと診察する。身体のあちこちに疱瘡が出ている。熱も高く、まともに食事も取れていないのだろう、酷く衰弱している。
「な、なぁセンセ、ティータは治るか？」
少女の足元のベッドサイドでうな垂れていたナゼットが、ヴィーゴの裾を引っ張った。その手には、ティータと同じ指輪が嵌っている。
（……亭主か？　またえらい衰弱してるな）

「あぁ、大丈夫だ。――この子、意識はありますか？」
問い掛けると、ダンテが口を開いた。
「今朝方まではありました」
「それから寝つづけているんですね。わかりました――薬を飲ませますので、白湯をいただけますか？」
「お、おう。今持ってくる！」
ナゼットがバタバタと部屋を出て行く。しんとした部屋に、重苦しい少女の息遣いだけが広がる。
「……この子は、彼の夫人ですか？」
「いえ、二人とも私の子供です」
ダンテがそう言い、ついで柔らかに苦笑する。
「誤解をさせてすみません。まだ妹離れできぬ兄でして」
「いや、こちらこそ失礼」
ずっと椅子に座ったままのガリアンをちらりと見て、もう一度ティータに視線を戻す。
「……必ず治ります。この子は魔女ではなく女神の祝福を受けてるのですから」
（そう、ユーキの祝福がある）
バタバタと音を立てて、白湯を持ってきたナゼットに苦笑した。

白湯に薬を入れ、薬を溶かしてから、ティータを起こす。
「……ん」
「起こして済まないな」
ナゼットの手を借り、ゆっくりと上体を起こしたティータは、ぼんやりとヴィーゴを見る。
「とりあえず、これを飲めるか？」
高熱で意識が朦朧としているのだろう。ヴィーゴの言葉がよく分からないのか、ナゼットを見上げる。
「ティータ、薬だ。飲めるか？」
ナゼットに言われて理解したのか、ヴィーゴに手を伸ばす。その

手をナゼットが添えて、ティータはゆっくりと薬を飲んだ。
（……変化はあるか）
有希がチルカに祈ったときは、その直後に変異が起きた。
しかし、見る限りティータはどこも変わらない。
（直接ではないから駄目か）
薬を飲み干すのを見届けて、もう一度寝かせる。絞ったタオルを額に乗せると、ティータは気持ちよさそうに瞳を閉じた。
その場の人間の視線が、ヴィーゴに刺さる。病人の居る部屋とは思えないほどに殺伐と、そしてピリピリとしている。
「……明日までに病状が回復していれば、確実に治る」
そう告げると、少しだけ空気が柔らかくなる。だが柔和な顔をしたのはナゼットのみで、残りの二人は険しい顔をしている。
その理由に、うっすらとヴィーゴは気付いていた。
「ここに人が居るというのを知られたのが、そんなに不味いですか？」
出来るだけ穏やかな声を出す。二人からギロリと睨まれる。
「病人の居る部屋で、そんな殺気を露にさせないで下さい。少しお話をしたいのですが、どこか場所はありますか？」
「では、隣の部屋を案内しよう」
そうダンテが言うと、先ほどナゼットが出て行った部屋へ促す。
「ナゼット、お前はティータを見ていなさい」
「あ、おう」
異様な雰囲気に気付き、少し驚ているナゼットを一瞥し、ヴィーゴは鞄を持って隣室に入る。次いでガリアンが入ってくる。
そこには、簡素なキッチンとテーブルと椅子がある。座るように促され、言われるままに座る。向かい側には、ダンテとガリアンが座った。
「まず、お久しぶりです。と言わせてください」
膝に手を置き、丁寧に頭を下げる。顔を上げると、二人とも厳しい顔をしたままだった。

「私……俺を思い出せませんか？　ガリアン様」
ガリアンの眉がぴくりと動いたが、顔つきは変わらない。
その懐かしい顔に、思わず笑みがこぼれる。
「相変わらず怖い顔だ。まぁ、この通り髭面なんで仕方ないですかね。俺影薄かったし。ヴィーゴ・コロですよ。リディー・コロの兄です」
とたんに、ガリアンの目の色が変わる。
「あの、突拍子も無い研究ばかりしていたヴィーゴ・コロか？」
思い出してくれたかと破顔する。
「そうです。いつもカーン様とリフェノーティス達で遊んでいた、あのヴィーゴです」
ガリアンの頬も少しだけ緩む。そして隣に座っているダンテに、教え子だと説明する。すると今度は、事の顛末をヴィーゴに説明し始めた。
ティータが高熱を出して倒れ、昨日疱瘡が現れた。十日熱だとわかるのはとても早かった。そして気が動転したナゼットが、見よう見まねで水晶を使ったのだと言った。
その前の、何故ここに来たのか、ここの人間達は何者なのか、一切触れずに。
（つまりは、彼が信号を出さなければ、そのままこの場所で。薬も何も無いこの場所で彼女を寝かせ続けるつもりだったのか）
それならば、彼女の命はなかったろう。少しだけ憤りを感じ、きゅっと拳を握った。
「……彼女を、見殺しにするつもりだったんですか？」
「そんなつもりはない。ただ、十日熱にはどうすることもできない。彼女が自力で打ち勝つのを見届ける以外に、我々に何が出来ると言うんだ？」
そう告げたのは、ダンテだった。苦渋に満ちた顔で、何もできなかった自分を羞じている。
「……失礼しました。確かに貴方の仰る通りです」

「いや、こちらこそ。娘を救って頂いたというのに、申し訳ない」
お互いに頭を下げ、しんとした空気が戻る。
「して、ヴィーゴ。不躾な質問だが、何故このような所に？」
探るような瞳に、おどけてみせる。
「ご覧の通り、十日熱の治療薬をこうやって配り歩いてるんですよ」
十日熱の治療薬。その言葉に二人が驚いた表情を見せる。
「昔、くだらない研究ばかりしていた男は、今は亡き国の意思を継いでいたんです」
リビドムが大切だった。あの国を愛していた。
その気持ちが、この言葉で伝われば良いと思った。
ガリアンとダンテはお互いを見合い、目で会話をしている。ややもすると、ガリアンが口を開いた。
「ヴィーゴ、お前は私がこの場に居る事にそれほど驚いていないように見えるのだが」
「えぇ、貴方がケーレから逃げたのは聞いていました」
「誰に。と、聞いても良いか？」
「リフェノーティスです。覚えていらっしゃいますか？　百合の魔女の息子です」
ガリアンは目を細め、あぁと呟いた。
「アイツはあの後から、この近隣で情報屋をやってるんです。だから聞いていますよ。――アドルンド、マルキー両国の前線で戦っていたリビドム兵を連れ去ったのは、ガリアン様だという事も」
ダンテが驚いてヴィーゴを見る。ガリアンは、穏やかにそうかと呟いた。
「ならば話は早い。ヴィーゴ・コロ。単刀直入に問おう。――私はリビドムの再建をしようと思う。協力してくれるか？」
リビドムの再建。その言葉に、目がくらみそうになる。
（やはり、そうか）
ガリアンが脱走したということはつまり、リビドムを諦めていないという事だ。

そして、リフェノーティスは準備があると告げた。その言葉が指す事を、ヴィーゴは経験から知っている。
「……ガリアン様。俺はね、つるんでた奴等の中じゃ一番存在が薄かったんですよ。――何故だかわかりますか？」
ガリアンの眉がぴくりと動く。
「俺にはね、拒否権なんてないんですよ。今も、昔も。アイツ等のいいようにされている。そして俺も、それを悪くは思っていないんですよ」
ガリアンの隣のダンテは、探るような視線をヴィーゴに送る。
「つまりね、俺が何を言いたいかって言うと、リフェノーティスはもう、あなた達に協力すると俺に言いました」
そう告げると、二人の雰囲気が一気に和らぐ。その空気を感じて、ヴィーゴも微笑む。
「ということは、俺はもう既に、あなた方の味方なんですよ」

66

アリドル大陸は、国同士の戦争は幾度となくあったが、三国ありつづけた。
史実の中で、一つの国がなくなるというのは、初めての事だった。
ヴィーゴは自分に何が出来るだろうかと考えた。
永く続いた国が終焉を迎え、その事実に押し流されるように生きてきた。流されるままに押し出され、それでも国への愛着は消えず、喪った国の研究を続けていた。
「で、俺は何をすれば？」
「我々は、アドルンドを味方につけたい」
マルキー領土であるリビドムが、マルキーと戦争しているアドルンドに支援を頼む。ということは、リビドムはアドルンド側に着くと、そういう事だと告げる。
「それに、確実性はあるんですか？」
「アドルンドの王子が協力してくださる」
（へぇ、王子様がね。いつの間にそんな算段付けたんだか）
ガリアンが逃亡してから、そう日は経っていない。ガリアンは何年も幽閉され続けていた。いつの間にと感心していると、考えている事が伝わったのか、ガリアンが苦笑する。
「私を助けてくれたのがリビドム王女様でな、その騎士がアドルンド王子だったんだ」
驚いてヴィーゴは立ち上がる。あまりの勢いで、椅子が倒れる。
「なんだって！？　王女！？」
王女。その言葉でリフェノーティスから預かった少女の顔が浮かぶ。だがあの少女には、証の指輪などなかった。
（あの子じゃないとしたら、誰だ）
「カーン様の娘は、まだ居るっていうのか？」
ヴィーゴの言葉に反応して、ガリアンとダンテが目を見開く。

「まだ、とはどういう事だ？」
「どういう事もこういう事も、リフェノーティスから今女の子を一人預かっているんですよ。年の頃は十五くらいの。まぁ確証はないんですがね、どうにもカーン様の娘みたいなんですよ」
「十五？　十歳ばかりの少女ではないのか？　紫の瞳の」
「いえ、十五ほどですね。瞳は黒です。――もっとも、リフェノーティスに会う前に薔薇の魔女の元に居たらしいので、本当の姿はわかりませんが」
「……その娘の名は？」
「ユーキです」
　その名前を口にした途端、二人の目の色が変わる。
「……生きておいでだったか……」
「お二方とも、ユーキをご存知で？」
「私等が知っているのは、十歳ばかりの容貌で、紫の瞳をした十八歳の少女だがな。マルキーに処刑されたものとばかり思っていたが、そうか生きてらっしゃったか。容貌が違うということは、やはり薔薇の魔女の仕業だろう」
「はぁ……」
（十八なのに十くらいにしか見えないって、どういうことだ？）
　耄碌してしまったのだろうかとも一瞬考えたが、二人の真剣なまなざしを見て、いうのをやめた。
「して、ユーキ様は？」
「あぁ、この辺りの孤児院に居ます。何でも、アドルンドに大事な人がいるから迎えに行くとかなんとか言ってました。連れてきましょうか？」
「いや、この場所に連れてしまったら、十日熱に掛かられるかもしれない。そうか、アドルンドか……」
　ヴィーゴには話の全容がいまいち見えないままだ。
「あのー、色々あると思うんですが、彼女の好きなようにさせるようにって」

リフェノーティスからそう言われている。そう言おうと二人を見ると、何かを決め込んだのか、目線で黙殺されてしまう。
「きっと、ルカート君を助けに行かれるのでしょう」
ダンテが微笑む。
「ヴィーゴ、君は十日熱の薬を配って歩いていると、そう言ったな」
「あぁ、はい」
この二人の頭の中で、何がどう動いているのかもわからなかったが、もうそれでもいいかと思ってしまう。
「ならば、そのままアドルンドに向かってもらおう。そしてアドルンドにその恩恵をもたらしてくれ。こちらはこちらで仕事を進めておく。あぁそれと、その薬の精製法も教えてくれ」
その言葉の孕む意味に気付く。
「商談に使うのですか？」
「リビドムには今、財産も何もないからな。――強いて言えば、昔から研究されていた十日熱の特効薬くらいか？」
思わずため息がこぼれる。
「あぁはい、そうですね。――俺の努力と苦労を買ってくださってそうおっしゃってくださってるんですよね」
「まぁそう言うな。リビドム再建なれば、お前も労われるだろう」
そんな労いはいらないと思ったが、口に出すのも野暮だろうと黙る。
「そういう事で、ユーキ様を連れてアドルンドに行ってやりなさい。ユーキ様はルカート王子を連れ出すと思うので協力してやってくれ。くれぐれもユーキ様を危険に晒す事のないようにな」
どいつもこいつも甘すぎじゃないだろうか。そう思ったが、それも野暮だろうと思って、押し黙った。
その直後、咆哮とも取れる喚起の声が隣室から聞こえた。
太陽がどんどんと傾いでゆき、昼寝の後に少し遊んだ子供達も帰路につく。

休んで体調の良くなった有希は、子供達と並んで歩く。
孤児院の入り口辺りで、今朝方家を出たヴィーゴに声を掛けられる。
「出ていたのか」
声に振り向くと、乗馬したヴィーゴが有希を見下ろしていた。
「身体はもう良いのか？」
もうすっかりと返事をしようとしたところで、視界にパーシーが入る。
「貧血を起こして倒れた。診てやってくれ」
するとヴィーゴは眉をひそめ、何か小さく呟いた。
「え？」
「いや、なんでもない。寝ていれば治る。そして悪いが、今晩出立する。荷物を片付けたら寝ていろ。――あぁ、くれぐれも枕を使うなよ。頭は低くしておけ」
そう告げると、馬首を翻して厩へと向かった。
「……貧血って、頭を低くするものなのか？」
衝撃を受けたように突っ立っているパーシーは、すまなさそうに頭を垂れた。
「悪い。逆だったみたいだ」
そのしゅんとした姿に、くすりと笑みがこぼれる。
「ううん、大丈夫。休ませて貰ったお陰でもうすっかり元気だよ。子供達ともまだまだ遊べる！」
元気元気と両腕の拳を握ってみせる。
パーシーは苦笑して、有希の頭をくしゃっと撫でる。
「バカ。まだ顔色が悪いぞ、寝とけ。――今晩、発つんだろう」
「……うん」
その言葉に、思わず俯いてしまう。
笑顔が溢れていて、自給自足の生活をしながら皆支えあって生きている。
そんな穏やかな場所に居ると、忘れてしまいそうになる。

（あたしがやるべきこと）
少しずつ見えてきた、この世界の片鱗。今の自分に出来ること。
「あたしには、やらなきゃいけないことがあるから」
そう微笑むと、パーシーは苦笑して有希の頭をわしゃわしゃと撫でた。
「お前みたいなお人好しには似合いだな。リビドムを回ってアドルンドに行くんだろう？」
「うん。……やっぱり、反対？」
「正直、アドルンドに行くのはな」
「それは、アドルンドが敵国だから？」
「だな。アドルンドは今混乱しているから、まだ争いは起きていない。――もし十日熱が沈静化したらどうなるかわからないからな」
言って、ふと自嘲気味に笑う。
「いっそ、このままでも良いんじゃないかって思うさ」
その言葉が、血の足りていない脳髄に響く。
信じられない言葉に、目を剥いてしまう。わなわなと開いた口から、低い声が漏れる。
「それは、皆に死ねっていうこと？」
視線を有希に向けたパーシーが、え、と呟く。
「それは、このまま十日熱の蔓延が広がればいいって、そういうこと」
「ちが……」
「違わない。十日熱が止まらなきゃ良いって今そう言ったよ。戦争では兵が死ぬ。――差別をするわけじゃないけど、十日熱は兵も一般人も殺すよ。無差別に大勢の人が。パーシーは自分の国の人たちが好きじゃないの？　死んだら嫌だって思わないの？」
その目で、その口で、国の為に民の為に死ねと有希に唆したのは目の前の彼だ。
「好きだから、戦争を止めたいって思ったんじゃなかったの？　だから」

そこまで口にして、続きを飲み込む。
（だから、あたしに死ねって言ったんだよね）
未だじくじくと痛む胸に、顔をしかめる。
「悪い。俺がどうかしてた」
パーシーが頭を下げたのにはっとして、慌てて両手を振る。
「ううん、気にしないで」
「お前と居ると、調子が狂う」
胸の痛みをごまかして、取り繕うように笑う。
「あたしこそ、偉そうにゴメン。――でも、戦争も十日熱も、一緒だよ」
「え？」
「止めようと思えば、止められる。少なからずともあたしに戦争を止める事は無理だけど、十日熱を止めようとすることはできる」
できることなら戦争も止めたいと思うけどね。そう言って肩をすくめると、パーシーはきょとんと有希を見ていた。そしてややもするとくつくつと笑い出して、しまいには腹を抱えて笑い始めた。
「ちょ、ちょっと何よ！　人が折角真面目に言ったって言うのに！」
「いや、俺もアンタに諭されて気付くなんてアホだなぁと思ってさ」
「え、え、え？　何が？」
ひとしきり笑い終えたパーシーは、目じりの涙を拭ってきりりと有希を見る。
「俺には十日熱の蔓延は止められないが、戦争を止めようと努力する事はできるな」
一応王子だしな。そう言った顔はどこかすっきりしているようにも見える。
「戦争が始まったからって何も悲観する事はないな。和平を申し入れる事もできる」
「パーシー……」
「俺も今から城に戻るわ。んで、父様に掛け合ってみる」
「っうん！」

「お前も、気張って十日熱を止めろよ？　俺が戦争止めても民が死んだらかなわない」
「な、なによ！　ちゃんとやるよ！」
はは、とパーシーが笑う。その笑顔は屈託がなく、少年のようだ。
「そして、会いに来い」
突然の真顔に身構えたが、真摯な瞳に射抜かれたように動けなくなる。
「……え」
いつの間にか、夕日は暮れて辺りが紺色に染まっていた。
初夏といえど肌寒い風が吹いている。
鳥肌が立ったのは、冷たい風が有希を包んだからなのだろうか。
「……わかった」
ようやっと口に出来たのはそれだけで、顔がぎこちなく歪む。
「城に来たときにすぐわかるように、名前を教えてくれないか？」
パーシーは相変わらず嬉しそうに微笑んでいる。色の白い肌と、群青色の瞳がとても綺麗だと思った。
「え、あ……っと、春日、有希」
「カスガ・ユーキだな。覚えておく。――お前にアリドルの祝福を」
そう言うと、パーシーが一歩踏み出す。腕を取られて引っ張られる。
反対の手がぬっと伸びてきて、身構えて目をぎゅっと瞑る。すると前髪がかきあげられて、額に柔らかいものが当たった。
「！？」
体温の離れる感覚がして目を開けると、微笑んだ綺麗な顔があった。
「院長に挨拶して、俺はすぐ行く。ゆっくり休んで出立しろ。――またな」
そう言って頭をぽんぽんと叩くと、走り去ってしまった。
額に当てられたものに気付いたのは、その後だった。

67

呆然とその場に取り残された有希は、自分のくしゃみで我に帰って、慌てて孤児院に戻った。
あてがわれているセレナとの部屋に辿り着き、ぐるぐると回る思考を落ち着かせようとベッドに横になったら、そのまま眠ってしまった。
深夜にセレナに起こされて、うつらうつらとしている間に有希の荷物ごと準備を整えられ、はっとした頃には孤児院の入り口に居た。
「本当に、ありがとうございました」
深深と頭を下げているのは院長だ。その横でチルカも頭を下げている。
「いや、俺は自分の仕事をしたまでだ。どうしても礼が言いたいっていうんなら、この嬢ちゃんにしてくれ」
「え？　あたし？」
びっくりしていると、チルカが顔を上げた。その姿にはもうどこにも疱瘡の跡は無く、元気そうなすがたに笑みが浮かぶ。
「子供達の面倒も見てくださって、本当にありがとうございます。どうかまた、近くに寄った時にはいらして下さい。歓迎します」
普段そんな口調で喋らないのだろう。少しばかりぎこちないその語調に微笑み、有希も頭を下げる。
「こちらこそ、色々と勉強させてもらいました」
顔を上げると、微笑んでいるチルカが居る。目が合うと二人でへへっと笑った。
「それじゃぁ、行くか。世話になったな」
ヴィーゴがそう言って、歩き出す。有希とセレナの分の荷物を持ったセレナも、ヴィーゴの後を追う。
有希はもう一度二人に頭を下げて、駆け足で追いかける。
（なんだか慌しいな）

のんびりと過ごしていた所為だろうか。これから向かう場所への不安がわきあがる。
右手の中指を撫ぜる。そこに指輪が嵌っていたのは、もう随分昔。それもほんの少しの間だった。
「……待っててね」
きゅっと手を握り締めた。

それからというものの、慌しい生活だった。
先だって訪れた孤児院のように数日滞在することはなく、日にいくつもの集落を訪れた。日が傾いた時分に居た町や村に宿泊し、明朝から出立する。
訪れる先々に居た人々は手厚く有希達を迎えてくれた。
時には朝まで談笑をし、翌日重い瞼をこすりながら移動したこともあった。
そんな慌しい日々が続き、気が付けば日差しが厳しい夏の盛りになっていた。
「――次の所で、リビドムの集落は全て回ったことになる。国境の向こうにあるが、居る人間は殆どリビドムだそうだ。そこを回ったら、アドルンドだ」
乗馬して言うヴィーゴの顔は、どこか疲れたようにやつれている。すっかり日に焼けた顔は褐色になり、無精髭が薄く見える。
「意外と少なかった」
「そうねぇ」
意外と少なかった。その言葉だけで済ませることができるのだろうかと有希は目を瞠った。
一つの集落を訪れると、既に亡くなった人間が約二割、感染している人間が五割。計七割近くの人が感染していた。
（あの人数で、少ない……？）
「集落を行き来する人間が少なかっただろう。――アドルンドに入ればそうはいかなくなる。……ユーキ」

「えっなに？」
ヴィーゴとセレナが、乗馬している有希を見ていた。
「くれぐれも、感染しないように気をつけてくれ」
「う、うん」
そう言うとヴィーゴは手綱を取ってゆっくりと移動する。有希も慌てて手綱を握りなおした。
約半月。馬に二人乗ると、それだけ馬に負荷が掛かるということで、暇さえあれば乗馬の練習をした。笑顔で無理難題を言うセレナにしごかれて、ある程度操れるようになった。大人しい馬限定だったが。
「ユーキちゃん、この辺り段差多いけど大丈夫？」
後方からセレナの声が聞こえる。先頭にヴィーゴ、そして有希を挟んでセレナと並ぶのがいつのまにか定着していた。振り向かないでも聞こえるようにと少しだけ声を張る。
「うん、平気。ヴィーゴさんがゆっくり歩いてくれてるから」
「そう？　ここを抜けたら少し飛ばすから」
「わかった」
「それと……」
言い淀んだ声に引っかかる。何か言いにくい事でもあるのだろうかと耳を澄ませていると、やはり少し張った声が耳に入る。
「ここを抜けたら国境なの。十日熱が嫌で逃げ出したアドルンドや、それを狙う追剥やら軍人やらが出てくるわ。――いい？　私達に言われたら。ううん、言われなくても自分で危険だと思ったら逃げて頂戴。ユーキちゃんは自分のことだけを考えて」
硬い物言いに、思わず振り返ってしまう。そこには困ったように笑うセレナの顔がある。
「やぁね、振り返っちゃ。前見ないと危ないわよ？」
「あ、うん。ごめん」
前を向く。こまめに洗っているはずだが、消えないのであろう。少しくすんでしまっている白衣がたなびいている。

「ユーキちゃんの弓の腕前は評価してないわけじゃないの。あなたはとっても優秀だわ。この中では誰よりも上手」
優しいセレナの声が聞こえる。
「でもね、できる限り貴方を危険な目に遭わせたくないの。……って、もう十日熱が蔓延してるところを連れまわしてるんだけどね」
その悪戯っぽい声に、有希も苦笑する。
「けれど貴方はリフェノーティスから預かっている大事な子なの」
「そんな、別にあたし……」
「リフェノーティスがそう言ったのよ。だから、私達には貴方を護る義務があるの。それはわかって？」
「でも……もし危険なことがあったとして、二人を置いてなんて行けない……」
「それは、自分で自分自身を護れるようになったら言いなさい。自分自身を護れないのに、他人を護る事なんでできないわよ？」
ごもっともだ。有希は何も言えなくなって押し黙る。でも、だって、と、もどかしさに気を抜けば口を開いてしまいそうだ。言いたいのにいえなくて、心臓がむずむずする。
（わかってる。あたしが逃げる事が一番安全だってことを。わかってる。わかってるけど、悔しいよ）
手綱を握る手に力が篭る。
両親と同じ頃の二人と一緒に居ると、一層思い知ることになった。どれだけ自分が子供なのか、どれだけ自分が甘やかされているか。
（仕方ないのかもしれないけどさ）
金銭的な面でも全面的に頼り切ってしまっている。
（なんでこんなにも優しいんだろう）
二人とも、有希の安全を一番に考えてくれている。それが嬉しくもあり、申し訳ないとも思ってしまう。
（でも、あたしはそれに甘えるしかできないんだよね）
だからせめて、これ以上迷惑をかけないようにしよう。
そう決め込んで、唇をきゅっと引き結んだ。

68

でこぼこと歩きにくい場所を抜けると、まっさらな大地の下り坂に出た。
木も草も生えていない事を疑問に思っていると、リビドムからアドルンドに、そしてアドルンドからリビドムに逃げようとした人たちが、先日ここで襲われたのだと教えてくれた。
「お陰でこの辺りには追剥が出てくれるようになった。急ぐぞ」
「……ヴィーゴ、それは無理よ？」
「え？」
眉をひそめて言うセレナに驚いて、有希は辺りを見回す。黒々と拓けた場所には、何の姿も見えない。
「向こう側で待ってるわ。数は――そうね、二十くらいかしら」
向こう側と示された方向を見遣っても、有希には見えない。
「戻ったとしても、幾人かが待ち受けてる」
カツカツと馬を進め、有希の隣に並ぶ。
「ヴィーゴはユーキちゃんと一緒に戻って。しばらくしたらまた来て」
（セレナ？）
いつもならもっと明るい。そう思って見遣ると、まっすぐ正面を見ている目が心なしか据わっている。
「……大丈夫か？」
そうヴィーゴが問うと、セレナはニッコリと笑う。
「それを私に聞くのはひどいわ。久しぶりでちょっと楽しみなのに」
これみよがしにヴィーゴがため息を吐く。二人の会話の主旨が掴めなくて、顔を交互に見る。
うろたえている有希に気付いたのか、セレナが微笑む。
「ユーキちゃん、ヴィーゴをお願いね。くれぐれも怪我のないように。片付いたら戻ってきてね」

「え、あ、うん」
ということは、後ろに戻って、そこで待っている追剥を倒すという事か。
途端に不安が胸を襲う。また、誰かと争うのか。また、誰かが怪我をするのか。
そう思っただけで、心臓がドキドキとうずく。不安で誰かに縋りたくなる。
（ヴィーゴさん）
見上げるその顔は淡々としていて、あっさりと有希に行くぞと促す。
ひらひらと手を振って有希達を見送るセレナを、後ろ髪引かれる思いで見ていたが、右手をぎゅっと握り締めて、正面を向いた。

すぐだった。
セレナと別れた直後、沢山の怒声と咆哮が聞こえた。
振り返るなとヴィーゴに言われなければ、有希も怪我をしていたであろう。
咆哮が聞こえた刹那、道すがらから数人の男が現れた。それぞれに武器を持って。
「逃げろ！」
そう叫んだヴィーゴの声を聞いて、有希は馬首を翻す。
槍が有希の頭を狙う。はっと頭を下げて、駆け抜けた。
――どのくらい、走っていただろうか。
木の葉がゆらゆらとたゆたって地面に着くほどであろうか、それとももっともっと長い時間だろうか。
おののく馬を宥めつつ、有希は速度を落とした。後方を振り返ると、誰も追ってきてはいなかった。
――しかし、確実に近い場所で争いが起きている。
金属と金属がぶつかる音、そして断末魔のような叫び声。咆えるような怒号が聞こえる。

（逃げろって言われた）
言われたから逃げた。けれど、心臓のもやもやが晴れない。正しいことをしたはずなのに、心のどこかでそれを自分が認めていないから、悪いことをした気持ちになる。
危ないところに置き去りにしてしまった。たとえ自分が何も出来ない無力な子供だとしても、あの場にいたかった。
（邪魔なのはわかってる。でも）
辺りを見回す。きらきらとそそぐ光りに目を細め、有希は大樹を見上げた。
「危険じゃないなら、いいよね」
そう呟いて、馬から降りた。

幼い頃にやっていた遊びで一番好きなものは木登りだった。
落ちるんじゃないかという不安と、全てを見晴らせるその自由さに虜になっていた。
好きだとおのずと上手くなる。それは言いえて妙で、有希は木登りも得意だった。
「久しぶりに登ったなぁ」
そう言いながら、弓を取り出す。
大きな木には、沢山の枝があった。樹齢がどれほど長いのだろうか。あちこちに伸びた枝はそれぞれ太く、有希の身体を易々と受け止めた。
剣も槍も届かない。そんな高い位置に登り、辺りを見回し、ヴィーゴ達の居場所を見つけた。
ヴィーゴはくすんだ白衣を翻しながら、ひらひらと動き回っている。今まで見たこと無いほどに機敏に。
「――よし」
背中に背負った矢筒から一本取り出して目を閉じる。
何もさえぎるものが無いから風が走り抜ける。前髪が翻る。
背筋を伸ばし、まっすぐ腕を引く。ゆっくりと呼吸をし、瞼を上

げる。
ヴィーゴを取り巻いている内の一人に狙いを定める。腕を振り上げ、ヴィーゴに掴みかかるがそのたびにひらりひらりとかわされている。
悔しそうに顔を歪め、大きく叫んでまた腕を振り上げる。
（今だ）
そう思った瞬間、頭より先に身体が動く。指先から力が抜け、矢が風を突く。
飛び出した矢は男の肩に刺さり、男は衝撃で横に倒れる。
「つぎっ」
矢筒からもう一本矢を抜いて、今度はその男の腿を狙って放つ。それも刺さり、男は悲鳴を上げた。
ヴィーゴが驚いたように空を見上げる。正確には、矢の飛んできた方角を。そしてそこに有希の姿を見つけると、一気に顔をしかめた。そして後ろから飛び掛ってきた男をひらりとかわした。
「ごめんなさい」
絶対に声が届かないと分かっていても、謝ってしまう。
「でも、やっぱり心配だから」
そう言って、もう一本矢を取り出し構えた。

男達はあっという間に数が減り、あとニ、三人となった頃、突然足元から声が聞こえた。
「追剥か？」
有希は飛び上がりそうな程に驚き、慌てて照準を足元に合わせた。
「おっと、なにもアンタを襲おうだなんて思ってない。むしろ協力しようと思って来たんだ」
見ると、長い黒髪を一つにまとめた男が、さわやかに笑っている。その後ろには、幾人かの男達が居る。皆屈強そうで、あちこちに傷が見えた。
「アンタが狙ってるのは、追剥か？」

信じて良いものなのかどうか、男のその言葉の意味を探ろうとする。
しかし、有希のそんな思考を見透かしてか、男は肩をすくめた。
「俺達は、ココに来るっていう医者様を迎えに来たんだ。アンタもその内の人間で相違ないか？」
（医者様。っていうことは、アドルンド領のリビドムってこの人たち？）
有希は頷く。
「そうか。あちらだな？　――行け」
長髪の男が言うと、その後ろに居た男達が声を張り上げて走り出す。
有希はその様子をぽかんと見つめていると、男達はあっという間にヴィーゴの元に辿り着いた。
「アンタもそんなところに居ないで降りてきなよ」
「え？　あ、ハイ」
やわらかいが何処か指示するような声に、思わず返事をしてしまった。仕方が無いので矢を仕舞い、弓を肩にかけてゆっくりと木から降りる。
地面に足を着けた直後、ヴィーゴの鋭い声が聞こえた。
「俺は、逃げろと言った筈だが？」
あまりにも怒気を孕んだ声にびくっと身体がすくんだ。おそるおそる振り返ると、後ろに先ほどの男達を従えたヴィーゴが仁王立ちしている。
「に、逃げたよ！　ちゃんと……」
語尾が尻すぼみになる。ぎろりと睨まれて目がそれてしまう。
「でも、やっぱり心配で……木の上からならいいかなぁって……」
言い訳をするようにぽつりぽつりと言うと、大仰な笑い声が聞こえた。その声に驚くと、先ほどの男が笑っていた。
「大物な嬢さんだ！　あんな小物相手にしているヴィーゴさんを心配するだなんて」

「え！？」
（今、ヴィーゴさんって言った）
知り合いなのだろうか。問うようにヴィーゴを見ると、ヴィーゴも驚いた顔をしている。
「お前……トウタか？」
「えぇ。お久しぶりです。――まさか医者様がヴィーゴさんだとは思いませんでした。心配して迎えに来て損をした気分ですよもう」
「お前達だったのか」
「はい」
ニッコリと笑む青年は先ほどとはうってかわって少年のような笑みだ。
「まだあちらにも居るようですけど、もしかしてセレナさんですか？」
「あ」
（セレナさん！）
あの広場に置いてきてしまった。大丈夫なのだろうか。思い出した途端に肝が冷えてゆく。
「ヴィーゴさん、早くセレナさんの所に行かなきゃ！」
片付いたら戻って来い。確かにセレナはそう言った。
有希は矢筒を抱えなおして、慌てて馬に駈け寄った。
「……もしかして、セレナさんの事も心配しているんですか、彼女」
呆れたように発された言葉を、有希が聞く事は無かった。

69

ヴィーゴとセレナと出会って、どのくらい経っただろうか。
最初は怖い人だと思っていたヴィーゴが、実はいつでもセレナの笑顔に負けていると気付いたのはいつだったろうか。
セレナは笑いながら難しい事、大変な事を言うということを知ったのはいつだったろうか。
けれど、有希は二人がどれだけ強いのか、知らなかった。
気付くべきだったんだと思う。
二人がリビドムの軍人であったこと。
リビドムは戦争で負けた国だということ。
そして、二人はその戦争で生き残ったという事を。

大急ぎで広場に戻ると、先ほど立った場所。広場の入り口で立ち尽くしてしまった。
どのくらいの人数が彼女を襲ったのだろうか。あちらこちらで人が倒れている。
皆もぞもぞと動いているから生きているのだろう。けれど、皆一様に酷く出血している。
そして、広場の真中で、躍るように動いているセレナが居た。その身体は血に濡れ、顔は笑っていた。
両手に持った剣を巧みに使い、一人、また一人と確実に斬っていた。
（なに……これ）
目の前で起きていることを。一目瞭然のその状況を、上手く飲み込む事が出来ない。
呆然と立ち尽くしていると、蹴爪の音が聞こえ、馬が嘶く。
「ユーキ、怪我はないか？」
「えっ？　あ、うん。大丈夫」

あまりにも平然としているヴィーゴに驚いてしまう。
ヴィーゴは有希を一瞥すると、セレナを見て目を細める。
「狂犬は健在でしたか」
（狂犬？）
振り返ると、トウタが立っていた。有希の視線に気付くと、あぁ。と声を出す。
「別に非難している訳じゃない。――セレナさんはリビドムに従じてた頃、そう呼ばれてたんだ。皆の憧れの的だった」
「憧れの的？」
「あぁ。だって、楽しそうに人を斬るだろう？」
若干うっとりと語るその姿に、おののいてたじろぐ。
もう一度、セレナを見遣る。最後に残った二人を同時に相手している。その顔は確かに笑っていて、胸の奥が冷たくなる。
（楽しそうに人を斬るのが、どうして憧れなんだろう）
人と争う場面に何度も直面した。人を傷つける場面に何度も直面した。
有希は人を殺すという事が怖くてできなかった。
――殺さなければこちらがやられる。お前に反抗する気がなければ守るに守れない。
震える有希に言ったのは、今はどこか懐かしい、有希の騎士。
――だけど、人を殺すのは絶対に嫌。それくらいならあたしが死ぬ。
眉を引き吊らせて息巻いた有希に、彼はこう言った。
――なら、腕や足を狙え。そうして士気を下げろ。
――でも。
――痛そうだなんて馬鹿な事考えるなよ。お前がやらなければ、俺や、他の奴等まで危険に晒すかもしれない。
その言葉で、有希は人を撃つ事をためらわなくなった。当たれば、やったと内心でガッツポーズをする事もある。
（けど、楽しいなんて思ったことない）
いつでも心の中で小さくごめんなさいと呟いている。

辺りを見回しても、セレナが楽しそうにしている事に疑問を持っているような人は一人も居ない。
「ヴィーゴ！　褒めて！」
セレナの声ではっとする。広場で一人立っているセレナは、両手をぶんぶんと振り回している。
「誰も殺してないわ！　褒めて！」
その台詞に目を瞠る。ヴィーゴはふ、と微笑んで広場へ歩いていってしまった。
「それは健闘したな。だが、出血が酷すぎる」
道々倒れた人たちを検分して、ヴィーゴはセレナにタオルを渡した。
「汚れるだろう」
「あはは。つい、癖で？」
（癖？）
異常な状況についていけず、一人きょとんとしてしまう。
「傷が深いヤツは手当てをする。手伝ってくれ。セレナは血を流して来い」
有希の背後に居た男達が威勢の良い返事をして、駆けていった。
皆を見送った後、自分も手伝わなければと気付いて追いかける。
一番近くに倒れている人の元へ駈け寄る。
「だ、大丈夫？」
「ユーキ！　お前は良い！　下手に触るな」
ぴしゃりと冷たい声が飛んできて、びくりと身がすくむ。
怒られてしまったとしゅんとしていると、繕うようにヴィーゴが言う。
「あー、悪い。お前にはこんなことさせられんから、セレナを手伝ってやってくれ」
すこしばつが悪そうに言うので、傷ついてもいられなかった。
「ううん、大丈夫。ちょっと前に通った川でいい？　――セレナ、行こう」

血にまみれてどこかテンションがおかしくなってしまったのだろうか。へらへらと笑うセレナの、かろうじて汚れていない部分の裾を引っ張る。
セレナは顔をあらかた拭くと、綺麗に手を拭き、有希の手を取った。
「騎乗すると馬にも付いちゃうから、歩いて行こっか」

有希はセレナが水浴びしている間、同性でも見られるのは嫌だろうと思ってセレナに背中を向けていた。
――本当は、セレナをまっすぐ見るのが怖いから。というのもある。
目を閉じるだけで、背筋が凍りつきそうな惨状が目に浮かぶ。
この世界に来てから人の死というものに触れることが凄く多くなった。
(だけど、人が人を、殺すのは、なれないよ)
しかもそれが、共に行動をしている人となれば。
(でも、それはこの世界では普通の事。自分がやらなきゃ、自分自身や友達がやられちゃうんだもん)
自分に言い聞かせるように目を伏せる。耳に入ってくるのは木々のざわめきと、セレナが立てる水音だけ。
先ほどまで惨劇があったなんて思えない。
(たぶん、違う。そんな惨劇は、ここでは物騒なんかじゃないんだ。この静かな場所も、戦場も、おんなじものなんだ。だから、だから、みんなあんなにも平然としていられるんだ)
悶々と考えていると、陽気な声が飛んできた。
「ねぇ、ユーキちゃん。びっくりした？」
「へっ！？」
あまりにも驚いたので、声が裏返る。そんな有希の声に、セレナは声をあげて笑った。
「かなり驚かせちゃったみたいね。ヴィーゴから聞いたわ。私の事心配してくれたんだってね？　自分の事だけを考えなさいって言っ

たのに」
「だって！」
笑うセレナに反論しようと思ったのに、言葉が思いつかない。
なんと言っていいのかわからない。けれど、もどかしい思いが胸に詰まって、苦しいような、恥ずかしいような感情だけが湧きあがる。
「でも、心配なんて久しぶりにされたから、なんだか気持ちいいわ」
「そ、そうなの？」
「えぇ」
もやもやとした感情をもてあまして、口ごもる。
「驚かせちゃって、ごめんね。ユーキちゃん、争いの無い国から来たんでしょ？」
落ち着いた声が、水音と共に聞こえる。
「私、あんまりあぁいうの好きじゃなくてね。それでも稽古しなきゃならなかったから、楽しいって思い込むようにしてたの。――そしたらいつの間にか狂犬なんて呼ばれるようになっちゃって……剣を持ったら頭に血が回らなくなっちゃったのよ」
気持ち悪いわよね。自嘲するような声が届く。
「私の上官がね、血まみれにする戦い方が好きで、私もそう仕込まれて……。もう今は人を殺す必要がないっていうのに、染み付いて取れないのよ。……って、私、なに言ってるのかしらね！」
無理やりに語尾を陽気にさせるその語調に、有希の心が切なくなる。
「もう、あんまり私のいる場所に来ちゃだめよ」
どうして、この物騒な世の中が普通だと思えるのだろうか。どうしてそうではないと考えが回らなかったんだろうか。
消え入りたいほど申し訳なくて、恥ずかしくて、頭に血が上る。
（あたしは、本当に甘ったれだ）
どうしてみんな、血みどろになって平然としていられるの。そんな子供のような戯れ言。

（平然とだなんて、そんな事あるわけないのに。セレナだってこうやって苦しんでるのに、人を傷つけるのが好きじゃないって言ってるのに。どうしてそんな当たり前のことに気づかなかったんだろう）
平気で人を傷つけているだなんて、勝手に勘違いして。
（ごめんなさい）
面と向かってそう謝る事ができない自分が更に恥ずかしくて、涙が出そうになった。
「戦争なんて、なければいいのに」
その独り言は、殆ど八つ当たりだった。
戦争が皆に与えた絶望。それがなければ、今のこの世界はどれほど幸せだったろうか。

70

今まで回ってきた集落は、老人や女性、そして子供が多かった。
けれど、案内されて訪れた場所には、屈強そうな男達ばかりだった。
そして驚いたのは、そこに居た人々の殆どが、ヴィーゴとセレナの事を知っていた。
何故と問い掛ければ、皆ヴィーゴとセレナの部下達だと言った。
「まさか、あの逃げ足トウタがねぇ」
「あれから何年経ったと思ってるんです？　今は皆を導いている立場です。逃げてなんていられませんよ」
トウタは「もうその話題はよしてください、示しがつかなくなるじゃないですか」と苦笑している。
集落の十日熱患者を診て回った。いずれも皆軽症で、もうすぐ治るだろうとヴィーゴは告げた。
有希たちは大きな小屋に通され、食事をしていた。
セレナ達は思い出話に花を咲かせてるようで、とても楽しそうだった。
有希も楽しそうな皆の姿をニコニコと笑いながら見ていたが、心のどこかは後悔でいっぱいだった。
「――でも本当、噂の人たちがヴィーゴさん達だとは思いませんでした。この後は、どちらへ？　内陸の方に行くんですか」
「いや、そっちは回ってきた。これからアドルンドに向かう」
アドルンド。その言葉に反応したのか、辺りの空気がぴりりと張り詰めたものになったような気がした。
「アドルンドに、ですか？」
トウタに至ってはこれみよがしに顔をしかめている。
「このお嬢さんをな、アドルンドに連れて行く約束をしているんだ」
ヴィーゴがそう告げると、一気に皆の視線が有希に集まったので、

おどおどしてしまう。
「……彼女は？」
「リフェノーティスのお姫様だ」
（お姫様って、また冗談を……）
ため息をつくと、トウタの顔がもう一度歪んだ。
「あら。トウタまだリフェノーティスの事嫌いなの？」
「まだ生きていらしたんですね。――尊敬はしていますけど、苦手です」
苦手という部分を強調させて、吐き捨てるようにトウタは言う。
「そんな事はどうでもいいんです。ご存知ないんですか？　今内陸で」
「あぁ、知っている」
トウタの言葉を消すように、ヴィーゴは言った。
「大分前に会った。お前達も行くんだろう？」
トウタは驚いたように目を見開き、そしてどこか嬉しそうに微笑んだ。
「えぇ。ヴィーゴさんも、ご存知ということは賛同してくださってるんですよね？」
「まぁな」
「また二人と一緒に戦える日が来るなんて、思ってもみなかったので嬉しいです」
「？」
（何の、話をしているんだろう）
二人の会話は完全に主語が抜け落ちている。一体、何の話をしているのだろうか。
「俺がアドルンドに行くのも、あの人たちのご意向さ」
肩をすくめるヴィーゴと、更に喜びを露にするトウタ。
「リビドムの再建を夢見てやって来て良かったです」
「え？」
（リビドムの、再建？）

有希の発した声は、有希が思っていたよりも大きかったようで、また視線が有希に集まる。
「どうしたの？　ユーキちゃん」
「リビドムの再建って……どうして？」
この世界に来て日が浅い有希でも、今世界が混乱しているということはわかっている。
そんなときに何故、リビドムの再建を目論むのだろうか。
「再建っていうことは、マルキーから取り戻すんだよね？」
「もちろん。それ以外はないだろう」
「っていうことは、マルキーに戦いをしかけるの？　リビドムの人はとっても少なくなっちゃってるのに？」
何故、どうして。そんな疑問が次々に浮かぶ。
（リビドムは今、マルキーの属国になっている）
「っていうことは、独立戦争？」
トウタは困ったように、少しむっとしたように有希の問いに答える。
「そうなる」
「……なんで？」
（戦争なんてまた起こせば、また戦いが起きるのに）
先ほどの惨状が、あちらこちらで起きる。
旅の途中に幾人も見た。大切な人を喪って悲しみに暮れる人たち。
「どうして？　どうしてまだリビドムを再建させたいの？」
「ユーキ」
「だって！　だってまた戦いになるんだよ？　戦争になるんだよ？」
「ユーキちゃん」
「また悲しむ人たちが沢山出てくる。沢山の人が死んじゃうばっかりで、何も生まないんだよ！　戦争なんて絶対に無いほうがいい！
なのになんでまた戦争を起こそうとするの？」
「ユーキちゃん！」
「日本も……あたしの居た国にもずっと前戦争があった。侵略もし

たし報復も受けた。でもそれは何も生まなかったんだよ！　リビドムはマルキーになった。それでいいじゃん！　マルキーになったからこそ成長したり発展するかもしれないじゃん。どうしてだめなの？　そんな戦争、悲しみしか生まないよ！　意味なんてな」
その続きの言葉は、セレナの平手が飛んできたので紡がれることは無かった。
（――なに？）
叩かれた場所は熱を持ち、じんじんと痺れたような痛みを与えた。
「それ以上は言わないほうがいいわ。ユーキちゃんが後悔する」
ひどく哀しそうな顔をしたセレナが、有希を見ている。
「……なんで？」
「ユーキちゃんの国では、戦争で侵略したりする事がよくあったのかもしれない」
有希は一つ頷いた。
「アリドルははじまった頃から三つの国があった。ずっとよ。史実によると戦争があったり侵略計画もあったみたい。でもね、やっぱり国は三つのままだった」
哀しそうにぽつりぽつりと言うセレナに、有希は頷く事しか出来なかった。
「私達はリビドムに生まれ、リビドムで育った。リビドムだということに誇りを持ってる」
そこまで言ってセレナは黙った。一度唇を噛んで、そして口を開いた。
「十年前、リビドムはなくなったわ。戦争の原因はわからないわ。リビドムの研究が欲しかったのか、リビドムに居る魔女を撲滅したかったのか、わからないわ。ある日突然攻め込んできた」
辺りはしんと静まり返っている。
「リビドムにはね、王が不在だったの。王が不在ってことは、王を殺す事ができない。王がいないのに、リビドムを明渡す事なんてできないでしょう？　皆頑張って対抗したわ。でも、小さなリビドム

に五年は、長かったわ」
リビドム王が行方不明になったと、いつかルカに教えられた。
「リビドムはいつのまにか、マルキーのものになってた……アリドルから、リビドムという国がなくなってしまった」
そこまで言うと、伏せていた瞼を上げて、まっすぐに有希を見詰めた。
「ユーキちゃん、戦争に負けた国の民が、どうなったかわかる？」
「え……」
答えるまもなく、セレナは言った。
「マルキーはリビドムの人間を、犬以下に扱ったわ。商売女にさせたり、奴隷にしたり、時には人体実験の実験体にもさせられたわ」
「え」
その言葉の強烈さに、有希の目が見開かれる。
「ユーキちゃん。本当にこのままでいいのかしら。マルキーは私達から国も生活も、矜持も取り上げて踏み潰したわ。それなのに、そんな私達に未来や希望なんて見えるかしら。成長や発展なんて、あるかしら」
「そんな……ひどい」
「でもそれが現状なのよ」
言葉が、でなかった。
敗戦国がそんな扱いを受けるだなんて、微塵も考えていなかった。考えもつかなかった。
（でも、それが現状）
セレナが有希の頬を撫でて、ぎゅっと抱きしめた。
「ユーキちゃんがそんなこと知らないってわかってる。むしろそんなの教えたくなくて黙ってた。知らなくていいことだもの。でもね、全部本当のことなの」
「っごめんなさい」
（リビドムの人のこと、考えてなかった。リビドムの人は、平和を取り戻すために戦うんだって、考えもつかなかった）

それなのに自分は何と言っただろうか。思い出しただけでかぁっと赤くなって、消え入りたくなる。大変な事を言ってしまったと、縋るようにセレナにしがみつく。
「今の俺達には、リビドムを求める事しかできないんだ。生まれた時からリビドムで、リビドム以外の人間になるなんて考えもつかない」
ぽつりと落とされた言葉に顔をあげると、何か堪えるように、トウタが有希を見ている。
「リビドムにな、姫様が居たんだ。カーン様の王女が」
「……え？」
「今まで隠れて時期を待って下さっていたのだろう。リビドムの為に、俺達の為に、決起しようとしてくださっていたんだ。――けれど、お亡くなりになった。マルキーに唆されて」
わなわなと拳が震えている。眉間に皺を寄せて、必死に怒りをやり過ごそうとしている。
「決起なんて考えず、安穏と暮らしていてくだされば、死ぬことなんて無かった！　なのに、リビドムの為に死んでしまった」
悲痛に叫ぶと、一気に力が抜けたように、だらりと微笑んだ。
「姫様が命を掛けて再建させようとした国だ。――だから、再建させたいじゃないか」
その笑顔は、簡単に有希の心を締め付けた。

71

セレナは夜着のまま、薄いケープを掛けて空を見上げていた。
空は満天の星空だった。
手を伸ばせば星に手が届きそうな程。手に入れられないものは何も無いと、そう錯覚させてくれそうな夜空。
本当なら、もう寝ていたほうが良い時間だ。明日の朝も早くから出立するとヴィーゴが言っていた。
セレナも早く寝なければいけないということを自覚している。けれども、寝ていられる心境でもなかった。
きらりと、指に黒い明りが灯る。ヴィーゴがセレナを探しているのだ。驚いて振り返ると、足音と共にヴィーゴが現れた。
「……いいの？　こんな時間まで起きてて」
「俺は昔から夜更かしの常習犯でな」
それはもう何年も昔の話だった。まだ何も知らなくて、ただただ毎日を過ごしていた、そんな眩しい日々。
ヴィーゴのそんな気遣いに、思わず笑みがこぼれた。
「ユーキちゃんは？」
「さっき見たときには寝ていた」
自分が叩いてしまった、小さくてあどけない、何も知らない女の子。何も知らなくて良かったのに、自分が黒い澱をこすりつけてしまった。
驚きに瞠った目は、じわりと涙を浮かべ、小さな体で事実を受け止めた有希は必死にセレナにしがみ付いていた。何度も何度も謝罪の言葉を述べて。
「……悪い事をしたわ。知らなくても良かったのに」
「いずれは知らなきゃならないんだ。――それが、遅いか早いかだったんだ」
「それでも！　……言葉の選び方ってものがあったわ」

いつまでも悔恨が残って、とても眠れそうになんてなかった。
けれどそれをヴィーゴに悟られないようにと、ぱっと表情を明るくする。
「それより、いいの？　トウタに言わなくて」
「あ？　あぁ、確実性がないからな」
リビドムの王女が死んだという話。
セレナは、有希についてあまり知らなかった。元来難しい事は言わないでくれとヴィーゴに伝えてあったからだ。
いろんな情報を手にしてしまうと迷いが生じる。セレナは主人の剣であり盾であり――犬だ。主人の命があればそれで良い。
ヴィーゴは有希をリビドムの姫様だと言った。けれどそれを本人は知らないから、悟られないように知らないつもりで居ろとも。
セレナはともかく、嘘がすぐ目に出てしまうヴィーゴは大丈夫かと思ったが、言及されているわけではないので大丈夫そうだった。
「実際俺も半信半疑だ。嬢ちゃんが紫の目をしてたならすぐ信じたけどな」
「そう？　私はすぐ信じちゃったけどな。――だって、似てるじゃない。笑った顔とか、すぐ色々溜め込んじゃいそうなところとか」
かつての王を思い出そうと目を閉じる。その瞼の向こうにぼんやりと映る影は、具体的な形を成さず、セレナは苦笑した。
空を仰ぐと、綺麗な夜空が視界一杯に広がる。
（やっぱり今夜は眠れそうにないわ）
哀しそうに歪んだ有希の顔が、記憶の中の人物を思い出させる。
「本当に、似てるわ」

息をひっそりと静めていると、背中越しに開かれていた扉が閉まる。
そして数秒後、足音が遠のいていくのが聞こえた。
足音が消えると、有希は小さく息を吐いた。
薄い毛布を被りなおし、小さく丸まる。

（頭ん中ぐちゃぐちゃで、何も考えたくないよ……）
後悔と自己嫌悪でめいいっぱい泣いて、泣いて、瞼が熱を持って泣き疲れた。
それでも頭も心もすっきりしない。
戦争は嫌い。できれば起こして欲しくなんてない。
けれども起きてしまった。十日熱も蔓延している。
（みんな辛いのに）
今でも前線では戦いが続いているとトウタが言っていた。
（どうして戦争なんてできるんだろう）
戦争はいろんな人を傷つけた。リビドムの人も勿論、ティータだって犠牲者だ。
（あの時は実感なかったけど）
ティータは停戦中マルキーに居た。停戦といっても水面下では争いが消えている訳ではなかったらしい。戦禍に何年も居ただなんて、それだけで痛いほどに心臓が締め付けられる。
（もしかしたら、ケーレに居たあの人たちも、戦争の犠牲者なのかもしれない）
考え出したら止まらない。あの人も、この人も、戦争さえなければもっともっと幸せな、平和な人生だったのかもしれないのに。
（――でも、戦いを起こさないとリビドムが絶えちゃう）
戦いの犠牲として、リビドムは多くの代償を支払った。そして今、反旗を翻そうとしている。
（そうするしかないってわかってる。わかってるけど）
――俺には十日熱の蔓延は止められないが、戦争を止めようと努力する事はできるな。
いつかのパーシーの言葉を思い出す。
リビドムが独立するという事は、彼の国。マルキーを攻めるということだ。
（そんなのは駄目）
そう否定するけれども、リビドムがこのまま堪えつづける事もさ

せたくない。リビドムにはもう、煮えたぎった憎悪と王女への敬愛しかないのだ。
（どうすればいいの？）
ぎゅっと全身に力を込めてうずくまる。そうすることで不安から隠れたかった。
（どうすることが一番正しいのか、あたしわかんないよ）
目を思い切りつむって、そしてすべて忘れて寝ることができたらどんなに良いことだろう。
（ねぇ、教えてよ）
またじわりと涙が浮かぶ。問い掛けたい人はこの場所にはいなくて、もう顔も声も懐かしい。
有希の考えが及ばないような仔細なところまで考えて、そして動いていた彼なら、有希のぐちゃぐちゃした気持ちをろ過してくれるだろうか。
（あたし、どうしたらいいの）
やっと自分にできそうな事が見つかったのに、この世界に沢山知り合いもできたのに。
知れば知るほど有希の心はざわめいて嵐のように吹きすさぶ。
ぎゅっと、右手を握り締めた。その真中の指を、抱きしめて。

72

眠る事もできないまま、ずっしりと重たい瞼を落とす事もできず、いつまでもぼんやりとしていた。
考える事を拒否して、いつまでも心は晴れない。
どれだけ悲しくても、苦しくても、身体は正直に生きている事を伝える。
（……トイレ）
もぞもぞと起き上がり、夜も更けた中ひたひたと歩き、ひっそりと扉を開けた。

トイレから出て部屋へ戻ろうとしていた所で、玄関が開かれる音が聞こえて思わず振り返る。
「ユーキちゃん……？」
「セレナ？」
そこには、夜着のセレナが立っていた。薄紫の髪が、暗闇からくっきりと浮いている。
「どうしたの？」
「ん、ちょっと星を見ていたの。今夜はとっても綺麗よ」
にっこりと微笑んだ顔はとてもやさしい。
「ユーキちゃんも寝れないの？」
やさしい笑顔で問われて、こくりと頷く。セレナはそう、とだけ呟くと、有希の元までやってきて、ふわりとケープを被せた。
「なら、星でも見に行く？　少しはすっきりするかもしれないわよ」
有希は無言で頷いた。

繋いだ手から伝わるぬくもりは、とても暖かくて、やっぱり優しかった。
セレナに連れられて、木々の隙間をするすると縫うように歩いた。

歩いている最中は二人とも無言で、聞こえるのは虫の鳴き声と葉のざわめきだけだった。
「ごめんなさいね」
突然発された言葉の意味がわからず、セレナを見上げる。
セレナは正面を向いたまま、言葉を続ける。
「沢山混乱させちゃってるわ」
「それは違うよ！」
ぶんぶんと首を振って立ち止まる。有希が立ち止まったので、セレナも歩みを止めた。
「あたしが勝手に、色々考えているだけで」
「でもそれの原因は私だわ。ユーキちゃんは知らなくて良かったことなのに」
「それも違う。あたしは知れてよかった。リビドムの人たちがとても苦しんでるって事に気付けてよかった」
（ただ、だからってリビドムの人たちがやろうとしていることに賛成ができないだけだよ……）
その言葉を飲み込み、更に首を振る。
（リビドムの人たちだけじゃない。マルキーも、アドルンドも、やってることに賛成できない）
どうして人が傷つく方向へと歩んできてしまったのだろう。それを有希が嘆いてもどうしようもない事はわかっているのに、もどかしくて仕方が無い。
セレナが有希をじっと見下ろしている。何か言わなければと思うが喉に詰まってなにも出てこない。
「……ただ、あたし、なんにもできないなぁって。不甲斐ないだけ」
結局のところそうなのだ。どれだけ考えても、想っても、有希の気持ちなんて知らないで何もかも動いてゆく。有希にはそれらを止める手立てすらないのだから。
「戦争なんて、できることならしてほしくない。そうするしかないってわかってるけど、リビドムの人にもできるなら戦って欲しくな

い。でも、いくらあたしが考えても、どうにもならないの、わかってる」
ぽつりぽつりと、零すように言葉が出てくる。少しずつ、ぐちゃぐちゃしたものが整頓されてゆく気がする。
「あたし、どうしたらいいのかなぁ」
呟いた言葉は独り言だった。
長い間リビドムを旅して、本当に色々思う事があった。いろんな人に出会った。いろんなものに触れた。
だからこそ、何もわからなくなってしまった。
「――戦争って、いろんな人の思惑が絡むものなのよ」
しんとした中、セレナがやさしく告げる。
「国は敗戦国に金を求めたり、貴族は戦争に乗じて敵対してる貴族を殺そうとしたり、武器や兵器を作って儲けようと算段する人間もいる。私達だけで止められるなら、私も止めてた。だけど、私達は結局国や偉い人たちに踊らされることしかできないのよ」
(そんな)
そんなことで戦争を起こすのかと絶句する有希に、更に追い討ちをかける。
「そんなものなのよ、戦争なんて。だから、私達には抗って抗って、戦うしかできないの」
ニッコリと笑うと、ぎゅっと有希を抱きしめた。
「ねぇ、ユーキちゃん。ユーキちゃんがリビドムの事を想ってくれたの、私凄く嬉しかったわ。私の代わりに怒ってくれて、反対してくれて」
「せ、セレナ？」
「だけど、ユーキちゃんにはやる事があるでしょ？」
「やること？」
何だろうと逡巡する。少なくなってきた薬を作る事。それは明日ヴィーゴと一緒に作ると約束した。トウタへの謝罪。それは明日の朝一番にやろうと思ってる。やること、やること。

有希が答えを出すより早く、セレナが告げた。
「ユーキちゃんは、何のためにアドルンドに行くの？」
「！」
「これからまた、危険な事があるかもしれない。そんなときにどうしようもない事考えちゃ駄目よ？　私達のこと心配しても――嬉しいけどダメ。ユーキちゃんは自分と騎士の事だけ考えてて？」
セレナのその優しさが、ささくれた心にやさしすぎて、壊れた涙腺からまた涙が涌き出る。
（ルカ）
心の中で呼びかけた彼は、今の有希を見て何と言うだろうか。
（ルカ、ルカ）
あぁもう可愛いなぁ。頭上からのんきな声が振ってくる。その優しさがまた痛くて、涙が出る。
（あたし、頑張るよ。もうルカに迷惑かけないように、ガキって言われないように）
彼は今、元気だろうか。
最後に彼の居場所を知ったのはどのくらい前だろうか。今もあの時と同じように、冷たい牢に入れられているのだろうか。
（早く会いに行くから――だからどうか）
だからどうか忘れていないで、だからどうか元気でいて、だからどうか無事でいて、だからどうか――。

73

目が覚めると、昨夜もしかしたら腫れたまんまなんじゃなかろうかと心配した通り、上下の瞼がぷっくりと腫れていた。
洗面所で鏡を見ながら、あははと乾いた笑いを零した。
とてもすっきりとした朝だった。
(状況は何も変わってないのに)
それでもとても、気が軽い。
(色々悩むのは、ルカに会ってから)
人はそれを逃避と呼ぶのかもしれないが、考えても埒の明かないことを考えつづけるのも健康に悪い。
ルカの事を思うと、今までずっと焦ることしかできなかった。
早く助けに行かないと、早く会って謝りたい。早く早く早く。
ルカの事だから大丈夫だろう、王子様だから無体な扱いは受けないだろう。そうやって何度も自分を慰めていた。そうして沢山焦って、そうしてそこは腫れ物のようになり、触る事がなくなっていった。
けれど、アドルンドが目の前に来たということで、現金にも早くルカに会いたいという気持ちでうずうずした。ずっと彼なら大丈夫だと自分に言い聞かせてきたが、そろそろそれも限界だ。早く姿を見て安心したい。
「だから、もう泣いてばっかりいられないよ」
(戦争も争いも何もかも嫌だ。だけど嫌だ嫌だと駄々を捏ねるだけじゃ子供と変わんない)
「だから、あたしはあたしにできることをやる」
鏡の前の自分に告げる。きりっと顔をりりしくしてみせるが、腫れた瞼では格好つかなくて笑った。
部屋やベッドを綺麗にし、荷物をまとめて玄関に行くと、準備を

終えていたヴィーゴとセレナ、そして見送りに立っているトウタと数人の男が立っていた。
「ご、ごめんなさい」
「気にしなくていいわよー」
そう言ってニッコリと笑ったセレナは、有希の目を見てぎょっとした。
「ちょっと！　ユーキちゃん」
「あはは。腫れちゃった」
荷物を床に置いて、有希はトウタ達に頭を下げた。
「昨日は酷い事言って、ごめんなさい」
頭を上げると、皆の視線が集まる。有希は困ったように頭を掻いた。
「リビドムの人たちがされた仕打ちを知らなくて……って、言い訳だね。――やっぱり戦いにはなってほしくないけど、でも、それはあたしの勝手なワガママで、しょうがないのもわかってる」
そう言って、その場に居る全員を見回す。
「でも、やっぱりあたしと関わってくれた人たちが傷ついたり悲しんだりするのは見たくない。だから……」
そこまで言って、言葉が止まる。
「だから、みんな気をつけて下さい。怪我とか……しないでくださいね」
そう言って、もう一度頭を下げた。
顔を上げると、なぜか真正面にセレナが両手を広げて立っていて、その豊満な胸に激突した。

挨拶を終えて外へ出ると、気だるそうなヴィーゴが顎を一撫でして声を出す。
「あー、これから行く先なんだが」
「どっちから回るの？　南下？　それとも南下は前線に近いから西側から行く？」

張り切って荷物を背負い、地図を広げた有希に、ヴィーゴは苦笑した。
「いや、王都へ向かう」
早いとこあちこちを回って、できるだけ早く王都につけるように頑張ろうと張り切っていたので、ヴィーゴの言った事に言葉を失う。
「……なんで？」
「お前さんが王都に行きたがってたのは知っている。リビドムを回っている間は悪かったな」
「え、でも」
今までどおりアドルンドを回って十日熱を治療して行くのではないのか。思っても見なかったことを言われてしまった有希は挙動不審になる。
（そりゃ、できることなら一番最初に王都に行きたいけど……）
顔を上げて二人を見遣る。伺うように見ていることに気付いたのか、セレナが小首を傾げる。
（ヴィーゴさんもセレナも、みんなの十日熱を治したいんじゃないのかな）
それなのに自分の我儘で王都に行かせてしまって良いのだろうか。
（それだったら、あたし一人で王都に向かってもいいし――そうだよ。あたしはまっすぐ王都に行って、セレナ達は廻って……）
そうしようと決めて、顔を上げると呆れ顔のヴィーゴに一蹴された。
「自分ひとりだけ王都に向かおうだなんて馬鹿な事考えるなよ。言っただろう。アドルンドは危険だと」
あまりにも図星だったためにびっくりしていると、そんな有希にセレナが驚いていた。
「やだユーキちゃん、そんな事考えてたの？」
「え、いや、だって。これ以上迷惑掛けられないし……」
ごにょごにょと語尾を誤魔化していると、ヴィーゴが有希の頭を二度、軽く叩いた。

「お前さんに事情があって王都に行くように、俺達にも事情っていうものがあるんだ」
言外に優しい仕草で、きょとんと顔を上げる。
「事情？」
「あぁそうだ。何もお前さんへの善意だけで王都に行くんじゃないさ」
「……ホントに？」
「嘘を言っても仕方ないだろう」
疑っていることに呆れているヴィーゴに、ありがたいやら申し訳ない気持ちが湧く。
「ありがとう」
「ここからなら比較的王都は近い。急いで向かうぞ。――セレナ、ユーキが追いつけなかったらお前の所に乗せてやれ」
「はぁい」
そう言うと、二人は颯爽と荷物を馬に繋いでいた。
荷物が大きな麻袋一つしかない有希は、そんな二人を見つめて頬を緩めた。
（本当に、甘やかされているなぁ）
両親と同年代の大人だからだろうか。有希は赤の他人なのにとてもとても甘やかされているような気がする。
それが嬉しいような、くすぐったいような気分だ。
いつでも有希を大切にしてくれて、優しくて、甘やかしてくれて。
（――パパとママみたい）
どのくらい前の出来事だったろう。
優しくて、暖かくて。いつでも有希のことを考えてくれていた二人。
今、元気だろうか。そんな事を思うと少しだけ、胸が痛んだ。

74

初めてフォルに訪れたのは、まだ花の季節――春先の事だったと思う。
あの頃は本当に何も知らなくて、アインを捕まえてはこれはなに、これはどう使うのと聞いていた。
馬車の荷台に揺られて、唯一の持ち物だったアーチェリーケースを抱きしめて見回す町は、とてもピリピリとした空気だったのを覚えている。
それから有希は魔女の格好をさせられて、ルカと二人でフォル城に乗り込んだ。
そしてイシスを捕まえた。
ルカに怒られ、そして少しだけ褒められたあの夜。ふわふわと夢心地で気持ちよかったあの日。
それ以降、フォルは瞬く間に活気付いた。それを見て皆で安堵したものだった。
「……どういうこと？」
リビドムを発ってから十日程経ち、有希達はフォルに辿り着いた。
町の真中に要塞のような城があり、城下には家々が沢山連なっている。
夕暮れの町をぐるりと闊歩し、そして大きな広場で休憩していた。
「ユーキちゃん、来た事あるの？」
フォルの変わりように驚いている有希に気付いたのか、セレナが近づいてくる。
「……うん、前に。だけど」
この変わりようは何だ。何があったんだ。そう誰かに問いたいが、問うような人すらも見当たらない。
葬式のようにしんと静まり返った町には、誰も居るような気配は無い。

「こんなに静かな場所じゃなかった」
（何があったの？）
戸惑いを隠せずに、何度も何度も辺りを見回す。
何処かの戸が開いて誰かが顔を出さないか、道を歩いている人はいないのだろうか。
「フォルは比較的前線に近い。――俺達を警戒しているのかもな」
道中いくつかの家の戸を叩いた。しかし、戸は頑として開かれる事なかった。
それは、中にはちゃんと人が住まっているという事であったが、どこかやりきれない切なさが残った。
「まぁ、宿屋には入れてもらうがな」
もっさりと頬から顎にかけて茂っている無精ひげを撫でて、ヴィーゴは馬に手を伸ばした。

それから、有希たちはいくつかの宿屋を廻ったが、うっすらと予想していた通り、扉が開かれることはなかった。
いくつか民家も廻ってみたが、宿屋が開いてないのに民家が扉を開いてくれるわけもなく、気が付けば傾いていた日はとっぷり暮れていた。
有希たちは困り果て、仕方が無いので野宿をして急ぎ王都へ向かおうという話になり、町を出ようとした。
（あれ？）
くるりと踵を返した際に、なにか足音のようなものが聞こえた。
「ユーキちゃん、どうしたの？」
「うん……今、靴音が聞こえたような気がして」
（誰か、いるの？）
馬の蹴爪を聞き違えたのかもしれない。けれど、一旦浮かび上がった疑問はじわじわと胸の不快感を押し上げる。
「あたし、ちょっと見てくる」
「あ、ちょっとユーキちゃん！」

もう一度馬首を変え、靴音の聞こえた町外れへ走る。
人の駆ける速度と馬では雲泥の差があり、その正体はすぐにわかった。
（――人だ）
道を曲がった先には、年のころ四十辺りの女性が、両手に桶を抱えて走っていた。
「ちょっと待って！」
大声で叫ぶと、女性の肩が見て分かるほど跳ねる。そして一層いそいそと走る。
「ねぇ！　待ってってば！」
どうして逃げるのか、どうして皆外に出ていないのか。聞きたいことが山ほどあるのに焦ってしまって言葉が出てこない。
とにかく、なんとかして足を止めさせなければ。
なんとかして会話をしてもらわなければと、逡巡していると、有希の真横をものすごい勢いで駆ける馬がある。
（――え）
横から風が吹き、髪がふわりと揺れる。目の前でセレナが馬から華麗に飛び降り、女性の前に立ちふさがった。
女性は「ひぃ」と声をあげて、土下座でもするかのようにその場にうずくまった。
「セレナ！」
セレナは有希の声に顔を上げ、困惑したように有希を見る。
「私、何もしてないんだけど……」
二人に追いついた有希も、馬から降りる。
女性は何度も謝罪の言葉を言い、地面に頭を擦り付けるように座り込んでいる。
有希はしゃがんで、女性の肩に手を置く。
（震えてる）
その肩はぶるぶると震え、怯えているということが分かる。有希はできるだけ優しく言った。

「あの。別にあたし達、あなたをどうこうするつもりはないので、頭を上げてください」
ややすると、戸惑いながら女性が顔を上げた。夕闇の中でも血の気が失せているのが分かるほどに真っ青だった。
「誰かに見られたらまずいのよね？　ヴィーゴ！」
名前を呼ばれたヴィーゴは、承知したというばかりに手を挙げ、十字路に向かった。
「あ、あの……」
そこに居たのが十五ほどの少女――有希だったことに安心したのか、女性が小さく息を吐いた。
「色々と聞きたいことがあるんですけど、もしよかったらお話させてもらえませんか？」
やさしく、やさしくと自身に言い聞かせて微笑む。女性は目をうろうろとさせて、しどろもどろに答えた。
「い、あ、え。あの、わたくしの家には、十日熱の子供が居りまして……人様をあげるなんてこと……できかねます」
（十日熱）
やはりこの地にも蔓延している。だから皆、葬式のようにひっそりとしているのだろうか。
有希は満面の笑みを浮かべて微笑んだ。
「なら、その十日熱を治療する代わりに、色々とお伺いしてもいいですか？　あたし達、医者とその助手なんです」
女性ははっと息を呑んだように有希を見つめ、セレナとヴィーゴを見遣り、そして小さく頷いた。

75

常におどおどとしている女性が案内してくれた家は、幾度か戸を叩いた宿屋だった。
ありがたい事に厩まであり、女性は馬を繋ぐと有希たちを呼び、滑るように家に入った。
「……あの、外に出ちゃいけないんですか？」
女性のあまりにも不自然な動きに、ぽろっとこぼれる。
大仰に驚いた女性が目を見開いている。が、ヴィーゴが発した言葉に有希も我にかえる。
「そんなことよりも病人を見せてくれ。ユーキ、薬の準備を頼む。ご婦人、患者の部屋まで案内してくれ」
「あ、うん」
有希は「台所お借りしますね」と女性の背中に掛けて、女性が持っていた水桶を持ってその場を後にした。

すっかり薬の準備が有希の仕事になっている。
白湯をいくつか準備して、それぞれにリフェノーティスと作った薬を入れ、混ぜる。
どろりと青臭く鉄臭いその液体と普通の白湯を持って、セレナに案内してもらって、きっと客を入れるための部屋だろう、病室に入る。
大人数が入るであろうその部屋のベッドには、ほぼずべてのベッドに、人が寝ていた。
「……こんなに、たくさん」
片っ端から診察しているヴィーゴは有希に目もくれず、淡々と指示だけ出す。それに返事をして、まだ年端も行かない子供から、順に薬を与えていった。

その部屋に居たのは総勢五名。女性の夫と、四人の子供達だった。
一通り治療を終え、別室に移ると、ヴィーゴが口を開いた。
「どういうことか、説明してもらおうか」
女性は、一つ頷くと、とうとうと話し出した。
フォルがルカート王子の手によって解放された後、逃げ出していたフォルの人間や女性――コロナと家族もまた、避難先から戻ってきたそうだ。
コロナ一家は捨て置いたままの家に戻り、また宿屋を営み始めた。
そしてそれから一月ほど経って、あちらこちらから十日熱に感染する人間が増えた。
フォル城の騎士達は、夜闇の不吉に乗じて感染の恐れがあるからあまり外に出るべきではないと言い出し、次第にそれがエスカレートしていって、夜に外出する者に十日熱の感染源と言い、処罰するようになったと言う。それから町の人間は、昼間動き回り、夕方からは戸をしめてひっそりと構えるようになったと。
その話を聞いて、有希はわなわなと震えだした。
「なにそれ……何でそんな言いがかり！　なんで夜出歩いちゃいけないの！？」
「ユーキちゃん、アリドルでは夜は魔女の時間だから忌み嫌われてるのよ」
「夜出歩いたら感染するっていう確証もないのに？」
「だが感染しないという確証もないな」
さらりとヴィーゴが言うので、有希はぐうと言葉をのんだ。
「俺も信じちゃいないさ。だがな、それを信じている人間も居るってことだ」
（でも、それってフォルの騎士がしている事だよね）
それをも容認してしまってもいいのだろうか。
この世界での騎士の役割と言うものを有希は理解しきれていないが、もしも警察と同じような立ち位置にいるのであれば、それはア

ドルンドがそういう認識をしているということになるのではないだろうか。
（たとえそうじゃないとしても、やっぱりアドルンドがそう見えるよ）
そう言いたいのに、思うように声が出ない。
アドルンドが夜を魔女の時間と言っている。その考えを否定しても何もならないし、誰も有希の言葉を聞いてくれるはずもない。
もしだれかが耳に入れたとしても、有希の事を鼻で笑い飛ばすのだろう。何も知らない他国の人間が何を言う、と。
うだうだと言って、家族の看病で疲労困憊しているコロナに迷惑も掛けられないと、早々に話を切り上げ、ヴィーゴはコロナに休むように言った。
医者様が居る前で、家人は私しかいないのに休んでいられないというコロナに、ヴィーゴは医者として休むように告げた。
「俺達は隣の一室を借りる。そこから出ないから安心しろ」
コロナは目に涙をいっぱいに浮かべて、頭を垂れた。

それから二日。有希たちはコロナの宿屋の一室から殆ど出ることが無かった。
コロナの宿屋は上等な宿屋らしく、部屋に風呂もトイレも着いていて、出る必要が無かった。
せめて料理を作るのくらいは手伝うと申し出たが、一晩思い切り休んだら元気になったのか、コロナに「とんでもない。医者様方はゆっくりしてらしてくださいまし」と言われてしまった。
コロナも夕方までに外での用事を済ませなければならないのか、常にせわしなく動いている。
部屋を出るのは、隣の病室に行く時くらいだった。
有希は日に二度。薬を飲ませる事以外、部屋で悶々としていることしかできなかった。
（本当は、こんなことしていられないのに）

できることならば、フォルの町全ての人を見て回っていきたい。
ヴィーゴにそれを告げたが、ヴィーゴは首を振った。「国が動いているだろう」と。
ベッドの上で膝を抱えて、身体を前後に揺すらせる。
今までずっとタイトに行動してきた。一足飛びで駆けるような速さだった。
なのに、今は歩くよりもゆっくりと時間が経っている。
忙しさからか、身体がずっと気だるかったが、今こうして座っているよりもずっと良かった。
（何も、考えたくないのにな）
『ユーキちゃんは、何のためにアドルンドに行くの？』
セレナの言葉が、胸によみがえる。
『ユーキちゃんは自分と騎士の事だけ考えてて？』
（やめて）
膝をぎゅっと抱きしめる。
（考えたくない）
不安を閉じ込めた箱の蓋が、開いてしまうから。
（もう想像させないで）
拒絶するように、かぶりを振った。
今まで何も考えている暇も無いくらいに忙しく、ハードで、刺激的な日々だった。
毎日知らない人と出会い、生と死の狭間を行き交う人々に祈り、心にぽっかりと穴が空いてしまった人を一生懸命慰めてきた。
きっとそうすることで、自分自身をも慰めていた。
『大丈夫、絶対に大丈夫だから』
――大丈夫。ルカは絶対に大丈夫だから。
『あなたがそんなに悲しんでいると、その人があなたの事心配しちゃうよ？』
――あたしが悲しんでいると、みんなが気を使っちゃう。
『絶対、良くなるから！』

――絶対、また会えるから。

あの日、ルカは有希に何と言っただろうか。それすらも忘れてしまった。とてもとても傷ついた言葉だったのに、言われて悲しかったことばなのに、はっきりと思い出すことができない。

役立たずな自分に酷く腹が立ったのは覚えている。皆に認められたくて頑張ったのに空回って。恥ずかしくて逃げ出して。思い返すたびに恥ずかしくて、消え入りたくなる。

（ルカ……）

泣いてばかりいられないと自分に言い聞かせたのに、ぐらぐらと揺れた蓋は気まぐれに開いて有希の不安を煽る。

「大丈夫、絶対に会いに行くから」

自分を奮い立たせるように、何度も何度も呟いた。

76

気が付けば辺りは茜色に染まり、窓から差し込む橙色に目を細める。
ヴィーゴもセレナも居ない。耳を澄ますと隣室から小さく靴音が聞こえる。
とろりとした色の空を、何気なしに見ようと窓に寄る。
昼間はちらほらと見えた人通りもなく、閑散とした道が橙に塗られている。
（明日には、ここを出られるかなぁ）
家々の屋根を見渡す。いくつもの家。いくつもの家族。いくつもの人。
いくつもの人々が今、十日熱で苦しんでいる。
その全てを拭い去ってやりたいが、そんな事は無理なんだと何処かで気付いてしまった。
（あの時は、そんな事思っても無かった）
いつかまた会うと約束した青年。
（今なら、気持ちがわかるかも）
孤児院で何も考えずに子供達と遊びたい。パーシーはそう言っていた。
（あたしも、何も考えずにいたいよ）
ふっと顔を伏せる。
伏せた視線の先に居た人物に、有希は目を見開いた。
「――騎士」
甲冑を纏った騎士が二人、何かを話しながら歩いている。
見回りだろうか。コロナに会った時、彼女は酷く怯えていた。――それは、魔女の時間に出歩いたから。
だがその姿に有希は不信感を募らせる。なんとなくだが見回りではないような気がした。

（なんで……どうして？）
もっと近くに寄ろうとガラスに手をやる。目を眇めて歩いている騎士を見て、有希は理由のわからない不信感の意味がわかった。
「どうして、笑ってるの？」
その騎士は何かを話している。話しながら――笑っていた。
途端に有希の中からふつふつと怒りがこみあがる。
（みんな苦しんでるのに、みんな辛いのに）
どうして笑っていられるんだという憤りで、ガラスに押し当てた指先が白んでいる。
（どうして助けてあげないの）
有希一人ではどうすることもできないのに。
（騎士なら、国の力ならなんとかなるんでしょう？）
フォルの人間はリビドムのようにならないはずなのに。
（なのにどうして、笑ってるの？）
怒りは増長し、その笑みにさえ激情が湧く。
（あの子達の笑顔とは違う）
リビドムで出会った沢山の子供達。苦しくて辛い中、子供達は一生懸命明るかった。皆が沈痛な顔をしてしまうと、希望も何もかも潰えてしまうのだと、幼いながらに知っていたのかもしれない。
ガラスがガタガタと音を立てて揺れる。有希自身が怒りで震えているんだと気付く。気付いたが、冷静に戻ることはできなかった。
（笑ってた）
とてもとても、楽しそうに。
（みんなが苦しんでいる町で、苦しんでいる人の隣で、笑ってた）
足が、無意識に動いた。無意識に音を立てないように。
慎重に扉を開けて、息をつめて扉を閉める。
時折セレナの声が聞こえる廊下をゆっくりと歩き、つま先だけでゆっくりと階段を降りる。
そして玄関に出て、また音もなく外に出る。
音を少しでも出してしまったら、有希の中で煮え滾る怒りが、見

えてしまうような気がした。

扉がしっかり閉まったのを確認して、有希は駆け出した。笑いながら歩いていた騎士達の所へ。

先ほど歩いていた通りに出て、騎士が歩いていった方角を見遣る。辺りはすっかり藍色に染まり、遠い場所は闇に消えていてなにも見えない。

歩いていった方向へ走ると、すぐにその姿が見えてきた。

二人の騎士は、ゆっくりと歩いている。辺りを見回すでもなく、二人で視線を交わしながら話し込んでいる。

その姿を見て、途端に悲しみが去来した。怒りはいつまでも持続せず、迷子のような気分だった。

悲しかった。騎士が、この国が。フォルを見捨ててしまったような気がして。

暮れていく空と同じように、有希の心も暮れてゆく。藍色の空は、毎秒事に深みを増して闇に近づいてゆく。

（追いかけてきたはいいけど……）

とぼとぼと歩いていると、沸騰していた頭が少しずつ冷えてきた。

（どうしよう……）

今更ながら、何も言わずに出てきてしまった事に頭を抱えたくなった。

コロナが外に出るのを怯えるほどに恐がっていたし、むやみやたらに外に出ると、セレナとヴィーゴに怒られるような気がしたからだ。

（いや、絶対に怒られるよ。どうしよう）

どうやっていい訳をしよう。そんなことを考えていると、騎士達が立ち止まった。

（やば）

慌てて有希は建物の隙間を探して滑り込む。少しだけ顔を出して、騎士達を凝視する。

二人の騎士はきょろきょろと辺りを見回したあと、すぐ隣の建物に入る。部屋からもれ出た明りはとても煌々としていて、二人はまぶしそうに目を眇めながら入っていった。
「……宿舎かなぁ」
すぐに出てくるかもしれないと思ってしばらくそこで見張っていたが、自分の影が見えなくなるほど暗くなり、あちこちの窓から明りが差し込んでくるほどに暮れてしまった。
宿舎かもしれないと思えばそれで済んだかも知れない。けれど有希は、あの二人が辺りを見回してから入っていったのが気に掛かって仕方が無かった。
（やましいことでもしてるのかな……）
まさか騎士がそんな事するはずないと思ったが、あの笑顔といい、信用がならなかった。
「……窓からちょっと覗くだけ。ちょっと見たら帰ろう」
（それで、ヴィーゴさんにこっぴどく叱られよう）
自分にそう言い訳をして、隙間から出る。
建物に近づくにつれて、妙ににぎやかな声が聞こえた。妙に賑々しい声。それは学校の教室の喧騒によく似ている。
建物の横を中腰で歩き、窓の下からひょっこりと顔だけ覗かせる。
視界をさえぎらせるものは何もなく、その建物の――酒場の中が、手にとるように見えた。
（嘘でしょ？）
嫌な予感が的中してしまった。その中で、騎士達がうごめいていた。
多くの騎士が甲冑の上半身部分を取り、グラスを片手に騒いでいる。
（信じられない）
体がわなわなと震えるのがわかった。やっと少し落ち着きを取り戻した感情が、またぐらぐらと加熱する。
（信じられない信じられない信じられない）

目の前の光景を、事実として受け入れることはできた。けれど、何故そうなっているのかが理解できない。
（アドルンドとマルキーは戦争中で、フォルは国境に近い町だし、前までマルキーに乗っ取られてたから、また襲われるかもしれない）
そのために、騎士が沢山いるんだと。コロナはそう言っていた。
（なのになんで）
皆十日熱で苦しんでいる。救いの手を伸ばしても、その手を取られる人だってごく一握りだ。それなのに。
思わず立ち上がっていた。有希の気配に気付いたのか、赤銅色の髪の青年が有希に気付いたのか窓を見る。
窓越しに、有希と青年の目が合った。
「信じられない」
有希はずんずんと歩き、酒場の扉に手を掛けていた。
――本当は、あの宿屋に戻った方がいいということもわかっている。
押しても引いても開くその扉を思いっきり押して、ずかずかと中に足を踏み入れた。
「信じられない！」
叫ぶように言った。赤銅色の髪の青年をはじめた皆がしんと静まり返り、有希を見ていた。
一人の男が有希に何か言おうと口を開いた。しかしその言葉を紡がせる前に、有希は皆を睨みつけて言った。
「なんでお酒なんて飲んでいられるの！？」
言わずには、いられなかった。

77

コロナによると、騎士達は皆、戦争に備えてフォル城に逗留しているということだった。
十日熱が蔓延し、いざマルキーが襲ってきたとしても、それに耐えうるだけの力は、解放されたばかりのフォルには無かった。
以前のフォルを見ていた有希も、それが正しい選択だと思っていた。
（だけど、これはないよ）
酒場にはいつから飲み始めたのだろう。顔を真っ赤に染めた人が数名居る。
有希は全員をまんべんなく睨みつけて、怒りにぶるぶると震える身体を突っぱねる。
「信じられない」
何度目かのその言葉を吐き出す。先ほどまでの楽しそうだった空気が、外の静寂と同じように静まっている。
「なんで、お酒なんて飲んでいられるのよ……」
有希の言葉がぽつりと落ちる。その言葉が響き渡るほど、静かだ。
「フォルの人たちが苦しんでるのに、辛い思いしてるのに……っ」
ぎろりと睨むと、目をそらす人、俯く人、頭を掻く人、黙ったまま飲みつづける人。さまざまなリアクションだ。
「なんで助けようとしないの？　十日熱対策とか、援助とか、あるんでしょ！？　なんで……っ」
そこまで言うが、続きが言葉にならない。両手で口を塞いで首を振る。騎士の顔を見たくなかった。これ以上何怒りに任せて喋ると、とても酷い事を言ってしまいそうだった。
突然、グラスが割れる音が聞こえた。突然耳に入ったその大きな音に、有希はびくっと身体を飛び上がらせる。足元に破片が散らばっている。

「知ったような事言ってくれるじゃんよ」
顔を上げると、酒なのか激昂しているのか。顔を真っ赤にさせた男が有希を睨みつけていた。どうやらその男がグラスを叩きつけたようで、足元から波状にグラスの残骸が飛んでいた。
「ビクビクびびって家の中に閉じこもってる事しか出来ないヤツらがよ。閉じこもってるだけじゃ飽きて御高説かよ」
（ご高説？）
その言葉に声を尖らせる。
「違う！　そうじゃなくて！」
「何が違うんだよ！」
（そうじゃなくて……）
続きの言葉が思いつかない。
（何なんだろう）
やけにあたりがしんとしている。そこが酒場だということを忘れてしまうくらいに。
（なんか、おかしい）
この騎士たちの醸し出す空気は何だろうかと戸惑ってしまう。いっそ思いっきり開き直ってもらえば、こちらも思う存分いえるのに。
「お前達は何も知らないだろ！　何も、なにもっ」
男が叫ぶ。騎士にはとても似つかわしくない、悲痛な叫び声を。
「その位でやめとけ」
「――ッ」
酷く甘い声が聞こえた。それと共に、顔を染めていた男が口惜しそうに黙る。さらりと長い赤銅色の髪の青年が、穏やかに有希を見つめている。
「そこの彼女も。それ以上言わないでやってくれ」
「……貴方が一番偉い人？」
年の頃は二十台中頃に見えるその青年は、おどけたように肩をすくめる。
「一番偉い？　とんでもない。一番偉い人は今頃お城のベッドの中

で夢の国に旅立ってるさ」
　ひどく軽薄に言ってみせる。その姿に嫌悪感が募る。
「冗談言わないで」
「冗談じゃないさ。――ここの統括者はずーっと眠りっぱなしさ。騎士に見立ててはいるが、フォルには寄せ集めの兵士しかいない」
　何処かで虫が鳴き始めていた。リリリリと、控えめな音が酷く耳に障る。
「どういうことかわかるかい？　フォルに十日熱が蔓延している。いつまたマルキーに攻め込まれるかもわからない。そんな場所に徴兵しかいない」
　青年の視線が射るように有希を見る。見るというよりも、睨むように。
「フォルは見捨てられてるんだよ。フォルだけじゃない。オレ達もだ」
　有希は絶句する。
（だって、だって）
　ヴィーゴは言っていた。国が援助するだろうって。
「長い長い戦争続きで国庫もない。どんどん加熱していく十日熱で人手もない。だが兵士は必要。加えてフォルは先だってルカート様が取り返した場所だ。不安定でまた取り返されないとも限らない。おちおちと手放すわけにもいかないだろう？　だから兵力があると見せようと、民兵を騎士のように扱ってるのさ。しかし、オレ達にも救援は無い」
「救援が無いって」
「言っただろ、フォルは見捨てられてるって」
　この世界は戦争中で、みんなが苦しみや悲しみの中、必死にもがきながら生きている。
　国が少しでもよくなるように、自分達の生活が少しでもよくなるようにと戦っている。
（国の為に戦ってるのに、見捨てるってどういうこと……）

てっきり有希は、騎士達がフォルを虐げているとばかり思っていた。援助を受けている騎士達は、マルキーが攻め込まないのをいいことにのうのうと過ごしていると。楽しく酒を飲んでいると。

（そうだ……）

違和感の理由がわかってしまった。

（ここのみんなも、苦しいんだ）

「なぁ、アンタは想像できるか？　ただの農民や商人が、兵士として扱われる。持った事も無い剣や槍を突然持たされて、ハイ人を殺せって言われるんだ。おまけにソイツらがいつ攻め込んでくるか分からない。そもそも、自分達の居るところは病原地だ。攻め込まれないにしても、自分が病に掛かって死ぬかもしれない。家族や恋人を家に置いてきたヤツ等が、そういう見えないものに毎日怯えているんだ」

青年のさらりと長い、赤銅色の髪が光る。とても深刻な事を言っているのに、表情はずっと軽薄に笑っている。だからこそ、事実なのだと濃密に語る。

「そんな明日にも死ぬかもしれない、狂うかもしれない。そんな恐怖を酒で誤魔化すのを責めるのかい？　しかもそれは毎日じゃない。週代わりで数人ずつ。見回りも怠らないようにしている。それでも、責めるか？」

有希はうな垂れて、ゆるく頭を振った。

（そんな事、言えるはずない）

先ほど見た騎士達の笑顔。それは、先の見えない恐怖をひと時でも忘れられるからという安堵の笑顔だったのだろうか。

怒りに滾っていた有希の頭では、もう思い出すことができない。

「……見回りと言っても、何もできてやしない。魔女の時間に人が出歩くのを処罰すると脅して禁じても感染者は減らないし、何もかもなくなっていくだけだ」

自嘲するような声が聞こえ、有希はもう一度かぶりを振った。

（台無しにしちゃった）

明日、自分が死ぬかもしれない。
その恐怖を、有希は塔で痛いほどかみしめた。
幾度となく現実から逃げようと思った。それなのに、この酒場に居る人たちには駄目だと叱り飛ばした。
（最悪だ、あたし）
自己嫌悪で吐き気がした。勝手に一人で腹を立てて、何も知らないのに偉そうな事ばかり言ってしまった。
「……ごめんなさい」
「かまわないさ、知らない人間が見れば誤解くらいはするだろうし、町の人間が苦しんでいる中、飲んだくれているのも事実だ」
それでも、有希は頭を振る。消えてしまいたいほどに恥ずかしい。どうして怒っていたのだろうと、少し前の自分を憎んでやりたいと思った。
「あたし、この場を台無しにした……」
「気にしなくて良いさ」
明るい声が飛んでくる。このしんみりした場所には場違いなほどにあっけらかんとした明るい声。
「あーでも、どうしてもって言うなら――」
有希がおもむろに顔を上げると、青年は悪戯な目をして笑った。
「未来の美女が、オレ達に酌をして少しだけ付き合ってくれたなら、むっさいヤロー共の気が紛れて、さっきの事も忘れそうなんだけどな」
その言葉に、男がどっと笑った。床にグラスを投げ捨てた男も、笑っていた。
「彼女が心配する程、オレ達はダメじゃないんだ。なんてったって、時折こうやって酒を飲んでるからなぁ」
どっと笑い声が起きた。誰かが青年をはやしたてる。そしてまた笑い声が起きる。
「――というのも冗談で、彼女みたいに、ダラダラしてるオレ達に食ってかかって来る人間が居て安心したよ。まだフォルは終わって

ないって」
青年は手に持っていたグラスを置くと、立ち上がる。
「夜も遅い。未来の美女が魔女の祝福に遭わないように、家まで送ろう」
男の一人が「ラッド様」と呼び止めた。代わりに自分が行くと、男達が次々に言い出す。
「なぁに言ってんだよ。酒を飲んでるお前等には行かせられないって。それに――」
ラッドがちらりと有希を見る。
「美人と歩くのは、色男の特権だろ？」
そう言うや否や、ラッドは有希の腰に手を回して有希を引き寄せた。
「〜〜〜〜っ」
驚いて言葉を失っていると、耳元で酷く甘い声が囁いた。
「キミも。こんな所に男を漁りに来なくていいよ。――オレが三年後、迎えに行くから安心してオウチで待ってな」
「――――なっ！」
途端、どっと酒場が賑わった。

78

「どういう事か、説明してもらおうか」
「……ごめんなさい」
ラッドに見送られ、コロナの宿屋に音を立てないで滑るように入ると、目の前には仁王立ちしたヴィーゴが立っていた。
ヴィーゴは険しい顔のまま、有希の説明を待っている。どうやら言わないと、玄関を通してもらえそうにない。
そして、うまく誤魔化す算段を考えていなかった有希は、先ほど起きた事を、洗いざらい言った。
騎士が笑い合いながら歩いていた事、憤って後をつけたら酒場に入っていった事、さらに憤慨して乗り込んだら、実は騎士ではなく民兵で、士気をなんとか維持させるために、酒で誤魔化していたんだということ。そして、フォルは何も救援措置を取られていないという事。
話をしている間、始終ヴィーゴは眉間にシワを寄せ、話し終えると、はぁと大きく息を吐いた。
「お前さんの言いたい事はわかった。――だが、俺は正直とても怒っている」
灰色の瞳に射竦められて、有希は直立不動で固まる。
「ご、ごめんなさい！」
「お前さんがフォルの人間への慈悲心でもってそういう事をしたということも分かっているつもりだ。だがな、何も言われずに消えられると、こっちがどうなるかくらいの想像はつくだろう」
有希が居なくなった事に気付いた後、どれほど慌てたかという事をとうとうと教えられ、肩身が狭い思いをした。
せめて一言声を掛けろ、お前さんは思っていることをためてい

るとロクなことにならないからきちんと言え、セレナに八つ当たりをされて疲れた。など、時間にすると十分ほど小言を言われた。
「ハァ、これでお前さんが戻ってこなくて、野垂れ死にでもされたらなぁ、俺は処刑モンなんだぞ」
「――え？　どうして？」
愚痴のように零された言葉の意味がわからず、きょとんとしていると、ヴィーゴは有希の頭をぐしゃぐしゃと撫でた。
「あー、まぁ、アレだ。リフェノーティスに処刑されるって事だ」
そう言うと、ヴィーゴは休むと言って、階段を登っていった。

自分の愚行を思い返して、自己嫌悪の気持ちでいっぱいのまま部屋の扉を開ける。
現実逃避だとわかっていたが、誰にも会わずにベッドに潜り込んで、なにも考えずに眠ってしまいたかった。
扉を開けた有希を出迎えたのは、両腕を広げたセレナだった。
「おかえりなさい、ユーキちゃん！　ヴィーゴに怒られてきた！？」
その言葉とともに、有希を捕らえたとばかりに抱きしめる。
「せ、セレナ！？」
「浮かない顔のユーキちゃんも可愛いぞぉ」
「うん……」
「あら。本当に元気ないわね。――誰かに何か言われた？」
有希は小さくかぶりを振る。
「そうじゃないの、ただ、あたしがあんまりにも馬鹿だから」
あんまりにも馬鹿だから、また人を傷つけてしまった。馬鹿なことをしてしまった。どう詫びたら良いのだろうか、そのことばかり考えてしまう。
「……ねぇユーキちゃん、顔色が悪いわ」
やさしい声が降ってくる。有希を心配して労わってくれるやさしい声。
けれど、今その優しさに甘えてしまうのはいけないような気が

した。
「なにか、失敗しちゃった？」
俯いているために顔は見えないが、ひどく甘やかすような声だ。
黙りこんでいると、有希の態度に肯定とみなしたのかセレナが言う。
「若いんだもの。失敗なんて数え切れないくらいにするわ。失敗するのはちっとも悪い事なんかじゃない。後悔するのも大切な事よ」
それでも黙っていると、背中に回された手が有希を撫でる。
「――ねぇユーキちゃん。その中でも、一番大切な事は何だと思う？」
（一番大切な事？）
謝ることだろうか、それとも、相手に許してもらう事だろうか。色々考えても、しっくりとくる答えが出てこない。
おずおずと顔を上げると、セレナがニッコリと笑って「やっと私を見たわね」と言った。
「一番大切なことはね、それからどうするかって事。失敗してしまった前に時間は戻らないんだから、その後どうやって動く事が最善なのかを考えるの」
有希の髪の毛を撫でて、まっすぐにセレナの瞳は有希をとらえる。
「失敗は成功を生む種なの。――まぁ、一度失敗したら二度と同じ間違いをするなっていう戒めでもあるんだけどね」
真面目な顔でそう言った瞬間、セレナは破顔した。
「あぁ！　それにしてもユーキちゃんったら可愛い！　顔色悪くてふらふらしてる所も可愛い！　罪悪感でいっぱいです。っていう顔にそそられる！　そして私は自分で言ってて耳が痛いわ！」
「え、えぇ！？」
言うと、セレナは有希を抱きしめ、そのまま持ち上げた。突然足元が不安定になって、思わずセレナに抱きつく。
「ユーキちゃんは今日はもう寝なさい！　どーせ色々考えちゃって

眠れないだろうから、あとでヴィーゴに薬貰ってくるわね」
　有希に何も考えさせる暇を作らないようにという魂胆なのか、セレナは次々に言葉を投げる。
「いーい？　今日はゆっくり寝なさい。いーっぱい寝て、二度寝もして、身体をすっきりさせて、それから考えなさい。いっぱいいっぱいの時の人間が考える事なんてロクでもないんだから」
　そう言うと、問答無用でベッドに下ろされる。
「いっぱいいっぱいの時の行動なんて、本当にロクでもないんだから」
　諭すように言われる。
　まるで親サルにくっ付いた子サル状態の有希は、顔を上げてセレナを見る。
「……それは、経験論？」
「ま！　そんなひねくれた事言うのはこの口！？　お願いだからリフェノーティスみたいに極悪非道な道は歩まないでちょうだい！」
「え、いやだって今自分で耳が痛いって」
「そんなのユーキちゃんの幻聴よ！　疲れてるのよ！」
　片手で有希の腰を抱き上げて、空いている手で毛布をめくる。そしてそこに有希を押し込むと、満足げに布団を掛けた。
　そして盛り上がった布団をぽんぽんと叩きながら、宥めるようにセレナは微笑む。
「ユーキちゃんは今、人のこと考えていられる状況でもないでしょ？　寝・な・さ・い。――冗談抜きにして、本当に顔色悪いわ」
　ずーっと働き詰めだったものね。そう言って有希の額の髪をのける。
「うん……」
　貧血だろうか、それとも睡眠不足からだろうか。手足がすうっと冷えて、体が睡眠を求めているのが分かる。
　セレナが苦笑して、有希の目元に手の平を翳す。
「ほーら、目を閉じて」

言われるままに甘え、そして目を閉じる。
「おやすみなさい、ユーキちゃん」
「おやすみ、セレナ」
そして溶けるように、有希の意識は落ちていった。

79

外から明るい日差しが差し込んでも、有希はとろとろと甘い眠気から逃げることが出来ず、時折目が覚めてはまた眠りにからめとられていた。

二度寝、三度寝、四度寝をして、ようやくすっきりと目覚めた頃には、眩しい日差しが差し込んでいた。

（……久しぶりに思いっきり寝たかも）

それは、目覚ましを掛けなくても良い朝にとてもよく似ていた。

部屋を見回すと、セレナ達は隣の部屋で看病しているのだろうか、姿が無い。

隣の部屋から漏れ聞こえる明るい声に、思わず有希の顔も緩む。

（元気になったみたい。良かったなぁ）

この家に厄介になってから何日が経っただろう。コロナの家族は、もうすっかり良くなっている。

（早く、王都に行かなきゃ）

この家の人たちが良くなったのだから、行かなければ。

そう思うのだけれど、胸につかえたもやもやのようなものは晴れない。

（フォルを見捨てることになる）

アドルンドに見放され、自分の力だけで踏ん張っているフォルを尻目にして行かなければいけない。

――オレ達に食ってかかって来る人間が居て安心したよ。まだフォルは終わってないって。

昨晩有希にそう言った、赤銅色の髪の青年。

（だけど、あたしには何もできないよ）

フォルのあちこちで苦しんでいる人々に、有希は一体何をしてやれるのだろうか。

（……あちこち？）

ふと違和感を覚え、その原因はなんだろうと首をひねった所で、扉がひっそりと開かれる。有希を慮ってか、静かにセレナが入ってきた。
「セレナ」
「あら、起きてたの？」
有希が起きていると知った途端、セレナはそっと扉を開けるのをやめ、いつもどおり振舞う。その手にはトレイがある。
「よく寝られたみたいね。顔色がいいわ」
そう言って、すたすたと有希のベッドへやって来る。サイドボードにトレイを置くと、水差しからコップに水を注いだ。
「そろそろ起きるかと思って食事持ってきたんだけど。ナイスタイミングだったみたいね」
「そうみたい。ありがとう、セレナ」
ベッドサイドに座り、膝の上にトレイを置く。
「いただきます」
両手を合わせて言って、スプーンを手にとる。
セレナはそんな有希の仕草を、向かいのベッドサイドに座りながら見ている。
「みんな、もう良いの？」
食べながら尋ねると、セレナはえぇと笑う。
「もうすっかり！　ヴィーゴも私も必要ないみたい。ヴィーゴが、早ければ今日明日には王都にって言ってたわ」
「そっか……」
「あら。ユーキちゃん浮かない顔ねぇ」
美味しくない？　そう問うセレナに首を振り、胸につかえている違和感を吐き出すように呟いた。
「ねぇセレナ。どうして、患者さんをみんな一つの部屋に入れてるんだろう」
「へ？」
「だって、子供部屋もあるし、きっと夫婦の寝室だってあるでしょ

う？　それなのにどうしてあちこちの部屋じゃなくて、隣の大部屋使ってるのかなって」
「……ユーキちゃん、まだ寝ぼけてる？　それとも寝すぎて明日まで行っちゃった？」
「ちゃんと起きてる、つもり。――考えてみれば、今までもずっとそうだったなって思って」
　そう言った有希の言葉にようやく納得したのか、セレナはそうねぇと少し考える。
「理由は色々あると思うわよ。例えば今回なら、患者が五人に対して看病できる人が奥様一人。一人で沢山の部屋をかけずりまわるよりも一まとめにしておいたほうが看病し易い」
「あぁ、そっか」
　納得して、またスプーンを口に運ぶ。納得したが、妙にしっくりこなくてまた首をひねる。
「私たちが今まであちこち回ってきた間に一つの家を借りたりしていたのも、理由は一緒でヴィーゴがあちこちの家に回らなくても良いようにする事。それと、他の人間が下手に干渉して十日熱に感染するのを防ぐためっていうのがあるわね。看病する人間が多ければ多いほど、十日熱に感染する危険があるわけでしょう？」
（――あ）
　違和感の原因がわかって、妙にすっきりした。
（あちこちに居るから）
　緊張していた心のどこかがほぐれた気がして、食事を一気にかきこむ。
　これから自分のやりたいことが明確になった。今すぐ実行に移したくて、行動が急いてしまう。
「ユーキちゃん？」
「あたし、ご飯食べたらちょっと出てくるね」
「どこに？」
「フォル城」

そう告げて、暖かい食事をろくに噛まずに口に詰め込む。もごもごと口を動かしていると、目の前のセレナがあっけに取られていた。
「フォル城って……ユーキちゃん、昨日の今日なんだけど……」
「ん、ぶぉめまもむまんんんまんめぼ」
「ごめん、飲み込んでから喋って頂戴……」
有希は一つ頷いて、ごくりと飲み込んで、流し込むように水を飲んだ。
「うん、それはそうなんだけど、ちょっと話がしたくて」
「話？」
「フォルの人たちって、みんな家で患者さんを看病してるじゃない？　でもそれって、同じ家に居る人を感染の危険に晒させているだけだと思うんだ」
「はぁ……」
「だってこのままだとミイラ取りがミイラになって、みんな十日熱患者になっちゃうよ」
「ミイラ？　ミイラってなに？」
「えーと、ミイラっていうのは死体を乾燥させて長期保存させたもので……」
「え！？　そんなものを取ろうとする人なんて居るの？　そもそも取ろうとしたら同じく乾燥しちゃうの？　すぐに？　ユーキちゃんの国にはそんな妙ちくりんな技術があるの？」
「え？　あ、いや、これはモノのたとえで」
「え？　じゃぁ嘘なの？」
「いや、嘘じゃないけど」
「え？」
「え……と、とにかく！　このまんまじゃ十日熱の人まみれになっちゃうって事。だから、フォル城に行って、十日熱の人を一所に集められないか相談してみる」
そう言って、セレナを見据える。

「失敗した後、どうするべきか考える。セレナはそう言ったよね。――あたし、早くルカに会いたいけど、すごく心配だけど。……近くで倒れてる人を見捨てるなんて事、あたしできない。あ、もし薬がなくなっちゃったら、あたしリフェと一緒に薬作ってたから作り方覚えてるよ。あぁでも、薬草が無いかな。それだとしても、やっぱり……」

言い訳をするようにつらつらと喋る。

「フォルの人たちを見放して王都に行くなんてできないよ」

セレナは有希を見つめて、そして小さくため息をついた。

「揚足とられちゃったわ。……それで？　ユーキちゃんは私にどうして欲しいの？」

「ヴィーゴさんを納得させるには、どうしたらいいかなって……」

言いにくそうにぼそぼそと言うと、セレナがきょとんとした顔で言った。

「あら、そんなのは簡単よ」

「え？」

「昼食に酒を出せばいいのよ」

そう言って、セレナはニッコリと微笑んだ。

80

有希はフォル城に来ていた。そして通されたのは、いつか見た最奥の部屋。
しかしあの頃のようなどこか薄ら寒い雰囲気は無く、清潔感がある。
「――オレが行くって言ったのに。待ち遠しくて来ちゃった？」
目の前には、昔イシスが座っていた椅子。そこには昨晩会った、赤銅色の髪の青年――ラッドが座っている。
「やっぱりアナタが一番偉いのね」
そう言うと、ラッドはこれみよがしに肩をすくめてみせる。
「今この城にいる人間の中ではね。――で、ナニ？　本当にオレを迎えに来たの？」
「違う！　……ちょっと提案があって」
ラッドは器用に片眉だけ上げてみせる。
「へぇ。話してごらんよ」
有希は頷いて、口を開く。
「あの、今、このフォルの人たちは。フォルで十日熱に苦しんでいる人たちは、それぞれの家で家族に看病されてます。でも、それって効率の悪い事だと思う。看病する人間が多ければ多いほど、感染する人間も多くなる。それならどこかに一纏めにした方が良いと思うの」
ラッドは有希の言葉をへぇ、そう。と相槌を入れて聞いていた。
「そう、それで？」
「えっと、それで、フォルの患者さんが入るっていう大きさの建物は、このフォル城くらいかなって思って、フォル城を病院みたいにできないかなって。あと、ここにいる人たちに手伝ってもらえないかなぁって……」
おもねるように伺うと、ラッドは顔色を変えずに告げる。

「……言いたい事はわかった。けど、どうしてオレ達が動かなきゃならないんだ？」
「どうして？」
「あぁ。どうしてかと問いたいね。だってオレ達は騎士だ。医者じゃないんだ。なのにどういう理屈で病人を迎え入れなきゃならないんだ？　それに、ここの兵士が感染するかもしれないだろう」
「どうして？　どうしてって聞くの！？　あなたたちはフォルを守るために居るんでしょ？　もし十日熱に感染したならここで看病するわ。治ったら、もう十日熱に怯える事も無くなるじゃない」
「……頭大丈夫？　十日熱は治る可能性のほうが皆無なんだけど」
「――っあたし、医者と一緒なの。彼の薬なら治せるわ。お世話になってる宿屋の家族も、全員完治したわ」
鼻息荒くふんっと鳴らすと、ラッドは困惑したように頬杖をついた。
「大体、フォルに居る兵士達だって何もやる事ないんでしょ？　だから色々考えて不安になるのよ。それだったら看病で忙殺されたほうがいくらかマシだと思わない？　それに」
言って、その場に居る兵士達に目をやる。中には昨日見た顔もあった。
「少しでもフォルの人たちと接点が合ったほうが、国を！　……フォルを守ろうっていう気にならないかなぁ」
言葉にどんどん覇気がなくなる。持っていた自信が、その場に居る人達の視線で削られていくような気がする。
（だけど、あたしの言ってる事は無茶かもしれないけど間違いじゃないもん）
自分を叱咤激励して、きりりとラッドを見据える。
（それに、セレナとヴィーゴさんは言ってた）
「国からの支援がないんでしょ？　それなら、ここで病人の看病して、その家族から渡される食料とか、医療費の代わりにもらえばいいじゃない。あたし達はお金なんていらないから」

挑戦的にラッドを見る。ラッドは首をひねって、そして目を閉じる。
「んー、オレ的にはそれは結構オイシイ条件だなぁ。無償で薬を差し出してくれる医者様。そして労働力の代わりに食料をくれるフォルの民。もしオレ達が十日熱に感染したら、同僚達が看病してくれる……魅力的だなぁ」
「でしょ！」
（やった！）
ガッツポーズをしたい気持ちを押さえて、じゃぁと話を進めようとしたところにラッドが口を挟んだ。
「でもなぁ。フォル城はオレのものじゃないから。オレの上の人が管理を任されてるんだよね。だから、オレの判断じゃなにもできない」
（上の人……）
昨晩ちらと耳にした。夢の国に居るだのなんだの言った人だろうか。
「でも、ここに居る人の中で一番偉いのはあなたでしょ？」
「だけどオレにはどうする権限もない」
「――権限？　そんなものこの場に居ない人に、この辛さを知らない人に与えたって無駄以外の何者でもないじゃない。もしあなたの上の人が、この場に居たらどうすると思う？」
「んー、恐ろしく仕事の出来る人だからなぁ。彼女の意見を飲むかもしれない」
「それなら、アンタが偉い人に代わって指示しなさいよ！　もし上の人が出てきて、やっぱりダメだって言ったらあたしが直談判するわ！」
目の前で優雅に座っているラッドにも、ふつふつと怒りが込み上げる。
「大体なによ！　自分は一番偉いわけじゃないって言ってるくせに、そんな所に座っちゃって。――それに、ココに住んでいるのって兵

士だけでしょ？　迷路みたいに広くてややこしいんだから、病室に使ったって困る事何も無いじゃない」
　ぷりぷりと怒って見せると、一瞬きょとんとしたラッドは、次いで声を上げて笑った。
「あっはっは。豪胆だねぇ。――アンタ、イイ女になる」
　有希は眦を吊り上げる。
「だからって、三年後に迎えはいらないからね」
「それは残念だ。――さて、謁見はそろそろいいかい？　オレ達もこう見えて暇じゃないんだ」
「――なっ！　そんな言い方っ」
「これから、この城は十日熱患者を受け入れる体勢を作らなきゃならないからね。――さて、それで医者様はいつ頃この城に来てくれるって？」
「え」
（それって）
　驚いて見上げた先には、悪戯に笑っている青年の姿。
　嬉しくてにやけてしまう。
「このままじゃフォルは何も変わらない。変わらなければ終わってしまう。少なくとも、オレとここに居る奴らの目を覚ましてくれてありがとう――礼を言わせて言うよ。未来のオレの花嫁さん」
「――っだから！　嫁になるつもりはないから！」
　そう言っても、聞き入れてくれた嬉しさでちっとも怖くない顔で笑ってしまう。
　ラッドも満足気に笑って、わざとらしく肩をすくめた。
「つれないなぁ。折角ルカ様の代わりをやる事になったんだから、褒美くらいくれたって良いじゃないか」
「――――え？」
　その言葉を聞いた瞬間、有希の笑顔が凍りついた。

81

「えっと、コレ。洗濯お願いしたいので、洗濯場に持っていってください」
「ハイ！」
「あと、そろそろ食事の時間なので、終わったら手伝うようにお願いします」
「ハイ！」
「それから、貯蔵庫の残量と、今後の献立も出しておいてください」
「ハイ！」
「できれば、みなさんからもう少し多く野菜と穀物いただけるようにお願いもしてください。もし難しかったら……また考えるから」
「ハイ！」

有希はそれから一週間。フォル城を駆けずり回っていた。

ヴィーゴと行った約束は「フォル城の人間は有希が仕切ること」「患者の薬は必ず有希が投薬する事」だった。

朝から晩まで走り回り、全ての仕事が終わると事切れたようにベッドに倒れこむ。そんな生活を行っていた。

フォル城にやってきた十日熱患者はゆうに百人を越え、それからフォル城はてんやわんやとしていた。

兵士達は有希とともに駆けずり回り、そしてコロナ達家族も、もう十日熱に掛からないからという理由で手伝いを買って出てくれていた。

「すっかり板に付いたわねぇ」

食事の後は薬の時間だとバタバタしていると、セレナがどこかの部屋からひょっこり顔を出している。

「セレナ！　今暇？　暇なら薬運ぶの手伝って！」

「……すっかり人使い荒くなっちゃって」
お姉さん悲しい。と嘘泣きをするセレナを無視して、先行ってるからと走る。
「あ、ユーキ様、そろそろ投薬の時間で……」
「うん！　あ、ありがとう！　持って来てくれたの？　――じゃぁ、この部屋の端から……セレナぁ！」
「はぁーい！」
大声で叫ぶと、セレナが小走りで病室に入る。部屋には所狭しとベッドが置かれ、中には八人ほどの人が居る。それぞれ、ベッドの間にパーテーションのようなもので区切り、まるで日本の大人数部屋の病室のようだ。
有希はそのベッド一つ一つに寄り、用意してもらった薬を与える。一言二言会話をして、患者に笑みかける。
「かさぶた、取れてきましたね」
「どこか痛いところとか苦しいところとかないですか？」
「ヴィーゴさんに完治宣言もらえたら、お家戻っていいから、それまで頑張りましょうね」
次々に声を掛けて、全ての部屋を回る。
全ての部屋を回り終わると、今度は洗濯やら後片付けが待っている。
「ユーキちゃん、今日くらいは片付けお休みしたら？　いい加減疲れてるでしょ」
「ううん。大丈夫！　まだまだイケるよ！」
右手を上げてガッツポーズを見せ、またバタバタと走り出した。
セレナはため息を吐いたが、有希がそれを見ることは無かった。
「――ホント、わっかりやすいくらいに無理しちゃって」
有希はこめかみから汗が流れるのを感じて、腕で拭う。
ふぅと息を吐いて見回すと、沢山あった洗濯物が、今洗っている分で最後なのだと気付く。

アリドルの洗濯は、洗濯場という場所があって、そこは幼児用のプールのような形をしている。有希の足首あたりまで水が入るようになっている。
そこに水と洗剤を入れ、裸足で洗濯物を踏んで汚れを落とすらしい。
そして、その周りに洗濯物を干す場所があり、その建物は洗濯場を囲うように半円を描いている。
干し場の屋根は半分以上洗濯場に傾いている。それは雨水が沢山入るようにということらしい。
フォルには泉が少なく、フォル城からは遠いので、雨の降った翌日の晴れの日が、絶好の洗濯日和だった。
「うん、みんな綺麗になった」
兵士によって運ばれ、次々と干されていくシーツや衣服を見て、満足気に笑む。
「さて！　水抜いたら掃除して、食事の準備しよっか」
辺りにいる兵士に笑みかける。
「ユーキ様、水を抜いたら明日洗濯ができなくなりますが……いいのですか？」
「うん。一日二日はいいかもしれないけど、洗濯水使いまわすのは清潔じゃないし。それなら、多少みんなに迷惑掛けても泉から持ってきた方がいいよ。そのほうが安全だし」
「はぁ。わかりました」
有希の言葉を理解しきれていないだろう兵士に、苦笑する。
「片付け終わったら、ちゃんと手洗いとうがいしてね」
（みんな、衛生面はほんっと無頓着なんだから）
洗濯場の縁に座って濡れた足を拭き、サンダルを履いて立ち上がる。
途端に首筋にひやりとした感触が走り、頭がぐらりと揺れてそのまま体が傾いてまた縁に座り込む。
（あ、また）

ギーンという音が耳の奥から脳を揺さぶるように聞こえる。あちこちで聞こえる兵士達の声にエコーがかかる。
頭を抱えて目を閉じる。目を閉じていても分かるほどに世界がぐらぐらと揺れている。揺れているのが世界ではなく、自分自身の視界だとわかっていても、苦しさは一行に拭えない。
体の節々が冷たく痺れる。
（早く終わんないかな）
しばらく座って耐えていれば、そのうちに症状がなくなるのを知っている。
もう幾度目かのその感覚に慣れてしまって、どこかが麻痺してしまっているような気がする。
白黒にちかちかする視界に辟易しながら、次にやらなければならないことを必死で考える。
「えーと、ごはん。そう、ごはん。朝ご飯には納豆と味噌汁と卵焼き……卵に砂糖は邪道……でもルカは好きそう。じゃなくて、そろそろ小麦が無くなってるから、水分大目に炊いて……」
頭に血が回らず、どうでもいいことばかり思いついてしまう。
「ルカは硬い麦ばっかり食べてたなぁ」
（あ、やだ）
今一番思い出したくないことを思い出してしまう。
『ルカ様って……』
『――あぁ、言ったでしょう。ここで一番偉い人ですよ。マルキーに保有されていたフォルを奪還した方です。この国の第四王子で……』
『っルカは今どこに居るの！？』
思わず叫んでしまった有希に、ラッドはこれでもかと顔をしかめた。
『へぇ？　ルカ様のファンなんだ？』
『違う！　ルカとあたしは……っ』
『恋人同士だとでも言うんだ？　……名前まで呼び捨てて、いいご

身分だねぇ』
そう言うと、ラッドは侮蔑を露にした顔で吐き捨てた。
『オレは彼女を気に入ったから教えてあげるよ。――たった一夜ルカ様に付き合ってもらったからって、付け上がるのは身の程知らずだよ。彼女みたいな女は吐いて捨てるほど居るんだ』
『～～っだから違……』
『もういい？　これ以上オレを不快にさせる前に、消えてくれる？』
そしてラッドは去り際に言った。
『もしもアンタが、ルカ様の為にここへ来て、そしてルカ様に会うためにこういうことをしているのだったら、心底軽蔑するよ』
（違う）
耳鳴りが激しくなる。
「ちがう、ちがうっちがう！」
ひぐっと喉が鳴る。横隔膜が変に動いて、呼吸が出来なくなる。空気を吸いたいのに、吐きたいのに、体がうまく動かない。
「ちがう……」
そう言いたいのに、動いたのは口だけで言葉にならない。
目を開くと、涙でにじんだ視界が霞みがかる。
だんだんと白んでゆく視界のなか、脳裏に浮かぶのは、心底有希を軽蔑したように見たラッドの姿。
（そんなんじゃない）
そのまま有希は、意識を手放した。

82

貧血からの覚醒はいつも唐突にやってくる。
失っていたもろもろの感覚が、突然戻ってくるのだ。
そしてそのあまりの唐突さに戸惑い、状況もわからずきょとんとしてしまう。
「あれ？」
有希はいつのまにか、自分がベッドに横になっている事に気付く。
ぱっちりと目を開くと、どこかの部屋の天井が見える。
むくりと起き上がって、何があったのかと逡巡する。
（あたし、あの後……）
貧血を起こした所までは覚えている。
（あれ？）
酷く苦しかったが、その記憶が無い。
「ユーキちゃん、洗濯場で倒れてたのよ？」
「え？」
ベッドサイドに、セレナが座っていた。
「それにしても第一声が『アレ？』っていうのもどうかと思うわぁ。さっきまでヴィーゴが居たんだけど、ユーキちゃん。過労だって」
（過労……）
どこか過労というものに現実味が無く、有希はぼそりと呟いた。
「まぁ、働きすぎもあるんだろうけど、原因の一端はヴィーゴにもあるのに。他人事よねぇ」
セレナはよしよしと有希の頭を撫でている。
「？　原因がヴィーゴさんにもあるって、どういうこと？」
「んー、ヴィーゴがユーキちゃんを働かせてばーっかりだっていうこと？」
「え？　だってそれは、あたしが自分でワガママ言ったんだから関

係ないよ！」
自分が我儘を言って、フォルに逗留してもらっている。ヴィーゴにも王都に行く用事があると知っていながら、有希は自分の都合で無理な事を言ったのだ。だからその分頑張らないといけないと自分に言い聞かせていた。
「……あぁもう。いじらしいなぁ」
そう言って何度も何度も有希の頭を撫でる。頭を撫でられるのが心地よく、うっかり顔が緩む。
「ユーキちゃんの騎士に会うために、本当は王都に行きたくて行きたくて仕方がないんでしょ？」
何気なく発された言葉に、有希の緩んでいた頬がこわばる。
（それを、言わないで）
ずっと自分に言い聞かせている。考えてはいけないと。
考えれば考えるほど、一刻も早く王都に行きたくなる。
有希に笑いかけてくれる患者や、有希にとてもよくしてくれる兵士たちを放り投げて、今すぐ飛んで行きたくなる。
牢のような場所に閉じ込められていたルカ。いつまでも動向がわからないルカ。眠りっぱなしだというルカ。
（考えさせないで）
心が不安で押しつぶされてしまいそうで。気が気でなくなってしまいそうで。
「行けばいいじゃない」
「……そんなこと、できないよ」
ぎゅっと布団を握り締める。止めようとしても、拳は震えてしまう。
（そんなこと、できない）
子供の姿で、実際に何も知らない子供で。何の為にこの世界に来ているのかもわからない。自分が何者なのかもわからない。住む場所も無ければ帰る場所もない。
そんな何も持っていない有希に全幅の信頼を置いてくれている

患者、そして兵士達。
――そして何よりも、恐かった。
あれから何ヶ月経っただろう。
その間に、彼等はもう有希のことを忘れてしまっているかもしれない。有希のことなんて考える暇ないかもしれない。
今更のこのこと王都を訪れて、もし門前で払われてしまったら。有希なんてどうでもいいと言われてしまったら。
そう考えると恐くて動けなかった。
（言い訳ばっかりで、最低だ……）
いろんな人の為だと言っておきながら、結局は自分の為ではないか。
そう気付くと、自分が最低な人間になったようで、苦々しい気分になった。
「行けばいいのに」
セレナはもう一度言葉を続ける。有希はうな垂れて首を振った。
（会いたい。けど、会いたくない）
ため息が聞こえた。困ったような。伺うような空気が流れている。
「ヴィーゴがね。頑張ってるユーキちゃんに話があるんだって。……そろそろ、来るはずよ」
セレナの声がとても優しい。有希の頭を撫でつづけるその手も優しくて、その優しさに甘えてしまっている自分がまた嫌になった。
「今まで騎士に会うために一生懸命だったのに、ユーキちゃんが急にそうなったのか私には見当もつかないわ。――でも、ユーキちゃんが騎士のためにずっとずっと頑張ってきたの知ってる。ヴィーゴだって知ってる。……だから、ユーキちゃんは胸を張って騎士に会いに行けばいいのよ」
まるで有希の思考を読み取ったかのようにセレナが告げる。有希は驚いて顔を上げる。
「あたし……頑張ってなんかないよ」

「そんな事ないわよ」
宥めるように頭が撫でられる。
「いつも、自分のことしか考えてなかったよ」
その呟きは、開かれた扉の音に掻き消えた。

セレナは有希が馬に乗って、フォル城を降りていくのを見送り、後方で立ったままの主を見る。
「ユーキちゃん、最後は慌てて出て行っちゃったわね。――ヴィーゴのお陰かしら」
笑いかけると、ヴィーゴは眉間にシワをよせて唸った。
「ユーキちゃんの騎士もワケアリなのね。――もう何ヶ月も眠ったままだなんて、本当に呪いにでも掛かってるのかしら」
おどけて言ってみせても、ヴィーゴは小難しい顔をしたままだ。
「なぁに？　もしかして自己嫌悪？」
からかうように言うと、図星だったのかヴィーゴがセレナを見る。
ヴィーゴは有希に十日だけ時間を与えた。
『十日だけだ』
『え？』
『十日だけ待っていてやる。その間に騎士を連れ戻して来い』
『――っうん！』
そして有希はばたばたと出て行ってしまった。
「十日が限界なんだ」
もっさりと濃くなった髭を撫でている。
「最低だと言ってくれてかまわない。……」
(あらあら)
「どれだけ考えても、十日が限界だ。――いや、嬢ちゃんがもし遅れたりなんぞした時を考えると、それ以上の日数を言えなかった」
ヴィーゴはうな垂れて、組んだ両手に視線を落としている。

「いくら薬があると言っても、嬢ちゃんの力がなきゃ患者の全員を救えない。――今ここで嬢ちゃんがいなくなったら、十日熱に感染した人間が死ぬかもしれん」
ヴィーゴは自嘲の笑みを浮かべる。
「俺は医者だ。患者を救うこと以外考えられん。――嬢ちゃんの寿命が縮まるかもしれないとわかっていて、俺はあの子を使ってるんだ――たとえそれが、リビドム王女だとしてもだ。たとえ王女だとしても、俺は一人の人間を救うために道具のように使う」
ヴィーゴが淡々と話している。ただ単に吐き出したいのか。それとも懺悔なのか。セレナにはわからなかったし、どうでも良いことだった。
「関わらずに居たかった。関わってしまったら治さずにはいられない。――コレが医者の性なのかもしれんな。……そもそも、俺には彼女を此処に引き止めておく義理も、日数を指定して王都まで行かせる義理もないのにな。リフェノーティスやガリアン様に頼まれておきながら、このザマだ」
ハッと笑う声が虚しく響く。
「……嬢ちゃんの能力の事、身分の事について、何も言わんでくれて助かった。……俺を、軽蔑したか？」
ヴィーゴはどこも見ないまま、吐き捨てた。
（ずるい男）
セレナが傷つけるような言葉を言うとでも思っているのだろうか。視線はセレナと絡まない。
（ほんとうに、ずるい男）
こんな風に弱音を吐かれて、胸が締め付けられない女が居るとでも思っているのだろうか。あるいは全て計算の上での事だろうか。
（まさか、ヴィーゴにはそんな事できない）
そんな事できないと分かっているからこそ更に胸の奥が疼く。
誰にも言えない、自分の中で溜め込む事しかできない澱を、こうしてセレナには吐き出している。

消沈している姿に、ふと笑みがこぼれる。こぼれただけでは足らず、笑い声まで洩れる。
「私は、貴方の騎士よ」
笑い声を不審に思ったのか、ヴィーゴがちらとセレナを見た。
「一応意見は言うけど、貴方の意見を否定しないし、貴方の指示を拒否する気もないわ」
ぴくりとも動こうとしないヴィーゴに、セレナは続ける。
「ユーキちゃんは好きよ？　カーン様そっくりで素直だし健気だし優しいし。大好き」
部屋がしんと静まり返っている。どんよりと冷たい部屋の中で、有希が寝ていたベッドだけにぬくもりがあるような気がする。
「大好きだけど、それはどうでもいいことなのよ。もしヴィーゴの所為でユーキちゃんが死んじゃうような事になっても私はヴィーゴを責めないわ。たとえユーキちゃんが本当に王女様だったとしてもね」
「……酷い話だな」
「そうかしら？　騎士と主人なんてそういうものじゃない？　だって私は、貴方の剣であり、盾でもある」
ヴィーゴが顔を上げ、ちらとセレナを見る。絡んだ視線にセレナは微笑んだ。
「――そして主の命には絶対服従する、犬よ」
ヴィーゴは目を見開いて、そしてまた伏せた。
（狂犬……か）
自分から犬という言葉を発したのは久方ぶりだった。
セレナは犬と呼ばれる事は嫌いではなかった。むしろ昔は誇らしい気持ちになるものだった。
（いつからかしら）
いつから犬という言葉に色々な意味が込められるようになっただろうか。いつから犬と呼ばれる事が嫌になったのだろうか。
しばらく思案し、考えても詮無い事だと切り捨てた。

少しだけ傾いた日が、橙の明りを入れる。その光は、部屋に居る二人にはなにも与えず、ただ視界にはいるベッドにだけ注いでいるような気がしてならなかった。

「……私は、忠犬だわ」

誰に言い訳するでもなく、呟いた。

83

早く。もっと早く。
この世界に電車があれば。飛行機があれば。
そう願いながら、地を駆ける馬の手綱をしっかりと握り締める。
馬も疲弊しているようで、息がとても荒い。
（ごめんね、でも急がなきゃ）
足にぎゅっと力を込める。何時間も同じ体勢で、気を抜くと体から力が抜けて飛ばされてしまいそうだった。
『あの軍人に聞いたんだがな、お前さんが探している第四王子のルカートだがな、ずっと寝っぱなしなんだそうだ』
『寝っぱな……って、どうしてなの！？』
『さてな。医者もお手上げ状態らしいな。魔女の呪いだかなんだかっていう噂らしいが』
『何でも、長いこと寝っぱなしだから大分衰弱しているという話だ』
『っ！！』
『そりゃぁメシも食わんで長生きできないだろうからな。むしろここまで生きている事が奇跡だろうよ』
『――ヴィーゴさん』
『十日だ』
『え？』
「十日の間で、ルカを連れて戻ってくる」
自分に言い聞かせるように呟いた。
昔フォルに来たとき、アドルンド城から一週間弱かかった。
しかしあの時は馬車での移動。有希の記憶が正しければ、徒歩の人間も居た。
（馬で行けば、半分で行ける）

行きと帰りで六日。残り四日でルカを見つけ出し、そして連れて出なければならない。
（ううん、もしかしたら帰りはもっと時間が掛かるかもしれない）
そうしたら四日もないではないか。
（急がなきゃ）
馬は派手に足音を立てて駆け抜ける。

寝る間を取らず、数十分の休息を取るだけ。そうやって走ると、二日後の夜にはアドルンドに辿り着いた。
時間が遅くて宿が取れなかったこと。そしてあまりにも疲弊していた事。
有希はアドルンドについた直後、野宿を決め込んで近くの林に馬を繋いで寝てしまった。
そして明朝、少し離れた所に繋いでいた馬がすっかり姿を消していた。
「……うそ」
前身が筋肉痛でよたよたと歩く。絶望的な気持ちで馬の居た場所を眺めている。
（どうやって帰ればいいのよ）
悪態を尽きたいのは昨日の自分にだ。
（疲れてたからって、ちゃんと宿屋を探せばよかった）
馬は買うといくらになるのだろうか。手持ちの路銀だけで足りるかと逡巡して、ありえないと鼻で笑った。到底足りない。
ならば馬車で向かうとなると、どれほど時間が掛かるのだろうか。
考えれば考えるほど、途方に暮れてしまう。
「……しょうがない」
そんな一言では片付けられないが、もう失ってしまったのだからどうしようもないではないかと開き直る。
「こうなったら！　ルカに頼んで馬の一頭や二頭出してもらおうじ

ゃない！　いいよね、ルカ王子様だし！」
　そう叫んで、無理やり自分を奮起させる。
「むしろ荷物を取られなかったことの方がありがたいじゃない！
――さて！　どうしようか！」
　荷物を持って、思いっきり立ち上がる。わざとらしく考えるポーズを取る。
「……とりあえず、あのラッドさんがルカの居場所を知ってるってことは、王宮だよね！　王宮で寝っぱなしだなんて、いばら姫みたい！」
　大げさにくすくすと笑う。笑い終えると霞みかかった林はしんとしていて、酷く寂しかった。
「ホント、なに寝てるのよ」
（普通、逆じゃない）
　鬱々した気持ちを払拭するために八つ当たりをして、そして大きく深呼吸した。
「――目指すは、お城」
　ぎゅっと手を握り締めて、視界の奥に見える高い城を睨みつけた。

　有希がアドルンド王都にやってきてから二日。フォルを出てから五日が経っていた。
「わかってたけどさ……」
　王都ならではだろう、呆れるほど大きな噴水の縁に座って、がっくりとうな垂れた。
「門前払いどころか、シカトはないよ」
　十日熱が蔓延している事と戦争でだろう。町の活気がいつか見た王都とは雲泥の差だ。とても人々は暗い。
　歩いている人々はちらちらと有希を見ては、そそくさと退散する。あるいは憐憫の顔を浮かべる。
　麻袋一つしか持っていない、いかにも流れ者の有希を、ここは

歓迎していないのだ。
（あの門兵も、あたしが救護を求めたと思ってるのかな……）
かといって、ルカに会いたいと言ったところで、何ら進展がない事もわかっている。
「はぁあ～～～」
大仰にため息を吐く。そうやって発散しなければ、自分の中に不安が溜まってどうしようもなくなりそうだった。
「あぁもう！　なんなのよ王子って！　そんなに偉いの！？　あんの最っ低オニーサマまでああやって守られて庇護されてさ」
ぎろりと城を睨みつける。
「本当に、なんなのよ……」
きゅうと胸が締め付けられる。
今は見えない、そこにある筈の傷が火傷のようにチリリと痛む。
痛みに堪えるように、眉根を寄せて胸を押さえる。
（なんなのよ）
呼吸も苦しくなってきて、息が荒くなる。
落ち着かせようと幾度か深呼吸を繰り返していると、それはやってきた。
（あ、また）
首の後ろが冷えてゆく感覚。このところお馴染みになってしまった貧血の症状。
顔から血の気が引いていくのが分かる。それと同時に思考が回らなくなる。
体の器官が狂ったかのように、町中の雑踏が大音量で聞こえる。そして白んでいく視界。
（今倒れちゃだめ）
必死に自分にそう言い聞かせ、頭を抱え込んで目を閉じる。
ぐらぐらと揺れる世界。自分自身が揺れているのか、世界が揺れているのか。今どこに座っているのか。全てわからなくなる。
（なんなのよ）

おかしくなってゆく自分の体。どこか悪いのではないかという不安が拭えない。
リフェノーティスの小屋近くの孤児院で倒れて以来。そしてフォルを発つ直前に倒れたこと以外、ヴィーゴもセレナも有希の不調を知らないはずだ。
医者が目の前に居るのだから言えばいいのにと思ったが、それで旅を続けられなくなるのがなによりも嫌だった。
（……こわいよ）
目に見えない真綿に首を絞められているような不安と息苦しさが、いつまでも有希を苛み続けた。
そして意識は薄らいでゆき、有希は意識を手放した。

84

ぐらぐらと揺れる世界。ホワイトアウトした視界。
何もかもが大音量で聞こえ、爆音で頭がはじけそうだった。
そんな中、鶴の一声のように、はっきりと言葉が耳に飛び込んできた。
「え、もう三日も寝てる？　噴水前で倒れてたってことは……難民かもしれないですね。こちらの施設で受け入れはしていただけますか？」
聞き覚えのある声に、有希の目がぱっちりと開く。
「それにしても、どうして僕がこんな仕事を……」
「まぁまぁ、それだけ人間が足りないって事だろぉよ。オレ達も面倒くさい実技がサボれる。お国は金の掛からない労働力が手に入る。いい取引じゃんか」
体調不良であったことすら忘れて、がばりと身体を起こす。
学校の保健室のようにベッドが並ぶ部屋だ。有希の寝ているベッド以外、使われていないようだった。
その部屋のすぐ傍で話しているのだろう。そして壁も薄いのだろう。筒抜けに声が聞こえる。
「寄宿生のギィスはともかく。僕は一応宮仕えなんですけど……」
「そういう嫌味を平然と言うなよ！　こういう地味な仕事がだなぁ、次の仕事や出会いを生んだりするんだぞ！」
「……ギィスがそういう下心で動いているのは知ってるけど、そうおおっぴらに言うのもどうかと思うよ」
「まぁホラ、可愛い女の子かもしれないだろ！」
ガタンと扉が開かれる。
「ありゃ。お目覚めらしい」
濃い茶色の髪色の、茶目っ気たっぷりな顔つきの青年が、驚いたように有希を見つめる。目にはこれでもかというほどの好奇が浮

かんでいる。
　そして有希は、その青年の後ろに立っている眼鏡を掛けた青年に釘付けになった。
「……アインさん」
「あれ？　何、アイン知り合い？」
　場違いに明るい声に、アインはえ、と驚いて部屋に入る。有希を見て、アインは訝しげに眉根を寄せる。
「そうですけど……あの、貴方は？」
　アインは有希をまじまじと見て、そして誰も思い当たらないのか困惑している。
「あたし！　今こんな格好だから信じられないかもしれないけど、有希、有希だよ！　ルカに会いに来たの」
　そこまで言って、はっと気付く。
（そうだよ、どうして気付かなかったのあたし！）
　アドルンドにアインがいて当然だ。アインはルカの臣下で、ルカの傍付きなのだから。
「もうナゼットとティータには会えた？　みんなはどこに居るの？」
　懐かしい。もう皆はアドルンドに戻ってきているだろうか。早く会いたいとアインに笑いかけると、アインは驚愕の顔を浮かべて有希を見た。
「……どうしてそんなことを知ってるんですか」
「え？」
　言って、有希は改めて自分を検分する。
　ヴィヴィによって成長させられた黒い瞳。
　元の面影はあったとしても、同一人物だとはやはり思われないか。
「だってあたしが有希だから。あのね、あの後魔女にこんな姿にさせられちゃって、えっとそれで」
「やめてください！」
　突然の大きな声にびくりと肩がすくむ。驚いて見上げると、苦

々しげなアインの姿がそこにはある。
（……なに？）
自分がなにかしただろうか。それとも唐突に喋りすぎただろうか。
「ユーキは僕の所為でマルキーに処刑されて死んだんです！　そもそも何故貴方がそんな事を知っているのですか！？　そして何故！　死者を愚弄するような事をするのですか！」
「おい、アイン」
青年――ギィスがアインの肩を掴む。アインは顔を真っ赤にさせて怒っている。
有希はその顔をきょとんと見つめる事しかできなかった。
「――え？」
（あたしが……死んだ？）
「何なんですか貴方は！　どうしてユーキの事を知っているんですか！？」
「だから、あたしが有希だから！」
「その話はもうしないで下さい！」
アインの大きな黒目が涙ぐんでいる。
「もう思い出したくないんです！　なのに何なんですか！　何者なんですか！　人の傷を抉るような真似をして楽しいですか！？」
咆えるように叫ぶアインについていけず、有希は呆然としてしまう。
「あたし……死んでないよ」
「……あなた、もしかしてあの魔女ですか？」
「アイン、落ち着けって！　な？」
「え！？」
いつのまにかギィスに羽交い絞めされているアインは、憎悪を称えた目で有希を睨みつける。
「記憶を混同させられて思い出すのに時間が掛かりましたが、落ちこぼれでも魔術士のはしくれです。――思い出したんです。僕が何

故北の森で保護されたのか。――あなたが僕を運んだのでしょう」
「え、え？」
　脳にまだ血が足りないのか、アインの話していることが難しい。
（つまり、アインさんはあたしをヴィヴィと勘違いしてるの？）
「アインさん、それは違っ」
「何が違うんですか？　ならどう説明してくれるんですか！　貴方も同罪です！　どうしてユーキを見殺しにしたんですか！？　どうして僕を助けたんです！」
（見殺し？）
　激昂するアインにふと違和感を感じる。
「ユーキは僕の目の前で焼かれました！　わかりますか？　ただそれを見つめる事しかできない己の無力さを！　肉の焼ける匂いが脳裏を離れなくて、毎夜うなされるのを！」
　アインは決定的な勘違いをしている。
　有希は殺されていない。だから有希が処刑されるのを見ただなんてもってのほかだ。
「違う！　アインさん、話を聞いて！」
　アインが大きくため息をつく。
「……あなたから聞く事なんて何もありません」
　そう冷静に言うと、アインが後ろを見遣りギィスに声を掛ける。
「ごめんギィス。取り乱したりして――もう大丈夫だから放してくれないか？」
「……いいのか？」
「あぁ。――彼女は魔女かもしれないので、放り出してくれてかまわない」
　濃紺色のマントを正して、アインは言う。
「捕らえないだけ感謝してください。――覚えていませんが、僕は貴方に助けられたんでしょうから。せめてもの温情です」
「アインさん！　だから違いますってば！」
　有希はくらくらする頭を必死に奮い立たせて、どうやったら信

じてもらえるものかと考える。
「何のためにアドルンドに来たかは知りませんが、早く自分の住処に戻ってください」
アインはつかつかと扉に向かい歩く。
「ギィス。すみませんが気分が悪いので今日は帰ります。後の事をよろしく頼みます」
「あ、あぁ……」
ギィスもアインの冷徹さに驚いているのか、扉を出て行くアインを呆然と見つめていた。
「アインさん！」
ぱたりと閉まった扉に向かい叫ぶ。
追いかけようとベッドを降りた途端、足から力が抜けて、へなへなとへたり込んだ。
「――っなんで！？」
思わず声があがる。いくら立ち上がろうとしても、腰から下にいっこうに力が入らない。まるで痺れて麻痺しているようだった。
（動け！　バカ！）
早く行かなければ。捕まえて話を聞いてもらって、ちゃんと自分が有希であることを理解してもらわなければ。そして、
（ルカのこと、聞かなきゃいけないのに！）
アインなら知っているだろうか。ルカが今どこに居るのか。いつから体調を崩しているのか。
立ち上がろうとベッドにしがみ付く。引っ張った引力で立ち上がろうとしても、毛布がずるずると落ちるだけだった。
「……無駄だと思うぞ」
ギィスの存在をすっかり失念していた有希は、驚いて顔を上げる。
痛ましげに有希を見つめていたギィスは、有希がへたりこんでいるところまでやってきた。
「アイツは頑固だからな。あそこまでキレると手に負えないんだ。

オレも久しぶりに見たなぁ」
　まぁ寝りゃ元通りだけどな。と言いながら、有希のわきの下に両腕を入れる。そして有希を引っ張り上げてベッドに座らせる。
「アンタ、三日寝込んでいたんだ。体が動かないのも無理ないだろう。それに随分顔色が悪い」
　翡翠色の目が有希を覗き込む。人懐っこい顔のギィスは、アインの言葉を信じていないのだろう。魔女と言われた有希に怯えるでもなく構えるでもない。
「アインはアンタを魔女だって言ったけど、こんな顔色の悪い魔女いるかって話だよなぁ。――まぁ、アンタがなんでいろんな事を知ってるのかも気になるけどな」
　綺麗な瞳がきらりと光ったような気がする。
　言葉は優しいが、どこか推し量るような、そんな目が有希を射竦める。
（そんなこと言われても……）
　もろもろの当事者であり、その場に居たのだから、知らないはずはないだろう。
　けれどもそんな事は口にだせない。口をつぐんで黙っていると、腹がきゅるきゅると小さく音を立てた。その音で自分が空腹なのだと気付いた。
（そういえば、ご飯）
　いつから食べていないだろうか。そもそも、自分はどのくらい寝ていたのだろうか。
『アンタ、三日寝込んでたんだ』
「三日！？」
　ギィスの言葉を思い出し、思わず叫ぶ。唐突に大声をあげた有希に驚いたのだろう、ギィスの肩がぎくりと揺れる。
「ちょっ！　三日って、え？」
（ここにくるまでで三日、それから三日、帰りに何日掛かる？）
　しかも馬は手元にない。路銀はと考えて、荷物がないと慌てて

辺りを見回す。するとベッドサイドに有希の麻袋が合って軽く歎息を吐く。
そして馬がないとなると何日でフォルまで辿り着けるのだろうと考える。――どう考えても、日数が足りない。馬車で行ったとして、フォルは一週間掛かるのだ。
「――っルカについて、何の手がかりも掴めてないのに」
悔しい。何故三日も寝こけていたのだろう。体調が悪いからだなんて言葉は言い訳にしかならない。自己嫌悪と憤りで胃の辺りがきゅうっと縮む。
「ルカって、ルカート様の事か？　ルカート様なら王宮に詰めてらっしゃるだろ。オルガー様のご政務を手伝われてるって話だぞ？」
「えっ？」
「ご政務が忙しいみたいで、お戻りになられてから拝見してないけどな。手がかりって、何か企ててんのか？」
ギィスの言葉に声が出なかった。
（ルカが……）
普通に生活している。その事実に驚愕する。
しかし、ラッドはルカが眠ったままだと言っていた。
有希が寝ている間に起きたのかとも考えたが、ギィスの口調は以前からそうだと言っているようにしか聞こえない。
誰かが情報を捏造しているのだ。
（でも誰が）
牢屋のような場所に居ると言ったリフェノーティス、寝たままの状態だと言ったラッド、政務をこなしているというギィス。
考えると沸騰したように頭がぐらぐらと揺れる。ルカがそれほどまでに遠い存在の人物なのだと思い知らされる。
何が本当で何が嘘なのかわからない。
濃霧の渦中に自分は居る。どこに向かうべきか、何をするべきかも見当がつかない。
（それでも、行かなきゃ）

有希を突き動かすなにかは有希の背中をぐいぐいと押す。まるで追い風のようにはやしたてるそれに、乗るしかないと心が唆す。
嘘まみれの中から真実を手繰り寄せてなければならない。
ぐっと両腕に力を込めてベッドから降りる。身体も起きたのか、両足でしっかりと立ち上がることができた。
「おい……？」
突然動き出した有希に、不審げな声が掛かる。有希は聞こえないフリをして麻袋に手を伸ばす。
「アインさんがあたしを放り出せって言ったんだから、ちゃんと出て行きます」
お世話になりました。そう告げて扉を目指す。
三日も食事を摂っていなかったために足取りはおぼつかないが、そんな事にも構っていられない。
「ちょっと待てって！　オイ！　意味わかんねぇんだけど！」
扉の取手を掴む。引っ張っても開かないので体重を掛けて引くとようやく動いた。そこまで体力が落ちているということに愕然とした。
扉の目の前に、十歳ほどの黒髪の少女が緑色の瞳を見開いて立っていた。手には食事の乗ったトレイがある。
自分の為に持ってきてくれたのだと気付き、有希は微笑む。
「ありがとう。でも食事はいらないや。――三日間、お世話になりました」
少女は有希を見上げ、そして小さく頷いた。
（しゃんとしろ）
気を抜いたらふらふらとしてしまいそうな足を叱咤して、有希は建物を後にした。
頭の奥で、誰かがくすくすと笑っているような気がした。

85

勢い良く飛び出して来たは良いがどうしたらいいのかわからない。
いつも自分は猪突猛進だと苦笑して、空高く上っている太陽を睨んで目を細めた。
「さて……どうしようか」
身体はだるいし足も思うように動かない。少し季節が移ったのだろう。やわらかくなった風に撫ぜられただけで寒い。まだ太陽が出張っているというのに。
時間もなければ情報も何もない。身体もボロボロな状態だ。
それでもなぜか、心だけは晴れやかだった。
「とりあえず酒場。酒場に行こう」
こんな真昼間からやっているものなのか不安だが、行ってやっていなければ食事をして開くのを待とう。
（そこで馬の事とか、フォルに行く事とか聞こう）
ヴィーゴとの約束通り、一度フォルに戻り、そしてラッドに協力を求めるのも良いかもしれない。――ラッドが信じてくれるかどうかもわからないし、信頼の置ける人間かわからないが。
そう考えて、首を振る。
（ううん、あたしが信じなきゃ）
よしと意気込んで、まだ人の出歩きの多い城下町を挑むように睨んだ。

つくづく、人に恵まれていると思う。
ルカとの出会いからして恵まれている。なにもわからないところに飛んで、その国の王子様の目の前に落ちた。否、沈んだ。
これがもし貧困な家庭だったらば、奴隷として使われて一生を

終えていたかも知れない。
　奇異な瞳を売られたかもしれない。瞳だけ奪われて、光のない一生を迎えていたかもしれない。
　――そう考えると、人に恵まれている。
　恵まれているというよりも、むしろ強運なのかもしれない。
　有希は自分の強運を噛み締めていた。セレナに抱きすくめられながら。
「あぁもうユーキちゃんったら！　ちょっとかなり気付くの遅いけど賢いんだから！　恥ずかしながらユーキちゃん見失っちゃって、でも絶対酒場には来ると思ってたの！　三日ここで私待ってたけど、待ってた甲斐があったわ！」
　酒場に足を踏み入れた有希は、騎士の格好ではなく、紺色のワンピースを纏っていたセレナを見つけた。そして飛ぶように捕まえられ、抱きすくめられた。
「ユーキちゃんが王都に向かった後、危ないからってヴィーゴが私を向かわせたの。なのにユーキちゃんったら鬼気迫りすぎてて早いんだもの。追いつけなかったわ！　そもそも、ヴィーゴが私を引き止めすぎなのよね！」
「せ、セレナ！　わかったから、痛い！　痛いから！」
　ぎゅうぎゅうと有希を締め付ける腕は力強く、背骨がミシミシと音を立てているような気がする。
　腕の力が緩められると、ふうと息を吐いた。
「それで、どう？　ユーキちゃんの騎士には会えた？」
　有希の頭を撫でながら、小首をかしげて問い掛けるセレナに、有希は首を振る。
「ルカが今なにをしているのか、いろいろ違う事を聞いて困ってたところ」
　笑ってみせる有希を慈悲の目で見つめる。
「そう」
「うん」

きっと笑顔が引きつっていたのを、セレナは分かっていただろう。それなのに言及しないセレナの心遣いがありがたい。
「とりあえず、そろそろ十日経ってしまうわ。一端フォルに戻りましょう？」
「……わかった」
一端戻る。その言葉はまた王都にやってくるという意味だ。有希はぎゅっと拳を握り締める。
戻るのも早いほうが良い。早く戻ろうとセレナをせっつくと、セレナが微笑む。
「そういうせっかちな所、好きよ。――でもね、あのアドルンド騎士も一緒に来たのよ。何かやる事があるみたいで。戻ってきたら早速行きましょ？」
それよりも。そう言ってセレナは有希の鼻頭をつまむ。
「ご飯、ちゃんと食べてる？　顔色がすっごく悪いわよ」
そう言うと、問答無用で有希の前にメニューを広げた。

二人用のテーブルに乗り切らない量の料理を注文したセレナは、せっつくように有希に勧めた。
そしてその食事――ほとんどセレナが食べたのだが、終わる頃に赤銅色の髪をたなびかせたラッドが酒場へやってきた。
「あら。昼前には戻るって言っておきながら、随分早かったわねぇ」
「お目当ての人物に中々会えなくてね、捕まえたと思ったら酷く機嫌が悪くて面倒だったんだよ」
わざとらしく肩をすくめて見せるラッドは、有希を見遣ると真摯な顔つきになる。
「ところで、ちょっと彼女に聞きたい事があるんだけど」
「え、な、なに？」
有希の事をいわれ、ぎくりとすくむ。
ラッドとは、先日の出来事以来話をしていなかった。
完全に軽蔑されてしまった事に困惑して、なにをどう弁明した

らいいのかわからなかったのだ。
「話せばいいじゃない？」
「姉さんにはどうかご遠慮願いたい内容なんだけど」
「あら、ユーキちゃんの身元を引き受けているのは私達なんだけど」
「拒否するのならばこちらにも考えがありますよ。かのリビドムの狂犬、セレナ・ビューテントが王都に侵入していると、オレの口が滑ってしまうかもしれないですから」
微笑みながら言い合いをする二人をおろおろと見ていると、セレナが両手を上げる。
「ハイハイ、降参降参。まったく食えない男ね」
そのまま立ち上がり、有希に笑みかける。
「ユーキちゃん、私すぐ外で待ってるから、終わったら出てきて？何か変な事されたら大声で叫ぶのよ。続きは私がしてあげるから」
「っセレナ！」
けらけらと笑うセレナはそのまま酒場から出てしまった。
残されたのは、空になった大量の皿と、有希とラッドと、少し重たい空気。
どことなく気まずくて、視線をうろうろと動かしていると、セレナが座っていた向かいの席にラッドが腰を下ろす。
「そう困らないでよ。オレが困る」
「あ、ごめん……」
「謝られるのも困るなぁ。オレが謝ろうとしてたのに」
「え？」
驚いて向かいのラッドを見ると、少し自嘲気味に笑んでいる。
「先日はすまなかった。ちょっと虫の居所が悪くて。酷い事を言った」
その謝罪の言葉に首を振る。
「多分、そう言われても仕方なかったかもしれないし」
あのときのことを思い出すとチクリと胸は痛むが、笑んで見せる。

「いや、本当に申し訳ない。婚約者が亡くなったもので、オレも取り乱していた。心にも無い事を言ってしまった」
婚約者を亡くした。目の前で微笑む青年は今そう言った。
十日熱でだろうか。それとも戦火に巻き込まれたのだろうか。恋人を亡くしたばかりで、悲しみに暮れることもできずに気丈にしているラッドを見ると、とても切ない。
「え、と……」
こういうとき、どう言葉を掛けたらいいのだろうか。
本当に近しい人を亡くした事のない有希が何を言っても陳腐になってしまわないだろうか。気遣ってしまうことの方が失礼なんじゃないだろうか。
色々と思い悩んでいると、向かいから噴出す音が聞こえた。驚いて顔を上げると、ラッドがくつくつと笑っていた。
「まさか本当に信じるとは」
「――っだましたの！？」
人の生死を冗談に使うだなんて信じられない。鼻白むと、ラッドは軽く手を振った。
「いや、こういうのは相手の情を誘うのに有効なんだよ」
特に男女の仲ではね。そう言い添える。
「……信じられない」
「そう。オレの事なんて信じない方が良い」
中低音に甘い声は良く通り、ざわざわと話し声が絶えない酒場でもしっかりと耳に入る。
「何が言いたいの？」
冗談のようなことばかり言って、本当は何を考えていて、何を言いたいのかわからない。わからなくてやきもきしてしまう。
「彼女もオレを信じられない。オレも彼女を信じられない。お互い様だろう？」
別にそういう意味で言ったんじゃない。口を開きかけたが、ラッドの目が笑っていなかったので大人しく黙る。

「単刀直入に言う。――アンタとルカート様の関係を知りたい」
「え？」
　いつもよりも険しい口調に、思わずたじろぐ。
「アンタ、レーベントに会っただろう」
　レーベント。聞きなれない名前に眉をひそめたが、ラッドがアイン・レーベントだと告げて合点がいった。
「アインさんなら……会ったけど」
　もっとも、アインは有希を有希と認めてはくれなかったけれど。
「レーベントはアンタがリベラート兄妹の話をしたと取り乱していた。そして極秘裏になっているルカート様の主人の名も知っている」
　目の前のラッドは、有希の知っていることを知ろうとしている。そして知った後、有希に対する評価を下そうとしているのだ。
（信じてもらいたい。あたしの言う事……あたしの事）
　ラッドに話しても良いものなのだろうか。それを推し量る材料は有希には何も無い。
　それにラッドは、ルカの部下だと言っていたではないか。――しかし、間者かもしれないという思いは拭えない。あのオルガの寄越した人間なのかもしれないという思いがよぎる。
（でも、アインさんが話をするくらいなんだから、きっと言っても大丈夫）
　有希は小さく深呼吸をし、まっすぐ目の前のラッドを見据える。
「信じてもらえないかもしれないけど、あたしがルカの主人よ」
　ラッドはぴくりとも動かない。有希の行動一つとして見落とさないようにするかのように、じっと見つめられる。
「契約して、すぐフォルに向かった。フォル城を落としてイシスを捕まえた。それからケーレに行って、ダンテさんを救出した」
　そこまで言って、口を噤む。
　これも言って言いのだろうかと。目の前のラッドは、何を考えているのだろうと。
　いつのまにか右手が胸元を掴んでいた。

「……それから、アドルンドに戻る途中で、オルガに捕まったの」
ラッドの眉がぴくりと動く。
「あたしは伝説の魔女として処刑される事になった。アインさんも捕まって、処刑場に連れ出されてた」
思い出すだけで胸が苦しくなる。あの民衆の目が、むせるような花の匂いが、今も脳髄にこびりついている。
「そこで、あたしとアインさんは魔女に助けられた。――そしてあたしは、魔女に姿を変えられた。ゲームなんだって。あたしがルカに会えれば元の姿に戻るって」
後はただ、アドルンドにやってきただけだ。そう告げると、ラッドは鼻で笑った。
「……創作話の粋を出ないな。しかしそれが事実だとしたらたいした話だ」
「――っ創作話なんかじゃない！」
全部本当の事だ。創作話であればどれほど良かっただろうかと思うのは有希の方だ。
信じてもらえなかった悔しさと、笑われた悲しさがどっと胸に押し寄せる。
「全部、本当のことなのに……」
「――ルカート様が契約した時、オレもあの場に居たんだけど。そのときの話をしてくれたなら、信じてやってもいい」
「え？」
「あの場にはメイドも居なければ誰も入る隙間も無かった。それでもその状況を説明できるなら、今の話を本当だと信じよう」
有希は目の前のラッドを見つめる。何なんだろう。言っている事がコロコロと変わって、本当に何を言いたいのかわからない。本当に信じてくれるのか、また鼻で笑ったりするのではないか。
考えたところで何もわからない。
有希は大人しく、そのときの状況を説明するしかなかった。
「あたしは十歳くらいで、紫の瞳で……ぺたんこな赤い靴を履いて

た。ピンクのドレスみたいなワンピースを着て、アインさんに呼ばれて、連れられるまま大きな広間に行った」
あの時は今よりも何もわからなかった。右も左もわからなくて、ただキラキラしている王宮に驚いていた。
思い出すように、瞼を閉じる。その頃の状況が、懐かしく広がる。
「踊り場に着いたら、後ろにあのオルガが居て、ルカも居て。……ルカがあたしの前に跪いた。あとはルカに言われるままに剣を取って」
「そこまでで良い」
閉じていた瞳をぱっと開けてラッドを見る。初めて会った時のように、優しい顔をしていた。
「レーベントも、ちゃんと聞けば良いのになぁ……まぁ、リベラートの話をされたなら仕方ないか」
思わずほっと息を吐く。信じてくれたのかと思うと嬉しくて嬉しくてたまらなかった。
「それにしても、大変な目にあわれましたね」
柔らかく微笑むラッドの、その美しい笑顔に有希はどきりとする。
「え？　あ、うん……」
「最後にもう一つだけ、確認をさせてください」
「なに？」
笑んだ顔のまま、ラッドは続ける。
「オルガ―様について、どう思いますか？」
有希はその言葉の唐突さに面食らったが、やがて苦虫を潰したような顔で言う。
「狂人よ」
その言葉に、ラッドは笑った。

86

フォルに戻ってからしばらく。
またもとのようにフォル城を駆け回る生活が始まった。
城下に下ると、以前のような姿はどこにも見当たらず、人がいつでも出歩くようになった。
魔女の時間と呼ばれていた夜も、昼間ほどではないが、人の行き来が時折見える。
――フォルは、確実に活気を取り戻している。
有希は洗濯場で濡れた服を数人の女と踏んでいた。
快復した人達が、城で手伝いをしてくれるようになったのだ。
そのお陰で、有希の仕事量も格段に減り、時折暇を渡されるほどになっていた。
「……だけどさぁ、セレナ」
「なぁに？」
洗濯場の縁に腰掛け、有希達がぱしゃぱしゃと水音を立てているのを見ているだけのセレナに、有希は顔も見ずに言う。
「患者さんの数、減っていない気がするんだけど……っていうよりも、増えた気がするんだけど、気のせいかなぁ」
人数が増え、一人頭の仕事量は減ったが、仕事の総量は増えたような気がしてならないのだ。
「そうねぇ、確かにフォル自体に人が増えているわねぇ」
「フォル自体に？　それは、フォルから逃げた人たちが帰ってきてるって事？」
それなら良い事だね。そう言った有希に、セレナは複雑そうな顔を浮かべる。
「それもまぁ一理あるかもしれないけど、大きな理由は違うと思う

わ」
　はたと有希は足を止める。
「どういうこと？」
　セレナが困ったようにため息をついた。
「どういうこともこういうことも、ユーキちゃん気付かないの？　最近ここに入ってくる人たちのけ・い・こ・う・に」
　スタッカートを聞かせて主張するセレナに、有希は思いつかないと首をひねる。
　セレナはそんな有希を見て、ハァとため息を吐く。
「そこがユーキちゃんの良いところでもあるんだけどねぇ……勘ぐることをしないっていうか、ありのままを受け止めちゃうっていうか……――いーい？　最近ここに入ってくる人たちは、貴族が多いの！　最近一人部屋が良いなんて贅沢言う人間増えたでしょ！　あれ全部貴族なのよ」
「貴族？」
「そう！　ユーキちゃんは知らないのかも知れないけど、王宮に居る人間とか、政務に関わってる人間とか、まぁもろもろと地位のある人たちのお家のことよ」
「そうなんだ……」
　どこの世界も、貴族のポジションというものは、あらかた変わらないのかと内心で思う。
「きっと、どこかからの噂で、フォル城に居座っている医者の腕が良いとか聞きつけて、貴族の十日熱患者が来てるんでしょうよ」
「へぇ、そうなんだ？　そんなに噂って簡単に広まるものなの？」
　わかってないわね。そう言ってびしりと有希を指差す。
「貴族なんてのはね、暇なのよヒ・マ！　民みたいに食事で困る事もないし寝床で困る事もない。ただ毎日お勉強をして、噂話を肴にお茶会開いてるんだから！」
　すっぱりと言い切るセレナに、へぇと間の抜けた声が出る。
「まぁ、お陰様で？　貴族たちからの食物の寄付で大分潤ってるけ

ど？　――それでもやっぱり、おかしいわ。こんな突然……」
眉をひそめるセレナを見て、有希は布で足を拭いて、セレナの横に座る。
「おかしいって何が？」
セレナは黙っている。
「セレナ？」
覗きこむように見つめると、セレナが視線だけを宙に動かし、そしてぱっと有希に向き直り、ニッコリと笑った。
「こんな所でできる会話でもないわね。ユーキちゃんこのあと予定ある？　お茶でもしましょっか。ユーキちゃん疲れてるみたいで顔色悪いわよ」
まだまだ仕事あるんでしょう、ちょっと休憩。と言って、セレナは優雅に立ち上がった。
「え、あ、うん」
セレナに腕を引かれ、有希は洗濯場を後にした。

「どういうことなのか説明してもらおうかしら」
ラッドの私室の一つ――もっとも、ヴィーゴとセレナの控え室兼茶のみ場になっている場所で、セレナ、ヴィーゴ、有希、そしてラッドが紅茶を前に椅子に座っている。
ヴィーゴの隣に座ったラッドは、しれっとした顔で向かいのセレナに答える。
「突然呼び出されて突然どういうことかと問われても、オレにはさっぱり」
肩をすくめて見せるラッドに、セレナは言う。
「聞きたい事はいくつかあるの。――まず、最近は貴族達の寄付で食物が潤ったけれど、その前までどうしていたの？」
「それは、ウチから援助してましたよ」

聞けば、メンデ家はアドルンドでも大きな権力を貴族らしく、メンデ家の備蓄を割いたと言った。
有希は驚いて斜向かいに座っているラッドを凝視してしまう。セレナとヴィーゴは知っていたのだろうか、特に驚いているような感じがしなかった。
セレナは紅茶を一口飲んで、カップをソーサーに置いてたっぷり時間を置いて顔を上げる。
「……最近、アドルンド貴族の患者がかなり多いわ。フォルはまだ不安定でそんなに貴族なんて居ないはず。なら、何故？」
「さぁ。どこかで噂でも聞きつけたんじゃないですか？」
「噂ねぇ。噂だとしたら、誰が発信源かわかるかしら？」
「さぁ。人の口を塞ぐことはできないから、どこかのお喋りな貴族なんじゃないかな？」
セレナは大げさにため息を吐く。
「……質問を変えるわ。貴方、先日アドルンド王都に行った時、一体何をしたの？　私の記憶が正しければ、その後から貴族が増えたわ」
「先日は、家に行って備蓄を割いてもらえるよう交渉に行きましたよ」
部屋中に芳しい匂いが広がる。
紅茶はもう湯気を立てておらず、ただその場に香りだけ振りまいている。
「――貴方、私達をフォルに足止めさせたいの？」
ラッドは黙ったまま微笑みを称えている。
「何か言ったらどう？」
ひやりとしたものが右側から感じる。セレナが何かを発しているのだろうか。底冷えのするような薄ら寒い空気に、有希は何もできない。
「答える義務はオレにはありませんよ」
セレナの視線の先に居るラッドが、更にセレナを逆撫でするよ

うな言葉を発する。
「貴方達は、望み通りにこの城に入って十日熱の治療をしている」
　困ったものだと肩をすくめる仕草をする。
「亡国リビドムの狂犬に、その飼い主……そもそも、このアドルンドに何をしに来たんだか。それを聞かないで居てやっているというのに、よく言えたものだなぁ」
　独り言のように呟かれる言葉に、ヴィーゴの目が見開かれる。
「お前……」
「知ってますよ。一応貴族で王子の側杖ですからね。歴代の軍人や有名人は一通り押さえてある」
「知っていたのか……。なら何故黙っていた」
「何故？　逆に聞きたいね。何をしに来たのか知らないが、この城の十日熱の者を無償で治療してくれるというのを、どうしてそのように野暮なことを聞いて反故になったらどうしてくれる」
　ラッドはちらりと有希を見る。視線に気付いた有希と目が合う。そして、ラッドが少しだけ微笑んだように見えた。
「貴方達に事情があるように、こちらにだって事情がある。――そうだろう？」
（事情……）
　それは、言外にルカのことを言っているのだろうか。問うようにラッドを見ても、ラッドは微笑んだまま相好を崩さない。
「事情……な。ならばこちらにアドルンドの貴族が流れ込んでいるのも、そちらの事情の都合でなんだな？」
「……」
　ヴィーゴが顎を撫ぜる。何かを考えているのだろう。視線がテーブルの中心から動かない。
　ラッドが飄々とテーブルの中央にある砂糖入れに手を伸ばす。そこから角砂糖を二つ紅茶に落とす。カチャカチャとスプーンとカップがぶつかる音が響く。
　冷気を放っていたセレナも大人しく紅茶をすすり、ちらちらヴ

ィーゴを見ている。ヴィーゴは顎を撫でていた手を放し、口を開く。
「事情ってのは、ルカート王子だろう」
「え！？」
　思わず有希の口からこぼれる。
（どうしてルカの事を言うの？　だって二人はルカが王子だって知らないはずだし）
「そうだとしたらどうだというんです？」
「フォルの事もこの件も、全てお前さんの一存で動いているように見える。ではそれは何故か。ルカート王子の指示を仰げないからだろう。ということは、お前さんもルカート王子には接触できていないという事だ」
「え？　何？　どうして？　どういうこと？」
　ヴィーゴの言っている言葉が有希には意味がわからない。
「つまり、ユーキちゃんの探しているルカート王子は、側杖である彼すらも接触できないような状態に居る……そういう事でしょ？　たとえ眠りっぱなしだとしても、顔を見る事くらいはできると思うんだけど、そういう風でもない」
　睨むようにセレナがラッドを見ている。
「それで。彼が私達を危険分子だと見て此処に足止めさせようとしているのか、それとも違う事を考えているのか……それを聞きたいのよ」
　そう有希に言うと、またラッドに視線を戻す。つられて有希もラッドを見る。
　三人からの視線にうんざりしたかのように、ラッドは肩をすくめた。
「なんなんだよアンタら。そっちにはそっちの考えがある。オレにもオレの考えがある。オレの考えがそっちに不利益だとしたら何だっていうんだ？　どうしようもないだろ。イチイチそんなにつっかかってたら、心配のしすぎでハゲるよ？」
「そうだな」

そんなラッドの言葉に、ヴィーゴがぴしゃりと反論する。
「しかしそれは、どちらかに不利益が生じる場合だな。――もしこちらとそちらの意見が合致するのであれば協力したほうが良いと、俺はそう言いたいんだ」
「はぁ？　オレのやりたいこととアンタらの」
「俺達……否、まずこのお嬢ちゃんを、ルカート王子に面会させたい。その為に、何とかしてルカート王子を目覚めさせたい」
その言葉に、ラッドの目がきらりと光る。
（あたしを……ルカに？）
何故、知っているのだろうか。そんな疑問が頭に浮かぶ。唐突のことで驚いて、穴が空くほどにヴィーゴを見つめていると、それに気付いたのかセレナが有希の肩を抱いてぼそりと耳打ちする。
「ユーキちゃんの騎士がルカート王子だっていうのは、リフェノーティスに聞いたのよ」
「え、リフェが？」
「あなたを預かるときに、少しだけ事情を聞かせてもらったの」
「そうなんだ」
自分の知らないところでそんな会話が行われているなんて思っていなかったので、納得させるように何度か頷く。
（そっか、そうだよね。普通、そうだよね）
そんなこと微塵も気付かなかったとヴィーゴ達を見遣ると、ラッドが有希を見ていた。
「え、な、何？」
「……聞きたいんだけど、この人たちは何？」
「え？　何って言われても……」
そもそも、ラッドの真意がつかめない。
「セレナとヴィーゴさんは、あたしをリビドムからアドルンドに連れてきてくれた人……」
「何のために？」
「え、それは、リビドムを回って十日熱を治して歩いて、アドルン

ドにも……」
「アドルンドにも？　治して歩いているという割には、フォルから出ていないじゃないか」
ふと、考えて有希の思考は停止する。言われてみればそうである。
そもそも、ヴィーゴはフォルで治療することにも積極的ではなかった。
「それなら、リビドムにずっといた方が良かっただろう。二人ともリビドムなんだから」
アドルンドに行く事情があると言っていたが、有希はその内容を聞いた覚えが無い。
ただ自分の我儘ばかり重ねていただけだった。
改めて、自分は何も知らないのだと恥じ入りたい気分を噛み締めつつ、セレナとヴィーゴを見る。
ヴィーゴは顎をひと撫でして、そしてため息をついた。
「年を取ると、ただの話し合いも胎の探りあいで一行に進まなくなるな」
「それは、同感です」
嫌味の笑顔を浮かべ、ラッドは肩をすくめる。
「なら、手っ取り早く結論を言おう。リビドムはルカート王子の力を必要としている。彼に面会したい」
そしてちらりと有希を見る。
「彼女は――ルカート王子の契約主だ」
ラッドは無表情で有希を見た。
「えぇ、知ってます」
「あらやっぱり」
さらりと言うセレナを見遣ったラッドは、もう一度有希に視線を戻す。
「ご存知でしたか？」
「え？」

「この者達が、ルカート王子との面会を求めていた事を、知ってらっしゃいましたか？」
「し、知らなかった」
ぶるぶると首を振る。
何故、なんのために。そんな疑問がふつふつと湧く。
（ヴィーゴさんとセレナって、ルカと何か関係があるの？）
問うように二人の顔を見ていると、有希の気持ちを代弁するかのようにラッドが口を開いた。
「彼女も知らなかったということなので、理由を」
言外に、言えと強い口調で言う。ラッドが纏っている空気は、先ほどまでの軽やかで華やかなものではなく、どこか重くて硬い雰囲気になっている。
「言えば、俺達に協力してくれるか？」
「内容にもよる」
「取り付く島もないな」
「それが仕事ですから」
ヴィーゴが大きくため息をついた。
「まぁいい、もし協力してもらう事になったらお前さんも味方になってくれるかもしれんからな」
「まるで協力してもらうのが当然とでも言うような口ぶりですね」
疲れたとでも言うように肩をぐるぐると回し、そしてヴィーゴは言った。
「マルキーとアドルンドの戦争はもうすぐ激化する。――そこに乗じて、リビドムは独立をする。そして、ルカート王子には後援をしてもらう。これは、彼がガリアン・マノタント殿を救出した時に、ガリアン殿がルカート王子から直接聞いている」
「書類は？」
「ない。口約束の域を出ないが、面会した際にもう一度伺う」
「確実性があまりにもないね」
「あぁ」

ラッドは黙り込む。そしてヴィーゴも、セレナも黙り込む。
その場の空気に疎外感を感じている有希は、一人うんうんと考え込んでいた。
（ルカが、リビドムの独立を後援する……）
それはつまり、リビドムが戦争を起こす事を肯定しているということだ。
（なんで）
争いに争いが重なることは、悲劇以外のなにものでもないだろうに。
（何が、どうなってるの？）
「今、こうしてフォル城で治療をしているが、それも時が来たら止める」
「……上の人間を引き摺り出すためですか。それともオレを脅してるんですか？」
「どちらも否定はせん」
そのヴィーゴの言葉に、ラッドは笑い出した。
「ははは――なんだ。考える事は同じじゃないか」
ぷつんと切れたように明るくなったラッドは、リラックスするように足を組む。
「いや、オレ達臣下もね、ルカ様に会いたいんですよ。けれど殿下……もとい王妃サマが何故か面会を断るんだ。『ルカートは私達の手伝いをしております』なんてそんな言葉、信じられるはずないだろう」
ラッドの眉がひそめられる。
「それに最近、ルカ様の容態が芳しくないって聞いてね」
その言葉に反応して、有希は椅子を後方に倒してしまう勢いで立ち上がる。椅子の倒れる音が部屋に響く。
ラッドは有希をちらりと見て、そしてふと微笑む。
「そこに彼女が現れた。話は半信半疑だったが、アンタ達は確実にフォルの人間を救ってくれた。そしてオレは考えた」

「……フォル城での事が有名になれば、王宮が手を伸ばす、と？」
ヴィーゴの言葉に、ラッドは笑む。
「その通り」
ラッドは有希を見て、微笑む。綺麗な顔が甘やかすように微笑んでいる。その笑みに、有希は何故だか泣きそうになる。
「ユーキ様、貴方の活躍はもう、貴族間は勿論、王宮にも届いています」
「……ぇ？」
「どうやら考える事は似たようなものだな。結果的にはフォル城に逗留することになったが、かえって好都合だったな」
「え、何？　もしかしてヴィーゴ、そのためにユーキちゃんばっかり働かせてた訳ぇ！？」
信じられない。そう叫ぶセレナを傍目に、ヴィーゴは聞こえないフリを決め込んでいるようで、すっかり冷めてしまった紅茶をすすっている。
「ねぇ！　聞こえてるの？　ヴィーゴ！」
「ユーキ様、もう少しでルカ様に会えますから、もうしばしお待ちくださいね」
「えっあ、は、はい」
唐突に口調が変わっているラッドに、有希は戸惑いながら返事を返す。
「さて、ユーキ様の活躍はもう民衆には知れ渡った。もうユーキ様を雑務で使うのは止めていただく。ユーキ様は患者の看病をして引き続きその力を発揮して頂く。それ以外は休んでもらいます。――異論は？」
ラッドがヴィーゴに問う。
「あぁ、それがいいだろう」
「ちょっとヴィーゴ、聞こえてるんじゃない！」
「ということで、ユーキ様にはきちんとした部屋を用意させますので、しばしお待ちくださいね」

ニッコリと笑うラッドに、戸惑いつつ笑顔を返す。
「え、あ……」
「それよりもアンタ！」
ヴィーゴの頭を掴んでいたセレナは、ぐるんとラッドに視線を戻し、息巻く。
「なんで仕事速いのよ。だってユーキちゃんがルカ―ト王子の主人だって知ったのこの間でしょ？　それからアドルンド行った様子も無いし、どうやって貴族達に吹き込んだのよ」
ラッドはため息をつく。その答えはナンセンスだとでも言うように、吐くように言葉を紡ぐ。
「まぁ、それはイロイロとね。それよりいいんですか？　主人の頭締め付けて。アナタ、ヴィーゴさんの剣であり、盾であり、犬なんでしょ？」
「？」
意味がわからずきょとんとしていると、セレナの顔が真赤に燃える。
「ちょっ――！　あぁアンタ！　聞いてたの！？」
「聞かれるような危険を孕んでいるところで、そんな話をするのが悪いんじゃないですか？」
「……チョット待って。なら、アンタ最初からほっとんど全部知ってたって事ぉ？」
「さて。どこから聞いていたかなんて野暮な事、黙っておくのが紳士ってものだろう」
「せ、セレナ？」
セレナは頭を抱えて叫んだ。
「あんたのドコが紳士なのよ！　あぁもう！　食えない男ね！」
「食えない男で結構。ユーキ様、もう間もなくルカ様に会えますから。焦らず、気落ちしないでください。会ったらあの顔にビンタするくらいの意気込みで居るんですよ」
「う、うん……」

頷くと、ラッドは満足気に笑んで、部屋を出て行った。

濃霧の中にずっと居た気がする。

何度も会いたいと思っていても、会う方法すら見当もつかない。

飛び交っている情報も何が本当で嘘だかわからなかった。

ずっとずっと、出口のない暗闇を歩いているような、砂場の中で、小さな砂金粒を探すような。

途方も無いような事だと思っていた。

――なのに突然、目の前が明るく開けてしまった。

（あたしの知らないところで、みんな動いている）

置いてけぼりな気分になるが、それだけ有希は何も知らないということなのだろう。

（でも、そのお陰であたしはこうやって……）

「ルカに会える」

呟いた途端、考えないようにしていたルカの姿が脳裏に浮かぶ。

見上げつづけていると首が痛くなりそうに高い身長。

皮肉を言いたいくらいに綺麗な髪と瞳。作り物のように整った顔。

そして、繋いだときにいつでもひんやりと冷たい、てのひら。

（ルカ、ルカ）

ぎゅっと手を握り締める。

大きな手と繋いだ自分の手。契約の証――自分がこの世界に居てもいいんだと思えた唯一の証の指輪。

我儘ばかり言って、勝手なことばかりしたから、指輪を失い、ルカとも離れ離れになってしまった。

胸がきゅうと痛み、じわりと涙が浮かぶ。

頭の奥で、誰かがくすくすと笑っているような気がした。

87

もうすぐルカに会える。

そう言われてからまた数日が経った。

あれから、有希の生活は一変した。

ラッドの家――メンデ家からやってきたというメイドが、有希付きとして派遣されてきて、起床から就寝まで何から何まで世話をするようになった。

起床すると着替えを手伝われ、食事の用意、片付けをされる。

部屋から出ないように言われてしまっている有希は、投薬の為に呼ばれるまで部屋で待機。フォル城の部屋を廻って戻ると、また部屋から出ないように言われ、そうして一日が終わる。

唐突に暇を渡されてしまった事が原因なのか、それとも体が訴える不調に知らない振りを通していたからなのか、有希はよく眠るようになっていた。

部屋を出ている時はてきぱきと動くが、部屋でじっとして居るといつの間にか眠ってしまうので、ほとんどベッドで寝て過ごしていた。

セレナはそんな有希を心配してか、単に暇なのか、よく有希の部屋に顔を出しては二人で紅茶を飲んで雑談を交わした。

――そして、雑談の途中で眠ってしまう事も度々あった。

昼過ぎに唯一の外出である投薬を終え、部屋に戻るとまたベッドでとろとろと眠っていた。

衣擦れの音が聞こえ、有希はまどろみの中から引き上げられる。

「あ、起こしてしまいましたか」

ラッドの声が聞こえる。すまなさそうなその中低音に、寝起き

で若干低くなった声で答える。
「ううん、眠るつもりなかったんだけどな……」
（また眠っちゃった）
のろのろと動きの遅い思考は、また有希をぼんやりとした眠りに誘う。
目を何度か瞬かせて、頭をはっきりさせるように頭をふるふると振る。
「これ以上寝てると、夜眠れなくなるし」
本当はそんな事ないのだが、今までの生活習慣からか言葉が口から滑り出る。
「まだ眠そうですよ。――何かすっきりするような物をもってきましょう」
そう言うと、ラッドは部屋の入り口に立っていたメイドを振り仰ぐ。メイドは一つ頷くと、部屋を出て行く。
「……ありがとう」
有希の思いとは裏腹に、落ちそうな瞼を必死に持ち上げ、笑みかける。
このままではまた眠ってしまうと思い、有希は毛布を捲り、ベッドから降りる。
意図を察知したのか、ラッドがテーブルに向かい、椅子を引き有希を待った。
「ありがとう」
ラッドの厚意に甘え、有希は腰を降ろす。
まだ回転の鈍い頭が冴えるのをじっと座りながら待つ。
「ラッドも座りなよ」
有希の傍に控えていたラッドに声を掛けると、ラッドは苦笑する。
「勝手に座っていいのに……」
ラッドは、先日以来、とても他人行儀に振舞うようになった。
有希が『ラッドさん』と呼ぶのを呼び捨てにさせ、軽口も言わなく

なり、常に敬語を使うようになった。やめてくれと何度言っても、有希を様付けで呼ぶ。
「ではお言葉に甘えて」
ラッドもまた、有希の過ごす部屋によく顔を出すようになっていた。
何故かと問うたら、貴方は無防備すぎます。と逆にたしなめられてしまった。

『彼等もそうですが、ユーキ様も危機感がなさすぎます』
『危機感って言ったって……』
『いいですか？　貴方はオルガー様から目を付けられている。そして今は偽装していて大丈夫かもしれませんが、マルキーからも狙われているんでしょう』
『でも、マルキーではもう処刑されたことに……』
『甘いです。マルキーで処刑された事になったということは、誰かが真実を隠蔽しているんです。――真実を知っている人間は確実に居る。そしてまた、他に真実を知る物を排除しようとする。そういうものなんです』
言葉に詰まって俯く。返す言葉が見つからない。
『貴方はもっと、ご自身の重要性を考えるべきです』
『あたしの、重要性？』

そんなやり取りを思い出して、自嘲した。そんなものあるのだろうか、と。
十日熱患者を看病すること。――医者でもない有希が必死に頑張ろうと、代わりはいくらでもいる。
ルカの主人。――それこそ、有希が死んでしまえば、また別の主人が現れる。
（何も、ないじゃん）
現に今、有希はほとんど何もせずに眠ってばかりいる。

あれほど忙しく動き回り、皆に指示を仰がれて一生懸命に応えていたのに。
（本当に、なにもない）
「あたしの重要性ってなんだろう」
自問の言葉がぽろりとこぼれる。向かいに座っていたラッドが訝しげに有希を見る。
「今までそんな事考えた事もなかった。日本に居たときも」
ただただ毎日を過ごしていた。
「大学に行って、勉強して、就活して就職して、いつか社会人になって働くんだと思ってた」
時折友達と遊んで、出かけたり。日常の中に非日常がぽつぽつとあればそれで満足だった。
自分自身の存在価値なんて、考えた事も無かった。
（考えた事がないってことは、考える必要がなかったんだよね）
それがどんなに幸せな事だったろうと、今なら思う。
「何を仰られてるんですか？」
「え？」
（あ）
向かいにラッドが座ってたことを思い出す。またぼんやりとしていたと、自分をしかりつける。
ラッドの灰色の目が、有希をじっと見つめている。
「ダイガクやらニホンやらシュウカツやら、オレにはわかりませんけど。……ユーキ様、自分の重要性わかってないんですか？」
「だから、そんなもの……ないんだってば」
何でそんな事を言うのだろう。ただでさえ打ちのめされた気分なのに、それ以上抉るような事を言うんだと、ラッドをねめつける。
ラッドはそんな有希を見つめ、そして歎息をついた。
「貴方が居なければ、きっと今頃フォルは十日熱で壊滅していましたよ」
「そんなお世辞言わないでいいよ。きっとラッドなら何とかしたで

しょう？」
　ぎすぎすと心が軋む。そんな事言いたくないのに、口からは嫌味が出て行く。そんな有希に気付いているのかいないのか、ラッドは苦笑して言葉を続ける。
「まぁ、何らかの対策は練るでしょうけどね。それでもオレには患者を救えない」
「そんなの、あたしだってできないよ。……あたしにできるのは、せいぜい薬作ったり、声掛けしたり、洗い物するくらいで」
　言えば言うほど気が滅入ってゆく。今まで考えもしなかったのに、自分のしてきたことの意味を、それがどれだけのものかと、考えてしまう。
（そういう問題でもないのに）
「――ユーキ様、もしかして知らないんですか？」
「……何を？」
　どんよりと思い気持ちでラッドを見る。ラッドはそんな有希の顔に驚いたのか何なのか、驚いたように眉を上げる。
「あぁー。詳しい事を言っていないだけなのかと思ったんですけど、そっか、知らないんですか」
「だから何を？」
　イライラと答えると、ラッドは笑いながら立ち上がる。
「ご自身で気付かないっていうのも、まぁ凄いんですけど」
　見ていてください。そう言って左の袖を捲くった。
　何をするのかと問うより早く、ラッドはどこから取り出したのか、右手に短剣を持っている。
「え」
　何かを言う言葉を発する暇すら与えないように、ラッドは短剣で左腕を切りつけた。

88

それは一瞬のことだった。有希はラッドの左腕に現れた十五センチほどの傷口から鮮血が涌き出てくるのを目撃してしまった。
霞がかった思考が一気に晴れ、突然の出来事にパニックを起こす。
「あ、な、ななに、なに？」
「落ち着いてください」
ラッドは言うと短剣を仕舞う。その間も腕からはダラダラと血が流れていく。
「落ち着いてなんていられないよ！　っていうかなんでそんな平然としてるの！　痛くないの！？」
「痛いですよ」
平然とした顔つきで、腕を有希に差し出す。
「え？　え？」
テーブルに血がぽたぽたと落ちていく腕を直視できず、おろおろとラッドに懇願する。
「なに？　どうしたらいいの？」
「とりあえず、止血してもらえますか？」
「わ、わかった！」
派手に音を立てて椅子から立ち、ベッドシーツをずるずると引き抜く。シーツの端を数度畳み、ラッドの腕に押し付ける。
「な、なんでこんな事？」
おろおろと見上げると、ラッドはため息を吐いた。
「ユーキ様、十日熱の患者と接するとき、気を付けてることはなんですか？」
「え？」

唐突に問われて、ふと考え込む。まわらない頭がからからと音をたてているような気がする。
「……早く良くなりますように。かな」
「ではオレにもそう思ってください」
「な！」
ニッコリと微笑むラッドに面食らう。
「じ、自分で切ったんじゃない！」
「いいから思ってくださいよ。これでも結構痛いんですよ」
「そ、そうだよね……大丈夫？」
ぎゅっと腕に押し付けたシーツを見ると、じんわりと血が滲み、ゆっくりと赤色が侵食していっている。
「ホラ、早くしてください」
「う、うん……」
急かされるまま、心の中で呟く。
（早く良くなりますように……）
見ているだけで痛々しいその赤に、有希は眉根をひそめる。
（って、あたしがそんな風に祈ったって、変わるわけないんだろうけど）
「でも、早く血、止まるといいね」
励ますように笑ってラッドを見上げると、ラッドは驚いた顔つきで自身の左腕を凝視していた。つられるように痛々しい腕に視線を落とす。
「……なにこれ」
ラッドの左腕――ではなく、自身の手の、シーツと触れ合っている部分がほの白く発光している。
驚いて動けずにいると、ラッドが右腕でシーツを剥ぎ取る。
そして現れた十センチほどの長さのかさぶたが、端からじわじわと治ってゆく。見る間にかさぶたは小さくなってゆく。
「――驚いたな。こんなに早く治るものなのか」
「え、えぇえぇ？」

それからものの十数秒の後には、傷口は跡形も無く消えていた。
「……なに、今の？」
「ご理解いただけましたか？」
間抜けにも開いた口がふさがらず、思考も止まる。
「これが、ユーキ様の力です」
「ち……から？」
呟いて、はっと思い出す。
『いいかい？　有希。もし有希に力が発現したら、人前でみだりに使ったりしないことを約束して』
――力。それは、今の出来事のことを言うのだろうか。
「え？　えぇ？　えええええええ！？」
（何？　いまの何？　え、今のがそうなの？　ねぇ、ねぇ！　パパ！）
いったいいつから。どうして。何で。そんな疑問が頭をぐるぐると廻る。
（え、いつから？）
いつの間にそんな事ができるようになったんだろうと考えていると、大きな手の平が伸びてきて、両手で頬を覆われる。そして、そのままぐいと顔を上向きにされる。
「ご理解いただけましたか？　ご自身の重要性。――それから、この力は体力を消耗するようです。ここのところずっと体調を崩されていたのもそれが原因でしょう。今日も病室を歩いて廻ったのですから、ゆっくり休んで下さい」
「ふぁ、ふぁい」
灰色の瞳が揺れる。
「――貴方が居なければ、ルカ様が目覚めるかもしれないという可能性が一つ潰えるんです。其処のところ、お忘れないようにお願いしますね」
こくこくと頷くと、拘束がほどかれる。
「わかりましたか？　治癒能力を持つ人間なんて、極一部の魔術士

と魔女だけです。それにオレの推測だと、ユーキ様の能力は桁違いです。――たとえば貴方がどこかにさらわれたとしましょう。そこが戦場だったら貴方は死ぬまで使われつづけますよ。そして、敵方からは目障りだからと狙われる。――どちらにしても、最悪です」
「う、うん」
「なので、あまり自分を軽視しないようにしてくださいね」
「わ、わかった」
「まぁ、今の状況もそう変わっていないかもしれないですけどね」
「え？」
　ぽそりと呟いた言葉は、誰に向けての言葉だろうか。
　ラッドは笑む。
「――いえ、当面はオレがお守りするので安心なさってください」
「え、あ、はい」
　ぐるぐると混乱が消えないまま、有希は曖昧に頷いた。ラッドは満足気に笑った。
（あたしの、ちから）
　今でもまだ信じられない。青とも緑とも白ともつかない色に光った自分の手。
（この力があれば、何ができる？）
　ラッドはルカを目覚めさせるのに必要だと言った。
（起こすのに……？）
　リフェノーティスはルカが牢に居ると言った。そして、ラッドはルカが寝ていると言った。
「ねぇラッド、ルカは今どこに居るの？」
「ルカ様は、今はご自身の自室でお休みになっておられます。――もっとも、誰も部屋に入れないんですけどね」
「部屋に、入れない？」
「そう。部屋の管理はすべて王妃様とオルガー様がやられていて、こちらからは手が出せないんですよ。――時折人が入っては、姿勢を変えたりさせているみたいですけどね」

「そうなんだ……」
自分の部屋で寝ている。そのことが有希の気持ちを少しだけ軽くした。
（冷たい牢屋に閉じ込められているわけじゃないんだ）
そしてふと、疑問を思いつく。
「ねぇラッド、ラッドから手を出せないのに、よくルカが部屋で寝てるってわかったね」
「え？　あぁ、まぁ……――使えるものは、なんでも使うのがオレの信条ですから」
そう言うと、ラッドが淫靡に笑う。有希にはその笑顔の意味がわからなかったが、何故か鳥肌が立った。頭の奥でこれ以上突っ込んで聞いてはいけないと警告が出る。
そんな有希に気付いたのか、ラッドは声を上げて笑い、有希の頭を撫でる。
「まぁ、ユーキ様はそんなことをお考えにならなくてよろしいですよ。――近々、朗報が入ると思うので、それまでゆっくりと休んで英気を養ってください」
ラッドは有希が寝ていた――シーツを引き抜いた方とは別のベッドに行き、掛け布団を捲る。
「オレがまた無為に力を使わせてしまったから疲れたでしょう。――どうぞお休みになってください」
優しく笑む姿に首を振り、有希は椅子に座る。
「ううん、大丈夫。これ以上寝ると、本当に夜眠れなくなっちゃいそうだから」
「そうですか。では、オレはそろそろ行きますね」
「うん。――色々、教えてくれてありがとう」
「いえ、ユーキ様のお願いとあらば、このラッドル・メンデ。月でも太陽でもお持ちしましょう」
さらりと言ってのけるその言葉の壮大さに、有希は一瞬面食らう。そしてそれが冗談だと気付くと、噴出して笑った。

「あはは。いいよそんな。太陽も月もいらないよ」
「残念。オレの手腕を見せるいい機会かと思ったんですけど」
ラッドの顔が唐突に神妙に変わる。その変わりように有希はまた面食らい、目をぱちぱちと瞬かせた。
「ではそんなユーキ様にはもう一つ進言しておきます。――あの二人をあまり信頼なさらないほうが良い」
「え？　それって」
誰のこと。そう言おうと口を開く。しかしラッドは有希が口を挟む間も与えず喋る。
「あの二人はユーキ様の力を知っていて黙っていた。……そういう事です」
その言葉にはっとする。そして次いで疑問が湧く。
（……どうして？）
自分の手の平を見る。十歳の姿のそれよりも、少しばかり大きくなった手。
扉の閉まる音が聞こえる。途端にしんと静まり、部屋は静寂に包まれる。
「知ってたの……？」
思い起こしてみると、そういう場面があった気がする。
有希を十日熱に感染させられないと言いながら、患者の面倒を看させていた。
そしていつだったか、血まみれの男に駈け寄った有希に、ヴィーゴは大きな声をあげて制止しなかっただろうか。
はっと思い出す。あの孤児院での出来事。
「……チルカ」
あの時初めて十日熱に出会ったから知らなかったが、リビドムを廻った今ならわかる。疱瘡ができるまで深刻な状況に居た彼女が、あんな短期間で完治するはずが無い。
「あれは、あたしの力？」
誰かが、頭の奥で笑っている。

（気付いてた？　でもいつから？）
フォルで、患者の投薬をすべて有希にさせていたのも、その為なのだろうか。
笑い声は次第に有希の脳髄を引っかくような頭痛と耳鳴りに変わる。
首の後ろがひやりと冷えて、突然頭が重いもののように感じ、ぐらりと前方に揺れる。
『――あの二人をあまり信頼なさらないほうが良い』
（そんなの、できない）
あの二人はいつも有希を気遣ってくれた。いつも有希を優先してくれた。
『――あの二人をあまり信頼なさらないほうが良い』
ラッドの言葉が何度も何度も反響する。
どうして教えてくれなかったのか。
どうして気付いても言ってくれなかったのか。
どうして。どうして。どうして。
考えても尽きることのない疑問に、こめかみがぎりりと痛む。
「あたしは！」
右も左もわからない、ぐらぐらと揺れる中、叫ぶ。
意識を失わないように。自身を失わないように。
（どうしたらいいの。なにを信じたらいいの）
そう問いたい相手は、一体誰なのだろうか。
頭の奥で、誰かが笑っている。

89

なんだかとても、良い匂いがした。

学校帰りによく買い食いした、肉まんやあんまんのような――小麦を蒸したような匂いが鼻腔を刺激する。

すると空腹を忘れていた胃が突然収縮をはじめる。

「……ん」

椅子に座ったまま寝ていた。いつの間にまた意識を失ったのかと自覚する。

とろとろとした眠気は尾を引き、また瞼を下げて眠らせようと有希を誘惑する。

「あら、起こしちゃったかしら」

肩から何かが落ち、ひやりとした空気がやってくる。視界の端で、ブランケットが落ちて椅子に絡まる。

「でも丁度良かったわ。食事持ってきたの」

「……セレナ」

セレナは有希の向かいに座っていた。そして有希と目が合うと、ぷっと吹き出す。

「やだユーキちゃん、おでこに机の後が付いてる」

くすくすと笑うたびに、高いところで括られている薄紫の髪が揺れる。

そんなセレナをぼんやりと見る。

（……なんにもないように）

何事もないように振舞っている。

有希は額を手でさすりながら自嘲の笑みを浮かべる。

（違う、セレナは今までどおりなんだ）

変わってしまったのは有希なのだ。気付いていなかったことに気付いてしまった。

「食事。持ってきたんだけど、ベッドに行って寝る？　それともベッドで食べる？」
心配顔で覗き込むセレナに、ぎこちなく笑いかける。
「どっちにしたってベッドなんだ」
「そう。ユーキちゃんは私と話してても、食事中でも寝ちゃうからね。――ベッドに移動しましょ？」
心配顔で笑みかけるセレナに首を振る。
「寝ないから、ちゃんとここで食べるよ」
「あら、そう？」
そう言うと、セレナはテーブルの上にトレイを載せる。そして蒸したパンを一つ、有希に差し出す。礼を言って受け取り、頬張る。
（信頼……）
ラッドの言葉が未だに頭にこびりついている。
（信頼、しちゃいけないの？）
目の前のセレナは、有希が食事を摂っているのを見ながらニコニコと笑っている。
ここ数ヶ月、ずっとずっと一緒に居た。それなのに。
（どうして黙ってたの？　どうして教えてくれなかったの？）
問うように見つめると、セレナが首を傾げる。
「どうしたのユーキちゃん、あ、もしかして味薄かった？」
有希は小さく首を振る。
（言って、もしあたしをいいように使いたかっただけだって言われたら？）
もしかしたら、知ってしまったがために有希に対する態度が変わるかもしれない。
今のように居られないかもしれない。
突然態度を変えられるかもしれない。
それならば、なにも知らないままで居たかった。
もしも二人が有希を良いように利用していたとしても、それを知らない有希は確かに幸せだった。

（なんであんなこと言うの）
その言葉を発したラッドもまた、有希に対してとても誠実に接してくれた。そんな彼が、慮って言ってくれた。
八つ当たりをしてはいけないとわかっている。有希のために言ってくれたのだ。
自身の身体を張ってまで、有希の能力を気付かせたラッド。彼を信頼していないわけではない。けれども、セレナとヴィーゴも信じたい。
（だって）
有希は蒸しパンを頬張る。大きな塊を飲み込もうとしたが、飲み込みきれず喉につかえて涙目になる。セレナが慌てて水差しを取りに部屋を出た。
――今までのことがすべて、有希の力のため。
有希を大事に扱っていたのも、怪我でもされて使い物にならなくなったら困るから。
勝手に行動して怒ったのも、勝手に動いていなくなったり、力に気付いてしまったりするかもしれないから。
今こうして、目の前で色々気を使ってくれるのも、まだまだ使うつもりだから。
――もしそうなのだとしたら。
（そんなの、たえられない）
目からぽろりと涙がこぼれる。

自分の力に気付いてしまったという事は、幸せなのだろうか。
いっそのこと、知らないまま一生を終えられればよかったのに。
有希は椅子に座ったまま、ぐったりとテーブルに伏した。
「今日のユーキちゃん、なんか鬼気せまってなぁい？」
陶器のぶつかる音、それからふわりとやわらかな紅茶の匂いが身体をくすぐる。

「そう……かなぁ」
セレナの言う事はもっともだった。有希自身も自覚している。
――今まで患者に接してきたように、接する事ができないのだ。
今までのように患者に接していれば、一番自然な形で力が使われているのだろう。
それなのに、力の有無を自覚してしまった途端、今までどう接してきたのかがわからなくなった。
「まぁ、焦っちゃうのもしょうがないわよね」
その事実を違う意味で捉えたのか、セレナは慰めるように有希の頭を撫でる。
「まだ体調あんまり良くないんでしょ？　ゆっくり休んだほうがいいわ」
細い指が髪を梳いてゆく。その心地よさで、有希の中の眠気が肥大する。
「――それが、あんまり休んでもいられないみたいですよ」
突然ラッドの声が聞こえて、有希は顔を上げる。
換気の為に開かれていた扉をコツリと叩いたままの姿が見える。
「あら、どうして？」
「朗報です」
その言葉に、有希の心臓がぎゅっと掴まれたような感覚が走った。
「ユーキ様に、王宮から呼び出しが掛かりました」
弾かれたように顔を上げる。そこには酷く楽しそうなラッドの顔があった。

季節は枯葉の季節――秋だ。
有希がアリドル大陸にやってきたのは花の季節。春だった。
ルカ達と離れ離れになったのは、初夏だ。気が付けば、幾つもの季節が移っていく。
有希は薄手のストールを肩に巻き、バルコニーの窓を開けた。

途端にひんやりと冷気が部屋に入る。もやもやとした気分が充満している部屋に、綺麗な空気が入っていく。
「――ふぅ」
バルコニーに出て、空を見上げる。
夜空は星が煌めいている。とろとろとまどろむ瞳で見ると、夜空が歪む。
眠気はいつでも有希を誘う。それでも有希は眠りたくなかった。
コツコツと、扉をノックする音が聞こえる。
「どうぞ」
振り返らずに答える。満天の星空が、藍色ににじむ。
扉を開く音が聞こえる。そして部屋に入ってくる靴音。それでも振り返らずに夜空を見上げつづける。
「ごめんね、こんな時間に呼んだりして」
「いえ、むしろ嬉しいですよ。ユーキ様からそれだけ信頼を得ていると実感できますから」
優しく甘い声が耳に入る。有希は大きく一つ呼吸し、振り返った。
「言いたい事があって」
「……なんでしょう？　明日の事はもう――」
有希は首を振って、きゅっと唇を噛んだ。
何と言えばいいのだろう。言いたい事は沢山あるのに、思うように言葉にならないのがもどかしい。
「……ラッドは、セレナとヴィーゴさんを信頼しないほうがいいって、言ったよね」
一つずつ、紡ぐように喋る。
「言われてから、色々考えたの。あの二人は本当はどうしたいんだろうって、あたしに何をさせたいんだろうって」
鼓動がどきどきと脈打つ。それを静めるかのように、冷たい風が頬を撫ぜる。
「本当に、色々考えたの。……ラッドが言ってたように、あたしのこと良いように使いたいだけなのかな、とか、でもあたしもアドル

ンドまで連れてきてもらったからギブアンドテイクかな、とか」
ふわりと髪が揺れる。髪の隙間を縫うように吹いた風が耳をかする。
「ラッドはあたしに、あの二人を信頼しないほうがいいって言ったよね」
確認するように、もう一度問う。
「――えぇ」
「ラッドが心配してくれて言ってくれてるのはわかるの。でも、それは無理。たとえあの二人があたしの力を利用してたとしても、あたしは二人が大好きだし、これからも今までのままでいたい」
「……酔狂な人ですね」
笑む顔に、少しだけ軽蔑の色が入ってるのに気づいたが、知らない振りをして笑う。
「根拠のない信頼だけは得意だからね」
「世界に悪人が一人も居ないと思ってらっしゃるんですか？」
そうは思わないけど。そう言ってまた笑う。
「パパが……あたしの父親が言ってたんだけどね、人間は、善悪両方を持ってるの。ただその比重が違うだけ」
いつだったろう。快斗がそう有希に言ったのは。
（そう。あたしがアーチェリーをやめようとしたときだ）
大会に出ると、どうしても公の場に出ることになる。
姿形が全く変わらない人間が、何年も大会に出るということは、何も知らない人には一種の恐怖だったようで、心無い人たちからの悪意に、有希は根をあげた。
人間じゃないと罵られ、視界に入るなと罵倒され、それでも我慢していたが、悪意はどんどんエスカレートしてゆき、挙句の果てには大会自体にも支障が出るようになった。
『それでも有希、あの人たちを嫌いになるのはだめだよ』
快斗は有希を抱きしめて言った。
「……人を嫌いになるのはとても簡単。でもそこからは何も生まれ

ない。――だから、あたしはあの二人を好きでいるの。もし悪意でもってあたしに接しているんだとしても、あたしは二人の善意を信じる」
言って、ふんと鼻をならす。とてもすっきりした気分だった。
「そもそも、利用されてたって言っても、二人は十日熱患者のためにだけあたしを利用してた。それにもし、あたしが自分の力を知ってたとしても、十日熱の人たちに使いたいって思うもん」
（そうだよ。何で悶々と考えてたんだろう）
挑むようにラッドを見ると、ラッドは渋い顔で言った。
「それがもし、貴方の命を削るものだとしても？」
「え？」
「貴方がその力を使えば使うほど、貴方は消耗していく。体力も、寿命も。……それでもユーキ様は民を救うと仰られるんですか？自分の命を代償として？」
その言葉が、どこか懐かしく響く。
国のために、民の為に、死ね。
酷い言葉であるはずなのに、どこか胸が温かくなる。――それほどまでに、国を、民を愛していた彼は、今何をしているのだろうか。
有希は微笑む。
あの時とは違う。有希は直接人と触れ合ってきた。その暖かさ、優しさを知っている。
「あたしがこの力を使うことで、この世界の人が幸せになれるなら、喜んで使う。――結果として、あたしが死ぬ事になったとしても、本望よ」
（だってあたし、何も持っていないもの）
有希が死んだとして、悲しんでくれるはずの両親も友人もこの世界にはいない。皆、有希が死んだ事にも気付かないだろう。
「もしあたしがこの世界に来た意味が、そうすることが運命だというのなら喜んで受け入れる」
そうすれば、異物である自分がやっとこの世界に受け入れられる

気がするのだ。
「……だから、あたしに言ってくれたんだね。ありがとう」
有希を案じてくれるラッドの優しさが嬉しくて、頬がほころぶ。
「あたしが死んでも、ちゃんとセレナとヴィーゴさんはルカに会わせてね。ぜったいよ？」
ラッドの顔がいっそう苦渋に満ちる。信じられないものを見るような目つきで、吐き出すように言った。
「ルカ様を起こすまでは、死なせませんから」
「だったら早く、ルカの寝ている所に行ける算段を立ててちょうだいね？」
にっこりと微笑んで、踵を返す。もう話すことはこれ以上ないという意思表示だ。
有希はもう一度夜空を見上げる。
ずっと探していた。自分がこの世界に来た意味。
（十日熱で苦しむ人、それから――ルカを助けること）
ルカを助けることで、ルカはリビドムと協力して、マルキーとの戦争を終結させることができるのだろう。
（もしそれが、あたしがこの世界にきた意味だとするのなら――）

90

有希はもう一度、見覚えのある大きな建物を見上げた。
ここの門番からぞんざいに扱われたのはそう遠くない昔だ。そして、この中で過ごした一日は、とてもとても遠い昔のように感じる。
「……とうとう、かぁ」
感慨深げに見上げる。
ラッドから朗報を受けてから、五日が経っていた。
アドルンド王妃が、十日熱かもしれないものに感染したとの連絡が入ったのだ。
『一応、王宮には王宮仕えの医師達がいますが、十日熱には特効薬がありませんからね、少しでも評判のあるものは手中に入れておきたいのでしょう。――なんにせよ、これで王宮に入ることができます』
そして昨日、有希達はアドルンド王都に着いた。
ラッドの家に一泊し、そして本日。王妃が発疹したと有希に呼び出しがかかった。――医師たちが匙を投げたのだ。
セレナとヴィーゴはラッドの家で待っている。ヴィーゴに渡された薬は、左手に握った鞄にしっかりと入っている。
「では行きますよ」
隣に立つラッドを見上げる。首が痛くなるほど身長が離れていた青年ではない。そして有希自身も、あの頃と違う出で立ちなのだ。指輪の嵌ったてのひらが重なる事もない。
目の前の扉が、音をたてて大きく開く。

幾人もの人の視線が、ラッドと有希を襲う。
あまりに不躾な視線に困惑し、伺うように見上げると、ラッドは平然と歩いている。

どのくらい歩いているのだろう。踏み心地の良い絨毯は、どれほど歩いても足に負担がないようで、それに緊張もあいまって時間の感覚をも鈍らせる。
上り、下り、黙々と歩くラッドのすこし後ろを、大股に歩く。
大股で歩いているためか、だんだんと呼吸が荒くなる。有希が肩で息をしはじめた頃、ラッドが立ち止まる。
「こちらが謁見室です。陛下も病床に臥せっているために、オルガー様が謁見を行っております。……何を言われても、興奮してつかみかかったりしないようにしてくださいね」
（オルガー……）
胸元がじくりと痛む。痛みをやりすごそうと、目を閉じて深呼吸を一つする。
「……だいじょうぶ」
「オレが喋りますから、ユーキ様は下を向いて黙っていてくださいね」
「うん」
王宮に来る前にラッドと交わした言葉を反芻する。
『いいですか、ユーキ様。王妃様が十日熱に感染したということはですよ。王宮の十日熱が激化したということです。わかりますか？』
『うん……？』
『その顔はわかってないですね。いいですか？　端的に言うと、ルカ様が十日熱に感染する確率が上がったという事です』
『――っ！？』
『どうして気付かないんですか。――あぁ、先が思いやられるなぁ』
『ご、ごめんなさい』
『いいですか、オレたちの目標は、ルカ様に会うことです。そして、ユーキ様は十日熱に関しては治すことが出来る。わかりますか？』
『っそれって！　ルカが十日熱に感染すればいいって事？！』
『ご名答です。ユーキ様はその力で王妃を治す。そしてしばらくするとルカ様も十日熱に感染する。――するとどう出ると思いますか

？』
『もう一度あたしに呼び出しが、かかる……』
『そういうことです。できるだけその前にお会いできるようには努力してみますが、一番有力な候補だという事を覚えていてください』
（でもその可能性は、低い）
ルカが十日熱に感染するとは限らない。いくら衰弱しているからといっても、ルカは有希の騎士だ。騎士は丈夫なのだ。
それでも、感染してもらわねば困るのだ。
有希は胸元をきゅっと掴む。
もし、王妃を救う事ができなかったら。ルカが感染しなかったら。感染したとして、有希が治す事ができなかったら。
そう考えると緊張と不安で、体からさあっと血の気が引く。
指先が冷たくなり、ぶるぶると震え出す。胸に振動が伝わる。
（もし、なんて考えちゃだめ）
「これからなんだから」
有希のその呟きは、厳しい扉が開く音にかき消された。

扉はゆっくりと絨毯をこすりながら開いてゆく。視界の端で、一生懸命扉を押している人の足が見える。
扉が完全に開ききると、声が飛んできた。
「お入り」
声が響き、有希の肩がぴくんと跳ねた。電流が走ったような痛みが胸に起こる。
「ユーキ様」
行きますよ。囁くような声が聞こえ、小さく頷く。しかし、痛みを堪えるために眉根を寄せているので、顔を上げる事ができない。
「ユーキ様」
せかすように言われ、有希は俯きがちに立ち上がる。そして下方にあるラッドの足を見ながら進む。赤い絨毯を踏みながらいくらか

歩くと、ラッドは足を止め、その場にで方膝を付いて頭を垂れる。
それにならい、有希も両膝を絨毯に付け、膝より前に両手を置いて頭を垂れた。胸元は断続的に痛みつづけている。鼻の頭やこめかみに脂汗が吹き出る。見えはしないが、ラッドが顔を上げるのがわかった。
「――お呼びに預かりました、ラッドル・メンデにございます。此度は治癒能力を持つ娘を連れてまいりました」
朗々とした声が響く。それに冷淡な声が反響する。
「話は聞いてるよ」
「はっ」
ラッドが頭を下げる。
「持ってきたという薬も、劇物が入っていないか調べさせてもらう。いいよね？」
「もちろんにございます」
「それから、わかっているだろうけど、母様になにか危害を加えるような素振りをしたら、その命は無いものだから」
「そのようなことは致しません」
「――そう」
挨拶のように、淡々と話がすすむ。それは話というよりも、確認作業のようにしか聞こえない。
有希は俯きながら、未だ胸の痛みに顔をしかめていた。
「――そういえば、そこの少女の顔を見ておきたい。母様の命の恩人になるかもしれないからね」
「かしこまりました」
謁見室がしんと静まる。そして有希の背中に視線が刺さる。
首筋を汗が通り、その感覚にぞわりと鳥肌が立つ。
「ユーキ様」
ラッドが小さく囁く。しかし、その言葉を聞き入れている余裕がない。
胸が痛くて痛くて、絨毯に当てている手が震えている。

（止まれ、止まれ）
胸の痛みに対してなのか、震えに対してなのか。唇を噛んで痛みをやり過ごそうと眉根を寄せる。
（大丈夫、絶対、だいじょうぶ）
思い切り息を吸い込む。目を閉じて、体一杯に酸素が巡るのを実感する。そして鼻からふんと吐いて、ゆっくりと顔を上げる。
――もう、手は震えていなかった。
顔を上げた先にあったオルガーの姿は、いつか見た姿とさほど変わりはなかった。
黒い髪、黒い瞳。組まれた足。頬に当てられてた手。
荘厳な部屋に居ても何ら遜色の無い、優雅な出で立ち。
「へぇ、お前が」
口角を上げて笑う視線に射抜かれ、いっそう胸が痛む。
（――っやっぱり、だめだ）
視線を下げ、また俯く。俯いた瞬間に目から涙が零れ落ちる。手の甲にぽたりと水滴が落ちる。
ラッドに釘を刺されたのに、怒りで頭が沸騰してしまいそうだ。
（言っちゃう）
無意識に手が伸び、口を覆う。何も言わないようにと無理矢理口を塞ぐ。口が覆われる事で息が荒くなり、涙はいっそうこぼれた。
何故戦争を起こすんだ。
何故のうのうとそこに座っているんだ。
何故自分の母親だけ救おうとする。
ひとごろし。あの子の母親は殺したくせに。酷い。ひどい。非道い。なんで。なんで。狂ってる。狂ってる狂ってる狂ってる。
あの黒い瞳が。憎悪に沈んだあの瞳が。押し留めたはずの憎悪を無理矢理有希の中から引き出す。
喉の奥が引きつったように鳴る。
言葉にならない憤怒が、ただただ涙となって零れ落ちる。
胸の傷が痛いのか、心が痛いのかわからない。ただ涙が零れ、罵

倒の言葉が出ないように口を塞いだ。
「失礼します！」
途端、横から手が伸びて引き寄せられ、有希は体勢を崩し、ラッドにもたれかかる形になっている。ラッドはそんな有希を隠すように、ぎゅっと抱き寄せた。
「このような振る舞い、殿下のお心に不快な思いをさせてしまい、申し訳ありません。――実は、昨晩何者かが彼女を夜襲しまして、それから人と目を合わせる事が出来ないのです」
「……そんな事、僕の耳には入っていないんだけど」
「は、王妃様の事でお心が穏やかではない殿下に、これ以上心労を掛けさせたくありませんでした。……それに、事はメンデ家で起きましたこと。大事にすべきでも無いと思いまして、口外はしておりませんでした」
「そう。――母様を良く思っていない者が手を出したのだろうね。なら心痛を労うとともに、王宮に部屋を用意しよう。王都に逗留している間はそこで過ごすと良い。そうすれば、メンデ家みたいに襲われることはないだろうから」
「……寛大なお心遣い、感謝いたします」
ラッドは有希を抱きかかえながら話を続ける。ラッドの過ごす部屋も用意するという事、それから診療の時間等を話し、会話が終わる。
「それでは、失礼致します」
そう言うと、ラッドは有希の脇に片手を差し入れ、口を押さえたままの有希を立ち上がらせる。もう涙は出ていないが、小刻みに震えている。
有希を慮りながら、数歩歩いたところで、オルガが呼び止める。
「あぁそうだ。一つその子に聞きたい事があるんだけど」
有希は背中から廻ったラッドの腕に抗う事が出来ず、もう一度オルガに対面する。視線を落としたまま、目の前にある階段を凝視し

ている。
「その子……魔女の呪いは解けるかい？」
「呪い、ですか？」
応えたラッドが有希を見遣る。
（そんなの、やったことない）
力なく首を振る。泣いた所為か、酷く頭が重かった。何かを考えようにも思考は動かず、ただぼんやりとしてしまう。
「……そう」
ラッドがもう一度頭を下げ、そして歩き出す。有希はラッドに支えられるままに歩く。
謁見室の扉が閉まる音が、やけに大きく聞こえた。

91

ラッドの家――メンデ家の屋敷で待機することになったセレナは、書き物をしているヴィーゴを横目に紅茶をすする。
「……ねぇヴィーゴ」
「なんだ」
「ここ最近のユーキちゃんなんだけど、何かおかしくなぁい？」
筆を持った手がぴたりと止まる。ヴィーゴが顔を上げてセレナを見る。その顔は何を言いたいんだと問うている。
「ヴィーゴ、あんなにも露骨におかしいユーキちゃん見て何も思わないの！？　鈍すぎるにも程があるわ！」
ここのところの有希はおかしい。体調が悪化したのもそうだが、どこかセレナによそよそしい。
「……なぁんか変なのよ。隠し事があるみたいだし」
何か有希に悪い事でもしただろうかと考えるが、特に思い当たる事もない。強いて言えば、セレナはラッドを信頼していない。もしかしたらそれが有希になんらかの困惑をもたらせているのかもしれない。
「家を間借りしておいて言うのもあれだけど、やっぱり嘘くさいのよねぇ。有希ちゃんに対しての態度も。気に入らないわぁ」
「それはお前のただの独占欲だろう……それよりも俺は、嬢ちゃんが自分の能力に気づいたんじゃないかって思うんだが」
その言葉にセレナはどきりとする。――思い当たる節があった。
「あの男は気付いてる――私もあの男が言ったんじゃないかって思うのよ」
有希が部屋に篭るようになって、悪化していた体調は休む事でいくらか回復しているように見えた。しかし、ある時から唐突に体調が悪くなった。
「それと同時期に、私達によそよそしくなった……」

「それから、患者の回復も早まったな」
「なにそれ、聞いてないわ」
「その所為か、嬢ちゃんの体調も悪くなった」
「……これ以上、ユーキちゃんを使うのは良くないと思うんだけど」
「あぁ、王妃を機にやめさせようと思っている」
「……ヴィーゴは、それでいいの？」
それは、他の患者を見殺しにするという事だ。有希の力で治るものを、見捨てるということだ。
「勘違いするな。俺は世界中のすべての人間を救いたいと思うほど、おめでたい頭は持っていない」
「ユーキちゃんは持っていそうだけどね」
「そうだな」
ヴィーゴが軽く笑う。髭の生えた顎を撫でて、ひとつ大きな呼吸をする。
「……しかし、カーン様以上の消耗だな」
「ユーキちゃんがまだ幼いから？」
「いや、カーン様があのくらいの時期でも、あそこまで酷くはなかった」
「そう」
有希が自分の能力を知った。そしてそれにはきっとあの男、ラッドが絡んでいる。――そうなると、有希は一体何を考えるのだろうか。
「ねぇヴィーゴ、さっきから何を書いているの？」
また筆を取って、紙にあれこれ書いているヴィーゴを見る。
「……嬢ちゃんの能力がどんなものなのか、知りたくてな」
見ると、メモには歴代のリビドム王達の名前、それから力の内容と、それらの関連性などのメモが書かれている。
いつから書き始めたのか、膨大な量が置かれている。
「これは？」
「覚えてる限りの王を書き出してみたんだ。――歴代の王には、生

命を削ってまで使う能力なんて存在しない。なのに嬢ちゃんのあの消耗具合を見ると、疑うしかないだろう」
一体何代前までの王がそこには書かれているのだろう。幾枚にも及ぶ文字列と、ヴィーゴの記憶力にめまいを覚える。
「自身の生命力を与えているんだとしたら、嬢ちゃんはもうとっくに死んでいる。ならば、体内時間に干渉できると考えたほうが良い。だがそれだと治らない病なら死んでいる。――それならば、本来俺達が持っている治癒力に干渉しているのだといきつく。それならば、カーン様のものとも関連が付けられる」
「結構強引ね」
「そうとしか考えられないだろう。――リビドムの治癒能力を持つ奴らは、外傷を無理矢理くっ付ける術しか持たん。なのに嬢ちゃんは内臓だろうと外側だろうと関係がない」
「そう考えるとカーン様と一緒ね」
「だが、やはりあの消耗はおかしいだろう」
考え込むヴィーゴに、セレナも一緒に考え込む。
カーンと有希の相違はなんだろう。能力の相違、年齢の相違。
「……魔女に能力を制限されていると考えるのは？」
ヴィーゴが目を瞬かせる。
「ありうるな」
そう呟いて、ヴィーゴは更に紙になにか書き足す。そして紙面に向かい、顎を撫でながらペンで色々とメモをしている。
（優しいわね）
有希の力を利用して、それで有希が命を落とす事になったとしてもかまわないと言った男は、有希の力がどういう作用をするのか、どういう副作用を持つのか一生懸命悩んでいる。
（ユーキちゃんの身体に影響があったら、どのくらい苦しむかしら）
きっとヴィーゴは、カーンと同じ要領だと見誤っていた自分を責めるだろう。悔いるだろう。
（ばかな男）

そしてそんな男に胸をときめかせている自分も、途方も無い馬鹿なんだろうと自嘲した。
そんなセレナの笑みは、ばたばたと慌てたような足音で掻き消え、開いた扉、そして現れたラッドの言葉によって一変する。
「ユーキ様が倒れました。今、王宮で賜った部屋で寝ています。診療をお願いしたい」

ごうごうと、何かが燃える音が聞こえる。
ごうごうと、何かが流れる音が聞こえる。
心がざわざわと喚きたて、えも言われぬ不安がまとわりつく。
あまりのうるささに耳をふさいでも、その音は小さくならずに有希の頭に直接響く。
だんだんと近づいてくる音に、有希はうずくまる。
「……っ！」
血潮のような、雷鳴のような、地響きのような轟音が、有希のすべての感覚を奪う。
喉が引きつる。呼吸ができない。ああ、叫んでいるんだと頭のどこかが冷静に分析しているのに、自分の声すら聞こえない。
「ッユーキちゃん！」
頬の衝撃から始まって、すべての感覚が戻ってくる。ひりひりとする頬の痛み、荒い自分の呼吸の音、汗でじっとりと重い体。
「……せれな？」
目の前で半泣きになって覗き込んでいる、セレナ。
「大丈夫？　酷くうなされていたわ」
セレナは優しく微笑むと、有希の下瞼を親指でなぞる。そこで涙を流していた事に気付く。
王宮の部屋だろう。酷くやわらかいベッドに座る有希のすぐ隣にセレナ。そして反対側にヴィーゴが立っている。
「あ……」

ヴィーゴが無言で有希の額に手をあてる。
「頭痛や、吐き気はあるか？」
「ううん」
胸がちりりと痛むが、その原因の傷は今は見ることができない。
「――過労と、心労だな」
心労。その言葉が刺さる。
「焦りや不安で不安定になってるんだろう。――緊張疲れが一気に来たか？」
そう言って有希の頭を撫でる。
「――――っ」
二人は知らない。有希とオルガの間になにがあったか。話すとなると、何を、どこから話したらいいのかわからない。
胸がじくじくと痛む。もう随分昔のことなのに、未だに頭にこびりついて離れない。
有希に焼き鏝を押し付けた時のあの冷酷な笑顔。肉の焦げる匂い。自分の絶叫。
胃が圧迫されたような不快感が広がる。せり上がってくる何かに顔をしかめる。
「……薬の検証が終わったそうです。ユーキ様、行けますか？」
ラッドが腕を組んで壁にもたれかかっている。
「ッユーキちゃんこんな状態なのに連れてくっていうの！？」
ぎゅっとセレナに抱き寄せられる。甲冑を纏っていないセレナからはとてもいい匂いがする。
「時間がないのです。王妃様の病状は刻一刻と悪化しています」
「それでも！　今この状態じゃ――」
「だいじょうぶ」
「ッユーキちゃん」
「大丈夫だよセレナ。あたしは大丈夫」
セレナの服をぎゅっと掴んで、顔を上げ、にっこりと笑ってみせる。困惑顔のセレナをよそに、ラッドに声をかける。

「今、すぐ？」
「いえ、今王妃様に来客が来ているそうなので、少しなら余裕があります。――休まれますか？」
有希は首を振る。
「ううん、まだ時間あるならお風呂に行きたいな。――汗だくなんだ」
へらっと笑う。ラッドは畏まりましたと言って部屋に居たメイドに声を掛ける。メイドが一礼して部屋を出ていく。
「ユーキちゃん……」
「二人とも、心配してくれてありがとう。でもあたし、本当に大丈夫だから」
言って、ベッドから出る。床に足を着けゆっくりと――貧血を起こさないように立ち上がる。
（……口ではああ言ったけど）
膝が笑っている。力を入れていないと今にも膝が崩れ落ちそうだった。
（あたし、本当に死んじゃうのかなぁ）
身体が砂袋でも抱えているかのように重い。
口の中がカラカラと乾くのに、胃はなにも受け付けそうにない。
鼻の頭、首筋から汗が思い出したように流れる。身体中が寒くて仕方なかった。
自分の中に限界があるのだとしたら、そのリミッターの針はとうに振り切れている。
『――結果として、あたしが死ぬ事になったとしても、本望よ』
自分が放った言葉が響く。いざそれが現実味を帯びてきても、心のどこかが冷静に捉えている。
視界がぼんやりと霞む。目を何度か瞬かせる。メイドが何かを持って戻ってきた。ラッドと一言二言会話をし、ラッドは有希を見る。そしていくつか隣接している部屋への扉を開く。メイドがするりと中に入る。そしてラッドは有希を見る――入るように促しているの

だ。
おぼつかない足に心の中で激励し、開かれた扉の中に入った。
頭の奥で誰かが、けたけたと笑っている。

92

ふらふらと促されるまま風呂場へ行く。メイドに脱がされるまま服を脱ぎ、腕を引かれるまま湯船に突っ込まれる。
普段なら熱いと言って出てしまいそうな温度の湯に浸かっていたが、かえって今の有希には丁度良かった。
循環していなかった血液が、血管が開くと共に巡っていくような気がした。
新しい着替え――薄水色のワンピースに着替えた頃には、寒気もどこかへゆき、幾分か落ち着いたような気がした。
――ざわついていた心も、ひどく凪いでいる。
部屋に戻ると、しかめ面をしていたセレナの顔がほころぶ。
「ユーキちゃん、大分顔色よくなったわ」
セレナは有希の前で膝立ちで有希の頬を撫ぜる。
「そう？　ならいいんだけど」
ヴィーゴが、何か椀を持っていた。そしてそれを有希に飲むように言って差し出す。
「気休めにしかならんかもしれんが、一応」
「――ありがとう」
不思議と甘い匂いのする青緑色の液体――を飲む。えぐい青臭さと甘味に目を白黒させたが、なんとか飲み干す。
後味の悪さに若干涙目になっていると、ヴィーゴの大きな手が有希の頭を撫でた。
「……ユーキ様」
「うん、今いく」
「ねぇ、ユーキちゃん……」
セレナが見上げた姿勢のまま有希に手を伸ばす。
「セレナ」
ずっとずっと考えていた。幾度も幾度も考えては悩み苦しんだ。

これからするべきこと。
「それにヴィーゴさんも」
二人を見つめる。
「リビドムからここまでずっと、面倒を見てくれてありがとう」
頭を下げることはできなかった。頭を下げたら、頭の重みで倒れてしまいそうだった。
「あたしの力が、少しでも役に立ててたんだったら、嬉しい」
セレナが息を呑みこむ。
「ユーキちゃん、いつから――」
「つい最近。ラッドに教えてもらったの。……セレナとヴィーゴさんがどういうつもりであたしと一緒に居てくれたのかわからないけど――あ、もちろんリフェに頼まれたんだっていうのもあるんだろうけど。それでも、沢山わがまま聞いてもらって、沢山よくしてくれて、あたしはやさしい二人が大好きで、一緒に日々を過ごせて、本当によかった」
半端に伸びたままのセレナの手を握る。
「な、なに言ってるのユーキちゃん、私達、まだユーキちゃんと一緒に居るつもりよ？　ルカート王子にも話しなきゃならないことあるし……」
沁みるほどに暖かい手が、有希の手を握りかえす。
「それになんだか……お別れの言葉みたいで嫌だわ」
察してくれたことが嬉しかった。このまま今の有希の気持ちのすべてが伝わればいいのにと思うと、笑みが零れる。
「ッユーキちゃん！」
「……嬢ちゃん」
声に振り返ると、ヴィーゴがひどく苦しそうな顔をしていた。
「――すまない」
「謝らないで。あたしはちっとも後悔なんてしてないんだから」
ヴィーゴと視線がからむ。懺悔をするようなその瞳に、安心して欲しくてたまらない。

「もしもこうなることを、もっと早くから知っていたとしても、あたしは同じことをしていたと思う。だから、自分を責めないで」
歩み寄り、ヴィーゴの手を握り締める。
「ルカが目覚めたら、ちゃんとリビドムの人たちの話、聞いて貰えるようにお願いするから。絶対に、セレナとヴィーゴさんと話をする機会作ってもらうから」
ラッドを見る。有希の視線を追うように二人は振り返る。ラッドは恭しく頷く。
「お約束いたしましょう」
「じゃぁ、大好きなセレナ、ヴィーゴさん、いってきます」
「待って、ユーキちゃん！」
セレナの手が伸びる。しかし、いつの間にか有希のすぐ傍に来ていたラッドがそれを払い落とす。有希はメイドに手を引かれ、部屋を出た。
「……これ以上、刺激を与えないで貰いたい」
「っふざけないでよ！　こんなの――」
扉が閉まる。
『こんなの、あんまりよ』
悲痛な声が、めまいを誘った。

ラッドに手を引かれながらゆっくりと歩く。視界が上手いように利かず、身体も一歩一歩踏みしめるように歩かなければそのまま膝から崩れ落ちてしまいそうだった。
「――ルカ様の部屋は突き止めました。後宮の最上階です。……それから、入る算段も整えました」
「……そう」
「毎日決まった時間に、ルカ様の体勢を変えるんですけど、夕刻の当番のメイド達に心付けをしておきました」
結構大変だったんですよ。ガードが硬くて。そうぼやくラッドに、

労いの言葉を掛ける余裕すらない。
（さっきはよくすらすら言えたなぁ）
今はただ、左右の足を出す事で精一杯なのに。
他の事を考えたからだろうか。右ひざに力が入らずにかくんと崩れる。しかしまるでそれをも予測していたかのようにラッドの腕が伸び、有希はいつの間にか横抱きにされていた。
「どうやらこっちの方が早く着きそうです。ご容赦下さい」
「……」
「返事する気力すらない。……ですか」
その通りだったので返事をしないでいると、硬い声が聞こえる。
「……彼女達のガードが硬かったのには理由がありましてね。ルカ様、十日熱に掛かってるんですよ。王妃様と同時期に」
心臓がどきりと跳ねる。きゅうっと締め付けられるように逸る心を宥め、ラッドに視線だけで続きを促す。
「寝返りを打たせるためのメイドから貰ったのか、それとも人為的に感染させられたか、定かではないですけど。公に出さないという事は、このままルカ様を病死させたいんでしょうね」
ラッドの言葉からも、ひしひしと怒気が伝わる。その証に、有希を抱いている腕に力が篭った。
「王妃様は医師に看せ、ルカ様は放置ですよ。口止めの為か、毎日のようにメイドは入れ替えられ、担当したメイドはどこかに消える――胸糞が悪い」
有希も激しく同感だった。一体この国は、オルガは、ルカをどうしたいのだろうか。
「……ラッド」
「なんでしょうか」
「あたし、絶対ルカを治すよ」
「……ありがとうございます」
そのまま、無言の時間が流れる。
有希はラッドに運ばれるまま、目を閉じる。身体のどこにも力が

入らず、ラッドの動きに合わせて身体が揺れる。
次に目を開いたときには、ラッドの足は止まっていた。
「お待ちしておりました」
「治癒能力を持つ娘をお連れした」
ラッドが腰を低くし、腕を下ろす。有希に降りろということだと気付き、ゆっくりと足を降ろす。体勢を崩さないように、立ち上がるまでラッドが肩を抱いていてくれた。
「こちらがお預かりしていた薬と、白湯です。王妃様は今起きていらっしゃいます。――我等も同行させていただくが、構いませんか？」
「ああ、構わん」
「では――皇后様、失礼致します」
二人の医師が扉を開ける。入った部屋はとても広く――学校の教室一つ分ほどの大きさの場所に、大きな天蓋付きのベッドが真中に鎮座していた。
有希はラッドに肩を抱かれたまま歩く。何度かラッドの足を踏んだが、何も言われなかった。天蓋のカーテンをめくり、更に中に入る。
（……酷い）
肩を抱いていたラッドの手がぴくりと動く、ラッドもその有様に驚いたのだろう。
「……おはつにお目にかかります。皇后様」
「……」
ベッドに横たわる人間に、有希は声を掛ける。
（疱瘡が出たのは、昨日のことだったはず――）
目の前に横たわる王妃は、かつての姿の想像も出来ないほど、身体中が疱瘡で埋め尽くされている。
「失礼します」
有希は手近にあった王妃の左手を持ち上げる。こちらも疱瘡で真赤になり、随所が膿んでいた。

（……っていうより）
驚きで目が冴える。尋常ではない勢いで、有希の目の前の左手に新たな疱瘡が生まれ、そして膿んでゆく。
「なに、これ」
「……皇后様の十日熱は、通常の何倍もの速度で進行しておられるのです」
その言葉に耳を疑う。
（何倍もの速さって、そんなのありなの？）
目の前の王妃が小さく呻く。それは本当に小さな呻きで、それがそのまま、王妃の生命力のようだった。
今にも消えてしまいそうで、今にも尽き果ててしまいそうで。
「ラッド。薬はいらない」
有希の背後で薬の用意をしているラッドを振り返る。そして目線でちらりと医師達を見遣る。ラッドは有希の意図を的確に理解したようで、一瞬だけ瞳が揺れる。
「すみませんが、診察中ですので、一旦天蓋から出てください」
「いやしかし、我らは皇后様を……」
「我々が居ると、彼女の気が散ります」
医師二人の背中を押すラッドが振り返る。有希と目が合うと微笑んだ。感謝の気持ちを込めて一つ頷く。それだけでくらりとめまいが起きる。
――時間がない。
有希はすぐさま振り返る。何かの生き物でもはびこっているような王妃の皮膚は、目を背けたいほどグロテスクだ。
「……今、治しますから」
聞こえているのかいないのか、王妃はまた一つ呻く。先ほどよりも小さな、か細い声だった。
有希は瞳を閉じて、大きく深呼吸をする。
ゆっくりと目を開ける。白くかすんでいた視界がクリアになった。そして人のものとは思えない程に疱瘡で包まれた左手を手に取り、

きゅっと握る。
膝を付き、重ねた手に額を近づけ、祈るように呟く。
「……絶対、治しますから」
目を閉じる。閉じた瞼の奥からでも、手が発光しているのを感じる。じんわりと暖かい光が、有希の手から広がる。
――ずっと聞こえ続けていた笑い声が、ぴたりと止んだ。

93

誰かが有希を呼んでいる。
肩を揺さぶられる。
酷く身体がだるくて、まだ眠り足りない。
寒くて眠くてたまらないのに、誰かは有希を無理矢理覚醒に導く。
「ん……」
何故まだ寝かせてくれないのだろうと恨み言の一つでも言ってやろうかと目を開くと、至近距離にラッドの顔があった。
「……！？」
「あぁ、よかった」
驚いて身を竦ませると、ラッドはほっとしたように息を吐いた。
一体何が起きたんだろうと二度瞬きをする。ラッドに肩を持たれ、上半身を起こされている体勢であることに気付く。
そして次いで、王妃を治して、そのまま気を失ったということを思い出す。
「そうだ、王妃様……」
ベッドサイドに手を伸ばして起き上がろうとしたところで、するりと腰に回った手が有希を抱き起こす。
「ありがとう」
「いえ」
ベッドを見ると、王妃は眠っていた。
向かい側には医師が二人、王妃を見つめている。
「上手く、いったの？」
一歩、二歩。よたよたと歩き王妃の顔元を覗き込む。おずおずと手を伸ばして頬をなぜる。チルカの時と同じように、赤黒いかさぶたがぽろぽろと剥がれ、下からはふっくらとした肌色が見えた。
（よかった……）
ほぅ、と息を吐く。呼吸が安定しているようで、規則正しく腹部

が上下している。
「きっともう、だいじょうぶです」
「貴女は一体何を――」
医師達が有希を見る。驚愕と畏怖の混じったその視線が痛い。
それは、いつか有希を化け物扱いした人たちの視線とよく似ていた。
「ラッド」
ベッドに片手を付いたまま、もう片方の手を差し出す。意図を察知したラッドは有希の手を取り、抱き上げる。
「はい。治療は終わりました。すみませんが彼女の体調が優れないのでこれにて失礼します」
「は、はぁ……」
もう踏ん張らなくて良いのだと思ったら、全身から力が抜け、くったりとラッドの胸にもたれる。部屋の扉をメイドが開ける。扉が閉まると、ラッドは小さな声を有希に掛けた。
「……ご苦労様でした」
「まだだよ。――次はルカ。おねがい、いそいで」
言葉を紡ごうにも、身体が酷く重たくて、寒くて、眠くて、今にも意識を手放してしまいそうだった。
「おねがい。はやく」
もし今意識を失ったら、このまま起きられないかもしれない。
酷く寒かった。凍えた指先にはもう感覚がない。口の中は乾き、呼吸も浅いものしかできない。
「おねがい」
かすれた声も、絞り出すようなうめき声にしかならない。
「――っ少し揺れますよ」
ラッドが走り出す。自身を支えきれない身体には力が入らず、頭がガクガクと揺れる。
そして揺れたのも数秒。突然ラッドが急停止する。
「ふざけんじゃないわよ」

怒気を孕んだ聞き覚えのある声が聞こえる。
首を動かして、無理矢理目をこじ開ける。そこにはいつか見た、薔薇の魔女が仁王立ちしている。
「……ヴィヴィ？」
「ユーキ様、お知り合いですか？」
「なにしてくれたのよってアタシは言っ・て・ん・の！」
「……なにって」
「アンタ、あの女の十日熱治したでしょ。ヒトの楽しみ奪うのやめてよねぇ。――あのクソ女が息絶えるのを楽しく眺めてたっていうのにさぁ」
「っ王妃様になんて――」
「アンタはちょっと黙ってて」
ヴィヴィが指をパチンと鳴らす。すると、ラッドの身体がかちんと固まった。
「ねぇユーキ、アンタ、自分が何やったかわかってンの？」
こくりと頷く。大仰な溜息を吐かれる。
「……しばらく見ないうちに、自分の目的すら忘れたワケ？」
「忘れてなんかない！　――今からルカのところに行くの」
大きな声を出したから貧血を起こしたのだろうか。視界がぐらりと揺れる。気の強いまなざしも、焦点が合わず睨み返すことができない。そんな状態に気付いたのか、ヴィヴィの声が弾む。
「――へぇ。力、発現したんだ？　今そんな姿だから勘違いしたのかしら――でも、カラダに合わないみたいね。そりゃそうよね、あんた本当はチビのままだし」
けたけたと笑う声が聞こえる。
「……おねがい、ラッドを元に戻して」
ヴィヴィと会話することすら、体力を使う。
「カラダに合わないのにずうっと力使ってたの？　バカね、そんな具合悪くして……死ぬわよ？」
「いいの、あたしがやりたくてやったんだから」

「っそ。相変わらずイイ子ちゃんね。殊勝なオコトバに吐き気がするわ」
「ヴィヴィ、おねがい」
「アタシがアンタのお願いなんて聞くと思う？」
すっぱりとそう言い切られてしまう。
「楽しみを人から奪っておいて、アンタはアタシにお願い事。――はいそうですかーなんて聞くワケないでしょ？」
視線が有希に刺さる。視線は感じるが、ヴィヴィがどんな顔をしているのかわからない。――もう、ほとんど視界が白んでいて何も見えない。
「でも……そうねぇ。見逃してあげてもいいわ」
「え」
「あの贄の王子ン所に行くんでしょ？」
（贄？）
「まさかアレがアンタの騎士だとは思わなかったけど。――騎士まで助けてあげたっていうのに、本当に恩知らずね。……まぁいいわ。とにかくアタシはあの王子の所で待っててあげるから、早く来なさいね」
足音が聞こえる。両頬にひんやりとした――ヴィヴィの手が添えられる。至近距離に来たからか、ぼんやりとヴィヴィの顔が見えた。
「もっとも、来れれば、だけど」
ヴィヴィの顔が楽しそうに歪む。
「え？　なに？」
「アタシの楽しみを邪魔してくれたんだから、その分楽しませてよね」
ぱちんと音が鳴る。ざあっという音と共に、目の前が真赤に染まる。それが薔薇の花弁だということを、有希は経験で知っていた。

聞きたいことが幾つもあった。

何故ここにヴィヴィが居るのか、何故王妃の所に居たのか。王妃が死ぬのを眺めていたっていうのはどういうことなのか。ずっと聞こえていたあの笑い声はヴィヴィのものなのだろうか。贄とは、どういうことなのか。

そのすべてを聞く事ができなかった。なぜなら、有希が次に目を開いた時、有希は緑の匂いに包まれる場所で横たわっていた。

「……ぅ……ん？」

何が起きたのかわからず、むくりと起き上がる。どのくらい寝ていたのだろう。少しだけ身体が軽い。視力も若干戻っているようで、曇りがかっているが、視界は良好だ。

咽るような青い匂いと、日差しのやわらかな暖かさを感じる。

「ここ……どこ？」

よろよろと立ち上がる。まだ本調子ではなかったようで、貧血を起こして膝が地面を叩く。

（……いたい）

痛いのに痛いと言う気力もない。今度こそは倒れまいとゆっくりと立ち上がる。

（――――？）

「……ら……ろう」

さわさわと木々が揺れる音に混じって、ぽちゃんという水音が聞こえた。それから、人の声。

（ひとがいる！）

ぼそぼそと小さな声が聞こえた。有希は笑う膝を叱咤して、声の聞こえる方へと歩く。

ここはどこなのだろうか。あれからどのくらい時間が経ってしまったのだろうか。

視界は晴れやかではないし、足も思うように動かない。よろよろと少しずつしか進めない。そのもどかしさに前傾姿勢になる。

距離にして、ほんの数メートルだが、有希にとっては何百メートルの感覚だ。

「――――ねぇ、ティーファ」
「ぎゃあ！？」
足元にあった――きっと木の根だろう。何かに躓いて、たたらを踏む。踏ん張りきれたと思ったのに、足がもつれて踏み出すことができない。
「っ誰だ！？」
「っわぁ！」
倒れる、と思った時には遅く、べしゃりと地面に頬をこすり付けていた。
「――っここは王族以外立ち入り禁止区域だよ。何用があって立ち入ったりするんだ？」
（気付かれた。いや、気付いて欲しかったんだけど。えと、えと、なにか言わないと……）
みっともない姿を見られてしまったと、羞恥で顔が赤くなる。慌てて身体を起こす。そしてその場所に居た人物を見て、凍ってしまったように動けなくなってしまった。
（オルガ……）
どこか見覚えのある泉の前に、その王子は立っていた。

94

一体自分が、何をしたというのだろう。
何かをした報いで、ここに居るのだろうか。

オルガは驚きに眼を見開き、そして瞬時に腰元の剣の柄に手をかけた。
「！？　お前は……」
「あっ……えぇと……」
びくりと肩が跳ねる。背筋にぞわりと悪寒が走り、一歩後退く。
――が、転んで座り込んだままだったため、上体が反り返る程度だった。
オルガと目が合う。あからさまに眉をひそめられる。
「……お前には、母様の治療を頼んだはずだけどねぇ？　この泉に来いだなんて僕言ったかなぁ。人払いはしてあるはずだけど？」
硬い金属が擦れる音と共に、オルガが剣を抜く。片手で構え、冷ややかな目で有希を睨む。有希は自分に向いた刀身にぎょっとして、また一歩後ろに下がる。スカートが草に擂れる。
「えっと！　あの、あたし……」
声が震える。焦りと驚きと疲労で頭がまわらない。そもそも、何故自分がここにいるのか――そもそも、どこなのかすらわからないのに、居る理由を言えというのも無理な話だ。
座り込んだまま、わたわたとあたりを見回す。
まだ夕刻になるには時間があるのだろう。やわらかな日差しを受けた草原が、十畳ほど、大半を占める泉を囲むように群生している。その周りにはそれよりも丈の高い木が茂っている。
泉は城に面していて、こちらもきらきらと光っている。
『人払いはしているはずだけど？』
オルガの言葉にはっと目を見張る。

（今オルガが言ったこと……それなら、王妃のことも知らないはず）
不安定に反り返っていた身体を元に戻す。
（騙せ。――だいじょうぶ、騙せる。騙してみせる。嘘じゃないし）
きゅっと唇を引き結んで、頭を地面に押し付けて平伏してみせる。そして一気にまくしたてる。
「あ、お、見苦しい姿をお見せしてすみません。やっとお姿を見つけたので、慌てて転んでしまいました！　王妃様の治療が終わりまして、その報告を一番にオルガー王子にお伝えしたくて、あちこち捜していましたらここまで来てしまいました。立ち入り禁止区域に入ってしまって、本当にごめんなさいっ」
既に地面に近い頭を、更に地面に近づける。額を草がくすぐって少し痒い。突然頭を動かしたので軽いめまいを起こしている。
目を閉じてもぐるぐると頭が廻るのに辟易しながら反応を待つ。どのくらい時間があっただろう。ほんの数十秒もないだろうに、何時間も待っているような気分にさせられる。
「――――そう。それは感謝するよ」
また金属のこすれる音が聞こえる。剣を鞘に戻したのだろう。有希はオルガに見えないように、ほっと息を吐いた。
（でも、なんだろう。違和感……）
なんだかもやもやとして落ち着かない。体調が悪いからなのだろうかと思ったが、ここ最近はずっと不調だったのに今更かと一蹴し、思考をめぐらせる。
「……ここにお前が現れたのも、そういうめぐり逢わせなのかな」
頭上から声が降ってくる。どこか頼りない声が。
（めぐりあわせ？）
おずおずと頭を上げる。そしてオルガの表情に息を飲んだ。
（これ、誰！？）
目を疑いたい衝動にかられる。目の前で立っているのは間違いなくあのオルガだ。しかし。
（なんでそんな顔）

有希がいつも見ていたのは、何かへの憎悪にたぎる、黒曜石のように何も見透かせない瞳。全身から滲み出る、冷ややかな空気。
それなのに今のオルガにはそのどれも見当たらず、あいまいな顔で笑っている。
驚きのあまり呆けている有希を尻目に、オルガは懐に手を入れる。そして何かを掴んだ手を差し伸べ、有希に受け取るように言った。どうしたらいいのかと戸惑っていると「母様に会いに行くから早くしてほしいんだけど」と言われ、慌てて立ち上がってオルガに寄る。
おずおずと手を伸ばすと、有希の手のひらにほの暖かいものが渡された。
（あ、騎士称と鍵だ）
有希の手のひらには、淡い紫銀色の騎士称と、細かい細工が施された金色の鍵が乗せられていた。
「これはこの棟の一番最上階奥の部屋のものだよ。――そこに居る子も治してやってあげて」
「……え？」
紫の騎士称、それから部屋の鍵。その先に居る人の治療。
（それってルカのこと、だよね）
「でも……どうして？」
ルカもオルガも、お互いがお互いを憎んでいるようにしか見えない。それなのにどうして、有希に騎士称を渡すのだろうか。
有希の疑問を理解したのか、片側の口角が上がる。
「どうして？　わからないことを聞くね。お前は治癒能力を持っているんだろう？　なら患者がいるのなら治癒するものなんじゃないのかい」
あからさまに見当違いの返答をされ、思わず眉をひそめる。
「そんなことお前が気にすることではないよ。過ぎた関心は身を滅ぼす――それとも、滅ぼされたいのかな」
そう言うと、剣の柄に手を伸ばす。慌てて有希はあとずさる。

「いいいいえ！　めっそうもないです！」
「なら早く行きなよ」
（……あ）
　また、自嘲気味な笑み。
「……どうしてこうなったのか、僕も知りたいくらいさ」
「え？」
「お前には言ってないよ。――もしあの子が起きたら、お前の思うようにしなさいと言ってくれるかい？」
「思うようにって……、それって」
「お前が興味を持つようなことではないよ。お前は僕に言われたまま、そのまま伝えるんだ。わかったかい？」
「あ、は、はい」
　騎士称と鍵をきゅっと抱きしめる。くるりと踵を返して、建物の入り口を捜そうと一歩踏み出す。
「――それから、もし誰かに呼び止められたら、その騎士称を見せればいい」
「は、はい」
　騎士称をぎゅっと両手で抱きしめる。
　オルガが少しおかしいかったことや、どうしてあんな所にいたのか等、気にならないといえば嘘になるが、なによりも今、ルカへの足がかりを手に入れた事がなによりも嬉しかった。やっと、本当にやっと、ルカに会えるのだという確信が持てたような気がした。
　体調は未だ優れないが、足取りは自然と軽く、速くなってゆく。

95

武者震い。というのだろうか。全身が震えていた。
鍵を握る手が震え、思うように鍵穴に入らない。
「あっ」
がちりと音をたてて鍵がはじかれ、床に落ちる。チャリンという音が静かな廊下に響き渡る。しゃがんで、震える指で鍵を掴む。
建物を上がってくる間、人という人に会わなかった。唯一、入り口に立っていた兵士に騎士称を見せたっきりだった。
有希は目の前にある大きな扉を見て、更にあたりを見回す。もしかしたら部屋が違うのではないかと懸念した。
しかし、間違えようのない部屋だった。扉が、一つしかない。
もう一度鍵を握る。ずっと握り締めていたから、鍵まで汗ばんでいる。
かたかたと震える手をもう片方の手で止めようと励む。そしてゆっくりと鍵穴に差し込む。手が震え、鍵と鍵穴がかちかちと音をたてる。
一つ、大きな深呼吸をしてから奥まで差しこむ。奥までざっくりと入った鍵をゆっくりと回した。
カチンと箍が外れる軽い音が聞こえる。静かな廊下に、その音が響き渡る。
有希の吐息の音さえも響きそうなほどに静かな場所だった。
取っ手に手をかける。押すのか引くのか逡巡して、足に力を入れて後ろに引っ張った。
重い扉はゆっくりと、だが確実に開いてゆく。
ようやく有希一人が通れるほどの間が空いて、有希は手の力を抜き、滑り込むように部屋の中に入った。

部屋に入った途端、思い出したかのように貧血が起こった。膝に力が入らなくなり、頭が重い。
「っ……」
有希はそのまま床にへたりこんで肩で呼吸をする。
日差しの差し込む部屋は酷く静かで、有希のぜいぜいという呼吸音まで部屋に響き渡っていそうだった。
（あたま……いた……）
ギーギーと耳鳴りが聞こえ、頭の真中がキリキリと痛む。痛みが断続的にやってくることには慣れたが、痛みに慣れたわけではない。それに痛みはやってくる度に強く、痛くなる。痛みのやり過ごし方がわからず、頭を抱えてうずくまって唸る。
「う、あぁ……ぐぅっ」
身体中が火照っている。熱いのに、寒い。首筋から全身に鳥肌が立つ。
視界がちかちかと明滅する。痛みから、寒さから逃げようと身をよじっても何もなくならない。
「……ぅぁあああああああ！」
声にならないうめき声が出る。それなのにその声は自分の耳にすら入らない。聴覚が利かないのだ。
明滅していた視界が、だんだんと黒く染まる。耳鳴りも遠のく。涙がボロボロとこぼれる。荒い呼吸は嗚咽でえづくことによって上手くできない。苦しさでまた涙が溢れる。
（いやだ）
ここで意識を手放したくない。
意地でも立ち上がってやろうと、顔を上げる。目をしっかりと見開いて、部屋の中を睨んだはずなのに、その世界は黒に包まれていた。
（そんな）
何も見えない。何も映らない。確実に目を開けているのに、顔

を上げているのに。
何も聞こえない。耳を塞いでいるわけでもないのに、一切の音——自分の声すら自身に届かない。
三半規管が狂い、ぐにゃりと足元が歪んだ気がした。頭もつられて揺れ、そのまま横に倒れた。
床は平たいはずなのに、波打つように揺れていて、酔ったような不快感が胃にくる。
「いやだ……」
ぐずぐずと黒に飲み込まれる。必死にもがこうと足掻いても、どこへ行けばいいのかわからない。
また一人ぼっちになってしまった。黒い不安に飲み込まれないように、からめとられないようにと一生懸命逃げてきたのに、また捕まってしまった。
掠れた声が喉から絞り出される。
(だれか、だれか)
「たすけて……」
「いいわよ」
凛とした声が耳に入ってきた。それから全身黒に埋まった中から腕を引かれる衝撃。引き上げられる感覚。額に当てられるひんやりとした、てのひら。
寒くて奥歯がガチガチと鳴っていた。そんな有希を安心させるように首の後ろにもてのひらが回る。
「バカねぇ。こんなになるまで力使って」
「ヴィ……ヴィ……？」
「そーよ。アタシ、待っててアゲルって言ってなかったァ？」
言葉が耳に入るようになった。しかし、頭が動かず意味が飲み込めない。有希はヴィヴィに言葉を返さず、そのままうな垂れていた。
冷たくてやわらかな手が、身体中のすべての淀んだものを一気に吸い取るような、そんな感覚が駆け抜ける。

体感でものの数十秒。ヴィヴィの手が放される。目を瞬かせると、視界は澄み切っていて、鉛を抱えたように重かった体は驚くほど軽くなっていた。
「ど……して？」
気だるくて、重い感覚は慢性的になっていて、こんな軽やかな身体を忘れていた。
「どーしてって、アンタが言ったんでショ？　たすけてって」
手の平大の赤とピンクの布でつぎはぎされたワンピースを纏っているヴィヴィは、肩をすくめて言った。
「それと……ここまで来られたゴホービ」
「ご、ご褒美……」
悪戯ににんまりと笑うヴィヴィは、有希の顎を掴んでくいと上げる。
「そ、アンタにはこれからまだまだ楽しませてもらうから、先行投資ってヤ・ツ」
「意味、わかんない……」
「んなモン今は知らなくていいわよ。――それより、行かなくていいの？　アンタの騎士ントコ。そろそろ死ぬわよ？」
くいと顎でしゃくる。
部屋は応接室なのだろうか。白いカーテンが掛かった窓際に大きな机と椅子。そして部屋の真中にソファがあった。そしてその向うには重厚な扉があった。
「――――っ」
心がさあっと冷える。『死ぬわよ』と言ったヴィヴィの言葉は、絶対に嘘ではないとわかる。
「ルカ！」
悲鳴にも似た声が喉から出る。死んでしまうかもしれないという恐怖で膝が笑う。
力が抜けそうな膝をかろうじて動かして走る。激突するように扉に手を付き、その勢いで思い切り扉を押す。

体力を取り戻した身体では、易々と扉が開いた。

開いた扉の向うは、学校の教室と同じくらいの大きさのだだっ広い部屋だった。白い壁と白いカーテンに囲まれ、奥にぽつんと一つ。大きな白いベッドが置かれていた。

「――――っ」

思わず呼吸が止まる。純白に包まれて眠っている、その人物。

部屋の端から見てもわかるほど、その顔は疱瘡で真っ赤に染まっていた。見覚えのある、憎らしいほどサラサラしている金髪が見えなければ――否、そこに居るのが彼だと知らされていなければ、判別すらできないだろう。

「っルカ！！」

喉から声がひり出る。悲鳴じみた声が、しんとした部屋に響く。

ことばが口から出たのと同時に、身体が勝手に前につんのめるような形で走り出す。そして絨毯に滑って転んだ。

べしゃりと柔らかな絨毯に両手を放り投げて激突した。全体に衝撃が走ったと思ったら、頬がずるずると擦れた。

「みっともないわねぇ。ガキじゃないんだから、滑って転ぶなんてアホなこと、この場面でするぅ？」

けたけたと笑いつづけるヴィヴィを無視し、有希は立ち上がる。ベッドサイドに駈け寄る。

「～～～～っ！！」

そこで眠るルカの顔を見て、息を呑んだ。

真っ白なシーツ、真っ白な毛布に包まれたルカは、膿んだ傷口が有希の前で破裂してゆく。遠目には気付かなかったが、あちこち血が出て、枕もシーツも、血で滲んでいる。

（同じだ……）

王妃と同じ症状。十日熱が恐ろしいほどの速さで進行している。

目を背けてしまいたいほど痛々しい姿に、有希の心臓がきゅっと縮まる。

（もっと早く。こうなる前に来れたらよかったのに）
いつか見たときよりも、髪の毛が伸びている。眉にかかる程度の長さだった前髪は、頬にかかるほどだ。
（ごめんなさい）
遅くなって、ごめんなさい。
伝えたい事は沢山あるのに、言葉がのどでつまって上手く出てこない。
「ごめん、なさい」
かろうじて謝罪の言葉だけが出る。しかしその寝顔は答えない。
ベッドによじ登り、身を乗り出してルカを真正面から見据える。真っ白に包まれた金髪と真っ赤な顔。
その両頬に手をやる。――いつからか力を使う感覚が少しだけ制御できるようになっていた。自分の手と、ルカに神経を集中させる。すると途端貧血が起こり、頭がくらりとゆれる。――その感覚も、もう慣れたものだった。
ずしんと身体が重くなる。手足の末端が痺れ、視界がぐらぐらと揺れて、視界がちかちかと明滅する。
ねぇ。呼びかけて、有希の額をルカの額にこつんと当てる。額にルカの血が付くのがわかる。そのまま目を閉じて、話し掛ける。
「――ルカ、早く良くなって」
目を開いても視界が白い。ホワイトアウトしているのか、それとも自身の力が作用しているのか、もうよくわからなくなっていた。
「ずっと、ずっと会いたかったんだよ。ねぇ……ルカ……きいてる？」
視界が白で染まる。ゆるゆると意識が遠のく。
けれどもそれは、決して不快なものではなかった。

96

唐突に意識が覚醒した。まるで二度寝をしてしまって、明らかに間に合わない時間に起きてしまったことに気付いている覚醒によくにている。

なにが起こっているのかわからないぼんやりとした頭ではなく、自分の置かれている状況を的確に認識してからの目覚め。

「――っルカ！」

がばりと起きる。その瞬間、軽いめまいが起きる。それでも確認しなければと両手を伸ばす。ルカの居た辺りに手を這わせると、ざらざらした肌の感触があり、それが有希の指に触れるとぼろぼろとはがれてゆく。

――かさぶたが、はがれているのだ。

「……よかった」

掠れた声が出る。まだ白んでいる視界の中から、自分の指先から広がる肌色の皮膚を探す。その顔は未だ起きる気配はないが、少なくとも死ぬ事だけはなくなったのだという安堵がある。

「なんで、あんな……」

あんな十日熱、一体誰から感染したんだと毒づいて、へなへなとルカの上にもたれかかる。有希頭が丁度腹部のあたりに乗っているのだろう。呼吸のたびに上下するその振動が心地よく、そのまま眠ってしまいそうになる。

「当たり前じゃない。王妃と同じモノやったんだもん」

ヴィヴィの自分が発端だというような口ぶりに、有希の目が驚愕で見開かれる。顔を上げ、後ろを振り返る。大きなベッドの足元で寝そべっているヴィヴィは、にんまりと笑った。

「なん……で？」

掠れた声が出る。どうしてこんな酷い事をしたのだ。どうしてそんな所業をして、罪悪感も感じず、平然としていられるのか。

（こんなの、酷いよ）
ヴィヴィはベッドから降り立つと、蔑むように有希を睨む。
「なんで？　んなモン、制裁に決まってるじゃない。あのクソ女は呪詛を使ってアタシを殺そうとした。だからアタシはそのまま返した。そうしたらヘンな十日熱に感染することになった。それだけの話よ」
「じゅ、そ？」
「あぁ、アンタなにも知らないんだっけ。呪いよ。人間はアタシ達みたいに言葉に力がないから、犠牲が必要なの。古来から伝わる魔術の一種よ」
呪い。犠牲。贄。――それから、ヴィヴィがクソ女とのたまる王妃の所業。
「ルカを……生贄に……」
「だっから何度もそう言ってるデショ！？　自分の騎士を贄に使われそうになったのに、その相手を治すアンタが理解できないわ」
「でも王妃が……なんで」
（何で、ルカを）
そぉねぇ。ヴィヴィが顎に手をやり、小首をかしげる。
「アタシを殺したい。けれど自分では敵わない。そうだ、呪い殺そう！　でもそれだったら贄が必要だ。それも高貴な贄が。そう考えたんじゃないのォ？　そして気付く。――あぁ、あのイラナイ子達を使おうって」
「なに、それ……」
「あのクソ女以外の子供でしょうね。実際もう一人の贄は死んだわよ。一回目はアタシも不意を突かれたから、慌てて返した時にはあのクソ女は上手く逃げてたのよねェ」
「もう一人……？」
（そういえば）
随分前に、アドルンド第三王子が十日熱で亡くなったという話を聞いた。

「もしかして」
有希の考えた事を悟り、肯定するようにヴィヴィは頷いた。
（かわいそう）
振り返り、ルカの顔を覗き込む。赤黒いかさぶたにまみれた顔は安らかな顔をしている。規則的な呼吸で上下する胸を見ると、とてつもないやるせなさに襲われた。
もう、こういう風に呼吸すらできないようになってしまった犠牲者が居たのだ。
「……どうして、贄にまで仕返しがくるの？　そんなの、あんまりじゃない。だって……その人たちは何も悪くないのに。何もしてない、むしろ被害者なのに……こんな」
「アンタやっぱり馬鹿ね。何もしてないって訳ないじゃない。自身の身体全部を使ってアタシを呪おうとした。本人の意思に関わらずにね。それが事実でそれが全て。――もしかしたらアンタが知らないだけかもしれないわよ。この騎士も、もしかしたらアタシを心底憎んでいたかもしれないわよ。そしたら贄になるのだって本望でしょうに」
「ルカはそんなこと！」
「ハイハイしないかもしれないわね。甘ったれのユーキちゃん。――アンタ、わかってんの？」
「え？」
突然胸倉を捕まれ、引っ張られる。首の後ろがきゅっと締まる。
十歳ばかりの体格に見合わない力で有希を持ち上げる。そして有希を見据えてにっこりと微笑んだ。
「アタシを殺そうと考えてたそのクソ女を、アンタが助けたってコト」
紫色の瞳が濃く揺れる。それが怒りから来ているものだと判ったが、気付くのが遅すぎた。底冷えする笑顔を称えたまま、ヴィヴィは喋る。
「……ぁ」

「……でもまぁ、丁度いいのかもしれないわね。このままだと悪化するし、アタシそこまで面倒見てあげる気もなくなったし。一世一代の大博打っていうのもアリかもしれないわね」
「な……に、が？」
「またそうやって聞く。アンタはなんでもかんでも聞いてばっかね」
「ご、ごめん……なさい」
ヴィヴィが一体何を考えているのか、何について話ているのかさっぱり見当がつかない。
ただ判る事は、直接の原因は王妃だが、ヴィヴィがルカを危険な目にあわせたということ。有希が王妃を助けたことでヴィヴィの溜飲は下がらないこと。そして、ヴィヴィが有希に対して怒っている事。
どう謝罪したらいいだろう。そんなことばかり頭を巡る。
詳しくはわからないが、王妃はルカを危険に晒した。何故。と思うけれども王妃に対して憤りも憎しみも湧かない。ただただ疑問符だけが上がり、何故そんなことをしたのかを知りたかった。
（でも……もし王妃のしたことを先に知っていたとしても、見捨てる事はできなかっただろうなぁ）
「……アンタ、考えてる事全部顔に出てるわよ」
「えっ」
「はぁ。なんておめでたい頭なのかしら。本当に脳ミソ詰まってる？」
襟首を捕まれていた手が緩む。膝立ちになっていた状態から、すとんと座りベッド尻をつく。
「アンタがビビんない通り、アタシはそんなに怒ってないわ。――確かに、アタシを殺そうだなんて言語道断なんだけど、クソ女を殺そうと思えばいつでもできるわけだし」
「……え？」
「アタシはね、アンタがビビって『あたしどうしたらいい？』って聞いてくるの待ってたんだけど……知らないうちに図太くなったわ

ね。開き直るだなんて」
　くねっと身体を揺らし、有希の真似をする。
「ひ、開き直ってなんか……」
「開き直ってるジャン。後悔してないみたいだしぃ？」
　ヴィヴィは何を思いついたのだろうか。にんまりと笑う。そして口を開きかけた瞬間、はっとした表情になり、突然後方を振り返る。
「誰か来たわね」
「え！？」
　有希は驚いて開いている扉を見る。その更に奥にある扉は、ぴくりとも動いていない。
　ヴィヴィはちらと振り返りルカを見やる。そしてまた、扉を見遣る。
「……面白いモノ持ってるわね。あの子」
　有希を見てにんまりと笑い、指をぱちんと鳴らす。その瞬間、ヴィヴィは大量の薔薇の花弁となり、はらはらと散ってしまった。
「ちょっと！　ヴィヴィ！」
　薔薇の花弁を睨んで叫ぶ。薔薇の花弁は段々と透明度を増し、最後は透けて消えてしまった。辺りには濃厚な薔薇の香りが漂うだけだった。
「え、え、えぇ！？」
　慌てふためいてあちこち見回す。
　一体誰が。何で。何のために。
「鍵が閉まってて誰も訪れないハズなんでしょう！？」
『寝返りを打たせるためにメイドを遣っている』
　ラッドの言葉が蘇る。メイドかもしれないと思ったが、ラッドがメイドを買収したと言っていたではないか。
　オルガが兵をこちらに向わせたのだろうか。
「……まさか」
　そうだとしたら、あの態度も演技だったのだろうか。体調が優れなくてよく考えられない頭だったが、オルガがどこか弱っているよ

うな気がしたのに。――初めて、オルガの本質のようなものに触れられた気がしていたのに。
「ど、どどどどうしよう、ルカ！」
慌てふためいてにじにじとルカの顔の横あたりまで移動する。キングサイズよりも大きいベッドは、顔のすぐ横に座り込んでも、まだスペースが沢山ある。
ルカの顔を覗き込む。肩を揺さぶって見るが、穏やかな寝顔は変わることがない。
「あ、ベッドの下！」
もぐってやり過ごそうと光の速さでベッドを降りる。そして真っ白なカバーを捲り上げて、有希は絶望した。
「……なんで全部木で覆われてるのよ……普通ベッドの下って収納スペースでしょぉ？」
ベッドの下は、重厚な飴色の木で覆われていた。
雑にカバーを下ろし、もう一度ルカの肩を揺さぶった。
「ねぇルカ！　ルカ！　誰か来たんだけど！」
がくがくと首が左右に揺れる。そのたびにどこかで擦れたかさぶたがポロポロと首元に落ちる。
「……だめかぁ」
ふぅと息を吐く。そして扉を見遣る。――扉が開きそうな気配はない。
「ヴィヴィは誰か居るって言ってたけど……入ってこないね」
挙動不審に慌てていた間で結構な時間も掛かっただろうに、扉はぴくりとも動いてない。
「ねぇルカ、誰が――」
言いながら視線をルカに遣る。そして有希の心臓がどきんと跳ねた。
「っルカ！？」
ルカが眉をひそめてうなされている。そして小さく呻き声をあげる。

「――――ッ」
「ど、どどどうしたの！？　え、なに？　だいじょうぶ！？」
とにかく起こさなければ。揺すろうと肩に手を伸ばした。
「……さま」
「え？」
切なげに歪んだ顔。その表情に見覚えがあった。
『どうしても、あなたが消えない』
いつだったろう。ひどく酩酊したルカに遭遇したときのことだ。
ルカは有希を誰かと間違えた。
『ルカと、呼んでください』
初めてルカの名前を呼んだ、あの夜のことだ。
「……ルカ」
ルカは苦しそうに顔を歪める。左右に首を振ったので、長くなった前髪が顔を覆っていた。
「だいじょうぶ……？」
返事はないだろうとわかっているが、声を掛ける。顔が見えないので、手で髪を払う。
「……ぇ、さま。ど、して……」
「っ！！」
髪を横に分けたまま、有希の手がぴたりと止まる。否、身動きが取れなくなった。かさぶたに覆われた目じりに涙が溜まっていた。
驚きからか、唐突に心拍数が上がる。身体中がむず痒い感覚に襲われる。
（なに……）
ひどく落ち着かない。文字通り心臓がどきどきと言っている。殆ど白に近い睫が涙で濡れている。
いつもいつも綺麗な顔だと思っていた。おとぎ話に出てきそうな容姿だと。
いまさらその美しさに――それもかさぶたにまみれた顔でいるときに気付くだなんて。

「やだ……」
なにに対しての否定の言葉なのだろうか。自分でもよくわからない。わからないけれど、言わなければと思った。言わなければ。言わなければ、認めてしまう。
「泣かないでよ……」
片方の手は髪を梳いたまま、空いた手で目じりの涙を拭う。
親指でやさしく触れる間中、ずっと鼓動は高鳴ったままだった。
今まで何の躊躇いもなく触れていたのに、何故か萎縮してしまう。自分が触れていいものなのか。ルカは起きていないのに問い掛けたくなってしまう。
ルカはうわごとのように小さな声で呟いている。否、有希の知らない『誰か』を求めている。
途端、心臓の奥。胃のあたりに不快感が広がり、きゅうっとしめつけられる。
「……誰の名前呼んでるの？　あたしは……ユーキだよ……」
どこか苦しそうに唸るルカにつられ、有希の顔も苦しく歪んだ。

97

カツンと聞こえたそれは、とても控えめな音だった。
小さな音は恐ろしいほど静かな部屋に響き渡る。
「――っ！」
驚きで指が強張った。ぴくりと動いたのでルカの瞼を軽く掻いてしまった。
振り返って、扉の奥の扉を見遣る。
カツンと、もう一度音が響く。
（そうだよ……ルカに見惚れてる場合じゃなくて……）
自嘲するように内心で毒づき、更にはっとして首を振る。
「そ、そもそも、見惚れるとかじゃ、ないし」
ぽそぽそと誰にいう訳でもなく言い訳をする。
（ど、どどどどうしよう。ベッドの下もだめだし、この部屋……何も無いんだもん）
ただ広いだけの部屋に、あるのは真っ白なベッドとカーテン。カーテンは白のレースで、その中に隠れるということも出来ない。
「……メンデ。居るんでしょう、ラッドル・メンデ。もう良いでしょう？　そろそろわたくしも入らせて？」
女の声が聞こえた。どきりとして扉を凝視してしまう。扉はカツカツと、急かすように叩かれている。
「ねぇ、約束の時間はとうに過ぎているわ。どうして迎えに来てくださらないの？」
責めるような、しかしそれでいて優雅だというのが、扉越しに篭っていても理解できる。
（貴族の……人？）
有希の中ではそのくらいしか思いつかない。
しかし何故。どうして。
（ラッドの事を知ってる……迎えにって……どういうこと？）

はじめからこの部屋に来るつもりだったのだろうか。それもラッドが迎えに行くというのはどうしてだろう。
「あら、鍵が開いているわ。中にいらっしゃるのなら開けてくださいません？」
そのまま黙っていると、焦れたような声が聞こえる。
「ラッドル・メンデ！　貴方がルカートに会わせてくれると言うから、わたくしは人払いさせたのですよ？　あなただけ、あなただけルカートに会うだなんて、卑怯ですわ！　――もう！」
ずず。と、引き摺る音が聞こえる。――扉をあけようとしているのだ。
しかし、重い扉を引くにはあまりにも非力なのだろう。振り絞るような声が廊下に響く。
（ど、どどどうしよう！）
困惑に拍車が掛かり、ルカの目じりに溜まった涙をふき取る。――何故か他人には見せたくなかった。
そしてベッドから降りて布団を直す。もう唸っていない、穏やかな寝顔を確認する。
（よかった……）
たとえ夢にうなされていたのだとしても、あんな苦しそうな顔は見ていたくなかった。
（それに、兵でもなさそうだし）
ずずずと音を立てて開いている扉に目を遣る。一旦動いたら、その慣性で開けやすくなったのだろう。扉は人一人通れるほどに開いた。
先ほどの有希と同じように、少しの隙間からするりと部屋の中に入って来た。
深いパールベージュのドレスが揺れる。早足で動いたために裾がふわりと揺れる。剥き出しの肩には同系色のストールが掛けられている。　薄青の長い巻き髪も同時に揺れる。白い肌に薄青がとてもよく映えていた。

（うわ、美人……）
ベッドの横に佇んで、侵入者を眺めていた。侵入者はラッドの名を呼びながらきょろきょろとあたりを見回し、そして扉の奥で立っている有希と目が合う。
「……あら。ラッドは居ませんの？」
「え」
侵入者は有希の隣のベッドに気付くと、迷いなく優雅にそちらに歩む。
「それから、本日はわたくしがルカートの寝返りを打たせると言ったはずだけれど？」
責めるような口調で有希を睨んでいる。つり気味の黒色の瞳が、まっすぐに有希を捕らえている。
現状を把握しようと、頭をフル回転させる。
ラッドが何がしかの手をつかって、ルカの部屋に入るメイドを払ったと言っていたではないか。それは、今有希に向って歩いているこの美女が絡んでいるということではないだろうか。
（でも、何て言ってお願いしたんだろう）
ラッドが侵入者に何と言ったのか、有希には皆目見当がつかない。
「……聞こえませんでしたの？　わたくしはあなたに下がるように言ったのですよ？　ラッドはまだ来ていないのでしょう――ラッドル・メンデが今から医者を連れてこの部屋に参ります。申したように、本日の仕事はわたくしが行います――下がりなさい」
年は二十代中頃だろう。侵入者は高圧的に有希を見下ろす。その言動にいささかむっとしたが、説明をしてくれたお陰でラッドが侵入者に何と言ったのか、おおむね見当がついた。
「あたしがその医者です。ラッドには……戻ってもらいました。――あの、失礼ですがあなたはどちら様ですか？」
侵入者は一瞬、きょとんとした顔で有希を見た。何か納得したのだろうか。嘲るような笑みで侵入者は言った。
「そういえば”奇跡の娘”は辺境な地から来たと聞いていたのをわ

すれていましたわ。――わたくしはシエ・レーベント。ルカートの主ですの。わかりましたらば態度を慎みなさい？」
「はぁ……ッハァ！？」
高圧的な剣幕に思わず生返事をし、逡巡して気付く。
（ルカの、主ぃ！？　そんなのありえないでしょ。だってルカの主はあたしだし）
有希よりも頭一つ分ほど背の高いシエを見遣る。黒曜石のように艶やかな黒い瞳も有希を見下ろしていた。何かを思案するように口元に手を遣る。その手に嵌められていたものに、有希は目を奪われた。
「なん……で？」
シエの手――小指に、見覚えのある指輪が嵌められていた。紫色に光る、銀の指輪。
それは紛れもなく、紫の騎士を持つ者が嵌める物。
「――あぁ、だから言いましたでしょう？　わたくしがルカートの騎士だと」
「いや、だって！」
（ルカの主はあたしで！！）
心の中で叫ぶ。それは口にしていいものなのだろうか。言ったとして証明できるものは何一つない。唯一証明になるものは、目の前のシエが何故か持っている。
「だって……他の人と契約してる……のに」
うろたえてしどろもどろになる。有希が主ということは事実なのに、指輪を持たれているという事だけでひどく心許なかった。
「あぁ。魔女ですわね。――あの魔女は死にましたわ。今はわたくしが主人ですの」
シエは何事も問題がないかのように言う。
（……なによそれ）
魔女が死んだ。それは有希が死んだということなのだろうか。有希はこの場に居るというのに。

混乱した頭は働かない。シエは焦れたように言葉を続ける。
「そんなこと、貴方には関係のない話でしょう――早くルカートを治してくださいません？」
「え、あ……」
「あの魔女が死んで清々しましたわ。あの魔女の所為でこうやってルカートが苦しんでいるんですもの」
「……どういう、ことですか？」
「あぁ、貴方のような方は騎士とは無縁ですものね、知らなくても恥ずべき事ではないわ」
ふふと蔑むように笑うと、シエは微笑みを称えて謳うように話す。
「貴方、騎士と主人の間に必要なものはなんだと思って？」
突然の質問に、え、と口篭もる。
（必要なもの……）
そんなものあるのだろうかと、有希とルカ、ヴィーゴとセレナ、ティータとナゼットの組み合わせを思い浮かべる。ふと、セレナが発していた言葉を思い出す。
「……一生付き合っていくっていう覚悟？」
「そんな瑣末な事ではないわ」
一々馬鹿にするような物言いに、不快感で眉にシワが寄る。
「主従の契約を交わすと、騎士は全体的な肉体能力が上昇致しますわ。それがどの程度上昇するかも個々で違うんですの。貴方、それが何を基準にしてかわかって？」
騎士との主従契約について、まだ知らない事があったのかと驚きを隠せない。能力が強固になるのも、一律おなじ程度、もしくは色号での違いなのかと思っていた。
知らないと首を振ると、シエは満足気に笑む。そして瞳を潤ませうっとりと語る。
「想う気持ち、ですわ」
「……はぁ」
確証のなさそうなものではないかと拍子抜けしてしまう。

「好意が欠片もなければ騎士は普通の人間となにも変わりませんのよ。主人が騎士を想えば想うほど、騎士は強くなりますの」
うっとりと陶酔するようにシエは語る。何に気が向かったのだろう。瞬時に酔いしれる顔から、敵意剥き出しの顔に変わる。
「ですからあの魔女がいけないんですの！　あの魔女がルカートを利用しようと無理矢理契約させたのに違いないですわ！　魔女が微塵もルカートの事を想って居ないからこそこのような事が起こりましたのよ！　もしあの時既にわたくしと契約してましたらば、ルカートがこんな目に遭わずにすみましたのに！」
どきんと、心臓が跳ねる。
「……なに、それ」
「……それでも、魔女には感謝しなければならないところもありますわ。あの魔女が居たからこそ、ルカートはまた契約できるようになったんですもの。――それよりも、ルカートの治療はまだでして？　奇跡の娘の力というのも、噂で誇張されただけの粗末なものなのですの？」
「……って……さい」
「――今、何と仰って？」
「出てって下さいって言ったんです！」
心臓が早鐘を打っている。激しく流れる血脈は有希の涙腺を刺激する。
あっけに取られた顔で呆然としているシエの肩を掴み、ぐいと押す。
「治療の邪魔です！　出てってください！」
突然の行動に驚いたシエは、傾いた体が倒れないように後退してゆく。寝室からシエが出るのを見届けて、有希は両手を離す。そして二つの部屋を繋いでいた扉を閉めてガチャリと鍵を掛けた。そのまま扉に背を預けて、ずるずると下に落ちる。
「何ですの突然！　ここを開けなさい！」
憤慨したようなシエの言葉が扉に掛かる。扉を叩かれるかと思っ

たが、貴族にはそんな習慣がないのか、彼女自身に習慣がないのか、罵倒の言葉が耳に入ってくるだけだった。
しかし、その罵倒の言葉も、声が聞こえるという程度の認識で、何を言っているのかは分からない。分からないほどに、混乱していた。
「……想いの度合いで変わる？　なにそれ。想えば想うほど強くなるって」
うわごとのように言葉が紡がれる。
『あの魔女がいけないんですの！』
恨めしいシエの声が耳に入る。自分を責められているようで、心臓がきゅっと締まって身がすくむ。
想いの度合いで騎士の能力が変わる。
ルカは騎士でありながら十日熱に感染した。
そして治る事なく、悪化の一途を辿っていた。
『魔女が微塵もルカートを想って居ないから』
「なによそれ」
頭でリフレインされる言葉に返事を返す。
視界に入るのはベッドの足とシーツ。そこで横たわっている人物は視界に入らない。視界に入ってなくて良かったと、束の間の現実逃避をしてしまう。
今彼の姿を見たら、消えてしまいたくなるに違いない。
（だって……）
自分なら彼を治療できると意気込んでいた。今はそう思った事を心の奥底から恥じたい。
「ルカが十日熱に感染して治らなかったのは……あたしのせい……」
ルカが十日熱に感染していれば、再会できる。そうラッドは言っていた。理想の形と違えど、こうしてルカの顔を再び拝むことが出来た――なのに、胸が痛む。
「なんなのよぉ」
もしルカの十日熱が治っていたならば、また別の形で会うことが

できたのかもしれない。
しかしそうはならなかった。
その原因は、有希自身にあったのだから。

98

どのくらいの時間、うな垂れていたのだろうか。
背中を預けている扉の奥からはもう声が聞こえない。諦めて出て行ったのか、それとも開くのをソファに掛けて待っているのか。いずれにしろ、しばらくシエの顔は見たくなかった。
背中からずるずる落ちたので服の裾がめくれ、太ももが外気で冷える。
（ルカ……）
のっそりと立ち上がり、ベッドサイドに腰を掛ける。有希の体重でベッドが少しきしんだ
ルカは未だ眠っている。先ほど苦しそうに顔を歪めていたのが幻だと思えるほどに、健やかな寝顔だ。
「……ごめん、なさい」
胸が痛い。
「出会わない方が良かったのかも……契約するのも、あたしじゃなくて、あの人の方が良かったのかもしれない」
だってあんなに綺麗で、あんなに高貴な人だ。
何も持たない有希とは比べること自体が間違えている。
「そしたら、ルカはこんな苦しい思いをしなくてもよかったのに」
手を伸ばす。頬に手を添えて、親指で頬を撫ぜる。中途半端に頬に付いていたかさぶたは簡単に剥がれ、綺麗な肌色が目に入る。
「あたしが居なくなれば、あの人に想われて……こんな風に苦しむ事はなくなるかなぁ」
返事はない。ルカの顔をのぞき込む。睫はぴくりとも動かず、ただ規則的に胸元が上下しているだけだ。
窓から差し込む光が橙色に変わっていく。
じわりと滲んだ涙が頬を伝い、ルカの頬にぽたりと落ちた。
「あたしの……せい」

ぽつりと呟く。
「そ。アンタの所為」
ヴィヴィの声が部屋に響く。その途端、どこから現れたのか、真っ赤な薔薇の花弁が部屋中に舞う。
「――っヴィヴィ！」
けたけたと笑う声が響く。風も吹いていないのに薔薇の花弁は躍るように舞い上がり、舞い降りる。
声は八方から聞こえる。まるで薔薇の花弁全てがヴィヴィだというように、有希の周りを花弁が舞う。
瞬きを一つする間にそれらは全て消え、ルカを挟んだ反対側のベッドにヴィヴィが有希に背中を向ける格好で座っていた。
「あーあ、面白かった。その腐抜けたカオったら！　笑い堪えるのタイヘンだったわぁ」
首だけ回して有希を見る。にやりと笑った顔は愉楽という言葉がとても似合う。
「騎士を病気にさせた挙句に契約の指輪まで他人に取られてぇ。主失格なんじゃないのォ？　絆も何もあったモンじゃないわねぇ」
「……っ」
まさにその通りで返す言葉が見つからない。有希は苦悶の表情を浮かべて俯いた。そんな有希を気にするでもなく、ヴィヴィは言葉を続ける。
「で、アンタはどうするわけ？」
突然の質問にはっと顔を上げる。ヴィヴィはもう笑みを浮かべておらず、至極真面目な顔をしている。言葉の意味がわからないでいると、次いでヴィヴィが言葉を重ねる。
「アンタはアタシの邪魔をした」
「――っそれは！」
ヴィヴィが原因だと知らなかったし、目の前で苦しんでいる人を放っておくことも出来なかった。なによりも、ルカに会う為にしたことだった。

「別にどぉでもいいのよ。タダ、その為にアタシがやろうと思っていたことが成し遂げられなかった」
「やろうと思っていたって……王妃を……？」
「王妃？　そんなの取るに足らないコトじゃないわ。アタシが言ってるのはねぇ、この世界のコトよ」
「世界？」
　思わずきょとんとしてしまう。突然話が壮大に飛躍して、うまく理解できない。
「そう。世界は争いで混乱し、侵略と暴虐がはびこっている。殺し、殺され、また殺して。――数え切れないほどの血が流れる。そうやって世界の均衡はぐずぐずと崩れてきている」
　世界は戦争にまみれている。血が流れ、悲しみが溢れ、幸せなことなど何一つない。目の前のヴィヴィもまた、戦争に心を痛めているのだと思うと親近感が湧く。笑みかけると、ヴィヴィが反応してにんまりと笑った。その笑顔に有希はぎくりと身をすくめる。あの顔には見覚えがある――ヴィヴィが悪戯事を考えているときの顔だ。
「っていうことでユーキ、ゲームしよっか。今回はちょっぴりハードなゲーム。――この世界が崩れるのが先か、ユーキが均衡を取り戻すのが先か」
「……なにそれ。冗談だったら笑えないよ」
「冗談？　それこそ冗談デショ。アタシは常に全力で本気よ」
　飽きたのよ。ヴィヴィは声高らかに言う。
「やらなきゃいけないことがあった。別にアタシがやらなくてもイイっていうのに。それでもやってた。飽き飽きしてた。そんなときに邪魔が入った――だから、やる気がなくなった」
　わかった？　と問いながらにんまりと笑む姿は可憐だ。それなのにどうしてちっとも可憐に見えない。ただ冷ややかな恐さがあるだけだ。
「アタシは別に構わないの。この世界が壊れてどうなっても」

「壊れるって……なんか抽象的すぎてわかんない……」
ヴィヴィはあははと笑って、身体をくるりと反転させ、ベッドに両手をついて顔を有希に近づける。
「アリドルの全ての山の火山活動が再開される。それから魔物が出る。最近小物はちょくちょく山なんかに出てるらしいけど、そんなんじゃ比べ物にならないくらいの魔物が」
「魔物……」
一度だけ聞いたことがあった。この世界には極稀に魔物が現れると。聞いたことはあったが、魔物の絵を見たわけでも実物をみたわけでもないのでやはり想像がつかない。
「龍が起きて魔物が蔓延る。――この世界は始まりに戻る。簡単に言えばそういうこと。まっさらになってもう一度やり直し」
おどけたように言う。
「龍……」
魔物の話をちらと聞いたときに、龍の存在なんて聞いただろうかと頭をひねる。そしてあまりにも簡単に話すヴィヴィに、段々と苛立ちが募る。
何を考えているのかわからない。何をしたいのか、どうしてそんなことを言うのか。問えば答えてくれるだろうか。
「……どうして？」
「どうしてって、さっき先行投資したデショ」
「先行、投資……？」
「アタシはアンタを助けてあげた。だからアンタにはアタシを楽しませる義務がある。それからアンタもアタシの邪魔をした。だからアンタに拒否する権利はない。そぉゆーコト」
呆然としてしまう。なにがそういう事なのだろうか。
ヴィヴィを楽しませる義務。邪魔をしたその代償。だからといって、世界を掛けたゲームをしろだなんて、冗談にしては笑えない。
突然言い渡されたことが理解できず、思考が空転する。
（世界が……壊れる）

そもそも壊れるということ自体、想像が湧かない。魔物が出ると聞いても理解ができない。日本に居るとき、温暖化で地球の氷が溶けてまた氷河期がやってくるという話を聞いたことがあった。しかしそれは『壊れる』とは違う気がする。

（始まりに戻る）

この世界のはじまりとは、何なんだろうか。

ヴィヴィは何か大切な事を有希に伝えているはずなのに、有希はそれを満足に汲み取れずにいる。

「……どうして？」

「飽きたからって言ったデショ。だからユーキ、一生懸命頑張って、アタシを楽しませてちょうだい」

「……そんな」

習っていない公式を使う計算問題を出されたような、やらなければいけないのにその方法がわからない。

どんどん気分が落ちていく有希と裏腹に、ヴィヴィはもの凄く楽しそうだ。

「アタシはユーキ好きよ？　馬鹿みたいに素直で、愚かしいほど何も知らなくて。そんな可愛いユーキちゃんがたまらなくダイスキよ？　だから、ガンバッテね。世界を賭けたゲーム。けっこうスリリングで楽しいと思うわ、ユーキ」

高らかにヴィヴィは言う。瞳をキラキラと輝かせ、いきいきしている。

こうなってしまったら、きっとどうすることもできない。絶望的な気分を抱いたまま、有希はヴィヴィを見つめることしかできなかった。

「……一人でやるには大きなゲームだな」

ひどく、聞き覚えのある声が聞こえた。

その声を求めすぎて、幻聴なのではないかと疑ってしまいそうな程に、懐かしい。

体が金縛りに遭ったように強張って、上手く動かない。

かろうじて視線だけ下方へ向けると、先ほどまで穏やかな顔を浮かべて寝ていたその人物は、白金の睫毛に縁取られた蒼穹の瞳を瞬かせている。
（……どうして）
人はあまりにも驚くと、動けず声も出ないらしい。
ルカが目を開けていた。その瞳は狂おしいほどに懐かしい。
ぎこちなく身動ぎし、起き上がる。有希はどうすることもできず、自分に背を向けて起き上がったルカを呆然と眺めていることしか出来なかった。
けれどもその蒼穹と、有希の視線は絡まない。ルカの視線の先には、ヴィヴィが居る。
「アラ、――起きてたの？　人の話を盗み聞くなんて、王子サマがそんなことしちゃっていいの？」
何ヶ月も言葉を発していなかったとは思えないほど流暢な言葉が耳に入る。
「問題ない。遅かれ早かれ知ることになる」
「あらそ。……どうやって知るのかチョット興味わくわぁ。ユーキは喋らないかもしれないわよぉ？　どうやって詰問するの？　拷問？　それとも色仕掛けぇ？」
「……どうでもいいだろう。――そのゲームとやらには、二人で参加してもかまわないのか？」
「奇特な物好きが居れば、の話ね。――好きにしたらいいんじゃなぁい？」
「そうか」
「アタシね、図太くなったユーキに、少しだけ期待してる」
「――そうか」
「それじゃ、アタシは高みの見物でもさせてもらうわね」
二人の会話が一切耳に入らない。声は聞こえるのに、言葉の意味が飲み込めない。
ルカは有希に背を向けている。ヴィヴィと対峙している後姿し

か見えない。
「あとは二人でよ・し・な・に！　じゃ。楽しみにしてるわねぇ！」
ヴィヴィが笑む。ぱちんと音が聞こえて、ヴィヴィは真っ赤な薔薇の花弁になってひらひらと消えていく。
濃密な薔薇の香りが部屋を包み込む。
花弁が消えてからも、有希は微動だにできずにいた。元は白かったのだろう、緋に染まった服は、所々に白さと赤黒さがちりばめられている。その赤さが、有希の心臓をきゅっと締め付ける。
「……」
静寂が満ちる。風の音も、町の声も、なにもかも聞こえない。
――ただ、有希の鼓動の音だけが耳に響く。
やっと。
やっと逢えた。
生きている、動いている――起きている。
唐突に涙腺が緩む。鼻の奥がツンとして、瞼に熱が篭る。
「……冷えるな」
沈黙を解いたのは、ルカだった。
「どうやら俺は、長いこと眠っていたらしいな。――お前にも、多大な手間を掛けさせたようだ」
背中は振り向かない。振り向かないが、有希は首をぶんぶんと振る。
「そんなことない！　そんなことないよ！　あた、あたしが……っ」
あたしが悪かったんだから。その言葉を言おうにも喉がひくついて言葉が出ない。涙がボロボロと零れ、上手く呼吸が出来ない。
「――――ルカ」
掠れた声で小さく呟くと同時に、目の前の人物が身をよじり、ベッドが軋む音が聞こえた。
赤、白、金と――――碧。
それらが全て有希の視界に入った瞬間、目の前が薔薇の花弁で一杯に染まった。

99

どのくらい時間が経っただろう。
目を覚ましたルカは、視線を合わせた瞬間に、十五歳程の姿から十歳の姿に変化した有希に驚いた。
有希はルカに問われるがまま、今までの経緯を話した。
処刑されそうになった夏の始まり。秋も半ばに来ている今まで。
魔女に拾われ、リビドムでリフェノーティスに会い、セレナとヴィーゴとアドルンドに向かった事。
戦争が起きている事、リビドムが独立しようとしていること。
けれど、有希の胸元の傷と、王妃がルカを贄として使おうとしていることはどうしても言えなかった。
話し終わる頃には、橙に染まり始めていた空はとっぷりと暮れて濃紺色になっていた。

「……本当に、長いこと寝ていたんだな、俺は」
「うん。でもどうして……」
どうしてこんなことになっていたのか。有希の疑問的確に把握したルカは、どこか遠い目で答える。
「兄様と一悶着あって地下牢に繋がれてな……。母上はどうやら俺を何かの呪いの贄に使いたかったみたいだな」
「――っ！！」
「……知っていたのか」
こくりと頷く。そしてはっと、言い忘れていた事を思い出した。
『――もしあの子が起きたら、お前の思うようにしなさいと言ってくれるかい？』
何故か丁度いい大きさの服のポケットに手を突っ込む。そして、紫銀の騎士証を取り出す。
「……コレ、オルガから」

「――兄様から？」
「うん。それから、お前の思うようにしなさいって。……伝言」
ルカは差し出された騎士証をしばらく見つめ、そして有希の小さな手から受け取った。
「……そうか」
その顔は無表情で、ルカが何を考えているのか、有希には分からない。
「……ルカ」
「行くか」
「行くって、どこに？」
「リビドムだ」
そう言うと、もぞもぞと動いてベッドから降りる。動くと同時にかさぶたがポロポロと剥がれ落ち、腕から肌色がまだらに露出する。
「え、え！？」
ベッドの上にぽつんと取り残されたまま、ルカは迷い無くまっすぐ歩く。
「なんで？」
「ガリアン殿と約束した」
ガリアンとの約束。それは、リビドムの独立の支援。
「――っルカ！」
滑り落ちるようにベッドから降り、ルカの服を背後から思い切り掴む。
「どうして……っどうして！？　マルキーとアドルンドは戦争してて、リビドムは独立するために戦いを起こすっていうの。ねぇ、どうして？　どうして争わないといけないの？」
どうして傷付け合うのか。どうして血を流さないと解決できないのか。力がなければいけないのだろうか。
ルカは振り向かないまま答える。
「さぁ。――そう、せざるを得ないからじゃないか？」

「なに、それ」
「それぞれが抱く信念や正義。誇りとも言うのかもしれない――それらを守るために、かもな」
そう言って振り向く。未だ血が乾いていない服を握り締める有希を見下ろす。
「皆平穏を、繁栄を求めている。――それらを追うためには邪魔だから、戦争をするんだろう」
「なにそれ……イミ、わかんないよ……。平和に暮らすために、誰かの平和を侵すだなんて、自ら戦火を起こすなんておかしい、おかしいよ！」
「……そうだな。だからこそ」
大きな手が、有希の手を掴む。顔を上げると、かさぶたにまみれた美しい顔があった。心なしか口角が上がっているような気がする。
「リビドムに行く。まずはこの戦乱をなんとかしなければならないからな」
ほっと、体の中のどこかの――ずっと張りっぱなしだった緊張感が、ゆるゆるとほどける。
（あたしだけじゃない）
戦争を何とかしようとしているのは、自分ひとりだけじゃない。その安堵感。
リビドムの民は皆ぎらぎらとして、マルキーに対する復讐心で滾っていた。怖かった。だからずっと言えなかった。戦争を起こすことに否定的でいることに。
（よかった）
ぎゅっと握られた手に力を込める。
これからどこに向うのか、全く先が見えないけれど。
それでも、確信の無い安心感で満ち溢れていた。

ルカはあらかたかさぶたを払い落とすと、部屋を出て階段を降り始めた。それに連れられて有希も。出入口に居た門兵に一言二言告げると、大慌てで兵士は走って王宮に向っていった。
「どこに行くの？」
「俺の屋敷だ」
そう言うと、ルカはつかつかと歩き出す。時折伸びた前髪を邪魔そうにかき上げている。
「屋敷って……ルカの家はこの王宮じゃないの？」
ルカはちらりと有希を見て、そして少し面倒くさそうに説明をしてくれた。
どうやらアドルンドの王家の王位継承者には、それぞれ屋敷が与えられるらしい。もし王位を継承したら王宮に入る。継承しなければ、そのままその屋敷に住み続ける。ということらしい。
それではいつか城の領地がなくなってしまうのではと聞くと、それは大丈夫だと答えられた。詳しくはよくわからなかったが、そのときの王から、一定の血縁から離れると、与えられていた領土に屋敷を建て、そこに住むようになるらしい。それに、王位継承者争いや度重なる戦争で、今までそのような事で困った事は無いといわれた。
それでもよくわからないと唸っていると、説明で長い時間歩いていたのか。ルカが立ち止まる。つられて有希も立ち止まる。
「……ラッドの屋敷も大きいと思ったけど」
比べるのが間違えている。と思うほどに大きい。一体部屋の数はどのくらいあるのだろうか。一つ一つの部屋がどれほど大きいのだろうか。考えるのもばからしくなるくらいに大きな屋敷だった。
「使用人とか、百人くらい居そう……」
「その五分の一程度だ」
「二十人！？　二十人で足りるんだ……」
改めて見上げる。有希が通っていた高等学校の施設全てと同じほどの大きさの屋敷を見上げる。

「主要の部屋といくつかの客間以外は普段掃除しないからな」
「そうなんだ……そういうものなのかぁ」
「もっとも、兄様や弟妹は百人単位で使用人を雇っているそうだからどうかは知らんがな」
考えてみれば、屋敷の入り口に見張りも居ない。それに、灯りが点いている部屋がとても少ない。
ルカは入り口を通り抜け、玄関の扉に手を掛け、引く――すると、ガチッという音が聞こえた。施錠されているのだ。
小さく舌打ちする音が聞こえる。
しんとした空気が流れる。夜は少しずつ深みを増し、秋風が肌をひやりと撫でる。
「……ルカ」
「待っていろ」
その言葉と共に、ガサリと音が聞こえた。
玄関脇の茂みから、武装した兵士が数人。二人を囲むように現れた。振り返ると、屋敷の入り口にもいつの間にか人が立っている。
「誰だ」
宵闇から硬い声が聞こえる。暗くて誰が声を出したのかわからない。
きゅっとルカのマントを掴む。濃い色のそれは宵闇に同化しているようで、ルカ自身も宵闇に溶けているように見える。
どこか懐かしいため息が聞こえた。
「――屋敷を守るその精神には感心するが、主人を見誤るのはどうかと思うぞ」
言うと、ルカが懐から騎士称を出す。途端にあたりがざわめく。
「ルカ様！」
「ルカ様、ご無事で！」
兵士達が次々にその場で跪いて頭を垂れる。
「挨拶は今はいらん。それより早く屋敷に入りたいのだが」
言うと、一人の兵士が返事をし、扉に向って声を掛ける。

「アニー、私だ。ルカ―ト様がお戻りになられた。開けてくれ」
『何ですって！？』
ガチャリと鍵が外れる音が聞こえて、観音開きの扉が開く。勢い良く扉が開いたため、扉近くにいた兵士が数歩後ずさる。
扉が開くと同時に、にょっと腕が伸びる。メイドの格好をした年配の女性が現れた。
その腕は的確にルカを捉えると、ルカの両頬に添えられた。
「ルカ様？　あぁルカ様だわ！　あまりにも長い間お顔を拝見しませんでしたので、すっかりこの婆はお顔を忘れてしまったかと思いましたが、どうやらこのお綺麗な顔を忘れていなかったようですわ」
「そう嫌味を言うな、アニー」
「ふふ、あまりにもお顔を見せてくださいませんと、惚けてしまいますからね」
そう言ってルカに笑いかけると、手をぱっと外して有希の前までやってきて膝を折る。
「こちらのお嬢様……前に一度お会いいたしました」
「ユーキだ。部屋を与えてやってくれ。俺は湯を使う」
そう言うと、ルカはつかつかと屋敷の中に入ってしまった。その後を数人のメイドが追って走っていく音が聞こえた。
「ユーキ様。ようこそいらっしゃいまし。――さ、どうぞお入りくださいませ」
「あ、ハイ……」
言われるがまま、屋敷に足を踏み入れる。
（ここが、ルカの家……）
豪奢なのに少ない使用人。掃除など大変なのだろう。きらびやかなのにそこはかとなく機能的なその屋敷は、なんだかルカらしくて面白いと思ってしまった。

100

そういえば、初めてルカに会った日もこんな風だった気がする。
アニーに連れられるがまま入った部屋は、いつか見た部屋のように重厚で豪奢だった。
そして「もう遅いですから夜着に」と着替えを持って来られた。
恥ずかしいから一人で着替えると告げると、アニーが他のメイドを下がらせた。
「私一人ですので我慢してくださいまし」
それでもやっぱり恥ずかしいと言いかけたが、彼女も仕事なのだから仕方無いかと思い、服を脱ぐ。
そしてすぐに後悔した。何が何でも人に見られてはいけなかったのだと。
肌着代わりにワンピースの下に膝下まであるスリップを着けていたが、それでは胸元に咲いた花を隠す事ができなかった。
「ぁっ」
慌てて脱いだ服を胸元にあてがう。見られてしまってはいないだろうかと伺うようにアニーを見る。
「どうかなさいましたでしょうか？」
アニーは新しい服を持ってにこやかな表情をしている。
（……見られた？　でも）
まじまじとアニーを見つめる。アニーは不思議そうに小首を傾げる。
「ううん、なんでもない、です」
（よかった……見られなかったみたい）
それからどうにか胸元を見られないように、尚且つ怪しまれないように工夫をしながら着替えた。
アニーはテキパキと動き、有希の明日の服を選別すると他の服を片付け、雑談を交わしている間に食事を摂っていないという事を

言ってしまったために、軽食の準備を始める。
客間のソファに座り、目の前のテーブルで食事の準備が着々と進んでいくのを見ながら、ぼんやりと今日のことを振り返っていた。
（疲れたなぁ……）
緊張の糸は完全に切れ、残った安堵と疲労でぐったりとしていた。
（今日一日でいろんな事があったな……ヴィヴィに久しぶりに会ったし――――ルカにも、会えた）
温かなスープの匂いを察知して、腹がきゅるると鳴る。
（変なの……今までずっとあたしが汲んであげる側だったのに）
リビドムを回っている間も、フォルでも、ずっと有希は看病する側だった。今の有希のように、動けない人の元へ持っていき、口元までスプーンを運んでいた。
（セレナ達と一緒に……）
はっと思い出す。薄紫に揺れる髪。夕焼けのような橙色の瞳。
「セレナ！」
「どうかなさいましたか、ユーキ様！？」
ぼんやりと座っていたのに、突然声を荒げた有希にアニーは驚いて振り向く。有希はソファに預けていた背中を起こし、目を瞬かせている。
「セレナとヴィーゴさん、それにラッドにも会わなきゃ！　ルカが起きたって伝えなきゃ」
どうして今まで忘れていたのだろう。馬鹿だと自分を罵りたい気持ちでいっぱいになる。
「ユーキ様、本日はもう夜も遅いですから、明日にいたしましょう？」
「その方がいいのかもしれないけど、でもやっぱり待ってるんじゃないかって心配だし……」
ルカに会うためにアドルンドにやってきたのだ。その目標が達成されたからには、早く連絡をしなければ。

立ち上がって、扉に向かう。あと数歩というところで、その扉が自動的に開いた。
「ルカ」
現れたのはルカで、首から柔らかそうなタオルを掛けている。金色の髪がしっとりと濡れている。
かさぶたを全て洗い落としたようで、昼過ぎまで十日熱でうなされていた人とは思えない。
ルカは有希と視線を合わせると、アニーを見遣る。
「ユーキ様が、ご友人様にルカ様がご起床されたことをお伝えに行くと仰られて……」
「行ってもいい？」
ルカは困惑しているアニーに一瞥する。
「アインならもう連絡はしてある。そのうち来るだろう」
「あ、アインさん」
（忘れてた）
心の中でごめんなさいと呟いて、首を振る。
「じゃなくて、リビドムからあたしと一緒に来てくれた人たち」
「『セレナとヴィーゴさん』か？」
「そう！　ラッドの屋敷で待っててもらってるの」
ルカの右眉がぴくりと動く。仏頂面は相変わらずで、何を考えているのかわからない。
「……ルカ？」
「わかった。明日朝一で来るように言っておく」
そう言うと、くいと顎で示す。辿るように見ると、アニーはスープの載ったトレイを持ったまま立ち尽くしている。
「アニーのスープは美味いぞ」
ぽんと頭を軽く叩き、ルカはすたすたと歩く。
「……うん」
踵を返し、ルカの向かい側のソファに腰を降ろす。アニーは微笑みながら食事の準備を続ける。

食事の準備が済んでいない内から、ルカはスープに手を伸ばし、飲み始める。
「ルカ様、お行儀が悪いですよ。あとほんの少しでもお待ちになれないのですか？」
アニーが野菜の載った皿を置く。
こちらの世界では、食事の際、料理を卓に運ぶ順番があるらしい。堅苦しい場でない限りあまり順番に固執はしないがルカは王族だ。アニーがきっちりと順を追っていく。一番最後に飲み物を注ぐのが通例である。そして食卓の準備がすべて整ってから食事を始めるのがマナーなのだ。
「長いこと食事を摂っていないんだ。待てというのが拷問だろう」
言って、有希にも手をつけるように目配せする。アニーは有希のグラスに水をまだ注いでいない。
「……いただきます」
そう言っておずおずスプーンに手を伸ばす。アニーは驚いたように有希を見ると、すぐさま反対側のルカを見て、破顔する。
「まったく、ひねくれたお方ですこと。十分に髪も乾いていないのもその為でしたの？」
「？」
くすくすと笑うアニーを尻目に、ルカは仏頂面でスープをおかわりした。

アインが現れたのは、有希がデザートのムースにスプーンを突き刺した瞬間だった。
「ルカ様！　ルカ様が起きられたって本当ですか！？」
大きな声とガツンという音と共に扉が開かれる。部屋に居た全員が開いた扉を見る。
そこには、ぜいぜいと息を切らし、額を真っ赤にさせたアインが扉に抱きつくようにもたれていた。
「ルカ様ぁあ～～～～」

黒目がちな瞳を潤ませて、よろよろと部屋に入る。そして向かい側に座っていた有希の存在に今気付いたようで、有希を見てあんぐりと口をあけた。
「っユーキ！！　え、えぇ？　あれ、どうして、」
「えっと、話すと長くなるんだけど……」
「いや、そうじゃないんです、そうじゃなくて！！」
挙動不審にわたわたと動き、そして有希を見つめてアインは言った。
「僕、この間ユーキに会ったのに、どうして追い返したりしたんでしょう……」
「え？」
「ユーキ、少し前に王都の孤児院に運ばれてましたよね、僕はギィスと一緒にまわってて……でも、ユーキは僕の目の前で処刑されて、でもココにいるのはユーキで、確かに僕が会ったのもユーキで……えぇえええ」
困惑したままうずくまってしまった。
「あ、アインさん……？」
「そもそも、ユーキはどうしてあんな格好をしてたんですか？　でも僕はあれがユーキだったって今ならわかるのに、どうしてあの時わからなかったんだろう！　何がどうなってるんですか！？」
アインの言っている事が要領を得ていない。
「え、つまり、アインさんはあたしが大きかった時の記憶はあるんですか？」
「勿論ありますよ！　ただあの時はユーキだって気付いてなくて、気付いていたらあんなに邪険に扱わなかったのに。スミマセン、あの時ちょっと色々あって余裕も無くて……」
「……どういうこと？」
確かに二回りほど大きかった頃の姿も、面影はあるだろう。けれど、完全に別人だったに違いない。それなのに、その時の有希を有希と認識している。

「それは僕が聞きたいですよ」
「おおかた、魔女がそうなる様ににまじないを掛けたんだろう」
「ヴィヴィが？」
「それ以外考えられないだろう。――――アイン」
「は、ハイ！」
　へたり込んだまま、顔を上げる。
「長い間、世話を掛けたな」
「い、いえ、いえ！　とんでもないです！　ルカ様が起きられて本当に嬉しいんです。　僕こそお役に立つことができなくて……」
　バタバタと両手を振るったと思うと、子犬のようにしゅんとうな垂れる。
（あ、アインさん……）
　せわしないアインを見ていると、ふ、と軽く鼻で笑う音が聞こえた。
「気にするな。ユーキも息災だ。――――これから忙しくなる。そのときは存分に働いてもらう」
　がばりと顔を上げ、うるうるとした瞳でルカを見つめ、アインは大きく頷いた。
「っハイ！！」
　ルカは小さく頷くと、四つ目のムースに手を伸ばした。

101

ルカが椅子に腰掛けると同時に、炎が揺れる。
　向かい側にはアインが神妙な顔をして座っていた。
「すまないな、こんな夜中に」
「いえ、お気になさらないで下さい」
　先ほどとは打って変わって、落ち着きを取り戻したアインは生真面目な顔をしている。
「明日の正午、王都を発ってリビドムに向かう。騎士達には明朝一番に伝える。正午までには決めてもらう」
「明日、ですか？　早急すぎじゃないですか？　騎士達も困惑すると思いますし、せめて一日くらいは……」
「生憎、時間が無いんだ」
「はぁ……」
　そう、時間がない。長い時間を無為にしてしまったことは悔やまれるが、悔いたところで詮無い事だ。
「そもそも、国を捨てて俺についてくるような酔狂なヤツも、そうそう居るとは思わんがな」
　部下の面々を思い浮かべる。ルカについていてもルカを支持していない者も居れば、ルカを何かの神様かと思っているのか、激しく傾倒している者も居る。
　ルカからしてみればそんなに時間は経過していないが、彼等は長いことルカに会っていないのだ。きっとそれぞれ面持ちも変わっているだろう。
（特に今は、戦時中だ）
　見ない顔が増え、見知った顔が減る。
「……戦争というのは、やはり良いものではないな」
　何故戦争を起こすのかと、泣きそうな顔でルカに問うた顔を思い出す。子供だ子供だと思っていたが、いつの間にか彼女は色々な

知識を身に付けたようで、物思いに耽るように押し黙る姿をしばしば見かけた。
「……そうですね。僕も怨みますよ」
眼前のアインが、ぽつりと呟く。
「ルカ様、お話の前に言う事があります」
アインがルカの目を見る。その黒目にぞわりと鳥肌が立つ。
――何が、あったのだろうか。
大抵の事には驚きはしないが、尋常ではないその気配に、ルカは少しだけ身構える。
「なんだ？」
「……リベラートが、戻っていません」
リベラート。それは、昔アドルンドの大貴族だった家。
二十年あまり昔の戦争で、リベラート家は壊滅し、生き残った数名も捕虜のようにマルキーの領主にさせられた。
今もその傷痕深く残る、ナゼットとティータの名。
「国境近くの前線で目撃されたそうなのですが……その後行方がくらみ……ケーレ近くで、よく似た死体が発見されたそうです」

あまりにも密度の濃い一日だったのと、蓄積された疲労の回復とで、宛がわれた部屋のベッドに横になってものの数秒で眠りに落ちた。
そういう時の眠りは非常に有意義で、疲れは取れて、寝起きもすっきりする。
ベッドから降りて、うっすらと光の差し込む窓に行き、カーテンを開けて窓を少し開く。
太陽は随分と昇ってしまっていたらしく、じんわりと暖かな光が当たる。
部屋に冷えた清浄な空気が入り込む。有希の宛がわれた部屋からは庭が一望でき、眼下を覗くと庭師がもぞもぞと動いている。
思い切り空気を吸い込む。ひんやりとした空気が肺いっぱいに

広がる。その空気を閉じ込めるように息を止め、ふぅと吐き出す。
「……これから」
これから。これからだ。
リビドムに向う。――独立するために、何も争いを起こさなくてもいいではないかと伝えるために。
ではどうすればいいのか。どうしたらリビドムは独立できるのか、有希には見当もつかない。
「だから、これから頑張らないと」
自分の両頬をパチンと叩いて、ベッド脇に置かれていた服に着替えた。
起きたら広間に来るようにと言われていた為、部屋で顔を洗ってから広間に向う。
途中、メイドが有希に気付いて案内をしてくれ、広間では食事の準備までしてくれた。
「そういえば、ルカやアインさんは？」
「お出かけなさるそうで、ご準備してらっしゃります」
有希の食事を眺めながら、メイドはニッコリと微笑む。
「そうなんだ」
有希は言うと、ケーキの最後の一口を頬張る。
まだ二食しか頂いていないが、食事の後にデザートが出るのが普通の事らしい。しかも。
「ユーキ様、ケーキのおかわりはいかがなさいましょう？」
「あ、いや、一つで十分です……」
「さようでございますか。まだこんなにおありなのですが」
そう言うと、メイドが少しだけ欠けたホールケーキを残念そうに眺める。どうやらそれ丸々ワンホールが有希にあてがわれていたものらしい。
「あ、えーと、皆さんで召し上がってください」
途端、メイドの顔がぱあっと明るくなる。
「よろしいんですの！？　あぁ、ルカート様は一度もそんな事仰っ

てくださった事ございませんのに、ユーキ様はおやさしいのですね」
（いや、優しいっていうか、なんていうか）
誤魔化すようにへらへらと笑っていると、カチャカチャと音が聞こえ、次いで扉が開かれた。
「ルカート様」
メイドがきゅっと顔を真顔に戻し、挨拶をする。ルカはそれを見、次いで有希を見る。
「随分寝ていたな」
ルカは武装していた。甲冑をまとってマントを装着している。
「行くぞ」
「え、行くってどこに？」
「リビドムだ」
「は？」
瞬間、思考が停止する。
せいぜい、王宮だとかラッドの屋敷だとかそのあたりだと思っていた。
「リビドムに向けて出立する」
「え、ちょっとまって、今から？」
「あぁ。ラッドの屋敷に向う。それからすぐ出立する」
「はぁ……」
「メイ、お前達も早いうちに片付けろよ」
「かしこまりましてございます」
そう言うと、ルカは有希の手を取る。
「ど、どうしてこんないきなり」
「時間が無い」
言われて、どきりと心臓が疼いた。
（……ヴィヴィ）
有希が理解したとわかったのか、ルカは有希の手を引く。有希も唇をきゅっと結んで、頷いた。

まだ釈然としない。どうして唐突にあんな事を言い出したのか。
ルカが目覚めたことで興奮し、少しの違和感も流してしまった。
（世界が、壊れる）
屋敷を出て、ルカの後ろを歩きながらぼんやりと考える。
いつか見たときよりもいささか活気が無いが、それでも王都は賑わっている。
（これが、壊れる？）
現実味がなさすぎる。有希が生きている間に枯渇してしまう石油のように。知識として枯渇するのは分かっている。けれどもそれでも石油を使いつづけている。いつかどうにかなるだろうと心の奥でぼんやりと誰もが想っている。いざどうなるかなんて皆目見当がつかない。
（魔物が出て、火山が噴火する……）
火山活動が再開されればどうなるのだろう。日本でも数年前に何処かの山で火山活動が起きて住民が避難したというが、それが何故だったか思い出せない。
火山灰が降ってくるからだろうか。噴火して溶岩が流れたらいけないから避難するのだろうか。
目の前の揺れる金髪を見上げる。急いでいると言った彼は、それでも有希の歩幅に合わせて歩いてくれている。
（よく、わかんない……）
「ねぇルカ、火山が噴火したらどうなるの？」
ルカが歩きながら振り返る。そのままペースを落とし、有希が並ぶと有希と同じように歩む。
「――アリドル大陸のあの山々が噴火したのは、もう途方も無い程昔らしい。それこそ英雄アリドルが居た時代だと言われている」
「英雄アリドル？」
「この世界の始まりと言われている伝説の中で、この世界を救った人間だ。だからこの大陸も英雄の名を取ってアリドルと名乗り、その時アリドルと共に居た三人の名を、それぞれの国の名に取ったと

いう話だ」
「伝説？」
「あぁ。世界が壊滅寸前になった時代に、龍を封じ魔物を滅したという話だ」
「へぇ……そんな話があるんだ」
「御伽噺の域を出ないがな。――その伝記の中に、火山の噴火についての記載があった」
ルカの眉がひそめられる。
「火山は噴火と同時に溶岩や有毒な空気をもたらす。溶岩に触れたものは溶け、空気に触れたものは呼吸が出来なくなる。……大陸には灰色の冷たくない雪が降り、その雪に汚染された水も飲めなくなる。――水も空気も駄目になり、魔物も蔓延る。……末路は一つしかないだろう。」
有希の足が止まる。それに気づいたルカは有希の数歩先で振り返る。
「そんな」
想像を絶する悲惨さに息が詰まる。この世界にそんな事が起きるのかと考えただけでぞっとしてしまう。
ヴィヴィが軽軽しく言ったゲームの重さを幾分か理解できたような気がする。
そうならないためにヴィヴィは一体何をしてきたのだろう。
「……そうならないために、あたし、どうしたらいいんだろう」
ぽつりと呟く。
何をしたらいいのかわからないのに、何かをしなければならないという焦りは、肩にのしかかりじわじわと重みを増していく。
その重さは有希を暗いところに引き込むように誘う。
そうなると身動きができなくなってしまう。
恐くて恐くて。身が竦んでしまって――。
ふと顔を上げる。ルカは仏頂面のまま、どこか遠くを眺めている。

「――あの魔女が何年生きているのか知らんが、あの魔女は今までこの世界を整えてきていた。そしてこの世界は壊れる事無く今まで在った。そしてあの魔女が取った行動が示す事……わかるか？」
有希は首を振る。
ルカが発している言葉もよくわからない。ヴィヴィが今まで何をしてきたのか、何をしていたのか。きっとルカよりも有希の方がヴィヴィと多く接触しているのに、有希はヴィヴィが何を考えているのかさっぱりわからない。
「この世界の事だ。この世界はここ数十年で大きく変動してきている。それは――耳にしているな？」
「うん、リビドムが無くなったこと、だよね？」
「そうだ。――俺も、あの魔女が何をやってきたのかは知らない。だが、事態は見れば見るほど、分かりやすい。……瑣末な事で世界は動かない。この数十年での変動はそれしかない。アリドルは今まで三国在りつづけた。それが変わってリビドムという国が無くなった。そして、誰も見たこともない、真実なのかどうなのか怪しかった伝説の魔女と呼ばれる女がこうして現れた。――ということは、その変化を元に正せばいいんだろう」
「リビドムを取り戻せばいいってこと？」
ルカが有希に視線を移す。ふ、と片側だけ口角を上げて、歩き出す。
慌てて有希も小走りで追いかける。そしてふと、違和感を感じる。
――何故、ヴィヴィが世界の均衡を保っていたことを知っているのだろうか。
（確かに、あの後ルカが起きたけど……）
目の前にある背中を眺める。何を考えているのかわからない、背中。
「……ねぇルカ。いつから起きてたの？」
金色の髪の毛が揺れて振り返る。ルカは意地の悪い笑みを浮か

べている。
「どこかの誰かが泣いたのか何なのか。涙か鼻水が顔についてな――冷たくて目が覚めた」
「冷たくてって……」
泣かないと決めた自分は何度もぐずぐず泣いた。しかし、ルカの目の前で泣いていたのは、シエがいなくなってからヴィヴィが現れる前だけだ。
「ってことは、ヴィヴィが来たときから起きてたんじゃん！！」
ルカは片側だけ口角を上げたまま振り返りすたすたと歩き出す。
「ちょっと！！」
走って追いかけてルカの背中をグーで殴ったが、マント越しに甲冑に当たり、あまりの痛さにうずくまり、ルカにくつくつと笑われる羽目になった。
涙目になりながら右手の拳を抱きしめる。
右手が痛むというものもあるが、安堵の意味も込めて泣きそうになった。
――ひどく、肩が軽くなった。

102

日はもう高く、秋口らしいひんやりと柔らかな空気が心地よい。
ラッドの屋敷の前は変にざわついている。馬が三頭おり、荷があちらこちらに置かれている。
その荷物の中に立っている人物を見つけて、有希は声を上げ、ルカを追い越して走り寄る。
「セレナ！」
呼ばれたセレナは訝しげに振り返る。そして有希を見てぽかんと口を開ける。
「ユーキちゃん？」
（あぁそっか）
身体が元に戻ってしまったのだと気づいて、どう説明しようかと逡巡する。
（でも、ヴィヴィがあたしだって気づけるようにまじないしてくれたみたいだし……）
セレナのすぐ前に立ちしどろもどろしていると、わきの下を持ち上げられ、身体がふわりと浮いた。
「え？　うわっ」
「っ可愛いわぁ！　ユーキちゃん、ちっちゃいわ！　あぁ、ちっちゃいユーキちゃんも鼻血が出るほど可愛い……」
両手で有希を持ち上げてうっとりとしている。
「身体はもう大丈夫なの？　元気に走ってきてくれたところを見ると、大丈夫みたいだけど……」
そう言って、高さを下げてセレナと同じ目線になる。大丈夫だと告げて笑むと、セレナが「いやだ」と真顔になる。
「ユーキちゃん、瞳の色紫なのよね。どうして気づかなかったのかしら」
有希をゆっくりと降ろして、首を捻る。

「でも、ユーキちゃんはもうちょっと大きい姿をしてて……その時は黒く見えてて、でも本当はユーキちゃんが小さくて瞳の色だって紫だってわかってたのよ」
「せ、セレナ？」
「でも紫だってわかってたなら、もっと早くコトも片付いたはずなのに、どうしてわからなかったのかしら」
　ぶつぶつと呟くセレナを見上げる。有希の視線に気づいたのか、ニコッと笑って有希の頭を撫でた。
「まぁ頭を使うことはヴィーゴに任せましょ。――――そ・れ・よ・り・も！」
「わぁ！」
　がばりと抱きつかれる。
「本当に、ほんっとうに元気そうでよかったわ！　あぁもう、ユーキちゃんに何かあったらどうしようって気が気じゃなかったのよ！
　それなのにユーキちゃんったら帰ってこないし、あのスカした男も夜遅くに帰ってきたと思ったら『寝てました』なんてふざけたことのたまった挙句ユーキちゃんのことわからないって言ったのよ！？　もぉ信じられないでしょぉお？」
　痛いほど抱きしめられ、放り出された腕でセレナの背中を叩く。
「そしたら今朝は今朝でいきなり絶世の美青年が訪ねて来たのよ！
　誰かと思ったらユーキちゃんの騎士だっていうじゃない！　もーにやけっぱなしだったの、私。ユーキちゃんは元気だって教えてくれたし、事情も詳しく聞いてないだろうにリビドムに向おうって言ってくれるし、もぉね、ユーキちゃんがとってもとっても会いたがってたのも納得してお釣りが来るくらいよ！」
　その絶世の美青年は有希のすぐ後方から歩いて来ているのだけれども。そう言おうにも苦しくて息が出来ない。
「その辺りで許してやれ。ユーキが窒息するぞ。それにその絶世の美青年にその所業見られてるぞ」
　昨日会ったはずなのに、ひどく懐かしい声が聞こえた。そして

腕の力が緩み、有希はおおきく呼吸をした。
（ヴィーゴさん！）
天の助けだとばかりに、セレナの後ろに佇むヴィーゴを見遣る。ヴィーゴは有希と目を合わせると一瞬驚いたような顔をしたが、やれやれという顔になり馬に荷を積み始めた。
「出られそうですか？」
「この荷物を積めば終わりだ」
「そうですか――私の兵達もそろそろ準備が終わる頃ですので、迎えに参りました」
「あら、王子様直々に迎えに来てもらえるだなんて、イイ身分になった気分だわ」
セレナはそう言うと有希から離れ、麻袋を有希に手渡した。
「ハイ、ユーキちゃんの荷物。感動の再会をもうちょっと味わいたいけど、急がなきゃね」
「あ、ありがとう」
麻袋をきゅっと抱きしめる。
にこりと笑うと、セレナも荷積みを再開する。一緒に過ごしてきた時から思っていたが、二人は本当に荷物が少なく、そして荷積みもすごく早い。
あっという間に荷物を積んだと思うと、乗馬していた。
「乗るぞ」
「え」
「あれは俺の馬だ」
一頭だけ青黒馬が繋がれている。
「え、だってラッドの馬じゃないの？」
「――オレは行きませんよ」
屋敷の玄関から、ラッドがゆっくりと歩いている。
「お見送りにと出てきたのですが、丁度良いタイミングでしたか」
ラッドはルカに頭を下げる。
「っラッドはどうして？　あ、後から来るの？」

パタパタとラッドに駆け寄る。馬がちいさく鳴く。
ラッドは肩膝を付いて跪くと、首を振った。
「オレは――――ご一緒できません」
「え……どう、して？」
中低音の酷く甘い声が、酷く心をざわつかせる。
ラッドは目を細めると、頭を垂れた。
「今までの数々のご無礼、お許しください」
「無礼だなんて、そんな事思ったことない。　ねぇ、どうして？」
「――オレはですね、ルカ様の家臣です。けれども、それはルカ様が王族であるからであって、オレ……メンデ家はアドルンド王家に代々仕えております。だから、ご一緒することができかねるんです」
「……言ってる意味が、わかんないよ」
「つまりですね、オレはルカ様の家臣でもあると同時に、オルガ―様の家臣でもあるんです。それで、ルカ様が国を捨てるというのなら、ルカ様はオレの主人じゃなくなるんですよ」
「……は？」
（ルカが、国を捨てる？）
「ルカ様が王子として、オルガ―様と戦われたりする分には、ルカ様を支援しようとメンデ家では思っておりました。けれども、ルカ様がそれをせずに居なくなるのでしたら、ルカ様側に着く理由がないんですよ――貴族とは、そのようなものです。お嫌いになりましたか？」
つまり、ルカが国を捨てる。国を捨てるルカには興味がない。そういう事だ。
「メンデ家の次期当主はオレです。――オレは、屋敷の皆を、家族を守るために、行きません」
灰色の瞳が有希を見つめる。
「……ないと思うけど、もし……アドルンドとマルキーが一緒になってリビドムを攻めることになったら」
「勿論、ユーキ様やルカ様に剣を向けます」

きっと思うところも沢山あっただろう。ラッドはルカのことをとても心配していた。とても慕っているように見えた。
けれど、そのラッドが家のため、家族の為に決めた事を、どうして嫌いになれるだろう。どうして責められるだろう。
この迷いの無い目を見て、どうやって一緒に来てと言えるだろう。彼が家族を守るために、有希に何がしてやれる。
「……わかった」
ラッドがもう一度頭を垂れる。踵を返す。
ルカがもう乗馬していた――ルカは知っていたのだろう。何を考えているのか分からない顔で、有希の手を掴んで引き、有希はルカの腕の間にすっぽり嵌るように座った。
手綱を捌く。すぐさま馬が歩き出す。ちらりと見たラッドは頭を垂れたまま微動だにしていなかった。
「……ルカはいいの？」
きっと有希よりも長く、そして濃密な時間を共有してきただろうに、ルカは平然としている。
「あぁ」
（……本当に？）
国を捨てる、と聞いた。
（それは、あたしのせい？）
もしも有希と出会わなかったら、ルカは一生リビドムと関係ない生活を送っていただろう。
有希と出会ってしまったが為に、ルカは十日熱に掛かったり、国を捨てなければならなくなったのではないだろうか。
「……ごめんなさい」
謝る事しかできない。けれどリビドムに行くのをやめないでとは言えない。
（最低だ、あたし）
「――――何がだ？」
謝罪の言葉を口にしていた事に気づき、はっと我に返る。

「え、あ。その、ラッドを止められなくて」
「あれは誰にも止められないだろう」
「そう……なの？」
「あぁ。アイツの家は歴史が長いからな。しかも唯一の後継者だ」
仕方が無いとでも言うような言葉が胸に刺さる。きっと本当は一緒に来て欲しかったのかもしれないと思うと、心臓がきゅっと痛んだ。
何か話題を変えようと、色々考える。
そしてふと、まだ謝らなければならなかった事を思い出した。
「そ、それから、えと、十日熱……あたしの想いが足りないから……感染させちゃって……ごめん」
ルカにどう答えて欲しいかなんて、考えてなかった。
ただただ自分が懺悔をして、少しでも楽になりたかった。
申し訳ないと想っている事を、ルカに知っていて欲しかった。
あわよくば許してもらえるかもだなんて下心も持っていたかもしれない。
なあなあに済ませておけば、白黒はっきりさせなければ、このままうやむやにしたままでいられたのに。
「あぁ。――わかっていた事だ。気にするな」
心のどこかが、ミシリと音を立てた気がした。

103

空は秋晴れという言葉がよく似合っていた。
空気は澄み、皆も旅立ちに見合う晴れやかな顔をしている。
有希は馬車に乗りながら、ただ通り過ぎてゆく道を眺めていた。
有希の乗っている馬車の前方にも後方にも、乗馬した騎士が並んでいる。
そんな騎士達を眺め、ふぅと息を吐き出して、出発の時を思い出した。
『ねぇルカ、あたしの馬は？』
あからさまに眉をひそめるルカに、更に言葉を重ねる。
『あたし、もう一人で乗馬できるよ。あたし乗せてたら、馬だって疲れちゃうだろうし、ルカも何かと面倒でしょ？』
本当はあんまりにも気まずいので、これ以上二人っきりになりたくなかった。
『あたしも、まだそんなに上手じゃないから練習も兼ねて――この人数だったら急いだりしないでしょ？』
できるだけルカの目を見ないように早口で言うと、ルカはしばらく黙り込み、そして小さくため息を吐いた。
『――――もう少しでかかった時なら馬に乗れただろうが、その姿なら足も届かんだろう』
『あ……』
『俺と馬に乗るのが嫌なら、アニーやメイ達と馬車に乗っていろ』
『なっ！』
そう言うと、ルカは行ってしまった。どうしたらいいのだろうと佇んでいると、メイが小走りでやってきて『馬車へ参りましょう』と案内してくれた。
馬車は数台あって、有希は人が乗る馬車ではなく幌の付いた荷馬車に乗り込んだ。アニーとメイがしきりに止めたようとしたが、頑

として荷馬車に乗ると言った。しばらくすると、ルカに相談したのか、はたまた諦めたのか、誰も何も言わなかった。
――わがままだとわかっていたが、一人になりたかった。
人が乗るようにはつくられていない馬車はガタガタと動くたびに軽く尻が突き上げられる。揺れるたびに荷物に頬や身体をぶつける。
「……なによ」
がらがらと揺れる車内で、えもいわれぬ苛立ちだけがくすぶっていた。
有希を宥めるつもりなのだろうか。馬の嘶く声が聞こえる。
「わかっていたことって、何なのよ」
ぎゅっと手を握りしめる。ぎすぎすとしている心には、抜けるような青空さえ有希の苛立ちを煽っているようだ。
（なによ。なによなによ）
馬鹿みたいに心配して、自分を責めて。それなのに言われた言葉が「気にするな」の一言だった。
小さく唸り声を上げる。やり場の無い苛立ちはどこに発散されるでもなく、ただ有希の身体中を駆け巡る。
「大体、あの人は誰だったのよ。あぁもう、ラッドにちゃんと聞けばよかった！」
やり場のない怒りは八つ当たりへと変わる。
「何て言ったっけ……あの人の名前」
恐ろしいほど綺麗な人だった。抜けるように白い肌が脳裏にこびりついている。
「……シエ……そう、シエ・レーベント」
呟いて、ふとその名前にどこか聞き覚えがあることに気づく。
「レーベント？　って、レーベント家の人？」
その名前は聞いた事がある。ラッドの家、メンデ家と並ぶアドルンドの二大貴族。そして――アインの生家だ。
「アインさんの、親戚？」

野営はいつも非日常で。まるでキャンプのようで楽しい。
本当は楽しいなんて思ってはいけないのかもしれないけれど、ゆらゆらと揺れる炎を見ると、気分が高揚するのだ。
しかし今日はまだぐずぐずとした気分を引き摺っているようで、何も楽しいと思えなかった。
火の側にも行かず、毛布に包まって馬車の近くでぼんやりとしていた。
本当はむかつきで胸がいっぱいで食事も摂る気分にはなれなかったが、メイとセレナの二人がしきりに有希の世話を焼き、その優しさをはねのけることが出来なかった有希は諾々とだが渡されるまま食器の中を空にした。
――なんだか、胸にぽっかりと穴があいたままのような気分だった。
ルカに会うことができた。それだけで嬉しいはずなのに、心の奥底から喜べない。
何故だろうと考えてみても、もやもやとしたものはくすぶったまま明確な形を示さない。
ただただ、ルカの言葉が耳の奥で反響している。
『わかっていたことだ。気にするな』
「っ気にするわよ！」
吐き捨てるように言って、抱えた膝に頭をつける。
持て余している気持ちに名前が付かない。
うーうーと唸ってぐりぐりと膝に頭を擦りつける。
（気にするわよ、だって心配だし、これ以上負担を掛けたくないし）
ルカへの思いが足りないから、ルカは騎士としての能力を遺憾なく発揮する事ができないのかもしれない。そう考えるとこわくてこわくてたまらない。
恩恵がなければ、契約なんて無意味なものでしかない。
指輪も無い、絆も無い。恩恵もない。そんなものが契約と言えるのだろうか。なにもないのに主人と騎士が繋がっているだなんて言

えるだろうか。
自嘲の笑みが浮かぶ。
（言えるわけないよ。そんなの）
「そもそも、思いって何なの」
あまりにも不確か。あまりにも曖昧。それをこの世界の人は信じている。
「あたしのルカに対する思いって何……？」
友情、愛情、恋情、人情、激情、同情、温情、無情。
どれが当てはまるだろうか。考えるがどれも違うような気がしてならない。
「あたしにとって、ルカって何？」
この世界に来て有希を救ってくれた人。助けてくれた人。導いてくれた人。
ルカが居なければどうなっていたかわからない。今の有希はないかもしれない。
（でもそれが、もしルカじゃなかったとしたら？）
もしルカじゃない人間が有希を救ったとして、有希はルカに何を思うだろう。
「――――っ」
そう思い至って、わかった。
自分を助けてくれた人。右も左もわからないこの世界で、自身を持て余していた有希に道しるべをくれた人。
刷り込みのようなそれに、有希は気付いてしまった。ルカでなくても良かったと。ただ自分を救ってくれた人に縋っていただけなんだと。
「……はは」
胸がむかむかする。なのに乾いた笑いが零れる。
星の降りそうな夜に恋か何かと勘違いしそうになったことがあった。あの綺麗な顔に何度見惚れたかなんて覚えていない。
けれどもそれは恋情でも愛情でも何でもなかった。

（友情？　愛情？　そんなんじゃない。もっと最低で最悪だ）
「こんなの、――――ただの依存だ」
ルカを思っているんじゃない。自分を思ってルカを慮ったから、天罰が下ったのだ。
「良く出来てる……主従の契約って」
（ごめんなさい）
自分には謝る資格すらないのに。
（ごめんなさい）
謝ってどうなるというのだ。
起きてしまったことはもう何も取り返しがつかないのに。
（あたしじゃなくて、あの人なら良かったのに）
シエは本当にルカの事を心配していた。ラッドが苦心していたのだ、シエだってあの部屋に来るために犠牲や危険を伴っていたはずだ。
（ごめんなさい。あたしで、ごめんなさい）
涙すら出てこないのは、やはり自分が可愛いからなのだろうか。
自己嫌悪で人を殺せるなら、自分を殺してしまいたかった。

104

心のもやもやした部分はすっきりしたが、ひどく自分が醜いものになってしまったような気がした。
自己嫌悪で消えてしまいたくて消えてしまいたくて。
「――ユーキ？」
「！？」
いつの間にかうとうとしていたらしく、顔を上げるとそこには少し困ったような顔でのぞき込むアインが居た。
「大丈夫ですか？　荷馬車になんか乗って、酔ったりぶつけたりしていませんか？」
「だいじょうぶ……」
胸がきりきりと痛む。普段なら優しい気遣いが嬉しいと思うのに、今は一人きりで居たいから、感情が何も動かない。
「お尻の下に敷くものとか、持って来ましょうか？」
「いらない……」
「えぇと……あぁそうだ！　暖かい飲み物でも持ってきましょうか？」
「……いい」
「そうですか……じゃぁ、」
「なにもいらない。――ごめんなさい、気を遣ってもらってるのに」
「いえ……」
アインの気遣いが心にしみて痛い。自分はそんな気遣ってもらえるような人間じゃない。そんな優しくする価値なんてないのにと、自嘲で笑顔が歪む。
「あの人なら良かったのに」
「え？　なんですか？」
思わず口からその言葉が零れていたらしく、アインが首を傾げて有希を見る。アインの黒い瞳はまっすぐ有希を見つめている。

「……シエ、レーベント……。アインさん、シエ・レーベントって人、知ってる？」
アインは二三度瞬きをして、そして頷く。
「シエ姉様ですか？　僕の姉ですが……ユーキ、シエ姉様の事知ってるんですか？」
「うん……ルカに会う前に、ルカの部屋で……」
「ルカ様の部屋に！？」
アインが目を見開く。しばらくすると、ため息とともにがっくりと肩を落とした。
「はぁ……まったく、シエ姉様はルカ様が絡むと本当に無茶苦茶ばかりやるんですから……」
「ね、ねぇアインさん。――そのシエ、さんとルカってどういう関係なの？」
自身をルカの主だとのたまった美女は、一体何を考えているのだろう。
ラッドに話し掛けていた内容からすると、ルカの部屋に入る算段の中にシエが絡んでいたのは必至だろう。
「シエ姉様とルカ様の関係ですか？　婚約者同士ですけれど」
「……こん、やく？」
「あぁそうか、ユーキは知らないんですよね。シエ姉様はルカ様の御正妃候補なんですよ。代々レーベント家の娘は王家の方の正室か側室になる習わしなんですけれども、ホラ、シエ姉様ってルカ様よりも年上じゃないですか、だから候補から外れてたのですが、シエ姉様がどうしてもと言って聞かなくて半ば強引に取り決まって……」
アインが何かつらつらと説明をしているが、有希の耳には何も入ってこなかった。
（……婚約）
婚約者がいる。そんなこと、考えたことも無かった。
（でも、そうだよね、ルカは王子で……正室とか側室とかそういうの、居るのがきっと普通で……）

ふと考えてみれば、自分はルカのことを本当に何も知らない。年齢も、今までどんなことをしてきていたのかも、どんな人なのかも、何も、なにも、なにも。
（最悪だ。ルカが庇護してくれることに甘えて。あたし、何もしようとしていない）
また自己嫌悪で消え入りたくなる。
「――なんですよ。……ってユーキ、なんだか顔色悪いですよ。大丈夫ですか？」
ぬぅっと手が伸びてくる。
その瞬間、胸がズキンと痛むと共に、嫌な光景がフラッシュバックする。
いつかの町で男達に襲われた。いつかの場所で、必至にもがいてもその手に掴まれて組み伏せられた。
どんなに抵抗しても、抗うことの出来ない、圧倒的な力量の、差。
「っいや！」
「――っ！？」
バチンと音が鳴り、はっと気づいて顔を上げると、驚いた表情でアインが立っていた。
どうやらアインが差し伸べてくれた手を、有希が叩き落したようだ。
爪が皮膚を削ったようで、手の甲にうっすらと赤い筋が浮き出していた。
「ご、ごめんなさい！　大丈夫ですか？」
慌ててアインの手に手を伸ばす。
「いえ！　僕こそ、配慮が足りなくてすみません」
「手、大丈夫ですか？」
アインの手を取る。赤い筋からうっすらと血が滲んでいる。
「本当に……ごめんなさい」
治さなければ。目を瞑ってアインの傷に集中する。
「……」

「……」
「……ユーキ？　このくらいの傷、たいしたこと無いんで気にしないで下さい」
良くなりますように。そう願ってゆっくりと目を開く。
「え？　――――――――嘘」
そこには、相変わらず赤い紐のような傷があるだけだった。

「ねぇ、ヴィーゴ」
目の前の白衣が揺れる。日は高く上り、馬は前へ前へと進む。
黄色くなった葉が、日差しに憂いを与えている。
「――なんだ」
「……昨日ユーキちゃんを見かけたんだけど、心なしか元気がなさそうなのよねぇ」
セレナ達はあれから、容易く有希と接触することが出来なくなってしまった。
アドルンド兵とリビドム兵の間には溝がある。ましてやルカは王子だ。アドルンド王子相手に何か思うところあるリビドムが行動を起こすのではないかと警戒され、容易にづくことができない。
そして有希はルカの契約者であり主人である。ルカと同様に、軽軽しく近づけなくなってしまった。
「一人だけ荷馬車に乗ってるんだ、何か思うことでもあっての行動だろう」
「それも気になるのよねぇ……。はぁ、私の馬に乗せてあげられれば、気晴らしにでもなるのかもしれないのに」
これみよがしにため息を吐く。
「提案してみたらどうだ？」
投げやりな返答が返って来る。
「そんなことできるわけないじゃない！　……今更、どんな顔して会えばいいのかわからないわ」

久しぶりに会ったあの時。小さな小さな姿を見たとき。あの時は勢いに任せてしまった。
冷静になってみると、自分たちはあの小さな女の子に酷いことを強いてきていた。
彼女の能力が未知数なのにも関わらず体調を崩すまで――命の危険に晒されるまで酷使させていた。その能力の有無を少女には伝えないままに。
「ユーキちゃん、怒ってないかしら……いや、怒ったりしないでしょうね」
大丈夫そうではないのに、何かにつけて「大丈夫」と口癖のように言い、気丈に振舞っていた。きっと彼女は気を遣ってぎこちない笑顔で笑うだろう。
「むしろ怒ったりしないほうが問題、か」
脳裏に昨日の有希の姿が浮かぶ。何があっても一生懸命笑顔を浮かべようとしていたあのいじらしい姿はそこにはなく、ただ能面を顔に貼り付けたような少女が、無表情に食事を摂っていた。
（何があったのかしら……）
少なくとも、有希と共に過ごしていた数ヶ月の間、あのような姿は見たことがなかった。茫洋とした瞳は何を映すでもなく、紫水晶がそこにあるばかりだった。
「やっぱり心配よ……だって、私達リフェノーティスからユーキちゃんを預かってきたのよ？　ユーキちゃんと接する機会くらい与えてくれてもいいものだと思うけど」
「預かった理由が王子に会わせる為だったろう。王子と再会を果たせた後じゃ、俺たちは御役御免だろうに」
「そ、そうかもしれないけど！　なんていうの！？　最後まで見届ける義務っていうのがあると思うの！」
「何の義務だ」
「～～～～っ」
言葉に詰まる。自分でも無理を言っていることはわかっていた。

「今は無理かもしれんが、リビドムに着けば話せる機会が出来るだろう。それまでに気持ちの整理をするべきだ。お前も――俺も」
「……ヴィーゴ……」
目の前の白衣がたゆたっている。髭面の男は振り返ることはない。だがそれは、彼自身もセレナと同様の感情をもてあましているのだということが長年の経験でわかった。
「……でも本当に、心配だわ」
時間が経てば会える事がわかっている。けれども、彼女のあの無機質な顔が心配でならない。
「こういうとき、あなたならどうするかしら？　リディー」
空を仰いで問いかける。
茶色の葉が茂る森はかさかさと音を立て、まるで返事を貰えないセレナを慰めているようだった。

105

気がつけば、王都を出立して一週間が経とうとしていた。
何度も馬車に突き上げられたために出来た尻の鬱血は、三日も我慢すると座れない程に酷くなっていた。
意味のない意地を張り続けて怪我をこさえて。馬鹿みたいだと鼻で笑ったら意固地になっていること事態がばからしくてどうでもよくなった。
ルカとは、馬車に移ってから一度も顔を合わせていない。
一方的に気まずい気分になり、ぎこちなく接していたら、誰かを経由して有希に伝えられるようになった。
ルカと唯一会話をしたのも、能力の事について誰にも言わないで欲しいと伝えた時だけだ。何をどう捕らえたのか、そうだなと言って頷いていた。
それから有希は自分だけに宛がわれた馬車の寝台で寝て過ごした。
何もかもから逃げたかった。何も考えたくなかった。ただただ逃避していたかった。
幾日か経つと、尻の痛みはもう無くなっていた。けれど心だけはじくじくと痛んでいた。
本当は自分のためだけに馬車が宛がわれるような、そんな身分でもないのに。
何もかもを否定的に捕らえてしまう、そんな自分も大嫌いだった。
その日は、昼を過ぎる頃から動くことがなかった。
町にでも着いて補給をしているのだろうか。時折にぎやかな声が聞こえてくる。
有希はだらだらと寝台に寝そべり、窓から見える空だけを眺め

ていた。
馬車に乗っている間、ずっと空を眺めていた。
ガラガラと引かれる音とやわらかいクッション越しに伝わる衝動。そんな惰性にくるまれながらゆったりとした速度で流れる雲や視界の端に見える木々が移りゆくのをずっと眺めていた。眺めているだけで、勝手に時間が流れてくれていた。
そんな日に限って、雲ひとつない秋晴れだった。変わり映えのない景色、空の青。
有希は完全に暇をもてあましていた。
昼食を終え、長椅子に寝そべってとろとろとまどろみ始めていた。
「ユーキ様、あの……」
入り口の扉がコツコツと叩かれて、次いで開いた扉から、メイが顔だけ覗かせる。
「……ん、なに……？」
昼寝の入り口に入り込んでいたので、突然心地よいまどろみから引き上げられて眉根を寄せる。
メイは少しだけ声を潜めておずおずと言う。
「あの、ルカート様がお見えになっております」
「えっ」
眠さで温まっていた身体が一気にさめる。
上半身だけ起こす。メイが後ろを振り返ったかと思うと小さく声をあげる。退いて扉が閉まる。そして再び扉が開く。
「調子はどうだ」
「……うん……大丈夫」
まっすぐに見つめてくる青い瞳から逃げるように目を伏せる。
あまりにもあからさまな行動に、沈黙が訪れる。
「……今、フォルに居る。明日、豊穣の祭が行われるのでそれが終わるまで逗留しなければならない。出立は明後日になる」
フォル。その町にしばらく滞在していたのに、今はもう酷く遠

い日のような気がする。
「――そう」
目を伏せたまま、返事を返す。フォルに一日二日居ようが、有希には何の関係もない。ずっと馬車で過ごすのだから。
また沈黙が訪れる。
しばらくして、ルカがため息を吐き出す音が聞こえる。
「一体何を拗ねているんだ」
吐き捨てるように言われる。
「す、拗ねてなんかないわよ！」
ねめつけるようにルカに目を剥く。
「では何が気に食わないんだ」
射すくめるような目でルカは有希を見つめている。そんな目で見られると、有希はどうしようもなくなる。
逃げることもできない。ただただその瞳に見入られて竦んでしまう。
「……」
どう言えばいいというのだ。自分の存在価値がわからなくなった。ルカも自分を必要としていない。自身もルカをいいように扱っていた事に気づいてしまった。自分が大嫌いになって、与えられた待遇も状況もそぐわなく思って、どうしたらいいのかわからないと、正直にそう言えばいいのだろうか。
それは、あまりにも身勝手な言い分だ。
「べ、別に……ルカには関係ない！　それより、何しにきたの？　忙しいんでしょ？」
目線を下に逸らして、ルカの顔を見ないように言う。またため息を吐かれた。稚拙な行動に呆れられてしまっただろうか。
「……兵がフォル城でユーキが来ていることを零したそうだ。そうしたら城の者に広まり町の者にも知られてな。是非祭の前説をして欲しいと兵達からの要請があった」
「……え」

「フォルをお前が救ったから、戦渦の中に居ながら祭を執り行なえると言っている」
「あたしが、救った？」
（なんで、そんな誇大評価……）
　自分は何もしていない。何かを与えていたかもしれないが、もう今は出来ないことなのだ。
（あたしのチカラは、もうないのに……）
「……フォルを治めている、いや、治めていた俺からも乞おう。――出てくれるな？」
「……」
　そんな自身が、何の価値もない自分が、そのような事をしてもいいのだろうか。
　ちらりとルカを盗み見る。ほの暗い馬車の中でさえ、青色の瞳が海面のようにきらめいている。
（拒否する資格すら、今のあたしは持ってないよね）
　自嘲するように笑んで、あたしで良ければ。とつぶやいた。

106

季節が深まり、日ごと寒さを増してゆく。
朝方や深夜に時折白い息が混じるようになっていた。
パーシーは襟巻きを正して白んできた空を見る。
（もう助からないものだと思ってたが）
まぶたを閉じて、一昨日の王妃の姿を思い返す。
十日熱への感染を示唆されながらも、王妃――伯母の最後の姿を看取るのは、マルキーの人間ではパーシー以外都合がつかなかった。
アドルンドとマルキーは戦争中であるが、こちらが戦意を持っていないというポーズを取れば、容易にアドルンドの城に入ることができた。
昼前に姿を伺った時、身体中が疱瘡に蝕まれ、それこそまだ息があったことすら奇跡と言えそうなほどだった。
あの姿を見た全員はもう駄目だろうと思ったに違いない。パーシーもそう思っていた。
アドルンドの王子が感染を危惧して誰一人近づかないという事を耳にして、最後の時を見届けようと思っていた。
最後の悪あがきにと医者がやってくると聞いた。昨今アドルンドに現れた、奇跡の少女とうたわれた人物らしい。今まで手を変え品を変え何度も何度も医者はやってきたが、そのどれも全てが匙を投げたというのに、いまわの際が来てまでもまだあきらめないのかと、少し苛ついていた。最後くらい、厳かに送ってやれないものなのだろうかと。
藁にも縋りたい気分だったのだろうが、パーシーにとっては王妃への冒涜のように感じてしまって仕方がなかった。
数十年前、リビドムとの争いに負けたマルキーは困窮に喘いでいた。そして王妃はアドルンドに嫁いだ。まるで身売りのように。

王妃の弟であるパーシーの父、現マルキー王は悲嘆に暮れたが、輿入れの際に貰った金品でマルキーは復興したと聞いている。
その王妃は死してなお、生まれた大地を踏みしめることができないのだと思うといたたまれなかった。
（しかしあれは、一体どんな奇跡が働いたっていうんだよ）
少女が王妃を看た後の姿は、一生忘れられない。
次にパーシーが見たときには、王妃には傷の跡すら見えなかった。肌は精彩を取り戻し、健やかに眠っている姿があった。
完治していたのだ。ものの数時間で。
その翌日には、もう起き上がることができ、見舞ったパーシーと会話できるほどだった。
「やっぱりわかんねぇな……」
吐き出す吐息は白い。唯一同行していた侍従が振り向く。
「パースウィル様、何がわからないんでらっしゃいますか？」
「いや、なんでもねぇよ。ただの独り言だ」
そう言って、ふいと顔をそらせる。
王妃を見舞ったのは、パーシーなりに思うところがあったからだ。
『姉上はいつも正しい。姉上の言うとおりにしておけば何の間違えも起こらない』
そう口癖のように言っていたのは、父、マルキー王だ。
戦争を止めるために王都に戻り、戦争の理由を王に詰め寄ったところ、父王はあの口癖を言った。
（父上と伯母上は密通している……）
父王のその言葉で、パーシーは知ってしまった。
その後、密通の証拠を握ってやろうと城内を探し回った。するといとも簡単に見つかってしまった。父王の私室に、ずらりと並べて保管されていた。恋文を保管するのによく使う形の書箱に。
パーシーは、見舞うという体裁を繕って、王妃に問いただしたかった。なぜ、戦争を起こしたのかと。――否、問いただした。王

妃が目覚めたその日のうちに。
『貴方が父上と通じていることは存じております。――けれども俺は、それを問いただしに来たのではありません。なぜ、戦争を起こすのか。それが聞きたいんです』
王妃は少し色の抜けた群青の髪を撫で、それから群青の瞳をパーシーに向けて、ぴしゃりと言い放った。
『そんな事を聞くためにわざわざ来たのかえ？　あの子も、お前も、私の言った通りに動けばよい。それだけのことよ』
『そんな事って……』
『これはこの世界にとって必要な争い。お前ももう少ししたら、わらわの行動の意味を理解するであろうよ』
王妃はそれだけ言うと、すうっと眠りについてしまった。
「やっぱり、わかんねぇ……」
この世界にとっては必要だという争い。しかもそれはかりそめの戦争にしか見えない。
戦渦だというのにパーシーはアドルンド城に容易に入ることができたし、最近ではどこかで戦いが起きたという話も耳にしない。膠着状態だと言えばいいのかもしれないが、あまりにも違和感がありすぎる。
「……早く、帰るぞ」
「かしこまりましてございます」
早く帰って、王妃――伯母は信用がならないと父王に進言しなければ。このままではマルキーはアドルンドにいいように使われ続けてしまう。戦争なんて馬鹿げたことは一刻も早く止めさせて、マルキーの復興と繁栄に資金を使いたい。
「帰りの道なのですが、中ほどの山が一番低いので、ここからぐるりと回るように向かいますがよろしいですか？」
「……あぁ」
「そうそう、そのあたりにマルキーの前線があると思うので、将あたりに挨拶して叱咤激励でもなさいますか？」

「……あぁ」
「……パースウィル様、あまり不用意に生返事はなさるものではございませんよ？」
「……あぁ」
侍従が悲壮な顔を浮かべて馬車に向かう。続いてパーシーも馬車に足を掛ける。
（アイツは、元気だろうか）
この混沌としているアドルンドのどこかに、彼女は居る。
真っ直ぐに見つめてくる黒い瞳。さらりとなびく黒い髪。見ているこちらまで笑みがこぼれるような、笑顔。
彼女は今も、この国の人々に笑顔を振りまいているのだろうか。パーシーとの約束を、ちゃんと遂行しているのだろうか。
（それなのに俺は――）
前かがみになってうつむく。手を組んだはいいが行き場のない思いが行き来するだけだった。
「俺は……なにをやっているんだ」

アドルンド王都を出て一週間。途中で立ち寄った町々は来たときよりも些か活気づいたように見えた。
「しかし、別の町みたいだな……」
フォルに着いた感想は、それのみだった。
「丁度豊穣祭をやっているみたいですよ？　戦争中だというのに……」
「いや、戦争中だからこそ、こうやって士気――とは言わないな。沈痛なカオして居られないって事だろぉよ。活気があっていいじゃねぇか」
町は祭で賑わい、人々が明るい顔で行き交っている。
「……ただ、こんだけ人が出歩けば、十日熱の患者も増えるかもしれねぇけどな」
「あ、それは大丈夫みたいですよ？」

気がつけば侍従は屋台で買ったのか、両手に湯気立ち上る芋を持っている。片方に一口齧り付くと、美味いとつぶやいてパーシーに差し出した。
「……なんだ」
「毒味です。毒は入ってませんのでお召し上がりください」
その言葉の合間に、もう片方の芋に齧り付く。ほふほふと目を眇める姿は、祭を楽しんでいる人そのものだ。
「はぁ……それより、さっき言っていたのは何故だ？」
「？　ふぁふぃふぁふぇふふぁ？」
「……十日熱の患者が増えるって俺が言ったら、大丈夫だって言ったじゃねぇか」
「ヴぁぁ」
「飲み込んでから話せ」
「んぐっ――――んぅ、はぁ。あのことなのですが、どうやら王妃様を治した娘は、この町から引き抜かれて王都に向かったらしいんです。だから、この町の十日熱患者はその娘が全員治してしまったっていう話らしいですよ。……あぁ、なんだか口の中がぱさぱさしますねぇ」
喉渇きませんかと首をかしげる侍従に脱力し、額に手を当てて歩き出す。町は人であふれていてはぐれないようにするのが大変だ。
「あぁもう、お前は祭を楽しみにきたのか？」
「そんなことありません！　素晴らしい偶然に感謝しているんです！　まさかアドルンドのフォルの豊穣祭に参加できるだなんて！　パースウィル様、ご存知ですか？　この辺り一帯畑が多いので、フォルの豊穣祭は大々的に行われるんですよ！　いやー……さすがアリドル三大祭りと謳われるだけありますねぇ……」
「……ずいぶんと詳しいな」
「そりゃぁもう！　しかしこの戦争の最中で祭を行ってくれるだなんて、いやぁ本当に素晴らしい偶然に感謝です！」
「つまり、お前はあわよくばフォルの祭を見たいと思ってた訳だな」

「そ、それは……ホラ！　有名だということはですよ！　わが国も学ぶべき所があるといいますか、なんといいますか……」
いつの間に入手したのか、侍従が水袋を二つ手に持っていた。
その手早さにひとつため息を吐いて、立ち止まる。
「……もういい。お前、そこまで言うならこの祭を偵察してこい」
「え！！　よろしいんでございますか！？」
「あぁ。――俺は来るときにあった林で休む」
そう告げて踵を返すと、ぐいと腕を引っ張られる。眉根を寄せて振り返ると、侍従が険しい顔をしていた。
「それは危険です。祭となりますと浮かれた輩や犯罪者が増えます」
「――心配するな。休むというよりも、静かな場所で考え事をしたいんだ。正直に言えば、一人になりたい」
「……わかりました。私の指輪はお持ちですよね？　ぐるりと回りましたらばお迎えにあがります」
「あぁ」
侍従の手がするりと抜け、水袋を一つ押し付けられた。パーシーはそれを掴むと人垣を縫うように歩き出した。

107

城下が、今までに見たことないほどににぎわっている。
二度目に訪れた時は人が一人も見当たらなかった広場は、石畳が見えない程に人で埋め尽くされている。
フォル城のバルコニーのような場所から手を振り挨拶をしたところで、有希の役目は終わった。
城には、見知った顔の兵士達が居た。コロナ達家族も、有希が城に居ると耳にしたらしく、挨拶にやってきた。
次々に挨拶にやってくる人々に笑顔で応対し終わる頃には、有希はぐったりとしていた。
城から借りた部屋の一室で、有希はソファに寝そべっていた。
「お疲れさまでございましたね、今紅茶を入れますから」
メイが城から借りたらしい茶器で準備をしている。部屋にはメイと有希以外誰もおらず、誰も何も話さない部屋は、茶器がぶつかる音と、小さく聞こえる外の喧騒で満ちている。
「ルカート様もご一緒にお茶ができれば良かったのですけれども、フォルを長いこと離れていたために溜まっているお仕事が多いそうですよ。――ふふ、あの騎士さんったら、ルカート様が良くお逃げになられるのを存じているようで、ルカ様を離すまいと必至と捕まえてらっしゃりましたねぇ」
まるで独り言のように、メイが話す。
（ルカが、よく逃げる……）
それは、昔ルカが荒れていたという時期のことなのだろうか。それとも、ルカはよく仕事から逃げようとするのだろうか。
（ホント、あたしは何も知らない）
それなのにルカの主人は有希なのだ。
（きっとあの人は、ルカの事何でも知ってるんだろうな）
綺麗な綺麗なシエの姿を思い出す。怒りに任せて閉め出してし

まった。
低い声で、ぼそりと呟く。
「……あのまま、この場所を明け渡してしまえばよかったのに」
「？　今、何か仰られましたか？」
メイが穏やかに笑んでいる。その翳りのない笑顔を見るとひどく遣る瀬無い気持ちになる。自分が惨めで卑屈な生き物になってしまったようで、消えてなくなってしまいたくなる。
有希は首を振って、のっそりとソファから身を起こす。
「ちょっと、その辺りブラブラしてくるね」
茶器をテーブルに用意していたメイは、慌てて茶器を置いて腰を上げる。
「では、ご一緒させていただきます」
有希は力なく首を振る。
「大丈夫、迷子にもなる事ないと思うし、城から出ないから」
一人になりたい。その気持ちが伝わったのか、メイは言う。
「では、私が席をはずさせていただきます」
「ううん。ちょっと歩きたい気持ちなんだ」
「……さようでございますか」
「ごめんね。帰ってきたらまた紅茶を貰えるかな」
「はい。勿論です！」
嬉しげなメイに愛想笑いを浮かべて、有希は部屋を出た。
（……お世辞に愛想笑い。やっぱり最低だな、あたし）
自嘲して、行く宛てもなくフラフラと歩き出した。

城の人間も祭に興じているのか、あまり人とすれ違うことがない。
それでもやはり人には会いたくないと、人気のない方へない方へと足が進む。
備蓄倉庫の辺りをうろうろと歩く。奥に奥にと進んでいたため、祭の喧騒は聞こえない。聞こえるのは有希が立てる靴音と、通路を通る風の音。そして時折聞こえる扉越しの人の声。

その先へ行くと軍事エリアだと知っていたため、備蓄倉庫の前を行ったり来たり、時折座ってはまた立ち上がってうろうろ歩く。そんなことを繰り返していた。
誰にも会いたくなかった。
フォルの人間は皆有希の能力を知っている。それが嫌だった。
（だってもう、あたし何もできないし）
へたりこんで、ぎゅっと膝を抱きかかえる。
無意識に右手の中指を撫でる。その仕草にはっとして、困ったように微笑む。
「指輪はもう、別の人が持ってるのにね。――どうして、あたしがルカの主人なんだろう」
きっかけは、ルカが突然有希の前で跪いたからだ。
「だいたい軽率すぎるでしょ。一国の王子だよ？　しかも婚約者まで居てさぁ……」
なのにどうして。プロポーズと同義ととれる契約を、出会って二日目にしてしたのだろうか。
「絶対間違えてるってば。ホント馬鹿じゃないの？　――――バカルカ」
キリキリと胸が痛む。
ゆらゆらと燃える蝋燭のあかり。とくとくと聞こえる有希の鼓動。扉越しに聞こえる近づいてくる靴音、人の声、扉の前で止まる靴音。
「見つけましたわよ！　ルカート！」
聞き覚えのある声に、ハッと顔を上げる。
「……シエ様」
（どうして？）
どうしてルカもシエも、こんなところに居るのだろう。
知らず知らずのうちに、有希は扉を凝視していた。
「シエ様、何故このようなところに供も付けずにお歩きになられているんですか？」

「嫌ですわ、ルカートを追いかけて来たからにきまっているじゃありませんの。それに、わたくしのことはルカートが守ってくださるでしょう？　それが騎士の務めですわよ」
「失礼致しました。では、僕にはまだ勤めが残っておりますので、シエ様には別の騎士を手配致しましょう」
「何を仰ってるの？　わたくしは、ルカート。貴方に騎士の務めをするようにと申しているのですよ？　――それから、その口調とわたくしへの呼び名、やめてらしてくださる？　婚約者なのですから、シエと呼んでくださいまし。わたくしはもっとルカートとは打ち解けてお話したいわ」
「シエ様と呼ぶようにと仰られたのは、シエ様ご自身でらっしゃいますよ？」
「そんなのは昔の話ですわ！　……ルカートを独り占めしたいという、幼かったわたくしの幼稚な戯言。でもそんなもの考える必要のなくなった今、ルカートとわたくしの間にそんなものは要りませんのよ。どうぞ、シエと呼んでくださいまし」
「……シエ様、ですから」
「シエとお呼びなさい！　主の命令ですわよ！」
シエの金切り声に心臓を鷲掴みされる。
（――――主）
そこは、有希の立ち位置だった。そこに立っていれば、ルカの隣に居られた。
けれども今は――。
「シエ様、シエ様が何故それをお持ちなのですか？」
どきりと心臓が跳ね、キリキリと胸が痛む。
知られてしまった。知られてしまった。シエが有希が持っていたはずの指輪を持っていることを。
「わたくしはルカートの主ですのよ？　持っていて何の不思議があって？」
「……家の騎士から取ってきたのですか？」

その言葉にぎくりとした。
（そっか、あれがあたしの指輪って訳じゃないじゃん）
紫の騎士はとても人数が少ないと聞いていたが、いないわけではないのだ。
どうして今まで気づかなかったんだろう。あれは有希の指輪と決まったわけではないのだ。
「そんなことといたしませんわ。これはルカートとの指輪ですのよ。――騎士証をお貸しくださる？」
「……」
「もしこれが、ルカートとの指輪でなかったら、ルカートの言う通りに致しますわ。」
二人の声が聞こえなくなる。不安に駆られて一歩、二歩と歩み寄る。
指輪の証明。それは騎士証を手に持ち、指輪を銀の鎖に通して持つ事。
（まさか、嘘だよね）
シエの指輪が、ルカを指す事なんかない。だって、どうしてシエが有希の指輪を持てる。有希が指輪を紛失したのはマルキーでのことだ。アドルンドの王都に居たシエが持ってるはずなんて無い。だからルカの主は有希で良いんだ。そうだ、不安になることなんて無い。
そう自分に言い聞かせようとしても、心臓は早鐘を打って仕方が無い。
ふと気が付けば、ドアノブに指を掛けていた。
聡いルカに気づかれないように、慎重に、ゆっくりとノブを回し、扉を押す。
薄暗い備蓄庫に、紫の閃光が入る。
目を細めて見ると、有希に背を向けるように立っているルカと、その横に立っているシエ。
（――――うそ）

心臓の音がうるさい。耳元に心臓が移動してしまったのだろうか。鼓動の音以外他に何も耳に入らない。
シエが鎖を持っている。
ルカの右手も白紫に輝いている。
シエの持っている鎖は、まっすぐにルカを指していた。
（いやだ）
何が嫌なのかわからないけれど、ゆるゆると首を振っていた。
「やだ……いやだ……」
声にならない声が喉からひり出る。言葉の代わりに、涙があふれる。
そこは有希が居た場所なのに。
そこは有希の唯一の居場所だったのに。
なくなってしまった。
いられなくなってしまった。
止まる事無くボロボロと出る。
かぶりを振ると額にゴツッと扉が当たる。
しまったと思って手を伸ばした時にはもう遅く、扉が開いてしまった。
「――――っ！？」
気配に気付いたのだろう。ルカが振り返った。
へたり込んだままボロボロと泣きながら扉に手を伸ばしている状態で、ルカと視線が絡む。しかしその瞬間に視界は涙で滲んだ。
ルカの反応で気付いたのだろう。シエも有希を見る。その顔がどんな表情を浮かべているのか、見たくなかったので視界が滲んでいることに感謝したい。
みじめでみじめで仕方がなかった。
どうしてこんな場所で覗き見なんてしていたのだろう。
どうしてこんな場所に来てしまったのだろう。
どうして、どうして。
問うても答えがないのはわかっているけれども、問わずにはい

られない。
足が勝手に動く。膝に手を当て、のそりと立ち上がる。涙が頬をつたって顎から滴り落ちる。
ルカが何か言葉を発していたような気がする。けれども不思議と耳に入らない。
どうしてこんな場所にいるのだろう。
どうして、あの場所に立っているのが自分ではないのだろう。
どうしてこんなことになってしまったのだろう。
どうして、ドウシテ。
気が付けば駆け出していた。

108

走りながら泣けば、涙は横に流れるものなのかと思ったが、現実にはそういうこともなく、涙は頬を伝うばかりだった。

けれども、風が涙を乾かす手助けをしてくれた。

人ごみを抜け、街中を抜ける。片腹が痛くなってもかまわず走り続けた。

誰も居ないところに行きたかった。

誰か居るところに行きたかった。

そんな矛盾が有希を突き動かしていた。

息が切れる頃には、雑木林にたどり着いていた。

ひらひらと茶色い葉が揺れ落ち、人ごみとは違うざわめきが起きる。走るたびに足と枯葉が擦れあい、心にくすぐったい音がたつ。

木の幹に背中を預けて、呼吸を整える。

心臓が躍動して収まらない。走ったからというのもあるのだろうが、不安や焦燥が有希の鼓動を駆り立てる。

逃げてしまった――。

城から出ないと言ったのに、城下を抜けて外に近いところまで来てしまった。

申し訳ない気持ちが込み上げたが、今は泣き顔を誰にも見られたくなかった。

今までずっとみんなに気まずい思いをさせて気を遣わせてしまっていたのに、これ以上恥の重ね塗りはできなかった。

また目頭が熱くなる。泣くまいと唇を噛み締める。

こらえてもこらえても、涙がポロポロと零れる。

不安で不安で仕方が無い。

この世界で誰にも必要とされていないような気がして。

ひとりぼっちになってしまうような気がして。

息をするのも苦しい。

服の袖で拭っても、涙がわきでてくる。濡れた袖がひんやりと冷たい。

風が吹く。ひんやりと冷たい風は枯れ葉を巻き上げてからからと歌う。

歌に混ざって枯れ葉を踏みしめる音が聞こえた。それもすぐ近くで。

ぎくりとして一歩後ずさる。背中に幹のゴツゴツした感触が押し付けられる。静まりはじめていた心臓がまた飛び跳ねる。

誰が、どうしてこんな場所に。

誰もいないものだろうと気を抜いていた自分を責める。こんなに近くに来るまで気づかなかっただなんて。

ばつの悪い気分でどうしようと辺りを見回していると、視界の中にあった一本の木の陰から、その人物はひょっこりと現れた。

「誰か、いるのか？」

（パーシー！）

瞬時に「逃げたい」と思った。

何故彼がアドルンドにいるのか、フォルにいるのか。疑問は沢山浮かんだが、それよりも今の有希を見られたくなかった。

いろんな感情がリフレインする。彼に死ねと冷たく言い放たれた時の悲しさ、虚しさ、戸惑い。リビドムの孤児院で見た優しい姿、真摯な姿勢、一緒にこの世界を良くしたいと話した、あの嬉しさ、有希に死ねと言ったことを後悔していると言った時の、胸のしめつけ。

その全てが交錯する。逃げたいと思ったのに、木の幹に縫いとめられたように動けない。ただ、パーシーを見つめていることしかできない。

パーシーが辺りを見回す。程なく有希の姿に気づく。

視線が絡む。

（お願い、見ないで）

そんな願いは叶うはずなく、パーシーは目を見開いた。

「――――っお前！」
一歩足が踏み出される。弾かれるように有希の身体が動く。
距離にして十数メートル。有希は木の幹を押して駆け出す。
「はぁ！？　ちょっ！　おい待てよ！」
背中に言葉がぶつかる。絡みついた言葉を振り切るように走る。
後方から枯れ葉を踏みつけて走る音が聞こえる。その音がどんどんと近くなってゆく。
すぐ後ろで枯れ葉の音が響く。走っている息遣いも聞こえる。
追いつかれてしまう。その恐さで膝の力が抜けてしまいそうだ。
「待てって！　オイ！」
肩を掴まれて振り向かされる。その腕を振り払って逃げようとしたら、パーシーの掌が伸びてきて手首を取られた。
「ハァッ……足はえぇよ……お前……」
「……」
泣き顔を見られたくなくて、顔を伏せる。
あっという間にパーシーの呼吸は整う。手首を上に引っ張られる。パーシーの声には困惑がにじんでいる。
「お前、何なんだよ」
「……」
「お前……アイツ、なのか」
「……」
沈黙が訪れる。風が吹いて、茶色い葉が宙を舞う。一枚の葉が木から地面に落ちるほど時間が経った。
怒気なのか何なのかわからないが、有希の手を掴んでいる手に力が込められる。痛みで顔がしかむ。
「なぁ、何でお前がこんな所にいるんだよ！　お前はケーレで……っ！　死んだ、はずで……」
パーシーが言葉に詰まる。
「なんなんだよ……なんなんだよ！　っアイツは、お前だったのかよ！！」

手首を掴まれていた方とは別の手で、顎を掴まれて無理矢理顔を上げさせられる。
群青色の瞳が有希を見る。顔を上げた反動で目に溜まっていた涙が一筋零れた。
「！？」
「や……だっ！　見ないで！」
掴まれていない方の手で、パーシーの手を払ってまた俯く。
「……お前、泣いてんのか？」
返事をしないで俯く。離して欲しいという意思表示に、掴まれている手を何度か引く。けれども、びくともしない。
見つかってしまった。
パーシーは何と言うだろう。有希はパーシーを騙した事になるのではないだろうか。
あの時有希が死んだと、傷ついて後悔して、パーシーは有希に言ったのに。有希は自身がその人だと言わなかった。
（ホント最悪だ、あたし）
取り返しのつかない悪戯をしてしまった子どものような気分だ。ばつが悪くて仕方が無いのに、どうしたらいいのかわからない。
「……っだぁもう！」
手首を思いっきり引かれる。踏ん張りきれなかった有希は引っ張られるがまま前方につんのめる。目をぎゅっと閉じる。鼻が胸板にぶつかる。
ずっと捕まっていた手が開放される。その代わりに腕が背中に回ってぎゅうっと抱きしめられる。
「！？」
咄嗟にパーシーの胸に手を当てて押し返そうとしたが、背中に回った手が放してくれない。
「なっ」
なにするの。そう言おうとしたが、パーシーが言葉をさえぎる。
「あ～……アレだ。リタがな、泣いている時こうすると泣き止むん

だ。……顔も見えないし、これでいいだろ」
もう片方の手が伸びて、頭を撫でる。まるっきり子ども扱いのそれだったが、嫌ではなかった。
「とりあえず、泣き止め。俺が泣かせてるみてぇじゃねぇか」
背中をトントンと叩かれる。その心地よさに甘えて、パーシーの服をぎゅっと握り締めた。

109

ぐずぐずと何回鼻をならしただろう。
嗚咽は収まり、少しだけ冷静さを取り戻していた。
離してもらおうと、両手に力を入れたが、パーシーの広い胸はびくともしなかった。
「……離して」
「泣き止んだか？」
「泣き止んだから」
そう言うと、小さな嘆息と共に手が離れる。有希とパーシーの間に、秋風が入り込む。
「……」
「……」
何を言ったらいいのかわからない。パーシーも同じなのか、困った風に腕を組んでいる。そのまま黙り込んでいるのも気まずくて、パーシーが何かを聞きたいなら、早く言ってくれと心がはやる。
「あたしに、聞きたいことあるんでしょう？」
我ながら、卑怯な言い方だと自嘲した。眼を合わせないようにしていると、聞きたいことがまとまったからなのか、意を決したからなのか。頭上から声が降ってきた。
「アンタ……アイツなのか？」
その言葉には主語も述語もなかったが、パーシーが酷く混乱しているだろうこと、そして混乱している彼の言いたいことは分かった。
「そうだよ。……マルキーで会ったのも、孤児院で会ったのも、あたし」
パーシーが黙り込む。何かを考えるように、有希をじっと見つめる。有希は目を合わせないように、ふいと横を向いた。
「……アンタ、魔女なのか？」

やんわりと振る。
「けどよ、あの……印は」
「あれは違う。つけられたの」
胸元をぎゅっと握り締める。そこはもう痛みはないが、あのときの感情がわきあがりそうで、むずむずと疼く。
「そう……か。じゃぁどうして」
「……」
言っても、いいのだろうか。
言ったら、信じてもらえるのだろうか。
有希は逡巡してから「信じてもらえないかもしれないけど」と前置きをして、今までの経緯を話した。
オルガに捕らえられて、印を付けられたこと、理由は知らないけれど、魔女として処刑されてしまうことになったこと。処刑場で、伝説の魔女――ヴィヴィに救われてリビドムに居たこと、姿を変えられたこと。そこで出会ったセレナとヴィーゴと共に十日熱を治して回ることになったこと。その一つが、パーシーと出会った孤児院だったこと。
話し終えると、パーシーは難しい顔をして「そうか……」と一言だけ発した。
「――奇跡の娘って、やっぱりアンタの事だったんだな……」
「……え」
どきんと心臓が跳ねる。
「噂が流れてるんだ。十日熱を治すことができる、奇跡の娘がアドルンドに居るって。ソレ、アンタだろ。目ぇ見て納得いったわ」
(どうして知ってるの)
どきどきと心音が耳障りだ。逃げ出したい衝動に駆られる。
「――――アンタ、アドルンドでやるべきことがあるって言ってたけど、もう終わったのか？」
「あぁ……もぉ、いいみたい」
自嘲半分、諦め半分で笑う。

ルカを助けることはできた。けれども、これからの事を考えると心がからっぽになってしまったように気力が起こらない。だって有希には何もできない。パーシーは眉間にシワを寄せた。
「……アンタ、変わったな」
「そう？」
ふっと笑ってパーシーを見遣ると、ひどく軽蔑したような表情を浮かべている。
「あぁ……前の方が、断然いいな」
「なによそれ」
有希の声にも怒気がはらむ。
「今のアンタよりも、孤児院に居たときの――俺に死なないっつった時のアンタの方が千倍マシだっつってんだよ」
（なによ、なによそれ。だって、あたしは）
怒りなのか悲しみなのか苦しみなのか。えもいわれぬ感情が腹の底から湧き出し溢れる。それなのに、ぽっかりと穴の開いてしまった心は微塵も震えず、ただ無表情に突っ立っていることしか出来ない。そんな有希をどう思ったのか、パーシーは有希の肩を掴んで思いっきり揺さぶった。
「――ックソ。　なんなんだよアンタ、ワケわかんねぇ！　あん時のアンタはどこ行ったんだよ、十日熱をなんとかするって言っていたアンタは！　――アンタの噂はリビドムやマルキーで耳にしていた。アンタは着実に言ったことを実行に移していた。それなのに俺は何も出来ていなくて……アイツすげぇなって……俺も気張んなきゃなんねぇなって……そうやって――ッ」
パーシーは有希を掴んだ手を引き寄せると、前かがみになって有希の肩口に額を寄せた。
「なぁ……アイツはドコ行っちまったんだよ。俺が死ねって言っても睨んできたり、チビ達と一緒に遊んでた――――あの日のアンタに……ユーキに、戻れよ」
痛いくらいに肩をぎゅっと掴まれた。その力強さに射竦められ

たように動けない。
昔の有希に戻れ。その言葉が有希の虚無感しかなかった心に突き刺さる。突き刺さったそれから、どろりとした感情が溢れ出す。
「……なによ、それ」
パーシーが顔を上げる。至近距離にあるその顔は、とても悲しそうで、どこか有希に縋るような色をしている。有希はその色を知っている。
皆が有希に縋っていた。十日熱を治してくれと、この世界をなんとかして欲しいと。
その気持ちに、一生懸命応えたかった。応えつづけていたかった。
けれどもう、それはできなくなってしまった。――有希にはもう、何の力もないのだ。
（元のあたしに戻れって！？）
どろりとした感情に火がつく。焼けるように熱いそれは、有希を焼き尽くすように、熱い。
パーシーの腕を振り払う。二三歩後ずさって、ぎろりとにらむ。
「――ッ知った風な口聞かないでよ！　あたしだって戻れるなら戻りたい！　だけど戻れないから苦しいんじゃない！　なのにどうしてそういう事言うのよ」
パーシーは突然火がついたように怒り出した有希に驚いているのか、有希の言っている言葉が理解できていないのか、きょとんとした顔で有希を見つめたままだ。その顔がまた、有希を苛つかせる。
「知らない方が良かった！　あたしにこんな力があるだなんて、気付かなきゃ良かった！　知らないままでいたかった」
「……力？」
「みんなの言う――奇跡よ！」
（言わせないでよ）
ぶつけどころが分からない怒りは、やがて悲しみに転ずる。苦しくて苦しくて、でもその気持ちが上手く言葉にならなくて、じん

わりと涙が浮かぶ。
けれど、その涙は零れる前に、パーシーの発した言葉で引っ込んだ。
「だから、何だよ」
「え？」
思考が停止する。だから、なんだよ。その言葉が脳に引っかからない。今度は有希がきょとんとしてしまう。
パーシーが一歩、近づく。それだけで、有希の二歩分はある。顔を上げると、パーシーはひどく真面目な顔をしている。
「一つだけ聞く。――アンタ、俺と会ったとき、その力のこと知ってたか？」
「知らなかった、けど、」
「俺の知ってるアンタは、打算も計算もなく、ただ民に尽くしていた。本気で心配して、本気で面倒見てた。……バカみてぇに真っ直ぐで、生意気で、ほんっとクソ生意気で……それでも、懸命に十日熱をなんとかしたいっつってたんだよ。――――アンタに力があるとかないとか、そういう話じゃないだろ」
ため息混じりに呟かれる。
その瞬間、ざぁっと風が吹いた。
風は蒸し暑い熱気を孕んでいて、有希をあの夏の日に連れ去った。
あのときの風景が流れる。夕暮れに染まった孤児院、子供達の笑顔、院長やセレナの慈しむような瞳、病床のチルカ。それらが走馬灯のように有希の仲を駆け巡る。
（そうだ）
そうだ。どうしてわすれていたんだろう。
そうだ、どうして気づかなかったのだろう。
あのむせるように暑い日のことを。
あの時有希は何が出来ていた？　――何もできていない。
それは今も同じことなのに、今と全然違うのは何故。

あの時は何を考えていた？　――自分に、何ができるだろうって考えてた。
考えて実行することで、何かの、誰かの、この世界の役に立ちたいと思っていた。
その気持ちは今も同じ？　――変わらない。でももう力なんてない自分に何ができる。
何もできていない。力が無くても――自分にできることをやろうって決めてたのは誰？
どうして忘れていたのだろう。何も出来なくても、何かしようと思うことを。
それに気づいた瞬間、突然ぼろっと涙が零れた。
「……っあれ」
「っ何で泣くんだよ！」
「ご、ごめん、泣くつもりは無かったんだけど」
有希自身びっくりして、慌てて目じりをこする。しかし、涙は有希の意思に関せずダクダクと流れつづける。
パーシーはうろたえて、何故か辺りを見回している。
「早く止めろよソレ！　俺が泣かしたみてぇじゃんかよ」
止めようと自分に言い聞かせ、何度も手の平で拭ったが、やはり涙は止まらない。いつも泣くときは悲しくて苦しくて仕方がなかったのに、今はどこか心満ち足りていた。だってこんなにも、暖かい。
「あはは――ごめんパーシーちゃん。なんか止まんないみたい」
流れるをそのままに、にへらっと笑いかける。
「……っんな顔して、笑ってんじゃねぇよ」
パーシーの顔がくしゃっと歪んだと思うと、ぬっとパーシーの手が伸びて後頭部を掴まれ引っ張られた。前に倒れる、とバランスを崩すともう片方の手が腰に回る。パーシーの顔が近づく。
（あ、うそ）
ぶつかる。そう思った瞬間、ぐらりと地面が揺れ、間を置いて

地響きが轟いた。

110

大地の奥を何かが這うような音が響く。
体勢を崩した有希の顔面はパーシーの腹筋に思い切りぶつかった。
「ご、ごめん」
パーシーの腹部に手をあて、ぐっと押したが、パーシーはびくとも動かない。それどころか、もう片方の手は有希の腰に回っていて、離れることができない。
「じっとしてろ」
有無を言わせない言い方に、有希は黙って従う。
地震はものの十数秒でおさまった。おさまった後もまだ揺れている感覚が続き、めまいを起こしたかのように頭がくらくらする。
大災害が起きるほど大きいものでは無かったことにほっと息を吐いた。
「最近、多いな」
「え？」
パーシーの腕が緩まり、有希は二三歩退いてパーシーの顔を見上げる。パーシーは目を細めて空を見上げていた。
「地震だよ」
「そうなの？」
「あぁ。リビドムやマルキーで何度か遭った」
有希はこの世界に来てから、一度も地震に遭遇したことはなかった。元々地震が多いのかとパーシーに聞くと「地震なんて普段起こらねぇよ。決まってんだろ、地震は凶事の前触れでしか起こらねぇって」と、呆れたように言われてしまった。
（凶事の前触れ……）
『――この世界は始まりに戻る。簡単に言えばそういうこと。まっさらになってもう一度やり直し』

ヴィヴィの言葉が脳裏によぎる。
その言葉が現実になろうとしている。これはその、予兆――。
（させない）
きゅっと両手を握り締める。
「そんなこと、させない」
小さく呟く。
「んだって？」
「ううん。なんでもない。――それより、パーシーはどうしてこんな所にいるの？」
「あぁ、伯母様……アドルンド王妃の見舞」
「王妃！？　どうして王妃に？」
「アドルンド王妃は、俺の伯母様……父様の姉様なんだよ。――だからって、この戦時中に易々と見舞いできるのもどうかと思うがな。――――見舞いの品だって、臣下の目通し無しで渡せたし。意味わかんねぇよな」
苦々しい面持ちでパーシーがぼそっと言った。その刹那、パーシーの胸元が淡紫に光った。ひどく見覚えのあるその眩しさに、目を細める。
「アイツが戻ってくるか。……あ、アイツってのは俺の侍従でだな、フォルの祭を見に来たいって言ってたヤツで……」
背筋がすっと冷える。そうだ、祭だ。祭が行われている。そんなに大きな地震ではなかったけれど、何か倒れたり、人が怪我をしたりしていないだろうか。気になってしまうと、行って確認してみないと安心できない。
「あ」
そういえば、何も言わずに飛び出して来てしまったことも思い出した。今頃、城の中を捜されたりしていないだろうか。
「あたしも、戻らなきゃ……」
「アイツが戻ってきたら、送らせるぞ」
その申し出に首を振る。

「その人、マルキーであたしのこと見てたかもしれないでしょ？」
　パーシーは小さく唸って頷いた。きまりの悪そうな顔をしているパーシーを見て、笑みが浮かぶ。
「ふふ、ありがとうね、パーシーちゃん」
「あ？」
　笑われていることが不服だとでもいうような顔で、有希はねめつけられる。
「あたし、忘れてた。自分に何ができるか。何をやれるか。何をしたいか。……そうやって、考えること、実行すること」
　姿勢を正して、まっすぐパーシーを見つめる。もう恐いほどに真摯な瞳を見ても、逸らしたいと思わない。
「だから、コレはノーカンね！」
「はぁ？」
「もっとちゃんとしてからパーシーちゃんに会いたかった。この世界中から十日熱を無くして、どうだ！　って。あたしを生かしていて正解だったでしょ！　って。そう言いに行きたかった……だからコレはノーカウント。――あたしはこの世界を救ってみせるよ。その後ちゃんと、会いに行く」
　パーシーがあっけにとられたような顔をしている。けれど、有希の心はとても満ち足りていた。
　ふんぞり返るように腰に両手を当てると、ふはっとパーシーが笑った。
「さっきからちゃん付けで呼びやがって……クッソ生意気なアンタに戻ったみたいだな」
「お陰様でね」
　にやりと笑うと、パーシーも同じように笑った。悪戯を目論み合った子供のような、そんな笑顔だ。
「……そうだな。俺も、無かったことにしてくれたら助かる。アンタに吐いた言葉も、忘れてくれ」
「じゃぁあたしの泣き言も忘れてね」

そう言うと、パーシーの手がぬっと伸びてきて、頭をわしゃわしゃと撫でられた。全く持って子ども扱いのそれだったが、怒る気は起きなかった。
「っとに、可愛くねぇガキだな」
「そんなにガキガキ言わないでよ」
「だってガキだろ」
さすがにそこまで言われるとむっとしたが、この見てくれでは仕方がないかと首をすくめた。
わしゃわしゃと頭を撫でていた手が止まる。
「――アンタは、知らなくても良い事沢山知ってんだな。いや、原因は俺にも少なからずともあるんだろうけどよ。――あの孤児院のチビ供みたいにしてられればいんだろうけど」
頭から手が外れる。有希は無意識にその手を掴んでいた。意表を突かれたのだろう、パーシーが驚いている。
「あたしは」
ぎゅっと手を握る力がこもる。
「知らないっていうことを言い訳にしたくないから。知らないことで後悔したくないから。――知ることが出来たこと、嬉しいよ。パーシーが、ケーレであたしに言ったこと……傷つかなかったって言ったら嘘になるけど、今は感謝してる。パーシーが教えてくれたんだよ。民が苦しんでいること、民が救いを求めていること。知らないことは理由にならないっていうこと」
有希の手一つと半分くらいありそうな程に大きな手。
じっとパーシーを見ると、複雑そうな顔でこちらを見返していた。
「……アンタ、やっぱり変だな」
「そうかな。――まぁ、伊達に十八年も生きてないからね」
「ハァ！？」
手をぱっと離して、小走りで数歩退く。ぶんぶんと手を振り回して、叫ぶ。

「あ！　おいちょっと待てよ！」
「詳しい話は今度！　――――またね！」
「ちょっ……おい！　ユーキ！！」
背中に言葉がぶつかったが、気にしないように足を速めた。
やることはまだまだ沢山ある。フォルの街を見回ること、城に戻ること。
知らないこともまだまだ沢山ある。考えなきゃいけないことも沢山ある。これからのこと、リビドムに行ったらどうするか。どうやって戦争を止めようとするか。
やらなければならないことだらけで心が重たいが、足取りは羽が生えたように軽かった。

111

からからから。
林が奏でる歌を聴きながら、半ばスキップのように走り抜ける。
満ち足りていた。枯渇していた自信が戻ってきた。何でもできてしまえそうな程足取りは軽やかだ。
吹き抜ける風がとても冷たくて、火照った体にはとても気持ち良い。
目を閉じて走る。木々の間から洩れる光が陰影をつける。
うっすらと目を開ける。目の前にはフォルの入り口が――――。
突然、ぬぅっと目の前にマントが現れた。それは有希の視界全てを覆ってしまうほど至近距離にあった。ぶつかる。そう思った時には既にごちんという音とともに、盛大に額をぶつけていた。
「――――つぅ……」
その場で額を押えてうずくまる。どこまでも飛んでいけそうな気分はどこかへ吹っ飛んだ。むしろぶつかった反動で飛べれば軽症で済んだのではないかと、くだらないことを考えて痛みからの現実逃避を謀っていた。
「お？　なんだぁ？」
痛みの元凶が金属の擦れあう音をたててふり返る。聞き覚えのある声に、有希は驚いて顔を上げた。
「……ナゼット」
「おう、嬢ちゃん。そんなトコで座ってたら蹴られるぞ」
ひひんと馬が嘶いた。ナゼットが手綱を取って馬をなだめる。ずきずきと痛みを主張する額を撫でながら問いかける。
「どうしてここにいるの……？」
「あぁ。ルカ達とお袋を迎えにな、王都まで行ったら丁度すれ違ってたみたいでな。馬飛ばして追いかけてきたんだ」
「そっか」

ナゼットが頷いて快活に笑うと、大きな手で有希の頭をわしゃわしゃと撫でた。
「ルカ達の所に行くのか？　んじゃぁ一緒に行くか」
「えっあ、う、うん」
そう言うと、ナゼットは馬を引いて歩き出した。有希は慌てて馬とは反対側のナゼットの横について歩く。
（でもあたし、黙って出てきちゃってるし）
頷いたのはいいが、外に出たことがばれてしまうのではないかと考えたが、もう絶対にばれてしまっているかと苦笑を浮かべ、ナゼットに笑いかける。
「……一緒に行くから、あたしが怒られる時も一緒に怒られてね」
「お、なんだぁ？　イタズラでもしたのか？」
何やったんだ、とナゼットが興味深々という顔をする。それから、今のうちにイタズラはめいっぱいやるんだぞ、とまた髪の毛がボサボサになるまで撫でられた。
「嬢ちゃん、ちょっと大人っぽくなったな。――どこがって言われたらわっかんねぇけど」
そうかな、とぐしゃぐしゃになった髪の毛を手で梳きながら歩く。ナゼットは大人っぽくなったよな、うん、と頷いている。
「無知で無力で、嫌んなっちゃうけどね」
ぽそりと言って、暗いことばっかり考えていちゃ駄目だと首を振る。心の隙を突いて進入しようとする黒くて暗いものを振り払いたい。
馬が歩いているし、有希とナゼットも歩いている。林もさえずっている。だから小さな呟きは聞こえていないものだと思っていたのに、ナゼットには聞こえていたらしい。
「何があったのかわっかんねぇけどよ、何かあったらちゃんと言えよぉ？　オレもルカも、みんな嬢ちゃんの味方だかんな」
（ルカ）
その名前を耳にした途端、ざわっと黒いものに覆われる。

ルカの指輪から繋がった先に居るのは、もう有希ではなく――――シエなのだ。
「……そ、かな」
「お、なんだなんだ。またルカと喧嘩でもしたのか？」
「喧嘩っていうようなものじゃない……と思う。そもそも、喧嘩できるほど仲いいってわけじゃないもん。あたし、ルカのこと何も知らないし」
心の奥がずきずきと痛みを発している。けれども有希はそれに気づかないフリをして、なんでもないようなことを言うように努める。
「それよりも、あたしにはやんなきゃいけないこと、あるし」
にへらっと笑うと、ナゼットは眩しそうに笑って、有希がつぶれるんじゃないかと思うくらい、有希の頭を撫でまわした。

街は地震の影響で、時折店屋の棚が崩れていたり、商品が壊れたりしていたのを幾度か見たけれど、それ以外、怪我人も特に見当たらず、祭の活気は損なわれていなかった。ほっと安堵して街を抜けると、城が少しだけざわついていた。
何事かとナゼットと顔を見合わせて、慌しく走っている兵士を捕まえると、兵士は有希をみて声を上げた。――どうやら有希を探していたようで、ナゼットが「なんだか大事になってんなぁ」と頭を掻いていた。ナゼットは馬を兵士に無理矢理預けさせられ、有希と共に城の奥に案内された。
「どういう事か、説明してくれないか」
ルカは椅子に座って、頭痛でもするのだろうか、眉間に指を当てている。
（なによ。あたしが出ていくの見てて知ってたくせに）
つんとした表情のまま、大根役者のように棒読みで謝罪の言葉を述べる。

「勝手ニ飛ビ出シテゴメンナサイ」
ルカは顔を上げて有希を見て、盛大にため息を吐いた。
「あー、ルカ、あれだ。嬢ちゃんはな、オレを迎えに来てくれたんだ、な？　そうだよな、嬢ちゃん」
「ナゼット、そんな見え透いた嘘はいらない」
ため息まじりにルカは言う。ナゼットはばれちまってるかと大仰に笑っている。
「まぁ、細かいことは気にすんなって！　嬢ちゃんも無事、オレもフォルにたどり着いた。それでいいじゃんか」
ルカがまた有希を見る。相変わらず鉄面皮だが、その目に疲労が浮いているような気がするのは気のせいだろうか。
「――ハァ。いい。ユーキ、お前は部屋に戻れ。そして一歩も外に出るなよ」
「イヤ」
ぎろりと青い瞳が有希を睨む。負けるもんかと睨み返す。
「外に出るときはメイか兵士さんの誰かを呼ぶ。それでいいでしょ」
また一つ、大きなため息を吐いて手で顔を覆った。
「ルカ」
「……何だ」
片手で顔を覆ったまま、面倒くさそうな声が返ってきた。その手に嵌っている指輪に、心がぎゅっと締め付けられる。有希は、あれをもう持っていないのだ。
「――っ地震が起きたね」
「だから何だ」
「あたし知らなかったんだけど、地震って『凶事の予兆』なんだってね」
手を外して、有希を見る。
「――あぁ」
「ねぇルカ。フォルはいつ発つの？」
「明後日の予定だ」

「明日にして」
ルカが値踏みするような目で有希を見る。有希も挑むようにルカを見つめる。瞬きを数度するような時間が経ち、何を思ったのだろう。ルカは口角をくっと上げて微笑んだ。その笑顔に有希の心臓はどきんと跳ねた。けれどもそれを顔に出さないように、挑むような目でルカを見る。
「――わかった」
「ありがとう。あたしにできることがあったら言って。なんでもやるから」
「メイは今、アニーと馬車の荷作りをしている。兵達も祭で忙しい。だから外には出るな」
（それは、余計なことするなって事？　……いやでも、それならメイとアニーの仕事を手伝えばいいじゃない）
二人の仕事のうちに有希ができること。うぅんと数秒唸り、できることを思いついて有希はにんまりと笑む。
「――わかった。じゃぁ、お茶の用意をするね。あたしが無理言ったから、これから明日の分の仕事もしなきゃいけないんでしょ？」
（ホラ、こういうことでも、あたしにできることがある）
それは小さなことかもしれないけれど、できる事をできる時にやることが大切なんだ。ぎゅっと手を握り締めて、部屋を出た。
「……外で一体、何があったんだ？」
「？　ユーキは元々あんなんじゃなかったか？」
ルカは能天気そうに佇んでいるナゼットを睨み、また盛大にため息を吐いた。

112

ゆらゆらと橙色の灯りが部屋を照らしている。
祭の喧騒は大分前に遠のき、今はただ、風が窓を叩く音と、時折ランプが立てるジッという音が聞こえるだけだった。
ルカは机の上、右側の山から書類を取るとさっと目を通し、サインをして左の山に乗せるか、足元に置かれた箱に入れるかを決める。
一見流れ作業のようで眠そうになるかもしれないが、見落としがあってはならない緊張感で目は冴えている。
向かいで書類の選別を行っているアインの首がかくりと動いた。視線を遣ると、俯いたまま寝息を立て始めた――かと思うと、がばりと顔を上げて、首を振って両手で頬を叩いてから、また書類を読み始める。アインは先ほどからこれの繰り返しをしている。また五分も経たないうちに、船をこぎ始める。
アインが選別した、ルカの見る書類の山――右側の山の書類は全て片付けてしまった。けれども、向かいのアインの机には、まだ選別されていない書類が平積みされている。ため息を一つ吐く。集中を切らず、一気に片付けてしまいたかった。ふと集中力が途切れると、どっと疲労が押し寄せてくるからだ。ずっと――　座りっぱなしで、肩も腰も張ってしまっている。おまけにずっと書類ばかり見ていたから目の奥も疲労を訴えるように重い。
（丁度いい、一度休憩を取るか）
幸い、今アインの横に平積みされている分で終わりだ。この分なら夜が白ける前には終わるだろう。そう計算したルカは、目頭をつまみ、首をぐるりと一回りさせる。張り強張った筋肉の血行が少し良くなったのだろう。少しだけ肩が軽くなる。
椅子に背中を預けて、首を後ろに反らせる。長い息を吐き出していると、廊下から靴音が聞こえる。踵の低い、小さな靴特有のペタペタという音が。

足音が止まると、扉がコツコツと叩かれる。返事をする前に、扉がゆっくりと開き「よいしょ」という声が耳に入る。
「そろそろ休憩したほうがいいかなと思って持ってきたんだけど、お茶、飲む？」
有希が良く通る、しかし少しそめた声が耳に入る。有希は開けた扉を固定すると、ワゴンを部屋に引き入れる。それと同時に、甘い菓子の匂いがふわりと鼻腔をくすぐった。その匂いに、ルカは自分が空腹だったということを思い出した。
「あれ、アインさん眠っちゃったの？」
「……アインも休憩中だ」
机に突っ伏して眠っているアインの下に書類が無い事を確認して、片方ずつ肩を回す。久しぶりに使う筋肉が伸びるのを感じ、その心地よさに目を細める。アインも休憩が終わったら起こさなければならない。
最近ようやく落ち着いてきたかと思ったが、今日ナゼットと再会したからか、アインはいつも以上に挙動不審だった。
（無理もない）
ナゼットとティータが死んだと伝えられていたのだ。その時のアインは冷静に振舞おうとしていたが、いつも以上に落ち着きがなく、眼光が鋭くなっていた。苦しんでいる、悲しんでいるというよりもむしろ殺気立っていた。
そして今日、ナゼットを見たアインはあまりにも驚きすぎて腰を抜かしていた。緊張の糸が切れたようだった。
（寝ていなかったようだしな）
ルカが目覚めてからというもの、日毎にアインの隈は主張を色濃くしていった。何日睡眠不足が続いたのだろう。明日はたんまりと寝かせてやりたいが、せめてあと数時間だけ頑張ってくれと心の中で告げる。
「お前は、眠らないのか」
手際よくティーポットに湯を入れてくるくると揺らし、その合間

にカップを暖める有希は手を休めないで答える。
「うん、まぁ……」
歯切れの悪いその言葉に、ため息を吐きたくなった。一体今度は何なんだと毒付きたくなる。
反抗的だったかと思うと、腑抜けたように従順になり、またいつもの――出会った頃のような、けれどもどこか違う、有希。
備蓄庫から突然泣きながら現れたかと思うと、ルカを射抜かんばかりに睨みつけ、走り去ってしまった。その後、一体何があったのか。
今のように甲斐甲斐しく世話をしてくれるが、それもどこかよそよそしくて居心地が悪い。時折何か言いたげな目で見られるが、それを問おうとするとはっとして逃げ出す。文字通り逃げ出すこともあれば、一生懸命に話を逸らそうとする態度にルカが聞くのを諦めることもあった。
「そっち書類あるからこっちで飲む？」
声に顔を上げると、スコーンと紅茶を載せたトレーを持った有希がソファを顔で指している。
「あぁ」
椅子から立ち上がって、両手を上に伸ばす。固まっていた体がやっと動き出し、深夜だというのを認識したのか欠伸が出た。筋肉が少しほぐれたのを確認してソファに向うと、有希が驚いたようにあんぐりと口をあけていた。
「……ルカって、あくびするんだ」
「……」
眉間に皺が寄る。有希の思考が理解できない。
「いや、人間だもんね、あくびのひとつやふたつするよね、うん。……ルカが、あくび……」
言葉尻ぶつぶつ言いながら、紅茶をテーブルに置いてゆく。置かれたのがルカ一人分だった。
「お前の分はないのか？」

「え、だって……」
トレーを持ったまま、言葉を探して俯いている。
（一体何をそんなに敬遠する）
今までなら人数分用意していたろうに、一体この変化は何なのだろうか。有希が一体何を考えているのかわからず、苛々とした気持ちは募るばかりだ。
「アインに用意したものがあるだろう」
「ある、けど」
「アインは眠ってる。勿体無いからユーキが飲むといい」
トレーを胸元に抱いて、ニ、三瞬きをした有希は「それじゃぁ」と言っていそいそと紅茶を淹れはじめた。

有希はカップを両手で持ったまま、飲まずにいつまでもカップを眺めて息を吹きかけている。熱いものが苦手なのだ。音を立てて飲んではいけないという事を最近知った有希は、熱い紅茶を飲む時にいつもずずっと音を立ててしまうので、ことさら熱い紅茶が飲めなくなってしまったのだ。
しんとした部屋に、紅茶の香りと、焼きたてのスコーンの匂いが充満する。スコーンを一つ手に取って口に頬張る。サクッとした歯ざわりの後、口の中に甘さが広がる。――この味はメイが作ったものだろうか。いつにも増して甘い、と甘さを噛み締めながら食べていると、いつの間にか六つあったスコーンは消えていた。少しだけ物足りなさを感じ、紅茶を飲んで一息つくと、有希がじっと自分を見ていた。
「……なんだ」
「おいしかった？」
「……まぁ」
「そう……そっか」
えへへ、と笑って何かを誤魔化すようにカップに口を付け「あちっ」と眉間に皺を寄せると、ばつが悪そうに「実はね、メイに頼んで作

り方教えてもらったんだ」と恥じらいながら言い、カップに口を付けてはまた「あちちっ」と眉尻を下げた。
笑んでいたと思うと、ぴたりと動きが止まり、しばらくするとず、と音を立てながら紅茶をすすりはじめた。神妙な顔つきで、眉間に皺が寄っている。
「……どうした」
「え？　あ、いや、別に……なんでもない」
ため息を吐きたい気分だ。最近の有希は、こうやってしばしば理解の出来ない行動を取る。
「何か言いたいことがあるなら、言え」
「だから、何でもないってば」
ため息が零れた。カップを置いて、右手で顔を覆う。親指と人差し指でこめかみを揉むようにしていると、視線が刺さる。顔を上げると、有希はさっと視線を逸らす。――きっとばれていないと思っているのだろう。ばれていないよね、とでもいいたげにちらちらと視線を寄越す姿に、またため息が出そうだった。
（一体何なんだ）
知らず知らずの内に、ため息が出た。

113

聞きたい。聞けない。でも気になる。聞きたい。だけど聞けない。

そんな終息のない悩みが、有希の中をくるくると駆け回っている。

考えないように、考えないように振舞っても、それは突然去来して、考えないようにしていたバリケードをいとも簡単に崩壊させて、有希の中をぐちゃぐちゃと不安にさせては去っていく。

（あたしには、やらなきゃいけないこと、あるし。だからそんなこと別に、どうだっていいもん）

心に湧く何かを打ち消したくて、繕うようにカップを口に運ぶ。持つには暖かいが、飲むには熱すぎるそれに、舌がひりひりと痛む。

よっぽど疲れているのだろう、ルカがこめかみを揉んでいる。指の長い大きな手は、ルカの小さくて綺麗な顔を覆っている。その中指には、紫銀に光る、指輪。

思わず自分の手と比べてしまう。ポットを持つとき、ミトンがぶかぶかになってしまう程小さな手。唯一あった装飾品の指輪を失ってしまった、子どものてのひら。

言いたいことがあるなら言えとルカは言うけれど、言えるはずがないではないか。

（だってあの人、ルカの婚約者だし）

本来ならばルカは、シエと契約を結ぶ筈だったのだ。だってそうではないか、契約はプロポーズと同義だとセレナが言っていた。

（あるべきものが、あるべきところに収まっただけじゃない）

自分に言い聞かせるようにしても、心のもやもやは晴れない。言える筈がないのだ、指輪を返して欲しいだなんて。

一生懸命作った――少し砂糖を入れすぎてしまったが。スコーンを無言で次々と口に入れていく姿を見れて、それがとても嬉しかったのに。どうしてなのだろう。突然、これを作ったのがもしシエならば、ルカはどうしただろうと思ってしまったのだ。今のように、

わかりにくいけれど満足気に微笑むのだろうか。
そう考えたら、心臓をきゅっと掴まれたような気分になってしまった。こころのどこかに隙間風が吹くような、そんな心許ない寒さ。そうしたら、嬉しかった気持ちは砂の城のように攫われてしまった。
ルカはもう休憩を終えて、眠っているアインの横に積まれていた書類の選別をしてはサインを書いたり、箱の中に書類を入れたりしている。アインの背には、薄手の毛布が掛かっている――有希が掛けたものだ。
（どうしてこんなことばっかり考えちゃうんだろう）
シエとルカはこれからどうなるのだろうか。ルカはこれからリビドムに向かう。ならばシエは？　シエは、どうするのだろうか。
「ねぇルカ」
声を掛けてしまった。話し掛けなければとすぐに後悔した。けれどもそんなことは露も知らぬルカは、何だと言いたそうに、一瞬だけ有希に視線を寄越す。
銀のトレイをぎゅっと抱きしめ、気合いを入れる。
「あ、あのさ……あの――シエ、さんってさ、一緒にリビドムに、行くの？」
ルカが書類から有希に視線を移した。
「何故だ？」
眉間に皺が刻まれている。立ち入った話を聞いてしまっただろうか。
「あ、いや、だって……シエさんは、ルカのこんやくしゃ」
「お前には関係ないだろう」
「！！」
はじかれるように顔を上げると、ルカは仏頂面で書類に目を遣っている。その空気はピリピリしていて、これ以上その話をするなとでもいうようだ。
『お前には関係ないだろう』
先ほどのルカの言葉が反響する。

（関係ないよ。全然関係なんてない、だけど関係なくないよ。だって……）
かすれるような声が出る。指が、震える。
「あたしが、ルカの主人だもん……」
「――何だ。何か言うことがあるなら、もっとでかい声で話せ」
「～～～～っ」
なぜだか胸がむかむかする。どうしてこんなにももやもやするのだろう。そのなんとも言いがたい感情はふつふつと煮えて沸点を超えて有希の口から飛び出す。
「～～関係なくて悪かったわね！　ルカには関係ないかもしれないけど、あたしには関係あるの！　――なによ、言いたいことがあれば言えって自分は言うくせに、ルカはあたしに何も言ってくれないじゃない！」
そうだ。全てはルカが説明してくれれば、言ってくれればいいのだ。そうすれば有希は、こんな感情をもてあますことも無い。
シエのこと、契約のこと、指輪のこと、ルカ自身のこと――。
「関係なくないもん。だってシエさんはルカの婚約者で、本当は契約する人で、でも、ルカと契約したのはあたしで……っ」
口からするすると言葉が出てくる。有希自身、何を言いたいのかはっきりとしない。ただ感情のまま、口が勝手に動くのだ。
「だから、関係なくないんだってば！　気になっちゃうんだもん、しょうがないじゃない！」
何を言いたいのか、何を言ったのか。有希自身よくわかっていなかったが、もやもやした感情はだいぶなくなった。
言い切った達成感からか、強気な気持ちでルカを睨みつける。
（あたしは言いたいこと言った、だからルカもこたえてよ）
ルカは幾度か目を瞬かせると「それが？」と冷たく言った。
「あの人と俺が婚約していて、俺はお前と契約している。それがどうした」
「……っ」

（あの人……）
名前を呼ばないその言葉はどこか親密で、強気な気持ちはしおれてしまう。
（ルカにとっては、たいしたことない、とるにたらないことなんだな……）
それがわかってしまった途端、むなしさで胸がいっぱいになる。はぁとため息を吐くと、机に突っ伏して寝ていたアインがもぞもぞと起き上がる。
「ん……。あ、あれ、僕いつの間に寝て……っあぁ！　ルカ様すみません！　僕が寝てた所為でルカ様に仕事押し付けてしまって！」
バタバタと立ち上がると、ルカの手から書類をひったくった。
「あぁ、こんな『宿屋前の店屋の”おやき”が自分の店の物の盗作だ』なんていう陳情書はルカ様がわざわざ読まれるようなものじゃないですよ！　貸してくださいっ」
幾分か寝たから元気になったのだろう。アインはまたバタバタと椅子に腰掛けると、物凄い勢いで書類の選別に取り掛かった。
「本当にすみません、ルカ様。ちょっと書類が溜まるまでどうか休憩していてください」
ルカはそんなアインにかまわず、有希を見ている。有希はいたたまれなくなって、じくじくとむなしさが痛む心から逃げ出したくなる。
「あ、じゃぁあたし、もう一杯紅茶淹れてくる。アインさんも飲むよね？」
「え？　あ、ユーキ、来てたんですね。では、お言葉に甘えていただきます」
「わかった。すぐ持ってくるね」
ワゴンの上の水差しを掴んで、踵を返す。
「ユーキ、まだ話は終わってない。どうしたのかと聞いただろう」
「……もういい、ルカがどうも思ってないなら、それでいい」

「ユーキ」
言って、扉の取っ手を掴んで思い切り引っ張る。痛いくらいに背中に視線が刺さるから、重い扉がゆっくりと開く時間がもどかしい。
有希一人が通れるほどの隙間が出来ると滑り込むように外に出て、逃げるように駆け出した。逃げ出すことに一生懸命だったために、閉じていた扉の向こう側にナゼットが立っていた事に気が付かなかった。
「……なんだかなぁ」
ナゼットは頭を二三度掻いて、有希が走っていった後をゆっくりと追い始めた。

114

オレが思うに、ルカも嬢ちゃんも、言葉が足りなさ過ぎるんだよなぁ。まぁ、ルカが何も言わなさ過ぎるのが悪いのかもしんないけどな。

馬がカポカポ、パカパカと音を立てて歩く。その背に跨った有希とナゼットは、秋晴れ空の下でこんな会話をしていた。

昨晩水差しに水を入れている有希の元に、眠れなくて水を飲みに来たというナゼットが現れた。こんな夜更けにどうしたと聞かれ、有希がルカとアインに茶を淹れるのだと告げると、そんなことはオレがやるから寝ろと有希はナゼットに寝室まで送られたのだった。ソファで座っていると、ルカと再び顔を合わせなくて済むという安堵感と睡眠不足とでいつの間にか寝入っていたらしく、気が付いた時には窓の外は白くにごった水色をしていた。

あわただしく準備を整え、有希は自身に宛がわれた馬車を荷馬車にしてもらい、有希自身はアニーやメイ達ルカの使用人と同じ馬車に入り、力尽きたと言わんばかりに倒れこんだ。

気づいた時には昼休憩時間だったらしく、煮炊きの匂いが鼻をくすぐってきた。掛けてある毛布を退ける。ひやりとした空気が気持ちよかった。のっそりと馬車を出ると、メイが有希の食事をてきぱきと準備してくれた。食事を頂いて、ごちそうさまでしたと両手を合わせて呟いたところで、ナゼットの声が聞こえた。

「おう、嬢ちゃん、メシ食ったか？」

顔を上げてナゼットを見ると、相変わらず快活に笑っていた。

「うん。今食べ終わったよ」

ナゼットは有希の向かい側に座ると、頭をわしゃわしゃと撫でて満足げに微笑んだ。

「うし、じゃぁこっから先はオレと馬にでも乗って行くか！」

「え、いいよ。馬だって疲れちゃうし、ナゼットだってあたしが乗

ってると気使っちゃうでしょ？」
「なぁに言ってんだよ！　……何かあったんだろ？　ルカと」
「！？」
「それに、聞いたぞぉ。嬢ちゃん、ずーっと馬車だったんだろ？
たまには変えてみんのも楽しいぞ。――そろそろ出発すんだろうし、
オレの馬に向うか」
　そう言うと、ナゼットは有希を立たせ、腕を引っ張った。引っ張
られるがまま連れて行かれ、あれよあれよという間にナゼットの両
腕の中にすっぽりと収まっていた。
　ナゼットの乗馬は少しだけ荒い。豪快なナゼットに合う、豪快な
手綱さばきだ。そして身体が大きいから、少しだけ窮屈だった。け
れども、ナゼットの胸に当たる背中が温かくて、秋風は全然身体に
こたえなかった。
　そして今、ナゼットの両腕に挟まれて馬に揺られながら、ナゼッ
トが思う有希とルカについて話されている。
「な、ナゼット、どうして急にそんな話するの？」
「あん？　あー……えー……あぁ！　そうそう、今朝方な、アイン
がこぼしてたんだよ」
「アインさんが？」
「お、おう。えーとだな、「ルカ様とユーキ、何かあったんかなぁ」
って」
「……そう」
「ホラ、今なら誰も何も聞いてないぞ。言うなら言っちまえって」
「だ、だから、言う事なんて特にないし」
「んな意地張るなって。オレでできることがあればなんだってして
やるぞー」
「ありがとう」
　その続きの言葉が出てこない。
（だって『関係ない』んだから）
　前後からは移動しながら人々が話している、ざわついた音と、馬

の足音が聞こえる。馬に揺られながらぼんやりとその音を聞いていると、ナゼットが「あー……」と気の抜けた声を発した。
「あのな、ルカは昔っからあんなんなんだよ。自分の中でいろんな事を勝手に決めて、勝手に実行してる。オレらはそれに振り回されてばっかりでよお。……そんでよ、アイツはなぁーんも言わねぇんだよ。昔っから。騎士寄宿舎に入った事も、幼馴染のオレが傍付きになる事も、戦争に駆り出される事もな」
そんで、そう言ってナゼットは押し黙る。振り向いて顔を見ることが出来ない有希は、その声音からナゼットがどんな顔をしているのか推し量るしかない。
「ルカはなにも言わねぇんだよ。大切なことでもそうじゃねぇことでも。……でもよ、オレは嬢ちゃんにそれを知ってて欲しいって思うんだ。だからよ、オレが教えたってぇのはヒミツにしてくれな」
「……え？」
思わず振り返りそうになる。一瞬だけ目が合ったナゼットは快活に笑って、有希の頭を掴んでぐるりと正面に向かせた。
「まぁ、こうやって二人で馬ん乗ってれば、何らかの話したって事がルカにバレそうだけどな」
どこから話せばいーかな。そう言って、ナゼットは長い話を始めた。
「ルカの生まれから、話した方がいいかもしれねぇな。――嬢ちゃんも疑問に思うだろ、一国の王子がこんな簡単に国を捨てちまうこと、んでもって、アドルンドがそれを止めないこと」
「……うん」
「ルカはな、母親が平民なんだよ。王の他の側室はみぃんな貴族なんだが、ルカの母親一人だけ。城下に降りられた王が気に入っちまって召し上げてたんだと。他の男の子を身篭っていた妊婦をな。……王も王だよなぁ、その男から奪い取ったんだと。そんで生まれた娘は、ルカの母親に宛がった家で、王族の側室の娘として育てられてた。――確か、ルカの生まれる十年くらい前の話だ」

「……なんか、すごいねぇ……」
「だな。凄く噂になったもんで、有名な話らしいぞ。オレも生まれる前の話だかんな。オレが詳しく知ってるんだってんだから相当だぞ」
そう言ってからしばらく、ナゼットは黙る。
「……ルカが七歳の時だったかな。ルカの母親が殺された。オレも詳しくは知らねぇが、王妃やら側室やらから嫌がらせを受けてたらしい……嫌がらせって言葉でおさまらねぇことをされたんだろう、醜聞だからって公にできねぇが。――ルカの姉ちゃんも、王とは直接血縁があったわけでもなし、ってことでどっかに嫁がされたらしい」
母親が殺された。その言葉に頭をガツンと殴られたような気持ちになる。ルカの母親の話は今までに一度も出てきたことが無かったのは、こういうことだったのかと思い知る。
しかも、ナゼットの口ぶりはその犯人がわからずじまいだと物語っている。母親が殺されたのに、犯人を見つけられなかった――見つけなかった人に対して何を感じたのだろう。そしてその人たちとは、変わらず顔をつき合わせて生活しなければならない。
幼い頃のルカはどう思ったろう。悔しかっただろうか、悲しかっただろうか、憎かっただろうか。
（ルカが、二重人格じみてるのも、ひねくれてるのも、そのせいなのかな……）
「ルカが簡単に国を捨てようって気になったのはそういうこった。母親の身分が低いのと、その母親の件があってからってのとで……まぁ、ルカは、居ても居ないような扱いだったって訳よ。でなきゃオレがアイツの傍付きになる訳ねぇからな」
「……そうなの？」
「あぁ、元々傍付きっつぅのは貴族がやるもんだ。――まぁ、オレも一応貴族だけどよ、戦災孤児で拾われたから直系ではないわな。……アインも、アイツはイイトコのぼっちゃんだが、末っ子だしよ。

まだまだ傍付きとしては未熟なのに宛がわれたんだ」
　まぁ、幼馴染を傍付きにしたオエライ方には感謝してるがな。暗くなった雰囲気を払拭するようにナゼットが明るく言う。
「そうそう、その母親の一件の後、ルカが突然、オヤジの元に来たんだよ。騎士になりてぇって。それがオレとルカとの出会いなわけだがな。あぁ、嬢ちゃんは知らねぇかもしれねぇけど、王族ってのはな、剣術は習っても騎士にはならねぇんだよ。王族は間違いなく主人の立場だからな。だけどルカはんなもん知るか、守りたいものを守るための騎士制度だろう。王族だろうが守りたいものだってあるんだっつってオヤジを説き伏せてよ――元々、オヤジはアドルンドに籍を置いていたがリビドム出自ってのを見越してたんだろぉなぁ。ヤなガキだぜまったく」
　ナゼットは言葉を続ける。
「オヤジも、ルカの立ち位置を案じて剣術を教えた。アイツは優秀でな、その年の内に白の騎士になった……」
　幼い頃のルカを想像する。――一体、何を思って騎士の称号を得ようと思ったのだろう。考えても想像がつかない。想像がつかないけれど、有希よりもずっとずっと、苦労してきたことだけはわかる。
「……嬢ちゃん」
「え？」
　ずっとナゼットの話を聞いているだけだった有希は、突然呼びかけられてきょとんとする。
「嬢ちゃんは、知ってるか？」
　主語のないそれの意図がつかめない。
「え？　知ってるって、何を？」
「あー……そうだよな、知らないよな、誰も言うわけないもんなぁ……」
「？　ナゼット、何のこと？」
「……けど、いずれは知ることだもんなぁ」
　そう言うと、気を取り直したようにナゼットは言った。

「――ルカはな、騎士の称号を取るとすぐに屋敷に戻って、自分の侍女と契約をしたんだ」
「え？」
有希は思わず、ナゼットに振り返っていた。

115

いつか、シエが有希に落とした言葉。

『……それでも、魔女には感謝しなければならないところもありますわ。あの魔女が居たからこそ、ルカートはまた契約できるようになったんですもの』

（また……また？）

どこか心に引っかかっていたその言葉が、ナゼットの発した言葉ですとんと腑に落ちた。

「側室でもない、貴族の娘でもないただの侍女とだなんて、ってな。身寄りがなくて、王族の親戚か貴族が入れてやったらしい。あの頃はまだルカも一応、王族としての教育を受けていたから、そういうのを気にするお偉いさん達が騒然としていたなぁ。――だけどルカは自分の主人になった侍女を自分の屋敷から一歩も外に出すことをしなかったし、お偉いさん達を屋敷に入れることもしなかった。……守ってたんだろうな。実際、オレもその侍女を数回した見たことがねんだよ。あー……ちょっと嬢ちゃんに似てるかもな。華奢で髪が黒くて、目ぇ青かったけどな」

どきどきと心臓がうるさい。一体何に衝撃を受けているのだろう。ルカに自分の他に主人が居たことだろうか、それがルカの侍女だったことだろうか、その侍女をルカが守っていたからだろうか。

「恋仲だっていう噂もあったが、なにぶん年が十くらい離れていたからな。真偽はルカとその侍女くらいしかわっかんねぇな。ルカがどうしてその侍女を主人にしたのか、二人の間に一体何があったのか……」

次々と入ってくる情報に頭がくらくらする。ナゼットの発する言葉は、有希には消化しきれない量だ。けれども、有希はルカのことを知りたいと思う一心で受け止める。

（でもちょっと待って）

ふと有希は気づく。契約は一生ものではなかったろうか。主人か騎士が死ななければ、その契約は終わらない、と。
ルカは生きている。
（じゃぁ……）
「その、侍女さんは……」
ナゼットはその話をするつもりだったのだろう。小さく頷いた。
「八年前、オルガー王子に殺された」
「！！　なに……それ……」
「オレも誰も、きっとルカも詳しくは知らないと思う。――王族の誰にも相手をされない中、唯一オルガー王子だけはルカに構っていたんだよ。ルカはすっげぇオルガー王子に懐いてたし、すげぇ仲の良い兄弟だったんだ。……その相手に自分の主人を殺されたんだ、知りたくないって思うのも無理ねぇし、調べることもできなかっただろうな。その頃にはルカはもう、居ても居なくてもあんまり関係なかったからな」
またもや大きな衝撃だった。オルガとルカの仲が良かった。
有希が知りうる限り、あの二人はお互いがお互いを憎しみ合うようだった。
けれど。
ふとアドルンドの泉の前で会ったときの姿を思い出す。
『これはこの棟の一番最上階奥の部屋のものだよ。――そこに居る子も治してやってあげて』
（そこに居る『子』……）
それはルカのことだった。あの言葉は、仲が良かった頃のものなのだろうか。
『……どうしてこうなったのか、僕も知りたいくらいさ』
そう言ったのは、紛れも無くオルガ本人だ。こうなった。というのはルカとの仲のことだろうか。けれどルカの主人を殺めたのはオルガだ。なのにどうして、オルガは知らないと言ったのだろう。
「ね、ねぇ。その侍女さんを殺したのがオルガだって、どうしてわ

かるの！？」
「……その侍女が殺された部屋ってのが、オルガー王子の私室だったからな。オルガー王子は返り血を浴びてたし。疑いようもねぇだろ」
有希は絶句した。
母親が殺され、自分の主人も殺された。その事実だけで、何も言葉が出てこない。
「オルガー王子は不問だった。たかが侍女一人手打ちにしたからって罪にはならないんだと。――ルカはそれから荒れ始めた。……丁度、マルキーとアドルンドが戦争を開始した年でな、ルカは最前線で後ろも見ずに戦ってた。自分を殺すために戦ってたようだった……」
心臓が痛い。本当に痛かったのはルカなのに、有希が泣きそうになる。
「オヤジがルカに剣術を教えていてよかったよな。もしルカが剣をたしなんでいなくとも戦場に出されそうな空気だったかんな。……むしろ、ルカが功績を挙げたのが誤算だったとでもいうような顔だった……まぁ、そのお陰でルカは騎士として名前を上げて、王族から除け者にされてもカッコたる地位を持ってたんだけどな」
ぽす、と頭にナゼットの大きくて暖かい手のひらが乗る。わしゃわしゃと頭を撫でられる。
「なんだかしんみりしちまったな。あんまり話しても気持ちの良い話じゃないよな……まぁ、そんなルカが嬢ちゃんと契約したんだ。何の意図があってのことかはオレも正直わかんねぇ。――わかんねぇけど、あれから人形みたいに上の命令を聞いてたルカが、国を捨てて主人に尽くすっつってんだ。――だからよ、ルカの事嫌いにならねぇでやってくれな」
「べ、別に嫌いなんかじゃないよ！　ただ……」
「ん？　ただ、何だ？」
「……」

ルカと契約したのは、シエじゃなくて有希なのに、どうしてシエが有希の指輪を持っているのか。
どうしてシエはルカの婚約者なのに契約しなかったのか。
（そんなこと、聞けないよ）
ナゼットの話を聞いた後だと、自分の悩んでいたことがちっぽけで仕方が無い。悩んでいた事自体が恥ずかしくてたまらない。
（そうだ、シエさん）
今の話には、微塵も彼女の名前が出てきていない。――そもそも、話を聞いている限り、ルカに婚約者が居るということ自体、失礼かもしれないが信じられない。
（でも、婚約者だっていうのはアインさんが教えてくれたんだし、アインさんが嘘をついているとも思えないし……）
ううんと考え込んでいると、その考えを霧散させるかのようにナゼットが有希の頭をぐるぐる回す。
「あんまり考え込むと、禿げっぞぉ」
「いたたたた、首！　首取れるって！」
「おお、わりぃわりぃ」
（聞いても、だいじょぶかな……）
首をさすりながら、少し小さな声になる。
「し、シエさんってルカにとってどんな人なのかなって」
おまけに早口にもなった。
「ほら、ルカの婚約者だっていうけど、それならあたしじゃなくてシエさんが契約すべきだったんじゃないかなって、そう思うからさ」
しかも言い訳じみている。
けれどもナゼットは有希のそんな機微には気づかず、「あぁ」と鷹揚に笑った。
「アインのねーちゃんな。あの人はなぁ、昔っからルカの事を好いているんだよ。あのねーちゃんの愛情表現はキッツかったぞ、ルカが様付けで呼ぶ女が居ないからっていう理由だけで、自分を様付けで呼ぶようにルカに強要したりしてな。ま――ガキの頃の話だけど

な。それからもまぁいろいろやらかしてたぞ。ルカの正妃候補に自分がなりたいからって他の貴族の娘に断るように言いに言ったり、ルカよりも年上だっていうだけで正妃候補から外されたことを談判したりなぁ……」

ナゼットがどこか遠い目をしている。

「……ルカが荒れている時、ずっと傍に居たのはあのねーちゃんだったな。ルカもガキだったからよぉ、ねーちゃんに八つ当たりしてたりなぁ。あんまり酷かったんで止めに入ったことも何回かあったなぁ……ま、ルカにとっちゃ消したい過去を今もってずーーーっと覚えている人だな。何されてもルカが好きだっつってんだから、すげぇ人だよ」

「……そっか」

荒れているルカの傍に居た。その言葉がひっかかってしょうがない。

有希は右手を空にかざし、その中指を撫でる。

「あたしは本当に、ルカのことを何も知らないね」

（ここにあった指輪の大切さも）

「……ルカは、どう思うかな」

「それでいいと思ってたんじゃねぇか？」

半ば独り言だったそれに返事があって驚いてしまう。ナゼットがすぐ後ろにいて、馬の手綱を引いているのだから返事があるのは当たり前なのだけれども。

「嬢ちゃんはよ、何にもとらわれてないじゃんな。それがいいんだよ」

「どういうこと？」

「ルカの事を何も知らないから、ルカに好き勝手モノを言えていたじゃんよ。オレ達はルカの家臣だからな、どんなに意見を言ったとしてもルカが命令だと言うのならそれに従うしかない。王族だしな。命令は絶対だ。――けど嬢ちゃんは嫌だと言える。主人だから命令できる。実際、オレはルカが困っている姿なんて初めて見たぞ」

「それは呆れている、の間違いじゃないの？」
「どっちでもいんだよ、ルカにはそういう存在が必要なんだよ」
「そうなのかなぁ……」
「だからよ、ルカは言葉が足りねぇから、嬢ちゃんは前みたいにもっとルカにずけずけ言っていんだぞ？」
「え？」
「嬢ちゃんはまだまだ幼いかんな、めいっぱいワガママ言ってルカを困らせてやんな」
「……ナゼット」
「そんな子供のうちから遠慮とか覚えるんじゃねぇぞぉ」
そう言って、頭をわしゃわしゃと撫で回される。
頭を撫でる腕を取って、ぐるりと振り返る。
「だからあたし、十八歳な・ん・だっ・て・ば！」
「そうそう、気になってたんだけどよ、嬢ちゃんの国では一年って何日くらいあんだ？　変わった暦の読み方してるよな」
「……は？」
「こっちの国、つぅか大陸だな。アリドル大陸で十八っつったらアインくらいだぞ？」
けろりと言ってのけるナゼットに、有希はがっくしと頭を垂れた。
「もぉ、ナゼットがそう思ってるなら、それでいいよ……」

116

ルカの出生の話、生い立ちの話。それらをナゼットはぽんと軽く言ったけれど、有希にはとても重たい、なかなか消化のできないものとして心に置かれている。

ナゼットもそれに気づいて慮ってくれたのか、それからのナゼットは明るい話ばかりしてくれた。剣術を学んでいる時分、ナゼットに勝つことができなくて、何度も何度も勝負を挑んできたことなど、皆が幼かった頃の話。

「え、ナゼットとティータって、二人ともダンテさんと血が繋がってないの？」

「おうよ。オレが十一歳の時に……ルカがオヤジの所に来る少し前にだな、拾われたんだよ。ティータと一緒に」

「それなら、ナゼットとティータは血が繋がってる兄妹なの？」

「そうでもなくてだなぁ……」

ナゼットはのんびりとした口調で続ける。

「丁度その辺りにマルキーとリビドムが戦争を始めて、リビドムの辺境にあるオレの村が襲われて焼かれて、オレは親に逃がしてもらえて、命からがら逃げ出したんだよ」

有希は耳を疑う。ナゼットの話す口調と、話の内容が合っていない。

「そんでなー、どんくらい走ったんだろうなあ。三日は走ったと思うんだけど、まぁとりあえず走りすぎたのとショックとでだな、森のド真ん中力尽きそうになったんだよ。そしたらよぉ、赤ん坊の泣き声が聞こえるんだよな。だだっ広い森だったんだけどよぉ。――早い話、その赤ん坊がティータだったんだよ。オレはさぁ、びびったよ。こんな赤ん坊でも捨てなきゃならないようなそんな時代なんだって、ガキながらにな。そんなガキがガキなりに、この赤ん坊をなんとかしてやりてぇって考えてたところに、狩りに来ていたオヤ

ジがティータの泣き声を聞きつけて来たっていうのが、拾われたきっかけだな」
「……どうして、そんなさらっと簡単に言えちゃうの？　辛かったり、大変だったりしたんでしょ？」
「あー、まぁな、そん時は辛かったろうけど、もう十五年も前の話だしなぁ。昔の話を今でも引き摺って話しても相手に心配させるだけだろ……ってぇ、ならこんな話しなきゃよかったな」
　くしゃりと苦笑いを浮かべたナゼットは、有希の頭を掴んで前を向かせる。
「まぁ、何が言いたかったかってぇと、オレはティータに救われたんだよ」
「そ、そうなの？」
　後ろから聞こえる声が、ひどく優しい声をしていて、思わず有希はどもる。なんだかナゼットじゃないような気がした。
「あの時のオレは、正直声を出すのも出来ないくらいに衰弱してたからなぁ。ティータが代わりに声を出してくれたから、オヤジが気付けた。だから、ティータはオレの命の恩人って訳だな。――――だから何があったとしても守る。たとえオレが死んだとしてもな」
　優しくて、けれども計り知れない決意の篭ったその声に、おずおずとふり返る。そしてナゼットの顔を見て有希は驚愕する。
　ナゼットの顔が真っ赤に染まっていたのだ。
「ってぇ！　オレはナニ恥ずかしい事言ってんだかな！　ユーキ、今の話はティータには言うなよ！」
「え！？　え！？　どういうこと？　なんでナゼットそんなに顔赤いの！？」
「だぁ！　言うな！　頼むから言わないでくれ！」
「え？　なになになに？　だってナゼットとティータは兄妹で契約してて……」
　言ってはっとする。
（そうだ。血が繋がってないんだ）

一つの予感がよぎる。けれどもそれはあまりにもベタすぎる。少女漫画や昼メロドラマもびっくりするほどにベタだ。
「ナゼット……ティータの事が、す」
その続きは言えなかった。動揺したナゼットが足を馬にぶつけてしまい、号令を勘違いした馬が思いっきり走り出したからだ。
「うわぁ！！」
「うおっ！！」
不意を突かれた有希は思い切り後ろにのけぞる。後頭部がナゼットの胸当てに思い切りぶつかる。動揺しっぱなしのナゼットは手綱を引くが足に力を入れっぱなしな為に中々馬は止まらない。
次々に前を進む騎馬を追い越し、馬が止まる頃には、移動する皆が大分遠くに見えていた。
「……もう、ナゼットの馬には、のらない……」
半泣きで呟くと、ナゼットはがっくりと首を垂れた。
「嬢ちゃんが、ヘンな事言うからだろ……」

空がすっかり暗くなり、煮炊きをするからと有希はナゼットの馬から降りた。
侍女や騎士たちが煮炊きをするの手伝っている間中、ずっとナゼットから聞いた話が頭を駆け巡っていた。
（ルカの、前の主人……）
ルカの侍女をしていたという女性。ルカに守られていたという女性。
どんな人なんだろうか。一体どういう経緯があって契約したんだろう。
器を持ってぼんやりとしていると、突然視界が真っ暗になる。そして目元には誰かの手であろう、あたたかさがある。
「はーい、私は誰でしょう、かっ！」

セレナの声だった。驚いて名前を呼んでふり返ると、髪の毛を高いところで一括りにしているセレナが、優しく微笑んだ。
「せいかーい。……ユーキちゃん、なんだか久しぶりね」
ニッコリと笑う笑顔に、つられて有希も微笑んだ。
「あのがっしりした、褐色のお兄さん。ナゼットさんっていうの？　ユーキちゃんの騎士の臣下の。彼がね、『嬢ちゃんとずっと一緒に居て、ルカが居ない間、嬢ちゃんのコト守ってくれてたんだろ？　リビドムだからって会わせないのはおかしいだろう』って言ってくれて、ここまで来れちゃった。ヴィーゴも呼んだんだけど、なんだかやることがあるから次回にでも、だって」
ふふ、と言い、次いでセレナは心配そうな視線を有希に遣る。
「遠くから見てただけなんだけど、ユーキちゃんなんだか元気なさそうだったから」
心配してくれている。その事実が不思議と心地良い。自分の知らないところで、誰かが有希を慮ってくれている。それが嬉しかった。
「……ありがとう」
「でもね、ちょっとね気まずいかなーとも思ったの。だって私達、ユーキちゃんの力を知っていながら黙ってた。そのことでユーキちゃんは怒ってたり憎んでたりするかなーって。でもやっぱり私はユーキちゃんが好きだし、心配するし、こうやって顔が見たかった」
「怒る？　憎む？　どうしてそうなるの？　だってあたしの力を黙ってたのって、ちゃんと理由があってのことでしょ？」
突拍子の無いセレナの言葉にきょとんとしていると、セレナは一度目を見開いて、それから有希を思いっきり抱き寄せて抱きしめた。有希の手から器が離れ、セレナの胸に埋もれながら、器が落ちる音を聞いた。
「〜〜〜〜っ私、ユーキちゃんのそういうところ、大好きよ！　あぁ、杞憂でよかった！　あんもう、ならユーキちゃんは一体何に悩んでるの？　このお姉さまに言ってみて！」
ぐっと肩を掴まれて、セレナと向かい合わせになる。

有希は今さっきまで考えていた事を、セレナに言っていいものだろうかと逡巡する。
（そういえば、セレナも二人目の主人なんだよね）
「ね、ねぇセレナ。あのさ」
「ん、なぁに？」
「セレナは、前の主人の事、どう思ってる？」
「え、何の事？」
「え？」
お互いきょとんとした顔で見合わせてしまう。セレナは目をぱちくりとさせて首を傾げている。
「前に契約していたんだよね、旦那さんと」
「前に……って、リディーの事？」
セレナはまだ話が飲み込めていないようだった。
「そう。どう思ってるのかなっ」
「愛してるわよ？」
それが当然、というようにセレナはきっぱり即答した。
「そうだよねぇ……そうじゃないと普通契約なんてしないもんねぇ……」
なんだか打ちのめされてしまう。
わかっている。比べるべきではないんだということ。わかっているのに、比べずにはいられない。
「ねぇ！　じゃぁさ、ヴィーゴさんの事はどう思ってるの？」
「ヴィーゴ？」
どうしてそこにヴィーゴの名前が出てくるのだと言いたげな表情をしていたセレナは、はっと息を呑んで、あぁーと合点がいったという声を出す。
「そうよね！　私今ヴィーゴが主人なのよね！　どうしたのかしら、しっかり忘れてたわ！」
「忘れてたって……」
「んー……そうねぇ。一生一緒に居るって決めちゃう程度には好き

よ？　まぁ、リディーが一番だけどねっ」
　小首をかしげて言い切るセレナはどこか可愛らしい。まるで少女のように屈託がない。
「なぁに？　もしかしてあの王子様に、昔主人が居たの？」
「！」
「あら。図星だったの？　あれよ！？　さっき私が言ったのは、私個人の意見であって、あの王子様もそうとは限らないのよ？」
「うん、わかってる……」
「……もしかしてずっと元気なかったのって、このことで？」
「そういう訳じゃないけど……」
「でも王子様が関連してたのよね」
「……」
「あらあらあらあら。重症ねぇ。――王子様は何て言ってるの？」
「わかんないの。ルカは、前に主人が居たことをあたしが知っているっていうことを知らないから」
　ふうむ。そう呟いたセレナは笑みを崩さない。
「それでも、あの超絶美青年はユーキちゃんを選んだんでしょ？ユーキちゃんが知らないだけで、何か理由があるわよ」
「昔、軽いはずみでしたことって言った」
「あらそうなの……言葉の綾だったりしたり……」
　じろりと見ると、肩をすくめて「しないのね」と言った。
「それでも、今あの王子様と契約しているのはユーキちゃんで、それはあの王子様かユーキちゃんが死なない限りは継続されるわ。……だから、もっと自分に自信を持ちなさい？」
「……契約してたとしても、何もないもん」
「え？」
「絆も、想いも、指輪も、あたしは何一つルカと共有してない！それなのに騎士とか主人とか言えないもん！」
　言えば言うほど虚しくて、涙が出そうだった。
　俯いていると、ふわりとやさしい匂いがして、セレナにきゅっと

抱きしめられていた。
「……ユーキちゃんは、あの王子様が好きなのね。だから不安なのよね」
「な！　す、すきとか、そんなんじゃない」
「そう？　恋愛感情なのか違うのかはわからないけど、私はユーキちゃんが王子様を好きだって言ってるように聞こえたけど」
背中に回っていた手が上下に揺れる。あやすような仕草に、昂ぶっている感情が少しずつ落ち着きを取り戻す。
「王子様は何て言ってた？　ユーキちゃんが今思っていることに対して」
「……聞いてない」
「あら。ダメよ、聞かなきゃ。男っていう生き物はね、女のそういう気持ちに気付かないんだから。――鈍いのよ」
鈍い。その言葉に目をぱちくりとさせてしまう。
あのルカが、鈍い？
いつも色々なことを考えて、有希が気付くよりも早く行動している、あのルカが。
聞いてみようかな。という気持ちがセレナに押されてむくむくと湧きあがる。けれども、そう簡単にはいかないことを思い出す。
「でも、フォルを出てからなんだかルカ忙しいみたいで、偉い人と話ばっかりしてるんだ」
「あらそうなの……困ったわねぇ……」
セレナに背中をトントンと叩かれる。まるで子供に戻ったみたいだった。暖かくて、心地よくて。
ここのところよく眠れていなかったせいか、今まで言えなかった事を吐き出せた安心感からか、とろとろと眠気がやってくる。
「……でも待って。このまま行けば、あそこに着くわよねぇ」
セレナのぶつぶつと喋る独り言が遠のく。聞こえるのは背中を叩く音と、セレナの心音だけ。
そのまま有希は、セレナの腕の中で眠ってしまった。

１１６（後書き）

いつもご覧くださり、ありがとうございます。
ホント暗くてすみません。

ツイッターでアインｂｏｔを作成しました。
よろしければ愛でたり罵倒してやってください。→ｈｔｔｐ：／／ｔｗｉｔｔｅｒ．ｃｏｍ／ａｉｎ_ｒ_ｂｏｔ

ちなみに説明ページが気持ち悪いのは仕様です。

117

秋が深まり、白い息が出るようになった。冬だと言っても過言ではないような季節だが、まだ枯れ葉の季節だとメイが言っていた。

一週間足らずでそんな寒さになったのは、山を登っているからなのだろうか。

有希の生活はあまり変わらなかった。変わった事といえば、あの夜からセレナやヴィーゴと話ができる機会が増えた事くらいだった。

ルカとアインは相変わらず忙しそうで、有希が寝た後も起きて会議をしていると聞いた。

「ユーキ様、寒くはございませんか？」

一緒に馬車に乗っているメイが、有希の膝からずり落ちそうなひざ掛けを掛けなおして問い掛ける。馬車の中はほの暖かく、白い息が出ることはない。

「うん、大丈夫。ありがとう」

メイはニッコリ笑って応える。

幾度かナゼットやセレナの馬に乗せてもらっていたが、寒さが厳しくなるということで、子供の有希は馬車に乗せられることになったのも最近の話だ。もうすぐ山道が険しくなって馬車を使えなくなるから、今のうちに体力を温存しておくように。とのことだった。

馬車の中は風も当たらず寒くないが、乗馬しているときとは違った意味で尻が痛くなる。特に、野営する直前の今くらいの時間が一番。

青紫がかった空が濃紺に染まるのを窓からぼんやり見つめていると、そのうちに馬車が止まった。今日はこの辺りで野営をするらしい。

早く外にでて思い切り伸びをしたいとひざ掛けを取って畳むと、兵の一人がやってきて、メイに耳打ちした。

「ユーキ様、この辺りに小屋があるそうなんで、本日はそちらでお

休みくださいませ」
「え？」
「毛布などの準備はこちらでいたしますので」
「そ、そうじゃなくて、どうして？」
「もちろん、ユーキ様はルカート様の主だからです」
「べ、別にいいよ！　あたし、いつもみたいに馬車の中で寝るから！」
そう言い捨てて、馬車を降りるところに、セレナの声が振ってきた。
「いーえ！　そんな事はさせないわよ！」
セレナはにんまりと笑うと、馬から降りて両手で有希の頬を包んだ。風にずっと当たっていたからだろう。とても冷たい手だった。
「せ、セレナ！　どうしてここに？」
「私はこの先に小屋があることを知ってたからよ。――ユーキちゃんも使ったはずなんだけど」
「え？」
夏の出来事を思い出す。あちこち回りながら、廃村や小屋を渡り歩いた日々。
「あぁ……」
「思い出した？　いやー、戦争でいくつか壊されちゃってたけど、山の麓に近いココはね、あんまり使う人いないから残ってたの」
それから有希の耳元で声をひそめる。
「王子様とお話できる、いい機会じゃない」
「！！」
セレナを見ると、ばちっとウインクをされた。
「でもルカ、忙しいし、きっと小屋だってみんなで会議に使ったほうが良いって」
「毎日毎日会議してるんでしょう？　なら、今日くらいお休みしてもらったっていいでしょ？　それにもうきっと話すことなんてないわよぉ」

「そんなっ」
頭の中の整頓はまだできていない。
ルカと顔を合わせたとして、どんな顔をしていいのか、どんな態度を取ればいいのか、何を話したらいいのかわからない。
正直、ここ数日顔を合わせていないことにもほっとしていたのだ。それなのに突然降ってわいた機会に戸惑うなという方がひどい。
けれどもそんな有希の気持ちなんて気にもとめないセレナは、にまにまと笑っている。一体なにがそんなに楽しいのだと憎まれ口を叩きたくなる。
「そうですわ、ユーキ様。煮炊きでできる菓子がございます。お教えしますのでご一緒に作りましょう」
にっこりとメイが微笑む。メイのその笑顔すらセレナと同じく企みごとをしているように見える。
「……そんなぁ」
心の準備をさせてよ。そう言いたいのに二人の笑顔には妙な力があって、有希はその言葉を発することができなかった。

小屋には暖炉がついていた。誰がいつ木材を用意したのだろう。暖炉には煌々と炎がゆらめき、その横には有希が両手でかろうじて抱えきれるかというほどの大きさの薪の束が三つ、山積みにされていた。――確実に今晩一晩では使い切れない程の量だ。
暖炉のすぐ近くに置かれているポットの水が、しゅんしゅんと蒸発していく音だけ耳に入る。
小屋には暖炉とシングルサイズのベッドがある。それ以外は何も置けない程、狭い。有希はベッドに大の字に倒れこみ、柔らかな毛布に顔を埋めていた。
――ルカはまだ、現れない。
いつも通りに、どこかの馬車の中で会議とやらをしているらしい。リビドムに行って何をやるのか。そのことを話し合うのにもう何日

費やしているのだろう。
どきどきしながら小屋に入り、どきどきしながら数時間待つ頃には、セレナと同じ事を考えていた。もう話すことなんてないんじゃないか。
メイと一緒に作ったカルメ焼きのようなお菓子も、すっかり冷めてしまった。あたたかい頃合が一番美味しいんですよとメイは言っていたけれど、その頃合はもうとっくに過ぎてしまった。
じゅわ、と水が乾く音が聞こえ、有希はむくりと身体を起こした。外は寒いから、小屋に入って来た時に真っ先に紅茶を淹れてあげたくてお湯を沸かしているのに、もう四度も水を注ぎ足している。
「リビドムに行って、何をする、かぁ……」
ぶかぶかのミトンを手に、ポットをゆっくりと暖炉から取り出す。蓋を開けて水差しから水を注ぎ足すと、再びじゅわ、という音が聞こえ、湯気が有希の顔に掛かる。
「……何も考えてないなぁ」
そもそも、マルキーからリビドムに行き、それからアドルンドに向かったのだってルカに会いにいく為だった。ルカと会えて、そしてヴィヴィからゲームを持ちかけられた有希は何をしたらいいのかわからない。
「リビドムを再び再建するっていったって……どうしたらいいのかわかんないよ」
そもそも、国を再建することに何が必要なのかもわからないのだ。
「国王は必要だよね……でもリビドムの国王は二十年前に居なくなったっきり。……なら、ガリアンさんとかかなぁ」
ポットを再び暖炉に入れる。ぶかぶかのミトンを外すと、無意識に右手の中指に視線が行った。
「……」
考えたく、ないのに。
先ほどからこれの繰り返しばかりだった。あれこれ違う事を考えても、最終的に行き着くのは、シエが持っている指輪の所だった。

「はぁ〜〜」
どきどきと緊張しつづけた身体は、緊張疲れでぐったりとしている。なのに心はざわついたままで、ひどく居心地が悪い。
「何か違う事考えよう！　そう、そう！　リビドムに着いたらの事！　リビドムを取り戻す事！　あたしには何ができるか、そう！それを考えな……」
自分を奮い立たせようと拳を握り締めたのに、その決意は扉が開いた音と小屋に入り込んだひやりとした空気によって全てが瓦解した。有希はぎくりと固まったまま、ぎぎぎ、とさび付いた音が立つような速度で首を回す。そこには窮屈そうに甲冑の留め金を外しながら小屋の中に歩みを進めるルカの姿があった。
あまりにも普通で、あまりにも颯爽とした姿。たなびくサラサラの金髪がなんだか憎らしくてたまらなかった。
人の気も知らないで。
ルカはベッドサイドのトレイに乗っていたカルメ焼きに手を伸ばして、我が物顔で頬張った。
「……冷めてるな」
人の気も知らないで。

118

とりあえず落ち着こう。ざわついた自分の心に言い聞かせる。
ルカはマイペースに鉄串にカルメ焼きを刺して暖炉の火にあて、そうしてまた甲冑を次々に外す。
がしゃ、がしゃ、がちっという音に混じってしゅんしゅんとお湯が沸く音がする。
とりあえず、落ち着こう。
もう一度自分に言い聞かせ、ルカにばれないように小さく深呼吸をした。
「紅茶、飲む？」
「あぁ」
甲冑を取り外す音に混じって、返事が聞こえる。
暖炉の火のそばにあるポットの蓋を開け、ミトンを嵌めて、お湯が沸いている鉄製のポットに手を伸ばす。
ゆっくり動作をし、心臓に落ち着けと言い聞かせる。
ポットにお湯を入れ蓋を置き、持ち上げてくるくると揺らす。
紅茶をカップに淹れている間に、ルカは鉄串からカルメ焼きを引き抜いて皿に乗せていた。
カップと皿をベッドサイドのテーブルに置いて、ベッドに腰掛ける。その隣に、カルメ焼きとカップを片手に持ったルカが座る。
かしゅっ。かしゅっ。と、カルメ焼きをほおばる音が聞こえる。
有希もカップを持ち、湯気がたちこむ紅茶に息を吹きかける。
「なんか……大変だね」
「大変になるのは、これからだ」
ルカを見遣ると、紅茶を一口飲み、そのまま言葉を続ける。
「リビドムに着いてから、やらなければならないことが山ほどある」
ずきんと心臓が痛む。
「……ごめん」

口をついて言葉が出ていた。ルカはその謝罪の意味がわからないという顔で有希を見る。
「だって……ルカが今こんな風に大変なのって、あたしのせいだし」
ルカの顔を見ていられなくて、カップに視線を落とす。けれどもそうすると、自分の右手が視界に入ってしまって、苦い気分になる。
ルカは何も話さない。言葉を発しない。
気まずくて気まずくてたまらない気持ちでいると、大きなため息を吐かれた。
（なによ。なによなによ）
「言いたい事あるなら、言えばいいじゃない」
ぐつぐつと煮えた思いは苛立ちになって有希を襲う。
「――それは俺の台詞だ。一体なにがどうなってそういう事になるんだ」
ベッドサイドテーブルに紅茶を乱暴に置いて、ルカを振り返る。
「だってあたしのせいじゃん！」
「なにがだ」
「なにもかもよ、ぜんぶ！」
ルカは冷静だ。冷静に有希を見つめている。少し疲れの浮かんだ綺麗な青い瞳。最後にその目をまっすぐ見つめたのはいつだろう。
「――少し、落ち着け」
眉間に皺を寄せたルカが、有希の手を引く。激昂が収まらない有希は思い切り振り払い、その手を叩き落とす。遠心力を伴って伸びた手は、ルカがもう片方に所持していたカップをも叩き落した。
カップが割れる音が耳に響く。そのつんざくような音が罪悪感と共に有希の苛立ちを助長させる。
「どうしてあたしのせいだって言わないの！？　なんで何も教えてくれないの！？　どうして何も言ってくれないの？」
こんな風に言いたいんじゃないのに、頭に血が昇って言葉が止まらない。
「――――あたしは、一体ルカにとって何なの！？」

言ってしまった。
聞いてしまった。
一番気になっていて、けれども怖くて怖くて聞けなかった言葉。
指輪もない、病気になったルカを助けることもできない、足ばかり引っ張ってしまっている。
それなのに、側に置いてくれる理由。
けれども、中途半端な扱いの自分。
「ユーキ」
ルカの顔が、怖くて見れない。持て余した手を、もじもじと胸の前で組んだり離したりとせわしなく動かしてしまう。
「……あたしじゃない方が良かった」
「ユーキ」
「ルカは、あたしじゃなくて、あの人と契約すれば良かったん……」
組んでいた手を、ルカの両手に引っ張られる。反動で首がのけぞり、首が正面に戻ってくると、至近距離にルカの顔がある。
「ユーキ」
どぎまぎと後ろに下がろうとすると、有希の両足はルカの足の間に引っ張りこまれていたようで、ルカの足に挟まれる。
「ユーキ」
三度目のそれは少し語尾が強かった。
「お前、ここの所ずっとおかしいぞ」
「おかしくなんかないもん。ルカがいけないんだもん」
「――何を溜め込んでいる。いいから言え。どうしてそういう考えに行き着くんだ」
おずおずと目を合わせると、ルカは盛大にため息を吐いた。けれども、なんだかそのため息は先ほどのように不快ではなかった。
きゅっと手を引っ張られる。有希の小さな手を包むルカの手は大きくて、冷たいのに、どこか暖かい。
「だ、だって、ルカ、あたしと一緒にリビドムに行くから、国を捨てることになっちゃったし！　……十日熱だって治してあげられな

かったし、あ、ルカは知ってたのかもしれないけど！　あたしは嫌だったの！　あたしは、思いが足りない、ルカのことを何も知らない、何の役にも立ててない。それに……」
指輪のこと。
言いたいけれど、言ってしまってもし『シエと契約したかったから』とでも言われてしまったら、有希は再起不能になってしまう。そう思っただけで、涙が出てきてしまいそうになる。
「言ってくれないとわからない。――聞くから話してくれ。それに、何だ？」
金色に縁取られた青い瞳が、上目遣いに有希を見る。その瞳は今までに見たことないくらいにやさしくて、甘えてしまいそうになる。
「……」
「ユーキ」
「あたし、何の役にも立ててないし、どうしてルカの主人なのかもわかんない。――それなら、あの人と契約した方が良かったって」
「あの人？」
「――シエさん。契約の指輪、あの人が持ってるんでしょう？　なら最初っからあの人と契約しておけばよかったじゃない」
「……お前、何怒ってるんだ？」
「別に、怒ってなんかないもん。あたしなんかより、シエさんに指輪持たせたかったんでしょ？」
ふいと横を向くと、呆れたのか、盛大なため息が聞こえた。
「――――いいか、一つずつ弁明する。よく聞け。まず――俺が国を捨てたっていう話だ。お前は俺がお前と契約したから、リビドムに行くと思っているかもしれないが、逆だ」
「……」
「聞いたことがあるかもしれないが、俺はあまり王家で存在を認識されていない。――むしろ歓迎されていない存在だった。そんな俺が、他国に行ける手掛かりをくれたのは、お前だ。だからお前を責めるよりも、感謝している」

その言葉に驚いてしまう。感謝している？
「だって、国にはルカを信頼している人とか、ラッドとか……」
「俺を慕ってくれている奴は連れてきている。ラッドは、仕方のないことだ。言っただろう。とにかく――俺が国を捨てた事に関してお前が気に病む必要はない、わかったな。――それから、十日熱の事だったな。――――お前、俺と初めて会ったのがいつか覚えているか？」
「え？　……花の、季節？」
「ケーレで別れたのはいつか覚えているか？」
「花の季節の終わり……か、葉の季節の初め？」
「わかっているならどうして気付かない」
ルカは目を伏せて、呆れたようにため息を吐いた。
「俺とお前が一緒に行動していたのは実質一月足らずだろう。そんな期間で絆だのが深まるはずないだろう。もしその期間で出来上がるような軽薄なものは絆とは呼ばん。一時の気の迷いのようなものだ。そんなものがあったとして、お前、信じられるか？」
実質一月足らず。その言葉に愕然としてしまった。そんなに短かったのだろうか。中身が濃すぎた所為か、全然気がつかなかった。
一ヶ月足らず。そんな期間で、ナゼットとティータのような。セレナとヴィーゴのような関係になれるだろうか。もしそうなれたとしても、それを信じることができるだろうか。
「しんじ……られない」
答えは、否だ。
「そうだ。そんなもの、信じられない。――――これからだ」
「これから？」
ルカがふ、と微笑んで「そうだ」と言う。
その瞬間、とつてつもなく至近距離に居るという事に気づいた。いや、気づいていたのだがその近さを理解していなかった。
とてつもなく綺麗な顔――しかもいつもしかめっ面のその顔が、今目の前で、有希のために微笑んでいる。

それは計り知れない破壊力を持って、有希を圧倒する。それなのにルカはそんな有希に気づかないで言葉を続ける。
「ナゼットから聞いたと思うが、俺はどうも言葉が足りないらしい。……一生の付き合いになるんだ。それも含めて、お前はゆっくり俺という人間を知ってくれれば良い。俺が死ぬまで、お前を守り続けるつもりだからな」
『男女の契約はプロポーズみたいなモンなのよ』
『何があったとしても守る。たとえオレが死んだとしてもな』
セレナとナゼットの言葉が、呪いのように有希に絡みつく。
「で、でも！　あたしとの契約は意味なく、軽はずみでしたことなんでしょ！？　そ、そそそんな、それなのに一生とか！」
無理、無理だし。と、理由なく首をぶんぶんと振り回してしまう。
「……理由はないわけではない」
「――――――え？」
（理由が、ある？）
「いつか言う。――それまで待って欲しい」
あまりにも想像できていなかったことに。今までの思いを覆されてしまったその言葉に混乱してしまい、有希はただ頷く事しかできなかった。

119

待って欲しい。そう言ったルカはどこか苦々しげで、しばらく言葉を発しなかった。

有希もどうしていいのかわからず、時折暖炉で燃えている木が爆ぜる音がするのを聞いていた。

「……それから、あの人の事か」

発せられた声に、どこか疲労が浮かんでいるのは気のせいだろか。

「あの人が指輪を持っているのは、どうやらアインの部屋から――あぁ、お前の持っていた指輪はアインに渡していたんだ。ユーキに会えたら渡してくれと。アインはリビドムに戻ってからしばらくの記憶が混濁していて休養を取っていたんだ。その間に、アインの所から勝手に持ち出したそうだ。その所為でユーキが死んだとアインは長い間勘違いしていたらしい」

「……勝手に？」

「あの人はどうも、俺の事となると無駄に鼻が利くんだ」

そう言うルカは仏頂面だが、どこかげんなりとしている。

「あの指輪も、あの人が持っていて安定しているなら、そのままでも良いと思ったんだ」

「……安定？」

いまいち話が見えない。

「ルカにとってシエさんって、大切な人なんでしょう？　なのにどうしてそんな風に言うの？　それじゃあまるで」

「誰がいつ、あの人を大切だと言った？」

「え？」

「ナゼットがそんなことを言ったのか？」

「え、ナゼットは、ルカが荒れていた時期を知っているって……」

ルカは渋い顔をして、はぁー、と長い息を吐いた。

「確かにそんな時もあった。だが、あの人は俺の私物を持ち出した

り、侍女を虐げたり、俺に色目を使っただの何だの難癖を付けては他の貴族の娘を糾弾したりとだな……」
語尾が濁る。ルカ自身もシエの対応には手を焼いているということがわかった。
「とにかく、俺が何をしたかは知らんが、あの人の俺への執着は病的なものだ。大切だの云々の前に、遠ざかって貰いたい程だ。以前も婚約という形を取って大人しくさせたが、今回も――指輪一つで大人しくなってくれるならそれでいいと思ったんだ。」
さらりと金髪が揺れる。青い瞳が有希を捕らえて束の間、金色のまつげに縁取られたまぶたが落ちる。
「……は、良いか」
「え？」
「覚悟は良いか？」
「覚悟？」
ルカが目を開け、そしてまた有希を見上げる。
「そうだ。覚悟だ。あの人は指輪が無くなった事――お前の所に戻ったことを知ると、それこそ狂ったように追いかけてくるぞ。それでも、指輪が必要か？」
ユビワガ、ヒツヨウカ。
「当たり前じゃない……」
思わず口からこぼれる。
「……契約の指輪は、契約とは本来関係のないものだ。たとえ指輪がなくても、俺とお前の契約関係は成立している。――それでも、不安か？」
「あたしにはあの指輪しかなかった。ルカとの絆も信じられない、この世界との繋がりもない。あたしを支えてたのは、指輪と、その先に続くルカの存在しかなかったんだから」
ルカなら。ルカなら。
幾度そうやって自身を支えただろう。慰めただろう。
有希の手を包む手には指輪が嵌っている。なのにそれと同じもの

を持っているはずの有希は、それを持てずに居る。――他人がそれを所持しているのだ。
それが許せなくてたまらない。
「あたしが、ルカの主人なんだから。あ・た・し・が。だから指輪を持つ権利もあたしにしかないはず。覚悟も何もない」
ルカのシエに対する気持ちは聞いた。
もしもルカがシエに指輪を渡したいと思うような存在ならと思った。けれどもそれは杞憂だった。
それならば、遠慮する理由なんてどこにもない。
ルカはため息を吐いた。
「お前はあの人の執念深さを知らないから言えるんだ。狂乱してお前を追いかけるぞ。誇張ではなく」
「しつこいよ。ルカが嘘を言わないのなんて知ってる」
綺麗な仏頂面の眉間に皺が寄る。
「もしあたしが、シエさんに追いかけまわされたとしても、騎士のルカが何とかしてくれるでしょう？」
にっこりと笑むと、眉間の皺が濃くなった。
「俺たちの絆はそういうもので図れるものじゃない。……そこまで不安がるとは思わなかったな」
「誰かが持っていた方が良いとか、面倒なことになるとか、そういう理屈じゃないの！」
むっつりと言うと、ルカは盛大にため息を吐き出して、のっそりと立ち上がった。それにつられて、有希は数歩後ずさる。
「る、ルカ？」
ルカは有希をすり抜けると、ベッドと暖炉の間の少しだけ開けた場所に立つ。
「両の手を出せ」
言われるままに手を出すと、ルカが騎士証を懐から取り出して有希の左手に握らせた。
腰に掛かっている剣を鞘から抜き、それを右手に握らせると、そ

の場に傅いた。
（あ……これ……）
この光景を知っている。
どきどきと心臓が鼓動を打つ。
一体この行為が何を示すのかわからないのに、胸が高鳴ってしょうがない。
「ちゃんと肩を叩けよ――――私チェンドル・ルカート・アドルンドは、この命の続く限り、貴方を慕い、守り抜きます。この忠誠の言を糧に、証を頂戴致します」
頭をたれていたルカがちらりと有希を見る。あわてて有希は右手に持っていた剣の平でルカの肩をぽすんと叩いた。
その瞬間、いつか見たときのように騎士証が光りだす。かわらないまばゆさに目を閉じてしまう。閉じても真っ白な光は瞼を通って有希に直接流れ込んでくる。
どのくらい光を受けていただろう。まぶしさで目がしぱしぱしてしまい、何度も瞬きをしている間に、剣も騎士証もルカに取られていた。
取られたその右手には、泣きたくなるほど懐かしい、紫銀の指輪が嵌っていた。
「これでいいだろう。――まだ何か言いたいことはあるか？　今夜くらいは早く寝たいんだ」
剣を鞘に戻しながら、つかつかとベッドに歩み寄るルカの服のすそを、有希はむんずっと掴んでいた。
「――なんだ」
少々呆れ顔のルカは、それでも有希に振り返る。
「これは、シエさんが嵌めてた指輪と同じもの？」
「ああそうだ。契約の指輪が売買に利用できないのはこの為だ。何度でも持ち主の元へ戻るからな」
それを聞いて有希は、右手の中指に手を伸ばし、指輪を外す。
指輪を握り締めてルカを見上げると、ルカは驚いたように有希を

見ている。有希が握った手をルカに差し出すと、物言いたげにそれを受け取る。
「あたしがルカの選んだ主人なのよね。なら、ルカが直接、嵌めて」
右手をルカに差し出す。その手はまっすぐルカに伸びている。
ルカは苦笑とも嘲笑とも――それとも別の意味の笑みなのか。有希には判別しかねる笑顔を浮かべ、もう一度傅いた。
「――なんなりと」
悪戯な声が、小さな小さな小屋に響いた。

120

隊列の中ほどに有希達は居る。少し前にはルカ達が、少し後ろにはセレナ達が居る。そしてその前後には騎馬や歩兵の人々が幾人も居た。

このままでいけば、明日あたりから馬車を捨てて山に入る事になるだろう。

そう言われていた日の午後の昼下がり。

昼食の煮炊きが終わり、馬車の中の荷物を整頓しながら出発の準備をしている時。有希は食後の紅茶をメイに淹れて貰い、片付けをしているメイを尻目に茶を啜っていた。

「……あれ、なんだろう」

遠く、森の奥から、紫がかった霧のような、もやのようなものが昇ってゆく。

「ご、ご報告！　申し上げます！」

遠くから、兵の一人がもの凄い勢いで走ってくる。どんどん近づいてくるその声はとても逼迫している。

「何事ですか。そのようにうろたえて、無礼ですよ」

鋭い声でメイが兵を叱責すると、兵は滑り込むように有希の前にひれ伏す。

「伝令です！　隊最前部にて、狼型の魔物一体と遭遇。ただいまルカート様の指示の許、殲滅作業中ですがまだ他にも居るやもしれません。只今、兵をこちらに向わせておりますが、馬車の中にて隠れているようにと、ルカート様からのご伝言にございます」

メイが悲鳴に似たような声をあげる。

「魔物ですって！？」

「では、これより後方にも伝令に向いますので、御前を失礼致します！」

兵士は慌しく一礼すると、更に後方へと駆け出していた。

「魔物……」
呆然と兵士が走り去るのを見送り、とうとうやってきてしまったそれに打ちのめされてしまう。
「ユーキ様、早く馬車の中に隠れてください！」
ぐいと腕を引っ張られ、紅茶の入ったカップが落ちる。ぱしゃっと音を立てて落ちたそれには目もくれず、メイは有希を馬車の中に押し込めた。
「魔物」
狼型の魔物が一体。兵士はそう言っていた。
魔物が蔓延るようになる。ヴィヴィはそう言っていた。
ほとんど伝説のような生き物だと、聞いていたのに。
「うそ……」
地震が起きた。
魔物が出た。
あと何が起きるとヴィヴィは言っていた？
この世界が確実にはじまりに――終焉に向かっている。
「やだ……」
まだ自分は何も出来ていないのに。
まだ何をすることができるのかもわかってないのに。
窓から、メイの背中が見える。扉を叩くと、メイが振り返る。扉とメイが離れたのを見て扉を押し開ける。メイが驚愕した顔で有希を見る。
「メイも、一緒に隠れてよう」
「そんな……なりません！」
一人でいると、心配でたまらないのだ。
――ルカは？　あの兵士は『ルカート様の指示の許』と言っていた。ルカも魔物と戦っているのだろうか。そう考えると、不安で不安でたまらない。一人になりたくなくてたまらない。
「お願い……一人は、嫌なの。一人だと、嫌なこと考えちゃう」
「ユーキ様……」

馬が嘶く声が聞こえる。それから、大地を蹄が蹴る音。
メイが、弾かれたように振り返る。
「ユーキちゃん！」
「セレナ！　ヴィーゴさんも！」
セレナは馬から飛ぶように降りると馬車まで駆け寄り、扉の前をメイに譲られると有希の顔を両手で包み込む。
「聞いたわ、前の方で魔物が出たんですって？　ユーキちゃんは今私が見えてる通り、無事ね？」
「う、うん。大丈夫、でも……でも」
「大丈夫よ、大丈夫――こんなに真っ青になっちゃって、可哀想に」
セレナの温かな手が有希の前髪をかきあげるように撫でる。セレナはヴィーゴを振り返る。ヴィーゴはセレナと目で合図をすると、手綱を引いて前列へ駆け出してしまった。
「大丈夫よ。――心配しないで」
「だけど、魔物が。ルカが、みんなが……」
「大丈夫だから、ユーキちゃん落ち着いて。すぐに殲滅したっていう報告が来るわよ」
セレナの腕をぎゅっと掴む。
ざわざわと人の声と足音が聞こえて目をやると、十数名の武装した兵士が有希の名前を呼んで駆け寄ってくる。口々に有希の安否を気遣うような言葉を発する。
「ユーキ様、ご無事でいらっしゃりますね」
「ルカは！？」
「ただ今、交戦中でございます……」
跪いた兵士の一人が答える。それ以外の兵士は有希の馬車の周りに立ち、辺りを見回している。
次いで、人の足音と呻き声。それから激を飛ばす声が耳に入る。大丈夫か、しっかりしろ。そんな声に、有希もセレナも声のありかに目をやる。
負傷した兵が幾人か、他の兵士に連れられていた。

「――――っ！！」
とある兵は片腕を失い、とある兵は縛られた太腿から血を流している。
もう少しだ。もう少しだから頑張れ。そんな声が響く。
「ユーキ様、御目に障ります」
セレナの後ろで跪いていた兵士がうろたえるような声を出す。
――有希達の後ろには、他の侍女や医者が居る。きっとそこに向かうのだろう。
「ユーキ様、私も救護の手伝いに参ります。ビューテント様、ユーキ様をお願いしてもよろしいでしょうか？」
「ええ、わかったわ」
「では、ユーキ様、馬車から出るような事はなさらないでくださいませね」
メイがそう言って一礼すると、負傷した兵のもとへ駆ける。そして兵の肩を持って隊列の後ろの方へ向かっていった。
「……魔物って、そんなに強いものなの……？」
「正直、私も魔物なんて見たことがないから、わからないの……でも、魔物が出たのもこれが初めてじゃないらしいし、」
「嘘！」
「本当よ。その時はすぐに殲滅できたから、ユーキちゃんにいらない心配を掛けさせないようにっていう配慮があってでしょうね。――今までだって大丈夫だったんだから、今回も大丈夫よ」
宥めるように笑みかけられても、有希の心のざわつきはちっとも収まらない。
今までも魔物が出ていた？
すぐに殲滅できていた？
「じゃぁ今回は、どうして……」
続きの言葉が出てこない。セレナも苦い顔をしている。
わかっている。今回は違うのだと。
ヴィーゴが向かった。ということは、有希が今見た人間以外にも

負傷した人が居るだろう。
セレナの腕を掴んでいた手に力がこもる。
自分は今、何をすることもできない。
そんな無力な自分が歯がゆくて仕方がない。
なにもしてやれなくて、こうやって守ってもらうしかできない自分が嫌で嫌で仕方がない。
泣きたいほど悔しい気持ちでいると、また負傷した兵が運ばれていく姿が目に入る。
「――――っ」
有希はセレナの腕を離すと、馬車の椅子の部分を持ち上げる。
「ユーキちゃん？」
そこは荷物が置けるようになっていて、有希の唯一の荷物――弓の入った袋と矢筒がぽつんと入っている。
有希はそれを取り出して、肩に掛けた。
「……ユーキちゃん、まさかとは思うけど、嫌よ、私。だって私……」
扉の前で苦い顔をしたセレナに、有希は挑むように言った。
「セレナ、あたしも魔物の所に連れてって」
「……私、数え切れないくらいの人達から顰蹙を買うわ」
「お願い！　あたし、何も出来ないのが嫌なの！　こうやって守られてるだけなんて耐えられない！」
うろたえて「でも、だって……」と言い続けたセレナは、うろうろと視線を巡らせて、それから目を閉じた。
「わかってる、無理言ってるのわかってるけど、ねぇセレナ、お願い！　あたしは、ちゃんと見ないといけないの。だってあたしが何も出来ていないからこんな事になっちゃってるんだもの。あたしはちゃんと、それを見なきゃいけないの！」
「私、ヴィーゴにユーキちゃんを見てるようにって言われたもの……主人の命令なの」
「お願い！」

セレナの肩を掴んで前後にゆする。けれどもセレナの身体はびくりとも動かない。
「……でも」
セレナが目を開く。口元は笑った形をしている。
「どこで見ているかだなんて言われてないわ」
「セレナ！」
「正直、私もまだ魔物を見たことなくて――うずうずしてるのよね。怒られたって知るもんですか。私はユーキちゃんの味方だから、ユーキちゃんのしたいようにした方がいいと思うの」
有希は目に喜色を浮かばせて、セレナに抱きつく。セレナの首から手を離した有希とにんまりと笑い合うと、二人は兵士の止める言葉も聴かず乗馬して、隊の前方に向かって駆け出した。

121

夜が更けていく時の、あの言いようのない不安感。
空の半分が橙色で、半分が藍色。その合間の深い紫色。
――この世界が傾いていく不安を、そのまま切り取って形にしたような姿。
魔物に対しての印象はそれだった。
人のちょうど倍くらいの高さ――四メートル弱の狼は、圧倒的な存在感で皆を圧巻していた。
狼の周りを取り囲むように人垣が成され、その人垣の後方で、セレナの馬は停止した。
「ヴィーゴ！」
負傷して後方に退いた兵の手当てをしていたヴィーゴは顔を上げ、そして有希の存在に気付くと思いっきりセレナを睨み付けた。
「お前……」
「いいの、あたしが来たいって言って無理にお願いしたの！」
そう言ってセレナの馬から降りる。
「セレナ、魔物と戦いたいんでしょう？　――気をつけて」
見上げて言うと、セレナは嬉しそうに微笑んだ。
「ありがとう、ユーキちゃん。大好きよ！」
そう言うとセレナは馬を人垣の近くまで馬で走ると、そこから降りて人垣の中に埋もれていった。
「……どういうつもりなんだ」
手当ての手を休めず、ヴィーゴは言及した。
「ごめんなさい。でも、あたしだけ守られてるなんて嫌だったの」
手当てをされている兵の顔が痛みに歪んでいる。腕に添え木が当てられているので、骨折しているのだろう。
痛々しい。
兵士の前に屈み込み、添え木と共に包帯で巻かれた腕におずおず

と手を伸ばす。
（早く……治りますように）
そう祈って目を開いても、自分の身体に何も変化は起こらないし、兵士が浮かべる苦悶の表情も、ちっとも緩和されない。
「……嬢ちゃん」
「あたし、もう何もできないけど、それでも来たかったの」
ヴィーゴは驚いたように有希を見て、そして、ため息を吐いた。
「そういう問題じゃないんだが――もっと自分の置かれている立場っていうものをな……」
「ごめんなさい。絶対近くには行かないから」
「当たり前だ」
また呻き声が近くに聞こえる。別の負傷者がヴィーゴの所に連れてこられたのだ。
「絶対、近くには行かないから……」
そう言って立ち上がる。
狼は道を阻むように暴れている。それを囲むように、前後に人がわらわらと群がっている。
有希は人垣の周りにある木――登りやすそうな木を物色する。
その中からひとつ、比較的近くにあった木を選び、有希はよじ登り始める。
「ユーキ！！」
ヴィーゴの怒声が聞こえる。
「大丈夫！　絶対近くには行かないから！」
「おい！　誰か彼女を木から引きずり降ろせ！」
「嫌！　あたしのことは気にしないで！　あれを倒すのに専念して！」
ヴィーゴの声に振り返った兵士は、有希の言葉に戸惑い、結局狼に向き直った。
あちらこちらから人の声が聞こえる。叫ぶ声、怒る声、悲鳴、激を飛ばす声。

木をよじ登り、狼の頭と同じくらいの高さに並ぶ。いそいそと弓と矢を取り出し、距離を測る。
（ここからだと五十……ううん、五十もないかも）
狼はなぎ払うように、手前の兵士を前脚で吹き飛ばす。
聞こえる悲鳴。その痛ましい声に眉根を寄せる。
「……セレナ」
薄紫色の髪が揺れている。セレナは払われた前脚の間をすり抜けて思い切り跳び、狼の腹部に剣を突き刺して狼の後方に回る。
咆哮が響く。その腹部にはセレナの剣が刺さったままだ。
痛さに我を失った狼は更に暴れる。あちこち構わずに前脚を振り上げ、巨大な尻尾でなぎ払う。
「離れろ！！」
そう叫ぶ声が耳に届く。それと同時に人垣の輪がざざっと広がる。
「――――ルカ」
人垣が広がったために、最前に来ていた。その隣には、大きな槍を持ったナゼットが立っている。
狼ががむしゃらに前脚を振る。それがルカに向かう。
――背筋を撫でられたように、全身がぶるっと震えた。
恐い。
幸い、ルカはそれをうまくかわしたのだが、有希の心臓は不安で高鳴る。
こわかった。皆が傷ついていくのが。これからまた人が傷つくのかと思うと恐くて怖くてたまらなかった。
「――させない」
右手に力がこもる。
自身を落ち着かせるように目を閉じ、ゆっくりと息を吸って、これ以上ないというくらいにゆっくり吐き出す。
自分の足は、この木に根付いて離れない。この腕は、この指は、確実にあの魔物に射るために動く。だから、誰ももう傷つけない。
「大丈夫、あたしは絶対……」

そう言って、ゆっくりと構える。もう一度目を閉じて、弓がどんどんしなってゆくのを感じる。
「――できる」
目を開き、狼の頭部を見据える。狼は痛みに悶絶しているのだろう、激しさを増している。
動き続ける狼に、それでも照準を合わせる。
「……こっちを見て」
遠くに居るのに、目が血走っているのがわかる。聴覚も鋭敏になっているはずなのに、何も聞こえない。
「見て」
もう一度つぶやく。
その声が届いたのか届いていないのか。狼が有希を捕らえた。同時に、狼が顔を上げた事を不審がったルカが有希を見つけた。同時に、有希は全感覚を研ぎ澄まして矢を放った。
ルカが声を上げたのと同時に、狼がもう一度咆哮を上げた。有希の放った矢が、狼の左目に突き刺さっていた。
「よくやった！」
ナゼットが吼え、槍で払う。それは狼の前脚の関節に直撃し、狼が前傾に崩れる。ルカは有希から視線をとっくに狼に戻していて、崩れてきた狼の顎に、剣を突き上げた。それと同時にセレナが狼の頭の横から、剣を首に突き刺す。
一瞬、時が止まったかのようにしんと静まる。
その直後、右目をかっと見開いた狼は、そのままぐらりと傾いて倒れた。口から赤い泡を吹き出して、数度足を泳がせてしばらく、完全に動きが停止した。
一拍置いて、皆がわぁっと声を上げた。
有希も木の枝にへたり込み、幹に身体を預けてほぅっと息を吐いた。
皆の安心した声が、歓喜する声が、耳に心地良い。
「……よかったぁ」

もう一度はぁ、と息を吐いて目を閉じる。
先ほどの一瞬の出来事が、有希の気力や体力をごっそりと奪っていた。
よほど緊張していたのだろう。こめかみをつうっと汗が流れた。
それを冷たい空気が冷やしてくれる。
（もう、誰も傷つかない）
「えへへ」
嬉しくて笑む。ほっとしてしまったら力が抜けてしまって、なかなか木から降りる気力がわかない。
それよりも、こうやって上から皆の喜ぶ声を聞くのが、顔を見るのがたまらなく幸せだった。
目を開けて、周りを見る。兵士たちは互いに喜び合い、慈しみ合っている。
「……あれ？」
ルカの姿が見えない。
狼の近く、兵たちがわらわらと集まっている中心にも居ない。
きょろきょろと見ていると、足元から声が聞こえた。
「ユーキ」
眼下を覗くと、ルカが有希を見上げていた。その姿は狼の返り血で、あちらこちら赤く染まっている。
「降りて来い」
反論は認めない。というような声だった。
「わ、わかった」
あわてて有希は幹伝いにゆっくりと降りる。登ったときはあんなにも早く登れたのに、降りるのはとても時間が掛かったような気がする。
有希が最後の枝からぴょんと飛んで降りる頃には、有希を囲って兵達が立っていた。
「わぁ！」
驚いて思わず一歩下がると、後頭部を幹にごちんとぶつけた。星

が見えそうだったが星は見えず、代わりに痛みで涙がにじんだ。
「〜〜〜〜っ」
声にならない声を上げて蹲る。こんな姿を皆に見られているのかと思うと恥ずかしくて顔が上げられない。
「――ユーキ」
すぐ側で声が聞こえる。涙目になりながら顔を上げると、厳しい顔を浮かべたルカが、片膝ついて有希と目線を合わせていた。
「どうしてこんな所に居るか、兵達は一体何をやっていたのか、聞きたいことは多数あるが――」
怒られる。と身をすくめると、ルカは微笑んだ。――有希の見間違いではなく、本当に微笑んでいるのだ。
「よくやってくれた。お前のお陰で被害が少なくて済んだ」
大雑把に血を拭ったのだろう。顔のあちこちに赤い跡が付いている。
有希を囲んでいた兵士達の顔を見やると、皆次々に跪き、頭を垂れた。
「皆もお前に礼を言いたいそうだ。代表して俺から言わせてもらう――――ありがとう」
「へっ！？」
ありがとう。その言葉に思わず素っ頓狂な声が出た。
「……何だ。何が言いたい」
有希が穴が空いてしまいそうなほどに見つめたからだろうか。ルカはまた仏頂面に変わり、更に有希の額を軽く小突いた。
「いや、ルカにありがとうって言われるのが、なんか慣れなくて」
仏頂面の眉間にきっちり三本、皺が寄った。
「――なら、二度と言わないことにしよう」
「え、嫌だなんて言ってないから！　こう、なんていうか……くすぐったい感じがするだけだから！　気にしないで！」
ルカの眉間に更に二本、皺が加わった。

122

隊列は停滞していた。
先に出た、濃い夕闇色の魔物。その魔物が残した傷は大きく、深いものだった。
怪我人は重症軽症合わせて二十人以上。その手当てが必要なこと、この先に先遣隊を遣わせるとの事で、山の麓にごく近い場所ではあったが、そこで一泊することになったのだ。
先の有希が隠れるよう言われていた馬車があったところよりももっと先――ルカ達の居たところで、有希は休むように言われている。あの馬車のあった場所は簡易だが、病院のような有体になっている。ヴィーゴ達医者とメイドがそこで治療をしているそうだ。
有希はルカに負けないほどの皺を眉間にたたえ、ほぼ仁王立ちという格好でルカに相対していた。
「もっと前にも魔物が出てたってどういうこと？　どうして教えてくれなかったの」
ルカは有希と同じような顔つきで、木の幹に腰掛けている。そのため、視線が有希と並ぶ。
「言ったところで、どうすることもできないだろう。――どうせ焦ったうえに自分を責めるだろうと思ったしな」
ルカの言った言葉はまったくその通りで、有希は一瞬ひるむ。
「だけど、あたしは知りたかった。教えて欲しかった」
ルカの横に立っていたアインが有希とルカを交互に見て、困ったように眉尻を下げた。
「ゆ、ユーキ。でもルカ様はユーキが知ると心を痛めると思ったから言わなかった訳で……」
「あたしは、知ることが義務だと思うの」
「義務？」
「そう。――だって、今のこの状況がどうして起きているのか、知

っている人はあたしとルカ、それからヴィヴィくらいしか居ないじゃない。それから、対応策を考えているのも、あたし達だけ。なのに、何も知らない人が傷ついていくのをあたしが知らないのはおかしいよ。……みんなが傷ついたのは、あたしの責任だよ。あたしが何も出来ていない、責任。それなのに、それを知らずにのうのうと後ろにさがって隠れるのはおかしい。みんなに守られるような人間でもないのに、みんなが戦っている後ろでみんなに盾になってもらうのなんて、嫌」

ルカは青い瞳でしばらくじっと有希を見つめると、何かを諦めるようにため息を吐いた。

「お前の言い分はもっともだが、俺にも責任があることを忘れるなよ。――一人で抱え込もうとするな」

「え」

一瞬、ルカの顔が苦々しく曇った気がした。けれどもう、いつもの仏頂面に戻っていた。

「……お前と離れている意味もなくなったな。護衛を付ける余裕もないから、明日から俺の馬に乗れ。そうすれば俺の所に来る情報はお前の耳にも入るだろう」

「ルカ！」

「だが、お前も反省しろ。――急に魔物が振り仰いだ先に、隠れていると思っていたお前が出てきて見ろ。肝が冷えるだろ」

「……ごめん」

ルカがもう一度、大きくため息を吐いた。

「お前は自分の身分をもっと重んじろ」

「は？」

「いい。――じきに判るだろ。俺も確信はないしな」

そう言うと、もう言うことはないというように立ち上がる。

「今まで出た回数は二度。小柄な猿の形をした魔物が二体。狗の形をした魔物が三体。――いずれも、濃紫の霧が出た後に現れたという。もし紫の霧を見掛けたら、一目散に逃げ出して、誰かに伝えろ。

わかったな」
「――わかった」
「……成長したな」
「え？」
「あっ、ルカ様！」
すたすたと歩いていくルカの後ろを、アインが追いかける。
有希は自分の身体を見下ろす。もう八年以上、ずっと変わらない姿のままだった。両手を前に突き出してひらいてみても、爪も伸びていない。
小さな手。薪一本持つのに精一杯のてのひら。
（けど、この手でだってできること、あるよね）
ぎゅっと手を握りこむと、紺と黒。それから藍色の雲の浮かぶ空を見上げた。

狼型の魔物が出てから二週間。白い息が出てくる時間が少しずつ増えてくるのと同時に、魔物が出てくる回数も、少しずつ、ゆるやかに増えていった。
あれから魔物に遭遇したのは五度。猪と豚を足したような形をした大きな魔物が一度出た以外は、小型の狗や猿の魔物が数体出てきただけだった。
そして怪我人も、一度の襲撃で数人。猪の時に十余名出た。その度に足取りはじりじりと遅くなり、予定ならもうリビドムに着いているはずなのに、未だに城は見る影も無い。アドルンドを出た時には弾んでいた会話も今はもう無く、ただひたすらに足を進めるばかりだ。
焦ってはいけないとわかっているけれども、有希をはじめ、皆がぴりぴりとしていた。
予定よりも遅れている。まさか魔物が出没する――しかもこんな

に大量の――とは思っていなかった。だからこそ、移動速度を最優先に考えて皆の負担を減らそうと荷を出来る限り少なくしていたのが仇となっている。食糧が、尽きそうなのだ。
秋――枯葉の季節であれば、少しは良かったろうが、今は木の季節。冬だ。葉はすべて落ち、枝々の隙間からほの暖かな陽光を与えるばかりだ。
馬が苦しそうに喘いでいる。アドルンドを出る直前に替えはしたが、寒さの厳しい長旅に参っているのだろう。
宥めるように馬の首を撫で、身体に巻きつけた毛布を整える。
――今日、リビドムの町に寄れる予定だった。
有希は数時間前の出来事を思い出す。
食糧に余剰が有るかどうかもわからなかったが、少しでも怪我人が休める所が欲しかった。
けれどもその町には人も、家畜も、なにも無かった。襲われた形跡もない、ただの――廃墟だった。
皆町に寄れる事。自分たち以外にやっと別の人間に出会えることを少なからず頼りにしていたのだろう。落胆の色は濃い。
（食糧もない。怪我をしていないっていう人も殆ど居ない）
リビドムに行く。それがこんなにも大変な事だと誰が思ったろう。アドルンドから誰か差し向けられるのではとびくびくしていたのに。まさか魔物が出てくるだなんて、誰が考えたろう。
（それでも、あたしたちはリビドムに行かなきゃいけない）
行って、リビドムを建て直す手伝いをしなければならない。そうすることを、選んだのだから。
再び、吐く息が白んできた。空はもう紺色に染まりはじめ、月がうっすら存在を主張している。けれども、歩みを止める事は無かった。――ヴィーゴが連絡を取ったので、リビドムの人間がこちらに向かってきているというのだ。今日明日中には合流できるだろうとの事だった。
明日――本音を言えば本日中に出会いたい。

寒さも次第に厳しくなり、防寒対策も十分だとは言い難い。有希たちは文字通り、ぼろぼろだった。
「……見えないね」
「あぁ」
見過ごさないように、ちらりちらりと左右を見渡すが、明かりはもちろん、人影すら見えない。
「もうそろそろ、野営の準備に入らなきゃね」
「この先に、少し開けた場所があるらしい。前を行っている連中が見つけたらそこで立ち止まるだろう。――そこに居てくれたらいいが」
「うん、そうだね」
有希のその声は、人の叫び声でかき消える。
馬が嘶き、止まる。
「居たのは違うものだったらしいな」
ルカが忌々しげな声を出す。
「先に行くわ！」
「ルカ、お前は嬢ちゃんを守る事に徹しろ！」
馬の蹴爪の音が聞こえ、両脇をセレナとナゼットの馬がすり抜けていく。
「ユーキ、降りろ」
ふるふると首を振ると、冷たい声が降ってくる。
「――わかるだろう。人が居ないんだ。お前を護りきれるかわからない。降りろ」
「いやよ。わからない。――――遠くから見ているから。絶対近くには行かないから、連れてって」
待つこと、数秒。ため息が聞こえた後に、舌を噛むなよという、ルカの声。
馬で駆けること数十秒。周囲に馬がちらほら乗り捨てられている姿が見え、それから、狗の姿の魔物が三体。
「手綱を持っていろ。馬から降りるなよ」

道からそれて木々の合間に入ると、有希が手綱を取るのを確認したルカは、馬からひらりと降りて、魔物に向かって駆け出す。
武器を携えた兵たちの足音が聞こえる。ルカを追いかけるように走る兵たちの顔には、隠しようもない程に疲れがにじんでいる。
「……っ」
狗――大型犬ほどの大きさのそれに、セレナが振りかぶった刃がぶつかる。そのまま首はあらぬ方向に飛びそうになったが、かろうじて繋がっていた皮が、首を留める。
一体目が倒れた。それと同じくして、ナゼットが横ばいになっていた狗に剣を突き立てる。――これで二体目。
二体より二回りほど大きな狗に、ルカが剣を振るう。――契約騎士は治癒能力が高いからと、率先して殲滅を行っているのだ。
肩から掛けた袋の紐をきゅっと握り、魔物を睨み付ける。
――結局のところ、有希は何も出来ない。
こうやって遠くから、皆が戦い、傷ついていくことを見ている事しかできない。たとえ何ができなくても、見届けると言ったのは自分だが、やはり何もできないのは、歯がゆい。
程なくして、三体の狗は皆殲滅された。ルカとナゼットが声をあげて、怪我人の確認をしている。狗の近くには、襲われたのだろう、馬が二頭、絶命している。
有希は手綱を取って、ルカのもとへと馬を進める。それに気付いたルカは自身の返り血を検分し、大雑把に拭い取ると馬に乗り、ナゼットに声をかける。
「前方の確認をしてくる。お前はここを頼む」
ナゼットが返事をしたのを見て、ルカは馬を走らせる。
狗が出たのは道の途中だった。開けた場所というのがあとどれくらい先にあるのかという確認だとわかった。
いくらも行かないうちに、両脇に開けた場所を見つけた。人が来るたびにそこで火を付けたのだろう。地面が黒ずんだところには、こげた薪がちらほらと置いてある。

「……ここなら、すぐだな」
「だね」
開けた場所から少し先まで行き、安全かどうか確認する。
「大丈夫そうだね」
有希は自分自身を安心させるように呟く。ルカもそう思ってくれたのだろうか。馬首を翻す。
そうして見えたものに、眩暈を起こしてしまいそうだった。
「……うそ」
空気がいっそう冷えた気がした。それとも、有希の血の気が引いたせいで寒いと感じたのだろうか。
月は金色に輝いている。辺りは闇に染まっているのに、どうしてだろう。
今来た道。開けた野営地――そこだけ切り取ったように紫色に変色していた。
霧が晴れると共に、先ほどまでは何も居なかったその場所に、猪とも豚とも言えない魔物が現れた。

123

魔物には、鋭い角が一本。サイのように鼻面に生えている。フゴフゴと鼻音を立て、辺りを見回すように動き回っている。

（なんで……どうして）

今さっきまで何も居なかったのに。どうしてそんな所にいるのよ。そう叫んでしまいたくなる。

ルカは手綱をぐいと引き、木々の中に馬を引き入れる。

「……ユーキ。よく聞け」

頭上から聞こえる声はとても緊迫していて、その事態の深刻さに気付いた有希の心臓が跳ね上がる。

――有希とルカは、孤立してしまっているのだ。

「聞け」

左肩をぐっと掴まれる。その力強さに弾かれるように、ルカを見上げる。

「俺が引き付ける。お前は気付かれないように木々の合間を縫ってあちら側に回って、応援を呼んで来い。――できるな？」

有希はルカの言葉を何度も反芻し、ぶんぶんと頷いた。

「――あれは突進してくる。もしお前の方を振り返ったのなら、一目散に抜けろ。絶対に追いつかれるなよ」

そう言うと、有希に返事をさせる暇も無く手綱を握らせ、ルカが馬から降りた。

馬の首をひと撫でして、有希と視線を交わす。青い双眸が、夜闇にきらりと光った。月の光を受けた金髪が、さらりと輝く。

ルカは踵を返すと道に出て、そこから野営地に足を踏み入れる。足音を聞きつけた魔物が、ルカに気付いた。

（……行かなきゃ）

有希はルカと反対方向に馬首を向ける。片手を背中に伸ばし、袋から弓を取り出して左手に握り、更に矢筒の蓋をはずし、一本矢を

取り出す。
馬も判っているのだろうか。極力足音を立てないように、のっそりと歩いている。
伺うように野営地を見ると、ルカを狙うように魔物が頭を低く落としていくのが見えた。
（――あれは）
有希はあの魔物の姿勢を数度見た。突進する動きだ。あれの突進を受けて、二人の兵が命を落としたことを、有希は知っている。
その兵の顔は知っていた。初めて有希が魔物と遭遇した時に、有希を護りに来てくれた兵だった。
もう一段、頭が低くなる。鼻面から伸びている角で、狙いを定めているのだろうか。
――あの角が、ルカを貫いてしまう。
「そんなこと、させない！」
手から手綱が離れる。身体に染み付いた動作で、弓を構える。目は魔物を捕らえている。
クラウチングスタートのように、魔物が頭を大きく下げて走り出す。向かう先は――有希の騎士。
弦から矢が離れる音が聞こえ、次いで矢が魔物の後ろ足に突き刺さる。魔物は地響きがしそうな呻き声と共に滑って転んだ。
いくらかその脚が空を掻いて再び立ち上がる。そして方向転換をし、魔物が有希を捉えた。
「ッなにをしている！　逃げろ！」
ルカの声が響く。手綱を取ろうと目を遣って、はっとした。
手綱から手を離してしまったせいで、手綱が有希では届かない程手前に垂れてしまっている。
毟るように鬣を掴んで引っ張ったが、馬の歩みは速くならない。
野営地を見る。――鼻面に角を設けた魔物の頭が、低くなっている。有希の方へ向かって。
「うそ」

思い切り、馬の首を叩く。
「お願い！　急いで！」
それでも馬は動かない。見つかるまいとゆっくり歩くばかりだ。
「もう見つかっちゃったの！　お願いだから走って！」
歯の根ががちがちと音を立てる。魔物を見遣る。また一段と頭が低くなっているではないか。
「ユーキ！」
「走って！！」
声が裏返る。
――地を大きくて重いものが移動する音が、地響きになって有希に届く。
絶望的な気持ちで視線を動かすと、紫色の魔物が有希に向かって走ってきている。それもご丁寧に、有希が少しずつ進んでいるのを判っているように、ゆるやかに弧を描いて。
「――――っ！！」
あぁ、もうだめなんだ。
紫色の体から伸びる象牙色の角を見て、有希は悟る。
たとえあの角が先ず有希が乗っている馬を捕らえたとして、そこから転げ落ちる有希はどうなるだろう。
あの角で貫かれるだろうか。
像のように大きな脚に踏まれるだろうか。
――いずれにしても、有希に命があるかどうか、甚だ疑問だ。
それならばせめて、自分に何が起きるのか見届けたい。
しっかり目を見開いて、これからの出来事を見ること。有希にできるのはそれくらいしかない気がした。
誰か自分を呼ぶ声が聞こえた。ルカだろうか。
ルカには悪いことをしてしまうなぁ。と、頭は麻酔がかったようなことを考えてしまう。
二人目の主人まで亡くしてしまうのを、心底申し訳ない。そういえば、前の主人の事を聞きたいと思っていたのに、もう聞く機会す

らない。そんなことになると知っていたら、あの時ちゃんと聞いていたのに。
自分が死ぬと、この指輪はなくなってしまうのかと思うと、無意識に右手を胸元に遣っていた。
あぁ、もう数メートルもない。
魔物の息遣いすら聞こえそうだった。それほど、有希の感じるものは鋭敏で、恐ろしくスローモーションだった。
そしてその止まったような時間は、ひとつ瞬きをした瞬間に終わった。

激しい音が聞こえた。
硬いものと硬いものがぶつかる音。
がぃん。有希の耳にはそう響いた。耳に響いた音は脳髄を直撃し、くらりと眩暈がした――眩暈はしたが、身体の異常はそれ以外なかった。
うわんうわんと余韻を残した音とは別に、けものの叫び声が聞こえる。
――離れた所に魔物が倒れていた。鼻面から伸びていた角は根元近くで折れ、角の失せた鼻からは暗い色の血が流れていた。
視界の手前側で、深い緑色がゆれた。
すこし癖のある長い髪には見覚えがあった。
「リフェ……」
恐怖に硬直していた喉は動き方を忘れたらしく、かすれたような音しか出なかった。それでもリフェノーティスは有希のかすかな言葉に反応して振り返る。
相変わらず、虫も殺さないような綺麗な顔をしている。その顔とは似つかない筋肉が浮かぶ腕には、有希のふとももよりも太い鉄の棒を持っていた、バットのように取っ手は細くなっているが、バッ

トと違いそれは表面がでこぼこしている。
「間に合ってよかったわ」
そう言うと、リフェノーティスはバット――棍棒を掴み上げると、倒れて足掻いている魔物の元へ行って魔物の首へ振り上げ、振り下ろした。
ひしゃげる音が聞こえ、魔物は肉塊に変わった。
ふぅと一息吐いて振り返ったリフェノーティスは、振り向いてにっこりと微笑んだ。
「久し振りね、ユーキ」
「――――っリフェぇえ……」
魔物の奥からルカが駆けて来る。その姿に、顔がくしゃりと歪む。
「彼がユーキの騎士ね」
リフェノーティスがルカのことを確認するように振り返り、有希の手に握られている弓を見て苦笑いを浮かべた。
「……だめじゃないユーキ。彼が囮になってくれていたんでしょう？　私が気付かなかったらどうするつもりだったの」
「あ、だ、だけど……」
「ユーキ！！　何をやっているんだ、お前は！！　俺は応援を呼んで来いと言ったはずだ。いつ、誰が俺を助けろと言った！」
ぎくりと身体がすくむ。ルカの青い双眸が月光を受け、冷ややかな光を放っている。
「お前が自ら危険な目に遭いに行ってどうする」
「ご……ごめんなさい……」
「謝るくらいなら最初からそんな行動は取るな。……俺にもう二度と、主人を失くさせようとしてくれるな」
そう言うと、リフェノーティスに向かって目礼をする。
「――――彼女を助けて頂いたこと、感謝します」
「あら。当然の事をしたまでですのでどうかお気になさらないでください。こちらこそ、遅れてしまって申し訳ないわ。――日が暮れる前には合流できるかと思ったんだけど」

「では、貴方が」
リフェノーティスはやわらかに微笑み、棍棒を杖のように地面に突く。ずんと小さく地面が揺れる音が聞こえた。一瞬、それを見たルカが驚いたようにちらりと見る。
「えぇ、リビドムから迎えに来たの。――生憎人員が割けなかったから、こちらは二人よ」
「ふたり？」
「そうよ。エストと二人――もっとも、ユーキを見掛けてから一目散に走ってきちゃったから、エストは荷車の前で立ち往生していると思うんだけど。エストには運べないからしょうがないわよね。――ということで、また魔物に出られても困るから荷車のところまで戻るの、付き合ってもらってもいいかしら？」
ルカはそれに頷き、有希の乗っていた馬の手綱と有希の手にある弓を有希から奪い取ると、リフェノーティスの後を歩き出す。
「……知り合いか？」
有希の方を向かないルカの視線は、リフェノーティスに注がれている。
「あ、うん。ヴィヴィに会った後、ブイブイに刺されたんだけど、その時に助けてもらって。あたしがアドルンドに行くって言ったら、セレナとヴィーゴさんを紹介してくれたの」
「そうか」
いくらも歩かないところに、荷車――馬車の荷台のような大きさのそれと、荷車にもたれかかっているエストを見つけた。

124

リフェノーティスと再会した翌日の夕方には、リビドム城に着くことができた。

久方ぶりに会ったというのにリフェノーティスとの会話はほとんど無かった。いろいろ聞きたい事があるから、と時間を見つけてリフェノーティスに話をかけようとしたが、リフェノーティスは「移動で疲れてるだろうから、諸々の話は王宮に着いてからにしましょ。……私も、話さなくてはならないことが沢山あるから」と、荷の代わりに怪我人を乗せた荷車を引きながら言った。お陰で何も聞くことはできなかった。

王宮――王の棲む場所であるのだけれども、それは城の敷地の中にある。そしてリビドム城は、アドルンド城よりもフォル城よりも小さかった。それは、他の二国に比べてリビドムが小さいということを象徴しているのだろうか。とにかく、王宮は思っていたよりも小さかった。広大な敷地にぽつんぽつんと建物がそびえている。一番奥にある一番大きな建物が王宮のようだったが、遠目から見てもやはり少し小ぢんまりとしていた。

すこし古ぼけたその城や王宮は、それでも有希たちにとっては希望そのものに見えた。それほどに、疲弊していた。

「リビドムに残っていた奴らはこの北側――王城の北には崖があんだけど、その崖の下にある王都に集まってる。その方が安全だしな。ユーキとセレナさん達が出てってしばらくしてからここに来て、片付けやら掃除やらしてたんだよ。――リビドム城って長いこと使われてなかったみてぇでさ、まじ廃墟だったんだぜ、廃墟。……まだ崩れた外壁とか片付けられてねぇけど、一応人は住めるくらいにはなってんぞ。みんなが手伝ってくれたんだ、感謝しろよ」

リビドム城に入る前の道中、エストがそんなことを言っていた。そんなエストにリフェノーティスが「あら、王城を綺麗にするのは

国民の義務よ」と当たり前のように言っていた。それから
「リフェは掃除なんて微塵もしてなかったじゃねぇかよ！」
「あら、私は力仕事専門なの」
「国民の義務なんじゃねぇのか」
「人には向き不向きがあるのよ。いい勉強になった？」
というやりとりがあった。
二人の明るさは疲弊しきった有希たちにはあたたかかった。ところどころから忍び笑いが聞こえたりしたことに、有希は安堵したものだった。
城の入り口――城門に到達すると、わらわらと人が出てきて、人々は次々に暖かい言葉を掛けてくれた。
「さぁ、荷物はその辺りに置きっぱなしにしていいわ！　私たちが運ぶから！　みなさんのお部屋に順番に通すわ。――兵士達はこの国の騎士舎に、だけれど。アドルンドより過ごし辛くても文句は聞かないわよー」
リフェノーティスが大きな声をあげて指示を出す。リビドムの人々は兵から荷物を受け取ると、順々に連れ出そうとする。兵達はどうするべきか戸惑うようにルカを見たが、ルカがこちら様の好意に甘えようと言うと、こわばった顔をほぐれさせ、それぞれ寄宿舎に向かって歩き出した。
度重なる魔物との戦闘――しかも率先して戦いに紛糾していたセレナがやってきて、とても元気そうにリフェノーティスに声をかける。
「リフェノーティス、ユーキちゃん達のお部屋はあそこでいいの？」
「いえ、賓客のお部屋を用意してあるわ。あなたとヴィーゴは昔の部屋を片付けてあるから」
「あら、気の利くこと。――ユーキちゃん、美青年王子サマ。王宮へは私が案内するから着いてきて。――ヴィーゴ！　私の荷物運んでおいてね！」
セレナが手を上げて大きな声で言うと、遠くに居たヴィーゴは手

を上げて了解の意思を伝える。
「お疲れでしょうから、ゆっくり休んでください。話すべき事は沢山ありますが、せめて今日だけでも休息を取って下さいね」
「失礼ですが、俺の部屋はどこに――」
リフェノーティスはにっこりと微笑んだ。
「えぇ、もちろん。ユーキと同じ部屋ですよ。寝室の二つあるお部屋ですので安心してください。お部屋に着きましたらばお茶でも淹れさせます」
「――ルカ、どうしてそんなこと聞いたりするの？」
振り返ってルカの顔を見上げる。すると仏頂面の眉間に皺が刻まれた。
ルカが口を開くと、リフェノーティスが笑い声をあげた。
「ふふ、騎士を助けようと魔物に突っ掛かったり、色々な事に危機感がなさすぎたり。――王子も大変な方を主人になさいましたね」
「……お心遣い、感謝します」
「いえ。こちらも目が行き届かなかったり、変な気を起こした人間が居た場合貴方様がいてくださると心強いですから」
「……」
リフェノーティスが意味深にふふっと微笑んだ。
「美青年王子サマー。置いていくわよー？」
セレナの声が遠くから響いた。

きっと慌てて引っ張り出したと思うから、ちょっと埃くさいかもしれないわね。でも、ゆっくりくつろいでね。
セレナは有希とルカと荷物を部屋に入れるとそう告げて出て行った。部屋はちっとも埃臭くないし、むしろ花のような良い匂いがしている。
ぱたんと扉が閉まって一拍置いて、ルカがはぁとため息を吐き出

した。そして、部屋の中をあちこち検分してからもう一度ため息を吐き、甲冑を脱ぎ始めた。
有希達に宛がわれた部屋は、大きな洋間がひとつ。そこから伸びる二つの寝室の扉。洋間には重厚そうなテーブルとソファが中央に置かれ、大きな暖炉が壁に嵌められている。暖炉は薪が燃え、部屋に暖かさと明るさを与えてくれる。
有希はソファに座り込むと、くわぁっとあくびをしながら身体を伸ばす。長い長い道のりで凝り固まった背中や腰がばきばきと音を立てそうだった。右に左に身体を捻らせ、またもう一度上に伸びる。そうして身体の力を抜くと、心なしか疲労が取れたような気がする。ようやくひとごこちつけたというものだ。ルカも同様なのだろう。甲冑を外した後、肩や首をほぐしている。
「……」
「……」
しんとした空気が流れる。
何か話をしたいと思う。けれども何を話したら良いのか、何と声を掛けたらいいのかわからずに口をつぐむ。
魔物が出たね。疲れたね。怪我人が出たね。移動、大変だったね。死人も出たね。喉乾いたね。ここのところ地震が多いね。おなかすいたね。早く何とかしなきゃね。眠いね。焦るね。苦しいね。寒いね。
何を話しても陳腐で平べったくなるような気がしてならない。結局は気がはやってしまって何事も手につかないのだ。
「……こんな風に、休んでる暇ないよね」
「休息も仕事のうちだと思え。明日から休みたくても休めなくなるかもしれないからな。英気を養っておくんだ」
「うん……」
心ここにあらずな返答に気付いたのだろう。ルカは身体をほぐすのをやめ、有希の向かい側に座る。
「休む前にお前に聞いておきたい事がある」

「……何？」
「お前は、どうしたいんだ」
「え？」
ルカはずっと仏頂面で、人形のような顔だ。
「俺達は二国になったこの大陸を、有るべき三国に戻すためにここへやってきた。――どうやってリビドムを取り戻すか、という話だ」
「……リビドムの人に協力してもらいたいと思ったから、リビドムに来たんだけど……」
それ以外のことは何も考えていなかった。リビドムに来たら何か道ができるんじゃないかと漠然と考えてきた。危険も何もないだろうと踏んでいた。――なのに魔物に襲われ、死者を出した。
「魔物が出るって知ってたら、あんな危険冒してまでも来ようとは思わなかったのに」
「いや、リビドムに来たのが正解だ」
あまりにもきっぱりとそう言われて、有希はルカをまじまじと見つめる。
「……どうして？」
問いかけると、ルカは視線を彷徨わせて答えを探しているふうだった。
「どうして……だろうな。俺はお前に面倒が降りかかるのを知っていて、お前に背負うものが出来ると知りながら、お前を止めようとはしなかった……」
まるで独り言のようにつぶやく言葉は半分ほどしか聞き取れない。
「え？」
「いや……きっとそれが最善だったんだろう」
歯切れの悪いルカの返答に違和感を感じたけれども、リビドムに行くと決めたことを肯定されたようで安堵した。
「そうだね。……あたし、マルキーに行って王様にお願いしたい」
「リビドムを返してくれ、と？」
「そう。難しいかな」

「だろうな」
「……だよね」
あまりに無計画だ。そう言ってはいそうですかと返してもらえているならとっくの昔に返してもらっている。
「だけど、今のこの世界の現状を説明したら……」
「それとリビドムの事とは関係ないと言われて終わりだろ」
「……だよね。だけど、そうしたいと思うの。――ルカは、反対？」
「いや、お前がそう望むのなら、最大限叶えられるように努力しよう」
その言葉に、有希は目を瞬かせた。
有希が望むのなら、叶えられるように努力する。
一体、どういうことなんだ。
有希の行く道を示してくれて、有希のこの世界にいる理由を与えてくれたのはルカなのに。
どうして有希の望みを叶えようとしてくれているのだ。その言葉がどれくらい重たいものなのか、ルカは理解しているのだろうか。
「……どうして、そんな簡単に言えるの」
「……？」
「だってあたしは、ルカに何一つ利益の無いこと言ってるんだよ？しかも無茶な事言ってるって事も自覚してる。――なのにどうして、そんな事言えるの？」
「そういう問題ではない」
「じゃぁどういう問題なの」
「……」
「ルカ」
焦れて問い詰めるような口調になる。ルカの仏頂面の眉間に皺が一本入った。
「お前もだろう」
「え？」
「お前は、リビドムの人間でも、アドルンドの人間でもない。――

そもそも、この世界の人間でもないんだろう？　どこかの世界の、ニホンという国に住んでいた。そして予期せずこちらに来てしまった。そうだろう？」
「！！」
突然のことに言葉を失う。
もしかしたら覚えている、気付いているかもしれないと思っていた。いや、聡いルカならわかっているということを知っていた。知っていて、何も問わずにいてくれているルカに甘えていたのだ。
だって、どう説明したらいいのかわからない。正直に話しても大丈夫だと理解していても、どうにも踏ん切りがつかないのだ。
あちらの世界の話をしてしまうと懐かしんでしまいそうで、懐かしむと帰りたくなってしまいそうで。
――帰るにしても、今の有希には帰りたくない理由がある。
（だって、この世界を……終わらせてしまうのは、嫌だ）
パーシーと約束したことだってある。パティメートにまだ謝っていない。ヴィヴィにももう一度会ってきちんと話をしたい。
「え、と……あたしは」
「別に無理に言わなくてもいい。お前が言いたがらないのは知っている。何の理由があるのかまでは判らないがそういうことだ」
（そういうこと？）
「俺はお前が平和な世界に居たであろうに、どうして危険を冒してまでこの世界に居るのかは知らない。お前も俺がどうしてお前の酔狂に付き合うのか理解ができない」
「……おあいこ、っていうこと？」
「そういうことだ。……俺の場合は――お前が何も知らなさ過ぎるだけだがな」
「え？　なにが？」
話の続きは、扉がノックされて途絶えた。侍女が食事の載ったワゴンを押して入ってきた事で、完全に中断されてしまった。
「失礼します。お食事をお持ちしました」

「そこに置いてくれ　――ユーキ。焦ってもどうにもならない事なのだから、今は飯を沢山食ってしっかり睡眠を取れ」
あたしはまだ聞き足りない。聞かないとすっきりしなくてきっと眠ることもできないだろう。
食後にもう一度話をしようと思ったのに、湯に浸かって出てきた頃にはうつらうつらとしてしまって、いつともどこともわからない間に眠ってしまった。
久方ぶりのベッドだからだろうか。ふわふわと心地の良い眠りだった。

125

この先のことが不安で仕方なくて眠れないだろうと思っていたのに、差し込む朝日と鳥の鳴き声に起こされるまで深い眠りについていたらしい。

「朝……」

働かない頭ながらも、自分がいつの間にか眠ってしまったことを理解した。

あたりを見回し、そこが昨日自分に宛がわれたリビドム城――王宮の寝室であることを思い出した。そして、ベッドサイドのテーブルに着替えを見つけた。誰がいつ用意したのだろう、そんなことを考えながら着替えに手を伸ばし、もそもそと着替え始めた。

部屋にあった水差しと洗面器で顔を洗って部屋を出ると、洋間でルカが既に食事をしていた。

メイドが有希に気付くと挨拶をし、別のメイドが有希の分の食事も用意し始めた。

「お、起こしてくれればよかったのに」

ルカは食事を始めたばかりのようで、ほとんど手がついていなかった。

「まだ時間に余裕がある。――間に合わなくなる頃まで寝ているようだったら起こすつもりだった」

「時間？」

ルカはちらりと有希を見る。さらさらと細い金髪が揺れた。

（寝癖とか、絶対つかないんだろうなぁ）

有希は自分の頭に手をやり、後頭部にある少しだけ跳ねてしまっている毛束を撫で付けた。

「食事を終えたら、今後の事についての会議がある。――お前にも出席して欲しいそうだ」

「会議」

今後のことについて。その言葉に、有希の心は少しだけ躍った。
――確実に、少しずつではあるが、前に進めている。

有希とルカ、それからアインとナゼットは食後に合流をし、メイドに連れられるがままに大きな部屋に通された。
そこには既に人が椅子に座っていて、リフェノーティス、セレナ、ヴィーゴ、いつか国境で会ったトウタと数名の人物、それからガリアンとダンテの姿があった。骨と皮のように細かったガリアンは少し肉付きが良くなっていて、かつてよりも顔色が良かった。
「お久し振りです」
そう笑みかけると、ガリアンは仰々しく頭を下げる。
「……御元気そうで、なによりでございます」
なんでそんなに改まった口調なんだと聞こうとしたら、リフェノーティスの言葉に遮られてしまった。
「では、早速ですが――」
そう言って、皆の自己紹介をし、軽く挨拶をして話が始まった。やってきたアドルンド兵の処遇、今ある兵糧の量、兵の数。
淡々とそれらを話したところで空気がぴんと張り詰めた。そして厳かな表情を浮かべたガリアンが、ゆっくりと口を開いた。
「私どもといたしましては、日を見て……近日中にマルキーに攻め入る方向で意見が合致しております」
「！」
「先だって、マルキーには未だ十日熱が跋扈しておりますし、最近の魔物の騒動もある。アドルンドとの戦争状態が続き兵も疲弊している。――これ以上の機会はないと踏んでいます」
有希は信じられない思いで見ると、リビドムの人たちは皆頷きあっている。
「アドルンドから来てくださいました皆様には、協力していただくつもりはありませんのでご安心くだされ。――人が出払うのでもて

なしがで行き届かなくなるやもしれませんが、そこの辺りは御容赦願いたい」
「ガリアンさん……？」
「我々は二十年余り、マルキーに虐げられてきた。雪辱を晴らすには、今しかないのです」
ぴりぴりと張り詰めていた空気に、怒気がはらんでくる。
許せない、赦せない、ゆるせない。その言葉は発せられることはないが、びしびしと伝わってくる。
戦争を、起こすのだ。
再びリビドムを取り戻すための、戦争を。
平和を、安寧を手に入れるための、戦争を。
わかっている。そうしたいということを耳にしていた。仕方が無いことなのかもしれないとも思った。
けれども、やはり有希にはその戦争の意味がわからない。
「どうしても、争いを起こさなきゃいけないの……」
つぶやいた声は小さいものであったが、子供の声というものはよく通るもので、皆が一斉に有希に視線を送った。
「戦わないで、人と人とが傷つけあわないで、リビドムを取り戻すことってできないの……？」
「……無いわけではない」
あての無い有希の疑問に答えたのはヴィーゴだった。
「マルキーが取引に応じれば、の話だがな」
「取引？」
「……十日熱の薬だ。あれから更にリフェノーティスが改良し、快癒率が上がったものがある」
「それの作り方を教える代わりに、リビドムを返してって言うの？」
「そういうことだ」
「……ならそうすればいいじゃない。どうして戦いを起こそうとするの？　戦争なんて起こそうとしないで、はじめっからそうすればいいじゃない！」

立ち上がる時に椅子がガタンと音を立てた。
辺りがシンと静まる。有希は怒りで顔が赤くなるのを感じた。
「……今まで自分達が傷つけられてきたから。それが許せないから？」
返事が無い。誰も答えようとしないことが、肯定を暗に示している。
「リビドムとしてのプライド、矜持を踏みにじられたから？　それが許せないの？」
その通りだというような顔で有希を見つめる顔がいくつかあった。
「……そんなもののために、また人々を傷つけようとするの？　――あたしには理解できない。あたしは、そんな事を手伝う為にリビドムに来たんじゃない。この世界がまた元に戻るようにしたいだけなの。……あたしはリビドムがどんな惨状にあったのか知らない。知らないけど、許せないからっていうだけで争いを起こすのなんて理解できない。あたしは絶対に手伝わない。たとえルカが手伝うって言ったとしても、どんな手を使ってもそんな事させないからね」
鼻息を荒くしてルカをひと睨みし、ドスンと椅子に座る。
（あたしを会議に連れてきたっていうことは、あたしにだって発言権ってものがあるんでしょう）
半ば居直り気味に開き直った有希は、ふんと鼻を鳴らした。
「……だ、そうだ。私は主人に着いて来た。基本的には彼女の意向に沿うつもりだ」
ルカの声音に少し呆れが入ってたので、もう一度睨みつけた。向かい側に座っていたナゼットが噴出すのが視界に入る。
「……そう。ユーキの気持ちはわかったわ」
長い長い沈黙を経て、口を開いたのはリフェノーティスだった。ふわりと穏やかな顔に、有希の心は少しだけ落ち着く。しかし、穏やかな顔つきとは裏腹に、厳しい声が発せられる。
「それは、命令ととらえて良いのかしら？」
「め、命令？」

「そう。リビドム王女としての」
「……は？」
「私達はね、ユーキ。貴方を、いえ、貴方様を、リビドム王、ロイコ・カーン・リビドム様の娘と認めております」
「ちょ、ちょっと待って」
「カーン様の指輪を所持していたこと、そして何よりもその瞳の色が証明しているの。――ご存知かしら。紫の瞳を持つのはリビドム王家の人間以外居ないっていうのを」
――紫の瞳を持つのは、リビドム王家の人間以外居ない。
いつか聞いたことがあった。けれども自分がまさかその人物であるとは想像した事なんてない。
「ガリアン・マノタントの指輪は消滅してません。ですからカーン様はまだ存命だということは知っております。けれどもお戻りにならない。――ということは、何らかの事情があって戻れないのでしょう」
「ちょ、待ってってば……」
頭が追いつかない。
――――王女？　一体誰が王女だというのだ。
「なので、私達は貴方様に次期王となって頂きたいの」
話に付いていけない頭が、その言葉の意味を理解しようとフル回転するが、空転しているように中身を掴みあぐねる。
「……次期、王？」
あえぐような声が出る。自分を落ち着かせようと何度も深呼吸を試みるが、浅い呼吸を繰り返すばかりで、深く息を吸い込めない。
「貴方様はまだ幼いし、政や国のことに関して知らないことも多い。――けれども、リビドムにはあなたの存在が必要不可欠なの、ユーキ様」
（ちょっと待ってよ）
今そんな事を言われたとしても、思考が追いつかない。大体どうして様付けで呼んだりするのだ。よそよそしくて仕方がないではな

いか。
「驚くのも無理はないわ。ユーキ様、姫だって知らずに育ったんでしょう？」
「ちょ、ちょっと待って……」
突然に突きつけられてしまった。この世界にやってきてから、考えないように考えないようにとしていた事を。
「……」
リビドムが再び手に入るとするならば、自分にできることなら何でも手伝いたいと思っていた。しかしそれは一時的なもので、それがずっと続くものだと考えないようにしてきた。
――だって有希は、この世界の人間ではないのだ。
この世界にやってきてから考えないようにしてきた。
自分自身が、この先どうなっていくのかを。どうするべきかを。
この世界に留まり続けるのか、それとも快斗があちらの世界に渡ったように、同じ轍を踏んで帰るか。
考えてもわからない。わからないから考えないようにしていた。
それなのに今こうやって唐突に選択を迫られてしまった。
「……ごめん。ちょっと、時間をください……」
リフェノーティスは慈愛のこもった笑みを浮かべる。
「――では今はここまでにして、ユーキ様に考える時間を差し上げましょう。ユーキ様、後で貴方様が選ぶことでどういう利点悪点が発生するかお教えいたします」
リフェノーティスがそう言うと、皆が賛同するように頷く。
「あまり時間を設けられなくて申し訳ないけれど、明日の朝には答えを出して欲しいの。――私達は攻め込みたいけれど、貴方様がそうするべきではないと仰るのでしたら従います。では」
リフェノーティスが散会の挨拶をし、皆それぞれ席を立つ。
「……ルカは、知ってたの」
「そうだろうな。という程度にはな」
「……そう」

どっと脱力感に襲われる。まだ頭は先ほどのリフェノーティスの言葉を噛み砕けていないようで、ぼうっと霞がかったようだ。
「お前は考えたことがなかったのか。父親がこちらの人間なんだろう」
「そんなの、ないよ……」
そんな事、考える余裕すらなかった。
幾人かが部屋を出て行く。そんな中、セレナが有希のもとへ駆け寄ってきた。
「ごめんなさいね、ユーキちゃん。リビドムに着く前には言おう言おうと思ってたんだけど、いろいろあって言えなくて、驚かせるようなことになっちゃって」
いろいろ。というのは魔物の存在のことだろう。そういえば魔物騒動の辺りから、セレナ達と接する機会はほとんどなくなってしまっていた。
「……あたしが、この国の、王女……？」
顔を上げる。ルカ、ナゼット、アイン、リフェノーティス、セレナ、ヴィーゴがそれぞれ有希を見つめていた。
（あたしの言葉で、これからのリビドムの行動が変わる）
ぞわりと背筋が粟立つ。
（そんな責任の重いこと……あたしに決断なんてできないよ）
「だってあたし」
皆に言い訳するような言葉が出る。
「あたしはただの学生だし、何が正しいのか、何が正しくないのかすらわかんないし」
リフェノーティスは教えてくれると言った。けれども、有希が正しい選択をできるかと問われれば、是とは答えられない。
「ロイコ……なんとかっていう名前の人、知らないもん」
責任転嫁はなはだしいとわかっていても、愚痴がこぼれる。
「あたしのパパの名前は、春日快斗だもん」
「カイト？」

「そう、カイト。春日快斗」
セレナの声が降ってきたので顔を上げる。セレナは両手を口に当て、数歩あとずさる。橙色の目には驚愕の色が浮かんでいる。
ヴィーゴとリフェノーティスが何か感付いて、しまったという表情を浮かべる。
「カイト……リディー……」
「セレナ？　……セレナ！！　落ち着きなさい！」
セレナがぶるぶると震えだす。ヴィーゴが伸ばした手が、セレナによって叩き落とされる。
「いやぁあああああああああ！！！！」
ぷつんと何かが切れてしまったように壊れたセレナは、つんざくような悲鳴を上げて暴れだした。

126

何が起こったのかわからなかった。
セレナが悲鳴をあげて帯刀していた剣に手を伸ばしたところまでは見えた。次の瞬間には有希の身体はルカの腕に絡め取られて抱き込まれてしまい視界が真っ暗になってしまったのだ。
咆哮とも金切り声ともつかない叫びが有希の耳を刺激する。それに被さるように聞こえる、リフェノーティスとヴィーゴの声。
ルカの腕が肩に回り、ぎゅっと抱き寄せられる。有希は何も考えられない頭で、ルカの服を握った。
（なに？　なに、なに？）
がたがたと椅子が揺れる音。机にぶつかる音。リディーという人を探している声。リディー、リディー、リディー。耳を塞いでしまいたくなるほど痛ましい声はやがて尻すぼみになり、ぼきんと何かが折れる音の後、消えた。
しんと辺りが静まり、誰かの吐息が漏れた。
「ごめんなさい。もう大丈夫よ」
腕が解かれて視界が開ける。
そこには、腕をリフェノーティスの片手に拘束され、地面にくったりと座り込んでいるセレナの姿があった。片方の腕は、肘から先がおかしい方向に曲がっていた。
「――――っ」
「心配ないわ。気を失っているだけだから。ヴィーゴ、何か縛るものを持ってきて頂戴」
「――あぁ」
そう言うとヴィーゴは部屋を出てゆき、太い縄を持ってきてセレナの腕と脚を縛ると、俵のように持ち上げて出て行ってしまった。
一連の流れを見ていたルカが、リフェノーティスを見据えて言った。

「あの人がああなった心当たりは」
「……大体の見当はついているわ」
「それなら、理由を説明してくださいますね」
「……えぇ。ここでは言いにくいので私の部屋に来てくださる？」

リフェノーティスに連れられるままに、離宮へと移動する。離宮は王宮よりももっとみすぼらしくて、壁面を蔓が縦横無尽に延びていた。
まるで古代の遺跡のようだな、と何も考えられない頭は現実逃避するように関係ないことばかり考えてしまう。
いくつか部屋を通ると、その途中でエストに会った。リフェノーティスはエストに茶を淹れて持って来るように言うと、その隣の部屋の扉を開けて、有希とルカに入るように言った。
入ったその部屋は四畳ほどの狭い部屋で、机が一つと椅子が四つ置いてあった。リフェノーティスが座るように言ったので、有希はそのうちの一つに腰を掛けた。すぐ隣にルカが座る。
エストが茶を持ってきて出て行くと、リフェノーティスは口を潤すように優雅に一口飲むと、カップを置いた。
「どこから話せばいいかしら。……どこから話しても長話になるわね」
そう苦笑いを浮かべたリフェノーティスは、ふ、と自嘲のような笑みを浮かべて話しはじめた。
「リディー。さっきセレナが何度も呼んだ人ね。――彼は、セレナの前の契約者であり夫だった人よ」
有希は知っている、というように頷く。
「そして彼……リディーは、王を殺そうとした――いえ、殺した大罪人なの」
「えっ……だって王は死んでいないって……」
「えぇ。カーン様は死んでいないわ。――――そう。もう二十年以

上も前の事になるのね」
　リフェノーティスは懐かしそうに目を眇める。
「カーン様はとっても朗らかで気安い方でね、それから、若い人間を育てることにとても熱心だったの。――私やヴィーゴ……ヴィーゴの弟のリディーも、十五前後で宮に召抱えられたの。――戦後で人材不足っていうのもあったんだろうけれども、優秀だったのよ、私達」
　くすっと悪戯に笑って、それからゆっくりと目を伏せた。
「カーン様にはね、お生まれになった頃から影武者が居たの。影武者というよりも、実弟なのだけれど」
　その双子が生まれるのに前後して、当時のリビドム王は、戦争で受けた傷から病気になり死んだという。唯一残ったリビドムの血が再び絶たれることを危惧した面々が、生まれた子供を一人とし、もう一人は替え玉として育てることにしたのだという。
「もちろんそれは国家機密。その機密を知っていた老人達は殺されてしまっているし、今でもその事実を知っているのはガリアンさんと、側近だった私達くらい。その影武者――カイト様はね、ずっと城の奥で軟禁生活を強いられていたの」
　カイト。その響きに目を丸くする。
「カーン様は即位なさってからカイト様の存在を知らされたの。カーン様ったら憤慨なさって、それからカイト様と会うようになったの。私達にも紹介してくださったわ。もう一人の自分だって……それから、一年、二年くらい経ったのかしら。あの頃はマルキーとの戦争中だったけれど、戦争がイヤだっていうのもあって、私達もなにかと理由をつけては城に戻ってきて、カーン様とカイト様に会ってたわ。その頃にはね、人形のように強張った顔をしていたカイト様も、笑んだりするようになったのよ。相変わらず軟禁生活だったけれど……」
　リフェノーティスの視線は遠く、哀愁を帯びていた。
「……あれは、カーン様が前線に出られてから、お戻りになった日。

今も忘れられないでいるわ。私はあの時、兵器を作るように老人達に言われて作ろうとしていたの。そしてそれを知ったカーン様が止める為に戻ってらしたの」

「兵器」

「魔女に伝わる、人を大量に殺せる技術よ――魔女達の中でも禁忌とされているものなの。リビドムがなくなってしまうと焦った老人達が私に言ったのよ。カーン様をお守りするのに必要なんだって。……そんな事したとしてもカーン様が喜ばないってわかっててても、私、ばかだったから」

その顔には後悔の色が濃くにじんでいる。そんなリフェノーティスに掛ける言葉がみあたらず、有希はその次の言葉を待つしかなかった。

「私は王宮の奥の王の私室に呼ばれたの。しかも風が気持ちいいからってバルコニーに。カーン様はやっぱり、そんなもの作るのやめろって怒ってらしたわ。それは使ってはいけないものだって。そうしたら突然ね、カイト様とリディーとセレナ、それからヴィーゴが部屋に入ってきたの。カイト様は何か思いつめたような、険しい顔をしてらしたわ。私は知らなかったのだけれど、リディー達はカイト様を追いかけて来ていたの。――カイト様が剣を後ろ手に隠していたから。カイト様はバルコニーまで来ると、『オレはお前じゃない』って叫んでカーン様に切りかかったの。そうしたらね、カーン様、腹部を刺されて、体当たりされた衝撃で、バルコニーから落ちてしまったのよ」

リフェノーティスが目を閉じた。その時の惨状を思い返しているようにみえて、有希はやめてと叫びたくなった。けれどもリフェノーティスは恐ろしいほど坦々と話す。

「カイト様が一体何を思ってその行動に出たのか、知ることもできなかった。――カーン様を殺したということで、リディーがカイト様を斬ったの。でもカイト様はカーン様が居なくなった時の王なのよ。リディーは次の王を斬ってしまった。……だからセレナが

その大罪人を、その場で処刑したの」
　そこまで言い切ると、ふぅと息をはきだした。
「セレナは狂犬って嫌味を言われるくらい、凶暴で凶悪で……主人に忠実だった。――主人が王を殺してしまった事に気付いてしまったら。っていう事まで感覚的に捉えてしまってんでしょうね、セレナ自身呆然としていたわ。それからセレナは数日気を失い、起き上がった時には『カーン様を殺そうとした賊が居て、カーン様を守ろうとしたリディー共々二人を殺し、憤怒したセレナが賊を殺した』っていう、見当違いの記憶が出来上がっていたの。セレナの中でカイト様の存在が消されちゃったのね」
「そん……な」
「でも私達はそれを訂正する気にはならなかったの。カーン様もカイト様もリディーもいなくなってしまって――それ以上、何も失いたくなかったのよ」
　若かったの。そういい訳をして、ため息を吐き出した。
「いつまでもそのままで居続けていたのは、誤算だったし甘かったわ。その甘さがユーキを危険な目に遭わせたわ」
「でも……どうして突然」
「カイト様の名前を聞いたこと……かしらね」
　リフェノーティスは有希をじっと見つめ、それから苦笑いを浮かべた。
「それに、ユーキを見ていると、嘘がつけないんだもの」
　意味深な言葉の意図がわからずリフェノーティスを見つめると、リフェノーティスはふふっと微笑んだ。
「セレナも、そろそろ大人にならなきゃいけないって事ね。――でもユーキを危険な目に遭わせてしまって、本当にごめんなさい。セレナの事だからユーキを傷つけることはしなかったでしょうけれど……怖かったでしょう？」
「ううん。大丈夫。それよりも、セレナが」
「セレナよりも、答えを出さなきゃいけないことがあるでしょう？」

やさしくて、でも厳しい声に、有希はぎくりと肩をすくめた。
「セレナは大丈夫。あれでももういい歳なんだから、自分のことは自分でなんとかするわよ。――ルカート王子も、ご理解頂けたかしら」
「……えぇ」
「――ご存じなくても無理はないわ。貴方が幼い頃の話ですし、この事を知っているのも、もう私とヴィーゴしか居ないですから」
それから、リフェノーティスは朝の会議で言っていた戦争を起こすことによっての利点悪点を話してくれた。お金の問題、兵力の問題、兵糧の問題。いろいろ言われたけれど、だからといって戦うのはないだろうという意見が変わることはなかった。
話が終わり、リフェノーティスが椅子を引く。左右でそろわない足音をたてて立ち上がる。
「ルカート王子、ユーキを送って頂いても良いかしら。必要なら城内を散歩しても構わないわ」
先ほどと口調が少し違う気がした。しかしルカは気にしていないようで、椅子から立つ。
「ユーキ」
振り返ると、リフェノーティスが屈み、有希の視線に並ぶ。
「本当に、カーン様に似てきたわね……」
大きくて暖かい手が頬を撫ぜる。
「そ、そう、かな」
何故だか妙にどきどきしてしまった。
そして、ルカは眉間に皺を寄せて相変わらずの仏頂面で突っ立っていた。

127

昼前で、しかも晴天だというのに、外は寒く呼吸をする度に白い息がこぼれる。けれどもその寒さが、情報をたっぷり詰め込まれて処理に追われ、ぐらぐらと煮詰まっている有希にはちょうど良いのかもしれない。

リビドム城の敷地は広い。他の城よりも小規模なのだが、他の城に比べて建物が少ないので、庭がいっそう広く見える。

今は管理が行き届いていないようで、あちこち枯れ草があったり、飾りが欠けていたりしていて、とても侘しい。だがその侘しさが、そのままリビドムの現状をを反映させているのだとひしひしと感じる。

ところどころ舗装されていない庭石の上を歩く。時折、大きな石から大きな石にぴょんと飛び移ってみたり、小さな石を短い歩幅で歩いてみたりする。

ルカは何も言わず、少し後ろを歩いている。

（……あたしは、結局パパとママの言うように、こっちの方がいいっていう事はなかった）

すべての事の発端はそれだった。成長しない有希のための、少し過激な気もするが――両親の想い。

（だからって今、あっちに戻るっていうわけにもいかない）

今の有希は、たとえこちらの世界にも望まれていないとしても、やるべきことができたのだ。

（でも、この世界に一生居続けるっていうのも、実感がわかないよ……）

もし両親の言うとおり、この世界の方が有希にとって良かったというのなら、もっと簡単に決断できたかもしれない。自分に治癒という力があり続けたなら、医療の発展途上中のこの世界に貢献するために、居続けると言ったかもしれない。

（パパ、ねぇパパ。パパはどんな気持ちであたしをこの世界に送ったの？）
ルカに渡してもらった、自分の指輪とは別の――快斗から渡された指輪を首の鎖から取り出して、問いかける。
（パパはどうして、この世界に戻ってこなかったの？）
この世界で二人しか居なかった、紫の瞳を持った人。快斗の居なくなった後、この世界に残ったもう一人は――もう居ない。
（あたしは、どうしたらいいの？）
きゅっと指輪を握る。冷たい感触の指輪が、有希の体温になじんでどんどん冷たさがなくなる。
――有希の存在も、こうやってこの世界になじんでいるのだろうか。
ぱっと手を離して、また握りこむ。案の定、指輪はすぐに冷たくなっていた。
「帰りたいか？」
はっと振り返ると、ルカが仏頂面で立っていた。寒空に綺麗な顔がいっそう綺麗に見える。
「帰り方は、知っているのか？」
仏頂面がしかめっ面に変わる。
「……一応、見当はついてる」
「そうか」
向かい合わせに立って無言なのがどこか気まずい。ふと視線を横にずらすと、そこには池でもあったのだろう。地面が楕円形に窪んでいる。名残なのか、苔が所々に生えている。
「帰りたいか？」
ルカがもう一度問いかける。有希はそれに答えられない。――わからないから。
「……ルカは、あたしはどうしたらいいと思う？」
見上げると、ルカのしかめっ面は余計に険しくなっていた。
「俺はお前が帰るべきか帰らざるべきかではなく、帰りたいのか帰

りたくないのか。お前の気持ちを聞いているんだ、ユーキ」
　気持ち。その言葉で、喉につかえていた言葉が　ぽつり、ぽつりとこぼれる。
「……わかんない。たぶん、帰ったとしても、帰らなかったとしても、後悔する。――ううん、絶対に、する」
「そうか」
「だって、あたし、パパにもママにも友達にも、何も言わないで来ちゃった。また会えるなら、会いたい」
「そうか」
「でも、今ここで何もかも放り投げて帰るのもイヤ。絶対気になって気になって仕方がなくなる。夜も眠れないと思う」
「そうか」
「きっとどんなに考えても、どっちかなんて決められない。たとえば今あっちに戻ったとして、またこっちに来られる確証なんてないもん。……っもしかしたら、パパがそれでこっちに来られないのかもしれないし」
　その時々にあっちに行ったりこっちに来たりと出来なくなる。有希の一番理想とする状況が作れるという確証はないのだ。余計ややこしくなって、頭がくらくらする。
「……何もかも全部ちゃんとして、それから考えたいのに」
　やるべきことをきっちりやって、それから自分の身の振り方を考えたい。それなのに今日明日中に自分の未来を決めろだなんて、ひどい。そうやって憎まれ口をたたきたい気分でいっぱいだ。
「なら、それでいいだろう」
「え？」
　見上げると、綺麗な青と目が合う。ルカの瞳は蒼穹の空のような、凍てた月の出ている夜空のような、不思議な青だ。
「お前は今やりたいことをやって、やりきってから考えればいいだろ。無理なら無理と言えばいい」
「でも……」

「今のような中途半端なままで王になるだなんて言ってみろ。――今に帰りたくなる。それだけ王族っていうのは面倒なんだ。寄生虫のような人間や、迫害したがる人間が掃いて捨てる程いる。面倒な上に危険で、報われる要素も少ない。お前の居た場所に帰れるなら、帰った方が良い」

帰った方が良い。

何故かその言葉がツキンと胸に刺さる。

「ルカは……それで、いいの？　……あたし、あっちに戻ったら、パパみたいに帰ってこないかもしれないよ？」

伺うように見上げると、しかめっ面が仏頂面に変わり、ふっと鼻で笑う吐息と共に口角が上がる。

「お前の言う『あっち』に行ける方法がわかっているなら、ついて行くのも有りかもしれないな。――――もっとも、面倒で危険で報われないとわかっていても、俺はどこかで……お前に王になって欲しいと思う部がある。何故かはわからんがな」

ツキンと痛んだ胸が今度はどきんと高鳴る。ルカの笑った顔は心臓に悪い。

「な、なによそれ！　帰れって言ったり、王になって欲しいって言ったり。結局ルカはどっちを選んで欲しいのよ！」

「さぁな。言ったろう。お前が望む通りにしてやると」

「なっ！」

一歩間違えば殺し文句ではないかと言いたいが、言葉は出てこずに口だけが金魚のようにぱくぱくと動く。

「――少しは、心強いだろう」

「え？」

「お前が何と決めようが、俺は肯定してやる。誰が否定しようがだ」

高鳴ったままの心臓がうるさい。ルカは今、笑顔じゃないのに。

「決められないなら、無理に決める必要は無い。決めろと言ったのはあの義足の男とリビドムの人間だ。神に言われた訳ではない」

寒いはずなのに、火照る。吐息が白さを増しているような気がし

てならない。
「……そんなの、へりくつじゃん」
「そうだな。屁理屈だ」
ふ、とルカの頬が緩む。
「だからそう考え込みすぎるな。――お前はただ、笑っていろ」
今度こそ心臓が壊れるんじゃないかと思う音がした。

128

裕子が悪戯な笑みを浮かべて笑っている。
「ねぇ有希ちゃん。今、恋してる？」
そこは自宅のマンションのリビングのテーブルで、有希と裕子は向かい合わせに座っていた。
裕子はひじ立てして組んだ手に顎を乗せ、ひどく楽しそうな顔をしている。
（恋？）
「そ、恋」
（そんな暇、ないよ）
「あらぁ。駄目じゃない。何の為にカー君と二人でお見送りしたんだと思ってるの？」
（……だって、パパとママが言うように、あたし別に大きくなったりとかしてないし）
そう言うと、裕子は一瞬きょとんとし、次いで両手を広げて笑った。
「そんなの関係ないわよー。愛や恋に年齢は関係ないの」
（そんな事言われても……）
んもう、つまんないわねぇ。ふてくされるように言うと、閃いたよう手を合わせ、にテーブルに身を乗り出す。
「じゃぁじゃぁ、気になる人とか、いないの？」
（気になる人？）
「そう！　有希ちゃんったら誰に似たのかニブチンだから、自分の恋心に気付いていないっていう可能性もあるからね！　で、どうなのどうなの？　一緒に居ると落ち着くとか、逆にドキドキしちゃって仕方ないとか、有希ちゃんに心底尽くしてくれるとか、そんな人居ないの！？」
「そ、そんなの、いないし！！」
迫ってくる裕子の顔を押しやるように両手を押し出すと、ひんやり

と冷えた空気が身体に降りかかり、有希ははっと目を覚ました。
「……ゆめ？」
目をぱちぱちと瞬かせて、左右を見渡す。見覚えの無い部屋だった。紛れも無く、自宅ではないことはわかった。
「じゃぁここ、どこ……？」
むくりと起き上がる。背中にもひんやりとした空気が当たる。それが寝ぼけた頭を覚醒に導く。
（そうだ。ここ、リビドムの王宮だ）
「……なんであんな夢見たんだろう。そんな暇、本当にないのに」
はぁっとひとつため息を吐き出し、今の自分の状況を思い出そうと辺りを見回す。
外はもうとっぷり暮れていて野鳥の鳴く音がかすかに聞こえる、夜の早い時間なのか、遅い時間なのか、見当がつかない。
昼食を食べてから、これからの事を考えすぎて頭痛がしてきたので昼寝をした。そこからの記憶が無い――ということは、そのまま寝続けてしまったのか。
「もう……みんなの所為だ」
変な夢を見たのも、寝すぎてしまったのも。皆が有希にあれこれ言うからだ。
そう責任転嫁し、もぞもぞとベッドから這い出る。途端にひんやりとした空気が体中を襲う。目が闇になじむのが待てなくて、手探りで上着を探す。上着を見つけるとさっと着込み、寒さから少し逃げられた事に安堵の息が漏れた。
目が闇の中でもおぼろげに物をとらえるようになると、扉を探して開ける。暖炉は相変わらず炎を煌々と揺らしていて、そしてとても暖かかった。
滑り込むように洋間に入る。薪の燃える橙色はまろみを帯びたやわらかさで部屋を灯す。
「……目がちょっと冴えちゃったなぁ」
有希の寝室へ伸びる扉ともう一つ、ルカの部屋の扉をじっと見つめ

る。――きっともう遅い時間で、ルカも起きていないのだろう。
はぁとため息を出して、ソファに座る。ふかふかと柔らかなソファの傍のテーブルには、水晶が二つ。カップの取っ手のようなものが取り付けられておいてある。――それは明かりの代わりらしい。魔術士の力が込められていて、それが人の念により力が発現する――とにかく有希にはよくわからなかったが、その取っ手を持って明かりが欲しいと念じれば水晶が蝋燭の代わりをしてくれるそうなのだ。
（外の風でも吸おうかなぁ……）
結局のところ、明日何と言おうか決まっていないのだ。昼間は考えすぎて頭が痛くなったからと睡眠に逃げたが、今度はそういう訳にはいかない。
「っし、行こう」
水晶の一つを取り、上着の袂を手繰り寄せて部屋を出た。

冬の夜は、月がコンタクトレンズのように薄い形をしていた。もうすぐ新月がやってくるのか、それとも満月に向けて大きくなっていくのか。
長いこと月を見ることが無かった有希にはわからなかった。
昼間とはまた違った雰囲気だ。昼間は廃墟みたいだったが、その中にもどこか暖かみがあった。それなのに今は、吹く風は突き刺すように冷たく、欠けたり、崩れ落ちている壁やあちこちに散らばる枯葉や枯枝が有希を拒絶しているようだ。
はぁと息を吐き出すと、吐いた分だけ白く染まる。
丸みを帯びた大きな岩に座り込む。岩も有希を拒絶しているのか、冷たさを強調してきたが無視をして座り込む。
それからいくらか考えたが、やはり昼間ルカと話をした時から進展はない。

やはりこちらの世界にずっと居続けるだなんて考えられないし、かといってこちらを放り投げてあちらに帰るだなんて事も考えられない。
「……ホント、超宙ぶらりん」
自嘲の笑みを浮かべて、冷えてきた耳を暖めるように両手を添える。
「しかも王女の命令なら仕方ないって何？　あたしがリビドムを建て直しませんって言ったらそうするの？」
わかっている。そんなことを言ったってそんなことにはならない事を。――所詮お飾りなのだ。
「例えお飾りだったとしても――こんな宙ぶらりんのあたしが、王になんてなっていいはずがないのに」
はぁっとため息を吐き出す。少し大きな白い塊が有希の前にほわんと出来る。
「この目が証明してる。かぁ。――どうしてパパ、そんな重大なこと教えてくれなかったのよ。いや、この目が珍しいっていうのも、リビドムの王家くらいにしかいないって事も聞いてたけどさぁ……まさかパパが王様だったとか信じられないでしょ」
夜空を見上げて快斗に向かって文句を言う。――ガリアンの指輪は空を指したという。それなら、この空は有希の居た地球――日本と繋がっているのだろうか。
「ホント、あたしが決めていいことなの……？」
岩に体育座りで夜空に問いかけるように呟くと、手元がきらりと光ったような気がした。つと視線を手元に遣ると、別段変化はなく、ただ右手の中指に指輪が嵌っているだけだった。
おもむろにその指輪を外して、月にかざす。
玩具のように小さなそれは、確かに有希がこの世界に居て、この世界の人間と繋がっている事を示している。
『お前がそう望むのなら、最大限叶えられるように努力しよう』
『なら、それでいいだろう』
『お前は今やりたいことをやって、やりきってから考えればいいだ

ろ。無理なら無理と言えばいい』
「……本当に、いいのかなぁ」
『だからそう考え込みすぎるな。――お前はただ、笑っていろ』
ルカの言葉が響く。どきんと心臓が高鳴ったような気もするが、知らないふりをする。
指輪を付け直す。不思議と指輪は冷えておらず、まるでそこにあるのが自然だというように有希の中指にすっと馴染む。
この指輪の繋がる先――ルカは、有希のしたいようにしろと言ってくれた。誰が否定しようが肯定してやると。有希の願いを最大限叶えてやると。
それならば、有希は。
ルカの言葉に、どう応えられるだろう。
「……あたしは、リビドムのみんなにも、マルキーやアドルンド、この世界のみんなにも笑っていて欲しい。みんなが笑える世界になったのなら、あたし、心置きなく日本に戻れる気がするのに」
そう呟いてはっとする。
耳元にあてていた手を離し、思いっきり頬に向けてたたきつける。
手と頬はぶつかってべちんという音とじんと広がる痛みを生み出す。
痛みに顔が歪むが、それでもにへらっと笑顔を浮かべる。
「――なんだ、決まってるんじゃん」
ぴょんと岩から飛び降り、両手をぎゅっと握り締めて自分に気合いを入れる。
「ルカがそれでいいって言ってくれたんじゃん。やりきってから考える！　だからもっと自信持ちなさいよ、春日有希、アンタにならできるんだから！」
水晶の取っ手を乱暴に掴み、ずんずんと歩き出す。
「お飾りはお飾りでも出来る事、あるじゃない！　リフェだって言ったもん。あたしの命令なら聞くって。――――あたしは、絶対に争いなんて起こさせない。絶対、この世界を元に戻してやる！」
そう息巻いて、ふと脳裏によぎった人物に思いを馳せる。

「パパも――カイトさんも、きっとリビドムが平和であることを願ったんだと思うし」
しんみりと息を吐いて、水晶の取っ手を持つ手に力を込めなおして、もう一度歩き出した。

129

ジジッと音を立てて手元の蝋燭の炎が揺れた。蝋燭はもうじき消えてしまいそうな程短くなっていて、最後の足掻きのように炎はぐらぐらと揺れながらも燃える。リフェノーティスは自分が長いこと机に向かっていた事に気付いた。

どうやら身体も長時間動いていなかった為に軋んでいるのにも気付かなかったようで、首から背中、腰にかけて唐突に重みがやってきた。

ふぅと一つ深い呼吸をし、両手を空に伸ばす。伸びるついでに腰の骨がぽきんと鳴る。少しは重さは取れたが、筋肉は数十秒伸ばしただけでは物足りないようで、まだどんよりと重い。

前王の時代の軍人、官吏達はもう殆ど居ない。なので前王時代の人間――しかも王の魔術士として仕えていたリフェノーティスは、かつて自分の仕事ですらなかったようなことまで押し付けられる羽目になっている。

わからないことは文献を調べ、そうやって少しずつ書類を作成していく。――まるで学生時代に戻ったようだと苦笑いが出る。

「けどまぁ、ヴィーゴも戻ってきたことだし、私の仕事も少しは減るわよね」

ぼやくように言って、椅子から立ち上がる。その時に風が吹いたからなのか、もう蝋が尽きたからか、机の上の炎が消える。これはきっと休憩でも行って来いという知らせだろうと良いように取り、リフェノーティスは襟巻きを取って首に巻くと、手持ちの燭台に蝋燭を一本取り出し、火を灯して外へ出た。

リビドムの冬は寒い。雪量で言えばマルキーの次だが、それでも

雪が多い。リビドムの冬は、寒くて長い。
物資も何も無い所に来てしまったから、かつて明かりの絶えなかった廊下も、リフェノーティスの手持ちの明かり以外は何も無い。
かつてのように、両足同じような足音で歩くことも無い。
この城に戻ってきてから、あれやこれやと昔を懐かしむ事が多くて、そのことに気付く度に苦笑がもれる。
（トシかしら）
嫌だわ、とひとりごちて、あちらこちら練り歩く。散歩は昔からの癖で、考え事や悩み事があると外へ出てあても無くうろうろ歩き回るのだ。
――カーンとの出会いも、そこが始まりだった。
魔女に育てられた子供として有名だったリフェノーティスは、その口調からか、美貌からか、魔術士としての才能からか、顰蹙を買うことが多く、寄宿舎に居る時間は極力短くしたかったのだ。
直接的に迫害を受けたことは無かったが、やはり雰囲気がなじめなかった。
母と二人きりの世界しか知らなかったリフェノーティスは、あの頃は理由を知らなかった。何故自分がなじめなかったのか。
その日も、うろうろと歩き回っていたのだ。特にあても無く、城の庭を。
「……やだ。また昔の感慨に浸っちゃったわ」
自嘲して、ため息を吐き出すと、視界の奥。暗闇の中に人が居るのが見えた。
「――――私以外に、夜中にうろうろするような人、私の記憶には無いのだけれど、あなたは誰かしら」
嫌味のように言うと、人影は少し動いた。逃げるのかと思って身構えたが、どうやらそうではなかった。
「……リフェノーティスか」
その声はヴィーゴのものだった。
「どうしたの、こんな時間に」

ヴィーゴの様子はどこかおかしくて、いつも以上に声に覇気が無い。
そしてそれは、ヴィーゴの姿がリフェノーティスの持つ蝋燭の火に照らされて、原因を知った。
「……何を、しているの」
ヴィーゴが髭を剃り落としていた。少し童顔のヴィーゴは、それを気にしてか、それとも年子のリディーと顔がそっくりだったのを嫌がってか。リフェノーティスが覚えている限り、ここ二十年は髭面しか拝んだことがなかったのだ。
「あいつが、起きた」
そう呟く声には生気が無い。
「……そうなの」
「あいつの中ではリディーは死んでいないことになっているらしい」
ヴィーゴの疲弊しきった声に、リフェノーティスは目を剥いた。
「それ以外の記憶は大方大丈夫だ。カーン様が居ないことも、カイト様が死んだ事も知っている。カイト様を殺したのがリディーだという事もだ」
「――なら、どうして」
「罰を恐れたリディーを、俺とセレナとリフェノーティスが逃がしたそうだ。リディーを死んだということにして、リディーの指輪を俺に預けて」
リフェノーティスは絶句するしかなかった。
リディーとセレナは本当に仲睦まじかった。いつもリディーはセレナに気圧されているように見えて、実は芯の強いリディーの為に出来ることを一生懸命にセレナは探し、実行しようとしていた事をリフェノーティスは知っている。だからこそ、彼女が狂犬だと言われていることも。
それだけセレナはリディーを深く愛していたのだ。――それこそ、今でも彼を生きていると願って自分自身を偽ってしまうほどに。
「……だからあなたは、セレナの為にリディーを装うの？」

「あいつはリディーを呼んでるんだよ。ずっと……」
「馬鹿じゃないの？　そんな事をしたって」
「わかってる！　……そんなこと、わかっている」
自暴自棄に首を振るヴィーゴをねめつける。
「違うわよ、私はあなたの行為に言ってるんじゃないの」
だって、ヴィーゴ。そんなことをしても貴方が報われないじゃない。
その言葉が出てこない。言ってしまったら、ヴィーゴまでも失ってしまいそうで、怖かった。
「……一時しのぎのまやかしだって事くらい、俺だってわかっているさ。だけどな、アイツが求めている、俺は応えてやることができる。――それなら、やってやりたいって思っちまうんだよ」
苦い皮肉を自分自身に言い聞かせるような口調に、リフェノーティスはため息を吐き出す。
「馬鹿ね……本当に、大馬鹿だわ」
リディーを喪ったセレナを真綿でくるむように慈しみ、周りのすべての事柄から守り抜いたヴィーゴが、セレナを深く深く愛しているという事も、リフェノーティスはわかっていた。
そしてセレナもヴィーゴの気持ちに気付いていて、まんざらでもないと思っていたことも知っていた。
それなのに、一体どこでどう間違えてしまったのだろうか。
「……私達の棲んでいた小屋に行くと良いわ。荷物はあらかた持って来るか、あの孤児院に寄贈しちゃったから何もないけど、それでも良ければ使って。――――老人やガリアンさまには適当に言っておくわ」
ヴィーゴの目が驚きに見開かれる。そして苦いものを噛み潰したような顔で、目を伏せた。
「……すまない」
「本当よ。やっと私の仕事が減ると思ったのに」
「すまん」

「馬鹿」
「……」
「大馬鹿」
「……」
「――――コレ。餞別」
そう言って燭台を手渡す。ヴィーゴは力なく苦笑して、受け取った。
「相変わらず、水晶の明かりは嫌いなんだな」
「そうよ。……リディーと一緒でね」
ヴィーゴの瞳が一瞬、切なく歪む。
「……そうだったな」
「早く行ってあげなさいよ。セレナが待っているんでしょう？」
「……あぁ」
「セレナ、腕はもういいの？」
「……あぁ、もう、完治している」
「――そう。悪いことしたわねって伝えておいてくれる？」
「あぁ」
そう言うと、ヴィーゴは燭台を持って歩き始めた。その背中を見送る。
リフェノーティスはあの小屋には一生戻らないつもりでこの城にやってきた。
だからもうヴィーゴには――もう二度と会えないかもしれない。
一緒に苦楽を共にしてきた、唯一の朋友なのに。
「……本当に、大馬鹿者ね」
セレナの骨は、肘ごと捻り曲げてしまったから、相当の怪我だった。いくら契約騎士でも治るのには時間が掛かると思っていたのに。
――馬鹿な程に、愛がまっすぐで、歪んでいる。
リフェノーティスはゆっくりとヴィーゴの後を追った。
あの背中がもう二度と見れないのかと思うと感傷が湧き上り、きゅうっとリフェノーティスの胸を締め付ける。

ヴィーゴはセレナとリディーが二人で暮らしていた部屋の前に足を止めると、それを察知していたかのように扉が開き、中からセレナが飛び出す。セレナの重さに数歩後ろにたたらを踏んだヴィーゴは、驚いたように目を見開く。

「リディー！　おかえりなさい！」

リフェノーティスはその姿に絶句してしまう。

セレナは、昔――十代の頃のように目を爛々と輝かせ、少女のような瞳でうっとりとヴィーゴを見つめている。

「……ただいま、セレナ」

そう笑むヴィーゴもまた、かつてのリディーの姿にしか見えない。

まるでままごとのように、悲しいこと苦しいことから隔絶されていた、幸せだった甘い甘い砂糖菓子のような空間。

「馬鹿……」

セレナがヴィーゴの頬にキスをする。ヴィーゴは照れくさそうに笑って、セレナの頬にキスを返す。

ヴィーゴに引きずられるようにしてやっと、セレナは部屋の中に入り、扉は閉められた。

閉められた扉の奥に、ぼうっと光るものを見つけ、リフェノーティスは瞠目した。

「……ユーキ」

水色の水晶、水色の光に包まれた有希が、呆然と閉じた扉を見つめていた。

130

目の前で起きている事が、よくわからなかった。
庭園から部屋に戻る途中、廊下を曲がると燭台を持って立っている人が居た。男の人だった。誰だろうと目を凝らした瞬間に、男のすぐ横の扉が開き、中から女が出てきた。
扉から出てきた人間は間違いなくセレナだった。蝋燭を持って扉の前に居た人物は誰だったのだろう。
セレナは彼をリディーと呼んだ。けれどもリディーはもう既に亡くなっていると聞いた。
ならセレナは一体誰をかつての夫の名で呼んだのだろう。
何が起きたのかと呆然としていると、暗闇から有希の名前を呼ぶ声が聞こえた。
「ユーキ」
「！？」
びくりと肩を揺らした有希は声が聞こえた辺りを見る。なにか影があるのは見えたが、一体誰かわからなかった。
影はもぞもぞと動くと、服の中から小さな光を取り出した。――その光は水晶だったようで、ほの明るく人物を照らしだした。
「リフェ！」
リフェノーティスは口元に指を遣り、静かにするようにと告げる。そういえば夜半だったと思い返した有希は、これ以上喋らないようにと口に手を当てる。
不均等な足音が、絨毯越しにかすかに聞こえる。
「……いものを見られちゃったわね」
そうかすかに言った声は夜闇に溶け、有希の耳には入らなかった。
「？」
「なんでもないわ。ユーキ、外に居たの？」
こくこくと頷くと、水晶に照らされたリフェノーティスの顔が苦

笑に歪む。
「駄目じゃない。風邪引いちゃうわよ」
すぐ傍に来たリフェノーティスが、水晶を持っている手ではない方の手で有希の頬を触る。
「こんなに身体を冷やして。――私の部屋にいらっしゃい。温かなお茶を出すわ」
有希は手に持っていた水晶をすいと取られる。王宮の中に入ったはいいが、廊下も寒くて凍えそうだったので、リフェノーティスの言葉に甘えることにした。
リフェノーティスの部屋のある離宮は、それからしばらく歩いた。歩きながらリフェノーティスはどうしてあんな所に居たのか、先ほど部屋から出てきたセレナ――セレナは怪我をしていたはずなのに、もう動いて大丈夫だったのだろうかと考えていた。それから――リディーと呼ばれた男。
あの男は一体誰なんだろう。セレナの頬にキスをして、やさしく慈しむように微笑んでいた人。どこかで見たことがあるような気がするが、今ひとつのところで思い出すことができない。
そうこう悩んでいる間に、リフェノーティスの部屋に着いた。リフェノーティスの部屋は暖炉に火が灯っていて暖かかった。有希はソファではなく暖炉の前にちょこんと座り、炎のゆらめきを見ながらそのぬくもりの恩恵を預かる。リフェノーティスは茶を淹れてくるわねと小声で告げると隣の部屋に行ってしまった。別の部屋でエストが寝ていることを知っていたので、有希は声を出さずにリフェノーティスに向かって大きく頷いた。
ゆらゆらと揺れる炎に、自分の体温が徐々に上がっていくのを感じる。揺らめいている炎は見ていてとても綺麗だと思った。
どのくらいぼんやりと見つめていただろう。ぼうっとしている間にリフェノーティスはカップを一つ持って隣の部屋から戻ってきた。暖炉の前に座り込んでいる有希に笑みかけ、リフェノーティスも有希の隣までやってきて、有希と同じように座った。

「私もね、暖炉の炎が好きで昔よくこうやって暖炉の前に座り込んだわ。そうして何時間も何時間も炎を見つめて。薪が燃え尽きそうになったら放り投げて、またその薪が燃えていくのをじっと見つめて……母さまに『暖炉番ね』って笑われたわ。お陰で今でも火加減の調節はお手の物なのよ」

綺麗な顔でくすくすと笑い、リフェノーティスはカップを有希に差し出した。

「じゃぁ、あたし、リフェの弟子になろうかな」

有希もくすくすと笑って、カップを受け取った。カップの中の液体は濃い色をしていて、不思議な匂いがする。紅茶や花茶ではなく――どちらかというと日本茶の匂いに似ていたが、どこかつんと薄荷のような匂いもする。一口啜ろうとしたが、熱くて飲めなかった。仕方なくカップを両手で包み込み、またぼんやりと暖炉の炎を見つめる。

「――眠れないの？」

「うん。昼にね、いろいろ考え込みすぎたのかな。頭痛くなっちゃってさ、寝て起きたらこんな時間で、ぶらぶら散歩してたの」

「そう。……ごめんなさいね、大変な荷物を背負わせちゃって」

「ううん。きっと、あたしにしか出来ないことだろうから」

言って、ふとリフェノーティスの小屋での事を思い出した。そういえば、リフェノーティスは人探しをしていたのではなかっただろうか。それが原因でエストと喧嘩していた事を思い出した。

「リフェはもう、ずっとこの王宮に居るつもりなの？」

「えぇ。リビドム城に居た人はもう、あんまりいないから、あの小屋に逃げようと足掻いても、きっとまた連れ戻されちゃうわ」

「そうなんだ……探し人には、もう会えた？」

暖炉の火を見ながら問いかけると、リフェノーティスの視線を感じた。なんだろうと見ると、リフェノーティスが驚いたような顔で有希を見つめていた。そうしてしばらくして、その顔は穏やかに緩む。

「そうよね、ユーキは知ってるのよね……」
黙りこんだリフェノーティスは、ためらいがちに水晶を取り出して、カップを持った有希の前に差し出した。水晶の中はいろいろな色がぐるぐると蠢いていたが、やがて人の形に近づいていく。
「私が探していたのは、この人なの」
その人物に、有希は息を飲み込んだ。
「……パパ」
そこに映った人物。肩にかかりそうなほどの髪を後ろで束ね、紫の瞳をたたえて微笑んでいたのは有希の父親、快斗だった。有希の記憶の中よりも若くて髪も長いが、間違いなく有希の父親の姿だった。
「やっぱり、ユーキの父さまなのね。カーン様は」
有希はリフェノーティスを見て、それからまた水晶の人物に視線を注ぐ。
「これが、カーンさま……」
「私が探していたのは、この方なの。――ユーキの父様は、遠いとこにいるんでしょう？　私では手の届かない所に」
有希が言葉を見つけられずにぎこちなく頷くと、リフェノーティスはふわりと微笑む。
「だからもういいのよ」
「そっ……か」
どことなく気まずい空気を誤魔化すように、カップに口を付ける。まだ少し熱かったが、冷えた身体にはじんわりと効く。
「明日、もう今日なのかな。……言うからね」
言って、またごくごくと茶を喉に通す。また胃に暖かさが広がる。その暖かさに背中を押され、また言葉が出る。
「ごめんね、ありがとう。何も聞かないでいてくれて。――――ちゃんと、決めたから」
「……そう。ありがとう」
「うん」

また、言葉が途切れてしまった。
「あ、そういえば。さっきのひ……と」
先ほど、セレナと会っていた男。あれは一体誰なのだ。そう聞こうと思ったのに、突然睡魔に襲われて、有希の意思とは関係なく瞼が落ちる。意識にも暗闇が広がる。
「な、に？」
驚いて声をあげる。身体も自分を支えられなくて倒れこみそうになる。それを力強い腕が肩を掴んで支える。力の入らなくなった手からカップが滑り落ちた。耳に、カップの落ちる音とリフェノーティスのやわらかな声が入る。
「だいじょうぶよ……きっと疲れているんだわ。ゆっくり眠るといいわ」
（疲れてる……そうなのかな、そうかも）
闇に侵食された頭はうまく動かずに、リフェノーティスの言葉を素直に受け取った。そうして有希は落ちるように意識を失った。
「……ごめんなさいね。でもあなたに害があるようなことは一切しないから。……あなたは何も知らないでいいのよ。あなたまで苦しむ必要はないの」
その声は震えていたが、深い眠りに落ちた有希はそれに気付かなかった。
そしてしばらくして、有希の指輪が淡く光り始めた。

131

意識の深淵からすぅっと引き上げられる。耳に小鳥のさえずりが入る。それから、部屋に差し込む朝日の明るさも、瞼を通して有希に伝わる。

「ん……」

眠気は有希に絡みつくようだった。意識は覚醒しているが身体はどこか重く、瞼を開くのを拒むようだ。

（朝……起きなきゃ）

わかっている。起きなければいけない。そして今日は大事な日なのだ。

「――――っ！！」

突然目がばちりと開く。慌てて身体を起こす。

「そうだ、あたしっ」

そこまで言って、ぱちぱちと目を瞬かせた。

「……あたし。あれ？」

何か重要な事があったはずなのに、それが何なのかわからない。そもそも、重要な事があったのかすらよくわからない。よくわからないが、違和感だけが有希の中にしこりのように残っている。

「……あれ……」

違和感のありかを探すように辺りを見回すが、そこは有希の宛がわれた部屋で、ベッドサイドには昨日と同じように――服は違うが、着替えが置いてある。

「いつの間に寝てたんだろう……」

昼間にルカと庭を散歩したのは覚えている。それから、部屋に篭って考え事をしていたら頭痛がしてきたこと。少し休憩だと言って仮眠をとったことまでは覚えている。

だとすると昨日の昼過ぎからずっと寝ていたということになる。

けれど、その間に何かがあったような気がする。起きていた筈な

のだ。
「夢でも、見てたのかなぁ……」
なにかとても気になるのだが、微塵も思い出せそうにない。
仕方ない。そう自分に言い聞かせ、起き上がって洗面器に水差しの水を入れ、顔をばしゃばしゃと洗った。
着替えをしてから洋間への扉を開くと、部屋には既にルカが居て、ソファに座っていた。
「おはよう」
「あぁ」
振り向いたルカに何故かじっと見つめられた。なんだろうと首をかしげ、そういえばルカなら有希が昨日何をしていたのか答えてくれそうだと思った。
「ねぇルカ。あたし、昨日ずっと寝てたの？」
「……なぜだ？」
「なんか……起きていたような気がするんだけど、全く覚えてなくて」
「夢だろう。――寝すぎて夢と現実を混同したか？」
「……やっぱり、ずっと寝てたんだ」
はぁっと一つため息を吐き出す。すると扉を叩く音が聞こえて、次いで侍女から食事を運んできたと告げられた。はぁいと返事を返すと、今度はルカがため息を吐き出した。
「……お前も、俺と同じ部屋になった理由を少しは考えろ」
ため息まじりに言われたが、それが何を指すことなのかわからなかった。
「ルカと、同じ部屋になった理由？」
首をかしげると、ルカはもう一度ため息を吐き出して、苦い顔をした。それと同時に扉が開き、朝食が運ばれてきた。

朝食後、会議の時間までの少しの猶予を、有希は散歩にあてていた。白い息を吐きながら、城の古ぼけた庭を歩き回る。その姿を後ろから、無言でルカが着いてくる。
――本心をいえば、リビドムも、この世界も、全て何とかしてからあちらに帰りたい。
けれどもそれはとても都合の良いことで、そうできないことは分かっている。
リビドムの王女になると言ったその口で、日本に帰るだなんて口にできない。けれどもリビドムの民は、有希を――王女を求めている。
（ルカはあたしの思うようにしたらいいって言ってくれたけど……）
それはとても自分勝手なもので、皆に迷惑をかけてしまうのは必至だ。
でも。だけど。やっぱり。色々考えても、どの結論の後に必ずその言葉がまとわりつく。どう考えたって行き着くところは同じなのだ。――なぜだかもう、心の中では決まってしまっている。
はぁっと息を一つ吐いて、自分の心に気合いを入れる。もう心の中に決まってしまっている気持ち。それを皆に伝える言葉、勇気を蓄えたい。
有希は立ち止まって、くるりと振り返る。ルカも立ち止まり、どうしたとでもいうような顔を有希に向けている。
「ルカ、あたし、みんなに酷いこと言うかもしれない。酷いこと、やるかもしれない」
ルカの仏頂面は相変わらずだけれども、少しだけいぶかしげだ。
「それでも、あたしの味方で居てくれる？」
しばらくの沈黙の後、ルカは有希を小馬鹿にしたように鼻で笑った。
「昨日言っただろう。お前が何を選ぼうと、願いを聞いてやると」

昨日と同じ時間、同じ場所でまた会議が始まった。昨日と違うのは、セレナとヴィーゴの姿が見えない。
有希はやはりどことなく居心地の悪い感覚が拭えないでいた。昨日は考え込みすぎて頭痛までしたというのに、それから何も考えたりしていないのに、有希の気持ちは不思議と決まっていた。そこもどこか不気味だ。
「――昨日よりすこし人員が減っておりますが、始めたいと思います」
リフェノーティスの声が響き、ぴりぴりとしていた空気がより緊迫する。
「まずは……ユーキ様のご意思を聞かせて頂きたい」
瞬間、皆の視線が遠慮なく突き刺さる。
（あたしの、意思）
有希は胸の前で右手を握りこみ、それから視線を上げた。
「あたしは、やっぱり戦争には反対。十日熱の調合の仕方とか材料とか、そういうのと取引してでもいいから、今の関係をなんとかして欲しい」
それから、一息ついて唇を引き結ぶ。
「それが、あたし。……リビドムの王女としての、命令です」
もともと静かだったその場に、更に緊張が走った。
「あたしが物を知らないのは知っています。リビドムの事も、この世界の歴史も全然知らない。でもあたし知ってるの。知ってるんです、マルキーの王子達を。この中の人達で知っている人も居るかもしれない、接したことがあるかもしれない――パーシー王子。彼はリビドムが酷い扱いを受けていることに心を痛めていた。そのお兄さんのパティも……とってもやさしい人だった。そんな二人が居る国が、話を聞いてもらえない訳ないと思うの。きっと、きっと理由があると思うの。話せばわかってくれると思うの。……そんなあたしが言うのもおこがましいけど、やっぱり戦争は嫌」
そこまで言って黙りこんでいると、沈黙を破ったのはガリアンだ

った。
「……よく、ご決断くださいました」
はっと顔を上げると、ガリアンは有希に笑みかけていた。
「今、王都に来ている人間たちは皆、マルキーへの憎しみと怒りで滾っています。それこそ、私達老人が何を言っても止まらぬ勢いで」
ガリアンは一息吐くと、言葉を続けた。
「ユーキ様はご存知ないかもしれませんが、その色の瞳は、常人とは違うものを見ると言われております。ご自身は普通だと仰るかもしれませんが、その普通というものが私共と違うのです。――それが、リビドムの王たる資質であるのです。だから小国ながら、リビドムは生き長らえてきたのです。その資質を持つ貴方様がマルキーを攻めるのをやめろと仰るなら、皆言うことを聞くでしょう」
「つらいことを押し付けてしまって、本当にごめんなさいね」
リフェノーティスがそう言って微笑む。その笑みはどことなく力がなく、目の下にはうっすらと隈が見えた。
「では、マルキーに進軍ではなく、交渉という形から入って行きたいと思います――」
そう告げると、会議は誰が行くか、どのようにマルキー王家と連絡を取るかという話に変わっていった。
（ごめんなさい）
有希は心の中で呟いた。

132

会議が終わった。アインははぁと息を吐き出して、とぼとぼと歩く。

結局、マルキーに向かうのは有希とルカ、それ以外はリビドムの人間で向かうこととなった。

せめて、ルカの側近であるアインとナゼット――武官であるナゼットだけでも同行させたかったのだが、それは叶わなかった。

「はぁ、何の為にアドルンドから来たんだか……」

アインは家から出ることを固く拒まれた――自分は落ちこぼれだというのに、優秀な兄姉が居るのに、それこそ異様な程にアドルンドに留まるように言われ、言うことを聞かないならばと拘束されそうになったが、ギィスの協力によってからがら家を飛び出して来れたのだ。

それなのに。

「はぁ」

もう一度ため息がこぼれる。

リビドムの人達は皆、とても良くしてくれる。けれどもどこか痛々しいその姿に、アインは心臓が痛むのだ。

この人たちの為に何かできることがあればいいのに。そう思っても、願いは叶わなかった。

「まぁ、僕が行ったとしても、大した事はできないのかもしれないけど」

ルカには留守を頼むと言われてしまったので、それはそれで良いのかもしれない。ルカから信頼されていると思って良いのだろう。

「あの人は、本っ当に何も言わないからなぁ……」

きっと今も、アインに教えていない事が沢山あるのだろう。神妙な顔つきの有希と話をしているのを数度見掛けた事があるし、その時うっかり話をかけてしまったら、ルカは何事もなかったかのよう

に振舞ったが有希が不自然に笑顔を向けていたので、きっと何かあるのだろう。
（すべてを教えてくださいとは言いませんけど、ちょっとは頼って下さいよね……）
心の中で毒づいて、アインは苦笑いを浮かべた。
「一方的すぎるなぁ。……僕だって言えない事、あるのに」
伸びて余計にぼさぼさしてしまっている前髪をくしゃっと掴み、苦いものを飲み下すように耐える。
（考えるな、考えなければ大丈夫）
あぁ、あぁ。心が苦しい。
こんなときは彼女の声を、歌を聞きたくなる。――あの歌を聴いている時だけ、自分自身を確かめられるような気がするのだ。
「っ」
そんなことを考えても彼女はここには居ないのだ。
けれども、生きていた。
また、会うことができるかもしれない。
（考えるな、考えるな）
部屋へ向かう道中、侍女とすれ違う。侍女は会釈を一つするとはっとした顔でアインを見返した。
「……っアイン！」
「え？」
聞き覚えのある、鈴のような声。欲して欲して仕方のなかった声。
まさか。
こんな所で会うはずがない。
けれどもそこに佇んでいたのは、紛れもなく、アインの幼馴染、ティータだった。
「……どうして」
「私は、リビドムの人たちが来て、人が足りないって聞いたからお手伝いに。――アインこそ、どうしたの？　顔色が悪いわよ？」
途端に、涙腺がぶわりと存在を主張しはじめる。堪え切れなくて、

アインはぼろりと一筋涙をこぼした。
「――――っ」
慌てて涙を拭ったが、ティータにはばれてしまっていて、微笑まれてしまう。
「相変わらず泣き虫なんだから。――何かあったのね？　お茶でも淹れるから、アインの部屋へ行きましょう？」
どこにあるのと聞かれ、こっちと鼻声で言って、やっとアインは歩き出した。
もう、と微笑んでティータがハンカチを差し出す。受け取ってアインはそれでもう一度零れ出た涙を拭う。ずずっと洟をすするが、涙は止まってくれそうに無かった。

ティータはアインの部屋を確認すると出て行き、紅茶の用意をして戻ってきた。
ぐずぐずと洟を啜り続けるアインを尻目に、紅茶を淹れて、アインの前に差し出して、アインの向かい側に座る。アインはそれを受け取ると、一口啜る。鼻の通っていない状態でよくわからないが、それがアインの好きな薄めの紅茶だということだけはわかった。
「会議があったのよね。――何かあったの？」
違うと首を振り、かといって『きみと逢えたから』だなんて恥ずかしくて口が裂けても言えない。
（そんなの言えるのは、ラッドル・メンデくらいだ）
しかし、これといった嘘も思いつかない。どう言おうかと考えていたら、察してくれたのか、ティータはいいわよ、と言った。
「言いたくないようなことなら聞かないわ」
そう言うと、アインをじっと見つめ、ぷっと吹き出す。
「それにしても、本当にびっくりしたわ。アインったら突然泣き出すんだもの。――その泣き虫、直しておいたほうがいいわよ」

くすくすと笑われながら言われているのに、ちっとも悔しくなくて、でもそれが悔しくてたまらない。
「なっ！　あそこにティータが居なければ、別にっ……」
「それはそれで隠れて泣くんでしょう？　もう、本当にアインは変わらないわね」
（ちがうんだ）
ぎくりと身体が強張る。
（もうあの頃とは、違うんだ。変わらないのは――ティータ、君の方なのに）
自分の分も淹れていたティータが紅茶を啜っている。カップをソーサーに戻すと、思い出したようにぱあっと顔を輝かせた。
「そうそう、私ね、リビドムに居る間にね、町で子供たちに歌を教えているの」
「……へぇ」
「それでね、今度発表会をするんだけど、アインも是非見に来てくれる？」
きらきらと輝くような笑顔を浮かべたティータが、来てくれるわよね、と念押しするように首をかしげる。その仕草が可愛くて可愛くてたまらない。
行く、と素直に言えたらいいのに、言いたいのに、アインは手放さなければならないのだ。
心の奥の濃い血が騒ぐ。
「……アイン？」
「すみませんけど、そんな暇ないから」
吐き捨てるように言うと、ティータは一瞬傷ついた顔をし、取り繕うように笑う。
「そ、そうよね。アインだって会議とか、これからのこととかで忙しいのにね。私ったらバカね」
ごめんなさいね、とカップを持って立ち上がるティータの声が震えている。

何か言わなきゃいけないのに、言いたいのに。言葉は見つからず、見つけられたとしても、アインはその言葉を口には出来ないのだ。
「それから、申し訳ないけど、まだ仕事が残ってるから」
遠まわしに出て行けと伝える。その言葉にティータの肩がぎくりと強張るのが見えた。
「わ、私も、他にまだ仕事残っていたから行くわね。紅茶、後で片付けに来るから、食器そのままにしていて。――じゃぁ」
震える声で言いながらそそくさと自分のカップを片付けると、ティータは声も出さずに部屋を出て行った。
――木製の床、ティータが歩いた辺りに水滴がぽつり、ぽつりと落ちていた。
その跡を見ながら、アインは紅茶を飲み干した。
「……これでいいんだ」
アインはカップをぎゅっと両手で包み込み、自分に言い聞かせるように目を閉じる。
欲しいと思ってはいけないのだ。欲しいと思ったら、彼女を傷つける以外の想像が見つからないのだ。
「だから、これで良かったんだってば……」
ほろほろと零れる涙に言い聞かせる。
「ティータ……」
鈴のような声で歌う、鈴のような声で笑う。
決して欲してはならない。

133

宿舎に戻ると、ナゼットの部屋の前で蹲っているティータの姿を見つけた。
「ティータ？」
のっそりと近寄り、ひっそりと声をかけてやる。
「お兄ちゃん……」
目を真っ赤にしたティータの顔がくしゃりと崩れ、ティータはナゼットの胸に飛び込んでくる。
声を殺してひぃひぃ泣くティータに困惑したナゼットは、とりあえずティータを抱え起こして片手で抱き上げ、部屋の中へと入れた。
「おう、どうした？」
ソファに座ったはいいが、ティータはナゼットの膝の上から離れず、ナゼットに抱きついたままだ。
ナゼットはティータの背中に回した手でとんとんと宥めるように叩く。ティータはそれに促されるように、時折ぐずりと洟を啜った。
「兄ちゃんとしては役得だがなぁ……なぁティータ、何があったか言う気はないか？　言うだけで楽になるぞぉ？」
そう言ったけれども、大体の理由は心当たりがあった。あった、というよりも、ティータを泣かせる程、ティータに影響を与えられる人間なんて限られている。
「別に昔みたいに殴りこみになんて行かねぇから安心しろって。アインとまた喧嘩したのか？」
ぎくりと震える肩に苦笑いを浮かべ、とんとんと背中を叩く。
「違うわ……喧嘩、なんか、してない」
「おぉ、そっかそっか。――んじゃぁ、どうしたんだ？　ん？」
宥めるように、甘やかすように聞くと、ティータはしばらくぐずぐずと黙り、拗ねるように言った。
「……ルカ君は昔からだったけど、みんな、何も教えてくれないの

よ。苦しそうなのに、辛そうなのに、どうしたのって聞いてもなんでもないって答えるのよ。――私が何も出来ない子供だっていうことはわかっているわ。でも、話を聞くくらいできるのに、心配くらいできるのに。――どうしてさせてくれないのよ」

そう言うと、ナゼットの胸元に押し付けていた顔を上げて、ティータは逼迫した顔で言う。

「ねぇお兄ちゃん、何かあったんでしょう！？」

白い肌を真っ赤に染めて、涙目で上目遣いをされてぐらりと頭が煮えそうになったが、ナゼットは自分を叱咤して、誤魔化すように頭を掻いた。

「ん、あぁ……まぁな」

「またそうやって誤魔化して！　そうやって誤魔化すようになるのが大人になるって事なの！？　なら私、大人になんてなりたくないわ！」

あぁ、怒った顔も相変わらずかわいいなぁ。

そうやって怒れる事は貴重だと伝えてもきっと、可愛い可愛い妹は「また誤魔化して」と怒るのだろう。

むっとした顔を浮かべたまま、涙をぽろぽろとこぼすティータの涙を拭い、ナゼットはどうしたものかと苦笑する。

「今日の会議の内容でな……まぁ、俺もアインも歯がゆいものを感じているっていう事だ」

「なら、どうして言ってくれないの？」

「まぁ、アイツにも色々あるんだろう。最後まで食いついていたのはアインだったからなぁ」

「だからって……あんな言い方は酷いわ……」

これは後で何を言ったのか、アインに問い詰めなければならないなぁと内心でひとりごち、再び首に絡み付いてくるティータの腕に、されるがままに抱き寄せられる。

（そうやって、俺にだけ甘えてくれ）

例えその心に棲む人間が自分ではなかったとしても、それくらい

は願っても罰は下されないだろう。
「アインも機嫌が悪かったんだろう。許してやれって」
口から出る言葉と裏腹の気持ちに、また苦笑いを浮かべる。
「……それから、嬢ちゃんにはもう会えたか？」
「ユーキ？　まだ、会ってないわ」
「そっか。なら、早く会っておいた方がいい。……明日、マルキーへ発つ事が決まった」
ティータが息をのむ。顔は見えないが、その顔が相好を崩していくのがわかる。
「……いやよ、いやよいやよ！！　またユーキが危険な目に遭うの！？　またユーキがっあんなに小さな子がっ」
ぶんぶんと首を振ると、ふわふわとした栗毛がナゼットの顔を、首を、くすぐるように、撫でるように触ってゆく。
『そうやって誤魔化すようになるのが大人になるって事なの！？　なら私、大人になんてなりたくないわ！』
今先ほど、愛くるしい妹が発した言葉が脳裏をぐるぐると巡る。
（大人にならないでくれ）
ティータの背中に手を回し、またぐずぐずと泣き始めたティータを宥めるように、背中をとんとんと叩く。
大人になってしまったら、ティータをこうやって慰めるのは、自分ではなくなってしまう。ティータの泣き顔を見るのも、慰めるのも、ナゼットにはできなくなってしまう――絶対、自分ではない男だ。
もう一方の手もティータの腰にまわす。壊れないように壊れないようにと細心の注意をしながら、ぎゅっと抱きしめる。
（大人になんか、なるな）
こんな風に、ずるくなる。
こんな風に、嘘が上手くなる。
こんな風に、情けなくなる。
こんな風に、動けなくなる。

（いつまでも、俺の腕の中に居てくれ……ティータ）
十五年前に見つけてしまった、小さな小さな女の子。
それは――ナゼットの狂おしいほど恋しい、大きな大きな存在の神様だった。

馬車が一つ、リフェノーティスに背を向けて走っていくのを見送った。
「……でも本当にいいのかよ。ユーキに言わなくて」
リフェノーティスに並んで見送ってくれたのは、セレナの弟子であり、リフェノーティスの家族である、エストだった。
「いいの。今のあの子にこれ以上余計な情報を与えたくないの。……しかもこの事については、彼の騎士も了承してくれたわ……」
「あぁ、あのちょっとスカした奴な」
「スカしたって……彼、一応アドルンドの王族よ？」
「いや、王族だろうがなんだろうがスカしてんだからスカしてんだよ。――リフェ、ああいう奴嫌いだろ」
「一体なにがどうやったらそういう思考に飛ぶの？」
「同属嫌悪ってヤツ。アイツ、リフェにちょっと似てっトコあるよな」
「――――そうかしら」
言って、寒そうに首をすくめるエストに、自分の襟巻きを解いて首に巻く。エストはくすぐったそうに首をすくめて、それからまっすぐリフェノーティスを見上げた。
「そう。自分の認めた人間以外は絶対信頼しませんっていう目をした、スカした奴。リフェはトシの功かわかんねぇけど、あんまり顔に出さないけど、アイツ超わかり易くね？」
少しどきりとしたが、そ知らぬふりであら心外と言う。
「トシトシ言わないでくれる？　結構気にしてるんだから」

「っは！！　うっそくせぇ！！　――――見えなくなっちまったな。寒いし、行こうぜ。俺も夕飯の仕込みしなきゃなんねぇし」
　言うと、エストはくるりと振り返って、王宮に向かって歩いていってしまう。
『自分の認めた人間以外は絶対信頼しませんっていう目をした、スカした奴』
　エストの言葉を反芻し、リフェノーティスは苦笑いを浮かべた。
「確かに、そっくりだとは思ったけど、まさかそれを人に言われるとは思わなかったわ」
　エストの少し後ろを歩きながら、昨晩の出来事を思い返していた。
　――有希に茶を飲ませた直後に、有希の指輪は淡く光り始めた。有希の騎士が有希を探しているのだとすぐにわかった。
　リフェノーティスは苦笑いを浮かべて、有希をソファに寝かせて、隣の部屋から持ってきた毛布を掛けた。
　と、同時に、リフェノーティスの部屋の扉が開く。その外側に居たのは、白刃を抜いたルカだった。ルカは暖炉の前に転がるカップを一瞥すると、リフェノーティスを睨みつけた。
「ユーキから離れろ」
「少し遅いわね、不合格」
　ふふっと笑って言うと、険しい顔をしたルカが一歩、リフェノーティスに近づいた。
「だめよ、そんなこと言っちゃ。――私が今すぐ、ユーキの首を絞めて殺しちゃったらどうするの」
「アンタはそれはやらない」
「あら、どうして？」
「紫の瞳に囚われているからだ。アンタにはユーキを殺せない」
　リフェノーティスはそんなことを言われると思っていなかったので、驚いて目を見開いたまま、ルカを見るしかできなかった。
「ユーキに何をした」
「……何もしていないわ。ちょっと、見られたくないものを見られ

ちゃったから、記憶を混濁させてもらったの」
「見られたくないもの、とは？」
詰問口調のルカに、リフェノーティスは小さくため息を吐き出した。
「とりあえず、お寒いでしょうからその物騒なものを仕舞ってユーキの隣にでも掛けたらどう？　お茶を淹れるわ」
「俺に毒物は効かないぞ」
「ええ、十分に承知しているわ――アドルンドの、不死身の王子様？」
そう嫌味を言ってから、茶を淹れて事の顛末をルカに話し、有希を渡したのだった。
「貴方が協力してくれるだなんて思わなかったわ、有難う」
「――協力するんじゃない。コイツに負担だと思ったから、俺も話さない。それだけだ。コイツが知りたがったら言うかもしれん」
「その判断は貴方に任せるわ。――でも本当に、有難う。貴方は誰も信頼しないと思っていたから、私の話を聞いてくれて正直驚いたわ」
「……それは、アンタも一緒だろう。アンタも信頼している人間以外には心を開かない。――そんなアンタがコイツを想って言った事だ。心に留めて何が悪い」
思い出して、リフェノーティスは少し眉をひそめた。
「……いやだ、ちょっとあの王子様、思ったより性格が悪いっていうか、性悪よね……」
「リフェ！！　ちょっと手伝え！！　今日城下から届いた荷物運びたいんだよ！！　どうせ暇だろ！？」
いつの間にか遠くまで歩いていたエストが、ぶんぶんと両手を振ってリフェノーティスを呼んでいた。
「暇なんかないわよ！！　一番エストがわかってるでしょう！！」
「はははっ！　いーじゃんか、たまにはカラダ動かさねぇとなまんぞっ！」

「もう……」
この後、まだやることが沢山あるのに。
それでもきっと、リフェノーティスはエストの手伝いをするのだろう。エストの不器用な気遣いが嬉しくて、この後の予定なんてどうでもいいと思ってしまったのだ。

134

夕食後、荷造りをしなければと部屋で荷物を広げていると――アドルンドから持ってきた荷物はごく少ないものだったのに、あれやこれやと『ユーキ様のものです』『これも、ユーキ様は必要でしょうから……』と、渡されてしまい、いまや何を持っていけばいいのかわからない状態で立ち尽くしていた。

それこそ誰かに相談したいが、一体誰に相談したら良いのかすらわからない。ましてやルカになんて聞けるはずがない。『替えの下着はいくつ持っていけばいいだろう』だなんて。

「……はぁあああああ」

ベタに一週間分でも持っていけばいいのだろうか。それとも有希も有希の服もコンパクトだから二週間分持っても大差ないのではなどと下らない事を考えてしまう。

「だって……コレはないでしょ」

部屋に広げられたいっぱいの服、服、服。装飾品は置いていくとして、どの服をいくつ持っていけばいいのかなんてわからない。けれども他人に用意されてしまうのも心もとない。

一つため息をこぼして、有希は現実逃避の為に部屋から出ることにした。

寝室からつづいている洋間には、いつでも紅茶を飲めるようにワゴンが置いてある――制止されたが、リビドムの人間が少ない事を思って有希が無理矢理置いてもらったのだ。紅茶を飲みたいと思うたびにわざわざ人を呼ばなければいけないというのが申し訳なくて仕方なかった。

有希は水差しから鉄瓶へ水を入れ、ミトンを嵌めて鉄瓶を暖炉の中に置いて鉄棒で押しやる。湯が沸くまでの間にポットに茶葉を用意する。数種類用意された茶葉のうち、どれが良いだろうと悩んでいると、扉が開き、ルカが入ってきた。

「あ、ルカ。ルカも紅茶飲む？」
ルカは有希の姿を見ると一瞬眉をひとめた。
「……支度はもう出来たのか？」
「えっと……ちょっと、休憩」
呆れたようにため息を吐かれた。
「……ティータがお前に逢いたがっていた。後で手伝って貰え」
そう言うとルカは帯刀していた剣を外し、ソファに座った。紅茶を飲む、という事で良さそうだ。有希はカップをもう一つワゴンから取り出した。
（ホントに、言葉が少ないよなぁ）
アドルンドからリビドムに来る間に、やっと『ルカ』という人間が少しずつ分かってきたような気がする。
相変わらず何を考えているのかよくわからないし、ルカの言うことが分からないことも多い。けれども、ルカが有希に対してとても誠実に接してくれていることはわかった。
鉄瓶の中から、湯が沸騰している音が響く。ミトンを嵌めて、鉄鉤で鉄瓶を引っ張り出し、暖炉の側に持ってきていたカップに湯を注ぐ。茶葉が舞い上がり、ゆらゆらと舞い落ちるのを確認して、ポットの蓋をしめる。蒸らしている間に道具を片付け、茶を淹れ、カップをルカの前に一つ、その向かいに一つ置いて有希もソファに座った。
有希はルカが砂糖を次々とカップに入れるのを見ながら、両手でカップを持ち、ふぅふぅと息を吹きかける。ルカがカップをかき混ぜる時に砂糖がザリザリと音を立てながら溶けていく様をぼんやりと見つめる。視線に気付いたルカが、文句でもあるかという顔で有希を見る。
「……あんまり入れすぎると、いつか病気になっちゃうよ？」
「そんなものにはならん」
「どうして？」
ふ、とルカが鼻で笑う。

「お前と契約してるからな」
「……そういう問題なの？」
「そういう問題だ」
「じゃぁ、大丈夫だね」
言って、なんだか可笑しくて有希はくすくすと笑った。けれどもルカはぴくりとも笑わず、相変わらずの仏頂面だった。それもどこか緊張感のある顔つきだった。それにつられて、次第に有希からも笑みが消える。
「お前が……」
言って、ルカは紅茶を一口啜り、カップを戻してもう一杯砂糖を入れた。
「お前が決めた事に異論はない」
「……うん」
有希も一口紅茶を啜る。まだ少し熱かった。
「だが、一つだけ言いたいことがある」
「……なに？」
紅茶をかき混ぜるルカの手が止まる。
「決めたのなら、迷うな。迷いは人を弱める」
「……うん」
「それが一時の偽りだったとしても、お前以外の人間からしてみれば、真実だからな」
「！！　なん……で？」
「お前の考えそうな事だからな――『自分よりも他人を優先させる』いつか、ティータもそんな事言ってたぞ」
どきりとした。それと同時に、疑問が湧き上がる。
（それでもルカは、あたしの味方で居てくれるの？）
その言葉が紡がれない。こわくて聞けない。
（どうして？）
何かを取り繕うように紅茶に口を付ける。
（わかんないよ……）

ルカも、何事も無かったかのように紅茶を飲んでいる。
（でも、うん）
「……決めたから、もう迷ったりしない」
「そうか」
ちらりと視線を有希に向けたルカはまたすぐに紅茶に視線を落とした。

日中でも息が白くなるほど、寒さは厳しくなってきている。
有希はもこもことしたストールをポンチョのように着込んでいた。袂を手繰り寄せ、ぎゅっと掴む。
今回の遠征は、皆乗馬している。人数も十数名ばかりで、少数精鋭といった感じだ。アドルンドから来た人間は、有希とルカ以外居なかった。セレナもヴィーゴもリフェノーティスも居ない。心細いと思うのは、きっと寒さの感傷からだけではない。
「姫様」
長い黒髪がさらりと揺れる。振り返ると、トウタが白い息を吐き出しながら立っていた。
「お辛くはございませんか？」
休憩時間が終わるのだとわかって、有希は座っていた倒木から立ち上がる。
「うん、大丈夫」
「これから傾斜が厳しくなります。格段と冷えるので、防寒してくださいませ。あ、何でしたら私のをお貸ししましょうか？」
「ううん、平気だよ。ちゃんと持ってきてるから」
姫様、という言葉に内心苦笑いを浮かべながら、笑み返す。
「気遣ってくれてありがとう」
「い、いえ」

寒さからか、トウタの頬は少し赤らんでいる。
ルカ以外の人間で知っているのは、トウタと、夏に国境で出会った人が数人といった程度だった。トウタはよく有希の事を気遣い、こまめに声を掛けてくれる。
初めて出会った時と扱いが大分違い、姫様と呼ばれる度に小さな小さな棘のようなものが突き刺さったが、それでも微笑んでいられる程には慣れた。
「本日中にもう少し登り、明日で山を一気に越えます。――明日は厳しいものになります。どうぞ今日はご無理をなさらぬようお気をつけ下さい」
それにも微笑んで礼を言うと、トウタは有希の後ろをちらりと見遣ってから頭を下げ、行ってしまった。
振り返ると、馬を引いたルカが来ていた。
「行くぞ」
「うん。――あ、荷物の中から耳当て取っていい？　これからもっと寒くなるんだって」
「……そうだな」
言うと、馬から荷物をとるでもなく、ルカはじっと有希を見つめる。
「？」
なに、と問いかけると、ルカはため息を一つ吐き出して、荷を解き始めた。

135

冷たい風が吹きすさぶ。日毎寒さは厳しくなり、比例するように空は高くなる。
ナゼットは誰も居ない騎士宿舎の鍛冶場で槍の切先を外し、研磨に勤しんでいた。――魔物を切りすぎた為、刃こぼれが酷い。
「こりゃぁ、換えないと駄目かもしんねぇなぁ」
砥いでも砥いでも、こぼれた刃が綺麗になることはなさそうだ。
「しっかし、この国のヤツらが武器分けてくれっかなぁ。そもそも、職人が居るかどうかもわっかんねぇもんなぁ」
どうしたものかと頭を掻いていると、すいと刃を細い手に奪われた。
一瞬、何が起きたのかよくわからなかった。
騎士宿舎は、リビドム城の復旧活動の手伝いを自発的に行っている為、皆出払っている。
そもそも、誰かが居るという気配すら感じられなかった。
「こいつぁもうダメだな。――しっかしよくもまぁ、こんだけボロボロにしてくれたなぁ」
見ると、褐色の肌、橙色の瞳を持つ女がナゼットの刃を空に掲げ、しげしげと見つめている。頭には頭巾を被っており、髪の色は見えない。
自分以外で褐色の肌を持つ人間を見たことが無かったので面食らう。けれども相手にばれないようにと取り繕って笑う。
「……ネーチャン、どっから入ってきたんだ？」
「どっからって、アタシが聞きたいね。アンタ、アタシの領土でナニしてんだい？」
ぎらりと睨まれる。橙の瞳は冷たく光る。
「ナニって、みりゃぁわっかんねぇか？　武器の手入れだよ、手入れ」

「手入れ、ねぇ。アタシにゃ無駄な足掻きにしか見えないけど？」
女がにやりと笑う。好戦的な表情がひどく似合う女だと思った。
「なんなら、ネーチャンが俺の武器の手入れしてくれんのか？　ココ、ネーチャンの領土なんだろ？」
はっはっはと大仰に笑って見せると、女は酷く楽しそうに笑った。
「アンタ、アドルンドから来たっていう騎士だろ？　アタシが協力すると思うかい？」
「そうだなぁ。協力してくれたらありがてぇなぁ。オレ、コイツがねぇとなんもできねぇからなぁ」
間延びした声で言うと、女はハッと笑った。
「同郷のよしみだ。安くしてやるよ」
「同郷？」
そう言うと女は頭巾を取った。短い山吹色の髪が現れた。
「アタシは城に仕える鍛冶屋の跡目だ。親父は姫サンが戻ってくる前に死んだ――名前は？」
「ナゼットだ。ナゼット・リベラート」
「別に、アンタの名前なんか聞いちゃいないよ。アタシはこの子の名前を聞いてんだ」
女が手に持った刃をちょいと持ち上げて、にやりと笑った。

刀を新たに作る為には、その人の本質を知らなければならない。そう女が言った。
どこがどうなってそうなったのか良く分からないが、二人は鍛冶場に腰掛け、見極めという名の雑談をしていた。
そこでナゼットが知ったのは、自分の出身地の事だった。リビドムの山の麓、一番雪の深い辺境の村だと思っていた。
「違う？」

「っそ。アタシ達は元々リビドムの北、海向こうの常夏島の住民さ。――もっとも、二十年以上前に滅んだけどね。きっとアンタが住んでたトコは逃げ出した人達が避難した場所だったんだろうよ」
「滅んだって……ナニがあったんだ？」
「さてね。理由は多岐あるかんね、アタシ達の技巧を妬んだ同業か、別国か、マルキーからの宣戦布告だったか。今となっちゃ闇の中さ。なんせ、何も残らなかったかんね」
「何も残らなかったって、んなわけねぇだろう」
「……アンタ、自分の村がどうなったか覚えてるかい？」
思い返す。初めて騎士称を手に入れてティータと契約し、寄宿舎に戻る前に寄った、消えたという村。
「なんもかんも、焼けちまって何も……って！！」
「っそ。なんもかんも焼けちまった。家も船も人も何もかもな。――逃げる場所も無いあの島は、さぞ攻め易かっただろうな」
遠い目をして笑う女に、ナゼットは何か苦いものがこみ上げる。
「自分の故郷だっつぅのに、随分他人事のように言うんだな」
「……」
女はナゼットを見て、声をあげて笑った。
「アンタ、青いな」
「……どっちかっつぅと、そう言われる年代はもう過ぎたと思うんだが」
「いやいや青いさ。だがその青さが良い」
ふ、と橙の瞳が眇められる。目尻にごく小さな皺が寄る。
「――アタシは、あの島のモノを手にしているからな」
「モノ？」
女が傷まみれの手を慈しむように眺めている。
「そう。あの島の技術、鍛冶さ。あの島特有の鍛冶を、アタシはオヤジから受け継いだ。アタシが作っていくモノは全て、あの島の思い出だからさ。――それに、アンタもアタシも生きている。そうして同郷だってすぐわかる方法だってある」

「この、肌か？」
「そうさ。この土色の肌を持つ人間は、皆あの島の血筋さ――アタシがアンタに会えたように、まだこの世界には島の人間が居るだろ。それに、過去ばっかり見てたって腹は膨れねぇし、リビドムが戻ってくるんだ。なのにこれ以上高望みしたら罰が下るってモンだろ？
え？」
「……言われてみれば、そうだなぁ」
「アンタの子が生まれれば、島の子じゃなくても島の子さ。世の中っていうのは、そうやって変わっていくんだ青男。――今度、子供も見してくれな。なんなら、次の刀に子の名前でも付けるかい」
にやにやと笑う女に、ナゼットは面食らう。
「なっ！！　ガキなんかいねぇよ！！」
「あら本当かい。甲斐性の無いオトコだねぇ」
「何を勘違いしてんのかわかんねぇけど、俺は所帯なんて持ってねぇぞ」
女から笑みが消え、目が驚きに見開かれる。
「じゃぁ何で契約なんてしてんだい。アレかい、オンナにゃ興味ねぇってオトコにでも走ったのかい」
「～～っ妹だ！」
「何もそんな真っ赤になって言わんでもいいじゃないか」
笑いすぎて痛いのだろう、女が腹を抑えてくつくつと笑っている。泣き顔みたいな顔だった。
「妹な、妹。アンタならさぞ可愛がりそうだな。見当がつく」
「なんだと？」
「可愛くて可愛くてたまらんだろう。土色の肌の子なら尚更だ。髪は何色だ？　薄い色かい？」
「……いや、妹は違う。血が繋がってねぇんだ。――象牙の肌に、栗色の瞳と髪だ」
一通り笑い倒した女は、ほぉ、と呟く。
「青い青い理由はそこかね」

「あ？」
「妹が可愛くて可愛くてたまらなくて、他のオンナに目がいかないのか」
「っな」
冗談だ、女はそう言って軽く笑ったが、顔面に血が昇ったナゼットを見てまた笑った。
「図星か」
青い青い。そう言って女はまた笑った。また泣き顔みたいな顔だった。本当に可笑しいと思った時にだけそんな顔になるのだろう。
女が笑い終えるまで、とにかく黙って待つことにした。これ以上口から何か言葉を出したらまた笑われてからかわれる。
指で目尻に溜まった涙を拭った女は、まだ泣き顔のような顔だ。
「いいね、気に入った」
「ハァ？」
「そんくらいどっかオカしいヤツの方が、アタシは好きだね」
「……ハァ」
「んで？　名前は何にするか決まったかい？　新しい刃の名前さ。アタシは刃に名前を付けるんだ」
「へェ。今までんなこと言われた事ねぇよ」
「だからすぐ刃こぼれすんだよ。愛情がない証拠だな」
「……愛情、ねぇ」
生き物を殺す武器に愛情を掛けるのか、と聞きたくなったが、またからかわれたらたまらんと頭を掻く。
「動物も植物も、愛情をかけなきゃ育たんさ。――人間も、鉄もな。イキモノだからな」
これにも生返事を返して頭を掻く。
名前、名前。色々な名前を思い浮かべるがいまいちぴんと来ない。何かに名前など付けたことの無いナゼットには敷居の高い事だった。
「なんだ、決めきれないか」
「こう、なぁ。名前なんて付けたことがねぇから見当がつかねぇや」

女が笑む。そして良いことだと言った。安直に付けられる名前は大したものにならないと。
「なら――アドって名前、付けるかい？」
「アド？」
「あぁ。アタシ達の故郷の名前さ。粋なもんだろう」
アド、アド。何度か呟いて、ナゼットはその語感の良さに笑った。
「いいな、気に入った。よろしく頼むな、ネーチャン」
言うと、女が立ち上がる。もう話すことはないということだろうか。
前金はいくらかかる。そう聞こうと顔を上げると、唇が女の唇によって塞がれた。ナゼットは何が起きたのか理解できず硬直する。
一秒、二秒、三秒。時が止まったようだった。
名残惜しげに唇が離れる。
「前金は確かに頂いたよ。――一週間後に取りにおいで」
ナゼットの眉間に皺が寄る。
「いつもこんな感じなのか？」
「まさか――言っただろ？　気に入ったって」
女が泣き顔で笑う。
「アタシはフェル。次会った時に覚えてたら、割り引いてやるよ」
言うと、女は刃の無い槍を持ってふらりと出て行ってしまった。
一人残されたナゼットは、とんだ女と出会ってしまったみたいだ。と頭を掻いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8713g/

紫の瞳

2011年9月27日08時34分発行